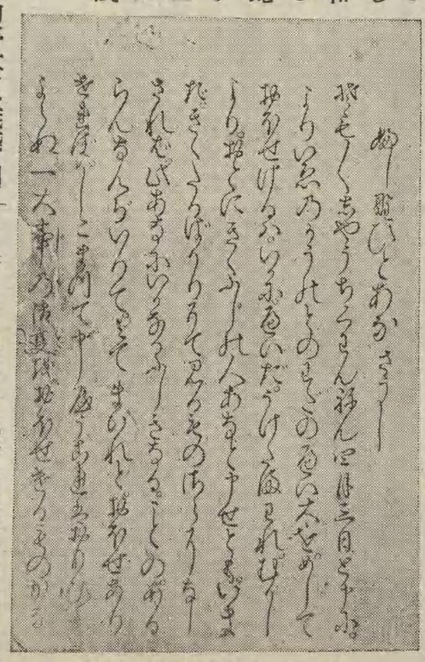
原の花の穴を見物して、忠常は膽をつぶす。(15)呼出し晝三を買つて、喜見城の樂みを極め、通の道をあきらめる。(16)かの男の教に從つて穴より出る。家來は主人がすつかり通人になりきつてゐるのに驚く。(17)重忠の粹によつて忠常は大通となる。案内した男は駿河二丁町で、有名な大通酒樂である。(18)忠常は昔は猪に乘つたが、今は猪牙船に乘る身となり、粹な春を迎へる。

【解說】白河城主松平定信が將軍輔佐の職に擧げられ、從來の田沼政權に對する反動政治は、天明末から寛政の初めへかけて行はれ、黃表紙の諷刺物に絶好の題材を供給した。かゝる現實の題材を取扱ふ京傳の黃表紙は、(一)「富士人穴見物」「照子淨頗梨(かゞみのじやうはり)」(寛政二年刊)の如くに、爲政者を主として描いて更に社會方面に及ぶものと、(二)「孔子縞于時藍染」(別項)「藍返行義觀」(孔子縞于時藍染參照)の如く民衆を主として描き、幕府奬勵の儒教倫理を揶揄して後、遊里の景氣に及ぶものの如き、二系列の作品に分類する事が出來る。「富士人穴見物」は、現實の世界を無視してゐる理想派政治家の缺陷を、現實の穿ち、現實の穴を拾ふことによつて浮き出させる趣向であつて、穴の案じは、抽象的の物を具象化する黃表紙の常套手法である。人穴を通りぬけた事から通人を通(とほ)り者と呼び、道樂する事を穴に這入るといひ、忠常の家來は穴へ這入らず麓の里で待つてゐた故、矢張り野暮で、野暮を里といふはこのためなどの洒落が加へてある。澁滯として寄せて來た反動政治に一矢を酬いたと言ふよりは、その核心、中心人物を拉し來つて忠常とし、忠常の野暮に對比すべき將軍と重忠は、前將軍と田沼などに擬したものらしい。駿河二丁町の酒樂は實在の人物、末尾の淺草裏門のとうきやう庵の手打蕎麥の宣傳を通人となつた忠常が行ふなども、現實への接觸である。兎に角先見の明を誇り、豫言するつもりで書かれなかつたこの小作品が、定信の政治家としての生涯を暗示し、彼の理想政治も程なく權花一朝の夢となり、花鳥風月を友とする後年の通人定信の境地を、天明八年に於て道破してゐる事は、洵に不思議な因緣である。喜三二の「文武二道萬石通」(別項)は同年の刊行であつて、諸大名に力點を置き、改革に順行し、却つて幕府の忌諱に觸れて文壇を去るべく餘儀なくせしめられた。京傳は定信を直接に覗ひ、改革に反抗するが如くであるが、巧妙に事實を朧化し隱蔽し去つて危くも遁れてゐる。町人の分際として、將軍輔佐の白河侯に江戸ッ子の尻を覗かせた不埒至極の諷刺を見遁したのは、當局の失態であるが、實に當局の監視から漏れるほどに他意なく取り澄まし、故意に眞實が包まれてゐた。時人にもその諷刺がやゝ了解し難かつたと見え、「文武二道萬石通」の如き喝采を博するには至らなかつた。挿繪中に式上亭柳郊畫の襖などを見せて新進畫工の宣傳をも行つてゐる。【小池】

富士の人穴草子 ふじのひとあなざうし

一卷【作者】未詳【成立】室町期。「時慶卿記」慶長十年三月七日の條に、「富士人穴」と見えるから、それ以前の作たることは明かである。【諸本】古板本は寛永四年板、同九年板、萬治二年板(松會開板)、同四年板、寛文元年板、同九年板等種々ある。「慶長拾貳年丁未閏四月十三日」の奥書ある柳亭種彦附記の異本もある。「室町時代小說集」所收のものは、寛永四年板を底本として、笠亭仙果藏の古寫本に依つて平出氏の補欠延齡の校合した同家所藏本である。日本文學大系第十九卷所收。【題材】武勇傳說・法談物。そして、富士權現の信仰に關聯して、遍歷說話の一種としての地獄極樂廻說話が主部分を占めてゐる。甲賀三郎の地獄極樂廻傳說(「天狗の內裏」)(別項)と同種のものである。本書の忠つなは正史では仁田忠常で、この人穴探險說話は「廣益俗說辨」(卷十三)の云ふ通り、「吾妻鏡」(卷十七)(別項)建仁三年六月一日和田平太が伊豆伊東崎の大洞に入つたこと、同三日忠常が富士の人穴を探つたこととの合したものである。賴家及び和田胤長・仁田忠常等、滅亡の史實も取込まれ、洞中の蛇神から彼等の未來記が告げられるのも、「天狗の內裏」と同斷である。所謂人穴は靜岡縣富士郡上井出村に殘つてゐる。

【梗概】正治元年四月三日、賴家の命令を否み得ない和田平太は、義盛・朝夷三郎等に一門の名を擧げよと勵まされて、富士の人穴へ踏み込んだ。炎を吐く蛇の上を飛び越え〳〵進んで行くと、奥から腥い風が吹いて來、側に若い美しい女房が機を織つて居り、平太を見て、歸れと言ひも果てぬに、強い風が岩屋の外まで吹き飛ばし、故なき謀叛に加擔する己が未來を聞かされた。鎌倉へ參つて岩屋の不思議を、樣々に申し上げたので、賴家はその奥を究めんと、賞を懸けて人を求めたが、誰も命を惜しんで申し出る者の無い中に、和泉國住人仁田四郎忠つなは、七日を期して松明三十を點させ、五丁ばかり入つたが何もない。刀を拔いてなほも入り行けば、やがて輝く程明るい世界に出た。八棟造りの唐の御所、黃金の光堂などあつて、軒の玉水も風の響も鈴の音も經文を成し、丑寅に草あり、北方に池あり、結構を構へてゐる。仁田が池中の島に近づくと、大蛇の形で權現が現はれ、請はれる儘に刀も太刀も獻ると、更に十七八の法師の姿に變じ、日本の衆生はまだ地獄・極樂を知らぬであらうと、塞の磧から始めて案內に立つた。死出の山・劍の山など限りなき苦患界を經て閻魔の廳に到り、更に極樂淨土を見せた上、それ等總ての有樣を草紙に書いて與へ、「左のわきに納めて三十一の年伊豆の山にて日本へ披露すべし。叛かば汝をも賴家をも命を取るべし」と言ひ渡されて岩屋の口へ送られた。仁田が御前に出ると大名小名が集まり來り、死んだ者が甦つたやうな騷ぎである。仔細を語れと迫られた仁田は、權現の罰を思へば君の命に叛くので、躊躇つた擧句決心して總てを披瀝すると、忽ち空に聲あつて、二人の命を召すべき由の宣告が下つた。



富士の人穴草子(寛永板)

表題には「御杖大人家集」とある。【成立】文化十一年十二月から文政四年三月迄の作を收めてゐる。【內容】全五册の中第四册を缺く。年代順に作者の歌を排列してある。第一册は文化十一年の歲暮から十三年まで、第二册は同じく十三年より十四年まで、第三册は文化十五年即ち文政元年から二年九月まで、第五册は文政三年から四年三月までの作を收め、短歌を主とし、間々長歌や文詞をもまじへてある。門人五十嵐篤好の筆寫本である。

員に當選。翌十五年二月、大隈重信の麾下にあつて、矢野文雄(龍溪)・犬養毅・尾崎行雄等と東洋議政會を起し、二十三年、衆議院議員となり、前途、政治家として有望であつたが、肺患に罹つて二十五年に死去した。好んで後進を養ひ、犬養毅・朝比奈知泉堂等は、みな彼の保護によつて文才を認められるゝに至つた。評論數多き中に、著書として有名なのは、「文明東漸史」及び「繫思談」(各別項)である。【高須】

術軍學にのみ心がけてゐる。(2)將軍賴家公は忠常の野暮を不憫に思召され、大小名を集めて相談される。(3)將軍は畠山重忠を使として、忠常に富士の人穴の探檢を命ずる。(4)忠常は家來を麓の里にとどめ、ただ一人で人穴にはひる。(5)忠常は當世の世事に疎く、人穴はお先眞暗である故、五本の松明に、一時に點火してその光で進む。【中册】(6)黑衣を着た通人となる。【下册】(13)忠常は人穴見物によつて、今更に野暮で暮したことを殘念に思ふ。かの男は忠常を大通に仕立てる。(14)吉

見物

【參考】近古小說解題○室町時代小說集解題○廣益俗說辨 〔島津〕

藤の實 ふぢのみ 俳諧集 一册【撰者】廣瀨素牛(惟然)【名稱】内題に「藤實集」とある。【名義】本集卷頭に、「關の素牛何がし、大垣の旅店を訪はれ侍りしに、彼ふぢしろみさかといひけん花は、宗祇のむかしに匂ひて」といふ前書のある芭蕉の「藤の實は俳諧にせん花の跡」といふ句に據つたのである。芭蕉の句の前書は、宗祇の「關越えてこゝも藤しろみさかかな」の句を指すのである。【刊行】元祿七年【諸本】蕉門俳諧前集(俳書大系)所收。【內容】正秀の序、元祿七年五月西川親長の跋がある。秋・冬・春・夏の順序で、發句二百九十六句(芭蕉・其角・野童・去來・車庸・洒堂・丈草・史邦・智月・乙州・素牛等)、四季に各一卷の連句(去來・野童・素牛・風斤・景桃・鳳仞六吟歌仙一、曲翠・素牛・丈草・里東・正秀等十二吟歌仙一、洒堂・車庸・之道・史庭・蓑立・龜柳七吟歌仙一、素牛・鳩枝・巴流・柯山・梨月・貝壽六吟歌仙一)があり、丈草の仲秋翫月雜說と題する一文がある。【價値】後には口語調になつたが、まだ口語調にならない素牛時代の集で、着實な調子の集であり佳句も多い。許六は惟然を嫌つたのであるが、本集だけは「頃日の集に似たる物にもあらず。これは師在世したまふ光也」(誹諧問答)と讃し、又「專ら洒堂が後見と見えて、奧の俳諧は珍碩口也。丈草の手傳ひも見えたり」(同上)など云つてゐる。當時相當注目された撰集であることが知られる。 〔萩原〕

節博士 ふしはかせ 「樂譜」を見よ。

藤袋草子 ふぢぶくろのさうし 御伽草子 一卷 寫【作者】不詳【名稱】女主人公が怪猿のために藤袋に入れられた事よりの名。【成立】室町期【題材】靈驗談に結合せられた猿神退治傳說の一種。「今昔物語」(別項)卷二十六、美作國神依獵師謀止生贄語第七、飛驒國猿神止生贄語第八に見えるやうな原形の一要件たる生贄モーティーフが、これは純粹な形ではないが或る變形を取り、且つ父親の失言に因することになつて居り、又「義犬塚」の完型にはなつてゐないが、獵犬が退治の功を建てる主要な事實を含み、救助者の狩人と犧牲者の娘との結婚に終るのも常型、その娘が拾ひ子なのと藤袋に入れられるのとが異色、而して全體が觀音の靈驗に歸せられてある。最後の點と父の失言のモーティーフに於て、特に山城國久世郡「蟹滿寺緣起」ともやゝ類してゐる。へいしの射術は「扇の的」の俤があり、猿の歌會も「異類歌合物」の影響もあらうし、堂上趣味を反映してゐる。原說話は素戔嗚尊大蛇退治神話の流を引くは勿論、「搜神記」「幽怪錄」「說郛」等に載する如き支那說話の影響もあらう。【梗概】昔近江國の一老翁は、鎭花祭の役で上洛した歸途美しい女兒を拾ひ、子が無いので嫗と共に愛しみ育てたが、この娘の十三四の頃のこと、耕作に勞れたので、假令山の猿でも代つて吳れゝば娘を遣らうと獨語つと、何處からか大きな猿が現れて翁の畑を耕し、明日を約して行つた。悔んだ翁は嫗と謀つて大きな櫃に娘を入れ、春戶の藪に埋めた後、向ひの山に隱れてゐると、果してかの猿が輿に擔がれながら多勢の供を從へて乘り込み、こけ猿に占はせて在處を知り、掘り出して連れ歸つたので、兩親は急ぎ淸水寺にその無事を祈り、泣く〳〵も後を追うて山に入つた。泣き叫ぶ娘を慰め兼ねた猿が、娘を藤袋に入れ、梢に吊して一匹に番をさせ置き、果物を探しに出掛けた樣を見屆けた老夫婦は、來かゝつた狩人に事の由を告げて救ひを求めた。狩人の部下に、へいしといふ弓の上手が誤たず袋の吊繩を射切り、代りに犬を入れ、番の猿を脅して元通りにして他の山で樣子を窺つてゐると、やがて立ち戾つた猿は、娘を慰めるための歌會を開いた。實を告げようとてその意を歌ひこめた宿直猿を怒つて逐ひ出したが、降した袋からは犬が出て婿猿の吭に嚙み付き、驚いて逃げ出す外の猿にも他の犬が嗾けられて、ただ宿直猿だけが助けられた。狩人は娘を妻にし、翁嫗には別に家を建てて孝養を盡した。へいしは賞として所領を得、また宿直猿は旣で馬を飼ふ事となつた。すべては淸水觀音の利生だといふ。

【參考】近古小說解題 〔島津〕

富士松 ふじまつ 能狂言【題材】富士松のことは「蔭凉軒日錄」文正元年六月十五日の條に「靈松庵來。十一日可ㇾ申二御成一之由告ㇾ之。仍披二露之一。被ㇾ預二置富士松之盆假山一被二召還一。蓋爲ㇾ被ㇾ獻二于內裏一也」とあつて、當時流行してゐたものと窺はれる。【梗概】或る主が、召使ふ冠者が無斷で富士詣をしたことを詰り、持ち歸つた富士松を得ようとして、祕藏の鷹と取換へてくれとか、黑馬と換へて吳れとか言ふが、冠者が聞き入れぬので、附合をして附けねば松を取らうと言ひ出し、折しも山王の緣日に參詣の路すがら附合をして行く。主は色々難しい事を言つて見るが、うまく皆付けられてしまふ。その中に山王へ着く。主は、「山王の前の鳥居に丹を塗りて」と言ふと、冠者は「赤きは猿のつらぞをかしき」と言つたので怒り、某の酒に醉つた額の赤いのがそれ程をかしいかと言ふと、冠者は猿の面の事で御主人のお顏の事ではないと言ふ。主は憎いことを言ふ、早句で申せと言つて、腹立ち半分に「はつと云ふ聲にも已おぢよかし」と言ふのを、冠者はすかさず「けら腹立つればつぐみ喜ぶ」と言ふので、しざりをれときめつけられる。【解說】連歌流行の世相を反映してゐる。附句には何か典據があるらしく思はれる。連歌を取込んだ狂言には、外に「連歌盜人」「連歌十德」「八句連歌」(はちくれんが)「連歌毘沙門」(別項)「大黑連歌」などがある。「連歌盜人」は、連歌好きの者が初心講を結んで當番になり、道具がないので盜みに入つて見付けられるが、連歌のための盜みとて許され、却つて酒を振舞はれ道具を貰ふもの。その他いづれも連歌の德を種としたもので、「八句連歌」は、落語にも取られてゐるが、借金の言譯に連歌を以てすると云ふものである。 〔瀧田〕

富士松加賀太夫 ふじまつかがだいふ 「富士松魯中」を見よ。

富士松薩摩掾 ふじまつさつまのじよう 新內節の太夫【本名】未詳。初名は宮古路加賀太夫【生歿】未詳【閱歷】宮古路豐後掾(別項)の高弟で、常磐津文字太夫(常磐津節參照)よりは幾分先輩らしく、元文三・四年、既に師から獨立して江戶河原崎座に出勤してゐる。次いで延享元年春中村座で「駒鳥戀關札」を文字太夫と一日替りで勤め好評を博した。翌二年市村座で「道行雨夜傘」「羽重比翼枕」「歌枕隱屛風」等を語つて名聲を高め、同年冬受領して富士松薩摩掾と稱し、一流を立てて各座に出勤「無間鐘思曉」「卯花二世合駕籠」「丹波與作染分韁」「道行愛名妹脊鳥」「絲柳夢路衛」等を語り、當時文字太夫と共に豐後淨瑠璃の二名手と持て囃された。

宮古

彼の一流は、豐後節へ都三中事吾妻路宮古太夫の起した吾妻路節を加味したものと傳へられ、富士松節の祖として、門下から鶴賀若狹掾(別項)・同新內(新內節參照)の逸才を出した。寶曆七年五月市村座の「頃皐娘鳴神」を語つた京下り宮古路加賀太夫は、この初代でなく二代加賀太夫と思はれる。【傳系】二代は薩摩掾の長男吟太夫が繼ぎ、三

菅江壯年の頃は、花柳の遊びに耽り、家に歸らぬこともあつたのを、少しも妬むことなく、「よしや又うちは野となれ山櫻散らずばねにはかへらざらまし」と詠じて、よくその留守を守つてゐたと云ふ。晩年、眼疾に罹り、殆ど明を失つた時に、「花ならぬ眺めもよしや吉野紙この目にはるの朧夜の月」と詠んで心を慰めてゐた。寛政十年に夫の歿した後は、自ら菅江側の牛耳を執り、女流大家として重きをなしたと共に、鶴立停々・倉部行澄・窓村式・岡梅譽・佳習生等を判

鳥太夫が故あつて江戶を出奔し、薩摩に隱れたので、父の歿後五代を相續して加賀太夫と改めた。彼も父に劣らぬ程の名手で、「高橋お傳」「花井お梅」「赤垣雪の別れ」「沼津」等の新曲を作つた。〔六代加賀太夫〕幼名島太夫。明治二十九年名古屋地方で歿。享年四十五。初代魯中の長男。初め江戶を失踪し、二十三年目に飄然と歸京し、弟の五代歿後、强ひて六代家元を繼承して魯中を襲名。併し東京には一向人氣なく、遂に再び流浪の旅に出て歿した。〔七代加賀太夫〕本名は小林文太郎。安政三年二月二十九日、江戶京橋南鍋町に生

二年四月二十二日江戶に生る。富士松魯遊・同昇呂を經て、昭和五年十二月、二代薩摩掾を襲名して今日に及ぶ。(富士松薩摩掾・新內節參照)

【參考】江戶時代音樂通解(町田博三)○新內節の歷史(中內蝶二・田村西男共編(日本音曲全集第九))○唄と三味線(中川愛氷) 〔秋葉〕

藤間流 ふぢまりう 舞踊の流派【名稱】流祖の姓に據る。【解說】江戶時代の舞踊の流派は志賀山流(別項)から出たが、志賀山三代の家元に就いて學んだ一人が、藤間流を始めた初代藤間勘兵衛であるといふ。初代は明和六年

「頃日の集に似たる物にもあらず。これは師在世したまふ光也」(誹諧問答)と讃し、又「専ら洒堂が後見と見えて、奥の俳諧は珍碩口也。丈草の手傳ひも見えたり」(同上)など云つてゐる。當時相當注目された撰集であることが知られる。　〔荻原〕

節博士 ふしはかせ　「樂譜」を見よ。

藤袋草子 ふぢぶくろのさうし　御伽草子　一巻　寫【作者】不詳【名稱】女主人公が怪猿のために藤袋に入れられた事よりの名。【成立】室からか大きな猿が現れて翁の畑を耕し、明日を約して行つた。悔んだ翁は嫗と謀つて大きな櫃に娘を入れ、舂戸の藪に埋めた後、向ひの山に隠れてゐると、果してかの猿が輿に擔がれながら多勢の供を從へて乘り込み、こけ猿に占はせて在處を知り、掘り出して連れ歸つたので、兩親は急ぎ淸水寺にその無事を祈り、泣く〳〵も後を追うて山に入つた。泣き叫ぶ娘を慰め兼ねた猿が、娘を藤袋に入れ、梢に吊して一匹に番をさせ置き、果物を探しに出掛うとして、祕藏の鷹と取換へてくれとか、黒馬と換へて呉れとか言ふが、冠者が聞き入れぬので、附合をして附けねば松を取らうと言ひ出し、折しも山王の緣日に參詣の路すがら附合をして行く。主は色々難しい事を言つて見るが、うまく皆付けられてしまふ。その中に山王へ着く。主は、「山王の前の鳥居に丹を塗りて」と言ふと、冠者は「赤きは猿のつらぞをかしき」と言つたので怒り、某の酒に醉つた顔の赤いのがそれ程をかしいかと言ふと、冠先輩らしく、元文三・四年、既に師から獨立して江戸河原崎座に出勤してゐる。次いで延享元年春中村座で「駒鳥戀關札」を文字太夫と一日替りで勤め好評を博した。翌二年市村座で「道行雨夜衡」「羽重比翼枕」「歌枕隠屛風」等を語つて名聲を高め、同年冬受領して富士松薩摩掾と稱し、一流を立てて各座に出勤「無間鐘思曉」「卯花二世合鴛籠」「丹波與作染分韁」「道行憂名妹脊鳥」「絲柳夢路衡」等を語り、當時文字太夫と共に豐後淨瑠璃の二名手と持て囃された。

彼の一流は、豐後節へ都三中事吾妻路宮古太夫の起した吾妻路節を加味したものと傳へられ、富士松節の祖として、門下から鶴賀若狹掾(別項)・同新内(新内節參照)の逸才を出した。寶曆七年五月市村座の「頃皐娘鳴神」を語つた京下り宮古路加賀太夫は、この初代でなく二代加賀太夫と思はれる。

【傳系】二代は薩摩掾の長男吟太夫が繼ぎ、三

宮古路加賀太夫正本

代はその實弟吟中によつて繼承されたと傳へられるのみで事歴は明かでない。三代歿後一時中絶し、天保に至つて富士松魯中(別項)によつて再興されたのが、今日に傳はる富士松派である。現在の薩摩掾は昭和五年十二月襲名したが、初代との關係は名義に止まる。

【參考】聲曲類纂齋藤月岑〇劇代集二代櫻田治助〇歌舞伎圖説 守隨憲治・秋葉芳美　〔秋葉〕

節松嫁々 ふしまつのかか　狂歌師【本名】山崎まつ【別名】孤月尼【生歿】延享二年生れ、文化七年(二四七〇)五月九日歿。享年六十六。【法名】寥松院孤月貞參大姉【墓所】青山北町靑原寺【閲歷】幕臣小宮山常右衞門昌俊の女で、明和元年朱樂菅江(別項)の妻となつた。菅江壯年の頃は、花柳の遊びに耽り、家に歸らぬこともあつたのを、少しも妬むことなく、「よしや又うちは野となれ山櫻散らずばねにはかへらざらまし」と詠じて、よくその留守を守つてゐたと云ふ。晩年、眼疾に罹り、殆ど明を失つた時に、「花ならぬ眺めもよしや吉野紙この目にはるの朧夜の月」と詠んで心を慰めてゐた。寛政十年に夫の歿した後は、自ら菅江側の牛耳を執り、女流大家として重きをなしたと共に、鶴立停々・倉部行澄・窓村武・閑梅磨・桂眉住等を判者に取り立て、一社の聲望を保つてゐた。　〔野崎〕

富士松節 ふじまつぶし　「富士松薩摩掾」を見よ。

富士松魯中 ふじまつろちゆう　新内節の太夫【初名】富士松加賀太夫(四代)【生歿】寛政五年に生れ、文久元年(一五二一)六月江戸に歿す。享年六十九。【閲歴】鶴賀派(鶴賀若狹掾參照)の三代家元二代鶴吉の娘と通じ、同派を逐はれた爲めに、三代目吟中以來中絶した富士松派(富士松薩摩掾參照)を天保年中に再興し、四代を相續と共に富士松加賀太夫と改め、後に魯中と稱した。彼は斯流中興の祖と仰がれた程の名人で、美聲はもとより、作曲にも非凡の才能を有し、「明烏後正夢」「道中膝栗毛」「石童丸」「佐倉宗吾」等の新曲を作つた。門下より名人富士松紫朝を出した。

【傳系】〔五代加賀太夫〕幼名は富士太夫。明治二十五年十二月十日歿。享年三十八。墓所は谷中三崎南町蓮華寺。魯中の次男。長男の鳥太夫が故あつて江戸を出奔し、薩摩に隠れたので、父の歿後五代を相續して加賀太夫と改めた。彼も父に劣らぬ程の名手で、「高橋お傳」「花井お梅」「赤垣雪の別れ」「沼津」等の新曲を作つた。〔六代加賀太夫〕幼名鳥太夫。明治二十九年名古屋地方で歿。享年四十五。初代魯中の長男。初め江戸を失踪し、二十三年目に飄然と歸京し、弟の五代歿後、强ひて六代家元を繼承して魯中を襲名。併し東京には一向人氣なく、遂に再び流浪の旅に出て歿した。〔七代加賀太夫〕本名は小林文太郎。安政三年二月二十九日、江戸京橋南鍋町に生れ、昭和五年十月四日歿。享年七十五。生家は代々小林近江大掾藤原重富と名乘つた御印判師。彼はその二十三代目。小林市郎左衞門の長男。前身警吏。初め富士松志賀太夫に入門、後に五代家元五代加賀太夫の内弟子となり、津賀太夫といつたが、明治十七年名人富本豐前太夫(豐洲)にその非凡な藝を認められ、その養子となつて豐紫太夫と改稱。故あつて富本と離縁し、同二十九年富士松に復歸。かくて六代(二代魯中)歿後、七代家元を繼ぎ加賀太夫を襲名。彼は名人でその無類の美音は現淸元延壽太夫と併稱された。併し師の血緣でないため富士松正派となり、師家は師の娘加賀江が、大正八年家元を繼いだ。〔八代加賀太夫〕本名は小林鎌吉。安政六年二月二十八日江戸に生る。七代加賀太夫の實弟。初め鶴賀若秀の弟子、後先代秀太夫の門下となり、鶴賀直太夫といつたが、明治四十五年吾妻路派を再興して吾妻路宮古太夫と改め、三代家元を繼承。實兄の歿後、昭和五年十一月加賀太夫を襲名し、富士松派八代を相續して今日に至る。〔二代薩摩掾〕本名は小林カツ、文久二年四月二十二日江戸に生る。富士松魯遊・同昇呂を經て、昭和五年十二月、二代薩摩掾を襲名して今日に及ぶ。(富士松薩摩掾・新内節參照)

【參考】江戸時代音樂通解町田博三〇新内節の歴史 中内蝶二・田村西男共編(日本音曲全集第九)〇唄と三味線 中川愛氷　〔秋葉〕

藤間流 ふぢまりう　舞踊の流派【名稱】流祖の姓に據る。【解説】江戸時代の舞踊の流派は志賀山流(別項)から出たが、志賀山三代の家元に就いて學んだ一人が、藤間流を始めた初代藤間勘兵衞であるといふ。初代は明和六年に歿したが、以後當流は劇場附きの振附師として活躍し、別に四代目西川扇藏をその門より出したが、藤間流としての最も目ざましい行動は明治に入つてから見られた。即ち二代目藤間勘右衞門が、九代目團十郎と提携して、東京の劇壇に振附師として覇を唱へた。また坪内逍遙の新舞踊の振附をして幾多の傑作を殘した。かくて二代目勘右衞門は、大正六年喜壽の祝を迎へて勘翁と改め、勘右衞門の名は養子松本幸四郎に讓り、大正十四年八十六歳を以て歿した。彼の業績は藤間流を價値づけたところにあつた。　〔小寺〕

【參考】わが六大舞踊派の特質(逍遙選集卷三)

伏見院中務内侍 ふしみゐんのなかつかさのないし　「中務内侍」を見よ。

伏見院流 ふしみゐんりう　「書道」を見よ。

伏見落 ふしみおち　「伏見常磐」を見よ。

伏見常磐 ふしみときは　幸若舞曲(三十六番の一)二巻【作者】不詳【別名】伏見落【成立】室町期【諸本】古板本は慶長活字本、寛永十二年板(十行本)。新群書類從第八舞曲部所收。

目、半太夫節「名所の渡笠」。曾我と隅舟、お七）○初花隅田川（寶曆元年正月、市村座。隅田川に女伊達）○男伊達初買曾我（別項）○信太小太郎嗣鑑（寶曆三年七月、中村座。三番目、長唄「天人羽衣」。信太と巖流島）○百萬騎兵太平記（同年十一月、同座）○百千鳥艷鄉曾我（寶曆四年正月、同座。二番目、大薩摩「分身鏃五郎」「夜鶴花巢籠」。三番目、一中節「名香淺間嶽」。曾我に淺間嶽、男道成寺）○根元阿國歌舞妓（同年七月、同座。梅川忠兵衞。三番叟、近江お兼）○樸樕峠吉例相樸（寶曆五年十一月、市村座。一番目、長唄「今樣四季三番叟」。伊豆

で淀の水車での殺陣を見せる。最も華美な趣向としては、「男文字曾我物語」で、恰も吉原仲の町に初めて櫻が植ゑられたので、助六の出にこれを採して舞臺に櫻を咲かせた事が有名である。當年としては、未だなかつた大膽な舞臺裝置の利用を考へたので、而も脚色との調和を保つた爲めに、かゝる作風が江戸歌舞伎の一態度として強くその後に影響した。

【參考】新刻役者全書八文字屋編○戲財錄並木五瓶○作者名目三升屋二三治○狂言作者考○歌舞伎圖說 守隨・秋葉　〔守隨〕

月千句」第一、夕何の發句に、「月やあらぬ似たる時なき今夜かな」に於て、句中の月といふ語が、定められた夕といふ語の下に附いて、熟して夕月となるのである。

〔一字露顯〕句中に一音から成る同音異義の物名を賦し込むので、例へば、日に火、蚊に香、巢に酸の意を取る如く賦するのである。露顯といふのは、上賦・下賦の何といふのと異なり、語は隱さず顯はしてあるとの義である。例へば、正徹の「十百韻」に、「春すでにたけの鶯巢を去りて」に、「花の咲くえにうつる松風」なるのをいふ。例へば、鶯の上下二音を略すれば杭となり、玉章が松、苗代が橋となる如きをいふ。

〔いろは連歌〕いろは四十七文字を每句の頭に一音づつ賦するものである。例へば、寶德三年の「以呂波百韻」、

いをねぬや水のもなかの月の秋
ろを押す舟の初雁のこゑ
はるかなる霧間の山は島に似て

の如き類である。

〔白黑連歌〕句中に白黑の文字を賦し込み、若

節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを、日本歌謠集成卷五近古篇に載せてある。【解說】判官物（義經傳說）。父は梅津源左衞門、母は桂宰相の室、その娘が常磐で、院に仕へて初めの名とつこの前、或る年女比べに千人が中の三人、菖蒲・眞菰・とつこと選ばれ、就中天生の容色優れたるより院から常磐の名を賜つたのであつた。想を寄せてゐる源義朝が乞うても許されなかつたが、紫宸殿の怪を退治した恩賞に下し賜り、今若・乙若・牛若を生んだ。平治の亂に義朝亡び、常磐は三子を伴ひて淸水に祈つた後、大和の知己を賴つて雪路を木幡にかゝり、日暮に一宿を賤が家に求めて聽かれず、雪中に惱んだが、主の翁夫婦が同情して遂に呼び入れてもてなし、近隣の婢女等五人が上﨟を拜まうと集つて來たのに、出雲・播磨・丹後・和泉・遠江と各々の生國の田歌を歌はせなどして慰めた由を作る。「平治物語」（別項）卷三と同材。但し彼は宿の主を女とする。怪物退治の恩賞は賴政鵺退治の菖蒲の前の說話の轉化。伏見の里の老夫婦は「近世歌曲」の彌平兵衞宗淸の前身。五國の田植歌を含むが民謠の好資料である。【影響】金平本「義經記」初卷四段目。「源氏烏帽子折」（別項）の常磐御前道行。富本の「雪解松操織」等があるが、特に常磐津の「恩愛瞔積守」（宗淸）が有名である。〔島津〕

伏見常磐 ふしみときは　「宗淸」を見よ。

伏見版 ふしみはん　「刊本」を見よ。

藤娘 ふぢむすめ　所作事　變化物【本名題】富士を見てはや廿とせや后の月歌へすゞ〲餘波大津畫【初演】文政九年九月十九日初日、江戸中村座「ひらがな盛衰記」第二番目「けいせゐ返魂香」大切。〔作詞〕勝井源八〔曲節〕長唄〔立唄〕二代芳村伊三郎〔作曲〕四代杵屋六三郎〔振附〕藤間大助（後の二代勘十郎）・四代西川扇藏【傳來】曲・振ともに傳存。【諸本】長唄正本。日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集（日本名著全集）所收。【題材】大津繪の藤娘を舞踊化したもの。明和八年九月市村座で尾上民藏の演じたのが古く、その後、嵐小式部の藤かつぎの少女（大津繪姿花・安永七年二月市村座）、四代市川團藏の藤の花娘（京偶昔繪容・天明二年三月森田座）、三代瀨川菊之丞の藤かつぎ娘のおかめ踊（五月菊名大津繪・寛政三年五月中村座）等演じられたが、變化舞踊としての粉本をなしたのは文化六年九月森田座所演の「筆は家橘の有土佐容形寫繪」で、藤娘は三代坂東彥三郎が勤めた。【內容】藤の花をかついで塗笠を冠つた美しい娘（二代關三十郎）が、近江八景に准へた艷麗なクドキ模樣の振から潮來節になり、やがて有馬の松の手踊で終る。【價値】曲は凡作であるが、振は優婉な手が附いてゐるので、今に廢らず迎へられる所以であらう。【參考】近世邦樂年表（長唄之部）○江戸近世舞踊史 九重左近　〔秋葉〕

藤　娘　（初演錦繪）

藤本藤蔭 ふぢもと とういん　小說家【本名】眞。【閲歴】千葉縣佐倉の人。明治二十二年頃から三十六年頃にかけて文壇に關係した。その作二十餘篇ある。主に「文藝倶樂部」「都の花」（各別項）等に寄稿したが、特に取立てて云ふべき作品もない。二十四年、「都の花」に寄せた「淫婆」は風俗壞亂の廉で禁止に逢つた。〔高須〕

藤本斗文 ふぢもと とぶん　脚本作者【本名】未詳【別名】初め澤村長作を名乘り、後、澤村斗文といつたと云ふ。【生歿】未詳。但し、寶曆七八年頃歿したか。【墓所】未詳【閲歴】初め三代澤村長十郎事宗十郎門に役者として藝を學び、長作を稱してゐたといふ。やがて作者に轉じたのは享保の中頃であらう。作者として斗文を名乘つたらしく、津打九平次・津打治兵衞（各別項）等の指導を受けたものらしい。享保二十年、中村座の顔見世では藤本斗文を名乘り、立作者津打九平次に伍して別格の地位を得てゐる。長十郎との關係等にも據らうが、當時既に相當の作に關與してゐたらうし、又成功してゐたかと想像される。元文三年には立作者の位置を得たが、治兵衞に次ぐ名作者として當時の江戸歌舞伎から大なる期待をうけた。春狂言の作は年々大當りであつた。脚色の案の新鮮を以て評判されたが、又名題文字の配合に工夫を用ひて注目された。江戸狂言の名題が特殊な研究を要するやうになつたのはこの頃からである。寶曆中頃、一時澤井注藏と名をかへてゐたとの傳へもあるが、何うか。寛延年代から門下に注藏があつて、彼は明和年中まで作者として働いてゐた。「時津風入船曾我」（寶曆八年正月、中村座）、「初買和田宴」（寶曆九年正月、中村座）、「世大阪二對女夫」（明和四年五月、市村座）等の名作がある。【作品・作風】早くは市川海老藏のために主として書いたが、寛延二年の顔見世を限界として、後には廣治・助五郎のために執筆して彼等を引立てた。今その主な作品を擧げると次の如くである。

（一）〔主として海老藏中心の作〕初髻通曾我（合作者、津打九平次。元文四年正月、市村座。十月まで興行が續けられて、二十五ヶ年來の當り狂言といはれ、作者一代の當り作である。三番目に助六。四番目に景淸。長唄「助六定紋英」、出端に河東節「杜若緣丹前」。琴歌「ちりやくの琴歌」、口說節「踊口說或夜密夫」が配された）○瑞樹太平記（立作者津打治兵衞。同年十一月、同座。長唄「小山田太郎物狂」）○姿視隅田川（立作者津打治兵衞。元文五年二月、同座。二番目、河東節「湯女の卷筆」、三番目、歌說舞「狐東柳」。隅田川に淸玄、湯女おふぢ等）○菜花曙曾我（寛保元年正月、中村座。曾我に景淸）○富士見里榮曾我（寛保二年正月、市村座。二番目、めりやす「思ひのひざくら」。曾我に七變化、石橋を配す）○礫末廣曾我（延享元年正月、中村座。二番目、宮古路「駒鳥戀の關札」。曾我に戀塚、道成寺）○今川忠臣藏（同年七月、同座。宮古路「浮名の毛氈」。東山の後日にお千代半兵衞）○女文字平家物語（寛延元年十一月、同座。三番目、長唄「一奏現在道成寺」。平家物語に京人形）○男文字曾我物語（合作者、中村淸三郎。寛延二年正月、同座。二番目、河東節「助六廓家櫻」。女景淸女重忠に助六）。（二）〔主として廣治・助五郎のための作〕賴朝軍配鑑（合作者、堀越二三次。寛延二年十一月、市村座。曾我に伊豆の賴朝。角力狂言の始まりといふ）○通初衞曾我（合作者同。寛延三年一月、同座。二番目、一中節「箱根相の山」。三番

（別項）の常磐御前道行。富本の「雪解松操織」等があるが、特に常磐津の「恩愛瞔關守」（宗清）が有名である。〔島津〕

伏見常磐 ふしみときは 「宗清」を見よ。

伏見版 ふしみはん 「刊本」を見よ。

藤娘 ふぢむすめ 所作事 變化物 【本名題】 富士を見てはや廿とせや后の月 歌へすがへす餘波大津畫 【初演】 文政九年九月十九日初日、江戸中村座「ひらがな盛衰記」第二番目「けいせゐ返魂香」大切。〔作詞〕勝井源八〔曲節〕長唄〔立唄〕二代芳村伊

形寫繪」で、藤娘は三代坂東彦三郎が勤めた。【內容】 藤の花をかついで塗笠を冠つた美しい娘（二代關三十郎）が、近江八景に准へた艷麗なクドキ模樣の振から潮來節になり、やがて有馬の松の手踊で終る。【價値】 曲は凡作であるが、振は優婉な手が附いてゐるので、今に廢らず迎へられる所以であらう。【參考】 近世邦樂年表（長唄之部）〇江戸近世舞踊史 〔秋葉〕

藤本藤蔭 ふぢもととういん 九重左近 小說家 【本名】 眞。

治兵衞に次ぐ名作者として當時の江戸歌舞伎から大なる期待をうけた。春狂言の作は年々大當りであつた。脚色の案の新鮮を以て評判されたが、又名題文字の配合に工夫を用ひて注目された。江戸狂言の名題が特殊な研究を要するやうになつたのはこの頃からである。寶曆中頃、一時澤井注藏と名をかへてゐたとの傳へもあるが、何うか。寬延年代から門下に注藏があつて、彼は明和年中まで作者として働いてゐた。「時津風入船曾我」（寶曆八年正

座。宮古路「浮名の毛氈」。東山の後日にお千代半兵衞）〇女文字平家物語（寬延元年十一月、同座。三番目、長唄「一奏現在道成寺」。平家物語に京人形）〇男文字曾我物語（合作者、中村淸三郎。寬延二年正月、同座。二番目、河東節「助六廓家櫻」。女景淸女重忠に助六）。（二）〔主として廣治・助五郎のための作〕 賴朝軍配鑑（合作者、堀越二三次。寬延二年十一月、市村座。曾我に伊豆の頼朝。角力狂言の始まりといふ）〇通初衞曾我（合作者同。寬延三年一月、同座。二番目、一中節「誰袖相の山」。三番目、半太夫節「名所の涂笠」。曾我と黑舟、お七）〇初花隅田川（寶曆元年正月、市村座。隅田川に女伊達）〇男伊達初買曾我（別項）〇信太小太郎嗣鑑（寶曆三年七月、中村座。三番目、長唄「天人羽衣」。信太と巖流島）〇百萬騎兵太平記（同年十一月、同座）〇百千鳥艷郷曾我（寶曆四年正月、同座。二番目、大薩摩「分身鏃五郎」「夜鶴花巣籠」。三番目、一中節「名香淺間嶽」。曾我に淺間嶽、男道成寺）〇根元阿國歌舞妓（同年七月、同座。梅川忠兵衞。三番叟、近江お兼）〇樸橪峠吉例相樸（寶曆五年十一月、市村座。一番目、長唄「今様四季三番叟」。伊豆の頼朝、眞田與市）〇梅若菜二葉曾我（寶曆六年正月、同座。四番目、一中節「二枚繪草紙」。曾我と五人男、お千代半兵衞、槍の權三。八月迄續いた當り狂言）〇復花金王傳（寶曆六年十一月、同座。一番目、長唄「百千鳥道成寺」。平家物語に澁谷金王の暫）。

文案の功は、淨瑠璃作者として河東節・半太夫節等に於て名篇を殘した。右に區分した前期と後期とには、脚色上に根本的な差別は考へられぬが、後期には角力取や男達を多く脚色して一種の世話の世界を完成した點が認められる。趣向の名人と言はれたやうに、部分的脚色に意外な名案を提供する手腕を見せた。海老藏のにらみを働かせて、面打のにらみ分け（娑視隅田川）や、人面疔の造り物から恐ろしい顏を出さす（元文五年「阿彌陀池妹脊鏡」）とか、川津股野の廣治・助五郎を裸ですまはす（頼朝軍配鑑）とか、市川升藏が荒事の初めとあつて、太鼓を破つて姿を出す（百萬騎兵太平記）とか、役者を自由に使ひこなして同時に彼等の出世藝たらしめた場合が多い。大道具を活用した成功もある。「今川忠臣藏」（延享元年中村座）では、松島吉三郎が破風から向棧敷までの宙乘りを見せ、「根元阿國歌舞妓」では水船の仕掛で淀の水車での殺陣を見せる。最も華美な趣向としては、「男文字曾我物語」で、恰も吉原仲の町に初めて櫻が植ゑられたので、助六の出にこれを摸して舞臺に櫻を咲かせた事が有名である。當年としては、未だなかつた大膽な舞臺裝置の利用を考へたので、而も脚色との調和を保つた爲めに、かゝる作風が江戸歌舞伎の一態度として強くその後に影響した。

【參考】 新刻役者全書八文字屋編〇戲財錄並木五瓶〇作者名目三升屋二三治〇狂言作者考〇歌舞伎圖說守隨・秋葉 〔守隨〕

賦物 ふしもの 連歌・俳諧 【名義】 賦は「くばる」の義、物は物の名である。物の名を句々の中へ配り詠み込む義である。【性質】 初めは草木・鳥獸・蟲魚、又いろは・源氏卷名・國名等の如きものを賦したが、後にはこの種の物名をその儘賦し込むこと以外、判じ物的な賦し方をする種類のものをも生ずるに至つた。以下先づ連歌に於ける賦物の種類を說明する。

【連歌賦物】〔上賦〕（又「じやうふ」といふ） 題に賦何路、或は賦何木などの如く記すもので、路とか木とか云ふ語が、句中の或る語の下に附いて一熟語となつて成語をなす如く句を仕立てるのである。卽ち句中へは定められた語の上に熟すべき語を賦し込むから上賦といふのである。例へば「紫野千句」第一、賦何路連歌の發句に、「樗咲く野は紫の梢かな」とあるのは、定められた路といふ語が句中の野といふ語と熟して野路といふ成語になるので、又路の熟すべき語は野の一語以外にはないやうに句が仕立ててあるのである。

〔下賦〕（又「かふ」といふ） 題に賦山何・賦夕何などの如く記すもので、前の上賦と上下反對の賦し方になるだけである。例へば、「文安月千句」第一、夕何の發句に、「月やあらぬ似たる時なき今夜かな」に於て、句中の月といふ語が、定められた夕といふ語の下に附いて、熟して夕月となるのである。

〔一字露顯〕 句中に一音から成る同音異義の物名を賦し込むので、例へば、日に火、蚊に香、巣に酸の意を取る如く賦するのである。露顯といふのは、上賦・下賦の何といふのと異なり、語は隱さず顯はしてあるとの義である。例へば、正徹の「十百韻」に、「春すでにたけの鶯巢を去りて」に、「花の咲くえにうつる松風」とあるのは、巢に酸を、えに荏の意を取る如く賦してあるのである。

〔二字反音〕 句中に在る二字から成る語を轉倒して別の物の名となる如く賦してあるのをいふ。例へば、花の二音を反すれば繩となり、夏を反すれば綱、水を反すれば罪となる如きものである。例へば、「寶德千句」第十、二字反音の發句、「花の影月ににほひの滿つ夜哉」の如きがそれであるが、題には常に二字反音とあるだけであるから、句によつては何れの語が反音される語かを判別し難いこともあるので、この句の如きも、花を反音して繩と見るべきなのか、みつを反音して罪と見るべきなのか、判然しないと云へる。

〔三字中略〕 句中に在る三音から成る語の、三音中の一音を除いて、他の二音で一つの物名となる如くするのをいふ。例へば、霞が紙、菖蒲が雨、林が橋となる如き類である。例へば、「伊豫千句」第五、三字中略の發句、「竹の葉の螢は星のはやしかな」に於ては、林の中音「や」を除いて橋となる如くなつてゐる。

〔四字上下略〕 句中に在る四音から成る語の上下の二音を除いて、中の二音だけで物名となるのをいふ。例へば、鶯の上下二音を略すれば杭となり、玉章が松、苗代が橋となる如きをいふ。

〔いろは連歌〕 いろは四十七文字を毎句の頭に一音づつ賦するものである。例へば、寶德三年の「以呂波百韻」、

いをねぬや水のもなかの月の秋
ろを押す舟の初雁のこゑ
はるかなる霧間の山は島に似て

の如き類である。

〔白黑連歌〕 句中に白黑の文字を賦し込み、若しくは一方にはその文字なくとも、その意義があれば差支へないものである。後鳥羽院の御宇にこの催しがあつた。例へば「莵玖波集」卷一の「乙女子がかつらぎ山も春かけて」「かすめどいまだ峯の白雪」（家隆）の如きがそれである。

〔名號連歌〕 追善供養などに當り、佛菩薩等の名號を句頭に賦するものである。これに南無阿彌陀佛を句頭に据ゑて賦するもの、南無觀世音菩薩の如き名號を句頭に賦するもの、不動・釋迦・文殊・普賢・地藏・彌勒・藥師・觀音・阿彌陀・阿閦・大日・虛空藏・寶生の諸佛を句頭に連ね賦するものなどがある。最後のものの例を擧げると、文明十四年「眞乘院宮追善名號百韻」の、

ふた聲こきかぬは夢か郭公
こまるなごりや匂ふ橘
うす衣吹きくる風の涼しくて

で始まつてゐる如きがある。（追善連歌參照）

以上の外「俳言集覽」によれば、天神の名號を揭げて正式に行ふ連歌をも名號連歌といつて、神影を揭げて平常行ふ連歌に區別すると見えてゐる。

〔源氏卷名國名連歌〕「源氏物語」の卷名と國名とを、長句と短句とに交互に賦するものである。例へば、

梅が枝の實はこゝろ葉のしゆみ哉　一條兼良
ゆきにも露のむすぶ卯の花　宗砌
雨の後月のうす雲たち消えて　方
雁のとわたる空のかよひぢ　日晟

に於ける梅が枝・薄雲（源氏卷名）と壹岐・能登（國名）との如き類である。

〔三代集作者連歌〕「古今」「後撰」「拾遺」三代集の作家の名を毎句に賦するものである。寶德三年、一條兼良邸で催された、

春はけふ夏のとなりの千里かな
かへるを送る鳥のみちかせ
かすみゆく月にしたがふ山暮れて
關を出でしはよるの旅人

に於ける、大江千里・小野道風・源順・藤原關雄の如きがそれである。

〔伊勢物語詞連歌〕「伊勢物語」の語句を毎句に賦するものである。大永元年の百韻に於ける「冬の日の夕かげまたぬ時雨かな」「寒るをおくる風はやみなり」の如きである。

〔鷹詞連歌〕鷹に關する用語を賦するものである。二條良基の「鷹𦾔連歌」はその古きもので、「御狩する鷹場のゆふべ歸りかね」「君が爲とぞとしばとりける」「きりつぼの水こそ鷹の命なれ」「柳の露はよるやとるらん」の如きである（としばは貢のために柴の枝を五尺に伐つて鷹の捕つた鳥を附けるもの、きりつぼの水は鷹の藥に用ひるもの、柳の露も鷹の藥水である）。

〔名所連歌〕毎句名所を賦するものである。「賀茂社法樂宗牧獨吟名所百韻」の「波の音木ずゑもせみの小川かな　山城」「夕風涼し片岡の森　同」「日影山秋ゆく袖に移ひて　同」「ほのかにかゝるかつらぎの月　丹波」の如きである。

〔文章連歌〕毎句書牘上の用語を賦するものである。例へば「催促がしての遲參の春の雨」「所存の外に梅や散るらん」「かすまずよ如ㇾ此の月もがな」「罷り歸るや遠きかりがね」の如きものである。用語の雅俗相交雜するところに滑稽味も感ぜられるので、俳諧の連歌に近いものである。

〔廻文連歌〕毎句その頭より讀むも尾より逆に讀むも、同一の句となる如く賦するものである。廻文の和歌に於けると全く同樣のもので、それをただ毎句のものとして連ねる所が違ふだけである。然るに廻文は意義を完全ならしめる事が頗る困難であるため、一折ぐらゐのものがその長いもので、五十韻又は百韻の長いものはない。例へば、「なかば咲く萩のそのきは草葉かな」（正徹）の如きである。

〔隱題連歌〕題を隱して秀句の如く云ひ下す連歌をいふ。廣義にいへば賦物は多くは隱題と云へるけれども、特に「跡とめて雪をつぐ尾のたかねかな」に鷹を隱し、「鳴きてしもしとどに濡るる墻根かな」に霜及び鴫を隱せる如き類をいふのである。この名稱は、古く「明月記」にも見え、「宗祇八十體」といふ書にも出てゐる。「甲陽軍鑑」に、織田信長が武田勢と長篠に戰つた時、首途の百韻には毎句その家臣の名を隱題の如く賦し入れたと云つてある。

〔冠字連歌〕伊呂波連歌や名號連歌などの如き、句頭に賦する類のものを總括していふ語である。

【俳諧賦物】以上連歌に於て述べ來つたものの中、上賦・下賦の如きは、俳諧に於ても最も廣く行はれ、その他、一字露顯・二字反音・三字中略・四字上下略の如きや、諸種の冠字連歌及び地名・人名、その他定まつたものを賦するものも引續き行はれ、題材の性質は異つても、方法そのものは殆ど凡て繼承せられてゐると云つてよい。然るにこれ等の中でも、俳諧に入つてなほ工夫し擴張して見たものもあつて、それ等は一部の人の試みに過ぎなかつたものもあるけれども、次の如きものがある。

〔三字上略〕「蝶鳥やちりかひとまる花邑」とまるの上の一音を略し、まると取るのである。

〔三字下略〕「月はひとつ影は日數のながめかな」ひとつの下のつを略して、ひと（人）と取るのである。

〔一字借音〕「白雪は山の額の化粧かな」句中の化を毛に取成すのである。一字露顯と似てゐるが、音を借るのと意を借るのとの相異である。

〔二字除篇〕「龍門ならで都へのぼれ鱈の魚」鱈といふ字の魚篇を除いて、作りの雪を取るのである。松ならば公となり、明ならば月となる如きである。併しこれは、實は一字除篇といふべきもので、二字除篇と云ふのは當らぬのであるが、立圃が二字反音からの轉化として、かく名づけたものである。

〔他添〕「鶯やよむ哥毎にはね題目」句中の或る字に何か他の篇を添へるので、この句では毎の字に木篇を添へて梅といふ字にするのである。以上の外、四字中二字略・五字中三字略・五字上中下略・六字中四字略・除冠・除沓等の試みもあつたのであるが、これ等は推して知られるであらう。

【沿革】賦物は、「萬葉集」の歌に見える物名詠み込みに胚胎してゐるものといふべきで、「古今集」には物名として掲げ、源順の「天地の歌」などともなつてゐるものの、連歌の轉用と見る事が出來る。賦物の起原は明確には解らないが、「連歌辨義」は白河天皇の應德の頃かと云つてゐるのはほぼ當つてゐよう。「古今著聞集」に、二條天皇の永萬の頃に始まつたと云つてゐる「伊呂波連歌」などは、賦物連歌として知られる古いものであらう。彼鳥羽院の頃に至つては種々の賦物が行はれて、「菟玖波集」には當時の白黑賦物・三字中略・四字上下略等の賦物の斷片が收められ、定家の「明月記」の建曆二年十二月の條に、木名・人名（當代の人隱題）を賦した事、建保二年八月の條には、上句に反讀（二字、反音）、下句に三字中略を賦した事、建保三年八月の條には、魚・河名を賦した事などが載つてゐる。以上のやうに種々の賦物が盛んに行はれるに連れ、これが法則も立てられるやうになり、「八雲御抄」正義篇には、發句・脇・第三の三句中には賦物を顯はして隱題を嫌ふ事や、一字露顯・同名異物に關する制や、源氏卷名と國名とを賦する法、その他について一々定めが記されてゐる。又後嵯峨院の寬元の頃に、五ケの賦物、十ケの賦物などが定められたといふ。五ケの賦物とは、山何・何路・何木・何人・何船を云ひ、十ケの賦物とは、朝何・夕何・花何・花之何・唐何・青何・白何・手何・下何・初何をいふ。その他にも種々定められて、元亨の頃に至つてその制が完成し、文和の頃に專ら行はれたと「連歌辨義」に述べてゐる。元來賦物は遊戲的なもので、或る關聯した一群のものを毎句に賦し入れる慣例であつたが、後には源氏卷名と國名・三代集作者名・名號などの通篇に賦するものを除いては、作が成つて後これが賦物を定める如き本末顚倒

したことになつた。心敬僧都の「ひとりごと」に、「片つ田舍などに、この頃賦物をとるさま不審に侍り。發句を讀進して已後賦物の沙汰侍りて定給へること覺束なし云々」と見えるのはその證である。一條兼良の「連歌初學抄」に、「往古以二賦物一爲ㇾ題、或百韻或五十韻、毎句用二其賦物一、近代發句計有二賦物之沙汰一、脇句以下一向不ㇾ取ㇾ之、仍雖ㇾ似ㇾ無二所詮一、聊不ㇾ忘二舊儀一而已」と云つてあるやうに、發句ばかりといふ如き事が掟となり、「兼載雜談」なども「賦物は發句の題なり云々」と述べてゐ

題とするのである。俳諧に於ては俳諧の二字が卽ち題であり趣である。今貞德は俳諧文連歌と書くのであるから、彼の夢想・懷舊の連歌と同じ意味で、賦物を取る必要はないといふのであると云つてゐる。併し立圃には賦物の論があり（空礫）、季吟にも賦物を取る場合の執筆の心得が述べてあるやうに（增山井）、貞門でも全く賦物を取らなかつた譯ではないのである。談林では賦物を盛んに取つてゐる。それも上賦・下賦が多かつた。西鶴は、談林で延寶九年に改まつた俳諧本式目によつて表十句

て、所謂先生物の白眉と評せられた。九年、舊作「波」を「若き日の惱み」と改題して出版。これは或る意味で、第一期の區切りであり、決算とも見らるべきものであつた。十年末に至つて社會主義同盟に加入してから次第に作風が變化し、社會主義的傾向を濃くしたが、それでも「ある體操教師の死」の如き、以前の作風を殘したものもある。十二年、「東京へ」を朝日新聞夕刊に掲載し、更に他の小篇と共に、同年八月出版した。同時に同志と共に日本フェビアン協會を建設、翌年豫ての希望であつた

團が上演した。

【著作】新撰藤森成吉集（改造社）○藤森成吉全集（日本文學大全集）。〔長篇〕若き日の惱み○煩惱○妹の結婚。〔中篇〕舊先生。〔短篇集〕新しい地○研究室で○寂しき群○その夜の追憶○東京へ。〔戲曲集〕礫茂左衞門○何が彼女をさうさせたか。〔感想集〕藝術を生む心○大地の匂ひ○反逆藝術家等。

【批評】〔小說家として〕初期の作品には感傷的な抒情味が滲んでゐて、自然描寫にすぐれ、「山」「雲雀」など詩と現實の調和を狙つたもの

で、「御狩する鷹場のゆふべ歸りかね」「君が爲とぞとしばとりける」「きりつぼの水こそ鷹の命なれ」「柳の露はよるやとるらん」の如きである（としばは貢のために柴の枝を五尺に伐つて鷹の捕つた鳥を附けるもの、きりつぼの水は鷹の藥に用ひるもの、柳の露も鷹の藥水である）。

【名所連歌】　毎句名所を賦するものである。「賀茂社法樂宗牧獨吟名所百韻」の「波の音水するもせみの小川かな　山城」「夕風涼し片岡

き類をいふのである。この名稱は、古く「明月記」にも見え、「宗祇八十體」といふ書にも出てゐる。「甲陽軍鑑」に、織田信長が武田勢と長篠に戰つた時、首途の百韻には毎句その家臣の名を隱題の如く賦し入れたと云つてある。

【冠字連歌】　伊呂波連歌や名號連歌などの如き、句頭に賦する類のものを總括していふ語である。

【俳諧賦物】　以上連歌に於て述べ來つたものの中、上賦・下賦の如きは、俳諧に於ても最も

したことになつた。心敬僧都の「ひとりごと」に、「片つ田舍などに、この頃賦物をとるさま不審に侍り。發句を讀進して巳後賦物の沙汰侍りて定給へること覺束なし云々」と見えるのはその證である。一條兼良の「連歌初學抄」に、「往古以二賦物一爲レ題、或百韻或五十韻、每句用二其賦物一、近代發句計有二賦物之沙汰一、脇句以下一向不レ取レ之、仍雖レ似二無所詮一、聊不レ忘二舊儀一而已」と云つてあるやうに、發句ばかりといふ如き事が掟となり、「兼載雜談」なども「賦物は發句の題なり云々」と述べてゐる如き狀態になつた。かくして賦物は、殆ど本來の意義を沒却するやうたものとなつたのである。かくて俳諧に入つても、「守武千句」（別項）の如きも、發句のみに賦物を取つてゐるのであるが、貞門に於ては、貞德は賦物を取らなかつた。その理由は、「俳諧は則百韻ながら俳言にて賦する連歌なれば、端作をも俳諧之連歌と書べき也」（增山井）といふので、これは正保三年三月十七日花咲亭に於て定められた事であるとある。樓川の「俳諧獨稽古」にはこれを解して、連歌の賦物といふは、賦はくばる意味であるから、舊式のやうに千句百句に亙る場合ならば賦の字義にも叶ふけれども、發句ばかりに取るのでは意味をなさない。連歌に取るのは舊式を忘れないためであるが、俳諧には舊式はない。「連歌新式」の法を借りたのであるから舊式に拘らず物を取るには及ばないといふ意味である。又一には題名のない連歌には、百句の時でも千句の時でも賦物を取るが、夢想・懷舊・追善等の連歌には賦物を取らない。これは夢想の連歌、懷舊の連歌などと云つて、その趣を端作に書くからである。それだから題名のない連歌には賦物を置いて

題とするのである。俳諧に於ては俳諧の二字が卽ち題であり趣である。今貞德は俳諧文連歌と書くのであるから、彼の夢想・懷舊の連歌と同じ意味で、賦物を取る必要はないといふのであると云つてゐる。併し立圃には賦物の論があり（空疎）、季吟にも賦物を取る場合の執筆の心得が述べてあるやうに（增山井）、貞門でも全く賦物を取らなかつた譯ではないのである。談林では賦物を盛んに取つてゐる。それも上賦・下賦が多かつた。西鶴は、談林で延寶九年に改まつた俳諧本式目によつて表十句に賦物を取つた本式百韻を興行した（精進牒）。その他言水・幽山の連句などにも二字反音・三字中略の賦物などが見られる。舊門では賦物を取らない。それは又當然なことと云はねばならぬ。元祿以後、古風の學者の間にその式の說明は見られ、稀に作られたものがあるにしてもそれは過去の形骸で、實際は全く廢れて了つたのである。

（福井・萩原）

藤森成吉（ふぢもりせいきち）　小說家・戲曲家　【閱歷】明治二十五年八月、長野縣上諏訪町角間に生れた。家業は藥店の老舖であつたが、三歲の時母が自殺し、以後繼母の手に育てられた。諏訪中學校を經て第一高等學校獨法科に入つたが、當時の人道主義的風潮に動かされて東大では獨文科に進んだ。大正二年夏、伊豆の大島に行き、その印象により、長篇「波」を書いて自費出版し、文壇へデヴュウした。四年「新潮」へ「雲雀」を書き、新進作家としての地位を占めた。五年、大學卒業と同時に岡倉由三郎長女信子と結婚し、第六高等學校講師となつたが、翌年辭して再び創作生活に入り、七年七月「山」を發表、文壇へ返り咲きした。以後著作多く、殊に八年、中篇「舊先生」を書いて、所謂先生物の白眉と評せられた。九年、舊作「波」を「若き日の惱み」と改題して出版。これは或る意味で、第一期の區切りであり、決算とも見らるべきものであつた。十年末に至つて社會主義同盟に加入してから次第に作風が變化し、社會主義的傾向を濃くしたが、それでも「ある體操教師の死」の如き、以前の作風を殘したものもある。十二年、「東京へ」を朝日新聞夕刊に揭載し、更に他の小篇と共に、同年八月出版した。同時に同志と共に日本フェビアン協會を建設、翌年豫ての希望であつた文壇の視聽をあつめた。滿一ヶ年の間、花王石鹼工場・北海道家庭學校農場・松澤病院・濱松織物工場・鑄物工場・製絲工場等に勞働者となつて働いた。これ等の記錄が「狼へ」である。十五年四月、更に一つの展開を示して、戲曲としての處女作「磔茂左衞門」を發表した。そしてその後は、主力を劇作に注いだ。その年の五・六月、親炙してゐた有島武郎（別項）の心中事件に材をかりて戲曲「犧牲」を書いたが禁止された。昭和二年三月「何が彼女をさうさせたか」を書き、築地小劇場に上演された。同年、文藝戰線の同人となり、更にその分裂によつて前衞藝術家同盟に參加した。翌三年「僞造株券」「親友」「相戀記」「十萬圓事件」を發表した。又ナップに加盟した。ついで勞農黨員として長野縣第三區の國會議員候補者に立つたが、落選した。四年「土堤の大會」「光と闇」を發表。日本プロレタリア作家同盟委員長となつた。五年一月、渡歐して約二年半滯在の後、七年五月に歸朝した。而して最近の作としては、七年六月「爭ふ二つのもの」、同九月「龜のチャーリイ」を何れも「改造」へ載せた。又戲曲「地上樂園」は新築地劇

路・何木・何人・何船を云ひ、十ケの賦物とは、朝何・夕何・花何・花之何・唐何・青何・白何・手何・下何・初何をいふ。その他にも種々定められて、元亨の頃に至つてその制が完成し、文和の頃に專ら行はれたと「連歌辨義」に述べてゐる。元來賦物は遊戲的なもので、或る關聯した一群のものを每句に賦し入れる慣例であつたが、後には源氏卷名と國名・三代集作者名・名號などの通篇に賦するものを除いては、作が成つて後これが賦物を定める如き本末顚倒

劇が上演した。

【著作】　新撰藤森成吉集　改造社）○藤森成吉全集（日本文學大全集）。【長篇】若き日の惱み○煩惱○妹の結婚。【中篇】舊先生。【短篇集】新しい地○研究室で○寂しき群○その夜の追憶○東京へ。【戲曲集】磔茂左衞門○何が彼女をさうさせたか。【感想集】藝術を生む心○大地の匂ひ○反逆藝術家等。

【批評】【小說家として】初期の作品には感傷的な抒情味が滲んでゐて、自然描寫にすぐれ、「山」「雲雀」など詩と現實の調和を狙つたものに佳作があつた。又「煩惱」や「若き日の惱み」は、愛慾の苦しみを率直に描出して、好意のもてるものであつた。併し反面、やゝ手堅すぎて流露感に乏しく、面白さが少いのは、見逃せぬ弊であつた。また技巧に凝るあまり、却つて表現の不統一感を起してゐる點もあつた。近來は專ら題材を現代の社會問題にとつて詩を斥け、嘗ての人道主義的情熱をプロレタリア解放運動に向けるに至つて、作風は全然變化した。この轉向が、作家としての彼を更生させ、活躍の舞臺を與へしめた點は大なるものがあつた。【劇作家として】初めから大きい構想力を以て起つたところに、その特徵がある。初期に於ては「磔茂左衞門」「犧牲」の如く、多くの感傷的な社會觀が、むき出しに出てゐるところがあつた。一體に、場面構成は巧みであつたが、會話は叙事的・說明的で、藝術的潤ひなく、又暴露もの も生硬に失して、その效果をうすめてゐる點が指摘される。併し「何が彼女をさうさせたか」は、アヂ・プロ文學としては、平明でよく纏まつてゐるところから多く世に行はれ、「何が何々をさうさせたか」の言葉は、流行語として行はるゝに至り、

プロレタリア文學作品の代表的なものとして見らるゝに至つた。要するに過渡期の作家として、日本プロレタリア文學運動の途上に、强く足跡を印した作家の一人である。〔舟橋〕

武術叢書（ぶじゆつそうしよ） 故實 一卷 【編者】國書刊行會【刊行】大正四年五月【解說】一般の武藝者及び流派の傳統書、又は劍道に關した心法・術法の書を集めたもの。「本朝武藝小傳」（日高繁高）、「日本中興武術系譜略」「武術流祖錄」「擊劍叢談」（以上源德修）、「不動智」「太阿記」（以上釋澤庵）、「兵法三十五箇條」「五輪の書」「圓明流劍法書」（以上宮本武藏）、「劍法夕雲先生相傳」（一雲）、「一刀齋先生劍法書」（藤田俊定）、「柳生流新祕抄」（佐野勝舊）、「天狗藝術論」（佚齋樗山子）、「本識三問答 附運籌流劍術要領」「劍術不識篇」（以上木村久甫）、「劍說」（平山潜）、「劍徵」「常靜子劍談」「劍攷」（以上常靜子）、「劍法略記」（窪田淸音）、「劍法擊刺論」（森景鎭）等、二十一種四十四卷が收められてゐる。〔石村〕

諷誦文（ふじゆぶん） 古文書【解說】諷誦とは佛敎に於て咒願文・表白文、或は經文等を詠讀することをいふ。諷誦文は僧俗共に、法會等の場合に、僧侶を請じて右の詠讀をなさしむる時の文書である。就中、朝廷のものは、御願文と共に多く公卿中の學者がこれを草するのであるが、內藏寮より出すこともある。また幕府のものは、將軍自ら出すか、或は政所別當が奉じて出す場合もある。今「雜筆要集」に見えたる文例を擧ぐれば次の如くである。

敬白　諷誦事
三寶衆僧御布施百端
右、爲信心大施主ム、息災延命、增長福壽、萬歲萬安、無爲無事、所請如件、
年　月　日

敬白
諷誦事
三寶衆僧御布施一裹
右、爲過去亡魂、生死厭離、往生極樂、頓證菩提、所請如件、
年　月　日　　弟子姓ム敬白

なほ朝廷の實例を左に示す。

敬白
請諷誦事
三寶衆僧御布施
右、先皇聖靈晏駕期旣來、更起逝者之嘆、迴禍年猶淺、未盡悲哉之詞、方今讃玉偈貫花之文、祈金臺極種之品、泗濱之遺韻、恭驚鶉玉高聽、淮㳂之寶熏、遍透皞座智見、乃至妄境成就佛心、仍諷誦所修如件、敬白、
永正七年九月　日　〔伊木〕

舞正語磨（ぶしやうごま） 評判記 大本三冊【作者】秋扇翁【名稱】序に「ぶしやうごま」とは打てばまふ物なれば惡しき處を打ちてまはすべき心であると言つてゐる。【刊行】卷末に「萬治元年戊戌十月六日撰之畢」とある。當時の出版と見てよいであらう。【諸本】大正七年、珍書保存會で謄寫影印。【解說】萬治元年の秋、京都四條河原で五日間催された勸進能に於ける喜多十太夫の演技の評判記である。秋扇翁は如何なる人か詳かでないが、大阪に住み能樂に造詣が深かつた人らしく、承應二年九月、江戶神田明神に神事能があつた時もその評判記を書いてゐる。そしてこの書は「古の舞人の善きすぢと今の世の舞人の惡しきすぢとを書いた」とあるが、書き振りでは當時喜多七太夫のやうな古今獨步と言はれた名人があり、その次男十太夫のやうな秀でた名手があつて、喜多流が盛名を謳はれてゐたのに對する意識があつたやうに思はれる。即ち筆者は猿樂四座の觸頭觀世流に關係の深かつた者ではなからうか。或は觀世黑雪であるとも言はれる。この評判記の反駁書で當時喜多流側から出たものと想はれる「猿轡」（別項）のあるのを考へ合すれば、思ひ半ばに過ぐるであらう。なほこれは著者が十月初めに筆を起して六日に書き終つたと言つてゐる。先づ上卷に勸進能五日間の曲目を揭げてある。初日は翁・高砂・賴政・江口・紅葉狩・櫻川・大會・吳服、二日は翁・賀茂・眞盛・松風・自然居士・葛城・海士・養老、三日は翁・白鬚・忠則・熊野・道成寺・三輪・鳶刈・鵜飼、四日は翁・春日龍神・班女・藤戶・船辨慶・猩々・放家僧・金札、五日は翁・皇帝・天鼓・夜討曾我・柏崎・融・熊坂・祝言で、上卷には初日・二日、中卷には三日・四日と各二項目に分け、下卷には評判と題して批評してゐる。そのうちに當時の能の傾向及び故實等を窺ふことが出來る。また能の批評書としても、最も古いもので、江戶時代の評判記（別項）としても、最も古いものの一つである。〔笹野〕

覆醬集（ふしやうしふ） 漢詩文集 四卷 續集二十卷【著者】石川丈山【解說】四卷は手定に係り、續集は著者の死後、門人石克子（石川孫十郎）が編輯したものである。【批評】文よりは詩が勝つてゐる。その詩は惺窩・羅山（各別項）に比し、一頭地を拔いてゐる。「日本詩史」の著者江村北海は、「余その集を覽るに、句多くは拙累、往往俗習を免れず」と評し、「東瀛詩選」の著者淸の兪曲園は、「贅句多くして佳章少し。殆ど老筆頹唐、推敲を事とせざるに由るなり」と評してゐる。〔佐久〕

武昌樂（ぶしやうらく） 「太平樂」を見よ。

藤原基俊家集（ふぢはらのもととしかしふ） 歌集 二卷【成立】上卷の奧に「是は堀河院の御時集めしかばまゐらせし、これより後の歌はいにしへの今のをかきあつめたるなり」とある。【諸本】群書類從卷二五五所收。【內容】上卷は春・夏・秋・冬・戀・雜の順に排列され、下卷は雜然としてゐる。歌の數は上卷百〇六首、下卷九十八首、合計二百〇四首。最後の十四首は「追考出」とある。基俊の歌は用語が自由で變化がある。例へば（一）主觀を直接いひ表はす語として、いぶせし、うらめし、うらやまし、くやし、つゝまし、めざまし、わりなし、むねあふ等の如く物語の語と思はれるもの。（二）主觀を强くいひあらはさうとして、あなあさまし、あな心ぼそ、あなこと〴〵しの如く「あな」を用ひたもの。（三）古句を引用したものとして、朝くらや木の丸殿に、かのこまだらに、ほにあげて、みをしる雨等の如きもの。（四）動物名として、烏・雀の如きもの等がある。その他無雜作に用ひたと思はれる語が多く、中には語義不明なものもあるが、恐らくは一々辭書的研究を遂げてゐるであらう。彼は用例や語法の許す範圍內に於て、用語を自由に使用し、それによつて幾分でも新しい感じを出さうと努めたやうである。（基俊參照）〔西下〕

附子（ぶす） 能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられてゐる。【題材】無住法師の「沙石集」（別項）第七、慳貪者事の一條に據つたもので、狂言ではその毒物を附子として扱つてゐる。附子のことは、「和漢三才圖會」卷九十五毒草類に、荻生徂徠の「南留別志」（別項）に「毒をぶすといふは附子なり云々」とある。【梗概】大名が、太郎冠者と次郎冠者に留守を命ずるに、ぶすと云つて、風に當つてさへ滅却する毒が置いてあるから、よく心得よと言ひ置いて他出する。その後で太郎冠者が附子を見、甘さうな物だから食はうとて、次郎冠者の止めるのも聽かずに食ひ、毒どころか砂糖だといふので、次郎冠者共々食ふ。さうしてその辯解に、主人祕藏の牧溪和尙の墨繪の觀音を破り、大天目の茶碗も破つてしまふ。處へ大名が歸つて來る。冠者は泣く眞似をしながら、留守に相撲をとり、轉ぶまいとして掛物につかまつて破り、天目の上に投げられて微塵にしたと辯じ、その申しわけにぶすを食つて死なうとしたが、まだ死に切れぬと語

を揭げて索引に資してゐるのはせめてものことである。卷一（元）紅毛人支配から水あびせまで、卷二（亨）江戶の昔からア、バン、ウンの三池まで、卷三（利）廣瀨川から狩野氏繪書故實まで、卷四（貞）位署書から追捕使・押領使まで、各數十百項を收めてゐる。卷二の末に、「寬政十年戊午十月十日容膝齋」、又卷三の末に「寬政十二年庚寅五月四日容膝齋」とあるのみで、序跋もない。〔和田〕

ふせやの物語（ふせやのものがたり） 物語 一卷【作者】不詳【名稱】女主人公が信濃の伏屋

型戀愛談。謂はゆる Holle type の家庭童話であり、一面に於ては住吉明神の利益が宣べられてゐると共に、結末に附加せられてゐる主人公夫妻の本地の說述は、近古文學及び近古思想の著しい特色である。又挿話的に攙入されてゐる寓話的要素即ち動物報恩說話の片鱗には、浦島傳說と連緣する如無偕都型傳說の影響を認める事が出來る。

【梗概】播磨の少將源のたゞのぶは、北方早世の後、忘れ形見にほひの君に乳母の木たかきを冊かせて、早くも三年を過したが、姫が御

らに太刀を振り翳すと、不思議やその太刀は三段に折れた。奇特に驚きつつ姫をば底深く沈めて武士が引上げた後、この湖の主である大龜は姫の體を潜き上げて勢多の橋の上に置き、亡き母の魂が宿つて我が子を救つた旨を述べて薄運を慰め、無謀の死を止めて又水の中に影を沒した。翌朝通り掛つたのは熊野參詣の下向道にあつた老尼で、姫を權現の授け子として鄕國信濃伏屋に連れ歸つた。都では父君も夫少將も驚き歎き、方々の神佛に祈を籠めてゐる中に、北方は少將をあひしに配は

文と共に多く公卿中の學者がこれを草するのであるが、内藏寮より出すこともある。また幕府のものは、將軍自ら出すか、或は政所別當が奉じて出す場合もある。今「雜筆要集」に見えたる文例を擧ぐれば次の如くである。

敬白　諷誦事
三寶衆僧御布施百端
右、爲信心大施主ム、息災延命、增長福壽、萬歲萬安、無爲無事、所請如件、
年　月　日

秋扇翁は如何なる人か詳かでないが、大阪に住み能樂に造詣が深かつた人らしく、承應二年九月、江戸神田明神に神事能があつた時もその評判記を書いてゐる。そしてこの書は「古の舞人の善きすぢと今の世の舞人の惡しきすぢとを書いた」とあるが、書き振りでは當時喜多七太夫のやうな古今獨歩と言はれた名人があり、その次男十太夫のやうな秀でた名手があつて、喜多流が盛名を謳はれてゐたのに對する意識があつたやうに思はれる。卽ち筆者

ひ置いて他出する。その後で太郎冠者が附子を見、甘さうな物だから食はうとて、次郎冠者の止めるのも聽かずに食ひ、毒どころか砂糖だといふので、次郎冠者共々食ふ。さうしてその辯解に、主人祕藏の牧溪和尚の畫繪の觀音を破り、大天目の茶碗も破つてしまふ。處へ大名が歸つて來る。冠者は泣く眞似をしながら、留守に相撲をとり、轉ぶまいとして掛物につかまつて破り、天目の上に投げられて微塵にしたと辯じ、その申しわけにぶすを食つて死なうとしたが、まだ死に切れぬと語る。大名は大に怒つて、やるまいぞ、やるまいぞと追ひ込む。

【構想】「沙石集」の說話は、和尚と小僧式の物であるが、この作ではその形式は用ひられてゐない。「骨皮」（別項）の如きがその型に屬する。「沙石集」の方は慳貪者に對する諷誡が趣旨である。この作もその意は承けてゐるが、冠者等の惡戲が極端であるので、少からず美感を傷つける。この作のをかしみは、ぶすを見たいと思ひ附き、遂に食ふといふ邊り、最後の「一口食へどもまだ死なず、二口食へども死なれもせず」の邊りに存する。〔野村〕

臥猪のとこ　ふすのとこ　隨筆　四卷　寫

【編者】未詳　【諸本】所傳極めて少く、今所見の一本（東京帝國大學附屬圖書館所藏）が原本であるらしい。【解說】公私の記錄、その他百般の文籍殊に隨筆・雜著類から、會心の條々を抄錄又は要略したやうなもので、奇事異聞もあり、往々史傳の缺を補ふに足る事もある。但し包容が餘りに廣汎な上に、編次の方法が蕪雜で、一條が終ると僅に一字を空白にして次の一條を書き出すこととし、每條の首尾が判然を缺く嫌ひがあるのは遺憾であるが、上層に標目

を揭げて索引に資してゐるのはせめてものことである。卷二（享）江戸の昔からア、バン、ウンの三池まで、卷三（利）廣瀨川から狩野氏繪書故實まで、卷四（貞）位署書から追捕使・押領使まで、各數十百項を收めてゐる。卷二の末に、「寬政十年戊午十月十日容膝齋」、又卷三の末に「寬政十二年庚寅五月四日容膝齋」とあるのみで、序跋もない。〔和田〕

ふせやの物語　ふせやのものがたり　一卷

【作者】不詳　【名稱】女主人公が信濃の伏屋の尼に救はれ、その庵室に保護せられてゐる許へ、夫の少將が尋ね到る物語なるにより、この題名がある。【成立】室町期。明應八年以前の作であることは、前田家本の奥書で明かである。卷一（元）紅毛人支配から水あびせまで、卷二（享）江戸の昔からア、バン、ウンの三池まで、卷三（利）廣瀨川から狩野氏繪書故實まで、卷四（貞）位署書から追捕使・押領使まで、各數十百項を收めてゐる。卷二の末に、「寬政十年戊午十月十日容膝齋」、又卷三の末に「寬政十二年庚寅五月四日容膝齋」とあるのみで、序跋もない。〔和田〕

ふせやの物語　ふせやのものがたり　一卷

【作者】不詳　【名稱】女主人公が信濃の伏屋の尼に救はれ、その庵室に保護せられてゐる許へ、夫の少將が尋ね到る物語なるにより、この題名がある。【成立】室町期。明應八年以前の作であることは、前田家本の奥書で明かである。「ふせや物語」の名は、古く「風葉集」（卷八羇旅）に見えるが、所載の歌を本書のに比較すると、似てはゐるが全く同じではない。或は本書の母本たる「古ふせや物語」があつたらしく思はれる。大野木克豐氏によれば、「古ふせや」から「新ふせや」（本書）が生れ、やがて異本「秋月物語」（別項）、それから刊本「秋月」が次々に生じたのであらうとの推測が下されてゐる。【諸本】前田侯爵家藏本は白地雲形表紙粘葉綴鳥子紙七行（八行の箇所もある）堅本で、卷末に「明應己未八年八月五日」とある古寫本（一卷）である。「近古小說新纂」（初輯）所收のものは、家藏古寫の一本を底本とし、前田本を以て校合したものである。「新修日本小說年表」には、古代篇散逸物語目錄中に出してあるが、これは「風葉集」所見の「古ふせや」を指すものと見られる。なほ「美人くらべ」（別項）は、本書の改作と推定し得べきものである。【題材】「落窪物語」「住吉物語」（各別項）系統の繼子物

詩が勝つてゐる。その詩は惺窩・羅山（各別項）に比し、一頭地を抜いてゐる。「日本詩史」の著者江村北海は、「余その集を覽るに、句多くは拙累、往往俗習を免れず」と評し、「東瀛詩選」の著者清の兪曲園は、「警句多くして佳章少し。殆ど老筆頹唐、推敲を事とせざるに由るなり」と評してゐる。〔佐久〕

武昌樂　ぶしょうらく　「太平樂」を見よ。

藤原基俊家集　ふぢはらのもととしかしふ　歌集　二卷　【成立】上卷の奥に「是は堀河院の御時集

戀愛談。謂はゆる Holle type の家庭童話であり、一面に於ては住吉明神の利益が宣べられてゐると共に、結末に附加せられてゐる主人公夫妻の本地の說述は、近古文學及び近古思想の著しい特色である。又插話的に攝入されてゐる寓話的要素卽ち動物報恩說話の片鱗には、浦島傳說と連緣する如無償都型傳說の影響を認める事が出來る。

【梗概】播磨の少將源のたゞのぶは、北方早世の後、忘れ形見にほひの君に乳母の木たかきを册かせて、早くも三年を過したが、姬が御母樣と呼ぶ人を欲しいと言ひ出したので、詮方なく亡せた五條宰相の北方であつた人を迎へ、連子のあひしの君も呼び迎へて仲よく暮すうち、にほひの君に思ひを寄せてゐた按察中納言の子の少將藤原もとよりが、乳母の手引で姬に近づく機を得ると、この由を聞き出した北方は、一つ年上の己が娘が先を越されたのが流石に嫉ましく、女房のゆげゐの獻策で五條邊りの武士三人を語らつて密計を授けた。晝寢の夢に凶事を豫感した父少將の心痛を、北方は所願の叶ふかと內心喜びつつ一笑に附し、なほもにほひを讒言するのを、父は聞き捨てにしながら、參內前を二度までにほひの方に立ち寄つて、夢見の不祥を返す〴〵も警めた。その夜北方は二人の姬を呼び、にほひに琴を彈かせる折しも、武士共突然亂入してにほひを奪ひ、追はんとした乳母を打伏せた騷ぎに、人々の驚き悲しむ間に繼母は緣から轉げ落ちて虛泣した。一方、夜のうちに姬は近江の湖の汀に下され、事の次第を聞き知り、武士の拔いた太刀を乞うて髮を結ひ分け、神々や少將に手向けた後、靜に最後の念佛を唱へてゐるのを、鬼のやうな武士共も涙ながらに太刀を振り翳すと、不思議やその太刀は三段に折れた。奇特に驚きつつ姬をば底深く沈めて武士が引上げた後、この湖の主である大龜は姬の體を潛き上げて勢多の橋の上に置き、亡き母の魂が宿つて我が子を救つた旨を述べて薄運を慰め、無謀の死を止めて又水の中に影を沒した。翌朝通り掛つたのは熊野參詣の下向道にあつた老尼で、姬を權現の授け子として鄕國信濃伏屋に連れ歸つた。都では父君も夫少將も驚き歎き、方々の神佛に祈を籠めてゐる中に、北方は少將をあひしに配はせようと、主殿といふ者を語らひ、まちかきといふ半物を使に仕立てて歌を送つたのを手嚴しく斷られた。三位中將から中納言になつてゐた父君は、遂に世を捨てて高野に登つたので、帝も哀れに思召し御訪ひの勅使あり、男君も思に堪へ兼ねて百日の間籠らうと決意して住吉に參り、一日一夜に三千三百三十度の拜みを上げて祈誓した驗空しからず、七日といふ曉の夢想に白髮の老翁の告があり、勇んで淸水に住む知己の山伏に裝束を借り、慣はぬ旅に戀人を搜めて東へと志した。姬は老尼のさま〴〵の心盡しに慰む樣を裝ひながら心は淚に暮れ、ありのすさびに書いた長歌を見た尼君は、いかさま戀する君ぞと愈々深く同情し、身の樣を變へようといふのをも止めて慰め續けてゐた。突然都から麥の失せた騷ぎを後に、少將は漸く大井の渡まで來、船の乘合の中で六十許りの老翁と道連れになつて、その知己の家に泊つたが、途すがら打沈んでゐる少將を、戀する人と言ひ當てた老翁は、夢歌を解いて信濃の伏屋へ急がせた。彼處では姬も亦戀しの君を夢見て名殘はなか〴〵恨めしかつたが、一度は甲斐へ踏み迷うた少將

治彌太郎二代のうちの作と傳へられてゐる。【題材】無住法師の「沙石集」（別項）第七、慳貪者事の一條に據つたもので、狂言ではその毒物を附子として扱つてゐる。附子のことは、「和漢三才圖會」卷九十五毒草類に、荻生徂徠の「南留別志」（別項）に「毒をぶすといふは附子なり云々」とある。

【梗概】大名が、太郎冠者と次郎冠者に留守を命ずるに、ぶすと云つて、風に當つてさへ滅却する毒が置いてあるから、よく心得よと言

を、庵室の傍まで送つて姿を消した彼の老翁が、住吉明神であつた事を知つて感泣しつつ、琴の音をしをりに遂に姫をば訪ね當てた。信濃守は遣はされた御文に驚いて急ぎ御供を催し、京からの御迎も華々しく、父君も高野から下つて姫に再會、木たかきの喜びは勿論、にほひの懇願によつてあひしは宥されたが繼母は獄に繫がれ、尼は信濃國を頂いて國司尼御前と呼ばれた。少將は遂に左大臣となり、北政所と願果しの後一男一女を儲け、若君は右大將、姫君は春宮の中宮、春宮御即位後十七で后に立たれた。左大臣は關白の宣旨を蒙り天下に尊敬せられ、北政所との仲睦ましく幸福な世を終り、後生は觀音に、北方は地藏菩薩と現ぜられたといふ。昔も今も住吉の尊い御誓は有難い極みである。罪なき人に腹黑の事せん者の報いの恐しさも、思ひ知らねばならぬ。

【影響】異本「秋月物語」(一名「京極大納言物語」)及び刊本「秋月物語」は、恐らく本書から直接に系統を引くもの、又「美人くらべ」は明かに本書の改作。「いはやの草子」(別項)も間接に本書の影響を蒙つてゐるらしく思はれる。

【參考】近古小說新纂(初輯)考說　〔島津〕

扶桑隱逸傳（ふさういんいつでん）傳記　三卷三册

【著者】元政（げんせい）【刊行】寬文四年【解說】我が國上古より當時に至るまでの隱遁者の小傳を集めたもので、役小角・伏見翁・民黑人・竹溪道慈以下、宗祇・牡丹花肖柏・日充・妙旨まで七十五人を收めてゐる。すべて漢文で記し、各々末に賛を附し、又挿繪を附してゐる。「本朝遯史」(別項)「續扶桑隱逸傳」等と併せ見るべきである。所收人名を擧ぐれば左の如くである。

〔上卷〕役小角・伏見翁・民黑人・竹溪道慈・開成皇子・道融・玄賓・善謝・德一・惟山・大中臣淵魚・藤春律・勝尾勝如・一演・行巡・七叟・猿丸太夫・成意・安勝・白箸翁・亭子皇子・蟬丸・喜撰・木幡山盲僧。〔中卷〕嵯峨隱君子・南山白頭翁・藺笥翁・南山亡名處士・淸原深養父・空也・千觀・覺超・增賀・仁賀・書寫性空・藤高光・慶保胤・野人若愚・行眞・藤義懷・能因・延殷・源顯基・大瀨三郎・平眞近・東聖・增叟・翁和尙・獨覺樵夫・禪林永觀・大原三寂・平康賴。〔下卷〕西行・心戒・明遍・鴨長明・證眞・解脫・明慧・證月・盛親・平惟繼・藤藤房・頓阿・兼好・七百歲・寂室・宗久・紀俊長・狂行文・福可・宗祇・牡丹花・日充・妙旨。〔增田〕

扶桑數（ふさうけう）「神道各派」を見よ。

扶桑五山記（ふさうござんき）禪史籍　五卷　寫

【著者】未詳【解說】日本の禪寺である五山等のことを記載したものである。第一卷に、宋の禪寺の五山十刹の名稱・境致・住持位次を列示し、第二卷に、日本の禪寺である五山十刹諸山の名稱・境致等を總說し、次に五山之上の南禪寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は、第百四十九大觀に至る。第三卷は、天龍寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は、第二百十二大倫元庸に至る。次に建長寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は、第二百十竺峯懷雄に至る。第四卷は、相國寺の境致・諸塔・諸寮・住持位次を擧ぐ。住持位次は、第九十九愚溪等厚に至る。次に圓覺寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は第百五十二奕芳梵梅に至る。次に建仁寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は、第三百十九全室宗勳に至る。第五卷は、壽福寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は、第五十四東輝僧海に至る。次に東福寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は第二百三十八周南圓且に至る。次に淨智寺・萬壽寺・淨妙寺・三聖寺の境致等を擧ぐ。五山等の住持位次の世代に依り、この書の成立年代を推定せらる。即ち建仁寺三百十九全室宗勳の下に享保七壬寅四月二十三日改衣、同年五月二十五日再住とあり、東福寺二百三十八周南圓旦の下に正保四年とあり、この書と同種の書に「震旦扶桑禪刹次第」「支竺桑名山諸寺記錄」(別項)「五山傳」「鎌倉五山記」等があるが、この書が尤も整うてゐる。相模瑞泉寺所傳本である。〔鷲尾〕

扶桑集（ふさうしふ）詩集　十二卷(現存二卷)

【撰者】紀齊名(本朝書籍目錄)【書名】扶桑は日本の異名とせられてゐる。それは梁の任昉の「述異記」卷上に在る次の記載に基づくものである。「磅礴山は扶桑を去る五萬里、其の地甚だ寒し。桃樹有り千圍、萬年に一實す。一說に日本國に金桃有り、其の實重さ一斤云云」。「淮南子」にも「日拂于扶桑」等の語があり、日本は日の出づる所に近いために遂に日本の如く考へられたものらしい。唐の杜佑の撰した「通典」卷一の百八十五東夷の上には、日本を載せ、百八十六東夷の下には、扶桑を載せて明かに區別はしてゐる。而も扶桑國の風土の記事は我が國と甚しく異なつてゐる。然るに我が國人は何時の頃よりか扶桑を以て我が日本の異名としてしまつた。從つて「扶桑集」は我が國の詩集の意味であつた事と思ふ。【成立】「江談抄」卷五、詩事の條に、「扶桑集被撰年紀事云、長德年中所撰也、源順作尤多云云」と見える。即ち一條帝の長德年中(一六五五—一六五八)の四ケ年中の撰述らしい。されば「本朝麗藻」(別項)よりも十餘年前に成つた事になる。【諸本】(一)類從本(群書類從一二六に收む)。類從本以外の系統に屬するものは見えない。他の寫本等も皆この本の系統に屬してゐる。寫本として存するものは、彰考館本や內閣文庫本(二部)などがあるが、何れも類從本と同系で、對校上裨益する所は殆どない。

【內容】現存する七・九の二卷共に卷首を缺いてゐて完本ではない。平安時代の末にも錯亂や脫落もあつたらしく「明衡往來」卷中の諸家集の條にも「扶桑集、紕謬已多云云」と見えてゐる。卷七は哀傷部(悼亡・哭兒・墳(類從本にはこの題を脫す)病・歎)、隱逸部(隱逸・樵隱・無隱・處士・山居)、贈答部(贈答・審客贈答)、懷舊部(懷舊詩舊)に分類し詩七十四首を載す。卷九は卷首缺けて部門の名稱を知る事が出來ないけれども、毛詩・孝經・論語・史記・蒙求及び詠史・勸學・及第・落第・筆の十目に續ぎて武部をあげ、弓の目を出し一詩を掲げてゐる。然らば卷九は文部・武部の如き分類のものであり、武部には弓の外更に多くの目の存したものかとも考へられる。又二卷中の作者を見ても小野篁・大江音人・都良香・菅原道長・三善淸行・紀長谷雄等を初め菅原文時・源英明・橘在列・源順等がゐる。「江談抄」に所謂「順作尤多云云」は齊名の師が橘正通であり、順は正通の師に在る關係にもよると稱せられる。【價値】詩としての格調は、輯載の時期が長いために一概に總括する事は出來ないのみならず、現存するものも僅に二卷に止まるが、要するに平安初期から一條帝の正曆・長德頃に至る詩風を知るを得るものと稱すべきであらう。殘缺二卷の價値よりも齊名の功は一層沒却すべからざるものと認められる。【附記】〔扶桑集目錄〕寫一卷、彰考館に在る。目次を掲げ、詩の題と起句とを掲げたものである。若し起句を缺いたものであれば結句を掲げてゐる。類從本と同系の本文によつたものである。〔山岸〕

扶桑隱逸傳（ふさういんいつでん）　傳記　三卷三册

【著者】元政（げんせい）　【刊行】寛文四年　【解說】我が國上古より當時に至るまでの隱遁者の小傳を集めたもので、役小角・伏見翁・民黑人・竹溪道慈以下、宗祇・牡丹花肖柏・日充・妙旨まで七十五人を收めてゐる。すべて漢文で記し、各々末に贊を附し、又插繪を附してゐる。「本朝遯史」（別項）「續扶桑隱逸傳」等と併せ見るべきである。所收人名を擧ぐれば左の如くである。

【上卷】　役小角・伏見翁・民黑人・竹溪道慈・開成皇

の境致・諸塔・諸寺・住持位次を擧ぐ。住持位次は、第九十九愚溪等厚に至る。次に圓覺寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は第百五十二奕芳梵悟に至る。次に建仁寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は、第三百十九仝室宗勳に至る。第五卷は、壽福寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は、第五十四東輝僧海に至る。次に東福寺の境致・諸塔・住持位次を擧ぐ。住持位次は第二百三十八周南圓旦に至る。次に淨智寺・萬壽寺・淨妙寺・三聖

の異名としてしまつた。從つて「扶桑集」は我が國の詩集の意味であつた事と思ふ。【成立】「江談抄」卷五、詩事の條に、「扶桑集被撰年紀事云、長德年中所撰也、源順作尤多云云」と見える。卽ち一條帝の長德年中（一六五五―一六五八）の四ケ年中の撰述らしい。されば「本朝麗藻」（別項）よりも十餘年前に成つた事になる。【諸本】（一）類從本（群書類從一二六に收む）。類從本以外の系統に屬するものは見えない。他の寫本等も皆この本の系統に屬してゐる。寫

事は出來ないのみならず、現存するものも僅に二卷に止まるが、要するに平安初期から一條帝の正曆・長德頃に至る詩風を知るを得るものと稱すべきであらう。殘缺二卷の價値よりも齊名の功は一層沒却すべからざるものと認められる。【附記】【扶桑集目錄】寫一卷、彰考館に在る。目次を掲げ、詩の題と起句とを掲げたものである。若し起句を缺いたものであれば結句を掲げてゐる。類從本と同系の本文によつたものである。

【山岸】

扶桑拾葉集（ふさうしふえふしふ）　三十卷　三十五册　【編者】德川光圀　【刊行】元祿二年　【諸本】明治二十七年の再板による覆刻本あり、同三十一年活版四册本が刊行された。【解說】「撰集の序をはじめ、諸鈔の序跋、家々の集のうち人におくれる文二三十卷を輯め、これを後西院上皇がかく命名されたもので（兵部卿幸仁親王序）、光圀が「先正之嘉言等ニ泥沙ニ而棄擲、往哲之懿行忍ニ沈埋而不ニ彰」（光圀序）と慨し、「編探ニ名山靈區之奥ニ、旁求ニ騷人雅士之文ニ、上自ニ弘仁ニ下迄ニ承應ニ篇幾ニ三百之數ニ、八凡一百有餘」（光圀序）に及び、これを後西院上皇に獻じてゐる。主なる內容を擧げれば、

古萬葉集序（峨峨天皇）・古今和歌集序（貫之）・亭子院歌合日記（伊勢）・土佐日記（貫之）・枕草子跋（清少納言）・紫式部日記（紫式部）・和泉式部物語（和泉式部）・さらしなの日記（菅原孝標女）・撰集抄序（西行）・古來風體抄序（藤原俊成）・方丈記（鴨長明）・烏よりの御文（後鳥羽天皇）・東關紀行（源親行）・うたゝね（阿佛）・名和長年に下し給ふ敎書（後醍醐天皇）・世諺問答序（藤原兼良）・なくさめ草（正徹）・しらかさねの日記（藤原基綱）。

等三百二篇である。卷首一卷は序及び總目錄、卷尾一卷に扶桑拾葉集系圖を添へてある。

【附記】續扶桑拾葉集三卷（靈元院法皇御幸宸記、南都百首和歌序、桂林集序等二十八篇を輯めたもの、編者不詳）。後に、「續史籍集覽」第二十一・二卷（明治二十八年）に收む。

【參考】今古殘葉（寫）四十六册　○扶桑殘葉集（寫）二十册（帝國圖書館藏）　【土井】

扶桑珠寶（ふさうしゆはう）　叢書　三十八種　【編者】佐佐木信綱　【刊年】明治四十三年より昭和六年に至る。【解說】編者が東京帝國大學文科大學に和歌史を講ずるや、重要なる參考資料又は文獻としての古典の多くが、祕府又は個人に珍襲されて容易に手にする事の出來ぬを嘆じ、これを綴和するために三十八種の稀覯書を選んで精巧な寫眞に附して俾を傳へたもので、森鷗外・橋本進吉・武田祐吉氏等の助力がある。この三十八種を三に分類し、「萬葉集」の古抄本及び完本を得る資料として「萬葉祕林」（十一種）、正倉院御物のうち、我が上代文化の背景をなす典籍を編して「南都祕笈」（十種）、外に國文學研究の好資料たる珍籍を收めたものを「芸峽祕芳」（十七種）とした。

【萬葉祕林】桂本萬葉集（一軸）・藍紙本萬葉集（二軸）・金澤本萬葉集（二帖）・天治本萬葉集（一軸）・有栖川元曆萬葉集（六帖）・元曆萬葉集大成本（十五帖）・春日本萬葉集殘簡（一帖）・類聚古集（十六册）・古葉略類聚鈔（五册）・仙覺律師奏狀（一軸）・桂の落葉（一軸）。【南都祕笈】雜集（一軸）（內藤湖南解說）・樂毅論（一軸）・杜家立成（一軸）・詩序（一軸）・隋經（一帙）（小野玄妙解說）・老子河上公注（一軸）（狩野直喜解說）・蒙求（一軸）（神田喜一郎解說）・南京遺文（一册）（橋本進吉解說）・南京遺芳（一册）（橋本進吉解說）・天平餘光（一帖ノ黑板勝美解說）。【芸峽祕芳】秋萩歌卷（一軸）・神樂和琴祕譜（一帖）・信義本神樂歌（一帖）・重種本神樂歌（一帖）・催馬樂（一帖）・倭漢朗詠集（二帖）・倭漢朗詠集（一帖）・白樂天詩卷（一軸）・七德舞（一帖）・承德本古謠集（一軸）・亭子院歌合（一軸）・一品經懷紙和歌（一帖）・西行上人歌集（一帖）・更級日記（一帖）・定家近代秀歌（一帖）・仝槐和歌集（一帖）・百代草（一帖）。

以上特に記した外にも各種の解說がある。何れにせよ御物・各王府・各名家の藏書を以て刊行するを得たのは、編者にして始めてよく成し得たのであつて、この意味に於ても貴い出版物であるが、更にその內容に至つては、廣く我が文化史研究の上に大なる寄與をなしたものであり、帝國學士院より補助されたのは實によくこの事實を語るものである。　【土井】

扶桑禪林書目（ふさうぜんりんしよもく）　書目　一册　【諸本】大日本佛敎全書所收　【解說】日本の禪僧の撰述にかゝる書目を列擧したもので、語錄八十餘部、詩文集五十餘部、論說註釋等二十餘部を擧げてある。鎌倉時代より室町時代に至る五山禪林に聞えたる禪僧の撰述にかゝるものは、ほぼ收錄してゐるが、未だ盡してはゐない。この外に「日本禪林撰述書目」等がある。これ等を併せ見るべきである。　【鷲尾】

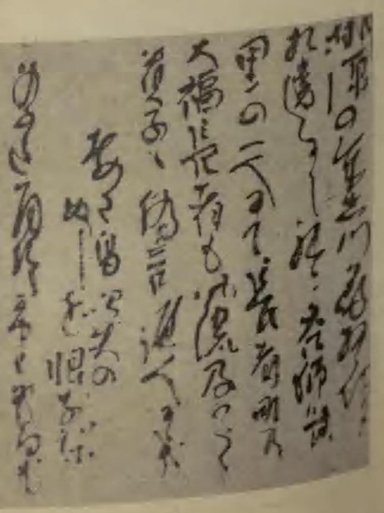
扶桑略記（ふさうりやくき）　歷史書　三十卷　【編者】阿闍梨皇圓　【名稱】「扶桑略記」が最も普通であるが、「濫觴抄」には「扶桑集」として引用され、寫本の中には「扶桑集」と題されたものがある。【成立】堀河天皇の御代、嘉保元年三月以後。【諸本】完全に纏まつた古寫本は知られてゐない。刊本では文政三年の官板が一番古いが、これにも缺卷が多い。國史大系本は、拔萃本・高野山本・皇典講究所本等を以てその缺卷を補つたから、拔萃本による記事の省略を除いては、ほぼ當初の形に復することができた。なほ刊本には、史籍集覽本・古典叢書本・皇學叢書本等がある。別に「扶桑略記」と題する寫本に「日本紀略」を交へ、「百錬抄」（各別項）を附加したものがあるけれど、取るべきではない。【內容】神武天皇より堀河天皇の寬治八年（嘉保元年）三月に至るまでの編年體の歷史書である。その特色は佛寺關係の事實の記載に重きが置かれてゐることである。それ故に材料は「六國史」（別項）を初めとする諸種記錄類の外に、僧傳・緣起・說話等に及び、正史と異なつた興味ある一種の史書を形づくつてゐる。そして不完全ではあるけれども、各條の記事の下に材料の名を擧げて出典を明かにしたのは、材料に語られた事實に於ける著しき矛盾をまゝ私言を記して指摘したこと及び御歷代の終りや主なる史的事件について支那・印度の年代を對照してゐることと共に、編者の歷史編纂方法についての一つの見識を語るものと考へられる。【價値】史料としての本書の價値は、各條についてその基礎となつた材料を吟味することによつて定めらるべきものであるけれども、大體に於ては、さのみ高く評價せらるべきではない。殊に材料の文を抄略して記事とする場合、抄略の法が當を失して、まゝ材料と異なつた意味を示す記事を生じ、宛も本書のみに傳へられる異聞なるが如くに誤解せられる恐れあることを注意すべきである。　【坂本】

蕪村（ぶそん）　俳人・畫家　【姓氏】谷口氏、別姓與謝。【別號】宰鳥・溪霜・夔道人・落日庵・紫狐庵・夜半亭（二世）・夜半翁。なほ畫家としては、名は長庚又は寅、字は春星として知られ、朝滄・四明・三果・東成、その外數多くの別號を用ひてゐる。【生歿】享保元年、攝津國毛馬村に生れ、天明三年十二月二十五日京都に歿した。享年六十八。【墓所】京都市外一乘寺村金福禪寺　【俳系】初め內田沽山に倚り、後、早野巴人に就いて俳諧を學んだ。そして巴人の後を繼いで、夜半亭二世を冒した。夜半亭は蕪村歿後その高弟高井几董によつて嗣がれたが、その後正系は絕え、西村呂蛤が四世を名乘り、以下五世無涯、六世吳陵、七世宋路と傳へられたが、實質的にはもはや蕪村の遺流といふ事は出來ない。

【閱歷】蕪村の出自に就いては殆ど傳へる所がない。父母の姓氏は勿論、蕪村自身の本名

蕪村肖像（鈴木廉平氏）

蕪村自畫賛（井上九辰氏）

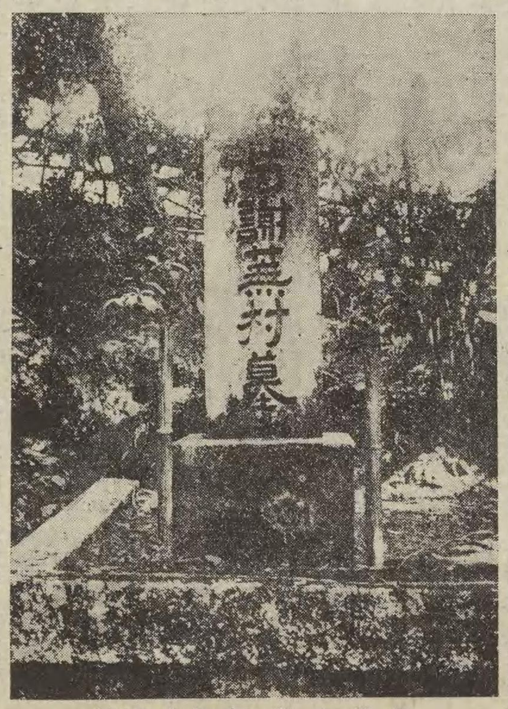


蕪村書簡（中川徳右

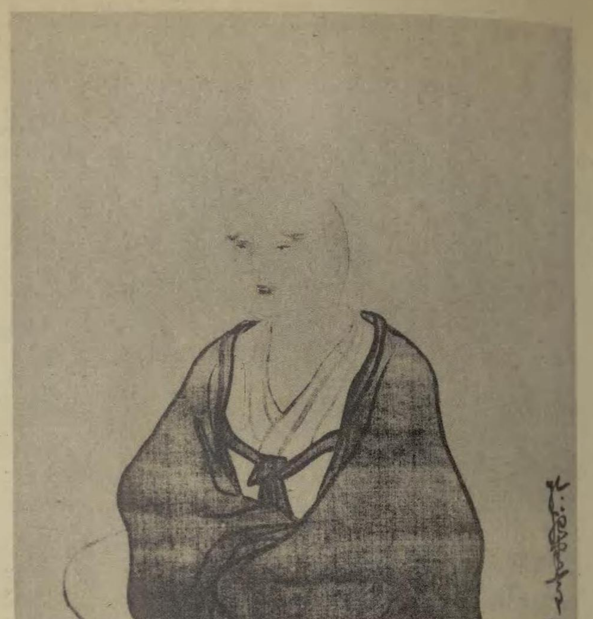
すらも分らない。ただ父は攝津毛馬の村民で、やゝ主だつた人物であつたらしく、蕪村の少年時代はこの毛馬村で送つた。母に就いても種々の口碑はあるが、要するに不明である。蕪村は幼時から畫をかく事を好んでゐたといふが、長ずるに及んでも父祖の産を治めず、遂に遠く江戸に漂浪の客となつた。それは彼がまだ二十歳を多く出ない頃であつたらうと思はれる。江戸に出た彼は、最初、沾德門の内田沾山に就いて俳諧を學んだといふが、その

沾德——沾山
- 其角
- 嵐雪
- 巴人
- 蕪村
  - 黒柳召波——黒柳維駒
  - 吉別大魯
  - 高井几董——宮紫曉
  - 寺村百池
  - 江森月居
  - 松村月溪
  - 樋口道立
  - 川田田福

時代の事に就いては、今全く知る所がない。その後元文二年の夏、早野巴人が京都から歸つて、石町の夜半亭に居を定めるや、蕪村はやがて沾山の許を去つて巴人に師事する事になつた。當時彼は宰町と號してゐたらしく、元文三年正月の夜半亭歳旦帖に始めてその句を見る。爾來結城の砂岡雁宕と共に、師に奉仕する事最も篤く、寛保元年には號を宰鳥と改めて、江戸の俳壇にも相當名を知られるやうになつた。然るに寛保二年六月彼が二十七歳の時、師巴人は病んで歿した。當時蕪村の實力を以てすれば、師の歿後といへども江戸俳士の間に伍して行く事は、さまで困難でなかつたらうと思はれるが、彼はそれを屑しとしなかつたのか、同門雁宕と共に江戸を去つて雁宕の鄉里結城に身を寄せる事になつた。この地方は雁宕の關係で巴人門の俳人が多かつたので、自然こゝかしこの俳席に列なる事も度々であつた。併し蕪村が江戸を去つた主な動機は、田園に起臥し、山水の間に悠遊して徐ろに畫想を練り、詩神を養はうとするにあつたらしい。勿論江戸時代も全く畫事に携はらなかつたのではないが、彼が愈々畫家として立たうと決心したのはこの結城時代以後の事であつた。かくて彼は野總の間を歴遊するのみならず、果ては遠く奥羽地方に遊んで具に旅の艱苦を嘗めた。この大行脚は寛保・延享の交であつたと思はれるが、その間の生活は彼の大きな藝術を生むための最も尊い試錬であつた。彼の高い詩眼と深い自然觀とは、この行脚の中に養はれた事が多かつたに違ひない。行脚から歸つた彼は或る時は知友の許に寄寓したり、或る時は結城の弘經寺などに滯在したりして、その間只管丹青の技を練つた。今も同地方に彼の遺作を多く發見するのである。かうして結城時代は全く畫家としての修練期であつたが、俳諧も亦好む儘に口吟を絶たなかつた。特に寛保三年の末から暫く宇都宮に足を留めてゐた間には、その地の俳人に擁されて寛保甲子の歳旦帖を出した位であつた。この時宰鳥の號と共に、始めて蕪村の號が併用され、この後は蕪村の號のみが專用される事になつた。延享・寛延の交數年間、彼はやはり常總地方に流寓してゐたが、寶暦元年の冬に至つて、飄然として西に向ひ京都の人となつた。丁度寛保二年江戸を去つてから放浪十年の後である。時に三十六歳であつた。彼がどうして急に西歸するに至つたか、その原因は分らない。恐らくいくらか故鄉忘じ難い念もあつたらうが、やはり繪畫修業の目的が主であつたのだらう。併し俳人としての抱負も亦十分持つてゐた。かの友人毛越の「古今短册集」に跋した文を以て見ても、當時の盛んな意氣は分る。當時京都の俳壇は、貞門系・淡々系の勢力が最も盛んであつたが、先師巴人の遺弟知友も相當にゐるし、再び夜半亭の遺風を顯彰することも困難ではなかつた。だが先輩望月宋屋等に憚つたものか、それともより、畫道に精進したかつた爲めか、上京後數年ならずして丹後の與謝へ去つて、こゝに三年餘を送つた。彼が與謝に遊んだのは、その母がこの地方の出身であつたからだと傳へられてゐるが、或はさうした因緣もあつたのかも知れない。とにかく彼は宮津の見性寺の住職竹溪和尚をたよつて、こゝに寄寓しながら與謝の海邊や加悦の谷々を往來する事になつた。この間勿論彼の志す所は後素の技にあつた。年初老に及んでなほ家庭を成さず、邊僻の地に放浪しつつ只管自分の藝術の成長に魂を打込んでゐたのである。彼が結城時代から用ひてゐた朝滄・四明等の落款ある遺畫が、與謝地方に今なほ數多く殘つてゐるのを見ても、當時の彼の努力振は窺はれる。ともあれこの與謝時代は、畫人蕪村としては最も注意すべき時代であつた。それだけ俳人としての活動は少かつたが、なほ全くこれを閑却したのではなく、橋立見物の風人を迎へて同地方の好士と唱和したりする事も屢々であつた。かうして三年の歳月を送つた彼は、寶暦七年の秋、再び京都に歸つて姓を與謝と改めて上京した太祇や巴人の遺弟等との交渉もあつたし、若干の門人すらも出來た。特に繪畫によつて多少衣食の安定が得られると共に、彼の俳諧熱は漸く嵩じて來た。そして明和三年には、太祇・召波等を初め七八人の同志と共に三菓社を結び、毎月兼題の句會を催す程の熱心さになつた。尤も明和三年から五年にかけて、蕪村は畫用のため屢々讃岐地方に來往したので、この句會も休み勝ちであつたが、明和五年夏讃岐から歸つて以來は、毎月定つて數回も開催され、社中に加はる人も頗る多



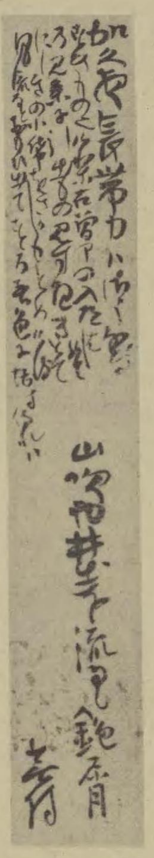
蕪村の墓（金福寺境内）



蕪村肖像（鈴木廉平氏藏）

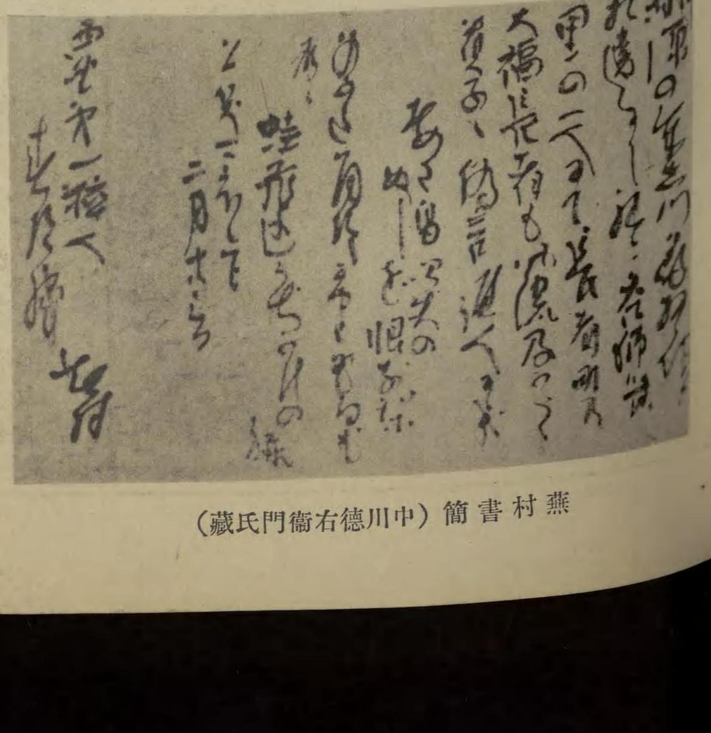
蕪村自畫賛（井上辰九郎氏藏）

農家飼馬圖　蕪村筆



蕪村筆短册

蕪村筆俳畫自賛（寺村助右衞門氏藏）



蕪村書簡（中川德右衞門氏藏）

は號を宰鳥と改めて江戸の俳壇にも相當名を知られるやうになつた。然るに寛保二年六月彼が二十七歳の時、師巴人は病んで歿した。當時蕪村の實力を以てすれば、師の歿後といへども江戸俳士の間に伍して行く事は、さまで困難でなかつたらうと思はれるが、彼はそれを屑しとしなかつたのか、同門雁宕と共に江戸を去つて雁宕の鄉里結城に身を寄せる事になつた。この地方は雁宕の關係で巴人門の俳人が多かつたので、自然こゝかしこの俳席に列なる事も度々であつた。併し蕪村が江戸

この後は蕪村の號のみが專用される事になつた。延享・寛延の交數年間、彼はやはり常總地方に流寓してゐたが、寶曆元年の冬に至つて、飄然として西に向ひ京都の人となつた。丁度寛保二年江戸を去つてから放浪十年の後である。時に三十六歳であつた。彼がどうして急に西歸するに至つたか、その原因は分らない。恐らくいくらか故鄉忘じ難い念もあつたらうが、やはり繪畫修業の目的が主であつたのだらう。併し俳人としての抱負も亦十分持つてゐた。かの友人毛越の「古今短册集」に跋した

に魂をお込んでゐたのである。彼が結城時代から用ひてゐた朝滄・四明等の落款ある遺畫が、與謝地方に今なほ數多く殘つてゐるのを見ても、當時の彼の努力振は窺はれる。ともあれこの與謝時代は、畫人蕪村としては最も注意すべき時代であつた。それだけ俳人としての活動は少かつたが、なほ全くこれを閑却したのではなく、橋立見物の風人を迎へて同地方の好士と唱和したりする事も屢々であつた。かうして三年の歳月を送つた彼は、寶曆七年の秋、再び京都に歸つて姓を與謝と改め

て上京した太祇や巴人の遺弟等との交渉もあつたし、若干の門人すらも出來た。特に繪畫によつて多少衣食の安定が得られると共に、彼の俳諧熱は漸く嵩じて來た。そして明和三年には、太祇・召波等を初め七八人の同志と共に三菓社を結び、毎月兼題の句會を催す程の熱心さになつた。尤も明和三年から五年にかけて、蕪村は畫用のため屢々讃岐地方に來往したので、この句會も休み勝ちであつたが、明和五年夏讃岐から歸つて以來は、毎月定つて數回も開催され、社中に加はる人も漸く多

くなつた。かくて蕪村が俳人としての生活は、こゝに新たな展開を見るに至り、やがて周圍の人々は彼を推して夜半亭二世の統を繼がせた。それは明和七年の春の事で、彼の年齒既に五十五。宗匠としての立机は實は遲きに過ぎるのであるが、これは全く從來畫家としてのみ立つつもりで、俳諧師として衣食の道を講ずる考がなかつたからである。併し既にかうして京師點者の列に加はり、彼を支持する門人の數も多くなると、彼の俳諧に對する熱心さは加速度の勢ひで增して來た。その活動

かつた。否畫事に於ても亦眞に大成の域に達したのは、やはり明和末年以後であつたと言はねばならない。かうして老來益々矍鑠として畫俳二道に神采を發揮してゐた彼も、天明三年冬の初めから何となく氣力衰へ、妻子や姉を初め、門人月溪・梅亭等の介抱を受けてゐたが、十二月二十五日、冬・鶯・白梅の三句を生涯語の限りとして遂に歿した。折から歲暮年始の際であつたから暫く喪を祕し、翌年正月二十五日、再び葬式義信を盡して法會を營んだ。その臨終の樣は、几董の「から檜葉」に

にかゝる「三菓社中句集」「高德院發句會」「月並發句帖」等蕪村一派の句稿、並に蕪村自筆の遺稿等が傳へられて居り、明和以後の彼の作品は殆ど完全に知ることが出來る。その外蕪村の判した十番左右合が「反古甪二篇」(文政七年刊)に、取句法が几董の「點印論」の中に收められてゐる。なほその句集・全集等は、明治以後數種出版されたが、類原退藏編「蕪村全集」と俳書大系「蕪村一代集」とが最も汎きに亙つてゐる。

【評論】蕪村の標榜した所は、言ふまでもなく らである。彼は嘗て門人召波から俳諧を問はれた時、「俳諧は俗語を用ひて俗を離るゝを尙ぶ」と答へ、更に離俗の法について、「詩を語るべし」と云ひ、畫家の謂ふところの去俗論を引いて懇に示した。その問答は召波の句集「春泥句集」の序に見えてゐるが、去俗論と云ふのは「畫家に去俗論あり、曰、畫去レ俗無二他法一、多讀レ書則書卷之氣上升、市俗之氣下降矣、學者其愼レ旃哉。それ畫の俗を去るだも筆を投じて書を讀ましむ。況んや詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや」といふのである。玆に引く

くなつた。かくて蕪村が俳人としての生活は、こゝに新たな展開を見るに至り、やがて周圍の人々は彼を推して夜半亭二世の統を繼がせた。それは明和七年の春の事で、彼の年齒既に五十五。宗匠としての立机は實は遲きに過ぎるのであるが、これは全く從來畫家としてのみ立つつもりで、俳諧師として衣食の道を講ずる考がなかつたからである。併し既にかうして京師點者の列に加はり、彼を支持する門人の數も多くなると、彼の俳諧に對する熱心さは加速度の勢ひで增して來た。その活動の跡は明かに文獻の上に示されてゐる。そして安永二年に出た「明烏」時代には、几董の序文でも知られる通り、將に蕉翁の粉骨を探り不易の正風に眼を開かうとする盛んな意氣を示した。「其雪影」まではまだ內容的に雜駁を免れなかつたが、この頃は漸く洗練された句風を示し來り、更に「續明烏」に至つて、かの絢爛高雅な格調は俳壇に燦然たる光を放つやうになつた。かうして蕪村の俳諧は、實に安永年間に至つて始めて大成され、天明新調の巨匠たる地位が確保されたのである。卽ち彼が夜半亭二世を嗣いだ事は、單なる形式的の問題でなくて、實は俳人蕪村を生むために最も深い關係を持つてゐたのである。彼が若し晩年かうした俳諧生活を持たなかつたとしたら、畫人謝寅の名は不朽であつたかも知れぬが、俳人蕪村として傳はる所は殆どなかつたであらう。言はば明和末年以後約十年間こそは、彼の名を俳諧史上に光輝あらしめるための年月であつた。芭蕉の藝術の大成が、やはり晩年十年間にあつたのと對比して、全くその撰を一にしてゐるのも面白い。而もこの間彼の畫道に於ける精進も、決して尋常ではなかつた。否畫事に於ても亦眞に大成の域に達したのは、やはり明和末年以後であつたと言はねばならない。かうして老來益々矍鑠として畫俳二道に神采を發揮してゐた彼も、天明三年冬の初めから何となく氣力衰へ、妻子や姉を初め、門人月溪・梅亭等の介抱を受けてゐたが、十二月二十五日、冬・鶯・白梅の三句を生涯語の限りとして遂に歿した。折から歲暮年始の際であつたから暫く喪を祕し、翌年正月二十五日、再び葬式義信を盡して法會を營んだ。その臨終の樣は、几董の「から檜葉」に詳しく記されてゐる。又その十七回忌には宮紫曉（几董參照）が「常盤の香」を編して冥福を祈り、明治十五年百年の諱辰には、門人寺村百池の孫百僊が蕪村の墓所金福寺境內にその碑文を建てた。

【編著】所謂「蕪村七部集」の如きは、實は蕪村の力に負ふ所が多いのであるが、その編纂は主として几董の手に成つた。直接蕪村の手を下したものは「花鳥篇」だけである。又安永五年道立の發起で、金福寺に芭蕉庵を再興して寫經社を結んだ時の記念集「寫經社集」も、蕪村自らその中の「芭蕉庵再興記」の板下を書いた。その外その編著を次に擧げておく。

明和辛卯歲且帖一册（夜半亭となり最初の春帖として注意さるべきもの）○昔を今一册（安永三年刊。巴人忌三回追善集）○玉藻集（別項）○芭蕉翁附合集二册（安永三年成、同五月刊。芭蕉の附句を三句の運びに就いて示し、初心者の範としたもの）○夜半樂 一册（安永六年の春興帖として編したもので、中に、かの名高い「春風馬堤曲」が收められてゐる）○新花摘（別項）○俳諧三十六歌仙（別項）。

蕪村の作品は「蕪村句集」「蕪村翁文集」等によつて傳へられてゐるが、なほ門人百池の記錄にかゝる「三菓社中句集」「高德院發句會」「月並發句帖」等蕪村一派の句稿、並に蕪村自筆の遺稿等が傳へられて居り、明和以後の彼の作品は殆ど完全に知ることが出來る。その外蕪村の判した十番左右合が「反古衾二篇」（文政七年刊）に、取句法が几董の「點印論」の中に收められてゐる。なほその句集・全集等は、明治以後數種出版されたが、「蘆原退藏編「蕪村全集」と俳書大系「蕪村一代集」とが最も汎きに亙つてゐる。

【評論】蕪村の標榜した所は、言ふまでもなく芭蕉に復れであつた。而してそれは獨り蕪村のみでなく、汎く當時の俳壇全般に亙つて動いた革新運動の根本的精神であつた。而も蕪村は夙く巴人の膝下にある頃、師風に泥まざる自由の精神に覺醒し、その天賦の才と晩年の精進とは、遂に彼をして中興俳壇の大先達たる實を收めしめたのである。卽ち芭蕉の精神は、彼によつて茲に最も完全に再現されたのである。併しこの再現は、芭蕉の俳諧と蕪村の俳諧とが全く同一たることを意味してはゐない。彼等の藝術は、その素質に於て實は大きな相異が見出されるのである。芭蕉の風雅は自然そのものに直面して、その中に心を深めて行かうとするのであつた。彼が身を野ざらしと觀じた旅に日を送り、行雲流水の間にさびとしをりとを得て來たのはその故であつた。蕪村も亦素よりその漂浪生活の間には長い行脚の日を含んでゐる。だが彼の俳諧に精采を增して來たのは、その行脚時代の事ではなくて晩年京都に定住してからの事であつた。それは蕪村の俳諧に於ける工夫修養が、專ら古人のすぐれた藝術的思想と作品とに接して、そこに詩境の統一を求めようとしたからである。彼は嘗て門人召波から俳諧を問はれた時、「俳諧は俗語を用ひて俗を離るゝを尙ぶ」と答へ、更に離俗の法について、「詩を語るべし」と云ひ、畫家の謂ふところの去俗論を引いて懇に示した。その問答は召波の句集「春泥句集」の序に見えてゐるが、去俗論と云ふのは「畫家に去俗論あり、曰、畫去レ俗無二他法一、多讀レ書則書卷之氣上升、市俗之氣下降矣、學者其愼レ旃哉。それ畫の俗を去るだも筆を投じて書を讀ましむ。況んや詩と俳諧と何の遠しとする事あらんや」といふのである。玆に引く所の去俗論は、「芥子園畫傳」に基いてゐるのであるが、要するに蕪村は畫も詩も俳諧も、その理想とする所は俗を離るゝに在り、俗を離るゝには多く讀書すべしといふのであつた。芭蕉のさびは一切の私意私情を去つて、句とすべき對象と同化し融合する所から生れた。句と身と一枚になるといふのが芭蕉の境地であつた。だから彼の句には常に彼自身の姿が見られ、彼自身の生活があつた。「初時雨猿も小蓑をほしげなり」といふ句の初時雨に蓑ほしげな猿の情は、卽ち芭蕉自身の心でもあつた。而してこのさびの心境を深めて行くために、芭蕉は所謂まことをせめる不斷の工夫を怠らなかつた。蕪村の離俗も亦畢竟彼の藝術を純化せしむべきための工夫に外ならぬ。句とすべき對象に纏はるすべての俗情から脫却して、そこに初めて至純な藝術的の感激は見出されるであらう。蕪村はそのためにまづ讀書によつて美に對する高い鑑識眼を養ひ、美的情操の陶冶を謀らうとしたのである。それは芭蕉のさびを求める精神と全く一致相通ずるものであつた。併し芭蕉は直ちに對象そのものを諦視した心の中にさびを味はうとし、

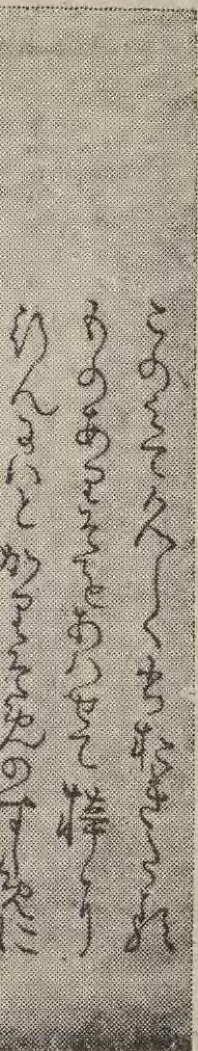
蕪村はかうして洗練された美意識の統制によつて句境を純化しようとしてゐる。隨つて蕪村の句には、必ずしも彼自身の姿と生活とは見出されない。言はば芭蕉の俳諧は卽ち芭蕉自身の生活であり、蕪村の藝術は結局藝術そのものに終始してゐる。そこに兩者の素質に大きな相異が認められるのである。蕪村の藝術が匆忙たる行脚生活の時代よりも、家庭に安住して靜かに書に對し、徐ろに詩想を練り得るに至つてから、眞にその特色を發揮したのは當然の事であつた。蕪村の藝術に於ける美意識の統制は、外象に對する鋭い美的直覺力となつて働いてゐる。外象の中に潜む感覺的な美しさは、彼の官能を通して極めて鮮明に而も最も統一された形で描き出された。「夕風や水青鷺の脛を打つ」「蕭條として石に日の入る枯野哉」の如き、その印象的な客觀的美は嘗て正岡子規をして大に傾倒せしめた所であつた。明治中期の俳壇に蕪村の名が高く顯揚されたのは、天保以後の所謂月並調が專ら小主觀に捉はれたマンネリズムに墮してゐた際に、この自由淸新な客觀的描寫の態度が革新派の人々に喜び迎へられた爲めであつた。併し蕪村の客觀的描寫は、決して單なる寫生を意味してゐるものではない。成る程、「牡丹散つて打重りぬ二三片」「楠の根を靜かに濡らす時雨哉」などの如き、注意深い寫生から生れたやうな句もあるが、「打重りぬ」といひ、「靜かに濡らす」と表現したところには、なほ外象に對して豫め用意された美意識の閃きが見られる。況んや「指南車を胡地に引去る霞かな」「易水に根深流るゝ寒さ哉」の如き、固より寫生の世界ではない。一は支那の太古に於ける原始生活への空想を基調とし、一は荊軻の悲壯な故事を背景として生れたもので、それは所詮ローマンスの世界に外ならない。讀書によつて俗を離れようとした蕪村の句境は、かうしてロマンチシズムへと導かれたのである。蕪村の句が頗る古典趣味に富むのも、要するに漢詩や我が國の古典文學等の中に、このロマンチシズムを求めたからで、その用語に好んで漢語や古語が選ばれたのも當然の歸趨であつた。かうした傾向は、曉臺の句にも亦著しく見えるところで、彼等は古典的の情趣を俳諧の上に顯現する事によつて、その俗化を救はうとしたのである。而も蕪村はこの古典的情趣の間に、常に新鮮な現實味を失はなかつた。前に擧げた二句にしても、さうしたロマンチックな世界を背景として廣漠たる平野に搖曳する霞と、寒さうに流れて行く根深の色とが、強い現實味を以て眼前に迫つて來るであらう。卽ち蕪村の外象に對する美意識の完全な統制は、玆に空想と傳奇の世界を現實の中に渾然と融和させてゐる。而してその統制が鋭い直覺力として働き、外象の感覺的美に向けられてゐる事が多い點に於て、なほ蕪村の句はより客觀的であると言ひ得らるゝであらう。蕪村は既に讀書を以て唯一の離俗法だと說いてゐるだけに、その藝術には多分の知識的な要素が含まれてゐた。併し勿論それは外面的に遊離したものでなく、指南車や易水に關する知識は、やがて現實を美化し詩化すべき情趣そのものとなるのであつた。だが、偶々美意識の統制が十分でなかつた場合、この智的要素は單に技巧的な修飾に終らないとも限らなかつた。

ひえ鳥を廿重ねて雲雀哉
蓼の葉を此の君と申せ雀鮓

前者は「伊勢物語」に、富士山の高さを形容して、「たとへばひえの山をはたちばかり重ねあげたらむ程して」とあるのによつて、雲雀の高く舞ひ上るさまを現はし、後者は晉の王子猷が竹を愛して此君と言つた故事を、雀鮓に添へた蓼の葉の上へ轉じたのである。その才は見るべきであるが、畢竟一種の智的遊戲に外ならない。これ等はなほ氣の利いた洒落乃至輕い滑稽として許されるかも知れないが、「角文字のいざ月もよし牛祭」「茯苓は伏しかくれ松露は露はれぬ」の如きに至つては全く貞門・談林時代の俳諧とその本質を同じくするものである。固より蕪村自身も、かうした句は一時の興にまかせて作つたに過ぎないであらうが、少くとも彼の藝術に於ける智的要素が技巧の傀儡として用ひられる傾きの多かつた事は認めねばならない。「藪入の夢や小豆の煮えるうち」「錢龜や靑砥も知らぬ山淸水」の如きは、寧ろ蕪村の窃かに得意とした作であつたらう。併しそこには既に其角が洒落風に墮したと同じ危機を孕んでゐたのであつた。蕪村の俳諧が芭蕉のそれに比して、屢々第二義的に評されるのも、要するにこの智的技巧の故である。芭蕉の晩年の句が凡て對象の內在性に深く心を潜めてゐるのに對して、蕪村はなほ往々外形的な美に執してゐた。それは確かに兩者の藝術的素質に逕庭を認めさせる點であらう。けれども、「句を得ることは專ら不用意を貴ぶ」（春泥句集序）と喝破した蕪村であつた。彼が決して所謂心頭に發した作を喜ぶものでなかつた事は明かである。「知二俳諧之大道一無レ他、嘯月賞花使レ遊二心於塵寰外一常友二蕉翁其嵐之流亞一專以レ脫二俗氣一爲レ最」（取句法）と言つたのも亦、日々四老に會して不用意に句を得よと召波に示したのと同じ精神であつた。卽ちかうした古人の雅懷を探つて、常に自分自身を高い藝術的雰圍氣の中に置くのが俳諧の大道を知る法だとしたのである。それは畢竟芭蕉が古人の求めた所を求めよと說いたのと相通ずるものであつた。而して蕪村がその古人の最とした所は卽ち芭蕉に外ならなかつた。ただ蕪村の生きた時代と彼の藝術家としての個性とは、必ずしも芭蕉と同一の俳諧を生ませなかつたけれども、芭蕉の精神が蕪村によつて革新の俳壇に最も輝しく再現された事は、何人と雖も否定出來ないであらう。蕪村はその餘りに高踏的な態度のために、蓼太や曉臺（各別項）等に比すれば、その當時にあつて門葉を得る事は寧ろ少かつた。併し召波・大魯・几董（各別項）等俊秀の士が多く、能く師の風を承けてそれぞれに特色を發揮した。ただ召波・大魯は、共に師に先だつて歿し、几董も長く夜半亭の統を保つ事が出來なかつたのは、蕪村のためには最も遺憾な事であつた。

【參考】〔傳記・評論〕與謝蕪村大野洒竹○俳人蕪村正岡子規○蕪村その他岡野知十○蕪村全集（附錄）潁原退藏○蕪村の新研究乾木水○蕪村と其周圍乾木水○畫人蕪村河東碧梧桐○蕪村研究（日本文學講座）河東碧梧桐○蕪村翁傳・年譜並落款印譜乾木水〔全集・註釋〕蕪村曉臺全集（俳諧文庫）大野洒竹校訂○標註蕪村俳句全集岩本梓石編○俳聖蕪村全集水島重治編○蕪村全集潁原退藏編○蕪村一代集（俳書大系）勝峰晉風編○蕪村句集講義正岡子規等○蕪村遺稿講義內藤鳴雪等○蕪村夢物語木村架空○讀蕪村夢物語（春）馬場蕗臺〔資料〕蕪村書簡集武藤山治編○蕪村の俳諧學校乾木水解說○

蕪村名畫譜夜半會編○俳人眞蹟全集第八巻（蕪村）河東碧梧桐編　〔潁原〕



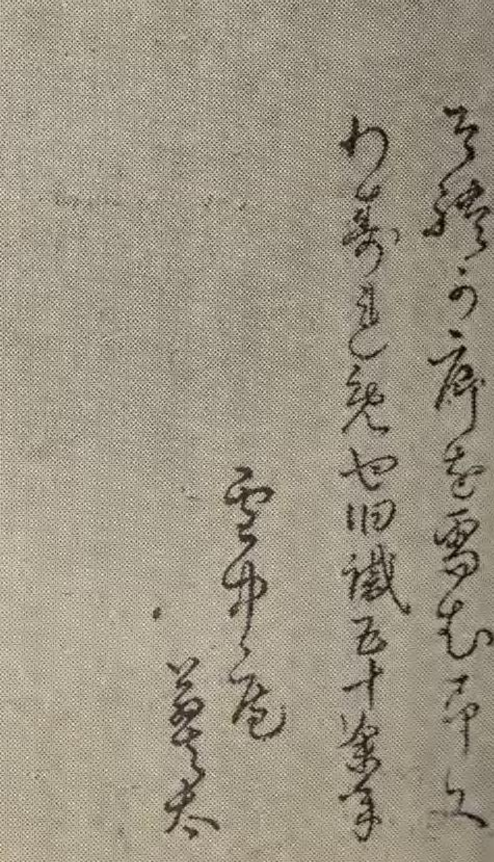
蕪村翁文集　俳文集　乾坤二册【編者】其獨亭・忍雪・醉菴其成【刊行】文化十三丙子春、京菊舍太四郎刊【諸本】校註蕪村全集（阿心庵雪人編）・蕪村曉臺全集（俳諧文庫）・俳文俳句集（日本名著全集）所收。【解說】蕪村の遺文は嘗て月居がその門人宰町に

書肆の其業にかしこきが、夜半翁の著作せし物を取集めて小册子となし、蕪村七部集と題して世にひろくするといふ事を云々」とある

く蕪村の遺文を最初に纏めて流布させた功は認めねばならない。〔潁原〕

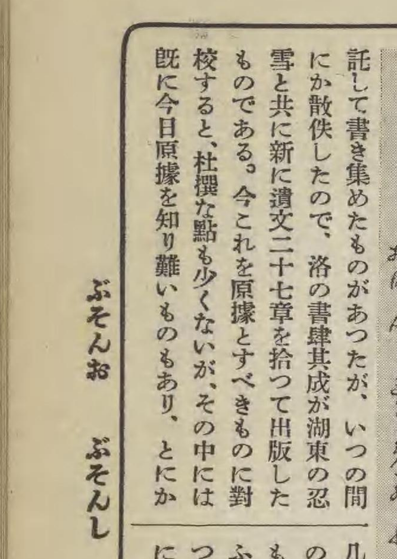
蕪村句集　句集　上下二册【編者】高井几董【名稱】題簽には、「蕪村句集前編」とあり、內題には「蕪翁句集」とある。【刊行】天明四年十二月の田福の跋があるから當時の刊行と思はれる。京汲古堂刊【諸本】校註蕪村全集（阿心庵雪人編）・蕪村曉臺全集（俳諧文庫）・名家俳句集（有朋堂文庫）・俳文俳句集（日本名著全集）・蕪村新十一部集（河東

いか。嘗て水落露石氏の紹介した「蕪村遺稿」（明治三十三年刊）は、その原本と思はれるものを見ると、大阪の書肆鹽屋忠兵衞が、享和元年の頃本書の後を繼いで出版するために集めたものらしいが、その內容は頗る劣つてゐる。又秋聲會の編した「蕪翁句集拾遺」や大野洒竹編の「蕪村句集後編」（蕪村曉臺全集所收）等を見ても同樣の感がある。所詮蕪村の佳句は先づこの几董の編纂によつて



（蕪村）河東碧梧桐編　【續原】

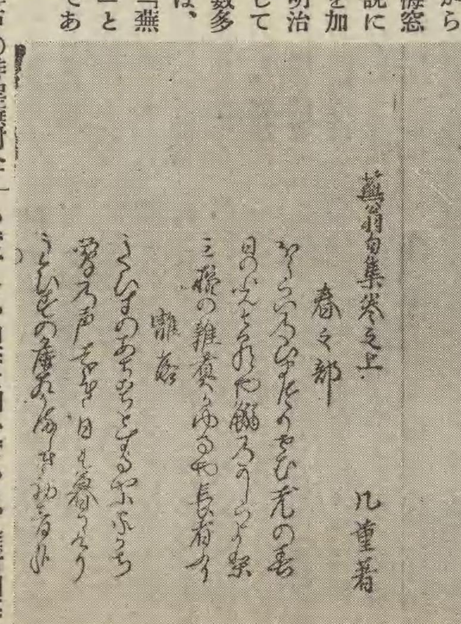
蕪村翁文集　ぶそんをうぶんしふ　俳文集　乾坤二冊【編者】其獨亭・忍雪・醉莼其成【刊行】文化十三丙子春、京菊舍太四郎刊【諸本】校註蕪村全集（阿心庵雪人編）・蕪村曉臺全集（俳諧文庫）・俳文俳句集（日本名著全集）所收。【解說】蕪村の遺文は嘗て月居がその門人宰町に



蕪村翁文集（松宇文庫藏）

託して書き集めたものがあつたが、いつの間にか散佚したので、洛の書肆其成が湖東の忍雪と共に新に遺文二十七章を拾つて出版したものである。今これを原據とすべきものに對校すると、杜撰な點も少くないが、その中には既に今日原據を知り難いものもあり、とにかく蕪村の遺文を最初に纏めて流布させた功は認めねばならない。

蕪村句集　ぶそんくしふ　句集　上下二冊　【續原】【編者】高井几董【名稱】題簽には、「蕪村句集前編」とあり、內題には「蕪翁句集」とある。【刊行】天明四年十二月の田福の跋があるから當時の刊行と思はれる。京波古堂刊【諸本】校註蕪村全集（阿心庵雪人編）・蕪村曉臺全集（俳諧文庫）・名家俳句集（有朋堂文庫）・俳文俳句集（日本名著全集）・蕪村新十一部集（河東碧梧桐編）所收本及び秋聲會複製增訂「蕪翁句集」（明治三十年刊。同拾遺が附いてゐる）がある。【由來】蕪村の歿後一周忌に當り、その高弟几董が師の發句を四季に類別して集め、書肆佳棠に與へて出版させたものである。田福の跋中に、「是を前後の二篇に選分けて、小祥大祥二忌の追福のためとすと也」とある如く、三回忌に更に後編を出すつもりであつたらしいが、それは遂に刊行の運びに至らずして終つた。【解說】本書は蕪村の句集としては、固より遺漏頗る多きを免れない。併し流石に几董の眼識を以て選出しただけに、先づ蕪村の代表的作品は殆ど網羅されてゐると言つてもよく、この前編だけで十分蕪村の面目は窺ふことが出來る。按ふに後編が出版されなかつたといふのも、或は遺を拾うた結果、前編に比して著しく遜色があつたからではあるまいか。嘗て水落露石氏の紹介した「蕪村遺稿」（明治三十三年刊）は、その原本と思はれるものを見ると、大阪の書肆鹽屋忠兵衞が、享和元年の頃本書の後を繼いで出版するために集めたものらしいが、その內容は頗る劣つてゐる。又秋聲會の編した「蕪翁句集拾遺」や大野洒竹編の「蕪村句集後編」（蕪村曉臺全集所收）等を見ても同樣の感がある。所詮蕪村の佳句は先づこの几董の編纂によつて拾ひ盡されたと言つてもよからう。夙く天保四年、松前の梅窓布席が、その師松窓乙二の說に依つて蕪村の難解な句に註を加へた「蕪村發句解」がある。明治に至り、子規が蕪村を稱揚してから、註解を試みたものが數多く出たが、その主なるものは、子規・鳴雪・碧梧桐・虛子等の「蕪村句集講義」「蕪村遺稿講義」と木村架空の「蕪村夢物語」とであらう。



蕪村句集（松宇文庫藏）

【參考】（續原）註蕪村俳句全集岩本梓石○俳聖蕪村全集水島重治○蕪村全集續原退藏○俳書大系蕪村一代集

蕪村七部集　ぶそんしちぶしふ　俳諧集　小本二冊【編者】菊屋太兵衞等。【刊行】文化五年七月初版。京菊屋太兵衞等。【諸本】蕪村曉臺全集（俳諧文庫）・七部集總覽篇（俳文學大系）所收。岩波文庫・改造文庫にも收められてゐる。【解說】月溪の序に、「芭蕉翁及び其角嵐雪が著はせし句錄七部を俳諧七部集といふ事は、いつの頃より言出でたるやらんしらず、此頃書肆の其業にかしこきが、夜半翁の著作せし物を取集めて小冊子となし、蕪村七部集と題して世にひろくするといふ事を云々」とある

意味してゐるものではない。成る程、「牡丹散つて打重りぬ二三片」「楠の根を靜かに濡らす時雨哉」などの如き、注意深い寫生から生れたやうな句もあるが、「打重りぬ」といひ、「靜かに濡らす」と表現したところには、なほ外象に對して豫め用意された美意識の閃きが見られる。況んや「指南車を胡地に引去る霞かな」「易水に根深流るゝ寒さ哉」の如き、固より寫生の世界ではない。一は支那の太古に於ける原始生活への空想を基調とし、一は荊軻の悲壯な

蕪村は飽に讀書を以て唯一の離俗法だと說いてゐるだけに、その藝術には多分の知識的な要素が含まれてゐた。併し勿論それは外面的に遊離したものでなく、指南車や易水に關する知識は、やがて現實を美化し詩化すべき情趣そのものとなるのであつた。だが、偶々美意識の統制が十分でなかつた場合、この智的要素は單に技巧的な修飾に終らないとも限らなかつた。

ひえ鳥を廿重ねて雲雀哉
蓑の裏を此の君と申せ蝙蝠

である。芭蕉の晩年の句が凡て對象の內在性に深く心を潛めてゐるのに對して、蕪村はなほ往々外形的な美に執してゐた。それは確かに兩者の藝術的素質に逕庭を認めさせる點であらう。けれども、「句を得ることは專ら不用意を貴ぶ」（春泥句集序）と喝破した蕪村であつた。彼が決して所謂心頭に發した作を喜ぶものでなかつた事は明かである。「知ニ俳諧之大道一無レ他、嘯月賞花使レ遊ニ心於塵寰外一常友ニ蕉翁其風之流亞一、事以レ脫ニ俗氣一爲レ最」（坂句法）と言つたのも亦、日々四老に會して不用

集（附錄）續原退藏○蕪村の新研究乾木水○蕪村と其周圍乾木水○畫人蕪村河東碧梧桐○蕪村研究（日本文學講座）河東碧梧桐○蕪村翁傳・年譜並落款印譜乾木水【全集・註釋】蕪村曉臺全集（俳諧文庫）大野洒竹校訂○（標註）蕪村俳句全集岩本梓石編○俳聖蕪村全集水島重治編○蕪村全集續原退藏編○蕪村一代集（俳書大系）勝峰晉風編○蕪村句集講義正岡子規等○蕪村遺稿講義內藤鳴雪等○蕪村夢物語木村架空○讀蕪村夢物語（卷）馬場露巒【資料】蕪村書簡集武藤山治編○蕪村の俳諧學校乾木水解說○

一丁餘に當る脫落があり、又「花鳥篇」は「一夜四歌仙」と合本にした後の飜刻本に據つた爲め、「一夜四歌仙」と一緒にしてしまひ、却つて「續一夜四歌仙」を取つて來て、その初めに「花鳥篇序」と題したりしてゐる。卽ち編者は「續一夜四歌仙」を「花鳥篇」と誤り信じたのであらう。隨つてこの七部集は實は「花鳥篇」の外に、「續一夜四歌仙」を含んだ八部集たる奇觀を呈してゐる。その他何れもその原本と對校する時は、誤脫が少からず發見され、七部の流布を廣からしめた書肆の功も、實は讀者を誤つた罪と相殺すれば、その罪を償ふに足りないと言つてよい。〔穎原〕

【參考】類題芭蕉七部集附載七部集槪論　伊藤松宇

舞臺觀察手引草 ぶたいくわんさつてびきぐさ　演劇書一冊【著者】杉贋阿彌【刊行】大正七年【解說】嘗て雜誌に揭載されたのを著者の一周忌に際して纏めたもの。和藤內・齋藤實盛・佐々木盛綱外數種の歌舞伎劇の主役の型及び扮裝その他を詳述し、卷末に二三の雜纂的記事がある。類書としては林翠浪著「芝居の型」(明治四十四年刊)があるが、當時の俳優の型を忠實に寫すのを眼目としてゐるのに比し、本書は各役に就いて故人や現存諸優の型を比較し、その優劣を種々の點から考察してゐるのは、鈴木春浦著「歌舞伎の型」(昭和二年刊)にも見られぬ特徵であらう。〔增田〕

舞臺監督 ぶたいかんとく　演劇〔英〕Stage Manager〔佛〕Regisseur〔獨〕Regie【意義】自己の藝術的才能によつて、演技の全體を管理し、自由に指揮する事の權力をもつもの。【解說】舞臺監督たる條件は、獨逸のハーゲマン(Hagemann)の語をかりていへば、精緻な審美的感情と至醇な趣味とであつて、卽ち演劇美學、劇術の本質、繪畫・建築・音樂・工藝美術等の補助藝術の本質に關する肝要な理論的知識を蓄へ、且つ必須の外部的手段に精通してゐなければならぬ。殊に哲學的・美學的・文明史的等の普遍的敎養をできる限り備へてゐなければならぬ。日本の劇壇に舞臺監督といふ名稱が現はれたのは、新劇(別項)運動が移入された後である。但し英國にいふ舞臺監督は獨佛のよりは、舞臺上の權力が低下してゐるといふ事と、監督といふ名が藝術的に響かないといふ事とから、近來演出者といふ名稱を好んで用ひる人が多くなつた。日本の演出者で泰西のそれの如き權威をもつた者は、小山內薰の築地小劇場(別項)に於ける如きで、極めて稀である。歌舞伎劇等に於ては、その座附の狂言作者が、十分常任舞臺監督としてその責務を實行し、又はその仕事を手傳つてゐた。最近に於て最も優れた舞臺監督として尊重したいのは、九代市川團十郎と新派の高田實とであつた。この二人の如き非凡の舞臺監督が現出した日本の劇壇は、今後とても、よき監督を生み出さぬとは云ひ難い。泰西に於ても舞臺監督術は次第に進步して來てゐる。(演出者參照)〔松居〕

【參考】Carl Hagemann, Regie

舞臺裝置 ぶたいさうち　演劇【意義】作者若しくは舞臺監督(別項)と協力して、その要求する舞臺面の構圖を作り、大道具師の手によつて背景大道具等の基本を製作する職分。【解說】著名な畫家が臨時に依囑されてその衝にあたることもあるが、毎興行急を要する場合が多いため、興行師は大抵斯道に手慣れたる人に依賴する。彼等は舞臺面の構圖をなす外、俳優の衣裳・持物・小道具等の考證選擇をもする場合が多い。但し舞臺監督が時代の考證、衣裳の選擇等に自家の意見を有する場合は、單に舞臺面の考察に止まる場合もある。【沿革】古くは、かゝる仕事も座附大道具の手で悉く處理され、衣裳・持物・小道具等の選擇考案は、大抵俳優自身これを掌り、狂言作者がその命を奉じて、これを實行したものであつた。九代目團十郎の如きは、考古癖のため、松岡明義の如き考證家を顧問として、日新しい舞臺を作つた例もないではない。新劇移入後は、泰西の舞臺裝飾の例に倣ひ、著名の畫家を拉し來つて、特にその裝置を需むる場合が多くなり、終に一種の專門家を生むに至つた。【舞臺裝置家】明治以降舞臺裝飾のために努力した人々も少しとしない。先づ夙に米國に遊んで、歸來久保田米僊の後援によつて舞臺裝置革命の宣言をした人に高橋勝造があつたが、彼は不幸にして成功しなかつた。當時西洋畫家の元老山本芳翠は、在佛中深く研究して明治三十六・七年、川上音二郎や四代市川左團次のため、數回に亙つて舞臺裝置を試み、當時の耳目を聳動し、日本の舞臺裝置術に少からぬ刺戟を與へたが、間もなく左團次も芳翠も共に歿したので、この方面の進路が遮斷されたのは遺憾なことであつた。併し今の左團次、當時莚升は父の志をついで、新進の舞臺裝置家をその持座の明治座に招致した。その中には前記高橋勝造や肖像畫家として名聲のあつた德永柳洲、その他、夭死したが少壯時紐育に斯道の研鑽を遂げた北村金次郎もあつた。自由劇場(別項)の背景主任は岡田三郎助で、彼及び彼の友人門下がつくした功勞は多い。帝國劇場が和田英作と、山本芳翠門下で嘗て明治座によき背景を作つた北蓮藏とを起して舞臺裝置にあたらしめた事も、斯界の進展に效果多く、和田英作の部下からは、田中良・薄拙太郎・井上弘範等の舞臺裝置家を出してゐる。玉置照信は東京美術學校を卒業するや、身を挺して新派の背景畫家となり、一生をそのために盡した。新劇の方面では、伊藤喜朔・村山知義・松永津志馬・岩田豐雄・吉田謙吉等の新人を生んだ。この外時々この任に當つた岡本歸一・太田雅光・佐原包吉・小糸源太郎等の名が憶ひ出される。又歌舞伎劇に、古くは久保田米僊・村田丹陵・小村雪岱・鳥居淸忠、近くは松岡映丘・鏑木淸方・山村耕花、大阪の大森正男と寶塚の荒島鶴吉等の指導者がある。松竹大道具部の小貫春陽・間宮秋陽等の畫才と經驗とは、優に一流の地位を獲得する力量を有し、又從來の歌舞伎劇の傳統的構圖を大道具師に與へつつある人々には、竹柴鴻作・數馬英一等がある。(大道具・小道具參照)〔松居〕

双面 ふたおもて　所作事の一系統【別名】荵賣【解說】謠曲の「二人靜」の換骨奪胎である。この趣向は、既に延寶八年正月刊の宇治加賀掾の正本「赤染衞門榮花物語」(別項)第四段目に仕組まれてゐるが、卽ちその原據とも見られる。爾來、淨瑠璃にも歌舞伎にも應用されたものは種々あるが、後の「大日坊の荵賣」(垣衣戀寫繪)の直接の題材又は粉本となつた重要なものに三種ある。その一は、俗に「二人淺間」と呼ばれるもので、寶曆七年三月江戸中村座所演の常磐津節「妹脊塚松櫻」(淺間參照)である。この曲中の櫻姬對淸玄を改作したのが野分姬對大日坊なのである。その二は常磐津節の「しのぶ賣」の最初と傳へるもので、寶曆十二年二月江戸中村座所演の「垣衣草千鳥紋日」(作者金井三笑)である。下河邊行平妹白菊、市川

雷藏)が、曾我十郎(市川武十郎、後の四代松本幸四郎)に戀慕し、祐成が奪はれし矢の根を伊豆次郎から取戻さんとして命を捨てるが、後に白菊の亡魂は荵賣の姿となつて祐成を慕ひ來る。遂にその妄執は傀儡師でくろく六兵衞實は京の次郎(四代市川團十郎)に乘移り、六兵衞は女の振をする。卽ち荵賣の趣向はこれから取入れ、「私が在所は京の田舍の片ほとり」云云の歌詞もこれから出てゐる。その三は「隅田川」と「日高川」とを綯ひ交ぜにしたもので、明和二年三月江戸中村座所演の同じく常磐津節「双面花入相」(作者金井三平)である。舞臺は

化政度に至つて廢滅した。一方、四代市川團藏によつて天明四年三月大阪角の芝居で、これを奈川七五三助に改訂增補せしめたのが、「隅田川續俤」(別項)であるが、所作名題は同じで、荵賣の所作も役名を法界坊・お組要助に替へただけで大同小異であつた。その後、京阪では團藏を初め、三代中村歌右衞門・五代市川團藏・嵐璃寬・先代市川右團治等を經て現右團治へ傳へられた。また四代團藏が寬政十年九月江戸森田座で「兩顏月姿繪」(後出)と題して法界坊の荵賣を演じたのが、卽ち今日に

れ等に伴つて狂言名題・淨瑠璃所作名題も、その時々によつて一樣でなかつた。而してこれ等の大部分は廢滅し、今日に傳存するものは極めて少いが、役者の關係から江戸・京阪とも發達したので、曲節と形式とを異にするものが二三傳存されてゐる。

【垣衣戀寫繪】常磐津〔別名題〕「過戀深山櫻」「色垣衣娘售」「垣衣草手向發心」等。〔初演〕安永四年三月十五日初日、江戸中村座「嬶青柳曾我」第二番目大詰〔作詞〕河竹新七〔太夫〕常磐津兼太夫〔作曲〕二代岸澤古

戻す。曲・振とも廢滅。

【兩顏月姿繪】常磐津〔別名題〕「鐘鳴朧寫繪」「荵關娘商人」「兩顏結栢樹」「兩顏月詠歌」「釣荵萠芽拙」「兩面水照月」「二面戀道芝」等。〔通稱〕「双面」「荵賣」「法界坊」〔初演〕寬政十年九月九日初日、江戸森田座「振袖隅田川」大切。〔作詞〕木村圓夫〔太夫〕二代常磐津文字太夫(一說に政太夫)〔作曲〕岸澤九藏(三代式佐)(一說に文字太夫の妻文字菊)〔振附〕二代西川扇藏〔內容〕歌詞は前曲の增補に過ぎないが、特に注目すべきはこの時

し、その優劣を種々の點から考察してゐるのは、鈴木春浦著「歌舞伎の型」（昭和二年刊）にも見られぬ特徴であらう。〔增田〕

舞臺監督 ぶたいかんとく 演劇〔英〕Stage Manager〔佛〕Regisseur〔獨〕Regie【意義】自己の藝術的才能によつて、演技の全體を管理し、自由に指揮する事の權力をもつもの。【解說】舞臺監督たる條件は、獨逸のハーゲマン（Hagemann）の語をかりていへば、精緻な審美的感情と至醇な趣味とであつて、即ち演

【參考】Carl Hagemann, Regie〔松居〕

舞臺裝置 ぶたいさうち 演劇【意義】作者若しくは舞臺監督（別項）と協力して、その要求する舞臺面の構圖を作り、大道具師の手によつて背景大道具等の基本を製作する職分。【解說】著名な畫家が臨時に依囑されてその衝にあたることもあるが、每興行急を要する場合が多いため、興行師は大抵斯道に手慣れたる人に依賴する。彼等は舞臺面の構圖をなす外、俳優の衣裳・持物・小道具等の考證選擇をもする

れたのは遺憾なことであつた。併し今の左團次、當時莚升は父の志をついで、新進の舞臺裝置家をその持座の明治座に招致した。その中には前記高橋勝造や肖像畫家として名聲のあつた德永柳洲、その他、夭死したが少壯時紐育に斯道の研鑽を遂げた北村金次郎もあつた。自由劇場（別項）の背景主任は岡田三郎助で、彼及び彼の友人門下がつくした功勞は多い。帝國劇場が和田英作と、山本芳翠門下で嘗て明治座によき背景を作つた北蓮藏とを起して舞

ものは種々あるが、後の「大日坊の葱賣」（垣衣戀寫繪）の直接の題材又は粉本となつた重要なものに三種ある。その一は、俗に「二人淺間」と呼ばれるもので、寶曆七年三月江戸中村座所演の常磐津節「妹脊塚松櫻」（淺間參照）である。この曲中の櫻姬對清玄を改作したのが野分姬對大日坊なのである。その二は常磐津節の「しのぶ賣」の最初と傳へるもので、寶曆十二年二月江戸中村座所演の「垣衣草千鳥紋日」（作者金井三笑）である。下河邊行平妹白菊、市川

雷藏）が、曾我十郎（市川武十郎、後の四代松本幸四郎）に戀慕し、祐成が奪はれし矢の根を伊豆次郎から取戻さんとして命を捨てるが、後に白菊の亡魂は葱賣の姿となつて祐成を慕ひ來る。遂にその妄執は傀儡師でくろく六兵衞實は京の次郎（四代市川團十郎）に乘移り、六兵衞は女の振をする。即ち葱賣の趣向はこれから取入れ、「私が在所は京の田舍の片ほとり」云云の歌詞もこれから出てゐる。その三は「隅田川」と「日高川」とを綯ひ交ぜにしたもので、明和二年三月江戸中村座所演の同じく常磐津節「双面花入相」（作者金井三平）である。舞臺は鐘が淵でお花（二代瀨川菊之丞）と刀屋半七（中村松江）の道行に眞砂庄司幽魂（四代市川團十郎）がお花と對の姿で現はれて半七を惑はし、曾我十郎（市川高麗藏、後の四代幸四郎）に幽魂の正體を見顯はされて鐘入になり、十郎の祈りになる等、ただ葱賣の趣向がないだけで、これが双面の葱賣に最も近く、その粉本ともいふべきである。その他富本節にも「花翫雙姿繪」（寶曆十二年四月市村座）や「彌生双俤櫻」（安永二年三月中村座）等の双面の趣向はあるが、要するにこれ等の常磐津物三種が土臺となつて出來たのが安永四年三月中村座上場の「嫦青柳曾我」第二番目大詰の常磐津節「垣衣戀寫繪」（後出）即ち中村仲藏の演じた大日坊の葱賣である。玆に「葱賣」としての形式を備へ、これが今日に傳存された「葱賣」の原作である。

【沿革】仲藏は、その後安永八年三月森田座で再演し、天明七年十二月大阪角の芝居で、小糸佐七・土手の道哲等の役名に直して宮薗節で演じた。この大日坊葱賣系統は八代森田勘彌・二代市川門之助・市川高麗藏（五代幸四郎）・三代坂東三津五郎等によつて繰返されたが、化政度に至つて廢滅した。一方、四代市川團藏によつて天明四年三月大阪角の芝居で、これを奈川七五三助に改訂增補せしめたのが、「隅田川續俤」（別項）であるが、所作名題は同じで、葱賣の所作も役名を法界坊・お組要助に替へただけで大同小異であつた。その後、京阪では團藏を初め、三代中村歌右衞門・五代市川團藏・嵐璃寛・先代市川右團治等を經て現右團治へ傳へられた。また四代團藏が寛政十年九月江戸森田座で「兩顏月姿繪」（後出）と題して法界坊の葱賣を演じたのが、即ち今日に傳はる「葱賣」の初演である。これは仲藏の「垣衣戀寫繪」の補作に過ぎないが、「葱賣」の集大成されたのと、曲が優秀なので「關の扉」（別項）「戾駕」（別項）と共に常磐津の三大名曲又は三大古典舞踊として傳存されたのである。その後江戸では、三代四代中村歌右衞門・市川市藏（後の初代鰕十郎）・二代關三十郎・三桝源之助・五代市川團藏・四代市川小團次・五代大谷友右衞門・四代中村芝翫等が演じた。【傳來】仲藏以後上演毎に多少の添削があり、流儀も豐後諸流に亙つて各種生れたが、內容は大同小異である。但し役名は、大日坊・法界坊の外に快了坊・願哲坊・清玄坊等に替へられたこともあるが、明治以後、法界坊が通稱になつた。又これ等に伴つて狂言名題・淨瑠璃所作名題も、その時々によつて一樣でなかつた。而してこれ等の大部分は廢滅し、今日に傳存するものは極めて少いが、役者の關係から江戸・京阪とも發達したので、曲節と形式とを異にするものが二三傳存されてゐる。

垣衣戀寫繪（中村仲藏）

【垣衣戀寫繪】常磐津〔別名題〕「過戀深山櫻」「色垣衣娘售」「垣衣草手向發心」等。〔初演〕安永四年三月十五日初日、江戸中村座「嫦青柳曾我」第二番目大詰〔作詞〕河竹新七〔太夫〕常磐津兼太夫〔作曲〕二代岸澤古式部〔振附〕中村彌八〔內容〕丁稚久松實は義經の公達經若丸（二代市川門之助）は戀仲の油屋娘お染（嵐雛治）と共に葱賣の姿に窶して隅田川の渡場に落ちて來る。渡守に身を替へた藝者お松實は阿古屋（二代山下金作）は二人を迎へ、經若丸の許嫁野分姫が惡僧大日坊の手にかかつて最期を遂げたのを聞き、形見の袱紗を火中して弔ふと、その煙に引かれて野分姫の亡魂（中村仲藏）が、大日坊の靈魂と合體し、お染と對の姿で現はれる。同じ姿のお染の中から正眞のお染を見分ける踊があり、この間、亡魂は男女二樣の恨言の振などがある。遂にお松は邪正をたださんと鯉魚の名畫を差付けると、亡魂は正體を顯はして釣鐘の中に入る。こゝへ敵方の討手（鱗形）が來るので、經若丸同勢三人は落ち延びる。亡魂は釣鐘から般若となつて現はれ、四天と道成寺と同じ立があつて、伊勢三郎義盛（三代大谷廣次）がこれを押戾す。曲・振とも廢滅。

【兩顏月姿繪】常磐津〔別名題〕「鐘鳴朧寫繪」「葱賣娘商人」「兩顏結柏樹」「兩顏月詠歌」「釣葱萠芽拙」「兩面水照月」「二面戀道芝」等。〔通稱〕「双面」「葱賣」「法界坊」〔初演〕寛政十年九月九日初日、江戸森田座「振袖隅田川」大切。〔作詞〕木村圓夫〔太夫〕二代常磐津文字太夫（一說に政太夫）〔作曲〕岸澤九藏（三代式佐）（一說に文字太夫の妻文字菊）〔振附〕二代西川扇藏〔內容〕歌詞は前曲の增補に過ぎないが、特に注目すべきはこの時增補された中の主要なところ、即ち法界坊の出の「白波の雲かあらぬか…」と「尾花招けばうなづく小萩…」や「過ぎにし梅の花見月…」の口說の件で、後に本曲の眼目となつたからである。內容は大差はないが、手が込んだのと鯉魚の一軸が觀音の尊像に替へられた事、亡魂が波間に消える等が改められた。また役名も改めた。法界坊の亡魂（四代市川團藏）、永樂屋丁稚幸吉實は吉田の松若丸（三代佐野川市松）、永樂屋娘お組（山下民之助）、渡守都鳥のおしづ（二代小佐川常世）等。曲・振とも傳存。但し振は後に改訂されたもの。

【備考】その他、常磐津節に「染分葱彩色」以外數曲があり、富本節に「褄褰跿振袖」（寛政三年二月市村座）や、「葱例跡色歌」（文化六年八月中村座）等があり、又、清元節に「隅田堤戀斎」（文政三年三月玉川座）や、「二面東寫繪」（同十一年九月河原崎座）等があるが、各曲とも廢滅した。現行の常磐津と竹本との掛合所演の初めは明治二年三月市村座の「兩顏水紫峰」であり、おなじく竹本と清元との掛合は明治五年八月村山座の「二面水移氣」が初めであつた。併し清元はその後廢滅したが、昭和二

年二月新橋演舞場で、中村吉右衛門が「双面惹娄繪」の名題で所演の際、現清元梅吉が、前出「東寫繪」によつて新に作曲して復活した。なほ「双面」の變態物には「尾上の鐘忍夜語」（常磐津）、「都鳥名所渡」（隅田川花御所染參照）、「垂帽子不器用娘」（清元―かさね道成寺）、「鹿子かさね小袖兩面」（清元）、「花雲鐘入月」（常磐津―九藏慈賣）、「鰯容顏花競」（常磐津―木魚）等があつた。又京阪での宮蘭・ぶんご・長唄の「慈賣」では「鐘淵夢の俤」「二面信夫の戀草」「忍捐戀寫繪」「戀衣花寫繪」「色忍良女售」等があつた。

【諸本】日本歌謠集成卷十・日本音曲全集（第三・八卷）・歌舞伎脚本集（日本名著全集）・日本戲曲全集（第九・十八卷）・世話狂言傑作集第一卷・春景淺茅原（根本）等所收。

【參考】劇代集二代櫻田左交○近世邦樂年表（常磐津・富本・清元）○江戸時代音樂通解町田博三○歌舞伎狂言往來 渥美清太郎 ○日本戲曲研究 守隨憲治 ○「垣衣戀寫繪」の以前と以後 秋葉芳夫（人間と無憂三ノ九）○法界坊研究（演藝畫報二ノ三）○法界坊見た儘（同上二ノ一〇）○紙屑籠（續燕石十種第二）

【秋葉】

富多貴草　ふたたぐさ　「春秋二季種」を見よ。

雙生隅田川　ふたごすみだがは　淨瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衛門　【興行】享保五年八月三日より竹本座　【諸本】七行八十一丁本、山本九兵衛板。十一行三十二丁本、菱屋治兵衛板。十二行二十八丁本、鶴屋喜右衛門板。近松名作集（日本名著全集）・近松世話淨瑠璃（帝國文庫）・近松門左衛門集（近代日本文學大系）所收。諸種の近松全集。【題材】明曆二年板の假名草子「角田川物語」三卷（近世文藝叢書第三）の改作。この假名草子は、謠曲「隅田川」をお家物風に改めたもので、これを大體その儘五段物にしたものに、山本土佐掾の正本「隅田川」（新群書類從第五）があり、外に享保頃の板行と思はれる繪入六段本にも、これと大同小異のものが二種あるが、所屬は不明である。佐渡七太夫の正本に「梅若」があるといふ

が未見。歌舞伎では元祿十四年三月中村座上演の「出世隅田川」（市川團十郎作）、同十五年三月山村座興行の「紅梅隅田川」、寶永元年二月山村座上演の「傾城角田川」、同二年四月市村座上場の「早咲隅田川」（津打九平次作）、同五年市村座興行の「愛兄隅田川」（同上作）、同七年二月森田座上場の「藪入隅田川」（中村清五郎・平田庄右衛門・光島七郎左衛門作）等。江戸では屢々行はれたが、何れも本作と直接の關係はない。

【梗概】〔初段〕（大序、志賀濱邊御普請場）吉田少將行房が、堀川院の命により山王權現の大鳥居を建立するに當り、家老勘解由兵衛は竊かに常陸大掾百連と通じて、天狗の栖家といはれてゐる比良が嶽の木を伐る。百連は行房の小舅であるが、吉田家を横領せんと謀つてゐる。（切、行房館）御臺所は自分と同形の姿となつて現はれる比良の天狗に惱まされる。行房は天狗を討たうとして、過つて御臺所を刺し殺し、剩さへ愛妾班女の腹に出來た松若を天狗に攫み去られる。〔二段〕（序、京極通）途上にて圖らずも行き逢つた百連・景逸は、行房が天子から預る武帝筆を盜む密議をする。（切、行房下館）景逸は松若と雙兒なる梅若を唆かして御物の鯉に點睛せしめると、忽ち鯉は躍つて池中に入る。これを見た忠僕軍介は直に水中に飛び込み、鯉と格鬪の末捕へてその眼を潰せば又元の書中にかへる。併しこの騒ぎの中に梅若は父の勘氣を恐れて家出し、行房は景逸の計略に陷れる。〔三段〕（序、大理寮門前）行房の執權縣　權正武國は班女を伴ひ、檢非違使の別當大江匡房が參內の途を要して吉田の家督を行房の後家に繼がせたき趣を訴訟する。（中、記錄所）玉座に續いて匡房を初め三公九卿居竝ぶ白洲に於て、百連と武國と對決の結果、武國方の勝訴となるが、班女は重なる精神の激動に逆上して狂亂する。（切、猿島の惣太宿）梅若は誘拐せられて東の端隅田川の邊に住む人買猿島の惣太の手に渡り、邪慳なる惣太の折檻にあつて横死する。惣太は實は行房の舊臣淡路七郎俊兼で、彼は十年程前費消した公金十萬兩を償つて主家に復歸したい一念から、人商人となつてゐたのである。そこへ圖らずも武國が訪れるが、その話の中に、今自分が殺した子が故主の幼君と知り、自責に堪へず、自ら腹を切り、腸を摑んで空中に拋ち、天狗と化現する。〔四段〕（序、多度の浦）軍介は槍を振りながら梅若の行方を尋ね、讃岐の方へと志す途中、大道に晝寢をしてゐると一人の山伏が現はれて軍介を嬲り、こゝに兩人の力比べとなるが、最後に一陣の天狗風吹き來つて軍介を東の方へ送る。山伏は實は俊兼の化現せる天狗である。（中、狂女道行）狂亂姿の班女は、梅若の行方を尋ねて東へ下るが、その道中俊兼の靈は山伏法界坊と變じて旅路を慰める。（切、隅田川原）班女は隅田川の渡舟の中で女渡守（俊兼の後家唐糸）の物語から梅若の横死を知り、一本柳の下なる我が子の塚を弔ふ。折しも鬢鬢く雲中より俊兼の化現せる天狗が松若を伴ひ來つて班女の手に渡す。〔五段〕（大切、北白河堤）百連が大幕を打たせ花火見物の酒宴の所へ班女と唐糸が花火賣に身を窶し來り、武國・軍介等と力を協せて百連等一味を討ちたほし、吉田家は再興する。

【構想】幻妖味の著しい作品である。【影響】「隅田川續俤」「双面」「梅若九一代記」「墨田川梅柳新書」等の各項參照。【參考】近松名作集解題黒木勘藏○近松全集第十二卷解題 藤井乙男　〔高野(正)〕

再贈稲掛大平書 ふたたびいなかけおほひらにおくるふみ

歌論書　一篇【著者】村田春海【別名】「稲掛の君の御返事に更に答へ參らす書」【成立】寛政十一年十月七日附、大平に贈つたもので、續歌學全書第二編に收められて出版された。「贈稲掛大平書」「答村田春海書」及びこの書の三部を併せて、「雲井の雁」と題した本もあるが、それは「贈稲掛大平書」(別項)の冒頭「雲井の雁のゆきかひは云々」とあるのをとつて名づけたものである。【解説】大平の春海に答へた書は、大平自身の考へばかりでなく、宣長その他知友の異見を述べてゐるのであるが、春海が、眞淵の考へは花山・一條頃までを上代風として必ずしも萬葉に倣ふといふやうなわけでなく、もつと自由の立場にゐたものであると解することに對する質疑等が、その中心をなすものと見てよいが、これに對し、この書に於て春海は、眞淵の歌には、初期(五十以前、荷田翁の敎のまゝに從ひ未だ古へ振を唱へなかつた頃)、中期(五十すぎから六十餘までで、作歌に專心し、古歌のすぐれた事を思ひあきらめた時代)、末期(死ぬ六七年頃までで、萬葉の解釋に心を碎き、人麿の歌も巧を用ひたとして、その以前を慕はれた時代で、作歌には專心しなかつた時代)の三期の變遷があるが、自分はこの中期の敎をよしとして從つてゐるといひ、花山・一條までをふくめて大きく上代風と考へることは翁の考へに決してそむかないとして、「贈稲掛大平書」に於てのべた要點を更に反覆詳説し、自身の「古今集」崇拜の立場に眞淵の考へを結びつけて利用してゐる。宣長に對しても、近體古體と分ちよむ態度を難じてゐる。「新古今」の弧派「萬葉」の摸倣を排斥して、花山・一條頃に至る大よその風を學び、自己獨特の想を加ふべしといふ意見で、眞淵の眞意こゝにありとしてゐる。【批評】春海が眞淵の説をかく解したことは、眞淵の眞意を得たものとはいはれない。彼の好尙は、眞淵の上代主義を、より自由に廣く解釋せしめ、萬葉主義を古今主義に改變せしめた。その功罪は論ぜず、一つの態度として認められなければならない。かゝる書簡に於ても、さすがに文章のすぐれたものがあり、大平の文のねちねちして而も自己の確實な主張をもたないのとは格段の差である。この書は春海の歌論をうかがふべきものであると共に、鈴屋派・江戸派の交渉に關しても暗示するものがある。宣長の「美濃家苞」(別項)に對して、春海は「さゝ栗」をあらはして非難し、鈴屋門の眞國が「橘平歌評」をかいて、千蔭・春海の歌を難じ、石塚龍麿が「歌談斥非」をあらはして、春海の歌學説を非難し、齋藤彦麿も數種の著書を著はして春海を攻撃してゐる等、同門に出た最大の學者宣長と、文筆に最もすぐれてゐた春海とは、異見を持して各々對峙した觀があつたのである。【參考】村田春海の歌風及び歌論 佐佐木信綱(和歌史の研究)　〔藤川〕

再奉答金吾君書 ふたたびきんごのきみにこたへまつるのしよ

歌論書　一卷【著者】賀茂眞淵【成立】延享元年【諸本】賀茂眞淵全集所收【解説】眞淵の「國歌論臆説」(別項)に對し、宗武は「臆説剩言」(別項)をかいて意見を述べた。それに對してその批評に答へると共に、臆説を補つたものが本書である。宗武が道徳的立場から我が國にも古は教戒の歌のあることを論じたのに對しては、漢詩の如く教戒の意をあらはに詠んだものは少く、おのづからに感じて教化の德ともなるのであるといひ、宗武が久目歌や五節の舞を淫靡亡國に近しと云ひ、その廢れたことを喜んでゐるに對し、和漢の例をあげてその然らざるを說き、支那の淫靡亡國の音とは異つた點をのべ、且つ近世俗曲の卑しいことを歎いてゐる。こゝにも彼の崇古主義を明かに見ることが出來、漢學の素養の淺くなかつたことをあらはしてゐる。世をのがれて靜かに歌をたしなむが如きは、利己的であるとして許容しなかつた宗武の意見に對しては、それも勿論欲には違ひないが、世に害のない欲で、而もさうした人はごく稀であるといふ點をあげて辯明をしてゐる。神代はなぞらへ言つたことが多く、二神の唱和を歌の初めとすることはどうかといふ宗武の考へに對しては、人を導き教へるためには、みだりに古書を疑ふべきでないといふやうな見解の下に反對してゐる。なほ部分的には兩者の見解に多少の相違がみられるが、宗武が道徳的立場に立つて理を重んずるに反し、眞淵が人情を重んじた點が最もよくみられる。凡そ理ばかりで天下は治まらぬ。詩は人のまことをのべ出すので、その實情皆理に合ふといふわけにはゆかぬ。理の外に大切なのは人情で、理ののみで詩は論ぜらるべきでないとの立場から、理に走つた漢詩のあやまりを指摘し、和歌のまさつた點にも觸れてゐる。　〔藤川〕

双蝶々曲輪日記 ふたつてふてふくるわにつき

淨瑠璃　九段　世話物【作者】竹田出雲・三好松洛・並木千柳【名稱】關取の濡髮名取の放駒と角書がある。雙蝶々は、濡髮長五郎・放駒長吉の兩人の謂ひで、七段目道行に「汝も長、われも長、二人合せて蝶々とまれ云々」と言ふ所に由來する。【興行】寛延二年七月二十四日、竹本座。【諸本】世話淨瑠璃大全上卷・竹田出雲淨瑠璃集(續帝國文庫)・淨瑠璃名作集(日本名著全集)下卷等所收。(歌舞伎臺帳の一つは日本戲曲全集卷二十九に收む)【題材】山崎與五郎・藤屋吾妻の件は、近松の「山崎與次兵衞壽門松」(別項)を、濡髮長五郎・放駒長吉の關係は、西澤一風・田中千柳の「昔米萬石通」(享保十年正月豐竹座・世話淨瑠璃大全上卷所收)をそれぞれ粉本としてゐる。濡髮長五郎に就いては「攝陽奇觀」卷之二十五ノ下「關取濡紙長五郎の話」の條に、「武攝雙蝶祕錄」なる書を引用して、次の如く述べてゐる。

上州沼田城主土岐丹後守殿(享保中大阪御城代)、江戸家來岩村長右衞門といふもの故あつて浪人して城州八幡に蟄居し郡倉與惣兵衞と改名して手跡の指南を業とす。其子長五郎生得角力を好み同所荒石斧右衞門といふ角力取の養子と相成荒石長五郎と名乘りけり(八幡の荒石斧右衞門は其頃角力仲間の親仁分のよし)。此長五郎は若氣の血氣に喧嘩口論を好み平常に紙を水にて濕し頭を手拭にて捲く尤これ用意の宜き也。常に濡帯を額にあつる故に荒石といふ名乘はあれ共諸人ぬれがみ〳〵とぞ呼びける(濡髮にあらずぬれ紙也)。土岐丹後守殿大坂御城代の節濡紙長五郎難波裏にて服部惣左衞門といへる侍と喧嘩をなし、つひに右惣左衞門を殺して親里八幡に身を潜みけれども天網遁れがたく入牢に及ぶ。これ享保中の事也云々(「附色餘錄」にも一說を揭げてゐる)。

又放駒長吉に關しては事實の徵すべきものがないが、「南水雜志」卷一(浪速叢書第一所收)や、「南水漫遊」初編二の卷(新群書類從第一所收)に

若干の記述が見える。吾妻と與五郎の巷説は元祿の流行唄にも歌はれた名高いものであるが、これについては「壽門松」參照。（「落葉集」卷四(山崎與次兵衛)並に「澪標」「傳奇作書」後集等に詳しい）。

【梗概】〔第一 若瀨の居續に相圖の笛賣〕（浮瀨）山崎與五郎は馴染の吾妻と、その姉女郎で南與兵衛の敵娼都とを呼んで遊んでゐる。吾妻には西國侍平岡郷左衛門、都には與五郎の惡番頭權九郎が執心で、身請の話が進んでゐるため與五郎達は焦れる。山崎家の家來筋で今は笛賣に落ぶれてゐる南與兵衛が來て平岡等に辱しめられる與五郎を救ふ。（淸水觀音）與兵衛は平岡や權九郎・幇間佐渡八等に襲はれるが、傘をさして舞臺から飛び降りて逃れる。〔第二 相撲の花扇に異見の親骨〕（高臺橋相撲前）濡髮と飛入の放駒との勝負があるので、與五郎や吾妻・都達は川舟で來かゝる。山崎與次兵衛が來て、手代庄八にそれとなく伜與五郎の異見をする。濡髮は平岡が後押しする素人角力の放駒に勝を讓つて、平岡の吾妻請け出しを遲らせるやうに賴むが放駒は拒絕する。〔第三 揚屋町の意氣づくに小指の身がはり〕（新町井筒屋） 幇間の佐渡七が何者かに殺され、死體の口に小指が嚙み切られてゐるので、それを手掛りに犯人が探索されてゐる。吾妻は加害者の南與兵衛を已が寢所に匿まひ、且つ都に嫌はれてゐる番頭權九郎に心中を見せよと欺いて小指を切らせるので、權九郎は犯人と見られて曳かれる。與五郎と吾妻は平岡に辱しめられるが、濡髮・都・南與兵衛の働きで救はれ、都・與兵衛は駈落ちする。〔第四 大寶寺町の遣引に兄弟のちなみ〕（大寶寺町搗米屋） 長吉の姉おせきは弟の放埒を矯め直さうと苦肉の策を以て諫めるので長吉も改悟し、折から遺恨を晴しに來た濡髮と兄弟の契を結ぶ。吾妻・與五郎の急を聞いて濡髮は駈け出す。〔第五 芝居裏の喧嘩に難波のどろ〲〕（難波芝居裏） 廓を遁れた吾妻と與五郎が、平岡郷左衛門等に捕へられて、已に危い所へ濡髮が駈けつけ、平岡初め四人を殺し、後事を長吉に託して落ち延びる。〔第六 橋本の辻駕籠に相輿の駈落〕（橋本・治部右衛門住家） 鬪所破りをして遁れた與五郎は、吾妻と相乘りの駕籠で訪ねて來て、里歸りをしてゐる嫁のお照に匿まうて吳れと賴む。お照とその父治部右衛門と吾妻とは、夫々の義理を立てて結局與五郎はお照への去り狀を書いて匿まはれる事となり、吾妻は去り狀を預る。山崎與次兵衛がお照を迎へに來て、舅同志の喧嘩になるのを、駕籠舁の甚兵衛がその場を預り、吾妻にその實父であつた事を明かし、與五郎を思ひ切れと異見する。義理に迫つて自害しようとする吾妻を治部右衛門は留め、重代の刀を賣つて身請けしようと言ふ。法體となつた與次兵衛は、山崎淨閑と名を改め、與五郎に已が名を繼がせる事となり、二人の舅は和解する。代官所よりの呼出しに兩人が出かけた後へ廓からの追手が來るので、吾妻・與五郎は戶棚に隱れると、放駒が役人に化けて諸道具に封印をして危急を救ふ。戶棚から出た與五郎は、心痛のため狂氣してゐる。〔第七 道行菜種の亂咲〕狂ひ行く與五郎を吾妻と長吉とが留める所へ、濡髮が來て、萬事を長吉に託して袂を分つ。〔第八 八幡の親里に血筋の引窓〕（南與兵衛住家） 與兵衛の母と嫁のおはや（都）が明日の放生會と月見の用意をしてゐる所へ濡髮が訪ねて來る。濡髮は夙く養子に遣られたこの家の母の實子で、母は與兵衛の父の後妻に入つたのである。南與兵衛はこの度父の職を繼ぎて郷代官に取立てられ、濡髮捕縛の命をうけて歸つて來る。二階から覗く濡髮の顏が手水鉢に映るので、女房おはやは引窓を閉める。與兵衛は夜の探索は自分の役目と立ち上るので、女房は又引窓を明ける。母は與兵衛の所持する濡髮の繪姿を賣つて吳れと賴むと、與兵衛は大小を脫し、丸腰となれば以前の町人、商人の代物ゆゑ賣らうと言ひ、日も暮れるので河內への間道をそれとなく濡髮に知らせて出て行く。濡髮は義に感じ、その手に捕へられようとするのを母は止めて前髮を剃つてやり、親讓りの頰の黑子のみは除き兼ねてゐると、與兵衛は路銀と記した金包みを投げて黑子を潰す。義理ある息子與兵衛の情に感じた母は、引窓の繩で濡髮を縛つて與兵衛の手柄にさせようとする。與兵衛が繩尻を切ると、引窓が明いて月光が射し込むので「夜が明けた、身共が役目は夜ばかり」と濡髮を落してやる。〔第九 觀心寺の隱家に戀路のまぼろし〕（幻竹右衛門住家） 濡髮を慕ふお虎の父竹右衛門は、捕手が此處へも迫るので、濡髮を落さうとする。放駒が來て吾妻・與五郎の一件が目出度く落着した事を告げ、自ら濡髮と名告つて捕方を惱ませる。（觀心寺）南與兵衛の計らひで、放駒・竹右衛門は許され、濡髮は大阪へ曳かれる。

【脚色】作者は、「菅原傳授手習鑑」と同じ連名で當代最高の顏觸れである。「菅原」が近松の作に負ふところ多かつたやうに、本曲も亦その新町の段・芝居裏の段・橋本の段を「壽門松」から示唆されてをる外、搗米屋の段・八幡の段の多くは「萬石通」の上・中の卷から脫化してゐる。ただ全曲の焦點たる第六及び第八に於て、前者では、武士と町人との二人の舅、遊女と侍の娘、この四人のそれ〲異つた立場と異つた性質との義理を描き分けてそれを反撥させてゐるところ、後者では老母とその實子と義理ある嗣子と、その嫁との情と義とを一個の「引窓」を媒として極めて技巧的に描き出してゐるところに、それ〲優れた手腕を示してゐる。近世社會に於ける形式的な作爲的な物の考へ方を、當代演劇は特に誇張して取上げてゐるが、本曲の如きはそれを最も極端に技巧化したものの一つである。「壽門松」から「萬石通」を經て本曲に及ぶ脚色の展開、例へば元祿風の寬濶な俠妓としての一面を備へた吾妻が、本曲では殆ど義理立てする女としてのみ描かれてゐる點に見出される。感情の自由が自づから生ずる義理ではなくして、義理を表面に押立てて表現しようとする態度が生じて來てゐる。人生觀そのものが技巧的となつて來らざるを得なかつた時代的特性の一つの現はれである。

【影響】初演の際は、「夏祭浪花鑑」（別項）の類作で團七・德兵衛を前髮にしたやうな狂言、といふ世評で甚だ不入りであつたが、後、歌舞伎で行はれるに及んで逆に操でも繰り返されるに至つた（淨瑠璃譜）。歌舞伎に入つたのは同年八月三日初日、京の嵐三右衛門座（中山新九郎の濡髮、藤川平九郎の放駒）が最初で大當りであつた。大阪では寶曆三年五月五日初日角芝居（藤川平九郎の濡髮、三桝大五郎の放駒。八幡の段まで出る）、江戶では安永三年九月九日初日中村座（中村仲藏の濡髮と治部右衛門、大谷廣治の放駒と南與兵衛）が初めてであらう（「一蝶邯鄲枕」「南水漫遊」初編「文七一代狂言紀」「大歌舞妓外題年鑑」「歌舞妓年代記」等參照）。歌舞伎で盛んに行はれ始めたのは、上方と江戶とでは少しく理由を異にはするが、大體に於て相撲狂言の流行の機運に乗つた爲めで、花形役者が兩名揃つた時には恰好な出し物であつたからである。今日では「引窓」の件が屢々演ぜられ、稀に相撲場前が行はれる。鴈治郎・吉右衛門が東西を代表する十次兵衛役者とされて居り、相撲場は現歌右衛門が家の藝としてこれを演じる。なほ歌舞伎では多くの書替狂言を生じてゐる。

【參考】攝陽奇觀 ○南水漫遊（小野晉齋）○傳奇作書附錄（花相撲蝶々紋日の話）及び後集（山崎與次兵衛吾妻の話）○脚色餘錄（濡髮長五郎の事實）○棧敷から書齋へ（伊原青々園）○淨

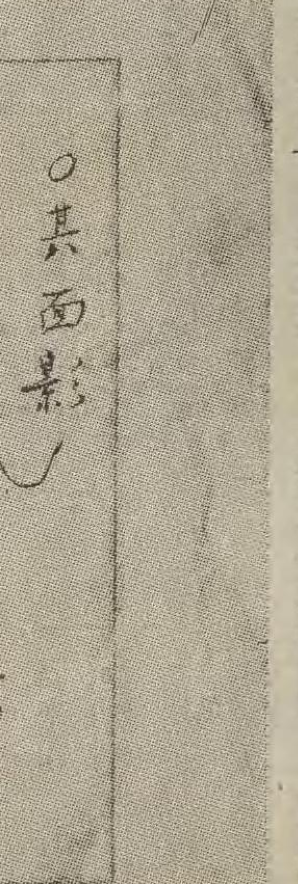
士官學校に三度入學を志願したが、視力に缺點があつて志を果さなかつた。翌年五月舊外國語學校露語科に入學した。上級に矢崎鎭四郎（嵯峨の屋）がゐた。同十八年舊外國語學校は東京商業學校に合併せられたので、翌年一月同校露語科を退いて文學に志し、又初めて春廼屋朧（坪内逍遙）に會つた。彼が文學に入る第一歩である。この頃よりゴーゴリ、ツルゲーネフなどの飜譯を試みた。翌二十年（二十四歲）七月、二葉亭四迷の筆名で、「浮雲」（別項）の第一編を發表、一躍文名を得た。翌年同第二編

くより文學に慊らず、何事をか畫策して露西亞行を思ひ立ち、同四十一年六月一日東京を出發した。併し不幸にして露都ペテルブルグにあること一年にも滿たずして病を得、四月五日歸朝の途に上つた。伯林・倫敦を經て海路歸航の途中、病勢次第に募り、五月十日遂に賀茂丸にあつて、ベンガル灣洋上に於て逝去した。

【著作】〔全集〕二葉亭全集四册（東京朝日新聞社刊）○同縮册版三册（東京朝日新聞社・博文館刊）〔小說〕浮

に日本に於けるエスペラントの最初の文獻である。）

【批評】最初は軍人を志し、後には外交官たらんとした彼が假初に心を寄せた文學によつて身を立て文學者として生涯を終つたといふことは誠に不思議な運命であつたといへる。而も彼が明治文壇に殘した足跡は甚だ偉大なるものがある。明治二十年代に早くも近代露西



れ、死體の口に小指が噛み切られてゐるので、それを手掛かりに犯人が探索されてゐる。吾妻は加害者の南與兵衞を己が寢所に匿まひ、且つ都に嫉はれてゐる番頭權九郎に心中を見せよと欺いて小指を切らせるので、權九郎は犯人と見られて曳かれる。與五郎と吾妻は平岡に辱しめられるが、濡髪・都・南與兵衞の働きで救はれ、都・與兵衞は駈落ちする。【第四大寶寺町の遣引】（大寶寺町搗米屋）長吉の姉おせきは弟の放埒を矯め直さうと苦肉の策を以て諫めるので長吉も改悟し、折から遺根を

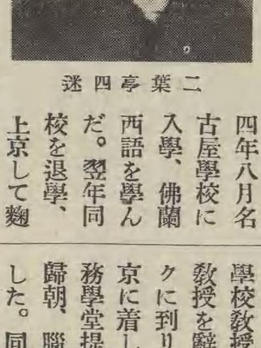
乘つた儘で、花形役者が兩名揃つた時には恰好な出し物であつたからである。今日では「引窓」の件が屢々演ぜられ、稀に相撲場前が行はれる。鳶治郎・吉右衞門が東西を代表する十次兵衞役者とされて居り、相撲場は現歌右衞門が家の藝としてこれを演じる。なほ歌舞伎では多くの書替狂言を生じてゐる。

【參考】攝陽奇觀 ○南水漫遊（小野屋膏藥） ○傳奇作書附錄（花相撰蝶々紋日の話）及び後集（山崎與次兵衞吾妻の話） ○脚色餘錄（濡髪長五郎の事實） ○棧敷から書齋へ（伊原青々園 ○淨瑠璃名作集解說 黒木勘藏 ○歌舞伎（五一・七九、羽左衞門・鳶治郎の型）

【折藤】

二葉集（ふたばしふ）「藤の實」を見よ。

二葉亭四迷（ふたばていしめい） 小說家 【本名】長谷川辰之助 【生歿】元治元年二月三日、江戸市ケ谷尾張藩上屋敷内に生れ、明治四十二年五月十日歿す。享年四十六。【墓地】東京染井墓地 【家系】父は長谷川吉數、代々尾張藩士であつた。【閲歷】明治維新に際會し、明治元年十一月母に伴はれて名古屋に移り、同四年八月名古屋學校に入學、佛蘭西語を學んだ。翌年同校を退學、上京して麹町に住した。同八年五月、父が島根縣吏に任ぜられたので、連れられて松江に移り、同地の松江變則中學校に入り、傍ら相長舍に入つて漢學を學んだ。同十一年三月、同校を退いて上京、祖母と共に四谷に住み、森川塾に數學を、濟美黌に漢學を學んだ。同十三年、陸軍

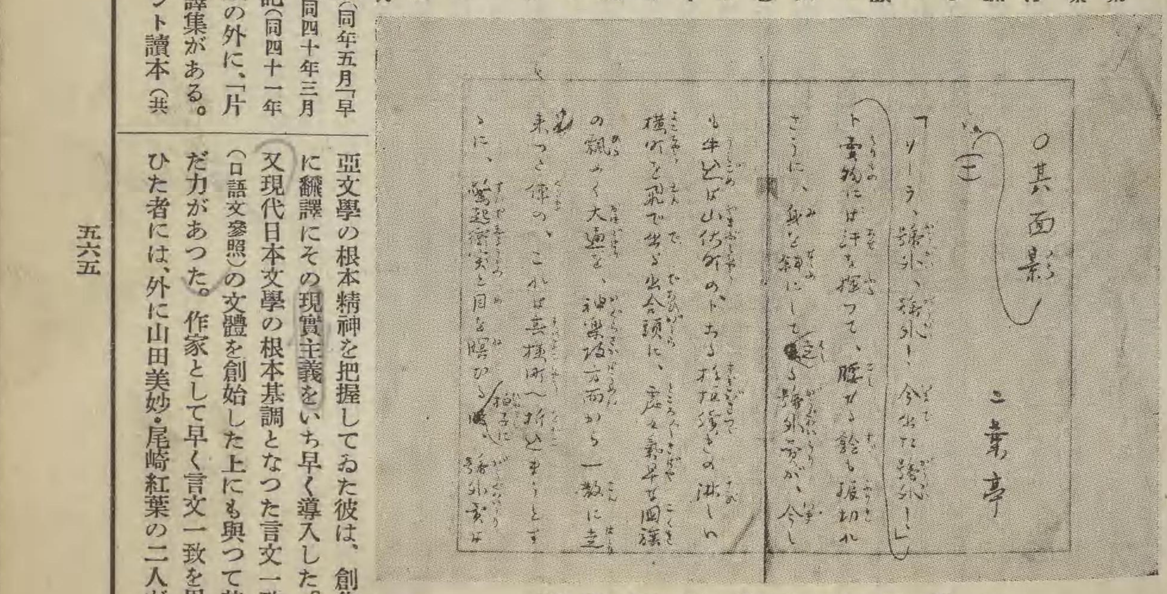


二葉亭四迷

士官學校に三度入學を志願したが、視力に缺點があつて志を果さなかつた。翌年五月舊外國語學校露語科に入學した。上級に矢崎鎭四郎（嶸峨の屋）がゐた。同十八年舊外國語學校は東京商業學校に合併せられたので、翌年一月同校露語科を退いて文學に志し、又初めて春廼屋朧（坪内逍遙）に會つた。彼が文學に入る第一歩である。この頃よりゴーゴリ、ツルゲーネフなどの飜譯を試みた。翌二十年（二十四歳）七月、二葉亭四迷の筆名で、「浮雲」（別項）の第一編を發表、一躍文名を得た。翌年同第二編發表、續いて飜譯小說「あひびき」（別項）及び「めぐりあひ」を發表した。又この間、「國民之友」誌上に評論の筆を執つた。同二十二年八月内閣官報局に出仕し、英字新聞及び露字新聞の飜譯を擔任した。同年「浮雲」第三編を發表、又公務の傍ら、「出版月評」（別項）を編輯した。同二十九年十月、飜譯集「片戀」を出版、翌三十年「うき草」（別項）を「太陽」に譯載した。同年十二月官を辭す。同三十一年十一月海軍編修書記に任ぜられ、同三十二年東京外國語學校教授に任ぜられた。同三十五年五月同校教授を辭して旅に出で、先づウラジオストックに到り、更にハルビン・旅順等を歷遊して北京に着し、舊友川島浪速の推輓により京師警務學堂提調となつた。翌年七月提調を辭して歸朝、腦貧血症を病み、東京市外田端に靜養した。同三十七年三月、大阪朝日新聞社に聘せられ、東京出張員となつた。その後、東京朝日新聞・「早稻田文學」等に多くの創作飜譯等を發表し、またエスペラントのために盡すところがあつた。「其面影」「平凡」（各別項）を發表したのもこの間のことである。かくて彼は文學者として一家をなしたのであるが、早くより文學に懲らず、何事をか書策して露西亞行を思ひ立ち、同四十一年六月一日東京を出發した。併し不幸にして露都ペテルブルグにあること一年にも滿たずして病を得、四月五日歸朝の途に上つた。伯林・倫敦を經て海路歸航の途中、病勢次第に募り、五月十日遂に賀茂丸にあつて、ベンガル灣洋上に於て逝去した。

【著作】【全集】二葉亭全集四册（東京朝日新聞社刊） ○同縮册版三册（東京朝日新聞社・博文館刊） 【小說】浮雲 ○其面影 ○平凡（各別項）等。【飜譯】あひびき（別項） ○めぐりあひ（明治二十一年十月「都の花」創刊號、ツルゲーネフ作） ○片戀（別項） ○肖像畫（同三十年一月より三月まで「太陽」、ゴーゴリ作） ○夢がたり（同年四月「文藝倶樂部」臨時增刊、ツルゲーネフ作） ○猶太人（同三十一年一月「國民之友」、ツルゲーネフ作） ○うき草（別項） ○くされ緣（同年十一月「文藝倶樂部」臨時增刊、ツルゲーネフ作） ○四人共產團（同三十七年二月「文藝界」、ボタアペンコ作） ○四日間（同年七月「新小說」ガルシン作） ○露助の妻（同三十八年一月「新小說」、ガルシン作） ○猶太人の浮世（同年二月「太陽」、ゴリキー作） ○ふさぎの蟲（同三十九年一月より三月「新小說」、ゴリキー作） ○むかしの人（同年五月「早稻田文學」、ゴーゴリ作） ○狂人日記（同四十年三月より五月「趣味」、ゴーゴリ作） ○血笑記（同四十一年七月單行、アンドレーエフ作）等。以上の外に、「片戀」「つゝを枕」「カルコ集」等の飜譯集がある。

【雜著】エスペラント ○エスペラント讀本（共



二葉亭四迷原稿（其面影）

に日本に於けるエスペラントの最初の文獻である）。

【批評】最初は軍人を志し、後には外交官たらんとした彼が假初に心を寄せた文學によつて身を立て文學者として生涯を終つたといふことは誠に不思議な運命であつたといへる。而も彼が明治文壇に殘した足跡は甚だ偉大なるものがある。明治二十年代に早くも近代露西亞文學の根本精神を把握してゐた彼は、創作に飜譯にその現實主義をいち早く導入した。又現代日本文學の根本基調となつた言文一致（口語文參照）の文體を創始した上にも與つて甚だ力があつた。作家として早く言文一致を用ひた者には、外に山田美妙・尾崎紅葉の二人が

あつたが、二葉亭の「浮雲」が最も早く、且つ又後來の作家に影響するところが最も多く、この點は單に言文一致の先驅者としてのみならず特筆すべき所である。併し二葉亭がかく美妙・紅葉に一歩を先んじたといふことは、この言文一致の文體を單にその藝術表現の技巧上の試みとして用ひたのではなくて、內に歐洲近代文藝に於ける現實主義の根本精神をしつかりと把握してゐた爲めであつたと考へられる。而してこの言文一致體の創始こそ、在來の日本文學を解放して現代文學を生み出したその母胎に外ならないのである。二葉亭の現實主義の傳統は、プーシュキン、ゴーゴリ以來の十九世紀の露西亞文學の根本精神であるところの、所謂ルシアン・リアリズムで、彼はその正統なる繼承者であり移植者であつた。「浮雲」以下の創作に、この精神の覗ひ得るは勿論であるが、殊にその飜譯に於て驚くべき成果を示してゐる。「あひゞき」「めぐりあひ」「片戀」などの諸篇は、測り知れない影響を後來の作家達に與へてゐる。國木田獨歩や田山花袋が告白してゐるやうに、彼等の文學はこれ等の諸篇の感化の下に成長したのであつた。但し創作に於てはその半面に江戶末期の俗文學以來のユーモア・皮肉・餘裕、或は低徊趣味とも見るべき要素をも含んでゐるが、これは明治の新文學がなほ混沌たる黎明期にあつた當時としては寧ろ當然のことであるが、なほ且つ「浮雲」の如きは、言文一致の最初の小說といふことを外にしても、明治小說史中の注目すべき作たるを失はない。殊にこの作に於ける眞摯な科學者のやうな態度は、その作中に現はれた心理描寫と共に注意さるべきものであらう。かうした傾向は彼の「其面影」や「平凡」には見られなくなつてしまつたが、これは彼の文學に對する熱情が冷めて來てゐたことを立證するものではなかつたらうか。內田魯庵は次のやうに言つてゐる。「二葉亭は青年時代ゴンチャーロフやドストエフスキーに傾倒して志を文學に立てながら、其の後文學に慊らなくなつたのは、文學の避くべからざる遊戲氣分に堪へられなかつたからである」と。これ程の人生に對する眞劍な考へ方が彼を文學に安住させなかつたのであらう。年少の頃から抱いてゐた政治的な、或は社會的な關心は、中年になつても失はれず、その上更に佛蘭西實證派哲學に興味を持ち、特にオーギュスト・コントの思想に傾倒し、その他ダーヰン、スペンサー、モズレー及びロンブロゾー等の著書をも愛讀した。彼が「文學は男子一生の事業に非ず」と言つたと傳へられるが、かうした複雜な思想や生活を深く觀察して始めて理解し得る言葉であると思ふ。〔以上武藤〕

〔飜譯家として〕その活動は自然に三期に分れてゐる。明治十九年、初めてゴーゴリの「オブロモフ」やツルゲーネフの「父と子」の飜譯を試みてから、二十一年「あひゞき」「めぐりあひ」を出したまゝ飜譯文學家として活動しなくなつたのが第一期、明治二十九年十月「かた戀」（飜譯集）で文壇に返り咲してから三十年から三十二年に亙つて「肖像畫」「夢がたり」などを發表し、專ら飜譯家として文壇的に活動してゐた時代が第二期、明治三十七年から四十一年入露前に亙つて「四人共產團」「つゝを枕」（飜譯集）、「カルコ集」（飜譯集）、「血笑記」等を公けにしたのが第三期に當る。第一・二期は、大部分はツルゲーネフ、それにゴーゴリ、第三期に及んでアンドレーフ、ゴリキイ、ガルシン、その他の現代作家が殆ど全部を占めてゐる。彼は「余が飜譯の標準」で、意味ばかりでなく、原文の文調を重視しなくてはならぬと言つてゐるが、最初はこの態度を固執した爲め却つて成功しなかつた。そこで原作の詩想を創作的に飜譯してみようとしたが、それも思ふやうに出來なかつたと告白してゐる。第三期に及んでは自ら「譯しなぐる」と卑下してゐる程、自由な態度になつてゐるが、しかしそれでも矢張り鏤心刻苦してゐたのである。そしてその飜譯は、文壇に對する影響の、遙かにその創作の上にあるのであつて、「あひゞき」の一篇が國木田獨歩・田山花袋・島崎藤村・蒲原有明・松岡國男などに對して、如何に清純な藝術的開眼を與へたかは、これ等の人々自らがこれを證明してゐるところである。また後の「かた戀」「うき草」などの諸篇が當時勃興しつつあつた自然主義文學の先驅者達に如何程の感激と奬勵を與へたかは、田山花袋の告白を讀むとよくわかる。若し二葉亭に創作がなかつたとしても、彼の存在はその飜譯のみによつて文學史上沒却し得ぬものであつた。なほ又明治飜譯文藝史上からいつても二葉亭は空前の業績を遺した。明治の飜譯文藝界は有體にいつて二葉亭以前と二葉亭以後とに分たれるほど彼の業績は大きい。彼は言文一致を飜譯文藝に移入する事によつて、こゝにも技術的革命をもち來した。彼の飜譯によつて明治の飜譯文藝は創作と同等乃至より以上の地位を得たのである。その飜譯の態度は後來の良心ある飜譯家に規準として墨守された。語學力・學識・藝術的才分、この三資格を完備した彼は、やがて飜譯文藝家の理想的權化として仰がれた。その教養に多少の戲作的臭味のある分子があり、個性の著しい性格だけに原作を二葉亭化するといふ一部の批難を負ひつつも、彼の生涯は明治の飜譯文藝界に獨歩する功を殘した。〔以上柳田（泉）〕

二葉柳（ふたばやなぎ）　川柳集　一册　【諸本】川柳寺雀羅の古川柳叢書發行所刊行の飜刻本がある。【解說】柳亭種彥の選句を收錄した小册子で、選句には甚だしい狂句が多い。〔西原〕

二見眞砂（ふたみまさご）　歌謠書　橫本一册

【名稱】伊勢音頭と角書がある。伊勢音頭の集なるがゆゑ、二見浦の眞砂の美しく且つ數多いことに譬へて書名としたものであらう。【諸本】日本歌謠集成卷七・同附錄・近代歌謠集所收。

【解說】一枚の表裏に、一曲の歌詞が全部收められてゐて、この一枚宛の歌を數多く集め、一部の寄本としたものである。故に一册の內容・歌數・順序等は一定してゐない。諸本によつて異る。少きは二三十曲のものがあり、多きは百四五十曲を一册とした。刊年は不詳であるが、各一枚の歌は、古きものあり、新しきものあり、長い年月の間に次第に刊行せられたのである。なほ活版に飜刻せられない歌も若干ある。

【備考】寫本に「二見眞砂」、或は「川崎音頭」などと云ふ書名を持つものがあるが、多くは右の刊本より書き寫したのである。また右の刊本の歌を二枚（二曲）づつ一部として、別に表紙を付け、「新音頭相合傘」「新音頭相合傘二の卷」「新音頭逢夜鷄」などと題し、伊勢山田河崎町木村藤兵衞板本と記して刊行したものがある。この刊本は新しいが、初めかやうな體裁で、新作の歌詞を發賣したものを、後に至り、寄本として「二見眞砂」の書名をもつて刊行したのであらう。なほ「伊勢音頭」の歌詞の

中で、「御笑草諸國の歌」に出でた五首のうち一首（菊の露）、「橘窓自語」に見える二首等は、未だ「二見眞砂」の中に見出されない歌詞である。（伊勢音頭參照）〔藤田〕

二人靜（ふたりしづか）　「靜物の謠曲」を見よ。

二人靜胎內捃（ふたりしづかたいないさぐり）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】近松門左衞門【興行】明和板「外題年鑑」に、正德五年正月二日より竹本座としてあるが、結末に「國も潤ふ民潤ふ、年も潤ふ閏年五月、五日は十ぶんに治る御代こそ久しけれ」とあるから、正德三年閏五月の

たが、よく應戰し、間もなく龜井・片岡・伊勢・駿河・熊井・辨慶等が馳せつけて寄手を追散らす。かくて土佐坊は遂に辨慶に捕はれて首を討たれる。〔第二〕（口）賴朝の上意を受けて上京せる梶原景季は、先づ鞍馬山の蓮仁（れんにん）阿闍梨を六波羅に召して靜の行方を訊問するが、却つて阿闍梨から逆捻を喰はされる。（切）靜が義經に別れて鞍馬山に向ふ途中、嵯峨野の奥で日が暮れ、圖らずも祇王・祇女の庵室に辿り着き、一夜の宿を求める。ところが、その夜、平家一門の死靈が祇王・祇女に乘り移つて

その夜、靜を鎌倉に護送する梶原の一行が、偶然にも大津二郎方に宿をとる。折しも義經の胤を宿して臨月の身であつた靜が、突然產氣づいて男の子を生む。梶原は賴朝の內命により、その子を殺さうとするが、二郎は義經のために善根を積んで父を地獄の呵責から救ふ好き機會と、折から姙娠中の妻の胎內を割き、その子を身代りに立てる。梶原はその首を持ち、靜を二郎に預けて出發する。〔第四〕（口）都を落ちた義經主從十二人は山伏の姿となり、奥州指して北國を下り、やがて安宅に

なく、兎も角も纏まつた作である。三段目の如くただ悲劇的結果の大をのみ狙つて、その悲劇を生ずる過程の必然性といふ點を殆ど無視してゐるのは、寶永以後の近松の時代物の通有性である。明治三十七年十一月歌舞伎座興行の「安宅關」は、本作の四段目を取つて榎本寅彦が脚色したものである。

【參考】近松邦樂年表（義太夫節之部）〇近松全集第十卷解題〔藤井乙男〕〇大近松全集十卷解說（木谷蓬吟）〇歌舞伎（番五八）〔高野（正）〕

二人袴（ふたりばかま）　能狂言　【別名】相合袴

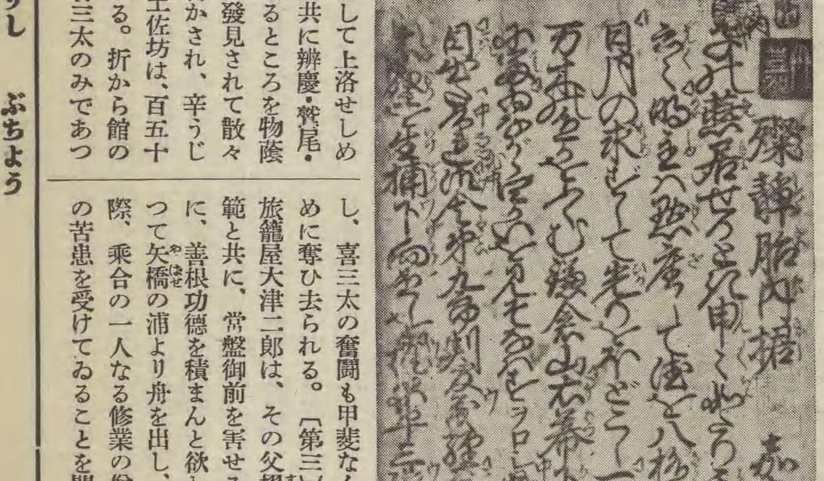
中で、「物笑草諸國の歌」に出でた五首のうち一首（菊の露）、「橘窓自語」に見える二首等は、未だ「二見眞砂」の中に見出されない歌詞である。（伊勢音頭參照）　〔藤田〕

二人靜（ふたりしづか）「靜物の謠曲」を見よ。

簗靜胎内捉（ふたりしづかたいないさぐり）　淨瑠璃　五段　時代物　【作者】近松門左衞門　【興行】明和板「外題年鑑」に、正德五年正月二日より竹本座としてあるが、結末に「國も潤ふ民潤ふ、年も潤ふ閏年五月、五日は十ぶんに治る御代こそ久しけれ」とあるから、正德三年閏五月の興行と推定される。【諸本】七行八十丁本、山本九兵衞板。十行三十六丁本、奥付缺。諸種の近松全集に所收。【題材】「義經記」卷四「土佐坊義經の討手に上る事」、同卷六「靜鎌倉へ下る事」、同卷七「大津次郎の事」及び謠曲や幸若舞曲の「安宅」等によつて潤色したもの。

【梗概】〔第一〕（大序）生捕となつて賴朝の前に引かれた平家の大將宗盛は、命を助からん追從に、義經が平大納言時忠の堵になつたと告げたので、賴朝は大に驚き、義經の逆心最早紛れなしとて、土佐坊正俊を討手として上洛せしめる。（中）土佐坊は義經が靜と共に辨慶・弁尾・熊井等を伴つて北野に忍詣せるところを物蔭より窺ひ、狙ひ寄るが、辨慶に發見されて散々油を絞られた上に起請文を書かされ、辛うじて釋放される。（切）その夜土佐坊は、百五十騎を引具して堀川表に打寄せる。折から館の中には義經と靜の外に厩の喜三太のみであつたが、よく應戰し、間もなく龜井・片岡・伊勢・駿河・熊井・辨慶等が馳せつけて寄手を追散らす。かくて土佐坊は遂に辨慶に捕はれて首を討たれる。〔第二〕（口）賴朝の上意を受けて上京せる梶原景季は、先づ鞍馬山の蓮仁阿闍梨を六波羅に召して靜の行方を訊問するが、却つて阿闍梨から逆捻を喰はされる。（切）靜が義經に別れて鞍馬山に向ふ途中、嵯峨野の奥で日が暮れ、圖らずも祇王・祇女の庵室に辿り着き、一夜の宿を求める。ところが、その夜、平家一門の死靈が祇王・祇女に乘り移つて靜を苦しめるが、折から厩の喜三太が馳せつけたので、靜は始めて蘇生の心地がする。そこへ梶原が大勢を引具し來りて庵室内に闖入し、靜を捕へんとするが、喜三太の奮闘も甲斐なく、靜は梶原のために奪ひ去られる。〔第三〕（口）大津松本の旅籠屋大津二郎は、その父摺針太郎が熊坂長範と共に、常盤御前を害せる罪障消滅のために、善根功德を積まんと欲し、自ら渡守となつて矢橋の浦より舟を出し、旅人に奉仕せる際、乘合の一人なる修業の僧から、父が地獄の苦患を受けてゐることを聞かされる。（切）その夜、靜を鎌倉に護送する梶原の一行が、偶然にも大津二郎方に宿をとる。折しも義經の胤を宿して臨月の身であつた靜が、突然産氣づいて男の子を生む。梶原は賴朝の内命により、その子を殺さうとするが、二郎は義經のために善根を積んで父を地獄の呵責から救ふ好き機會と、折から姙娠中の妻の胎内を割き、その子を身代りに立てる。梶原はその首を持ち、靜を二郎に預けて出發する。〔第四〕（口）都を落ちた義經主從十二人は山伏の姿となり、奥州指して北國を下り、やがて安宅に着く。こゝが「義經道行」。（中）一行は里の草刈童達からこの國の地頭富樫左衞門が關所を設け、山伏の通行を固く留めるといふことを聞いて絶望するが、獨り辨慶は人々を制し、富樫那の辯を以て富樫を宥めて見せんと單身關所に乘り込む。（切）辨慶から不吉を告げる法螺貝の合圖があつたので、一同はスハとばかりに關所に躍り込んで見ると、辨慶は高手籠手に縛められてゐる。義經が最早これ迄と血氣にはやらうとするを、辨慶はは、いたと睨んでこれを土足にかけ、他事に託して苦諫する。この哀れな主從の義に感じた富樫は、無事に主從を落してやる。〔第五〕（口）大津二郎が靜母子の供をして奥州に下る。梶原は義經追討の院宣を申し受けて秀衡方に急ぐ途中、厩の喜三太に裏をかゝれて捕へられる。（大切）義經が平泉に下着し、躑躅が岡に野陣してゐる所へ、秀衡方より泉の三郎忠衡が出迎へる。そこへ靜母子が大津二郎に誘はれ來り、やがて厩の喜三太もまた梶原を引立て馳せつける。二郎は梶原を申し受け、その首を打落して妻子の恨みを晴らす。

【解說】途中で消えて無くなるやうな人物も



簗靜胎内捉正本

なく、兎も角も纏まつた作である。三段目の如くただ悲劇的結果の大をのみ狙つて、その悲劇を生ずる過程の必然性といふ點を殆ど無視してゐるのは、寶永以後の近松の時代物の通有性である。明治三十七年十一月歌舞伎座興行の「安宅關」は、本作の四段目を取つて復本寅彦が脚色したものである。

【參考】近松邦樂年表（義太夫節之部）○近松全集第十卷解題（藤井乙男）○大近松全集十卷解說（木谷蓬吟）○歌舞伎（舊五六）　〔高野（正）〕

二人袴（ふたりばかま）　能狂言　【別名】相合袴（あひおひばかま）

【格式】内神文濟相傳の部（大藏流）。

【梗概】最上吉日に或る聟が嫁の里に親と共に招かれるが、袴が一つしかないので、親は門口まで行つて歸らうとし、見付けられて請ぜられる。そこで代る〳〵袴をつけて出入し、遂に親は歸らうとするが、冠者に引留められたので、聟と袴を二つに割つて前と後をあてて一緒に入る。いよ〳〵盃が廻り聟が舞を所望されると、後を見せずに舞ふが、相舞を所望されて、袴が見つけ出されてしまふ。

【解說】やゝ異なつた本では、冠者が逸早く袴のからくりを見つけて舅に密告するので、舅が聟の恥は舅の恥と、己も同じく冠者と一つの袴を二人で着る事になつてゐる。明治二十七年六月福地櫻痴がこれに基いて長唄所作事として歌舞伎座で上演した。これは能狂言の「二人袴」に、八島の合戰の物語の舞を挿んだだけの作であるが、甚だ好評を博した。　〔瀧田〕

武朝保（たけともやす）　狂詩作家　【姓名】平塚。又、津久井氏。名は茂喬、又、清影。字は士藥、通稱は表次郎・利助・善十郎。【號】飄齋・飄々山人・齋堂・椿孫、狂詩に武朝保といふ。【生歿】寬政六年閏十一月七日、洛外朱雀村に生

【備考】寫本に「二見眞砂」、或は「川崎音頭」などと云ふ書名を持つものがあるが、多くは右の刊本より書き寫したのである。また右の刊本の歌を二枚（二曲）づつ一部として、別に表紙を付け、「新音頭相合傘」「新音頭相合傘二の替」「新音頭逢夜鷄」などと題し、伊勢山田河崎町木村藤兵衞板本と記して刊行したものがある。この刊本は新しいが、初めかやうな體裁で、新作の歌詞を發賣したものを、後に至り、寄本として「二見眞砂」の書名をもつて刊行したのであらう。なほ「伊勢音頭」の歌詞の

佛

を發見し、忠兵衞と共に追ひかけて取返す。その途端、八右衞門の顏を見て驚く。實は手代の長藏である。母親妙閑の命令で、梅川の心底を見屆けに行き、梅川の眞實に感じて四十兩をやつた上、身請けまですんだのであつた。一方茂兵衞の方も、藤兵衞はお三に賴まれての金の催促、そこでお三が心意氣を見せる狂言とわかり、こゝにめでたく二組の夫婦が出來た。

【構想】本篇は、深川の遊里を描寫する目的よりは、前述の三桝德次郎の梅忠の評判が高かつたのを際物的に取材したその新しさを山とした作品である。前半に臺帳をその儘揭げ、見物及び忠兵衞の口から桝德の評判・素性・藝風を說明せしめたのもこのためである。彼が後に「田舍芝居」(別項)を發表したと同樣、演劇に關する趣味深きを示すものである。【史的價値】「江戶作者部類」の說く所によれば、「田舍芝居」に依つて京傳と萬象亭は不和になつたと云ふ。然るに本書には作者が後輩たる京傳を引き立ててやる口吻が見えてゐる。即ち兩人の仲のよい時代もあつた事を證してゐる作品である。【影響】京傳の「廓の大帳」(別項)は本書と構想がよく似てゐる。襲用したのかと思はれる。

〔山崎〕

復活の曙光（ふつくわつのしよくわう）　論文　【著者】姉崎嘲風(正治)【刊行】明治三十七年【內容】本書は六章から成り、先づ科學を過度に尊信するの害を擧げ、科學が眞の藝術を毒し、その使命を誤らしめんとするの弊あることを論じて、象徵主義(別項)の價値及び必要に及び、宇宙の神祕を知らざれば、大なる科學者たり得ず、又神祕を象徵する藝術でなくては、大なる藝術でない所以を論證し、進んで藝術と神祕との交涉深きことを說き、神祕の根柢があればこそ、美しきもの、善きもの、眞なるものが、この世に存し得るとなして「神祕は卽ち一切眞善美の源泉である」と云つてゐる。【批評】ロマンチックな時代、宗教的情熱に燃えた時代に本書が現はれ、神祕主義(別項)の上から科學・藝術・道德・宗教に言及し、暖かみに富んだ文章が、著者の熱情を裏づけたので盛んに讀まれた。藝術・宗教に關する部分では、うなづかれ得る多くの眞理はあるが、科學に關する意見だけは、多少偏見に失することを免かれない。

〔高須〕

二日物語（ふつかものがたり）　小說　【作者】幸田露伴【刊行】明治二十五年五月、新聞「國會」に第五回まで載せて中絕し、三十一年二月、「文藝俱樂部」に「此一日」全部發表、後「彼一日」を加へ、三十五年刊行の露伴叢書に收めた。露伴全集第三卷・現代日本文學全集等に收む。【梗概】「此一日」「彼一日」に分たれ、「此一日」は西行が讃岐白峰にある崇德上皇の御陵に詣でた時、上皇の靈が夢現の中に現はれて、憤怒の念を洩らされるのを聞いて、早く成佛解脫の道に入られるやう諫めたことを記し、「彼一日」は神無月の夜、大和長谷の御堂に參籠した折、別れた妻の、尼の姿となつたのに出會ひ、娘のこと、得道のことについて、互に心こめて話し合つた感慨深い場面を描き、有明月のもとに、二人の姿が濃く地に印せられたといふところで終つてゐる。【批評】本篇の題材は、すべて「撰集抄」(別項)から出てゐるが、白峰のことを書いた秋成・馬琴の文章などをも參照し、且つ空海の「十經心論」、崇德天皇の長歌なども參考とした事は、作者自ら云ふところである。從つて文體も亦「撰集抄」以來の脈を追ひ、「撰集抄」で駢儷體、漸層的句法、七五調などを用ひた手法が「二日物語」の上にもおのづから反映されて、流石に作者一流の工夫により、新古典味を發揮してゐる。源平時代から鎌倉期にかけての世間、人生のうつろひ、悲哀、人心の分離を、人間西行の半生を通じて、しみじみと表現させ、作家の澄みきつた觀照が、すつきりと統一されてゐる。文章は極度の洗練を經て、一糸亂れぬ名文で、內容としては、「彼一日」では、西行及び尼となつた妻の心の動きにも胸を打たれるが、さればとて、白峰での異常な情景を描いた「此一日」の價値も、決して前者に劣るものとは思へない。古典として殘さるべき匂の高い散文詩である。

〔高須〕

佛鬼軍（ぶつきぐんぶなまき）**繪卷**　【作者】傳一休和尙【名稱】淨土の佛と地獄の鬼と兩軍の戰ひを主題とするからの名である。【成立】室町期【諸本】古板本は、元祿十年板、文政六年板、天保五年板。禪林法話集(有朋堂文庫)所收。【內容】異類擬軍記物の一種。(佛鬼軍繪卷參照)

〔島津〕

佛鬼軍繪卷（ぶつきぐんゑまき）　【解說】京都十念寺藏一卷。繪四段詞三段を存するが多少前の方が缺けてゐるらしい。物語は淨土の諸佛諸菩薩が、軍勢を揃へて地獄の冥官惡鬼どもを征伐して、獄に苦しむ衆生を引接濟度するといふ筋から成立つてゐる。卽ち阿彌陀如來は西方の大將軍となり、東方をば藥師如來、南方をば寶生如來うけたまはり、北の手は釋迦牟尼が大將となり、四方から地獄に押寄せたので、遂に地獄の釜も傾き割れてたぎり落つる湯の中から蓮花が咲き出で、その上に亡者を助け載せて雲に乘じて往生させると

佛鬼軍繪卷（十念寺藏）

いふのである。かくこの繪卷は地獄と淨土との對立の關係を佛鬼兩軍の合戰といふ劇的なモチーフに代へたもので、その臺詞がかりな詞にも戲作的傾向が躍如としてゐる。佛教關係の繪卷は、概して信仰普及の方便から作られたものが多いが、鎌倉以降次第に戲化されるものも多くなり、やがてはこの繪卷の如き製作を見るに至つたのであらう。繪は情景が相當に面白いが、描寫は寧ろ簡素で色彩は淡白であり、畫致にはオリヂナルのところが乏しい。畫も詞も一休和尚筆と傳へられるが、もとより確かでない。併し製作の時代は正に足利期と思はれる。

【田中(一)】

佛教（ぶっけう）【概説】佛陀即ち釋迦牟尼を開祖とし、印度より中央アジア・東印度諸島並に東亞に傳播して、アジア全體の信仰・文明・美術に大勢力を及ぼしたる一系の宗教。現存佛教は、南方佛教と北方佛教の二大系統に分れ、南方佛教は錫蘭系統のもので、暹羅これを代表し、北方佛教は支那系統で日本これを代表してゐる。佛教を概括して云ふことは甚だ困難なことであるが、佛説から云へば經・律・論の三藏であり、所詮は戒・定・慧の三學である。而して三藏三學によつて教を判ずるにも戒即ち律藏を中心に説くもの、定即ち經藏によつて説くもの、慧即ち論藏に依つて佛教を立つるもの等あり、經藏によつて立つ中にも、中道・空・一念三千等の教理に求むるあり、或は佛身・釋迦・彌陀・大日の諸佛に就いて説をなすもの、諸佛に就いても重々の説をなし、諸派相分れて佛教を傳へてゐるわけである。今日本に發達せる佛教のみに就いて、その歴史と思想を概説する。

【沿革】佛教の日本傳來時期は、欽明天皇十三年十月説が普通行はれてゐる。渡來直後物部尾輿・中臣鎌子等の外來宗教排斥者もあつたが、漸次社會人心に喜を以て迎へらるゝやうになり、加ふるに聖德太子(別項)の出現によつて著しく興隆した。推古天皇二年二月、三寶興隆の詔あり、また太子は法隆寺・四天王寺等を造營し、崇佛家蘇我馬子は法興寺(元興寺)を起し、寺塔建立の擧は相續いだ。この頃高麗・百濟より學僧續々入朝し、內外相助けて佛法興隆に努め、上下翕然として佛教に歸依すゝ事になつた。併しこの時代は佛教の輸入期で、ただ佛教の靈驗を信仰したのみである。無論思想上の影響は尠くなかつたが、一步進んで深く佛教の教理を研究するまでには至らなかつた。聖德太子の著述として、僅か「三經義疏」(別項)が現存する。日本最初の佛經註釋書として注目すべき書である。なほ太子の社會事業たる施藥院・療病院・悲田院・敬田院の創設は忘れることが出來ぬ。

【奈良時代】大化改新を一轉機として、奈良朝佛教は形成された。即ち一方に國家的政治の實を擧ぐるに當り、他方國家的宗教の實を全うせんとして佛教を利用した。弘福・大安・藥師の各寺が、國家的祈禱道場として建立され、國家鎭護の經典たる「金光明經」「仁王經」等が盛んに讀誦講説された。かくて佛教は益々興隆し、天武天皇朝以後に至つては國教の如き觀があつた。更に聖武天皇並に光明皇后の御信仰は、佛教をして益々國家的宗教として發展せしめたのである。天平十三年、諸國に國分寺・國分尼寺を、奈良に總國分寺・總國分尼寺を創設せられ、總國分寺たる東大寺に大佛を鑄造し供養せられたのも、その現はれであつた。かくて奈良七大寺・大安・元興・法隆・興福・藥師・東大・西大の諸寺は完成し、國家的宗教としての佛教はその最極に達した。當時行はれた宗派は、三論・法相・俱舍・成實・華嚴・戒律の六宗で、高僧としては鑑眞・行基・良辨等がゐた。

【平安時代】奈良朝の佛教は、桓武天皇が平安に遷都遊ばされ、政治の改革を行はせられてよりその形勢を一變するに至つた。この時最澄・空海(各別項)の新宗教興り、奈良佛教と對立するに至つた。最澄(傳教大師)は、入唐求法後、比叡山に大乘戒壇を設け、國家鎭護の任を完うする大乘菩薩僧養成に努力せんとし、先づ奈良佛教界に挑戰して一大衝動を與へた。最澄の意圖は日本に眞俗一貫の純日本佛教を起さんとするにあつた。空海(弘法大師)は最澄の寂後、平安の都に來つて東寺に住し、祕密灌頂壇を創設し、鎭護道場となした。一方天台宗に於て祖師寂後圓仁(別項)・圓珍あり、各々入唐し密教を傳へた。これより眞言密教を東密、天台密教を台密と稱することになつてゐる。圓珍(智證大師)は園城寺に住し、その門派は比叡延曆寺派を山門派と云ふに對して寺門派と稱した。當時、宇多天皇は眞言に御歸依篤く、仁和寺を建立され、益信について灌頂を受け給ひ、醍醐天皇は醍醐寺を建立あり、聖寶これに住し、密教に於ける仁和寺・醍醐寺の派は大に榮えた。天台には圓仁(慈覺大師)の末裔にして台密の完成者たる安然あり、その他圓仁の後に皇慶、圓珍の後には餘慶あつて台密の弘通を計つた。その後天台では教學研究が盛んとなり、慈慧大師良源門に源信・覺運の二師あつて各々一家をなし、源信・惠心僧都の一流を惠心流、覺運の一流を檀那流と稱した。惠心僧都の「往生要集」(別項)出づるや淨土教は次第に盛んとなり、その始めをなすものは良忍の融通念佛宗である。平安時代の佛教を概觀するに、その末期に於ては、政權の衰退と共に諸大寺の衆僧は、その所領の增加に暴威を振ひ、佛教界は大に紛亂し、その形勢は一變しようとしてゐた。かゝる際にあたり、隱れたる學僧に依つて新佛教興隆の機運が開かれようとしてゐた。臨濟の榮西、眞言の覺鑁、淨土の源空等がそれである。

【鎌倉時代】鎌倉幕府の創立と共に、佛教も亦革新の機に遭遇した。まづ源空・榮西の新宗起り、次いで宋・元の歸化僧禪宗を傳へて鎌倉へ來つた。これより佛教界は三分の狀態となり、南方に奈良・高野の佛教、北方に平安佛教、東方に鎌倉佛教があるやうになつた。奈良佛教界には、三論に聖然、華嚴に明惠、法相に貞慶あり、戒律に覺盛・叡尊・忍性あつて活躍し、高野に覺鑁・法性・道範・賴瑜あり、學問研究盛んにして中に覺鑁は眞言中興に努力し、その一派は紀州根來に大傳法院を移し、高野古義派に對して新義派を創立した。源空・榮西が新宗を創造せんとするや、天台は事每に壓迫を加へたが却つて傳播するやうになつた。禪宗は榮西の後、道元入唐し曹洞禪を傳へ、益々新宗の興隆を見るに至つた。淨土教は一方源空門に辨長・證空あつて淨教弘通に努め、親鸞また眞宗を起すに至つた。禪宗は淨土宗と共に絶えず天台・眞言の迫害を受けたが、愈々教風を宣揚し、鎌倉幕府開かるゝや、佛教も亦東下し、淨宗の辨長が弟子良忠・一遍等と東下して淨教を弘通し、一遍は時宗を創設した。殆どこれと同時に、宋より禪僧道隆・普寧等が來り、北條時賴に請ぜられて禪宗を弘め、後又祖元・正念の來るあり、時宗の信をうけ、禪風

大に揚つた。そして支那五山に倣ひて鎌倉に五山を立て、禪の專門道場とするに至つた。同時に日蓮は、理論の法華を實踐の法華に移し、多くの信徒を得たのであつた。概括すれば鎌倉の佛教は、武家文化に伴つて簡略な實際生活に卽したものであつた。

【南北朝室町時代】南北朝對立するに至つて、佛教の形勢も一變した。就中注目すべきは鎌倉佛教の西上である。幕府倒れて後、禪宗は朝廷に請ぜられ、南禪・大德等の諸寺相續いて禪の專門道場となつた。室町幕府開かるゝや賢明なる宗教政策を用ひて諸宗を統御した。當時天台に天海、禪に祖傳・宗彭(澤庵)、淨土に尊照・慈昌、日蓮に日奧・日重・日乾・日遠等の傑僧が出た。後、明より隱元・心越等渡來し、隱元は黃檗宗を山城宇治に開いた。かくして靈元天皇の朝より諸宗學問研究に意を用ひ、天台に妙立・靈空・性慶・眞流の諸師、眞言に亮汰・運敞・淨嚴等の學僧出でて興學に努めた。しかし江戶期の佛教は、宗教統制が完全であつた反面に傑僧は出たが、感化の及ぶ範圍が制限せられた爲め、宗教としての新文化を作具せるもの、故にあらゆる現象は差別にして平等、平等にして差別あり、本經によつて差別觀に住せる人生を開破して平等絶對の理を教へる。この實在の內容如何について天台宗では空假中圓融三諦の實在觀を説き、一念三千の教義を明かにする。聖德太子は本經の主旨を萬善同歸、萬善成佛の語を以て示し給ひ、一切衆生悉有佛性の思想を闡明せられた。こゝに各自の個性人格を尊重せられ、庶民平等を説かれて、實際政治にこれを應用し給うた。「勝鬘經」は、詳しくは「勝鬘師子吼一乘大方便奈良朝時代に入つてしばゝ〳〵讀誦講説された「金光明最勝王經」の哲學的立脚點は、諸法皆空(空品第五)を説くことであるが、本經は最も正法治國を力説してゐて、佛教と國家との相互關係を示し、爲政者の指導原理を教へてゐる。故に本經は王者の經として、又鎭護經として國家政治に應用されたのであつた。「仁王經」も亦鎭護經の一部であつて、説く所は佛諸王のため、般若波羅密の深法を説き示したもので、これ亦國策に用ひられたのである。當時現實的實際的にのみ佛教を理會してゐたと

る。而して三藏三學によつて教を判ずるにも戒即ち律藏を中心に說くもの、定即ち經藏によつて說くもの、慧即ち論藏に依つて佛教を立つるもの等あり、經藏によつて立つ中にも、中道・空・一念三千等の教理に求むるあり、或は佛身・釋迦・彌陀・大日の諸佛に就いて說をなすもの、諸佛に就いても重々の說をなし、諸派相分れて佛教を傳へてゐるわけである。今日本に發達せる佛教のみに就いて、その歷史と思想を概說する。

【沿革】佛教の日本傳來時期は、欽明天皇十三

師の各寺が、國家的祈禱道場として建立され、國家鎭護の經典たる「金光明經」「仁王經」等が盛んに讀誦講說された。かくて佛教は益々興隆し、天武天皇朝以後に至つては國教の如き觀があつた。更に聖武天皇並に光明皇后の御信仰は、佛教をして益々國家的宗教として發展せしめたのである。天平十三年、諸國に國分寺・國分尼寺を、奈良に總國分寺・總國分尼寺を創設せられ、總國分寺たる東大寺に大佛を鑄造し供養せられたのも、その現はれであつた。かくて奈良七大寺、大安・元興・法隆・興

歸依篤く、仁和寺を建立され、益信について灌頂を受け給ひ、醍醐天皇は醍醐寺を建立あり、聖寶これに住し、密教に於ける仁和寺・醍醐寺の派は大に榮えた。天台には圓仁（慈覺大師）の末資にして台密の完成者たる安然あり、その他圓仁の後に皇慶、圓珍の後には餘慶あつて台密の弘通を計つた。その後天台では教學研究が盛んとなり、慈慧大師良源門に源信・覺運の二師あつて各々一家をなし、源信・惠心僧都の一流を惠心流、覺運の一流を檀那流と稱した。惠心僧都の「往生要集」（別項）出づる

宗は榮西の後、道元入唐し曹洞禪を傳へ、益々新宗の興隆を見るに至つた。淨土教は一方源空門に辨長・證空あつて淨教弘通に努め、親鸞また眞宗を起すに至つた。禪宗は淨土宗と共に絕えず天台・眞言の迫害を受けたが、愈々教風を宣揚し、鎌倉幕府開かるゝや、佛教も亦東下して淨教を弘通し、一遍は時宗を創設した。殆どこれと同時に、宋より禪僧道隆・普寧等が來り、北條時賴に請ぜられて禪宗を弘め、後又祖元・正念の來るあり、時宗の信をうけ、禪風

大に揚つた。そして支那五山に倣ひて鎌倉に五山を立て、禪の專門道場とするに至つた。同時に日蓮は、理論の法華を實踐の法華に移し、多くの信徒を得たのであつた。概括すれば鎌倉の佛教は、武家文化に伴つて簡略な實際生活に卽したものであつた。

【南北朝室町時代】南北朝對立するに至つて、佛教の形勢も一變した。就中注目すべきは鎌倉佛教の西上である。幕府倒れて後、禪宗は朝廷に請ぜられ、南禪・大德等の諸寺相續いて禪の專門道場となつた。室町幕府開かるゝや禪僧は益々禮遇せられ、尊氏の如きは祖元の法孫夢窓疎石に歸依して禪を弘通せしめ、この疎石門下から周信義堂・中津絕海（各別項）・妙葩春屋等出でて大に興隆した。義滿も亦禪僧を禮遇し、以後禪宗は幕府の佛教の如き觀を呈し、戰國時代よく文教の維持に努めたのはこの禪僧であつた。彼等は支那の學術・藝術に意を用ひ、所謂五山文學（別項）なるものを形づくつた。禪法は當時武人の風習に適應したので武人は爭つて禪法を學んだ。友梅・元光・元選・紹謹・紹碩等は地方武人の尊崇するところとなり、各々一方に禪風を振つた。淨土眞宗も亦盛行し、親鸞の法孫宗昭、覺如）・光玄（存覺等あり、日蓮の法孫に日像・日靜・日什等あつて、京都を中心に教線擴張を行つた。諸國に群雄割據するに至るや、佛教界も動搖し、この間眞宗・日蓮・淨土（各別項）・曹洞諸宗は非常に傳播した。眞宗には本願寺の教勢を張れる蓮如、伊勢一身田に據れる眞慧あり、淨土に聖冏あり、日蓮に日隆・日親・日眞の諸師あつて盛んに諸宗を攻擊し、所謂宗論が盛んに行はれた。

【江戶時代】德川家康が江戶に幕府を開くや、

賢明なる宗教政策を用ひて諸宗を統御した。當時天台に天海、禪に崇傳・宗彭（澤庵）、淨土に尊照・慈昌、日蓮に日奧・日重・日乾・日遠等の傑僧が出た。後、明より隱元・心越等渡來し、隱元は黃檗宗を山城宇治に開いた。かくして靈元天皇の朝より諸宗學問研究に意を用ひ、天台に妙立・靈空・性慶・眞流の諸師、眞言に亮汰・運敞・淨嚴等の學僧出でて興學に努めた。しかし江戶期の佛教は、宗教統制が完全であつた反面に傑僧は出たが、感化の及ぶ範圍が制限せられた爲め、宗教としての新文化を作ることがなくなつた。そして諸宗の間に深き溝渠を生じ、學問研究は一局部に限られてしまつた。所謂宗學と呼ばれるものがこれである。要するに宗學は起つたが形式に泥み、制度に左右されて、この時代の佛教はただ傳統を維持するに過ぎなかつた。然るに儒教と國學とより起つた新時代建設の新興思想は、尊王討幕の力となつて現はれ、幕府の思想的支持者である佛教を破壞することとなつた。この運動はやがて明治の神佛分離、排佛棄釋となつて現はれた。日本の佛教はこの時の大變動を經て、以て今日に及んでゐる。

【思想】日本最古の佛教註釋書たる聖德太子の「三經義疏」は「法華經」「維摩經」「勝鬘經」の三經の註疏で、うち「法華經」は「華嚴經」と共に日本の佛教に最も深い關係のある經典である。三論・法相・華嚴・天台・日蓮の諸宗何れも本經を尊重し、殊に天台・日蓮は本經を正依として成立してゐる。本經の譯に三種あるが、鳩摩羅什譯の八卷二十八品が日本に於ては用ひられてゐる。今その要旨を云へば、諸法實相である。卽ち現象卽實在と說くのが本經の眼目で、これに依れば、宇宙萬象は本來法性を

具せるもの、故にあらゆる現象は差別にして平等、平等にして差別あり、本經によつて差別觀に住せる人生を開破して平等絕對の理を教へる。この實在の內容如何について天台宗では空・假・中圓融三諦の實在觀を說き、一念三千の教義を明かにする。聖德太子は本經の主旨を萬善同歸、萬善成佛の語を以て示し給ひ、一切衆生悉有佛性の思想を闡明せられた。こゝに各自の個性人格を尊重せられ、庶民平等を說かれて、實際政治にこれを應用し給うた。「勝鬘經」は、詳しくは「勝鬘師子吼一乘大方便方廣經」といひ、太子は本經によつて自ら佛子勝鬘と稱せられてゐて大に尊重された。その中心は、勝鬘夫人の成佛を說けるもの、勝鬘は卽ち本經の主人公で、大乘思想を人格化せるもの、俗人にして而も女人なる勝鬘をかく扱へるところに、本經の要旨があるので、卽ち俗事世間に住しても、よく佛教精神は具現し得ること、女子すら然り、他の一切人をや。こゝに二乘根性の機を大乘の機に方便引入せんとしたものである。太子はよくこの思想を實生活上に具現し給ひ、世間的大乘精神を說かれた。「維摩經」は維摩居士なる一人物を拉し來つて辛辣に佛教を批判し、二乘を呵責し、菩薩を破し、以て佛教の眞意義を明かにする。本經は恐らく在家佛教の眞義を說けるものならんと云はれ、その辛辣なる批判は禪宗の喜ぶところとなり、「維摩經」の精神は禪宗に最も活かされてゐる。太子の本經を尊重し給うたのは、やはり「勝鬘經」の主旨に同じく、本經が世間的大乘佛教の提唱にあるを以てではないかと思はれる。その理論方面は般若の空思想を繼承したらしく、絕對空を說くことが中心になつてゐる。

奈良朝時代に入つてしばゝ讀誦講說された「金光明最勝王經」の哲學的立脚點は、諸法皆空（空品第五）を說くことであるが、本經は最も正法治國を力說してゐて、佛教と國家との相互關係を示し、爲政者の指導原理を教へてゐる。故に本經は王者の經として、又鎭護經として國家政治に應用されたのであつた。「仁王經」も亦鎭護經の一部であつて、說く所は佛諸王のため、般若波羅密の深法を說き示したもので、これ亦國策に用ひられたのである。當時現實的實際的にのみ佛教を理會してゐたと云ふのが奈良朝佛教の概括說であるが、般若の空思想が實行に現はれて、かく利用せられた點は注意すべく、「大般若經」の如きも屢々轉讀された。その思想は「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」の金剛般若の偈によつて代表される。諸法皆空の智見によつて迷執を打破し、無相中道の行を實行せしめるのが、その主旨である。この空思想は、顯密禪諸他の佛教の根本要諦で、「般若經」はわけて絕對空思想を代表的に說いてゐる。空思想に依つて立つ宗には三論宗あり、禪宗がある。禪宗はその空思想を實際的に體現しようとする。空思想は東洋思想の特徵であつて、この思想は藝術方面にも具現されてゐる。「大方廣佛華嚴經」は佛成道第二七日に上根の機に對して佛自證の法を直下に示された經であつて、その主旨は唯心法門で、心を實體として萬法緣起の根本とする。この一心、一切法を顯現して一切法又一切法を具し、相卽無礙、法界無盡なりと法界緣起を說くのが「華嚴經」である。華嚴に說く一心は、かくの如く萬法の本源であるが、この一心我等の心性を離れて存するものではなく、果位に約して佛心と

いひ、衆生凡夫に約しては吾等の心となり、佛心、衆生各々對境を造作する。心の狀態如何で佛ともなり衆生ともなる。故に心は本、佛は末でもある。かく「華嚴」に於ては唯心の理を說くのである。それ故淨心の一心に於ては我々體驗の世界一切のもの、罪惡・汚染・塵芥に至るまで佛の當體である。眞言密教の卽身成佛といひ、禪宗の本來成佛と云ひ、皆同一思想である。それ故本經の教說は眞言宗成立に深い交涉を持ち、又本經性起品の如きは禪の本來成佛思想と深い關係がある。なほ又この思想は天台の「諸法實相論」とも同內容と云ひ得べく、諸宗教理の本源とも見做し得るのが本經である。前述の如く、「華嚴經」は眞言密教と關係あり、空海は「大日經」住心品の十住心說を應用し、諸宗を判釋して華嚴宗を重要視し、更にこれを一步進めて眞言宗を上位に立ててゐる。華嚴が現象の事相に重點を置く如く、眞言も事相に重きを置く。これが眞言の特色である。「法華經」の經說は前述の如くであるが、最澄は聖德太子の御意圖に基づき、眞俗一貫の妙理を弘め、法華の精神を生動せしめたのである。

淨土教は、阿彌陀佛を念じ、西方往生を志す教であるが、念佛といふことが重要なことになつてゐる。この念佛に觀念念佛と稱名念佛とがあつて、源信(別項)・惠心僧都の念佛思想はこの觀念的な念佛である。しかし僧都も稱名念佛をなさなかつたのではなく、法然の如きは惠心僧都のみが稱名念佛を唱へたとしてゐる。かくの如く、法然の淨土教では稱名念佛に立つのであるが、この念佛往生は、「無量壽經」四十八願中第十八願の「設我得レ佛、十方衆生、至心信樂欲レ生二我國一乃至十念、若不レ生不レ取二正覺一、唯除二五逆誹謗二正法一」に依つてゐて、この願によつて易行念佛の法が始まつてゐる。この文中「至心、信樂、欲生我國」これを三心と稱してゐる。この三心は卽ち安心であつて、この安心より稱名の行が起される。それを起行といふ。起行は四修の作業によつて進められる。當代には法然以外、淨土教に與つた諸師に良忍・一遍がゐるが、これ等は觀念念佛の系統を引いてゐるものである。法然の後、念佛の教義に就いて、念佛一行と諸行往生の問題、一念往生と多念往生の問題、臨終往生と平生往生の問題等が諸師によつて提起され、淨土諸流のうち、鎭西流は一念多念共に說くが、むしろ多念說をとり、西山流では諸行を說き、長樂寺流では一念義を免さず多念義を說くやうになつてゐる。この問題について、淨土眞宗では、念佛に於て諸行說でなく一念往生を說き、臨終往生でなくて平生往生を說く。卽ち信の一念と稱して彌陀本願を信じたその一念が往生を決定すると說く。卽ち謂ふ所の平生業成であるが、この大切な信は我等自我から出發した信ではなく、佛の願力に依る信で、佛にうながされて凡夫の信が働く。いはば佛に信力があるので、この佛の信力に自我全體は包攝されて、全體佛に歸入し、信じ託してしまふ。卽ち他力回向の信心である。

天台宗では、平安朝期、密教の弘傳が盛んであつたが、良源・慈慧大師出でてその門流より惠心教學・檀那教學が發生した。當時の天台教學は、天台の圓教思想と密教思想を融合せしめたもので、以て圓教思想を具體的に說明せんとした。その一轉せる思想が天台の念佛思想である。この惠心・檀那兩流に於て特徵ある問題は本覺始覺問題である。惠心僧都は屢々本覺眞如なる語を用ひてゐるが、本覺とは始覺に對して、本來そのまゝの悟の身を云ひ、所謂本地無作三身と云ふのである、始覺はこれに對し、本地無作三身を修行の結果始めて悟るといふのであつて、本覺法門で云ふと自我當體が生れながらにして三身の妙體であるのである。日蓮宗・眞宗の如きもこの思想によつて現はれたものである。この本覺始覺思想は本門迹門思想とも關聯してゐて、本門思想の發達はこの本覺法門に依るものである。更に又佛教・神道に關して神本佛迹思想となり、佛は始覺修成の相、神は本覺本有の相なりといふ說にまで發展してゐる。この本覺思想は又禪の本來面目の意にも見出され、中古日本佛教思想の一大特徵をなしてゐると共に日本佛教の特徵で、自然的日本人の精神と一致した思想である。概して云へば日本の佛教思想は抽象的でなく、これを具體に移さんとする努力が思想史上顯著な事實で、こゝに日本佛教の特徵が一部あるわけである。

【宗派】現在日本に行はれてゐる宗派は、十三宗五十六派に及んでゐる。卽ち所謂奈良六宗のうちの法相・華嚴・律の三宗、その後の天台・眞言・淨土・眞宗・禪宗(黃檗・曹洞・臨濟)・日蓮宗(各別項)があり、その外に、時宗・融通念佛宗がある。又別に修驗道(別項)なるものも存する。特に別項目を立てて說かないものに就いて簡單に述べて置く。

【法相宗】別に唯識宗、中道宗・應理圓實宗・普爲一切乘教宗・唯識中道宗ともいはれる。世親の成唯識論を正所依として、萬法唯識の理を悟了し、眞如の妙理界に達し、これによつて自行化他するを主眼とする。法隆寺・藥師寺・興福寺は、本宗の三大本山である。【華嚴宗】「華嚴經」に基きて立てる宗旨である。十玄六相圓融の教を以て、法界緣起事々無礙の宇宙論を立て、一善一行はそのまゝ萬善萬行にして、一成一切成一證一切論を悟り、以て安心立命すと說く。東大寺を大本山としてゐる。【律宗】專ら律藏により淨戒を修するを以てその宗旨とする。總本山は唐招提寺である。【時宗】淨土宗からの分派で、專精稱名を宗旨とする。時機相應の宗、又は時機を失ふべからずといふに基いて時宗の名を得てゐる。卽ち彼我を忘れて念佛三昧に化する時、これ往生の時なりと說く。藤澤の淸淨光寺(遊行寺)を總本山とし、蓮華寺・無量光寺・金蓮寺・正法寺を大本山としてゐる。【融通念佛宗】一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是名他力往生、十界一會融通念佛、億百萬遍功德圓滿との融通念佛の妙法を悟り、成佛の大事を得るを宗旨とする。總本山は大念佛寺である。

【鷲尾・筑土】

佛教文學 ぶつけうぶんがく

【名義】佛教なる宗教現象、又は宗教意識を對象として文學的に具體化したるもの。【性質】宗教意識、又は宗教現象を對象とする文學には、明かに三種の異なつた性質が見られる。(一)文學的價値如何を問題とせず、宗教的價値を目的として製作されたものであるが、それに文學的價値が附隨的に伴はれてゐるもの。(二)宗教的現象を素材として、文學的要求から創作されたもの、卽ち製作動機が藝術的であるもの、而してこの種の作品のうちには、宗教的要素が豐富なるがため、宗教的價値要求から創作された石歌(各別項)、その他を有つに過ぎぬ。平安朝初期に於て我々は弘法大師(空海參照)の文學、傳教大師(最澄參照)遺作中の少數なる文學、佛教說話集としての「日本靈異記」(別項)「日本感靈錄」、その他少數の緣起類(本地物參照)を認め得る。以後、佛教の感化漸く深まるにつれ、在俗の博士・學士等によつて成つた佛教文學を多數見ることが出來る。學者が佛教文學の製作を試みるに至つたことは、一に唐代佛教詩人の摸倣に成つたのである。中期淨土教(別項)勃興より佛教文學の製作は漸次盛

れたもののやうに見受けられるものがある。「平家物語」(別項)の如きがそれである。(二)宗教的價値と文學的價値とが同一の强さで主張され要求されてゐるもの。凡そ以上の三類に於て、第一を宗教文學の本質的なるものと稱する向きもあるが、理想とすべきは第三の性質をもてるものであらう。第二類は宗教文學と稱するには少しく純粹さを缺く。が、ここに分けた三類の性質に屬するものすべてを宗教文學—佛教文學—と稱してよいと思ふ。

西歐の學者は、經律論三藏聖典すべてを佛教歌讚(佛教歌謠)・法語類がある。また法儀記錄として、受戒記・八講記・懺法記・灌頂記・修法記・影供記・堂塔供養記・追善記・回忌記等があつて、國文體で書いた價値あるものが多數ある。佛教傳記としては、各種の往生傳(別項)・高僧傳等の集成的な傳記集、個々人の行狀記等が多々あり、一部は緣起繪卷としても行はれてゐる。假名往生傳とも云はれる「發心集」や「閑居友」「撰集抄」(各別項)等は、また一部は佛教傳記集でもある。寺院の歷史文學には緣起・由來記と云つたものがある。緣起に、法會物語小說の形式を藉りて、一種の宗教物語と稱すべきものがある。その他、佛教隨筆・佛教紀行・佛教詩歌(釋教歌・梵門詩)と特に名づくべきものも相當ある。若し前述佛教文學の性質の第二類に屬するものを擧げるならば、物語・語物・諸物、その他日本文學の諸形態中に甚だ多くの佛教文學を見出すことが出來る。なほ佛教文學研究の附屬的な作業としては、佛教思想と日本文學との關係、佛教教團人の文學研究、緇流の生める世俗的文學の研究、佛教言語と國語の關係、佛教文學樣式から發生し

れたものゝやうに見受けられるものがある。(三)「平家物語」(別項)の如きがそれである。(三)宗教的價値と文學的價値とが同一の強さで主張され要求されてゐるもの。凡そ以上の三類に於て、第一を宗教文學の本質的なるものと稱する向きもあるが、理想とすべきは第三の性質をもてるものであらう。第二類は宗教文學と稱するには少しく純粹さを缺く。が、こゝに分けた三類の性質に屬するものすべてを宗教文學―佛教文學―と稱してよいと思ふ。西歐の學者は、經律論三藏聖典すべてを佛教文學と稱して研究してゐるが、このうち、哲學説に終始してゐる論藏を除外すべきは當然のことである。が、その他一切の聖典は哲學的教理的取扱ひが出來ると同時に、文學的取扱ひも出來るものであつて、一種の創作でもある。故に印度佛教文學なる呼稱も可能である。更に支那に於ては漢譯聖典は一種の飜譯文學であり、又佛教普及につれて支那自國の佛教文學が多數創作されてゐる。こゝに支那佛教文學と呼ぶべき國土的佛教文學の一群が存するわけである。日本にも亦かく國土的に呼び得る佛教文學が存する。但し日本に於ては、漢譯聖典をそのまゝ日本佛教文學と呼び得ないのは勿論である。それには、和譯・純日本譯の聖典飜譯文學とも稱すべきものが生れなければならなかつたのであるが、かゝる飜譯は殆ど生れなかつた。今日と雖も未だ純粹な聖典飜譯はなく、從つて日本佛教文學には聖典飜譯文學が存せぬわけである。

【沿革】佛教美術・佛教建築、その他の佛教藝術諸形式の發達に比して佛教文學の發達は非常に遲れてゐる。我々に殘された最古の佛教文獻として僅か推古期・奈良朝期の金石文・佛足石歌(各別項)、その他を有つに過ぎぬ。平安朝初期に於て我々は弘法大師(空海參照)の文學、傳教大師(最澄參照)遺作中の少數なる文學、佛教説話集としての「日本靈異記」(別項)「日本感靈錄」、その他少數の縁起類(本地物參照)を認め得る。以後、佛教の感化漸く深まるにつれ、在俗の博士・學士等によつて成つた佛教文學を多數見ることが出來る。學者が佛教文學の製作を試みるに至つたことは、一に唐代佛教詩人の摸倣に成つたのである。中期淨土教(別項)勃興より佛教文學の製作は漸次盛行し、固有日本文學との關係も漸く密にならうとしてゐる。佛教が眞に日本人の生活となりきつた鎌倉期は、又佛教文學の盛行を見た時で、更に南北朝・室町期に入つて日本固有の信仰と佛教との融合説が隆盛になると共に、佛教文學と神道文學の融合も行はれるに至つた。江戸期に於ける製作は無數であるが、純粹なものはその初期に限られ、以後は特色稀薄なものになつてゐる。近代に於ける佛教文學なるものもないではないが、概ね宗教的性質を有てる作品と云ふ意味に止まつてゐる。

【諸形態】日本の佛教文學研究に於て、まづ漢譯聖典、純教學的宗義書類等は、その對象とはならぬが、佛教文學の思想内容を説かんとすれば、必ず聖典・教學書類に依つてなされねばならぬこと勿論である。次に佛教金石文は、文學的價値如何は問題外として注意すべく、既に日本漢文學史に於てこれを取扱つてゐる向きもある。更に佛教歌謠として、和讚・教化・訓伽陀(各別項)・靈驗歌・順禮歌(別項)・漢讚等がある。法儀に關する文學も亦注意すべく、説經(別項)・表白・講式(別項)・願文(別項)・諷誦文(別項)・呪願文・祭文(別項)・縁起(別項)・歌讚(佛教歌謠)・法語類がある。また法儀記錄として、受戒記・八講記・懺法記・灌頂記・修法記・影供記・堂塔供養記・追善記・回忌記等があつて、國文體で書いた價値あるものが多數ある。佛教傳記としては、各種の往生傳(別項)・高僧傳等の集成的な傳記集、個々人の行狀記等が多々あり、一部は縁起繪卷としても行はれてゐる。假名往生傳とも云はれる「發心集」や「閑居友」「撰集抄」(各別項)等は、また一部は佛教傳記集でもある。寺院の歷史文學には縁起・由來記と云つたものがある。縁起に、法會縁起・行狀縁起・寺院伽藍縁起・佛菩薩靈驗縁起等がある。一部は繪縁起として多く製作されてゐる。佛教説話傳説は、早く集成物として「日本靈異記」「日本感靈錄」の如きものが出で、また日本説話文學の一大集成なる「今昔物語集」(別項)の説話の大半は佛教説話であり、以後佛教説話集は甚だ多數出てゐる。佛教傳説と特に名づくべきものも數多くある。これには固有日本傳説と結合してゐるものが尠くない。佛教小説稗史類と特に名づくべきものは、さして多くはない。志田義秀氏は、「苔の衣」「石清水物語」「松浦宮物語」(各別項)等を一種の宗教小説とされてゐるが、佛教小説の最も純粹なものとしては本地物(別項)、又近古小説中に見える出家遁世物・懺悔物・兒物語・靈驗物等がそれであらう。「平家物語」(別項)の如きも一種の宗教的稗史と稱してよいと思はれるが、概して佛教小説稗史類は前述の佛教文學の性質の中の第二類に屬するものが多いのである。教學的哲學的述作書以外に、前述佛教文學の性質の項の第一類に屬すべき宗義書がある。法語(別項)・語錄・消息法語、その他これに類する宗義書である。この種のものには、物語小説の形式を藉りて、一種の宗教物語と稱すべきものがある。その他、佛教隨筆・佛教紀行・佛教詩歌(釋教歌・梵門詩)と特に名づくべきものも相當ある。若し前述佛教文學の性質の第二類に屬するものを擧げるならば、物語・語物・謠物、その他日本文學の諸形態中に甚だ多くの佛教文學を見出すことが出來る。なほ佛教文學研究の附屬的な作業としては、佛教思想と日本文學との關係、佛教教團人の文學研究、緇流の生める世俗的文學の研究、佛教言語と國語の關係、佛教文學樣式から發生した諸形態、例へば歌祭文・歌念佛・今樣(各別項)・説經節等がある。さうした類の發生的見方等が考へられてよい。なほ又佛教と他の宗教文學、例へば神道文學・切支丹文學(別項)との交渉の如きものも研究されねばならない。

【參考】日本宗教文學 志田義秀(宗教大講座第十二卷)○鎌倉期の佛教文學 伊藤康安(文學思想研究第七卷)○佛教文學の研究 筑土鈴寬(岩波講座)〔筑土〕

復古神道(ふつこしんたう) 「神道各派」を見よ。

佛山(ぶつざん) 漢詩人【姓名】村上剛。字は大有。通稱彦左衞門。【生歿】文化七年、豐前國稗田村に生れ、明治十二年九月二十七日歿す。享年七十。【閲歷】幼時、筑前に遊んで龜井昭陽に學び、京師に遊歷して諸名流と交遊した。後鄕に歸つて徒に授けたが、來り學ぶ者甚だ多かつた。足疾を病み、足閭門を出でずして名聲海内を蓋ふものがあつた。【著作】「佛山堂詩鈔」三册(嘉永五年)。後明治七年、初編三卷・二編三卷として刊行。【批評】平生好んで白樂天・蘇東坡の二集を讀んだ。その詩は溫厚にして奇姿縱橫の妙がある。凡そ天地間の事物巨細となく悉く詩に入

らざるはなく、曲にその妙を盡した。その「伊呂波歌」の如きは最も奇構にして、蘇子の「石鼓歌」に似たと稱せられる。　〔佐久〕

佛說物の謠曲（ぶつせつもののえうきよく）　謠曲　【曲目】謠曲には佛菩薩の奇特を說いたものが少くないが、その中で佛寺の緣起を取扱つたものに「誓願寺」「當麻」があり、佛教傳說を取扱つたものに、「舍利」「第六天」「輪藏」がある。

【諸本】謠曲叢書・日本文學大系・國民文庫・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等所收。

【誓願寺】三番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔內容〕一遍上人（ワキ）が熊野權現の靈夢を蒙つて、六十萬人決定往生の御札を弘めるために、京都誓願寺へ來ると、一人の女性（前シテ）が出て、御札を受けて念佛往生の敎を聞き、寺の額を六字の名號に書きかへ給へと乞ひ、自分は和泉式部であるといつて消え失せる。上人が額を書き改めて念佛を稱へてゐると、和泉式部（後シテ）が歌舞菩薩となつて現はれ、歌舞を奏する。「誓願寺緣起」に據つた。劇的夢幻能。五流現行。

【當麻】四五番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔內容〕念佛僧（ワキ）が熊野參詣の歸途、大和國當麻寺に參ると、一人の老尼（前シテ）が若い女性（前ツレ）を連れて來て、僧の尋ねるがまゝに、昔中將姬がこの所で日夜淨土經を讀誦して生身の彌陀を拜みたいと祈念すると、化尼・化女が現はれて、曼荼羅を織つた事などを物語り、自分がその化尼・化女であるといつて上天する。やがて中將姬の靈（後シテ）が現はれて、念佛のありがたいことを述べて舞を奏し、後夜の勸行をする、と思ふうちに僧の夢がさめる。「當麻曼荼羅緣起」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

【舍利】五番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔內容〕出雲國美保關の僧（ワキ）が京都泉涌寺に參り、寺男（狂言）に賴んで佛舍利を拜んでゐると、一人の里人（前シテ）が來て僧と共に佛舍利を拜し、その謂れを語る、と見るうちに、一天俄かにかき曇つて、今まで里人と見えた面色は變つて足疾鬼となり、忽ち舍利を奪つて立ち去つた。僧は驚いて佛力を祈ると、やがて韋駄天（後ツレ）が現はれて足疾鬼（後シテ）を追ひつめ、終に佛舍利を取り返す。「太平記」卷八「谷堂炎上事」に記された佛說を泉涌寺の事として脚色した。複式劇能。五流現行。

【第六天】五番目〔作者〕未詳〔內容〕解脫上人（ワキ）が伊勢へ參宮すると、神靈が里女（前シテ）の姿で現はれ、御裳濯川の謂れを語つた後、佛法の障碍があるであらうとの靈夢を告げて消え失せる。やがて六種震動して、第六天魔王（後シテ）が群魔を率ゐて現はれたが、素戔嗚尊（後ツレ）が寶棒を以てうち懲らし、これを退散せしめ給ふ。「太平記」卷十二「千種殿竝文觀僧正奢侈事附解脫上人事」に據つた。劇的夢幻能。觀世現行。

【輪藏】脇能〔作者〕觀世彌次郎（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔內容〕筑前太宰府の僧（ワキ）が京都北野天神に參詣して、輪藏を拜んでゐると、その守護神火天が老翁（前ジテ）の姿で現はれ出で、輪藏の謂れを語り、僧の乞ふまゝに五千餘卷の經を一夜のうちに拜ませようと約束して消え失せる。その夜、法華經守護神の御廚子から傅大士（後ジテ）が普建・普成の二童子（子方）を伴つて現はれ出で、釋迦一代說法の經箱を悉く僧に與へて樂を舞ふと、天上から火天（後ツレ）が天降つて來て、僧を輪藏に誘ひ、經文を悉く轉讀せしめる。出典は見當らない。複式夢幻能。觀世現行。

【構想】緣起を主材とした「誓願寺」「當麻」は、共に念佛往生を敎示したもので、前者はワキを高僧としてゐるが、脚色は普通の複式夢幻能に近く、後者のワキは普通の旅僧であるが、脚色はやゝ劇的で、而も曼荼羅の說明には殆ど觸れてゐない。「舍利」と「第六天」とは佛敵を亡ぼす點が類似してゐるが、脚色は「舍利」の方が圓滑であり、「第六天」の方は前後段の聯絡に無理がある。「輪藏」は舞臺面が賑はしいといふことの外、見るべき工夫がない。

【參考】謠曲評釋 大和田建樹 ○謠曲大觀 佐成謙太郎　〔佐成〕

佛足石歌（ぶつそくせきのうた）　歌謠　【作者・成立】作者は文室眞人智努と云はれてゐる。智努は天武天皇の御孫、長親王の子、天平勝寶四年八月、文室眞人姓を賜はり、後、從二位に進み、寶龜元年十月に薨じた。この歌は、智努が亡夫人茨田女王（夫人とは母なりといふ）の追福のために、佛（卽ち釋迦）の足跡を石に鐫り附けて造建した佛足石の禮讃の歌で、その佛足石は、側面の記銘に依れば天平勝寶四年に造られたらしい。この記銘の讀方から判じて、天平勝寶五年の造立となす向きもあるけれど、いかゞなものかと思はれる（古京遺文參照）。歌は佛の石跡の鐫刻の樣から歌ひ起して、出來上つた後のことまでを連作的に歌つてあるので、佛足石の造建と共に作られたと思はれるが、造建直後の作であるらしい。而してこの歌も石に刻まれて碑として造立された。

【歌數・內容】佛足石歌は、高さ六尺二寸、幅一尺五寸五分程の碑に鐫られ、上下二段に分つて、上段に十一首（但し一首は磨滅のため、全く讀むを得ない）、下段に十首が刻まれてゐて都合二十一首ある。そのうち十七首は「恭佛跡」と記してある如く、佛足跡禮讃の歌であり、四首は「呵責生死」と記してある如く、生死に沈淪せる衆生の惡夢を覺醒せしめる意を詠じたものである。佛の足跡を石に鐫つて敬禮する風は古來印度に盛んであつて、「觀佛三昧經」その他諸經論に見えてゐて、敬禮によつて罪障を除き得ると信じられてゐた。この歌の中には、さうした意味と父母追福の意味とを詠んで、佛足を讃歎してゐる。但し十七首の佛足禮讃歌中、一首は藥師佛を詠んでゐる。佛足石歌二十一首は全部眞字の一字一音式に記されてゐる。その形式は、短歌形式の五・七・五・七・七の末に七音一句の繰返しが添うてゐる。歌を一二首示すと次の如くである（假名を附して讀方を示す）。

美阿止都久留伊志乃比鼻伎波阿米爾伊多利都知佐閇由須禮知々波々賀多米爾毛呂比止乃多米爾

彌蘇知阿麻利布多都乃加多知夜蘇久佐等曾太禮留比止乃布美志阿止々己呂麻禮爾母阿留可毛

與伎比等乃麻佐米爾美祁牟美阿止須良乎和禮波衣美須弖伊波爾惠利都久多麻爾惠利都久

これによつてこの種の形式を佛足石歌體といひ來つてゐる。

【形式】佛足石歌は、短歌形式の末に七音一句の繰返しの添うてゐるものであるが、かうした形式は、突然に佛足石歌によつて表はれたものではなく、この歌體の先蹤として、「古事記」清寧天皇の條の「大君の王の柴垣やぶじまりしまり延ほし截れむ柴垣やけむ柴垣」等の古い歌、また「萬葉集」卷十六の「彌彥神の讃に

今日らもか鹿の伏すらむ皮服着て角附きながら」の如き歌體が考へられてゐる。而してこの佛足石歌が、單に作られた歌か若しくは謠はれた歌かと云ふ問題が、その形式の上から論じられてゐる。謠はれたものであらうと云ふ證據として、この歌は七音の繰返しを有してゐる。この短歌形式に加ふるに七音一句の繰返しを有してゐる歌體は、短歌體歌謠にその類例が多く、又短歌が謠はれる場合には、最後の一句を繰返すのが古來の諷誦法であつたらしいといふ點を以て、佛足石歌も謠はれ

は「拾遺和歌集」卷二十に、「光明皇后山階寺にある佛跡にかきつけ給ひける」と詞書して、「三十餘り二つの相そなへたる昔の人のふめる跡ぞこれ」といふ歌を掲げてあるのを證據としてである。併しこの說は、佛足石歌中に藥師佛を詠んだ歌のあること、又藥師寺本尊の脚裏に、佛足石圖と同樣式の佛跡圖が存してゐるといふ點から、初めから藥師寺に碑の存してゐたことが確かであつて、「拾遺集」にいふところは誤であらうと斥けられてゐる。而して歌の作者も、「拾遺集」の詞書からする

も見えてゐる。物名歌は、單に物の名を列ねたのみで、感動の自然の表現でないために、歌としては何等の價値のない作品が多い。たとへば、「くべきほどときすぎぬれや待佗びて鳴くなる聲の人を動むる」（古今集卷十）の中に「ほととぎす」といふ物名をよみこんでゐる如き、如何に巧みに物名をよみこむかに注意の焦點があつて、歌の本質的な感動の表現に集中されないのである。物名歌の中にもすぐれた歌がないでもないが、物名をよみこむといふことは、何處までも遊戲的な域を脫し得な

分つて諸國の方言を蒐集し、間々古書等を引用して考證を附してある。卷一は天地・人倫。卷二は禽獸・魚蟲（氣形）。卷三は草木。卷四は衣食・器財。卷五は言語について記してゐる。

【價値】本書は、江戶時代の方言書として刊行せられた唯一のものであつて、その點から見て頗る注目すべきものである。その集錄した範圍の廣いこと、辭書の體をなしてゐることに於て、その實質に於ても當代第一のものである。國語研究と云へば、いはゆる雅語のみに限られてゐた時代に、早くも方言の研究に

の老尼（前シテ）が若い女性（前ツレ）を連れて来て、僧の尋ねるがまゝに、昔中將姫がこの所で日夜淨土經を讀誦して生身の彌陀を拜みたいと祈念すると、化尼・化女が現はれて、曼荼羅を織つた事などを物語り、自分がその化尼・化女であるといつて上天する。やがて中將姫の靈（後シテ）が現はれて、念佛のありがたいことを述べて舞を奏し、後夜の勤行をすると、と思ふうちに僧の夢がさめる。「當麻曼荼羅緣起」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

今日らもか鹿の伏すらむ皮服着て偽附きながら」の如き歌體が考へられてゐる。而してこの佛足石歌が、單に作られた歌か若しくは誦はれた歌かと云ふ問題が、その形式の上から論じられてゐる。誦はれたものであらうと云ふ證據として、この歌は七音の繰返しを有してゐる。この短歌形式に加ふるに七音一句の繰返しを有してゐる歌體は、短歌體歌謠にその類例が多く、又短歌が誦はれる場合には、最後の一句を繰返すのが古來の諷誦法であつたらしいといふ點を以て、佛足石歌も誦はれたに相違ないとするのである。また佛足石歌二十一首のうち、明かに十三首は二句切四句切になつてゐる。この形式は、誦はれた短歌形式歌謠に同形式の句切が多いからといふ點からも、佛足石歌は誦はれたものとするのである。

【附說】佛足石歌を鐫刻した碑は、佛足石と共にあつて、現に奈良藥師寺に存する。佛足石には、その側面に「釋迦牟尼佛跡圖」と題した記銘があつて、印度に於ける佛足跡の樣を記し、又文室眞人智努が造建するに至つた緣起を記してある。それによれば、もと唐の王玄策が入竺して佛足跡を寫し歸つたものが第一本、更にそれを入唐した日本の黃書本實（きぶみのほんじつ）が唐の普光寺に於て寫し得て將來したものが第二本、それが右京四條一坊の禪院に存してゐて、それを又寫したのが智努で、これが第三本といふことになつてゐる。これによつて、智努が天平勝寶四年に、改めて石に寫したものであるらしいことが知られ、その動機は一に亡夫人茨田女王追福のためであることが知られる。而してこの碑は、もと山階寺卽ち興福寺にあつたものであるとも云はれてゐる。それは「拾遺和歌集」卷二十に、「光明皇后山階寺にある佛跡にかきつけ給ひける」と詞書して、「三十餘り二つの相（すがた）そなへたる昔の人のふめる跡ぞこれ」といふ歌を掲げてあるのを證據としてである。併しこの說は、佛足石歌中に藥師佛を詠んだ歌のあること、又藥師寺本尊の脚裏に、佛足石圖と同樣式の佛跡圖が存してゐるといふ點から、初めから藥師寺に碑の存してゐたことが確かであつて、「拾遺集」にいふところは誤であらうと斥けられてゐる。而して歌の作者も、「拾遺集」の詞書からすると、光明皇后でなければならぬ譯であるが、歌の內容から見ると、必ずしもさうは云へない。佛足石歌が自稱を用ひてゐる點から、やはり佛足石の造建者たる文室眞人智努の作であるらしい。

【參考】〔碑圖・本文〕集古十種　○三十輻擬集古錄　○大和國金石記　○藥師寺金石記　○佛足石碑銘考　○金石拾遺　○皇朝金石編　○古京遺文　○金石文考證　○金石文字墨帖一覽　○日本金石志。〔註解・研究〕翻刻佛足石碑幷記　野呂實夫（寶曆二年）　○南京遺響　鹿持雅澄　○佛跡志　僧潮音　○佛足石和歌集解　山川正宣（文政十一年）　○佛足跡歌碑　武田祐吉（上代日本文學史）　○萬葉集新考卷十二附錄佛足石歌新考　井上通泰　○宗教讚歌研究　志田義秀（日本文學講座）　○佛足石歌碑の原所在について　板橋倫行（史學雜誌四一ノ一二）　○恭佛跡歌碑臆斷　林古渓（萬葉集外來文學考）　〔筑土〕

物名歌（ぶつめいか）　和歌　【名義】物の名を歌の意味には關係なく詠みこんだ歌。【性質】「萬葉集」にも物名歌が、無心所著の歌として收められてゐる。「古今集」には「物名」が卷十を占めて四十七首あり、それ以後の勅撰集にも見えてゐる。物名歌は、單に物の名を列ねたのみで、感動の自然の表現でないために、歌としては何等の價値のない作品が多い。たとへば、「くべきほどときすぎぬれや待佗びて鳴くなる聲の人を動むる」（古今集卷十）の中に「ほととぎす」といふ物名をよみこんでゐる如き、如何に巧みに物名をよみこむかに注意の焦點があつて、歌の本質的な感動の表現に集中されないのである。物名歌の中にもすぐれた歌がないでもないが、物名をよみこむといふことは、何處までも遊戲的な域を脫し得ない。物名歌は「拾遺集」にも卷七を占めて七十八首あり、「千載集」にも卷十八の中に十一首あるが、中世以降衰退したのは當然である。また歌によみこまれる物名を見ると、植物・動物・地名が多いが、中には「かのえさる」「四十九日」の如きものもよみこまれてゐる。詠みこまれる物名は「うぐひす」「ほとゝぎす」の如き一種のものが多いが、中には、「いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人にみえつゝ」（古今集卷十）の如く「さゝ」「まつ」「びは」「ばせをば」の四種をよみこんだ如きもある。中には「『は』をはじめ、『る』をはてにて『ながめ』をかけて時の歌よめと人のいひければよめる」といふ如き複雜な條件のもとによみこまれた場合もある。要するに物名歌も歌が社交的になり、趣向を重んじた時に起つた一の流行的現象と見るべきである。

物類稱呼（ぶつるゐしようこ）　語學書　五卷五册　【著者】越谷吾山　【名稱】角書に諸國方言とある。後世の版本には「諸國方言」となつてゐるのがある。【刊行】安永四年孟春の自序あり。【內容】部門を「節用集」（別項）の分類にならひ、天地・人倫・草木・氣形・器用・衣食・言語の七つに分つて諸國の方言を蒐集し、間々古書等を引用して考證を附してある。卷一は天地・人倫。卷二は禽獸・魚蟲（氣形）。卷三は草木。卷四は衣食・器財。卷五は言語について記してゐる。【價値】本書は、江戶時代の方言書として刊行せられた唯一のものであつて、その點から見て頗る注目すべきものである。その集錄した範圍の廣いこと、辭書の體をなしてゐることに於て、その實質に於ても當代第一のものである。國語研究と云へば、いはゆる雅語のみに限られてゐた時代に、早くも方言の研究に着手した事は頗る卓見と云はねばならぬ。なほ序文の中に、都會の語と田舍の語とを比較して、「都會の人物は萬國の言語にわたりて、をのづから訛すくなし、しかはあれど漢土の音語に泥みて、却て上古の遺風を忘るゝにひとしく、邊鄙の人は、一郡一邑の方語にして、且てにはあしく訛おほし、されども質素淳朴に應じてまことに古代の遺言をうしなはず」と云ひ、方言の分布について、「大凡我朝六十餘州のうちにても、山城と近江、又美濃と尾張、これらの國を境ひて、西のかたつくしの果まで、人みな直音にして平聲おほし、北は越後信濃、東にいたりては常陸および奧羽の國々すべて拗音にして上聲多きは、是風土水氣のしからしむるなれば、あながちに褒貶すべきにも非ず。畿內にも俗語あれば、東西の邊國にも雅言ありて、是非しがたし、しかしながら正音を得たるは花洛に過べからずとぞ」と云つてゐる。その識見の凡ならざるを見るべきである。　〔龜田〕

筆綾人（ふでのあやんど）　狂歌師　【本名】久野與兵衞　【別號】庭訓舍　【生歿】生年未詳。文化十年（一八一三）三月二十三日歿す。【法名】眞

盛院釋綾道居士【墓所】本所石原東江寺【閲歷】詳かでない。江戸本所緑町に住し、筆道指南をなしてゐたと云ふ。寛政年間判者に列し、本所側の頭目に推されたが、中頃より休詠してその名を揚げるに至らなかつた。その門人に露頂軒芳貫・羽雪庵盛住がある。〔野崎〕

筆の初染 ふでのはつぞめ　浮世草子　五冊【作者】序に「難波　今西鶴」とあれど、假名である。【刊行】寶永二年【解説】西鶴の「懐硯」(別項)の各巻より各一話づつ減じて、各巻四話とし、更に第一巻の如きは、その冒頭の一話はこれを他の話に作りかへてゐる。「懐硯」の舊板木を使用しながら、各話の見出し、各巻の目錄・柱等は、皆これを改めてゐる。序に「眼に遮る物皆亡人の筐となりて色々衣の袖干あへぬ中に一目玉鉾といへるは昔西鶴回國の道の記也是を見るからに與風思ひ立先師の跡をおひ……足にまかせてかけまはる程に忘しがたくてや日を經て古郷に歸り蘆葺る窓の前にそこ爰の事共思ひ出るにまかせて書つゞくれば愚成筆の初染全部五冊になりぬ」とあれど、信ずべからざる虚言である。巻頭に書き改めた「出雲國女かたきうち」の一話は、扇屋與三兵衞旅宿にて、亭主より元祿十七年の女敵討の話を聞く、その女敵討といふは、御殿に勤むる老女局が、勘定方の女を陷れて自殺させた。それでその下女が局を討つて主の仇を報じて後尼となるといふのである。この話は鏡山のお初の敵討と甚だよく似てゐる。鏡山のお初の話は、享保八年の石見濱田の城主松平周防守の江戸屋敷内の少女山路の敵討事件に取られたといはれてゐる(但し異説もある)が、それ以前にこの種の類話のあることが注意される。〔藤村〕

筆の隨意 ふでのまにまに　隨筆　二冊　寫【編者】不詳【解説】江戸時代下半期の諸家の未刊隨筆雜書類から編者の意に任せて拔鈔したものらしく、編輯の方針も定まらぬ書である。上半にループル、エレキテルの圖錄、鶯梅椿桃櫻彼岸櫻の名所、隅田川八景、江戸市内外の遊覽地、神社佛閣等を擧げ、下半に瀧澤解の「烹雜の記」の拔書數條、「七島日記」「諸國里人談」「國朝舊章錄」「禁中幷公家中諸法度」「外國通信事略」等の諸書からの拔書等がある。本書と同名の別本に志賀忍(理齋)所輯の一部(理齋隨筆參照)があるが、巻數も定まらず、未定稿の姿である。又後者には抄錄本もあつて、凡て蕪雜な寫本で行はれてゐる。或は二冊本もその一部分であるかも知れぬ。要するに餘り參考の價値あるものとも認められぬ。〔和田〕

筆隨意續編 ふでのまにまにぞくへん　隨筆　二十巻　寫【著者】志賀忍【解説】本書は著者の前著「理齋隨筆」(一名筆隨意)(別項)の後を承けたもの、著者の見聞及び所懷を何くれとなく記し集めてある。卷一に守刀の九寸五分以下神如散まで、卷二に紅毛藥テリヤアカ以下曾呂利新左衞門の祝歌、卷三に駿河國鬼島村勝退藪以下永井傳八郎の家紋、卷四に六阿彌陀參り以下毛利元就松一木の詠吟、卷五に事の成就以下蒲生氏鄕の大志、卷六に遠州灘の駒形以下物に隨ひて銘を作る事、卷七に甲斐國鶴郡小明見村縫之丞の篤志以下歌人の舊跡、卷八に佐藤繼信・忠信以下天地間一大戲場古今來許多脚色、卷九に甲信の諸士連署の誓盟書以下觀世左近安休の名言、卷十に神君の言行以下川中島合戰の書上、卷十一に南光坊天海の話以下牡丹花肖柏、卷十二に兆殿司吉山以下童謠の妙味、卷十三に佐々木盛綱の藤戸丸以下金地院崇傳、卷十四に「爲人抄」の抄錄以下惠秀禪師、卷十五に仁德・一條兩帝以下水府義公の一軸、卷十六に永樂錢以下夢窓國師、卷十七に念佛行者德本以下起證文、卷十八に風流に貴賤なし以下同名の人、卷十九に善知鳥以下須磨琴、卷二十に川太郎相撲以下樽が家の枡、各卷數條を收めてゐる。諸卷の末に文政中志賀忍書の題識がある。文政七年甲申十月樗園主人の序を冠してある。〔和田〕

筆の御靈 ふでのみたま　隨筆　二十四巻二十七冊【著者】田沼善一【諸本】本書は元來二十四巻を正しいとするが、世間流布の本には、本文二十四巻、目錄一巻、挿圖合括二巻に作つたものがあるので、その二十七冊本を假に定本とした。その他未完の本も傳はつてゐる。日本隨筆大成巻十に編入された本書の一本は抄略の三巻本で、巻一はとりすべて云事以下九條、巻二はこはいひ食ふさま以下七條、巻三は尼のすがた又蜘切丸以下十四條を收めてゐる。これには元の如く本文と圖畫とが交加してあつて見よい。【解説】著者の自序中に「書にかけるを見て推て察へる狀は、たがへる事のみ多し。畫を見てさとるに、形を誤ることはあらず。かれ今、古き畫と古書とによりて、互にむかへ考て此書を作れり」とある通り、古書に出てゐる武具・服裝・建築・調度・飲食、その他習俗上、近代と異なる情態の限りを理解し易からしめるために、古き繪卷等の圖を引いて説明したもので、甚だ努力の作である。巻一は目錄といろは別索引とを收め、巻二十六・二十七は挿圖(着色)一切を收めてゐる。挿圖はもと各巻該當の處に在るべきを便宜上集めて二巻にしたのである。考古家・史學者等に取つて有益な書である事は勿論、畫家等にも大に參考になる。但し傳寫本に誤脱の少からぬのはこの書に限らぬ通弊である。【著者小傳】田沼善一は篠原氏とも云つた。文政・天保頃の幕臣で、善富の子。小山田與清の門人であり、繪畫をも能くし、古畫に親しんだ。〔和田〕

筆屋幸兵衞 ふでやかうべゑ　「水天宮利生深川」を見よ。

不動 ふどう　脚本(歌舞伎十八番の一)【名義】不動は初代、二代市川團十郎の當り藝であつた成田山不動明王の化身事を指す。脚本としては、同じ十八番の「外郎賣」や「押戻」(各別項)等と同じく、それ自身獨立性を有せず、他の狂言に吸收されて演じられる融通性のものである。故に上演の都度、その脚色は種々に替へられたが、その多くは或る弱者、又は善人等を守護する場等に現はれて解決をつけるといふ風に仕組まれた。【創案者】初代市川團十郎【初演】元祿十年五月江戸中村座「淺黃絲 黑小袖 兵根元曾我」(別項)第二番目の切。五郎(初代團十郎)と朝比奈(初代中村傳九郎)との相模川出會の場面に、初代團十郎の倅市川九藏(二代團十郎)が、山伏通力坊實は不動の化身で現はれたのが、後世の「不動」なるものの原據である。【題材】初代團十郎が子なきを憂ひ、成田不動に祈願して男子を儲け、九藏と名づけた。この時(八歳)初舞臺なので、謝恩のため不動の靈驗記を取入れたもので、この時から家號も「成田屋」と呼んだといふ。【沿革】元祿十年十一月、江戸中村座の「小栗」の狂言に初代團十郎が不動を演じ、その後も數度勤めたが、元祿十六年四月、江戸森田座「少將百夜車 蛇鰍通小町 成田山分身不動」(別項)第五番目大切に鬮寺小町やつしの後へ二疊の不動即ち黑

主の鬘實は胎藏界の不動(初代團十郎)と空海實は金剛界の不動(市川九藏)と、これが一體分身となつて現はれて結末となるが、この時九藏へ不動の祕藝を傳授したといふ。因みにこの時は普賢菩薩の化身が附加されてあつた。而して九藏の二代團十郎に至つて屢々不動に扮したが、享保十八年七月、江戸市村座の「相榮山鳴神不動」に至つて大成し、寛保二年正月、大阪大西芝居所演の「雷神不動北山櫻」によつて、後世の「不動」の基準となり、不動にせいたか・こんがらの二童子を附加するのが通例と

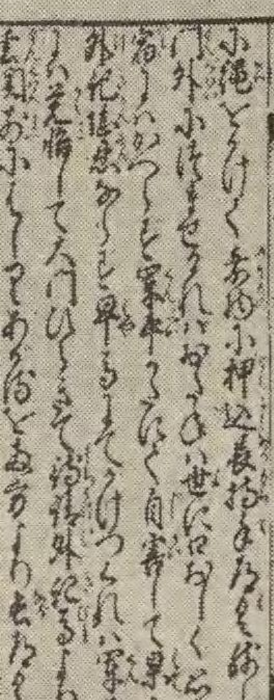
三年春八文字屋版)によつて脚色したといふが、原作にあるせいたか・こんがらの二童子を出さなかつた。【諸本】兵根元曾我(元祿歌舞伎傑作集上巻)・成田山分身不動(同上)・雷神不動櫻(田村西男編)・不動(長唄—大薩摩正本)・瀧櫻誓利劔(同上)等。【參考】壽十八番歌舞妓狂言考石塚豐芥子(新燕石十種第三)○劇代集二代櫻田治助○歌舞伎圖説守隨憲治・秋葉芳美共編○歌舞伎十八番の内不動見た儘　渥美淸太郎(演藝畫報六ノ三)〔秋葉〕

武道鎌倉日記 ぶだうかまくらにつき　「文武さざれ石」を見よ。

を說き自ら古野家に使して左内の引渡しを要求する。こゝに於て兩家互に確執し、事遂に主君に聞えて兩方ながらお暇となり、浪人の身となつて了ふ。古野將監は瀬兵衞の近所大塚に地を求めて書物を友として靜に暮してゐたが、或る時舊友の谷東甫入を思ひ出し、その住ひを高井戸に訪ねる。甫入の息子文平は、瀧津一門が荒角ばかりでなく西國の大名に仕へてゐた武太夫も一つになり、內藤宿あたりに住み古野を敵と狙つてゐることを告げる。(卷三)瀧津一門は三太

宇太右衞門・彥介をも、おぎんの謀にて誘ひ出してこれをも討ち取る。かくてめでたく敵討ちを遂げた。〔小泉〕

武道傳來記 ぶだうでんらいき　浮世草子　八冊【作者】井原西鶴。序に、「鶴永」「松壽」の印がある。【名稱】內題には「武道傳來記」の左側に諸國敵討と記し、題簽には右の四字を角書



主の靈實は胎藏界の不動（初代團十郎）と空海實は金剛界の不動（市川九藏）と、これが一體分身となつて現はれて結末となるが、この時九藏へ不動の祕藝を傳授したといふ。因みにこの時は普賢菩薩の化身が附加されてあつた。而して九藏の二代團十郎に至つて屢々不動に扮したが、享保十八年七月、江戸市村座の「相撲山鳴神不動」に至つて大成し、寛保二年正月、大阪大西芝居所演の「雷神不動北山櫻」によつて、後世の「不動」の基準となり、不動にせいたか・こんがらの二童子を附加するのが通例とせられた。爾來、四代・五代團十郎の外、八代・九代市村羽左衞門、初代荻野伊三郎、初代尾上菊五郎、初代市川雷藏、三代・四代市川團藏、三代坂東彦三郎等が演じたが、市川家でも「成田不動」の外に「目黒不動」「高雄不動」「くりから不動」「岩倉不動」「男山不動」「大山不動」「筑摩不動」等を演じてゐ、「四人不動」などもあり、石像による不動にも屢々扮した。然るに七代市川團十郎に至つて「成田不動」と定められ、初めて勤めたのが、文化九年十一月江戸森田座の「雪芳野來人額鏡」第一番目大詰で、その後、屢々勤めて、大薩摩の「不動」（文政四年三月江戸中村座）や「瀧櫻誓利劍」（天保七年二月江戸森田座）等が生れた。歌舞伎十八番の内としては、嘉永四年九月江戸市村座「源氏模様娘雛形」の第一番目大詰に八代團十郎が勤めた。その後四代市川小團次が杉本佐兵衞の不動や六代市川團藏、九代市川團十郎等の文覺上人が那智の瀧の不動などを勤めて「不動」の傳統を示してゐたが、一時中絶してゐたのを明治四十五年一月、東京明治座の中幕で、歌舞伎十八番の内「不動」として現市川左團次によつて復活された。岡鬼太郎が「雷神不動櫻」（寛保三年春八文字屋版）によつて脚色したといふが、原作にあるせいたか・こんがらの二童子を出さなかつた。

【諸本】兵根元曾我（元祿歌舞伎傑作集上卷）・成田山分身不動（同上）・雷神不動櫻（田村西男編）・不動（長唄―大薩摩正本）・瀧櫻誓利劍（同上）等。

【參考】壽十八番歌舞妓狂言考石塚豐芥子（新燕石十種第三）〇劇代集二代櫻田治助〇歌舞伎圖說守隨憲治・秋葉芳美共編　〇歌舞伎十八番の内不動見たまゝ　渥美清太郎（演藝畫報六ノ三）　【秋葉】

武道鎌倉日記（ぶだうかまくらにつき）「文武さざれ石」を見よ。

武道忠義太平記（ぶだうちうぎたいへいき）「忠義武道播磨石」を見よ。

武道繼穗の梅（ぶだうつぎほのうめ）浮世草子　五卷二册　【作者】石川流宣　【畫工】自畫　【刊行】元祿年間か。【諸本】江戸時代文藝資料第三所收。【解說】敵討話を綴つたもので、關東武士の意地を描き、所々に「論語」等の敎訓的語句をそのまゝ挿入してゐる。（卷一）古野將監武則には多くの子供があつた。娘おぎんは御家の侍大將瀧津宇太右衞門尉重定に嫁し、長男は小平太、次男は左內。次はおつぎといふ十二歲になる娘、外に妾腹の女子でおぎんより三つ上のおすめは江戸道灌山の麓の名主粳田瀨兵衞の妻となつてゐる。瀧津宇太右衞門は主君お國入りのお供と決まり、留守を左內にたのんで江戸を後に發足する。宇太右衞門の妹のおさわは今年十四歲。左內を見染める。年明けて左內は十七。おさわ十五歲となる。おさわはいつか懷姙したので自ら腹の子を下さうとして遂に果敢なくなる。（卷二）古野將監はこの噂を聞いてそれとなく左內を大阪に立ちのかせる。宇太右衞門の弟荒角彥介は兄を說き自ら古野家に使して左內の引渡しを要求する。こゝに於て兩家互に確執し、事遂に主君に聞えて兩方ながらお暇となり、浪人の身となつて了ふ。古野將監は瀨兵衞の近所大塚に地を求めて書物を友として靜に暮してゐたが、或る時舊友の谷東甫入を思ひ出し、その住ひを高井戸に訪ねる。甫入の息子文平は、瀧津一門が荒角ばかりでなく西國の大名に仕へてゐた武太夫も一つになり、內藤宿あたりに住み古野を敵と狙つてゐることを告げる。（卷三）瀧津一門は宇太右衞門重定、弟武太夫重次、三弟荒角彥介重成兄弟の外に從弟浪人を合せて都合二十五人、高井戸よりこなた一里程の原中にて待ち受ける。こゝで古野一行の來るに會し、斬つて掛つたが、却つて追ひ立てられて宿所に逃げ歸る。然るに小平太は假初の病に臥したが大熱となり、その看病疲れで皆寢入つてゐる所へ宇太右衞門一行が俄に斬り込んで、古野將監や小平太を討ちとる。（卷四）古野の末の娘おてふは、敵討の費用を作るため身を吉原に賣る。その金で若黨佐五七は大阪に下り、左內に具さに事情を告げる。一方武太夫は庄介といふ若黨を案內に、江戸一見しながら左內の行方を尋ね廻るうちに吉原に遊び、遊君立記を敵妓にして馴染を重ねる。（卷五）遊君立記とは卽ち古野の娘おてふであつた。左內はおてふの手はずにより武太夫を新吉原の田圃道に於て討ち取り、次いで宇太右衞門・彥介をも、おぎんの謀にて誘ひ出してこれをも討ち取る。かくてめでたく敵討ちを遂げた。　【小泉】

武道傳來記（笹野堅氏藏）

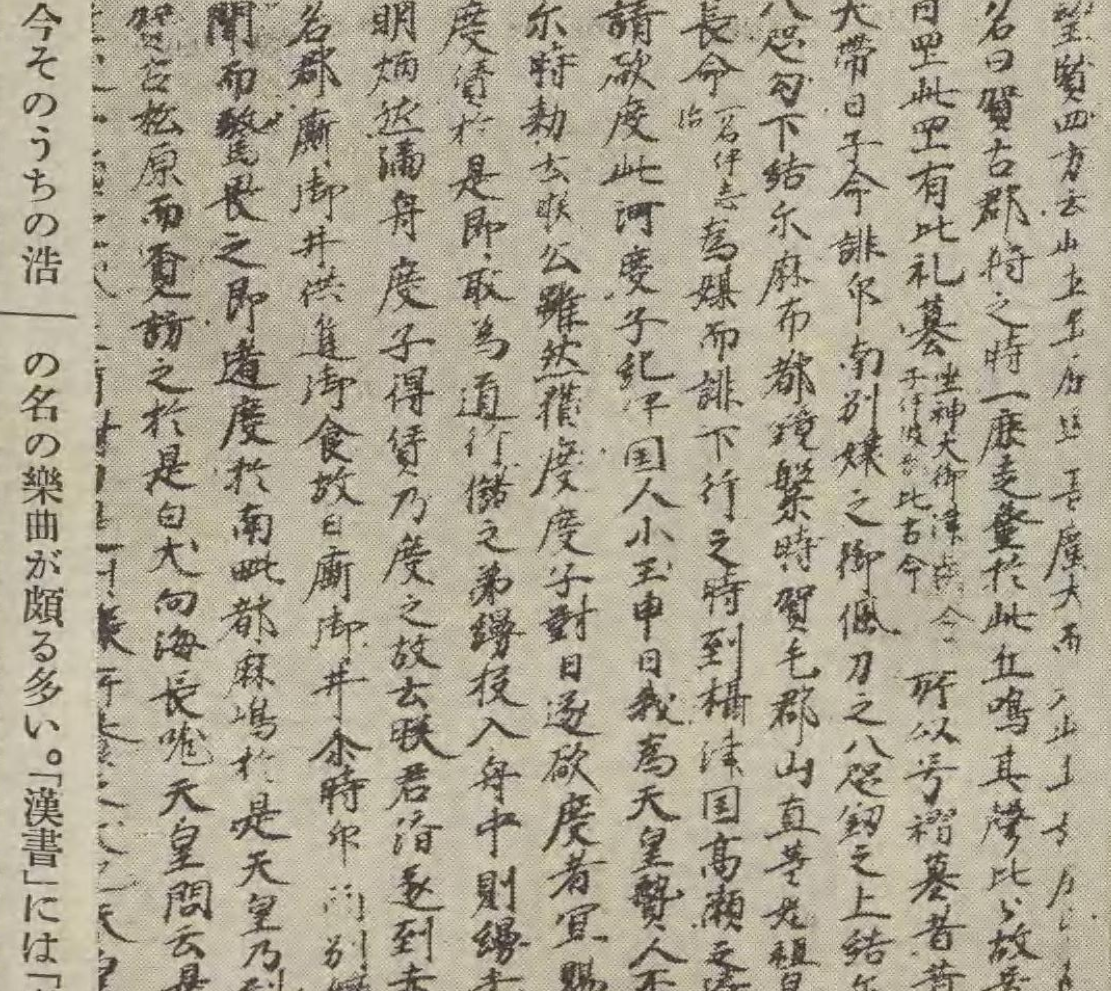
武道傳來記　井原西鶴。序に、「鶴永二松壽」の印がある。【作者】井原西鶴。【名稱】內題には「武道傳來記」の左側に諸國敵討と記し、題簽には右の四字を角書

是を集ぬ」とあるやうに、敵討話であり、事件の年代を單に「むかし」とか、「古往」とか「そのころ」とか書いて明示しないのもあるが、中には「天正」「大永」などと記したのもある。多分その說話の多くは序文のいふ如く、古來の所傳に由つたのであらう。地域は他の作と同じく南は九州北は奥州に及び序文の諸國といふに違はぬ。本書の說話には、武士道としての敵討の精神に曖昧なものがある。その原因、その經過の上から察して不純なものがある。士道の精神から禁止されてゐた討返しの敵討すらある。その原因に溯つて考察すれば、事の善惡何れに在りや疑ふべきものもあれば、一場の兒戯に類するものもある。かく敵討精神、引いては士道精神の曖昧なのは、作者の士道精神に對する理解の不足なためであらうが、又その理解の不足は作者が町人であつた爲めとも解せられる。併し又材を敵討精神確立以前の出來事に取つたので、原事實に引きずられた爲めとも考へられる。ともかくも、この精神の不確立は、作品の興味及び價値を減殺してゐる。〔藤村〕

武道張合大鏡 ぶだうはりあひおほかがみ　浮世草子　五册【作者】序に「團粹然序」とある。北條團水であらう。【刊行】不詳【諸本】近世文藝叢書第四所收。【解說】序に「治まれる世に義者張は一徹者といひ、律義なれば阿房といふ。此ふたつの道おこなはれず、只利をもつて義とし、義を以て利とする時は損なし。されば、むかし、血氣の勇者鞘當詞咎の素刄拔より以下、目玉眼兵衞、蟒金十郎、墓原骨右衞門、夢野市兵衞、狸の十郎、泥の八兵衞なんど聞ゆる、六法八法播磨のはやし、詞の林にかたり傳えし類をあつめ、賞罰をあらはし、勸善懲惡の鏡に、言行の容をたしなむべき便にもやと、編る者の微意なり」とあるのは、よく本書の性質を表はしてゐる。卷頭に武士の本分を述べて、「只忠信のふたつを忘れず、無用の殺生を好まず、自己一朝の怒りには身命を輕くせず、國家治亂に及ぶ時は、智謀計略を專にして、身は塵芥より易く捨て、國人の安堵を思ふ事、武門の龜鑑たるものなり」とし、この精神に立つて、武士・町人などの武勇立ての事件を敍し、これに批判を加へて、當時流行の無意味殺伐な風習に對して教誡としたものである。書中收むる所の說話は二十一章、多くは武士のことであるが、その他も交つてゐる。浮世草子の所屬を求むれば、武家物に入るべきものであるが、武家物としても優秀な作品ではない。〔藤村〕

不動利益緣起 ふどうりやくえんぎ　「泣不動緣起」を見よ。

風土記 ふどき　地誌【性質】主として諸國鄕土の產物、土地の肥塉、地名の起原、傳說等を記述したものをいふ。【起原】「續日本紀」元明天皇和銅六年五月の條に、「制、畿內七道諸國、郡鄕著ニ好字一、其郡內所レ生、銀銅彩色、草木禽獸魚蟲等物、具錄ニ色目一、及土地沃塉、山川原野、名號所レ由、又古老相傳舊聞異事、載ニ于史籍一言上」とあるが、その起原であると云はれてゐる。この文中に風土記とはないが、現存せる古風土記が、これに照らし合はせて一致する點が多いので、多分さうであらうと考へられる。【沿革】和銅六年の詔に依つて、諸國に風土記が出來たのであらう。現存せる「出雲國風土記」(別項)は、その後二十年を經た天平五年に勘造せられた旨が記されてある。然るに朝廷に集めた筈のこれ等諸國の風土記は、その後散佚したものと見えて、醍醐天皇の延長二年十二月十四日の太政官符(朝野群載所載)に、「五畿七道諸國司應ニ早速勘ニ進風土記一事、右如レ聞、諸國可レ有ニ風土記文一、今被ニ左大臣宣一偁、宜下仰ニ國宰一令上ニ勘進上、若無ニ底本一、探ニ求郡內一、尋ニ問古老一早速言上者、諸國承知依レ宣、不レ得ニ延回一、符到奉行」と見えてゐる。この官符は、探し求めて上れといふ意味だけで、求め得なかつたら新たに作れといふ意味は見えてゐない。今日では、古風土記(別項)として全本又は大部分を存するもの五國、他書に引用せられて存する古風土記の遺文(纂訂古風土記逸文參照)數十國である。近世に至りて、駿河淺間の神主某、「日本物國風土記」(別項)と題して僞書を作り、又外に「石見國風土記」「丹波國風土記」の如き、後人の作爲せるものがある。なほ近世以降、風土記の名を襲用した地誌の類が多く成つたが、今そのうちの浩瀚なるものを擧げると、貝原益軒の「筑前續風土記」二十八卷、吉野秀正の「壹岐國續風土記」百十八卷、仁井田好古等の「紀伊國續風土記」九十七卷、昌平黌地誌局の「新編武藏國風土記稿」二百六十五卷、同「新編相模國風土記稿」百二十五卷、間宮士信の「新編相模風土記」百二十六卷、田中玄宰等の「新編會津風土記」百二十卷等である。〔武田〕



三條家本播磨風土記

風土記逸文 ふどきいつぶん　「纂訂古風土記逸文」を見よ。

武德樂 ぶとくらく　雅樂曲【名義】武を以て亂を除くことを德として作つた樂の意。【異稱】武頌樂【性質】唐樂。新古不明、中曲。壹越調曲に屬する。初め序(拍子十六)、破(拍子十二)、急(拍子十二)あつたが、今は序・破共に絕えて急のみが殘つてゐる。舞は初めあつたが、後に絕えてしまつた。【沿革】支那にはこの名の樂曲が頗る多い。「漢書」には「孝惠二年(中略)、高祖廟奏ニ武德・文始・五行之舞一(中略)、武德舞者、高祖四年作、以象ニ天下樂已行武以除レ亂也」とある。又「通典」卷百四十一には「魏文帝受禪後、改ニ漢巴渝舞一曰ニ昭武舞一(中略)、武德樂曰ニ武頌樂一」とある。我が國に傳はつたものが、これ等と同曲であるか否かは疑はしい。〔田邊〕

懷子 ふところご　俳諧集　十卷十册【編者】

松江重頼【名義】自序の終りに、「親哥のふところにすがりて子と成句をいはざらめかも」とあり、また第十卷自跋の次に、「若竹の馬づれや皆ふところ子」といふ句もあるので、名義の由來が知られよう。【刊行】萬治三年五月。【解說】自跋によると、重頼が十餘年來採拾した自他の發句・附句で、第七卷までの發句にはそれ〴〵その出典たる和漢の詩歌物語などを掲げて註してゐる。第一卷より八卷までが「懷子」、第九・十卷が「懷子伽」となつてゐる。卷頭の自序は、「古今集」の序をもぢつた面白い

十、作者二百六十五人、附句一千二十二を收めてゐる。貞門特に重頼には古典を驅使する傾きがあるが、本集は、かゝる主義の能く見られるものであり、且つその出典の那邊にあるかが示されてゐる點に於て、參考になるものである。〔萩原〕

懷硯 ふところすずり　浮世草子　五册【作者】井原西鶴。原本は無署名であり、他に確證もないが、古來西鶴の作と傳へ、又特にこれを疑ふべき理由もないから暫く傳に從つて置く。【名義】懷硯は旅硯で、旅中聞く所の異事珍說

過ぎたので、難死したと推定し、一門相談して木工兵衞といふ男を聟取した翌朝、久六無事に歸り、この樣子を見、而も豫て遺恨のある木工兵衞を聟とした事を歎き、妻を刺し、木工兵衞を討つて自殺した。(五)大谷左馬之丞といふ美少年、戸塒專九郎と義兄弟の誓があつた。すると專九郎は自ら顏に疵つけてその契を全うした。〔卷二〕(一)越前府中の甚九郎といふ者頓死した。すると次弟甚助は我が子を家督にせんと主張し、三弟甚七はこれを拒みて爭

ゐた。不思議に思うて、如何なる人ぞと問へば、元駿河府中酒屋長藏の子で、十三の時から繼母に道ならぬことをしかけられしより、遺書して家を出でてこゝに來り、天童に養はれて三十年になると語つた。後、府中にて聞けば、その長藏の後は既に斷絕してゐた。二三人伴うて再び彼の洞に行つて見れば、鼓と衣と在つて人はゐなかつた。(五)信田森の下に旅寢して、本社の使者と名のるものの一行と、こゝの社の葛の玉姬の對面の後、酒宴藝盡しとなり、異樣の狐の人に化けたる光景を見

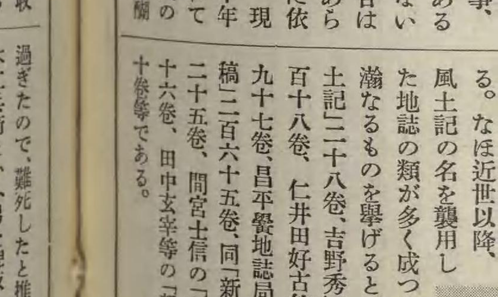
松江重頼【名義】自序の終りに、「親哥のふところにすがりて子と成句をいはざらめかも」とあり、また第十巻自跋の次に、「若竹の馬づれや皆ふところ子」といふ句もあるので、名義の由來が知られよう。【刊行】萬治三年五月。【解説】自跋によると、重頼が十餘年來採拾した自他の發句・附句で、第七巻までの發句にはそれ〴〵その出典たる和漢の詩歌物語などを掲げて註してゐる。第一巻より八巻までが「懐子」、第九・十巻が「懐子伽」となつてゐる。巻頭の自序は、「古今集」の序をもぢつた面白いもので、天岩戸の「あはれあなおもしろ」に俳諧の起原を置いて俳諧の沿革を説き、堂上には貫之・實方に始まるとし、地下には救濟法師に始まるとし、忠盛と白河院、義家と貞任との附合を俳諧の親祖父のやうなるものと云ひ、次に俳諧の體を六義に分つて説き、かくて永正・大永の頃から弘まつたとして、永仙・宗鑑・守武を擧げ、それから入集した人のうち、淺草の入道(徳元)・五條の翁(貞徳)・生玉の隠者(休甫)・誓願寺の僧木食上人・山田の女(美津女)・大寺の前のなにがし(一正)を六歌仙に擬して擧げて月旦し、その他すべて「古今集」の序をもぢつてゐる。第一・二巻が春の發句、第三・四巻が夏の發句、第五・六巻が秋の發句、第七巻が冬の發句・句數・追加、第八巻が四季附句・任口跋、第九巻が四季發句・廻文・句數、第十巻が附句・雑附句・自跋といふ順序である。釋氏任口の跋には俳諧の十徳を説明してゐる。「懐子」には發句二千二句、作者二百九十二人(貞徳二十四・弘永三十・長治三十・昌意三十一・保友三十三・重庸三十八・重方四十三・徳元五十三・重頼五十八・玖也百五)、追加百十句、作者四十五人、「懐子伽」には附句五百句、追加若干、發句一千三十、作者二百六十五人、附句一千二十二を收めてゐる。貞門特に重頼には古典を驅使する傾きがあるが、本集は、かゝる主義の能く見られるものであり、且つその出典の那邊にあるかが示されてゐる點に於て、參考になるものである。【荻原】

懐硯（ふところずゞり）　浮世草子　五册　【作者】井原西鶴。原本は無署名であり、他に確證もないが、古來西鶴の作と傳へ、又特にこれを疑ふべき理由もないから暫く傳に從つて置く。【名義】懐硯は旅硯で、旅中聞く所の異事珍説を集め記した書の義。【成立】傳本甚だ少く、刊記の存するものが知られてゐない。但し序文の終りに「貞享四年花見月初句」とあるから貞享四年の成立と推定される。【諸本】寶永二年刊の今西鶴の署名ある「筆の初そめ」五册は本書より十八話を抜き、新に二話を加へたもの。珍本全集(舊帝國文庫)・西鶴全集(帝國文庫)・西鶴名作集(日本名著全集)・日本古典全集所收。

【梗概】〔巻一〕(一)洪水に流された寺の仁王の片腕を拾ひ上げて、鬼の腕と稱して祕藏し、世人に仁王門の綱と諢名つけられた男の話。(二)親の勘當を受けた大阪者、越中にて三百兩儲け、漸く親の許しを得て、五年目に歸る途中、淀川の舟中で賭博の仲間に入つて、三百兩悉く損し、八軒家に着きながら、又空しく越中に引きかへした男の話。(三)江戸築地に住む浪人の娘、喧嘩から人を斬つて逃げ込んで來た若い浪人を救うた。後娘の一家が極貧に陷りし時、彼の若き浪人奉公の身となり、娘を娶つて舊恩に報い、娘の父も本知に復せられた話。(四)入聟の漁夫久六、漁に出た儘歸らぬ。大風のため破船した噂も立つて一年過ぎたので、難死したと推定し、一門相談して木工兵衛といふ男を聟取した翌朝、久六無事に歸り、この樣子を見、而も豫て遺恨のある木工兵衛を討つて自殺した。(五)大谷左馬之丞といふ美少年、戸塚專九郎と義兄弟の誓があつた。左馬之丞不幸痘瘡のために醜貌となつた。すると專九郎は自ら顔に疵つけてその契を全うした。〔巻二〕(一)越前府中の甚九郎といふ者頓死した。すると次弟甚助は我が子を家督にせんと主張し、三弟甚七はこれを拒んで爭ひ、寡婦は密に金目の品物を隱匿してゐた。かゝる際に甚九郎が蘇生して人々の淺ましい心に愛想つかして妻は離別し、財産は悉く寺に上げ、母と餘生を念佛に暮した。(二)住吉を出帆する船の中にて、或る僧が金箱に縮り附けた物を捐して何かと問うた。その主答へて、破船の際金箱を浮かす物といつた。僧は命のための浮木はないかといへば、その主答に窮した。僧は命に二つなければ、我は歩行道を行くとて別れた。(三)村井源内といふ武士、お蘭と深く契り、毎夜通うてゐた。或る夜松原にて藩中の亂暴者共のために縛せられ、兩刀を負はされる恥辱を受けた。こゝに源内の從弟に鹿谷惣八といふ者があり、その義兄弟の約ある由良門之進より源内の讐を聞いてこれを源内に尋ねた。源内は相手が知れないので怨を忍んでゐた。その讐をなしたものを告げよ、直ちに討たうといふ。惣八は門之進の名を祕するので、遂に從兄弟同士相討つて死んだ。後、門之進は惣八のために彼の亂暴仲間を討ち、自身も討たれて死んだ。(四)足柄山の人跡絶えたる奥に一つの洞があつた。その洞に十三歳位と見える美童が鼓を打つてゐた。不思議に思うて、如何なる人ぞと問へば、元駿河府中酒屋長藏の子で、十三の時から繼母に道ならぬことをしかけられしより、遺書して家を出でてこゝに來り、天童に養はれて三十年になると語つた。後、府中にて聞けば、その長藏の後は既に斷絶してゐた。二三人伴うて再び彼の洞に行つて見れば、鼓と衣と在つて人はゐなかつた。(五)信田森の下に旅寢して、本社の使者と名のるものの一行と、こゝの社の葛の玉姫の對面の後、酒宴藝盡しとなり、異樣の狐の人に化けたる光景を見る話。〔巻三〕(一)伊勢山田の松坂屋淸藏夫妻の睦しき仲を妬み、五人の友人が謀の師と相談して、妻に癲癇の病ありと淸藏を欺きて離緣させた。後淸藏その僞なりしことを知つて大に怒り、五人の家に暴れ込んだが、人々の仲裁で、六人各々その妻を離別して事落着した。(二)七月十日夜琵琶湖上に現はるゝ龍燈を見るものは善人に限ると言ひ傳へた。或る年のその夜、こゝに集ひし者の中に僞りて見たといふ者、正直に見得ずといふ者もあつたが、一人の道人ただ獨り觀音堂に通夜して、その曉に眞の龍燈を見た。(三)大隅の片邊りにある倒石塔の由來話。或る屋敷に勤めし娘が發狂して家に歸された。或る道人に頼んで祈ると、この娘に殺された猫とこの娘に戀して叶はずに死んだ男の祟りといふので、尼にして娘の心は靜まつたが、娘が男の墓に詣でると、墓石は顚倒するのであつた。(四)奈良二月堂に通夜する男女がある。何れも自分の嫁なものに戀されて、その斷念を祈るのであつた。一夜、佛が二人の夢枕に立ち、その願を叶へやる證ぞといつて、二人の間に一個の枕を投げ與へた。二人はこれを緣として夫婦となる。なほ近世以降、風土記の名を襲用した地誌の類が多く成つたが、今そのうちの浩瀚なるものを擧げると、貝原益軒の「筑前續風土記」二十八巻、吉野秀正の「壹岐國續風土記」百十八巻、仁井田好古等の「紀伊國續風土記」九十七巻、昌平黌地誌局の「新編武藏國風土記稿」二百六十五巻、同「新編相模國風土記稿」百二十五巻、間宮士信の「新編相模風土記」百二十六巻、田中玄宰等の「新編會津風土記」百二十巻等である。【武田】

五册【作者】序に「圖粹然序」とある。北條團水であらう。【刊行】不詳【諸本】近世文藝叢書第四所收。【解説】序に「治まれる世に義者張は一徹者といひ、律義なれば阿房といふ。此ふたつの道おこなはれず、只利をもつて義とし、義を以て利とする時は損なし。さればむかし、血氣の勇者朝當詞咎の素刃抜より以下、目玉眼兵衛、鰐金十郎、墓原骨右衛門、夢野市兵衛、狸の十郎、泥の八兵衛なんど聞ゆる、六法八法播磨のはやし、詞の林にかたり傳へし類をあつめ、賞罰をあらはし、勸善

山川原野、名號所レ由、又古老相傳舊聞異事、載二于史籍一言上」とあるが、その起原であると云はれてゐる。この文中に風土記とはないが、現存せる古風土記が、これに照らし合はせて一致する點が多いので、多分さうであらうと考へられる。【沿革】和銅六年の詔に依つて、諸國に風土記が出來たのであらう。現存せる「出雲國風土記」(別項)は、その後二十年を經た天平五年に勘造せられた旨が記されてある。然るに朝廷に集めた筈のこれ等諸國の風土記は、その後散佚したものと見えて、醍醐



の名の樂曲が頗る多い。「漢書」には「孝惠二年(中略)、高祖廟奏二武德・文始・五行之舞一、(中略)、武德舞者、高祖四年作、以象二天下樂一已行武以除二亂也一」とある。又「通典」巻百四十一には「魏文帝受禪後、改二漢巴渝舞一曰二昭武舞一、(中略)、武德樂曰二武頌樂一」とある。我が國に傳はつたものが、これ等と同曲であるか否かは疑はしい。【田邊】

懐子（ふところご）　作詩集　十巻十册　【編者】

つた。(五)下總に荒れた屋敷跡がある。こゝは昔高塚沖之進といふ者の邸で、その奥方の臨終の床の下から、女の姿繪に針を多く刺したのを乳母が發見して主人へ告げたので、主人は病室に出入せしものの咒詛と考へ、二人の女を責めて終に死なせた。所が後それは衣裝繪の雛形であつたと分り、この二人の女の祟りで、乳母は頓死し、主人も變死して跡はかく荒れ果てた。〔巻四〕(一)越後國立山の邊り、嶺梅庵といふ山寺に吐雲といふ清僧が無一物の生活を營んでゐた。それと知らず或る夜、夜盜六人が押入つたので、僧は折節貰ひ合せた酒肴を出して食はせた。賊共この清僧に感じて各々賊となつた由來を懺悔した上、御燈料を寄進せんとするを僧は拒絶し、賊は無理に置いて行つた。(二)岩見國に左近兵衞といふ者の不在中に、留守居の老母が紅に染まつて死んでゐた。隣家の者の金ゆゑの所爲に相違なしと疑つてこれを殺した。ところが死骸を調査の結果、床下より生じた筍に胸を刺されたものと知れたので、左近兵衞は成敗された。(三)出雲大社の邊に丸之介といふ浪人が墮胎藥を賣つて生活してゐた。その娘幾度嫁してもきつと翌朝は返された。それはこの女の眠る時胎衣を被つた多くの兒が來て取りつくためであつた。又或る時はその父の名の文字の表はれた怪魚が海から上つた。これを見て娘は尼となつた。(四)親の承諾なきため、住所を駈落した戀仲の夫婦があつた。女の鍾愛した猿がこの後を追うて來たので飼つてゐた。或る日嬰兒を家に殘して夫婦が隣家に行つてゐると、猿は常に傍で見ておぼえてゐた通りに湯を沸して兒を入れたところ、熱湯であつた爲めに死んでしまつた。夫婦はこれを大に悲しみ、猿は後終に自殺を遂げたといふ筑前の話。(五)讃岐の空樂坊といふ僧が死んだが、不思議にも遺骸が冷却しないので、その儘にして置くと案の如く蘇生して、地獄極樂の樣を物語るので、多くの賽錢が集まつた。役人これを疑ひ、吟味の上その欺僞なることを白狀させた。〔巻五〕(一)日向の榎森與太夫といふ大百姓行方不明となつた。又同國溝越傳助といふもの零落して乞食となつたが、路で與太夫と生寫しの乞食に逢うて、與太夫でないかと尋ねると、さうでなくて大隅の小平太といふものであつた。小平太これを聞いてから惡心を起し、日向に行つて與太夫になり濟し、天狗にさらはれたと見せてその家を取り、與太夫の妻を妻とした。後、疑ふものもあつたが、女はそのまゝに連れ添うた。(二)近江大津の篠原屋利助といふ者、家が衰へたので、一人娘の美人を利用して養子の持參金で挽回せんと思ひ立ち、石瓦を入れた十貫目入の銀箱十個を作り、百貫目の財産ありと世を欺いた。松崎九助といふ者、三十貫目の見せ銀を借りて、まんまと養子となつた。利助は直ちに家督を讓つて廻國に出た。養子が後で事業に失敗し、銀箱を開いて見ると悉く石瓦であつたので、出奔する途中、乞食に自分の衣類を與へて、それを着せた上殺害し、自分が自殺したと世間を誤魔化して、田舍に引込んで生活した。(三)播磨室の男達共、備前の男共と喧嘩して負色見せたが、浪人尾上八九郎の仲裁で物分れとなつた。後、この事八九郎の口より流布せばその恥辱と考へ、男達共相謀つて山中で八九郎を殺し、面皮を剝いで谷に捨てた。八九郎の娘が見物の中に紛れて、犯人の彼等なるを察知し、上に訴へたので男達共は悉く處刑された。(四)飛驒國の山里に一美女があつた。機を織るに他人の三日分を一日で織り、又尾張熱田宮に一日往復で參詣した。所が富有な材木屋の息子に思はれて、その妻となると、ただの平凡な女となつてしまつた。(五)櫻花の盛り、上野に人の出盛る頃、或る花見の宴に伽羅屋新吉といへる美男に、一人の美しい小姓が近づいて來た。人々が座を避けて歸つた後で、この小姓三百兩を取出して新吉に與へ、將來を固く契つた上、その女性たることを打明けた。この女は或る寺僧の思ひ者で、姙娠したので、それとなく新吉に贈つて夫婦としようとしたのであつた。

【解說】本書は「近年諸國ばなし」(別項)と同類の所謂諸國咄の一つで、旅行好の西鶴が諸國巡遊の間に得た傳說・巷談を材としたものである。故に說話の種類も色々であり、又その內容も一樣でない。彼の作中特に優秀な作とは稱し難いが、後への影響は可なりに大きい。巻二第一話「後家になり損なひ」の話は、其積の「世間息子氣質」(別項)の巻四第三話「欲故に禍は身に引掛る虎落形氣」の話に取られ、巻五第三話「明て悔しき養子が銀宮」は、八文字屋本の「風流曲三味線」(別項)の巻一第二章「仕掛のよいからくり聟」と、第三章「一盃喰して乞食にもらふ命」の二章に亙つて取られてゐる。兩書を比較してみると、筋ばかりではなく、文章までも剽竊してゐる。又本書巻三第一話「水浴せは涙川」は、十返舍一九の噺本「慾の川乘合噺」第四話に取られ、巻五第一話「俤の似せ男」は、一九の噺本「善惡附込當座帳」第十話に取られてゐる。かく說話の影響の多いのは、本書は西鶴の他のものに比して說話の興の多いためであらう。

【藤村】

ふところ日記（ふところにっき）　紀行文　【著者】川上眉山　【發表】明治三十年、讀賣新聞。　【刊行】明治三十四年九月、新聲社。眉山全集・現代日本文學全集等所收。　【解說】一時深い懷疑に囚はれた著者が、心機一轉して明治二十九年の暮、飄然旅に出て、先づ片瀨に江見水蔭を訪ひ、それから三浦半島を一周し、浦賀に泊つたことを記述してゐる。「東瀛に物あり。嘗て名づけられて玉卿といふ。化して眉山となれる時、愚なる事太郎兵衞殿の黃牛の如し」といふ書き出しで、全部が新俳文とも、新雅文ともいふべき文體で記述したものである。その才思と才筆とは群を抽んでてゐる。眞に眉山を傳ふるものは、小說にあらずして、恐らくこの一篇であらう。

〔高須〕

蒲團（ふとん）　小說　【作者】田山花袋　【發表】明治四十年九月「新小說」。　【刊行】同四十一年三月短篇集「花袋集」に收錄。花袋全集第一巻・代表的名作選集・現代日本文學全集等所收。　【梗概】既に家庭を持つて、子供も二三人ある中年の文學者竹中時雄は、生活のための日々の平凡な仕事に追ひ立てられて、一代の傑作を書かうといふ勇氣も失せ、勤め先きの仕事もつまらなければ、家へ歸つて見るいつも同じ細君の顏にも倦き果てて、身の置き處もない程の淋しさを感ずることもあつた。ところへ神戶の女學院の生徒の橫山芳子が、彼の作品の賞讚者だと言つて、崇拜の熱意を籠めた手紙を寄せ、是非內弟子にと哀願して來た。彼は女の身として文學者にならうといふ不心得を諭した返事をやつたのであるが、女からまた折返して哀願して來た。それから二人の間に手紙の往復が頻繁になり、遂に女は父母の許可を得、彼の許に寄宿して、麹町の某女塾に通ふ傍ら、彼に種々文學上の教を受けた。彼女は美貌である上に、新時代の女の型をも備へてゐた。彼はこの若々しい魅力のある芳子の捕虜となつた事は言ふまでもない。產後間もない彼の妻との間にいきさつがあつて、他家へ寄宿させることにした。それから一年半ばかりの間に、芳子は二度程故郷へ歸省した。東京の寄宿に彼女がゐる間は、彼はよくそこへ監督かた〳〵出掛けて行つたが、その家の未亡人の話によると、芳子には男の友達を敷いて寢て、その掛夜具の襟に殘つてゐる女の香を嗅ぎながら、「性慾と悲哀と絶望」とに襲はれて泣いた。

【批評】この作者の自然主義的の作品としては、曩に「重右衞門」の最後」(別項)があつたが、それは少數識者の間にしか問題にならなかつた。この「蒲團」は明かに文壇的にも作者自身にも劃時代的のものと言はれ、殊に當時の文藝批評の權威であつた「早稻田文學」は、この作のために諸家の合評を揭げ、また四十一年二月號の同誌は、この作及び作者に、「推讚の辭」を捧げて、日本海沿岸の越後より北上し、北海道に至つたもので、その間の舟航の便に歌はれたのである。日本海沿岸の北陸より西方にかけては、出雲節・出雲崎節・何だい節等と云ひ、出雲より能登・越後地方の開港地に同系統の民謠が生じてゐる。安來節や博多節も、この系統の船唄に關係があると思はれる。更に能登・長崎・鹿兒島地方に、まだら節の分布するのも、これが船唄として傳播せられた事を證する。瀨戶內海方面では、江戶時代には、

サヅサ　押せ〳〵下の關までも、押せは港が近くな

變して、日本海沿岸の越後より北上し、北海道に至つたもので、その間の舟航の便に歌はれたのである。日本海沿岸の北陸より西方にかけては、出雲節・出雲崎節・何だい節等と云ひ、出雲より能登・越後地方の開港地に同系統の民謠が生じてゐる。安來節や博多節も、この系統の船唄に關係があると思はれる。更に能登・長崎・鹿兒島地方に、まだら節の分布するのも、これが船唄として傳播せられた事を證する。瀨戶內海方面では、江戶時代には、

サヅサ　押せ〳〵下の關までも、押せは港が近くな

歌、俚謠集所載八章)・神奈川縣船唄(同書所載十四章)・千葉縣船唄(同書所載七章)・鹿兒島縣船唄(同書所載三章)・島根縣船唄(同書所載二十八章)・福井縣船唄(俚謠集拾遺所載四章)等があり、これ等は、何れも普通の船唄より歌詞が長く、口說歌の形式を持つものもあり、祝儀の意味を歌つた歌が多く、共通の特色があつて、普通の船唄とは異なつた特色を持つものである。その起原は木遣音頭にあると云はれる如く、音頭歌と類似した歌ひ方のものが多い。

【御座敷船唄】船唄は、また酒間の興を添へる

の許可を得、彼の許に寄宿して、麹町の某女塾に通ふ傍ら、彼に種々文學上の教を受けた。彼女は美貌である上に、新時代の女の型をも備へてゐた。彼はこの若々しい魅力のある芳子の捕虜となつて事は言ふまでもない。産後間もない彼の妻との間にいきさつがあつて、他家へ寄宿させることにした。それから一年半ばかりの間に、芳子は二度程故郷へ歸省した。東京の寄宿に彼女がゐる間は、彼はよくそこへ監督かたがた出掛けて行つたが、その家の未亡人の話によると、芳子には男の友達が幾人かあつて、盛んに文通もするし、往來もしてゐるとのことだつた。それを未亡人はいかにも放埓の女らしく惡しざまに言つたが、彼は新時代の女は舊式の人間の氣持で律することは出來ないと、芳子のために頻りに辯護した。彼女の三度目の上京の途次、神戸時代に戀仲になつてゐた同志社の學生田中秀夫と相携へて嵯峨の方に小さな旅行を試みた。後になつてそのことが解ると彼の煩悶は甚しかつた。自暴氣味になり、酒を呷り、細君に辛く當り、酔つて便所に寢倒れたり、方々を出歩いたりした。やがて芳子の情夫が彼女の後を追うて上京して來た。二人の間に醜い關係はないと聞いて、彼は戀する女に對する犧牲的の氣持から、つとめて「溫情ある保護者」の立場に立たうとした。併し芳子とその男とが屢々媾曳などすることを知つては、彼は監督者の責任として、芳子の父親を呼寄せて色々相談するうちに、彼女が既に男と肉體的の關係もあることが解つて、竹中は遂に意を決して父親に連れさせて郷里へ歸した。そのあとで、彼はひとり二階の彼女の居間だつた部屋にあがつて、まだ送らずにあつた彼女の蒲團を敷いて寢て、その掛夜具の襟に殘つてゐる女の香を嗅ぎながら、「性慾と悲哀と絶望」とに襲はれて泣いた。

【批評】 この作者の自然主義的の作品としては、曩に「重右衞門の最後」(別項)があつたが、それは少數識者の間にしか問題にならなかつた。この「蒲團」は明かに文壇的にも作者自身にも劃時代的のものと言はれ、殊に當時の文藝批評の權威であつた「早稻田文學」は、この作のために諸家の合評を揭げ、また四十一年二月號の同誌は、この作及び作者に「推讃の辭」を呈した程であつた。作者の或る時期に於ける內的生活の蔽ふ所なき眞摯な告白と見られ、且つその現實暴露の熾烈な精神が文壇及び世間に甚大なセンセーションを起し、我が國の自然主義運動が、こゝに第一の烽火を擧げたとまで言はれる。　　（中村（星））

船唄 ふなうた　歌謠　【名稱】船頭歌・櫂歌・棹の歌とも云ふ。また支那風に欸乃とも記す。

【解說】奈良朝時代にも船歌のあつたことは、「萬葉集」に船人唱などの語が見えるので明かであるが、現存の最も古きものは、「土佐日記」に出た、

春の野にてぞねをば泣く、わが薄にて手を切る切る摘んだる菜を、親やまぼるらん、姑や食ふらん、かへらや。夜んべのうなゐもがな、錢乞はん、空言をして、おぎのりわざをして、錢も持て來ず、おのれだに來ず。

猶こそ國の方は見やらるれ、我父我母ありとし思へば、かへらや。

と云ふ船歌である。「狹衣物語」や「住吉物語」等にも船歌の斷片が出てゐる。江戸時代の流行唄には船唄から出たものが多い。追分節も起原は馬士唄(別項)であるが、それが船歌に變じて、日本海沿岸の越後より北上し、北海道に至つたもので、その間の舟航の便に歌はれたのである。日本海沿岸の北陸より西方にかけては、出雲節・出雲崎節・何だい節等と云ひ、出雲より能登・越後地方の開港地に同系統の民謠が生じてゐる。安來節や博多節も、この系統の船唄に關係があると思はれる。更に能登・長崎・鹿兒島地方に、まだら節の分布するのも、これが船唄として傳播せられた事を證する。瀨戸內海方面では、江戸時代には、

サッサ押せ〳〵下の關までも、押せば港が近くなる。

の如き船唄が名高かつた。この歌は更に日本海沿岸地方に廻つて、越後方面にも傳へられた。甚句も船唄として歌はれたものが多い。鹽釜甚句の如きは、その名高いものである。磯節や下田節や關の五本松の如き海岸の民謠は、多く船唄として歌はれるものである。下田節は舟航の便によつて三重縣にも傳へられてゐる。また大漁節も船唄に用ひられる。この外名高い船唄を二三次に揭げる。

安藝の宮島廻れば七里、浦は七浦七ゑびす(宮島節)

三浦三崎でどんと打つ波は、可愛い男の度胸だめし(三崎甚句)

船頭可愛や音戸の瀨戸で、一丈五尺の櫓がしわる(瀨戸內海船唄)

【祭禮船唄】漁業・舟航の勞作民謠としての船唄の外に、船祭のやうな祭禮儀式用の船唄がある。その古きものでは、山王七社權現祭禮船謠(別項)が名高い。江戸時代初期の御船唄(別項)もこの種に屬する。明治以後の書籍に載つたものでは、和歌山祭禮船唄(日本歌謠類聚所載六十一章)・宇和島御座船唄(日本歌謠類聚所載九十二章、俚謠集拾遺所載五十一章)・嚴島御島廻歌(俚謠集所載八章)・神奈川縣船唄(同書所載十四章)・千葉縣船唄(同書所載七章)・鹿兒島縣船唄(同書所載三章)・島根縣船唄(同書所載二十八章)・福井縣船唄(俚謠集拾遺所載四章)等があり、これ等は、何れも普通の船唄より歌詞が長く、口說歌の形式を持つものもあり、祝儀の意味を歌つた歌が多く、共通の特色があつて、普通の船唄とは異なつた特色を持つものである。その起原は木遣音頭にあると云はれる如く、音頭歌と類似した歌ひ方のものが多い。

【御座敷船唄】船唄は、また酒間の興を添へる座敷唄としても用ひられた。「色道大鏡」に、「船子やうの歌ふ船唄の類にはあらず、時節相應の事を善く云ひ並ぶる作り船唄の事也」と云へる通りである。「淋敷座之慰」に出た八島くどき船唄・お江戸くどき船唄・若衆くどき船唄・重い物くどき船唄がそれで、この中、お江戸くどき船唄は、「竹齋物語」にも船唄として揭げてゐる。「松の葉」卷三の船唄もこの種のものに屬する。現今の追分節や安來節が流行唄化し、座敷唄化して用ひられるのも同じ現象である。

【參考】近代歌謠集(藤田德太郎)○小唄傳說集(藤澤衞彥)○山の民謠海の民謠(松川二郎)　（藤田）

船戸神 ふなどのかみ　神話　【名稱】衝立船戸神とも云ふ(古事記)。「ふなと」の「ふ」は經、「と」は處、「な」は勿であり、從つて「つきたつふなとのかみ」は、「物を衝き立てて、こゝから先へは經來るなと障へ留む處」に坐す神の義(古事記傳)が通說となつてゐるが、近くは「ふなと」は岐處即ち墓地の意であつて、「つきたつ」は築立の義であり、「つきたつふなとのかみ」は、その靈神の義であるとなす說がある(日本古語大辭典)。祝詞及び「日本書紀」等に見ゆる久那

斗神は、この神と同一であるとされる。「ふなと」が勿經處であるやうに、「くなと」は勿來處であるといふ見方を採る者も、若しくは「くなと」は、「ふなと」（柩處）の轉呼であるといふ見方を唱へる者も、これ等の二神を同一神とする點では一致してゐる。【本質】船戸神は道の關の神で、自然崇拜の一なる岩石崇拜の系統を引いた神であるとせられ（古事記新講）、また柩處即ち墓地の靈神とせられる（日本古語大辭典）。そして兩説とも、邪靈を障止することを職能とすると解してゐる。自分は羅馬宗教に於けるテルミニュス（Terminus）、希臘宗教に於けるヘルメス（Hermes）等の如く、或る社會集團が、他者（異民族でも、死界のものでも、邪靈でも）に對する恐怖・危惧の念から、自分の住む地域にそれ等のものの侵入することを阻止したいとする欲求の産物と考へたい。この神と來那斗神は同一の職能を有し、その名もまた同義であるところから、同一神とせられてゐるし、また寒神・道祖神・道俣神等とも同一化せられてゐる。船戸神とこれ等の神との關係は多樣であらう。即ち（一）同一神の別名といふ關係、（二）同じ觀念・信仰から生れて、稱呼だけが異つてゐるといふ關係、（三）本來職能を異にした神と混同したといふ關係（道祖神との關係は確かにこれである）などがあるであらう。これ等の關係につきては、從來學者の間にさまざまの推定説が存してゐる。

【神話梗概】伊邪那岐命が、伊邪那美命を黄泉國に訪れた後、穢い國に行つてゐたから身の禊をしようと云つて、日向の橘小門で禊祓をした。その時投げ棄てた杖から衝立船戸神が化生したと「古事記」に出てゐる。また「日本書紀」一書によると、伊弉諾尊が黄泉國から逃げ出すとき、桃の實を投げて、伊弉册尊に遣はされた八色雷公を追ひ歸した後、その杖を投げて、「自レ此以還雷不二敢來一」と云つたとあり、そして「是謂二岐神一、此本號曰二來名戸之祖神一焉」とつけ加へてゐる。岐神は同じく「紀」一書に「岐神此云二布那斗能加微一」とあるから、この神話も、「ふなと」の神の物語としてよいわけである（岐神は、本來は「ちまたのかみ」であつたかも知れぬ）。また「紀」一書に、經津主神が岐神を嚮導としてこの國を周遊し、まつろはぬ者共を平げたといふ神話が載つてゐる。

【解説】「ふなと」の神が杖から化生したとか、杖そのものがこの神であるとか説く神話は、「ふなと」の神の職能の分化と關係を持つてゐるであらう。境界を護る神は、希臘のヘルメス神（Hermes）、メキシコのヤカテクトリ神（Yacatecutli）が證示するやうに、旅行を掌る神、旅人を護る神になる强い傾向を有し、而して旅行に杖は附物であるため、杖そのものが旅行神の標徴であると考へられるからである（このことについては、「ちまたのかみ」參照）。「ふなと」の神が經津主神の嚮導となつて、この國を周遊したとあるのは、明かにこの神が旅行神としての面目を帶ぶるに至つたことを示してゐる。

［松村］

船橋　「夫婦物の諸曲」を見よ。

船辨慶　「判官物の諸曲」を見よ。

船辨慶　所作事　「本行物」を見よ。

腐肉團　政治小説　【作者】後藤宙外　【刊行】明治三十三年七月、春陽堂。

【梗概】千葉縣下の富豪で藍川一雄といふ青年、彼はよき妻とよき友を持ち、常に政界の腐敗を慨いて革新を加へようと思つてゐた。偶々議會で地租增徴案が可決されようとする時、彼は非增徴派を代表して上京、同派の議員を歷訪して賛助を求めた。彼は親しく議員の多くが金によつて左右せられることを知ると共に、自分も待合政治に中毒し、若子といふ藝妓を落籍して妾とするに至つた。かうして純潔な青年一雄も、政界溷濁の氣に浸みて放蕩兒となつたので、彼の妻はこれを憂ひ、親友秋月正に忠告して貰つたが、一雄は頑として應じない。秋月は憤つて絶交した。さうして一雄はその妻を離緣しようとしたが、妻は姙娠してゐるので、策士某の斡旋で涙を呑みつつ藍川家に戻つた。

【批評】當時、社會小説出現の待望が批評家の間に起り、作者の中にも漸くその方面に筆を染むるものが現はれ、内田不知庵（魯庵）は、三十一年頃より續々作品を發表し、小栗風葉も「政鷲」（別項）を公にするに至つた。これ等の刺戟が本篇の創作を促したものらしい。宙外は明治三十一年十一月の「新小説」に於て政治小説を論じ、「政治小説は政治家を主人公とするも、ただ政治上の行動のみを寫すに止まらず、その私生活方面にも筆を着け、例へば彼等の家庭に於ける妻妾の關係、朋友に對する交際、待合に於ける書策運動、高利貸との交渉などを背景として、主人公の政治的公生活を主として描くにある」といふ旨を述べたが、本篇はその抱負を實現せんがために著はされたものである。しかし内容空疎に近く、描寫も冗漫で失敗の作である。ただ時代の要求に應じようと力めたところに、一つの意義があると云へる。

［高須］

船打込橋間白浪　脚本　三幕　世話物　【作者】二代河竹新七（歌阿彌）　【通稱】鑄掛松　【諸本】歌阿彌全集第五卷所收。　【初演】慶應二年二月、江戸守田座。

【役割】鑄掛屋松五郎後に盗賊鑄掛松（市川小團次）、文藏妻お咲後に鑄掛松女房お咲（尾上菊次郎）、花屋佐五兵衛・島屋文藏實は梵字の眞五郎（關三十郎）、刀屋娘お花・藝者お組（坂東三津五郎）、森戸屋宗次郎（澤村訥升）、鳶の者くりから傳次（大谷友右衛門）等。

【梗概】〔序幕〕天秤棒を肩にあてて日がな一日稼いでも、やつとその日しか暮せない鑄掛屋の松五郎は、今日しも、夏の炎天に花水橋（吾妻橋）にさしかゝつた。見ると橋の下の涼み船には島屋文藏が妾お咲を相手に酒をのんでゐる。鑄掛松はつく〴〵馬鹿々々しくなつたので、鑄掛の荷を川へ投げ込んで、その夜から人の物は我が物と盗人に宗旨替へした。〔二幕〕花屋佐五兵衛は、祠堂金の百兩を本山へ屆けようと急ぐ道で、惡者の三次等に奪はれたので、面目なさに首をくゝらうとするのを、鑄掛松は金を恵んで助けてやる。文藏の妾お咲は母親お虎婆に貸してやる二十兩の金がないため、刀屋の番頭五郎兵衛を欺して金を奪はうと思ひ、且那の留守を幸ひに庭口から忍ばせた。松五郎もお咲の許へ忍んで來、五郎兵衛は脅かされて追ひ出される。お咲は松五郎を見て驚いたが、左の腕の彫物から五年前關宿の船の中で一夜の契りを結び、そのまゝ別れた男だとわかり、打解けてゐるところへ旦那の文藏が歸り、女をば松五郎に與へる。文藏はお咲の兄であり、梵字の眞五郎といふ盗人だつたのである。〔三幕〕同朋町藝者屋の奥座敷では、森戸屋宗次郎が五十兩の金のために惱みぬいた挙句、深い仲の藝者お組と一緒に死なうと覺悟するが、門口でその話を聞いてゐた松五郎夫婦は、五十兩の金包を

投げ入れて助ける。それから名越まで來て、ふと雨宿りをした家は、以前助けた花屋の佐五兵衛の家なので、立ち寄つてゐるうち、佐五兵衛はお咲の實父であることが分つたが、そこへ弟の與之助が來て、宗次郎は極印金を使つた爲め、盗賊の疑ひから入牢したと知らせるので、その申譯に松五郎は切腹して死ぬ。

【解説】この作の一番目には、「生立曾我」がおかれてあつて、原名題を「富治三升扇曾我」と呼んだが、この鑄掛松の條は全く獨立した世話狂言になつてゐる。自浪物中での一代表作

【解説】この話は、二樣に用ひられる。（一）美的判斷によつて否定されたもの即ち醜と同義の場合と、（二）美的に無關係な對象のことをいふ場合と。ハルトマンの美學では、不美とは美に對して全く無關係なもので、美の否定でもなく、醜でもなく、それは美の缺乏を意味すると説かれてゐる。

【參考】Hartmann：*Aesthetik. II.*　［村田］

不比等　漢學者　【姓】藤原朝臣。不比等は史とも記す（懷風藻・日本紀の持統紀三年二月の條）。【生歿】齊明天皇の四年に生れ、養老三位を授けられ大納言となる。慶雲元年正月（四十七歳）從二位となり、封八百戸を增さる。和銅元年正月（五十二歳）正二位、三月右大臣となり、更に養老二年（六十一歳）太政大臣に任ぜられたが固辭した。同四年三月（六十三歳）帶刀の資人三十人を加へらる。八月病篤く、廢三十人を賜ふ。又詔して天下に大赦を行ひ、都下四十八寺に藥師經を誦せしめられたが、幾干もなく薨去。遺言によつて佐保山の椎岡に火葬す。十月、大納言長屋王・中納言大伴宿禰旅人をその第に遣はして太政大臣正一位を贈

呼たけが異つてゐるといふ關係（三）本來職能を異にした神と混同したといふ關係（道祖神との關係は確かにこれである）などがあるであらう。これ等の關係につきては、從來學者の間にさまざまの推定説が存してゐる。

【神話梗概】伊邪那岐命が、伊邪那美命を黄泉國に訪れた後、穢い國に行つてゐたから身の禊をしようと云つて、日向の橘小門で禊祓をした。その時投げ棄てた杖から衢立船戸神が化生したと「古事記」に出てゐる。また「日本書紀」一書によると、伊弉諾尊が黄泉國から逃げ

神としての面目を帶ぶるに至つたことを示してゐる。　〔松村〕

船橋 ふなはし 「夫婦物の謠曲」を見よ。

船辨慶 ふなべんけい 「判官物の謠曲」を見よ。

船辨慶 ふなべんけい 所作事 「本行物」を見よ。

腐肉團 ふにくだん 政治小説【作者】後藤宙外【刊行】明治三十三年七月、春陽堂。

【梗概】千葉縣下の富豪で藍川一雄といふ青年、彼はよき妻とよき友を持ち、常に政界の腐敗を慨いて革新を加へようと思つてゐた。偶々議會で地租增徵案が可決されようとする

交際、待合に於ける畫策運動、高利貸との交渉などを背景として、主人公の政治的公生活を主として描くにある」といふ旨を述べたが、本篇はその抱負を實現せんがために著はされたものである。しかし內容空疎に近く、描寫も冗漫で失敗の作である。ただ時代の要求に應じようと力めたところに、一つの意義があると云へる。　〔高須〕

船打込橋間白浪 ふねへうちこむはしまのしらなみ 脚本　三幕　世話物【作者】二代河竹新七（默阿彌）【通稱】鑄掛松【諸本】默阿彌全集第五卷

五郎兵衛に脅かされて逃げ出される。お咲に松五郎を見て驚いたが、左の腕の彫物から五年前關宿の船の中で一夜の契りを結び、そのまゝ別れた男だとわかり、打解けてゐるところへ旦那の文藏が歸り、女をば松五郎に與へる。文藏はお咲の兄であり、梵字の眞五郎といふ盜人だつたのである。〔三幕〕同朋町藝者屋の奧座敷では、森戸屋宗次郎が五十兩の金のために惱みぬいた擧句、深い仲の藝者お組と一緒に死なうと覺悟するが、門口でその話を聞いてゐた松五郎夫婦は、五十兩の金包を

投げ入れて助ける。それから名越まで來て、ふと雨宿りをした家は、以前助けた花屋の佐五兵衛の家なので、立ち寄つてゐるうち、佐五兵衛はお咲の實父であることが分つたが、そこへ弟の與之助が來て、宗次郎は極印金を使つた爲め、盜賊の疑ひから入牢したと知らせるので、その申譯に松五郎は切腹して死ぬ。

【解說】この作の一番目には、「生立曾我」（おひたちそが）がおかれてあつて、原名題を「富治三升扇曾我」（ふじとみますすゑひろそが）と呼んだが、この鑄掛松の條は全く獨立した世話狂言になつてゐる。白浪物中での一代表作で講談に取材してゐる。白浪になる動機は、「鬼あざみ」の動機と共に注目すべきもの、只管歡樂を求め、この世で榮耀がしたいと云ふのが根本の動機となつてゐて、江戸末期の捨鉢的な頽廢的な時世相を、巧みに寫實的に描破してあると言つてよい。　〔河竹〕

【參考】河竹默阿彌○續々歌舞伎年代記

舟船 ふねふな 能狂言【解說】西の宮へ遊山に出掛けた主と冠者は、神崎の渡しで船を呼ぶ。「船（ふな）や船（ふな）や」と呼聲を聞きとがめた主は「ふね」だといふ。冠者は「ふな」だと言ひ張り「ふねつき」か「ふなつき」かといふ爭ひとなり、互に和歌を例に取つて色々言ひ合つても果しがないので、今度は謠で諍はうとて、主が「山田矢走の渡し舟の、夜は通ふ人無くとも、月の誘はゞ自ら、舟もこがれて出づらん」と言ふと、冠者はその先は何でござると言つて、「船人（ふなびと）もこがれ出づらん」ではないかと突込むといふ筋。類曲に「花爭」（はなあらそひ）がある。これは櫻花を花だ櫻だと言ひ合つて、やはり謠で諍ふ事になるものである。　〔瀧田〕

武舞 ぶのまひ 「舞樂」を見よ。

不美 ふび 美學〔獨〕Das Unschöne.

【解說】この語は、二樣に用ひられる。（一）美的判斷によつて否定されたもの即ち醜と同義の場合と、（二）美的に無關係な對象のことをいふ場合と。ハルトマンの美學では、不美とは美に對して全く無關係なもので、美の否定でもなく、醜でもなく、それは美の缺乏を意味すると說かれてゐる。

【參考】Hartmann: *Aesthetik. II.*　〔村田〕

不比等 ふひと 漢學者【姓】藤原朝臣。不比等は史とも記す（懷風藻・日本紀の持統紀三年二月の條）。【生歿】齊明天皇の四年に生れ、養老四年（一三八〇）八月薨ず。享年六十三。【墓所】大和國磯城郡多武峯【家系】「尊卑分脈」卷一

鎌足
- 定慧
- 不比等
  - 武智麻呂（南家）
  - 房前（北家）
  - 宇合（式家）
  - 麻呂（京家）
  - 宮子（文武帝妃）
  - 光明子（聖武帝妃）
- 氷上娘

には、「鎌足の忌避する所ありて、山科田邊史大隅等が家に養はれて史を名とする」と見える。「大鏡」下に、天智帝、女御を鎌足に賜ひ、「若し男を生まば卿が子となし、女を生まば朕が子となさん」と宣うたが男を生んだ。因つてこれを鎌足の子として不比等と稱したと。蓋し偉人を殊更に偉大ならしめようとするための後人の業であらう。【閱歷】持統帝の三年二月（三十二歲）、直廣肆より判事となる。同十年當時、直廣貳であつたが、この年十月、資人五十人を賜はる。文武帝の二年八月（四十一歲）詔して宣はく、「先朝の賜ふ所の藤原朝臣の姓は、宜しく不比等をして承けしむべし」と。その後、直廣壹に進む。同四年六月、律令の撰定に參畫した。大寶元年三月（四十四歲）正三位を授けられ大納言となる。慶雲元年正月（四十七歲）從二位となり、封八百戸を增さる。和銅元年正月（五十一歲）正二位、三月右大臣となり、更に養老二年（六十一歲）太政大臣に任ぜられたが固辭した。同四年三月（六十三歲）帶刀の資人三十人を加へらる。八月病篤く、度三十人を賜ふ。又詔して天下に大赦を行ひ、都下四十八寺に藥師經を誦せしめられたが、幾干もなく薨去。遺言によつて佐保山の椎岡に火葬す。十月、大納言長屋王・中納言大伴宿禰旅人をその第に遣はして太政大臣正一位を贈り、文忠公と諡せられた。その後、寶字四年八月更に近江國十二郡を追封して淡海公となされた。【著作】大寶律令（別項）の撰定に與つて甚だ功績があつた。その後、養老刊修の律令にも、不比等はその委員長となつた。　〔山岸〕

【參考】懷風藻○大鏡（下）○閑窓倭筆（上）○多武峯略記○玉勝間（卷七）○扶桑略記（第六）

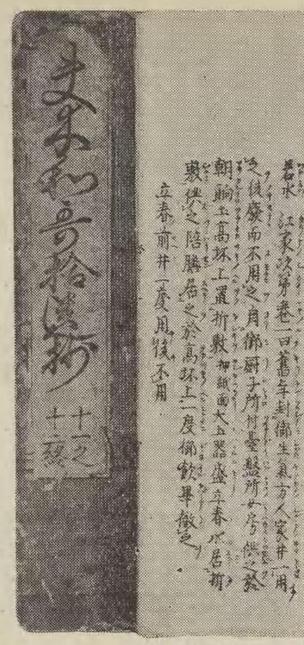
夫木和歌抄 ふぼくわかせう 私撰集　三十六卷【著者】藤原長淸【別名】「夫木和歌集」とも。【名義】編者、この書を作れるとき、夢に、中納言匡房から「扶桑集」と名づけよと告げられ、その由を冷泉爲相に語りしところ、扶桑は日本國の總名であるからとて、「扶」の傍と「桑」の木とをとり、名づけたと傳へられる。【成立】未詳であるが、編者長淸は冷泉爲相に學んだ人で、「勅撰作者部類」に、「五位勝間田遠江守藤原、玉葉、雜一、一首」と見え、「玉葉集雜一」に、「したをきもかつほにいつる夕露にやとかりそむる秋の三日月」の歌があり、又本書第三十六に、永仁二年藤原長淸が家歌合の歌として、冷泉爲相の歌が載せられてゐる點から、伏見天皇の朝、又はこれを距る遠からざる頃の撰と推定されてゐたが、風卷景次郎氏は、延慶以前から着手され、同三年十二月以前に出來上つたものと推定してゐる。【由來】本集の跋に、昔、中頃の歌仙の家集並に代々の勅撰にもれた歌を、今後の勅撰の折のために、又歌に志ある人のために集め置ける由が記されてゐる。【諸本】寬文五年出雲寺版。この本を基とした國書刊行會本には索引を附してゐる。國歌大系にも收む。

【內容】春（卷一より六）、夏（卷七より九）、秋（卷十より十五）、冬（卷十六より十八）、雜（卷十九より三十六）に部立し、題によりて次第してある。載するところの歌は、萬葉以後の家集・私撰集・歌合・百首などから、從來の撰にもれたものを採り、用語・句格に於て特異なものがある。勅撰集の場合には、一定の標準規矩に律せられ不自由があつたが、私撰なる本書には、俊賴の奇歌や、西行が蝦夷言葉を用ひて作つた歌などをも載せてある。【價値】編纂の目的が他に逸せる作の輯集にあつたことは、今日にして見れば、散逸した古集の歌を見るに、最も重要な文獻となつた。今に傳ふる家集・歌合などの不備も、これによつて補正するを得ること多大である。

【時代との關係】本書の作られた頃、「現存和歌六帖」「風葉和歌集」「新和歌集」「續門葉和歌集」等、數種の私撰集が編纂されたが、本書も亦その一と云へるであらう。而して推定された本書の成立年代は、大覺寺統に二條家、持明院統に京極家がそれぞれ用ひられ、兩統兩派の對立した時である。本書が平穩な歌のみに限らず、語彙・句法の自由なる歌をも多く載せた點は、この情勢と幷せ考へて注目すべく、神谷保朗氏の「帝國歌學史」には、「思ふに長淸は當時の歌壇に於ける新派鼓吹者の代表者とし

て、歌壇革命の第一歩としてこれを收錄したるものなるべし」と評してゐる。

【關係書】抜書の類には、「夫木集抜書」二卷（連歌に便ある歌を抜書したもの、如是庵西順の奥書がある）、「夫木和歌集古調」二卷、「袖中夫木和歌集」四卷（共に石津嘉澄の著）があり、索引の類には、「夫木類葉抄」（寫）十二卷、「夫木類句」（寫）三十卷があり、「夫木類標」三卷（高田與清著）は、集中の地名を、いろは引としたものである。



夫木和歌拾遺抄

【研究註釋書】「夫木緊要」三卷（橘守部著、集中の歌をぬき、字眼・實句・句法などを說けるもの）、「未木和歌拾遺抄」六卷（小幡正信著、一名を「歌林拾葉抄」と呼び、本書中より、故事・故話をふまへた歌八百餘首を抜き、出典をあけて說いたもの）などがある。

【松浦】

史邦（ふみくに）　俳人【姓】中村氏【字】春庵【號】五雨亭【生歿】未詳【俳系】芭蕉門【閱歷】尾張犬山の人、尾張德川家の重臣で犬山に蟄居を命ぜられた寺尾土佐守直龍の侍醫であつた。後、辭して京に上り、仙洞御所に仕へた。元祿四年芭蕉から、木曾の檜笠、越の菅蓑に桑の杖ついた自畫像と、二見の文臺・硯箱とを貰ひ、なほいつの頃か「嵯峨日記」をも貰つたらしい（小文庫）。この二見文臺は角田竹冷の手に入つたが、裏に「元祿四芭蕉」とあるといふことである（鼇雨窓俳話）。この頃浪々の身となり、正秀（まさひで）（別項）から浪人生活を問はれて、「冬籠素燈一本具足箱」と答へてゐるから、餘ほど貧乏したらしい。元祿五年江戸へ下り、根津宿之助と假稱した。恐らく根津に住んだのであらう。丈草とは共に直龍に仕へた關係から特に親しかつた。芭蕉歿後、杉風（別項）が深川の長溪寺に築いた芭蕉の發句塚を拜して一句を手向けてゐるが、なほ芭蕉の遺句遺文を集めて「芭蕉庵小文庫」（別項）を編してゐる。これで見ると、彼は芭蕉の遺稿を、多く持つてゐたものらしい。なほ門人種文の「俳諧猿舞師」で見ると、彼に「粟津日記」「鎌倉日記」のあつたことが知られる。（丈草參照）

【作風】「芭蕉庵小文庫」の題號を難じてゐる許六は「史邦・木導は風雅のつよみに倒れ」（風俗文選雜說）と例の惡評を弄してゐるが、支考は「かり寢せん味方が原の女郎花」といふ史邦の句を評して、「馬上に褥を横て吟ずる人は、今の世にはあまた侍らじを、味方がはらのかり寢せんといへる、此郎の風流ならずや」（葛の松原）と云つてゐるのは、剛の中よく柔の存する意かと思はれるが、史邦の調にはさる所があるかと思はれる。

【萩原・志田】

【參考】宇陀法師森川許六○俳林小傳中村光久○猿蓑遊志抄松本樗柯○俳諧人物便覽三浦若海○聽雨窓俳話○五雨亭史邦市橋鐸（にひはり昭和二ノ八）

文づかひ（ふみづかひ）　小說【作者】森鷗外【發表】明治二十四年一月、「新著百種」第十二號。【刊行】同二十五年、短篇集「水沫集」に收む。鷗外全集第五卷所收。

【梗概】日本の少壯士官小林は、獨逸に留學中ザックセン軍團に所屬して秋の演習に參加した時のことだつた。本部の宿舍にあてられたデウベンの城へ行つて、そこに住むビュロウ伯一家に歡待された。食卓に五人の姫達も列つた中に、上衣も裳も黑を着た一人が一番美しく氣高く見えた。それはイイダと云つて、小林と同行した中尉フォン・メエルハイム男爵とは許婚の仲だつた。その夜食後イイダ姫がピアノを彈じてゐると、訝しくも城外に笛の音が起り、たどたどしくもピアノに合せようとするので、姫は遽に彈奏を中止した。聞けば、それは缺脣（みつくち）の羊飼の業で、六つ七つの童の頃姫が與へた笛を吹き得ぬのを不愍がつて、醫師に口を縫はせてやつた者だつた。それからといふもの、童は城に止つて羊飼となり、私かに遠くから姫を守護することを忘れないといふ。翌日の夕方、城内の尖塔の下で姫達と共に笑ひ興じてゐる時、ふとイイダ姫は小林を塔の巓へ案内しようと誘つた。それに從つて階段を上つて頂上に行くと、思ひがけなくも姫は一通の手紙を出し、國務大臣フアブリイ伯の夫人に人知れず屆けてくれと頼むのだつた。故は知らず承諾して首府ドレスデンに歸つてから、やがて機會を得てその依頼を果すことが出來た。そのうち初春になつて、小林も宮廷に招かれて謁見を賜ふことになると、王妃の側に侍く女官は先の日のイイダ姫だつた。怪しむ間もなく賑かな舞踏が始まつたが、その間にイイダ姫は小林を誘つて一間に伴ひ、去年文づかひを頼んだわけを物語るやう——メエルハイムとは許婚の間柄であるが、どうしてもあの人を慕ふ心が湧かないばかりか、堪らないほど嫌ひである。何故といふこともないが、ただ無暗に厭で、とても夫婦になどなる氣はない。それを父に申出たが門閥血統妄信の權化たる人が素直に肯いてくれる筈もなかつた。羅馬教の國ならば尼にでもならうと思ふが、それも叶はぬザックセンでは宮廷に身を逃れるより外なかつた。そこで國務大臣たる伯母に頼んで、臨時の女官として呼び寄せて貰ひ、陛下のお望みと云つて遂に永く留まることになつた。郵便や使に託さずに小林に手紙を頼んだのは、萬一洩れて邪魔がはひるのを恐れた爲めだつたが、お蔭で煩惱の闇路から救はれることが出來た。メエルハイムなどはすぐに自分のことを忘れるだらうからいゝけれど、ただ痛ましいのは羊飼の童だつた。自分が城を出ると間もなく、川に身を投げて死んださうである。——語り終ると午夜の時計が朗かに鳴つた。そして夕餉に急く舞踏客の間に交つて姫は急いで立つて行つたが、「をり〳〵人の肩のすきまに見ゆる、けふの晴衣の水いろのみぞ名殘なりける。」

【批評】作者の創作第三作で、主としてドレスデンを說話の地となしてゐる。そこの王宮の夜會や拜謁の有樣は親しく目擊したのをその儘に寫したのだと云はれる。演習地の貴族の城邸で見た謎のやうな黑衣の姫が、若くして尼の如く、王宮の奥深く身を埋める物語に妖（あや）しき缺脣（みつくち）の牧童を點じて、神祕的な色彩をさへ加へてゐる。「戀ふるも戀ふるが故に戀ふるとこそ聞け、嫌ふもまたさならむ」とだけで許婚を厭ふのは、姫の性情をよく語ると共に、從來にない構想上の新味であらう。日本人が單なる傍觀者たる上に、獨逸の上流社會を題材としてゐるので、滯歐の記念たる作品中、最も浪漫味の勝つたものと云つてよい。また觸らしたのに憤激したのが動機となつて、支考の「俳諧十論」（別項）攻撃を主に、豫ねて支考の云ふ貞享式・芭蕉式・東花式・白馬經・二十五箇條・續猿蓑等の僞書なるべき事を攻撃し、支考の言ふ所の僞託妄言なるべき事を痛論したものである。越人の言ふ所が事實を得てゐるやうに思はれる點が多いけれども、餘りに感情に馳せ過ぎて私行の暴露や人身攻撃に渉る點があつて、純理的批判の埒外に脫出してゐるところも多く、この點に於て非點さるべきものがある。なほ享保八九年に於ける支考と

である。本書及び「猪の早太」に云ふ所には、越人の誤解・邪推等もないではないやうであり、又越人の偏狹と思はれる點もないではない。「續猿蓑」（別項）を一向に支考の僞撰と見た如きも、越人の見過ごしで、却つて當時越人が芭蕉に疎遠になつてゐた事を暴露するものであり、「古池」の句に對する見方も適正を缺く嫌ひがあり、假名詩に對する考へ方も偏狹に過ぎる。大體支考の如き複雜な所業の人を觀る事は困難な事であるので、それを越人の如く感情に逸（はや）つて見ては、得て中正を失し勝

延曆二十年（二十七歲）閏正月大判事、同二十二年三月右衞士少尉、五月左衞士少尉に任ぜらる。大同元年五月從五位下東宮大進となる。同四年正月侍從を兼ね、四月從四位下、左衞士督に任ぜらる。十二月中務大輔を兼ね、弘仁元年正月備中守、二月右少辨を兼ね、三月藏人頭に補せらる。九月式部大輔に遷る。翌二年正月參議、六月左衞門督を兼ぬ。同三年十二月正四位、左近衞大將に任ぜらる。四年南圓堂を建立す。同八年（四十三歲）正月陸奥・出羽按察使を兼ね、二月中納言に任ぜらる。同

【研究註釋書】「夫木緊要」三卷（橘守部著、集中の歌をぬき、字眼・實句・句法などを說けるもの）、「未木和歌拾遺抄」六卷（小幡正信著、一名を「歌林拾葉抄」と呼び、本書中より、故事・故語をふまへた歌八百餘首を拔き、出典をあげて說いたもの）などがある。〔松浦〕

史邦（ふみくに） 俳人 【姓】中村氏 【字】春庵 【號】五雨亭 【生歿】未詳 【俳系】芭蕉門 【閱歷】尾張犬山の人、尾張德川家の重臣で犬山に蟄居を命ぜられた寺尾土佐守直龍の侍醫で

彼に「粟津日記」「鎌倉日記」のあつたことが知られる。（丈草參照）
【作風】「芭蕉庵小文庫」の題號を難じてゐる許六は「史邦・木導は風雅のつよみに倒れ」（風俗文選雜說）と例の惡評を弄してゐるが、支考は「かり寢せん味方が原の女郎花」といふ史邦の句を評して、「馬上に槊を横て吟ずる人は、今の世にはあまた侍らじを、味方がはらのかり寢せんといへる、此郎の風流ならずや」（葛の松原）と云つてゐるのは、剛の中よく柔の存す

て、醫師に口を縫はせてやつた者だつた。それからといふもの、童は城に止つて羊飼となり、私かに遠くから姬を守護することを忘れないといふ。翌日の夕方、城內の尖塔の下で姬達と共に笑ひ興じてゐる時、ふとイイダ姬は小林を塔の巓へ案內しようと誘つた。それに從つて階段を上つて頂上に行くと、思ひがけなくも姬は一通の手紙を出し、國務大臣フアブリイ伯の夫人に人知れず屆けてくれと賴むのだつた。故は知らず承諾して首府ドレス

いのは羊飼の童だつた。自分が城を出ると間もなく、川に身を投げて死んださうである。——語り終ると午夜の時計が朗かに鳴つた。そして夕餉に急ぐ舞踏客の間に交つて姬は急いで立つて行つたが、「をり〳〵人の肩のすきまに見ゆる、けふの晴衣の水いろのみぞ名殘なりける。」
【批評】作者の創作第三作で、主としてドレスデンを說話の地となしてゐる。そこの王宮の夜會や拜謁の有樣は親しく目擊したのをその

儘に寫したのだと云はれる。演習地の貴族の城邸で見た謎のやうな黑衣の姬が、若くして尼の如く、王宮の奧深く身を埋める物語に妖しき缺脣の牧童を點じて、神祕的な色彩をさへ加へてゐる。「戀ふるも戀ふるが故に戀ふるとこそ聞け、嫌ふもまたさならむ」とだけで許婚を厭ふのは、姬の性情をよく語ると共に、從來にない構想上の新味であらう。日本人が單なる傍觀者たる上に、獨逸の上流社會を題材としてゐるので、滯歐の記念たる作品中、最も浪漫味の勝つたものと云つてよい。また作者の小說として單行本で出た最初のものである。〔小島〕

不猫蛇（ふめうじや） 俳論 一冊（上中下三冊に分册されてゐるものもある）【著者】越智越人 【本稱】俳諧不猫蛇 【名義】卷首に、二條良基の記に、「遁世を表はし、心を漫に、名聞名利に紛るゝ者は、賴政が射たりけん、猫にもあらず、蛇にもあらず、狂亂もの狂ひの至極なりと書いてある」とあり、書中にも「汝が如く猫でも蛇でもない化物」と云つてゐるやうに、支考を鵺のやうな狂亂者と見なす義と思はれる。【諸本】蕉門十哲集（俳諧文庫）・蕉門俳話文集（俳書大系）・古俳書文庫等に所收。【成立年代】寫本として傳はつたのであるが、享保十一年稿と推定される（享保十三年の支考の「削かけの返事」に「頃日不猫蛇といふ物」とあり、本書の末段に、「今年十月十二日其月其日(に)候得者」とあるのは、芭蕉三十三回忌の享保十一年忌日と推定され、なほその他、凡ての點から芭蕉三十三回忌追善の意味を兼ねて同年執筆されたものと推斷される）。【解說】越人が、支考が自分を芭蕉から勘當されたと云ふ浮說を言葉でのみならず物にも書いて言ひ觸らしたのに憤激したのが動機となつて、支考の「俳諧十論」（別項）攻擊を主に、豫ねて支考の云ふ貞享式・芭蕉式・東花式・白馬經・二十五箇條・續猿蓑等の僞書なるべき事を攻擊し、支考の言ふ所の僞託妄言なるべき事を痛論したものである。越人の言ふ所が事實を得てゐるやうに思はれる點が多いけれども、餘りに感情に馳せ過ぎて私行の暴露や人身攻擊に涉る點があつて、純理的批判の埒外に脫出してゐるところも多く、この點に於て非點さるべきものがある。なほ享保八九年に於ける支考と露川との「口狀」（露川責）「相楔」の辯難にも刺戟される所があつたらしく、露川にも側杖を向けて痛罵してゐる。主力を注いだ「十論」に就いては、十論一々に就いて難詰してゐるが、その他にも、連歌新式に通じない事、芭蕉が「古池」の句から開眼したと說くことの妄なる事、「本朝文鑑」（別項）や假名詩に對する非難等を述べてゐる。又十論攻擊の中に、許六の「風俗文選」（別項）に入つてゐる「石臼頌」が、越人自身の作であるのを芭蕉として入つてゐるのは、支考の手から出たものであらうとして難詰してゐるのは、享保十四年の「猪の早太」に「風俗文選」出板時のいきさつを暴露してゐる事と合せて、注意されるものである。
【附說・批評】支考は本書に對して、享保十三年に渡部狂の名で「削かけの返事」を著はして越人に返答したが、もと〳〵非が支考の方に多いためであらう。支考としては頗る氣勢揚らず、糊塗に努めてゐる樣子が見える。越人はこれに對して、翌十四年再び「猪の早太」（門人の書いた文體になつてゐる）を著はして反駁したが、支考の方は旗色が惡いと感じたか、これに對しては報いず、默殺してしまつたやうである。本書及び「猪の早太」に云ふ所には、越人の誤解・邪推等もないではないやうであり、又越人の偏狹と思はれる點もないではない。「續猿蓑」（別項）を一向に支考の僞撰と見た如きも、越人の見過ごしで、却つて當時越人が芭蕉に疎遠になつてゐた事を暴露するものであり、「古池」の句に對する見方も適正を缺く嫌ひがあり、假名詩に對する考へ方も偏狹に過ぎる。大體支考の如き複雜な所業の人を觀る事は困難な事であるので、それを越人の如く感情に逸つて見ては、得て中正を失し勝ちになるのである。併し又さすがに越人は、支考の僞託僞瞞や裏面的事實を指摘したと思はれるものも少くはなく、そのために支考の糊塗・遁辭も追附かない樣子が見えるのである。要するに本書及び「猪の早太」は、越人と支考との關係及び兩人の芭蕉並に蕉門に對する關係の外に、支考についての考察にも閑却し難いものである。〔志田〕

麓の花（ふもとのはな） 隨筆 二卷 【著者】山崎美成 【諸本】「燕石十種」に所收。【解說】江戶期に於ける諸方の風俗を考證した隨筆で、上卷に奧州五節風俗、壬生狂言の繪、濱弓、憲法染、友禪染等十三條、下卷に豆腐の紅葉、淨瑠璃物語、淨瑠璃ぶし、三絃、河東ぶし等二十條を收めてある。聲曲・遊藝に係ることが多い。文多く古圖畫を摸寫して說明を助けてゐる。文政二年池勝躬の序がある。〔和田〕

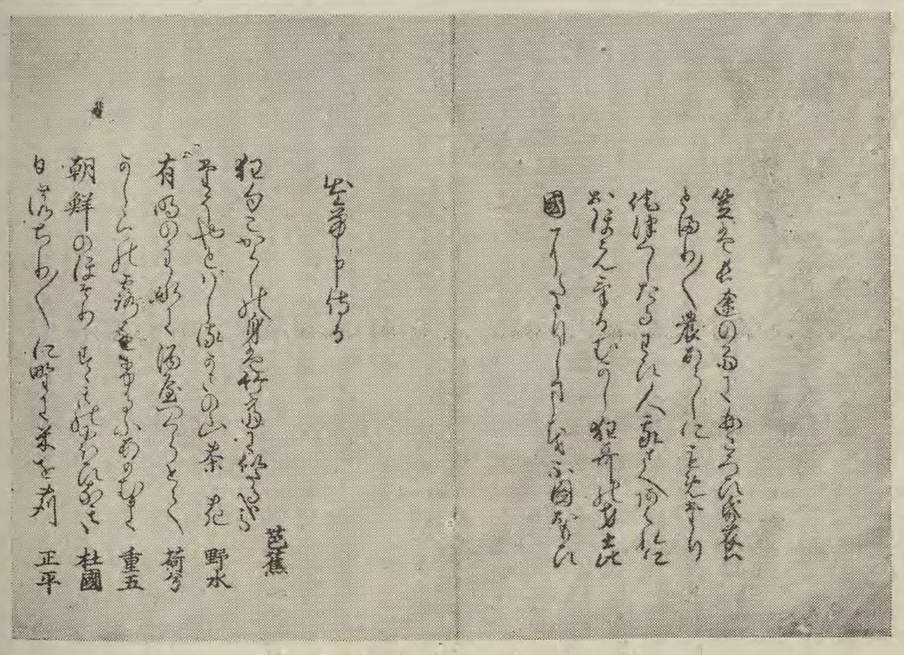
冬嗣（ふゆつぐ） 詩人・歌人 【通稱】閑院大臣 【生歿】寶龜六年に生れ、天長三年（一四八六）七月二十四日に薨じた。享年五十二。【閱歷】

不比等 ┬ 武智麿
　　　 ├ 房前 ― 眞楯 ― 冬嗣 ┬ 長良 ― 基經
　　　 │　　　　　　　　　　 └ 良房
　　　 └ 宇合

延曆二十年（二十七歲）閏正月大判事、同二十二年三月右衞士少尉、五月左衞士少尉に任ぜらる。大同元年五月從五位下東宮大進となる。同四年正月侍從を兼ね、四月從四位下、左衞士督に任ぜらる。十二月中務大輔を兼ね、弘仁元年正月備中守、二月右少辨を兼ね、三月藏人頭に補せらる。九月式部大輔に遷る。翌二年正月參議、六月左衞門督を兼ぬ。同三年十二月正四位、左近衞大將に任ぜらる。四年南圓堂を建立す。同八年（四十三歲）正月陸奧・出羽按察使を兼ね、二月中納言に任ぜらる。同九年六月、大納言正三位に叙せらる。翌年、冬嗣等「日本後紀」を撰進。同十一年四月、「弘仁式」「內裏式」等を撰進。同十二年正月、右大臣となる。この年勸學院を造營す。同十三年正月、從二位。翌年四月、正二位となる。翌天長元年（五十歲）八月二十日、意見三條を奉つた（本朝續文粹卷二・類聚三代格卷七）。同二年二月、左近衞大將を辭す。四月左大臣となる。同三年七月薨じた。
【著作】日本後紀（別項）〇內裏式三卷（正月から十二月まで、內裏に於ける諸式典の次第を記したものである。弘仁十二年、冬嗣・良岑安世・小野岑守・滋野貞主等が勅を奉じて撰した。その後天長十年に淸原夏野・春澄善繩等が更に斟酌し修訂したものが今日のものである。群書類從第七十九所收）〇弘仁格式（大寶元年から弘仁十年までを採索して格十卷・式四十卷を編した。冬嗣と共力した人々には藤原葛野麻呂・藤原三守等がある。即ち嵯峨帝の勅を奉じて朝廷の格式・舊例・故事等を集めたものであるが、今は「類聚三代格」の中に傳はつてゐる。但し原形の儘ではない）。その他、詩は「凌雲集」に三首、「文華秀麗集」に六首、「經國集」に一首收められてゐる。和歌は「後撰集」の春上・戀三・雜二・哀等に見えてゐる。〔山岸〕

【參考】公卿補任〇大鏡（卷二）〇今昔物語（卷二十二第五話）〇興福寺緣起〇弘仁格式の序（類聚三代格卷一）〇類聚三代格（卷七）〇本朝文粹（卷二）〇日本逸史（卷三十四）（天長三年七月二十四日己丑の條）〇大日本史（列傳卷五十一）

冬の日（ふゆのひ）　俳諧集　一册　【撰者】山本荷兮の撰である。阿誰軒の「誹諧書籍目錄」（別項）や「廣益書籍目錄大全」には、芭蕉の撰になつてゐるが、「花見車」（別項）には荷兮とし、「歷代滑稽傳」によつてもさう思はれ、芭蕉はこの頃は自分で撰集を作らない考にもなつてゐたと思はれるから、荷兮とすることは間違ひないであらう。【名稱】外題に「冬の日　尾張五哥仙」とある。【名義】本集一部の俳諧が凡て冬季の作であるから、冬の日と名づけたのであらうといふ說が從ふべきであらう。「宮柱ふとふきたべて酒のめば冬の日ながら熱田なりけり」といふ逍齋の狂歌に對して、卷頭の句が作られてゐると見て、これから「冬の日」と名づけたのであるとか、或は集中の「冬の朝日のあはれなりけり」といふ脇から出たのであるとかいふ說は從ひ難い。一名「尾張五歌仙」と呼ばれる。これは芭蕉が貞享元年冬名古屋に來て、荷兮・野水・重五・杜國・正平等と歌仙五卷・表六句を卷き、本書はそれを內容としてゐるからである。【刊行】貞享元年【傳本】原板のものが傳はつてゐるかどうか明かでない。恐らく傳はつてゐないのであらう。現今傳はつてゐるものには、白茶の表紙本と紺のかゞみ表紙本とあつて、白茶本が一般に流布してゐるやうである。この二本は內容も筆蹟も同一である。【諸本】俳諧七部集（別項）に收められてゐる。その他、芭蕉翁俳諧集・俳諧幽蘭集・金蘭集・芭蕉翁草紙・俳諧一葉集・俳諧袖珍鈔等にも入つてゐる。明治以後の出版では俳諧文庫の芭蕉全集以來、各種のものに收められてゐる。昭和六年古板俳諧七部集の初編としても覆刻された。



冬の日（松宇文庫藏）

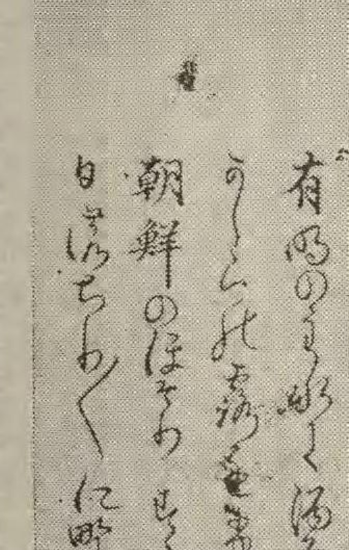
【內容】芭蕉・野水・荷兮・重五・杜國・正平の六羽笠・荷兮・重五・杜國・芭蕉・野水の表六句から成つてゐる。【史的地位】芭蕉は寬文に古風、延寶に談林、天和に幽玄調、貞享に「冬の日」と移つて來たのである。許六の「誹諧問答」に、芭蕉が「愚老が俳諧は五歌仙に至らざる人一生涯成就せず、大事なり、覺悟せよ」といつたとある言から考へると、「冬の日」は芭蕉が確信を持つた撰集と思はれるのである。從つて門人も特にこの集に注目し、其角・風國・去來・支考・嵐雪等の論もあつて、由來芭蕉變風の劃期的撰集に數へられてゐる。卽ち、延寶・天和に於ては蕉風の萌芽はあつても、醇正な蕉風の確立は、この集以後と見做されて來たのである。【價値】制作態度が前時代の談林風の言語遊戲を脫して來たところは、一段の進步であるが、曲齋の說の如く、趣向に巧を求め、句作に紅粉を施して、若々しい情熱的な意氣に富んでゐて、まだまだ人生の深刻味を表現した境地には達してゐないのであらう。「猿蓑」（別項）が出て、「冬の日」の光が覆はれたと去來は論じてゐるが、その通りである。五歌仙中では最初の「こがらし」の卷が一番よく出來てゐる。併し卷によつては「虛栗」（別項）の舊染を繰返すやうな句の出て來るのもないではない。【影響】「冬の日」の調は、安永・天明の中興俳諧に多大の感化を與へた。それは尾張の曉臺一派が尊重したことであつた。曉臺は「冬の日」の調を好み、「尾張五歌仙」「熱田三歌仙」から新風を樹立しようと努力したのである。彼が「延寶二十歌仙」（別項）を書龍に比し、「冬の日五歌仙」を眞龍に喩へたなどは、如何に彼が貞享の調に準據して一方に雄飛しようとしたかが分るのである。曉臺のみならず、蕪村などでも、早く着眼したのは「虛栗」「冬の日」であつたのである。【參考】誹諧七部解高桑闌更〇七部木槌虬戶庵素變〇冬の日注解黃華庵升六〇冬の日附合考魚潛〇俳諧七部集初まなび藍亭青藍〇冬の日に就て（詩人芭蕉）萩原蘇月〇七部集解說（俳句講座俳書解說篇）志田義秀　【萩原】

舞踊劇（ぶようげき）　【解說】明治の末年に坪內逍遙の作つた言葉、丁度その頃、外國にも“Dunce drama”“Choreographic drama”等の言葉が行はれ出したのを參考にされたかと思はれる。而して逍遙は江戶時代の所作事（別項）、卽ち「關扉」「瀧夜叉」「今樣須磨」「山姥」等々のものが、舞踊劇と呼ぶのが至當であると說き、現代には現代の新作なかるべからずと新舞踊劇を論じて、幾多の作品を發表した。舞踊劇は舞踊を主とする劇で、セリフはあつても極くわづかで、且つ音樂的に取扱はれる。しかし能樂（別項）は舞踊を主と見ることは出來ぬ。「小原御幸」の如きは、舞踊は全然なく、能樂は謠ふ事が主である。支那劇は舞踊に富むが、聽劇と云ふだけに、歌を聽くのが主である。外國の歌劇は聽劇であり、無言劇も舞踊と云ふより劇である。日本の歌舞伎芝居は一種異樣の樂劇で、その中の所作事は、全く舞踊劇と云ふべきであつた。逍遙の後に出た年少の學者達は、舞踊詩の語を云ひ出した。逍遙の新舞踊劇作品の中でも、「お夏狂亂」（別項）の如きは舞踊劇、「寒山拾得」「お七吉三」（別項）の如きは、舞踊詩と分けた方が適當である。舞踊劇は日本の如き特殊の舞踊史・演劇史を有する國では、將來に幾多の發展の可能性があり、現在續々と新作が發表されつつある。（所作事參照）　【小寺】

芙蓉文集（ふようぶんしふ）　二卷二册　【編者】雪爪園耳得（耳得は駿府の人、武門の出で大島蓼太を師とした）。【刊行】寶曆十三年か。【成立】同年間の佛蘭西小說物語の飜譯が、果してその直後の時代の明治文學を作り出すに役立つたかは疑問である。けれど少くも當代の人々に一種驚異の强い刺戟を與へたであらうことは肯かれる。この時期に於て最も多く飜譯せられてゐるのは、ジュル・ヴェルヌ（Jules Verne）（1828—1906）である。彼は日本の明治初年に於ては、佛蘭西に於ける最も通俗的興味を惹く作家として人氣のあつた作者であり、その作の多いことも、デュマ（Alexandre Dumas Père）以上であり、全集は百册以上にもなつて義を守るべきことを敎へ、終りに蓼太の「松のあらし」（古今子集の序）を置いて信を盡すべき事を知らしめたと三白子の序に云つてあるが、それ以外には位次を整へてゐない。蕉門の遺品を多く集めたので、文は概ね輕妙洒脫であるが、雪門殊に當時の作者のものには、漸く奇巧を競ひ、諧謔に亙らうとする傾向の看取せられるものがある。　【各務】

佛蘭西だより（ふらんすだより）　感想集　【著者】島崎藤村　【發表】大正二年以降四年まで東京朝日新聞に連載。【刊行】第一の佛蘭西

五巻・表六句を巻き、本書はそれを内容としてゐるからである。【刊行】貞享元年【傳本】原板のものが傳はつてゐるかどうか明かでない。恐らく傳はつてゐないのであらう。現今傳はつてゐるものには、白茶の表紙本と紺のかゞみ表紙本とあつて、白茶本が一般に流布してゐるやうである。この二本は内容も筆蹟も同一である。【諸本】俳諧七部集(別項)に収められてゐる。その他、芭蕉翁俳諧集・俳諧幽蘭集・金蘭集・芭蕉袖草紙・俳諧一葉集・俳諧袖



吟歌仙一巻、野水・杜國・芭蕉・荷兮・重五・正平の六吟歌仙一巻、杜國・重五・野水・芭蕉・荷兮・正平の六吟歌仙一巻、重五・荷兮・杜國・野水・芭蕉・羽笠の六吟歌仙一巻、荷兮・芭蕉・重五・杜國・羽笠・野水の六吟歌仙一巻、追加として

施して、若々しい情熱的な意氣に富んでゐて、まだまだ人生の深刻味を表現した境地には達してゐない。「猿蓑」(別項)が出て、「冬の日」の光が覆はれたと去來は論じてゐるが、その通りである。五歌仙中では最初の「こがらし」の巻が一番よく出來てゐる。併し卷によつては「曠栗」(別項)の舊染を繰返すやうな句の出て來るのもないではない。【影響】「冬の日」

た。舞踊劇は舞踊を主とする劇で、セリフはあつても極くわづかで、且つ音樂的に取扱はれる。しかし能樂(別項)は舞踊を主と見ることは出來ぬ。「小原御幸」の如きは、舞踊は全然なく、能樂は謠ふ事が主である。支那劇は舞踊に富むが、聽劇と云ふだけに、歌を聽くのが主である。外國の歌劇は聽劇であり、無言劇も舞踊と云ふより劇である。日本の歌舞伎芝居は一種異様の樂劇で、その中の所作事は、全く舞踊劇と云ふべきであつた。逍遙の後に出た年少の學者達は、舞踊詩の語を云ひ出した。逍遙の新舞踊劇作品の中でも、「お夏狂亂」(別項)の如きは舞踊劇、「寒山拾得」「お七吉三」(別項)の如きは、舞踊詩と分けた方が適當である。舞踊劇は日本の如き特殊の舞踊史・演劇史を有する國では、將來に幾多の發展の可能性があり、現在續々と新作が發表されつつある。(所作事參照)　〔小寺〕

芙蓉文集 ふようぶんしふ　二卷二册【編者】雪爪園耳得(耳得は駿府の人、武門の出で大島蓼太を師とした)。【刊行】寶曆十三年か。【成立】同年夏【由來】序によると、蓼太が諸俳家の書捨、或は人の珍藏するものを摸寫し、或は遺墨を拾ひなどして置いたものに、社中の者の作文を加へて「芙蓉文集」と題してゐた。然るに或る年の陽春、蓼太が駿河に暫く行脚の笠を懸けた時、著者が蓼太を伴うて阿部・藁科の邊に吟行して一文を綴り、これを緣として文集を編まうと志した。蓼太も編集の望があつて、草稿の「芙蓉文集」を著者に示した。著者はこれを出版せん事を乞ひ、漸く許されて寶曆十三年世に布くことになつたのである。三白子の序及び自序、蓼太の跋がある。【諸本】俳諧文集(俳諧文庫)所收。【解說】芭蕉を初め、立圃・素堂・其角・嵐雪・去來・支考・許六・路通・園女・吏登・蓼太並に著者等、蕉門・雪門その他の俳家二十數家の俳文小品を集めたものである。總て四十六篇、箴・銘・記・文・歌・賦・序・賛・辭その他諸種の文體があり、作は芭蕉のものが最も多い。その文例を芭蕉に就いて見ると、「垣の梅」「蒜の齡」「贈風絃子號」「飲酒一枚起請」「答正秀文」(二種)「答曲水文」「答千那文」及び去來と合作の箴「唐がらし」の如きものがある。排列は初めに「唐がらし」を置いて義を守るべきことを敎へ、終りに蓼太の「松のあらし」(古茄子集の序)を置いて信を盡すべき事を知らしめたと三白子の序に云つてあるが、それ以外には位次を整へてゐない。蕉門の遺品を多く集めたので、文は概ね輕妙洒脫であるが、雪門殊に當時の作者のものには、漸く奇巧を競ひ、諧謔に亙らうとする傾向の看取せられるものがある。　〔各務〕

佛蘭西だより ふらんすだより　感想集【著者】島崎藤村【發表】大正二年以降四年まで東京朝日新聞に連載。【刊行】第一の佛蘭西だより「平和の巴里」(後に「巴里だより」)、大正三年新潮社刊。第二の佛蘭西だより「戰爭と巴里」(後に「佛蘭西だより」)、大正四年同社刊。藤村全集第九卷所收。【內容】藤村が佛蘭西に在留した時、折にふれて稿をつぎ、故國の新聞等に通信した感想と隨筆を前後二卷に纏めたのが「佛蘭西だより」である。その當時の著者の生活と思索とを傳へるものには、航海記「海へ」(大正七年刊)、「佛蘭西紀行」(別名「エトランゼエ」(大正十一年刊)等があるが、最も端的にありのまゝの感想を書きとめたのはこの著作である。著者は渡航して一年餘、計らずも歐洲大戰に遭遇した。その後篇は殊に大戰當時の佛蘭西の思潮と社會生活を傳へ、且つその中に著者の體驗した感想を述べてゐる。藝術家としてより、寧ろ思想家乃至は藝術批評家・文明批評家としての藤村の全面目を窺ひ得ると共に、歐洲大戰の側面の觀察記錄としても價値がある。前・後篇共各々數十章に分れ、主に執筆年月順に編纂してある。　〔武藤〕

フランス文學の影響　【解說】明治以後に於けるフランス文學の日本文學への影響は可なり重要なものであり、ロシヤ文學について特筆さるべきものである。ロシヤ文學に於ける二葉亭の如き先覺者がなかつたので、初期に於ける影響は專ら思想的なものであつたが、日本にも自然主義が勃興するに至つて、その影響は甚だ大きかつた。詩壇に於ける象徵派に與へた影響も尠くない。次にこれを凡そ三期に分つて簡單に解說して見る。

【沿革】〔第一期〕明治初年から二十三年の國會開設に至るまでの第一期の文學及び思想界へ及ぼした影響は、佛蘭西の十八世紀のルウソオ及びモンテスキュウの言說が主たるものであり、次いでは十九世紀の文藝でも主として冒險的科學的興味及び異國に對する驚異を現はした類のものである。佛蘭西より受けたる民權自由の思想は、日本の立憲政體を築くに最も大切な要素となつたことは言ふを待たぬ。明治八年モンテスキュウの “Esprit des Lois” を「萬法精理」として何禮之の譯が出版せられてゐる。これは三權分立を確言した書物であり、ルウソオの “Coutrat Social” は明治十年、服部德の抄譯「民約論」となつて現はれ、同十五年、中江兆民の「民約譯解」(別項)として公刊せられた。同十六年には原田潛譯述「民約論覆義」、馬場辰猪「天賦人權論」(別項)が出てゐる。當時の靑年を鼓吹したものは英國のスペンサア、ミルの自由論と共に更に力強くルウソオの民權自由思想があつたのである。それを特に强調してゐた人が、中江兆民(別項)である。彼は更に「佛蘭西革命前二世紀事」に歷史の必然性を說き、「理學鉤玄」「泰西理學小史」に唯物論的社會觀を示し、「政理叢談」に「民權これ至理、自由平等これ大義なり」と說き、佛蘭西十八世紀思想の影響を最も多く受けてゐる人である。明治初頭から約二十年間の佛蘭西小說物語の飜譯が、果してその直後の時代の明治文學を作り出すに役立つたかは疑問である。けれど少くも當代の人々に一種驚異の強い刺戟を與へたであらうことは肯かれる。この時期に於て最も多く飜譯せられてゐるのは、ジュル・ヴェルヌ(Jules Verne)(1828—1906)である。彼は日本の明治初年に於ては、佛蘭西に於ける最も通俗的興味を惹く作家として人氣のあつた作者であり、その作の多いことも、デュマ (Alexandre Duma Père) 以上であり、全集は百册以上にもなつてゐる。明治十三年、川島忠之助譯の「新說八十日間世界一周」(Le Tour du Monde en 80 Jours) を初め、「二萬里海底旅行」「月世界旅行」「月世界一周」「亞弗利加內地三十五日間空中旅行」「婦人地球周遊記」「學術妙用造物者驚愕試驗」「萬里絕域北極旅行」などの如く、佛蘭西に於ても所謂科學と文藝とが握手せんことを求めた時代の通俗興味本位物語が、殆ど初めて泰西文化に接した明治十年代の我が邦人には、如何に不思議なものとして驚き讀まれた事であつたらう。その他フェヌロン(Féne-lon) の “Télémaque” 「哲烈禍福譚」(別項)(明治十二年、宮島春松)が、又「經世指針鐵列奇譚」(明治十六年、伊澤新三郎)として譯され、デュマのもの、ジョルジュ・オネ(George Honet)のものなど、いづれも通俗味や刺戟強きもののみを選び、ユゴオの作品も斷片的な飜譯がなされてゐる。卽ち當時は好奇心の滿足が第一の要求であつたやうである。

〔第二期〕明治二十年代の末から明治末期まで約二十年間である。黑岩淚香によつての怪奇探偵小說ボワゴベエ(Boisgabey)、ガブリオ(Gabriau)、デュマなどの作の通俗飜譯から森

田思軒譯ユゴオ作「九十三年」(Quatre-Vingt-treize)、同じくユゴオ作“Notre Dame de Paris”「鐘樓守」(長田秋濤・尾崎紅葉共譯)及び小デュマ(Dumas fils)の“Dame au cameria”「椿姫」(長田秋濤譯)にいたると、初めて文藝的飜譯と言ふべく、明治二十九年出版の「文藝評論」(上田敏著)には、象徴派詩人等の紹介評論がなさるゝに至り、徐々に文學的影響が及び初めたと言はるべきである。この佛蘭西象徴詩は、主として上田敏の典雅な飜譯によつて日本へ紹介せられ、同時に日本の新詩の發達に非常な刺戟を與へたものであるが、それと殆ど時期を同じうしてフロベエル、ゾラ、モオパッサンなどの飜譯紹介は、日本の小說界を風靡するほどの影響を與へたものである。田山花袋・島崎藤村・永井荷風・正宗白鳥等の盡くが自然主義の洗禮を受けざるはなく、島村抱月・長谷川天溪等の文藝論も、皆自然主義を鼓吹するにあつたのである。併し前記の小說家等にあつては、或はフロベエル式描寫法、ゾラ式觀察、またモオパッサンの印象描法を學び、更に官能の開放、性的現象の病理的心理的研究解剖までは學びもし、到りもしたのであるが、ゾラがイデオロジィ(Idéologie)により、社會現象を綜合せんとする如き組織は未だ持つに至らず、抱月・天溪等の自然主義論も、現實打破、幻滅悲哀は說き得て、人生觀上に道德を改廢し、文藝に現實即藝術の境地を打開し來つたとは言へ、未だ個人主義的見地を脫却し切らず、社會觀の明かなる組織は見るを得なかつたのである。詩はボオドレエル、マラルメ、ヴェルレエヌの飜譯及び評論が盛んに行はれ、岩野泡鳴・蒲原有明等にその影響を及ぼし、初めて日本へ象徵詩が作られたと言はれてゐる。北原白秋の初期の作品など確かにヴェルレエヌの飜譯詩の影響が見られる。その後の詩人等に多少とも佛蘭西詩の影響の及ばざるものは殆どなく、譯詩に至つてもその數は極めて多い。劇に至つては嘗て福地櫻痴によつてコルネィユの“Le Cid”が飜案上場せられたこともあり、モリエルの“Medecin malgré lui”が「俄醫者」と譯され、高田實により上演せられて高評を得たこともあるが、果して如何なる影響を及ぼしたかはわからない。第二帝政期の人氣作家ラビシュ(Lubiche)の「戀娘婚姻事情」など、明治二十年に飜譯だけはされてゐる。明治四十年代には、マアテルリンク(Maeterlinck)の諸作が小山內薰の自由劇場(別項)、島村抱月の藝術座(別項)などに於て屢々演ぜられ、世界大戰前までの彼の諸作は全部飜譯せられ、確かにイプセンと共に日本の新劇運動には多大の影響のあつたことは認めぬわけにはゆかぬ。〔第三期〕大正期である。トルストイの影響が一時我が國へ非常に及んで來た時、そのトルストイを通じて同じ影響を受けた佛蘭西のロマン・ロオランが深く愛好され、人道主義なる名稱に於て武者小路實篤等の文藝を作り出す機緣にもなり、ロオランの作は殆ど全く飜譯せられてゐるのである。併し世界大戰後に於ては、更に異つた影響が、例へば一方にアンリイ・バルビュス(Henri Barbus)等の世界主義文藝が新興文學を力強く鼓吹し、又他方にはジュル・ルナル(Jules Renard)の精巧微妙な心理描寫劇が清新味を與へ、更にダダイストたるポオル・モオラン(Paul Maurand)等が官能描寫を敎へてもゐるのである。若しそれ飜譯といふ點に至つては、古典劇から現代文藝に至るまで次第に組織立つてなされ、種々の全集飜譯も企てられつつあるのである。【日本文學の佛蘭西への影響】佛蘭西人が日本についての感想、印象を書いたものは無數にある。また日本及び日本人に取材した作品も相當に多い。日本文學の佛蘭西語への飜譯も、或は佛蘭西人の手で、或は日本人の手で、又共譯でなさるゝものが次第にその數を增しつつある。日本文學の歷史を佛蘭西人の手で書いたものは、ソルボンヌ大學教授ミシェル・ルヴォン(Michel Revon)の“Anthologie de la Litterature Japonaise”(日本文學摘要)だけである。これも明治期の中葉までの概略に止まつてゐる。けれども右のルヴォン教授の巴里大學に於ける日本文學講座の開設から、日本文學の研究論文の書かれる數が次第に增して來つつある。現に日本文學研究のため佛蘭西留學生が日本へ常に二三人づつは來てゐるのである。文學ではないが、ルヴォン教授の「神道」研究、「北齋」研究は、「日本文學摘要」と共に確かに斯界に於ける尊重すべきものである。歌麿・北齋の研究及び浮世繪の佛蘭西繪畫に對する一般的影響といふ事は極めて重大なことである。エミル・ゾラがその初期に於て繪畫批評をやつてゐた頃に名づけた印象主義(Impressionisme)なる近代の畫流に日本の浮世繪が非常な影響を及ぼし、日本の浮世繪なかりせば印象主義も出なかつたであらうとまで世界美術史家等は言つてゐる。つまり自然主義文藝といふものを通して、日佛兩國の文藝藝術は相互影響をしてゐるのである。日本に於ては自然主義の小說が、佛蘭西に於ては自然主義文藝家を通して浮世繪が相互刺戟をしてゐるのである。この浮世繪とほぼ同じ影響を佛蘭西文藝界へ及ぼしてゐるものは、日本の俳句である。日本の俳句は佛蘭西人にはやはり印象主義的表現の文藝と考へられる。芭蕉の俳句を凡そ二十句ぐらゐ連ね、その印象を集めて音樂の小曲をつくり出し、或は幾多の俳人の句の飜譯がなされ、それよりして佛蘭西人自身の三行詩がつくられ、「百俳諧」(Cent Haïkaï)といふ如き書物が發行せられ、一般に非常な愛好を見せてゐるのであるが、それよりも既に現在の佛蘭西文藝家等の文章の表現上に、この俳句の飜譯の文調が明瞭に現はれてゐる點に、如何に敏感に俳句的表現が吸收せられつつあるかは觀取せらるゝのである。この影響は更に擴がつて行くものと見られる。〔吉江〕

ふらんす物語（ふらんすものがたり） 小說集【著者】永井荷風【刊行】明治四十二年三月出版忽ち發賣禁止となる。間もなく、「新編ふらんす物語」なるものが世に出たが、これは內容體裁共に著者の關知しない所のものであるといふ。荷風全集第二卷(春陽堂刊)所收。【內容】「蛇つかひ」「晚餐」「祭の夜がたり」「霧の夜」「おもかげ」「再會」「ひとり旅」「放蕩」(後に「雲」と改題)「巴里のわかれ」「黃昏の地中海」「ポートセット」「橡の落葉」等の小品と、戲曲「異鄉の戀」(三幕)があり、この戲曲と「放蕩」が當局の忌諱に觸れたものらしかつた。全集所收のものには戲曲はない。【解說】序文に「西曆千九百七年橫濱正金銀行雇人となり米國紐育を去つて佛蘭西里昂に赴き此處に留ること十一箇月餘なり。本書收る處の諸篇當時の印象を逸せざらんが爲、銀行帳簿のかげ、公園路傍の樹下、笑聲絃歌のカッフェー、又歸航の船中に記錄したりしを、歸國の後修正した」ものだ

と云つてゐる。「あめりか物語」(別項)に續く作者の同じ傾向のもので、殊に巴里に足を留めて以來、一層色彩と情緒の筆を濃くして憧憬の頌詩ともいふべき美しさがある。〔水木〕

振事（ふりごと） 「所作事」を見よ。

振附（ふりつけ） 所作事【名義】(一)所作事(別項)の振を考案して、俳優及びその他に教授すること。(二)その專門の師を指す。正しくは「振附師」といふ。【沿革】歌舞伎の創始期に於ては舞臺上の動作は勿論、振附も俳優自身

方又は作者等が兼業をしてゐたので、全く專門の振附師として確立を見たのは、所作事の大成期である明和から天明までの間においてである。即ち志賀山流(別項)の三代である二代中村傳次郎(舞扇)、西川流(別項)の二代西川扇藏、藤間流(別項)の二代藤間勘兵衛、市山流の祖である市山七十郎(初め山口)等が、その著名なもので、今日まで各々その流派を傳へ、一方素人にも教授したので、これが今日の家元制度の根元である。かくて文政に三代藤間勘

して確立を見たのは、江戸の所作事が輸入された化政度で、以後幕末までの主なものは、大阪では山村流(別項)の祖である山村友五郎(後、山村吾斗、又舞扇齋吾斗)・世家間大助(三代藤間勘兵衛の門弟、前名二代藤間大助)・藤間竹遊等、京都では篠塚流の祖である篠塚文三郎(後、中村梅扇、又篠塚梅扇)・中村菊壽等で、山村・篠塚・中村は今日に繼承されてゐる。前記の外、所作事の大成に伴ひ、劇場を離れて民間娯樂として弄ばれた爲めに、婦女子などの習ふ者多

言葉で、「フリウが參る〳〵、どれから參る、甲斐や駿河の國から參る」の歌は、かけ踊(別項)に引用したが、この場合のフリウは踊の意味である。特殊のフリウといふ舞や踊はない。今、九州にある面浮立の浮立は、假面をつけた踊の、踊としての意味より外はなく、また安房で獅子舞をフリウと稱してゐるのも、古語が偶然殘つたに過ぎぬ。延年の舞(別項)に、風流(別項)といふのがあるが、その風流も同じく歌舞演藝の意味での風流である。かくて

と云つてゐる。「あめりか物語」（別項）に續く作者の同じ傾向のもので、殊に巴里に足を留めて以來、一層色彩と情緒の筆を濃くして憧憬の頌詩ともいふべき美しさがある。【水木】

振事（ふりごと）「所作事」を見よ。

振附（ふりつけ）所作事【名義】（一）所作事（別項）の振を考案して、俳優及びその他に教授すること。（二）その專門の師を指す。正しくは「振附師」といふ。【沿革】歌舞伎の創始期に於ては舞臺上の動作は勿論、振附も俳優自身が考案したものであつたが、所作事の發達につれて、江戸の中村座に志賀山萬作（志賀山流の祖）、京阪に竹島幸左衞門の父日本傳助等が初めて振附を專門とするやうになつた。而もまだ普通には、一座の俳優の中で所作事を能くするものがこれに當つてゐたので、京阪では金澤五平次・佐渡島傳八（佐渡島流の祖、但し寛政度に廢滅）等、江戸では市村座に生島大吉、森田座に坂東又九郎（坂東流の祖、但し中絶）等がそれである。振附が專門的部門として分業化されたのは元祿・寶永度で、番附面に振附として署名されたのでは、元祿六年十一月、京都村山平右衞門座の顔見世役者附に見える竹田六郎次が最も古い。次いでその後、寶曆度までの主なものには、京阪では山田權八・中村京十郎（中村富十郎の師、中村流の祖、但し中絶）・松本六十郎・山川平四郎等、江戸では中村清九郎・前川半右衞門・中村傳次郎（志賀山流二代）・吉田六郎次・出來島善十郎・坂東田助・一野谷三五七・江田彌市・松本幸十郎・中村八十吉・水木九十郎（水木竹十郎に起る水木流の人）・市川團五郎・堅田善藏・中村彌八（現中村流―虎治―の祖）・西川扇藏（西川流の祖）・藤間勘兵衞（藤間流の祖）・中村仲藏等である。併しこれ等も、俳優・囃子方又は作者等が兼業をしてゐたので、全く專門の振附師として確立を見たのは、所作事の大成期である明和から天明までの間においてである。卽ち志賀山流（別項）の三代である二代中村傳次郎（舞扇）、西川流（別項）の二代西川扇藏、藤間流（別項）の二代藤間勘兵衞、市山流の祖である市山七十郎（初め山口）等が、その著名なもので、今日まで各々その流派を傳へ、一方素人にも教授したので、これが今日の家元制度の根元である。かくて文政に三代藤間勘兵衞の養子二代藤間勘十郎によつて勘十郎家（通稱、茅場町家）が起され、天保五年に同じく三代勘兵衞の門弟藤間勘右衞門によつて勘右衞門家（通稱、濱町家）が起され、また三代勘兵衞の門弟四代西川扇藏（前名、藤間勘助）のその又門弟西川鯉三郎が、天保の末年に名古屋に移住して一流を起したのが、今日名古屋に於ける西川流であり、同じく四代西川扇藏の門弟西川芳次郎が、嘉永三年に花柳壽助（後に壽輔）となつて花柳流（別項）を起し、壽助の門弟花柳芳松が、明治三十八年に若柳壽童と改めて若柳流（別項）を起し、各々今日の家元の祖をなしてゐる。なほ、所作事をよくした三代・四代中村歌右衞門、三代坂東三津五郎、三代・四代瀨川菊之丞、四代・五代・六代岩井半四郎、五代澤村宗十郎等の俳優の振は各々一派をなし、今日にその流儀を傳來した。京阪では明和から寬政に亙つて、江戸の如く所作事が隆盛ではなかつたが、ともかくも、岩井春五郎・小野村萬藏・大井川又藏・佐渡島長藏・嵐巳市・小川利右衞門（小川流）・三升長八、瀨山七左衞門（瀨山流）、吉川美市等の專門的振附が出たが、今日に傳存するものは極めて少く、何れも劇場出勤は一時的であつた。全く專門の振附師として確立を見たのは、江戸の所作事が輸入された化政度で、以後幕末までの主なものは、大阪では山村流（別項）の祖である山村友五郎（後、山村吾斗、又舞扇齋吾斗）・世家間大助（三代藤間勘兵衞の門弟、前名二代藤間大助）・藤間竹遊等、京都では篠塚流の祖である篠塚文三郎（後、中村梅扇、又篠塚梅扇）・中村菊壽等で、山村・篠塚・中村は今日に繼承されてゐる。前記の外、所作事の大成に伴ひ、劇場を離れて民間娛樂として弄ばれた爲めに、婦女子などの習ふ者多く、遂に女師匠が陸續として現はれ、前記の流名の外松川・松本・松賀・柏木・巴等を名乘り、所謂お狂言師（別項）を兼ねたものも數多く、今日にその流名を殘してゐる。現今では明治以來現はれた新派が加はつて、その流派が枚擧に暇ないほどであるが、その何れも劇場から獨立してゐること勿論で、現にその關係にあるものは、藤間・花柳・若柳等である。而してこれ等諸流派を代表してゐる主なるものは、東京では藤間・花柳・若柳等、大阪では山村・楳茂都（別項）等、京都では篠塚・片山等、名古屋では西川で、各々特色を備へてゐる。

【參考】劇代集二代櫻田左交○東都振附師列傳　町田博三（演藝畫報、合同八ノ二）○わが六大舞踊派の特質　坪內逍遙（逍遙選集第三卷）○日本近世舞踊史小寺融吉（東洋藝術史講座第十一卷）○所作事略史同上（演藝畫報二四ノ一）○歌舞伎圖說○近世邦樂年表（長唄之部）等。【秋葉】

譍（ふりつづみ）「鼓」を見よ。

風流（ふりゅう）舞踊【名稱】風流な卽ち美的な舞踊の義。【解說】室町時代初期、民間の舞踊を出來得る限り藝術的に美的に裝飾せんとする意圖が廣く意識せられた時、フリウは歌舞の異名ともなつた。卽ちフリウは概括的の言葉で、「フリウが參る〳〵、どれから參る、甲斐や駿河の國から參る」の歌は、かけ踊（別項）に引用したが、この場合のフリウは踊の意味である。特殊のフリウといふ舞や踊はない。今、九州にある面浮立の浮立は、假面をつけた踊の、踊としての意味より外はなく、また安房で獅子舞をフリウと稱してゐるのも、古語が偶然殘つたに過ぎぬ。延年の舞（別項）に、風流（別項）といふのがあるが、その風流も同じく歌舞演藝の意味での風流である。かくて能狂言の何々風流をも生んだのである。

【參考】日本舞踏史岩橋小彌太○近代舞踊史論　小寺融吉（小寺）

風流（ふりう）延年技【沿革】古くは風情ある作り物をいふ。「玉葉」「明月記」等に散見するものはこれで、笠風流といへば花笠、櫛風流といへば庭園又は別莊等の景を摸した中に櫛を作り込めるといふ類で、多く進物に用ひた。進んでは大きな作り物に歌舞音技を配して多數の人に觀覽させるものとなつた。延年技にはこの程度に達した時から用ひられた。今も九州地方にはこの遺風があつて、浮立（ふりう）の字を當ててゐる處がある。【演技】建長二年鶴岡の別當隆辨法印が西上した時、三井寺では歡迎して、龍華會の後、盛大な風流を行つた。叡山の小五月會（こさつきゑ）を摸したのである。卽ち山門の惡僧十餘人が甲冑を帶して事の由を觸れまはると、神主・所司・專當等に扮した者が出で、巫女・男巫も出た。神主の祝詞が了つて巫女が順の舞を始める。大衆は惣の一の巫女の白髮姿をいやがつて、若巫女にのみ舞はせ、興の餘りに躍り出して巫女の首を抱いたり、口を吸つたりしたことが記錄されてゐる。これ等は延年の趣旨を取違へたもので、作り物

より、社會現象を綜合せんとする如き組織は未だ持つに至らず、抱月・天溪等の自然主義論も、現實打破、幻滅悲哀は說き得て、人生觀上に道德を改廢し、文藝に現實卽藝術の境地を打開し來つたとは言へ、未だ個人主義的見地を脫却し切らず、社會觀の明かなる組織は見るを得なかつたのである。詩はボオドレエル、マラルメ、ヴェルレエヌの飜譯及び評論が盛んに行はれ、岩野泡鳴・蒲原有明等にその影響を及ぼし、初めて日本へ象徵詩が作られた

す機緣にもなり、ロオランの作は殆ど全く飜譯せられてゐるのである。併し世界大戰後に於ては、更に異つた影響が、例へば一方にアンリイ・バルビュス（Henri Barbus）等の世界主義文藝が新興文學を力强く鼓吹し、又他方にはジュル・ルナル（Jules Renard）の精巧微妙な心理描寫劇が清新味を與へ、更にダダイストたるポオル・モオラン（Paul Maurand）等が官能描寫を敎へてもゐるのである。若しそれ飜譯といふ點に至つては、古典劇から現代文

繪畫批評をやつてゐた頃に名づけた印象主義（Impressionisme）なる近代の畫流に日本の浮世繪が非常な影響を及ぼし、日本の浮世繪なかりせば印象主義も出なかつたであらうとまで世界美術史家等は言つてゐる。つまり自然主義文藝といふものを通して、日佛兩國の文藝藝術は相互影響をしてゐるのである。日本に於ては自然主義の小說が、佛蘭西に於ては自然主義文藝家を通して浮世繪が相互刺戟をしてゐるのである。この浮世繪とほぼ同じ影

トセット」「橡の落葉」等の小品と、戲曲「異鄕の戀」（三幕）があり、この戲曲と「放蕩」が當局の忌諱に觸れたものらしかつた。全集所收のものには戲曲はない。【解說】序文に「西曆千九百七年橫濱正金銀行雇人となり米國紐育を去つて佛蘭西里昂に赴き此處に留ること十一箇月餘なり。本書收る處の諸篇當時の印象を逸せざらんが爲、銀行帳簿のかげ、公園路傍の樹下、笑聲絃歌のカッフェー、又歸航の船中に記錄したりしを、歸國の後修正したるものだ

に善美を盡し、それに舞樂を配するといふのが規模であつた。

【種類】大風流と小風流の二種があつた。前者は大規模のもので、必ず終りに舞樂を奏し、後者は小規模のもので、終りに白拍子舞・曲舞・巫女舞等を演ぜしめた。大小共に舞樂又は舞を出すための問答を行ふが、それが極めて劇に近接して居つて、猿樂の能はこれに導かれたことが多いかと思はれる。代表的の集は、大和多武峰の附屬念誦窟の住僧實禪が、天文十三年に新古の作を書き留めた「大風流」一卷と「小風流」一卷とである。

【大風流】實禪の輯に次の二十四作がある。

第一、西王母事
第二、周武王船入白魚事
第三、王子喬謁桓良仙人事
第四、蚩尤事
第五、大佛殿事
第六、摩醯法圖事
第七、神泉苑事
第八、梅檀崛王事
第九、淨藏貴所事
第十、王仁詠和歌事
第十一、殿高宗召傅說事
第十二、夏禹王盡力乎溝洫事
第十三、太公望事
第十四、廉承武琵琶曲事
第十五、漢高祖貴防劍與事
第十六、鰐供御事
第十七、蘇武事
第十八、干珠滿珠兩顆事
第十九、素盞烏尊隨大蛇事
第二十、阿育大王雞峯寺建立事
第二十一、上宮太子勝鬘經御講讀事　尊英作
第二十二、玄宗皇幸二月宮事　尊英作
第二十三、婆穆公召百里奚事　永胤作
第二十四、王母捧二明珠穆王一事　永胤作

詞材は和漢及び印度にわたつてゐるが、最も支那の故事の多いところに、文權が桑門者流の間に移つてゐたことが知られよう。總じては「史記」「白氏文集」から出たものに富むが、それも朗詠を通して人々の聞知したものの如くである。作者永胤は永正の末年に、まだ存命であつた人、尊英もほぼ同時代の人。今自國の故事を綴つた一例を示す。

干珠滿珠兩顆事

是者神功皇后ニテ御坐ス。サテモ先皇仲哀之御憤爲レ被レ達、住吉有二御合體一、三韓可レ有二發向一トノ御事ナリ。官軍各被レ得二其心一候ヘ。

一人云　忝モ皇后者女體ニテ御坐ストイヘドモ、威雄挫二男子一、武略甲二諸軍一。其上被レ添二神助一。異國豈不レ降ヤ。急ギ可レ被レ揚二御旗一候。

一人云　御儀尤也。乍レ去異國ハ隔二萬里之滄海一。哀レ龍宮之靈寶干珠滿珠之兩顆ヲ以テ、潮ノ滿チ干ヲ令二自由一、武略ノ專一トセラレ候ハバヤ。

一人云　是ハ不思議之御意見哉。如何トシテカ彼明珠ヲ被レ得候ベキ。

一人云　臣ガ存ジ候ハ、海底ニ垂レ跡給フ磯良ノ神ヲ有二勸請一令レ憑借ラシメ玉ヒ候へ。

一人云　尤宜シ。サラバ神樂ヲ奏シ、庭燎ヲ燒イテ磯良ノ神ヲ召請被レ申候へ。

一人云　如何ニ海底ニ垂レ跡玉フ磯良ノ神、應二勸請一此砌ニ影向シ玉ヒ候へ。

磯良云　是ハ海底ヲ化度スル磯良ナリ。無二止事一神樂之聲ニ被レ催テ、此處ニ影向ス。勸請ノ何ノ故ゾヤ。

一人云　召請非二別之儀一。此君三韓ヲ可レ有二對治一爲二武略一、龍宮ニ干珠滿珠之兩顆ヲ令レ借二御事ナリ。宜シク垂二神助一玉ヒ候へ。

磯良云　是ハ不レ圖事哉。彼ノ兩顆之明珠ハ龍宮無雙之靈寶ナリ。輒ク巨レ被レ許。然レドモ爭カ空二勅儀一ヤ。

一人云　尤難レ有。サラバイソギ取リ來リ、備二叡覽一坐シ候へ。

磯良云　然者今暫ク是ニテ相待タレ候へ。

コ、ニテ太鼓ヲナラスベシ

其時磯良又海底ニ入レバ、海中振動シテ忽ニ將二龍一彼兩顆ヲ捧ル處ナリ。

是ニテ雜類可レ出。魚類。

一人云　是ハ奇特之事哉。親シク二龍出現シテ赫奕タル寶珠ヲ捧グ。急ギ備二叡覽一候ヘカシ。

左右大臣ニ渡レ珠。

一人云　左右之大臣清珠ヲ執ルニ鞠躬如トシテ不堪二感懷一。天氣特ニ快然ナリ。是則平二三韓一治二四海一和國一統之世ト成シ給フベキ佳瑞也。舞樂ヲ奏シテ磯良ノ神ヲ翫シ候へ。

一人云　サラバ舞樂ヲ可レ被レ奏候。

少なくとも出場者は八人、その他に魚類に扮したものも四五人は出たことなるべく、大風流中の大がかりなものである。もしこれに、既に舞樂も畢りぬれば磯良は二龍を隨へて、海底深く入り給ふといつたやうな結尾があれば、立派に劇の形を構成するのである。假りに能樂の役名をこれに附すれば、神功皇后は子方、延年でいふ若少（若菩兒）、磯良の神がシテ、左大臣がワキ、右大臣がワキツレ、他は皆トモと見るべく、最初の序をいふ者がワキである。

【小風流】實禪の輯に次の十五作がある。

第一、遊客儒者到二銀河一事
第二、天台山之事
第三、七賢事
第四、天台淨土二宗天上事　慈尊院永胤作
第五、莊子事
第六、富士事　尊英作
第七、竹生島事
第八、天人下事　永胤作
第九、北國花洛武士到圯橋事
第十、驪龍頷下珠事
第十一、聲明師詣二清涼山一事
第十二、歌人詣二住吉一事　永胤作
第十三、詩人飲二仙家酒一事　尊英作
第十四、仙人圍碁事
第十五、佐保姫之事

北國花洛武士到圯橋事

是ハ北國方ヨリ上洛ノ志ニテ罷出デ、羇中ニ送レ日候程ニ漸ク都モ不レ遠トコソ覺エ候へ。

一人云　吾ハ是花洛賀茂ノ邊ニ兵法ヲ業トシ、酌二吳子孫子ガ流一、學二張良樊噲ガ武勇一候。不圖田舍ニ下リ候。御邊ハイヅクヨリ何方ヘノ旅客ニテ坐シ候ゾ。

一人云　某ハ北國ノ者ニテ候。同國武士ト諍レ權、此二三ケ年ハ越山ノ側ニ蟄居仕リ候ガ、京都ニ罷上リ付二奉行所一致二愁訴一バヤト思立チ候。都人ニテ坐シ候ハバ、宜シク御指南ニ預リ度候。

一人云　御上洛ノ意趣承リ候。凡ソ上裁トイヘルハ、以二正理之藥一癒二訴訟之病一、挑二憲法之灯一照二愁歎闇一ベキ處、世覽二澆季一奉行頭人モ或ハ吮二賄賂一或ハ傾二贔屓一動

モスレバ理不盡ノ沙汰ノミ也。余ガ存候ハ、唯學二兵法一以二智謀一退二怨敵一達二本意一給ヒ候ベシ。

一人云　是ハ不思議ノ御意見哉。サテ兵法ノ濫觴委承度候。

一人云　凡兵法流レ區、先ヅ張良渭水圯橋謁二黃石公一傳二一卷之書一、漢高祖師成候。張良一卷之書立所登二師傅一候モ、此事ニテ候。

一人云　誠是者嚴重御事也。哀彼圯橋ヤラ

一人云　御奏奉レ見止事ナキ歌舞ノ菩薩ニテ坐ス。尙願ハクハ一曲ヲカナデ見セ給ヒ候へ。

觀音云　是又安キ事也。サラバ管絃ヲ奏シ候へ。

一人云　尤叵レ有候。

一人云　打チ候へ。

かくの如くで、我が國の說話を材としても、後世最も愛好される源平時代の事蹟や、曾我兄弟の復仇を仕組んだものは一曲もない。これシテは藤間某、トモはその從者、ツレは延年役者數人、子方は花若、ワキは櫻の本の坊、ツレは千手院の三位、同宿二位、外に狂言方の能力も出る賑やかなもの。この曲は禪鳳の「習道目錄」の中にあれば、さう新しい作ではない。（古今謠曲解題による）

【狂言の風流】狂言では、これを狂言よりも古いものとし、一子相傳のものにしてゐる。（能狂言參照）　【高野】

振分髪（ふりわけがみ）　歌論書　一卷　【著者】小

モスレバ理不盡ノ沙汰ノミ也。余ガ存候ハ、唯學ニ兵法ヲ以テ智謀ニ退ケ怨敵ニ達ニ本意ニ給ヒ候ベシ。

一人云　是ハ不思議ノ御意見哉。サテ兵法ノ濫觴委承度候。

一人云　凡兵法流レ雖レ區、先ヅ張良渭水圯橋ニ謁シテ黄石公ニ傳ヘ一卷之書ヲ一漢高祖師成候。張良一卷之書立所ニ登ニ師傳ニ候モ、此事ニテ候。

一人云　誠ニ是者嚴重御事也。哀彼圯橋ヤランニ到リ、石公逢直兵法傳受仕候ハバヤ。

一人云　是ハオホケナキ事仰候者哉。乍レ去與ニ其進ニ不レ與ニ其退ニトアレバ、無二ノ御志ニテ候ハバ、某モ同心申シ、渡ニ唐朝ニ尋ニ圯橋ニ候ベシ。

一人云　誠ニ懇ノ御指南ノ上御同心忝ク存候。サラバ一葉ノ船ニ棹異朝赴候ベシ。

橋ニ行キ向フベシ

一人云　夜ヲ日ニ繼急候程圯橋頭ニ到覺エ候。黄石公本地觀音大士坐候。是ニテ觀音ノ寶號ヲ唱ヘテ祈念シ坐シ候ヘ。

一人云　尤可レ然候。サラバ同音ニヲコツリ候ベシ。

南無ヤ大悲觀世音我等ヲ愍ミオハシマシ所願ヲ叶ヘテタビ玉ヘ〳〵。

觀音出ヅ　フシニテイフ　慈眼ヲ以テ視ソナハス。衆生ノ願ヒヲ滿テヌベシ。コトバ是ハ黄石公ノ本地觀音大士也。面々志切ナレバ、彼ノ子房ニ傳ヘシ處ノ素書、只今授クル也。惣テ此書ハ不道不神不聖不賢ノ者ニハ許スコトアルベカラズ。

一人云　誠ニ是ハ有難御事也。急以ニ此書ヲ爲ニ智略ニ忽チ退ケ敵ヲ、心ノママニ樂ミ榮ヱ候ベシ。

一人云　御奏奉レ見止事ナキ歌舞ノ菩薩ニテ坐ス。尚願ハクハ一曲ヲカナデ見セ給ヒ候ヘ。

觀音云　是又安キ事也。サラバ管絃ヲ奏シ候ヘ。

一人云　尤叵レ有候。

一人云　打チ候ヘ。

かくの如くで、我が國の說話を材としても、後世最も愛好される源平時代の事蹟や、曾我兄弟の復仇を仕組んだものは一曲もない。これが古く綴られた一證で、少くとも古風を繼承してゐた證左となし得る。

【桂川地藏記所載風流】應永二十三年七月、桂川の邊に地藏の石佛が涌出して、その四日に盛大な供養を行つた。「稚子襁兒爲ニ風流ヲ一則老夫壯者致ニ警固ヲ一而擧レ囃所レ詣之物萬般也」とあつて、和漢の故事六十餘に關する作り物を渡した。その中には能樂や狂言と材を同じうするものがあり、漢土の聖賢・文事、又は我が國のその當時の諸人物を摸して、甚だ注目すべきものがある。「下學集」に、「風情義也、日本俗呼ニ拍子物ヲ一曰ニ風流ト一」とあるのは專らこの類を指したのである。

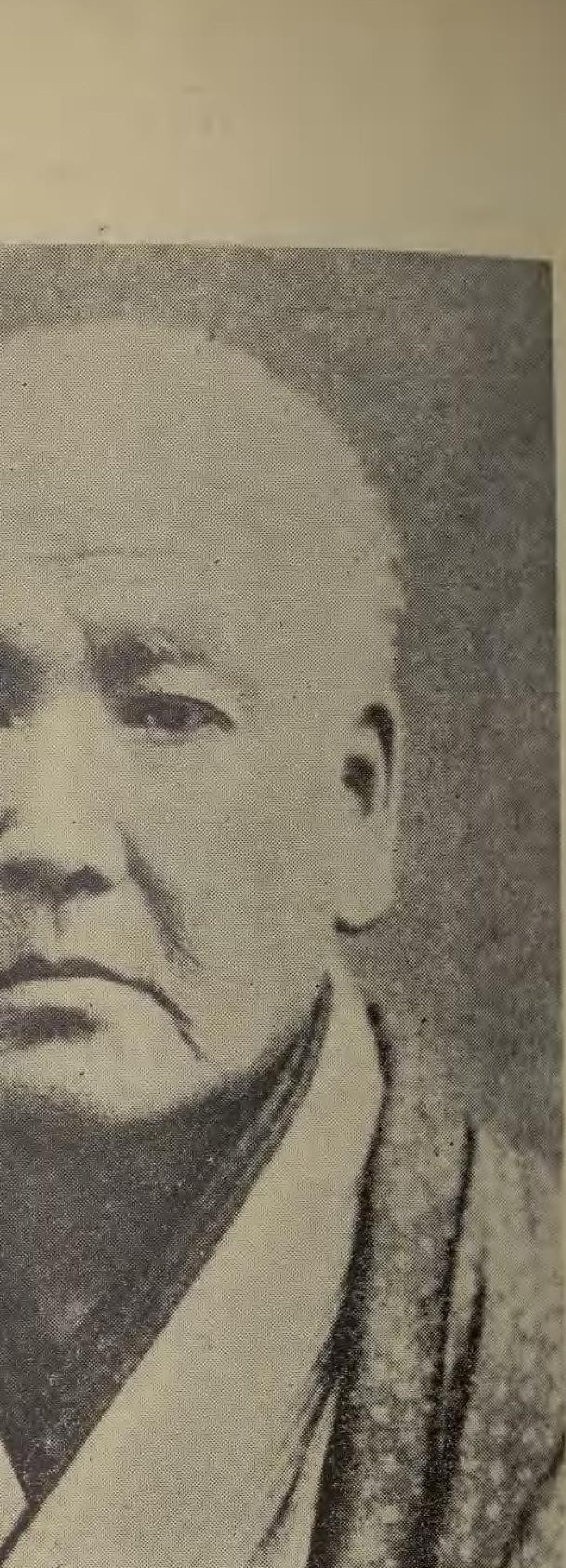
【謠曲の風流】謠曲の「奈須與市」は一名を「延年奈須」又は「延年奈須與市」といふ。これに越前國平泉寺の延年風流を綴つてかうある。平泉寺では、毎年花の本で、延年の風流を演ずるのが習はしであつた。一とせ那須與市が扇を射る處を演ずることになり、花若といふ兒がその役にきまつた。花若の父藤間某は延年見物に出かけたが、自ら平家方の役を引受けて出場し、もし花若が射損じたらそれを射殺して、家門の名折を防がうとした。然るに見事に射中てて父子共に一山の酒宴に列する。シテは藤間某、トモはその從者、ツレは延年役者數人、子方は花若、ワキは櫻の本の坊、ツレは千手院の三位、同宿二位、外に狂言方の能力も出る賑やかなもの。この曲は禪鳳の「習道目錄」の中にあれば、さう新しい作ではない。（古今謠曲解題による）

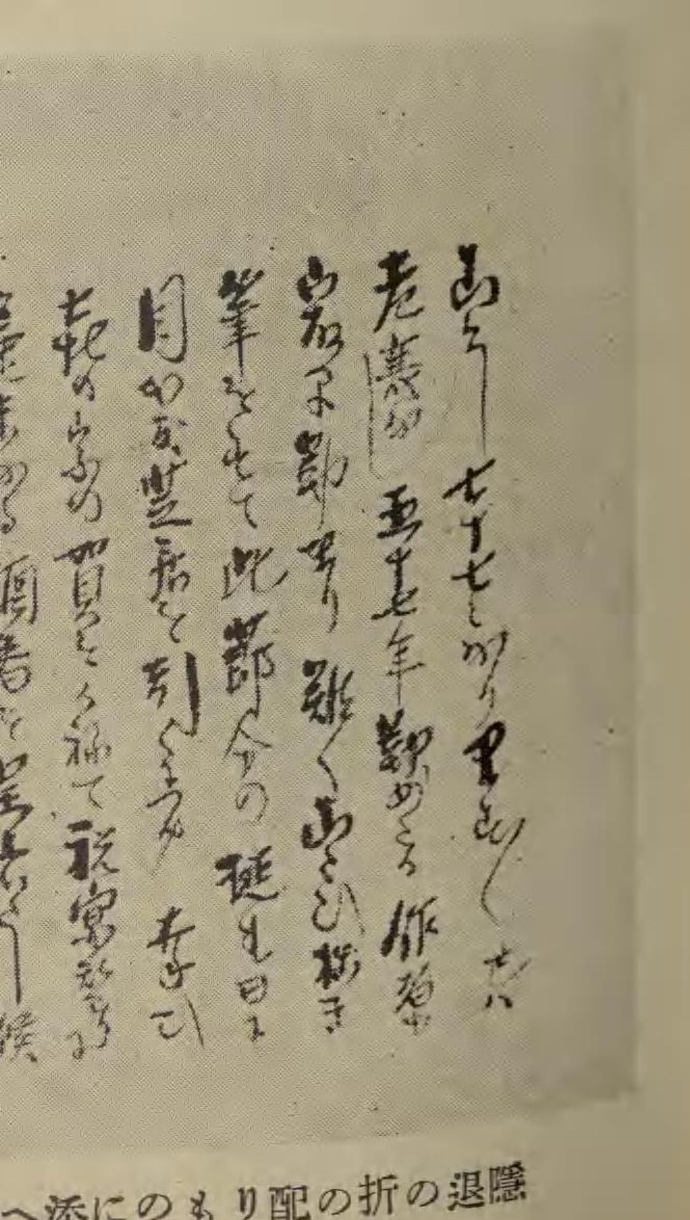
【狂言の風流】狂言では、これを狂言よりも古いものとし、一子相傳のものにしてゐる。（能狂言參照）　〔高野〕

振分髪（ふりわけがみ）　歌論書　一卷　【著者】小澤蘆庵　【刊行】寛政八年に成り、同年刊行。

【諸本】小澤蘆庵全集（續歌學全書）・和歌作法集（和歌叢書）所收。　【解說】初學の手引として書かれたもので、大部分は「詞のはたらき」や「てにをは」のこと等を述べてゐて、歌論以外に文法書をも兼ねてゐる如き點に特色がある。歌は人の聲で、思ふ事が聲にでるのを歌といふ。故に一句で言ひ果てたのもあり、二句三句のもあり、文字の數は一定しなかつたが、素盞嗚尊が五句三十一字の歌をよんでから、それに詠み習つて三十一字の歌が出來たのであると論じ、歌は思ふまゝを詠むので作歌は容易であると例をあげて說明し、歌は思ふ心に法なく、言ふ詞にも法はない。遍く世にみちみちて誰もが知つてゐる詞で、三十一字に續ける事を歌といふのである。ただ心を平にして聞ゆべきやうをむねとしてよめばいい。初心の時は言はうと思ふ心を少くして、むねと言ふべき一すぢをのみたてその心のあざやかに聞ゆるやうに心掛ければ人にも聞える。二度三度吟じてみれば自ら氣づく事が出來る。又歌四五十も詠めば、やゝ詞の常の理が分り理なき詞は出て來ぬやうになる。堪能めかして珍らしい事を言はうとするは第一の病で、すべて才のない者がんに優らうとするのは見苦しい。至つて高い道は却つて平生目前の事にある。常の詞によく心をつけ、心を平易にし理の正しい詞で一すぢに續けるなら自らよく聞え、別に習ふ要はないものであると教へてゐる。これは彼のただごとうたの主張である。次に漢字は文字多く文字毎に意味があり、四聲・韻字・平仄を分け、詩文の法則として煩瑣なるに反し、我が國は假名四十七文字で、假名一字には意味がなく、而も文字を集めて微妙な心をあらはし、生きた心を死んだ假名に寓するのである。その微妙な詞のはたらきは同じ詞も上下によつて轉ずるものであると例をあげて說明し、なほてにをはの事、詞の云ひざまに過去・現在・未來・噂・下知の五種の用法があり、人の上に自・他を兼ねてゐるとし、最後に歌が修身・齊家・敎諭の重大な役割をするを言ひ、古へ言語の大道に障る所なく、習ふべき用もなかつたが、末の世になつて歌は詞の上ばかりと思ひ、巧に泥み艷に流れるに至つたと論じてゐる。【價値】この書の大部分を占めてゐる語法を論じた部分は、粗雜で間違つた所も少くなく、學的價値に乏しい憾みがあるが、初學者に詞の使ひざまの微妙な點を悟らしめ、詞の用法變化に注意をうながす用をなした點では、多少の效果はあつたと思はれる。非學者的な且つかなり舊式の見解もまじつてはゐるが、彼の歌論書としては、一讀さるべきものの一つである。　〔藤川〕

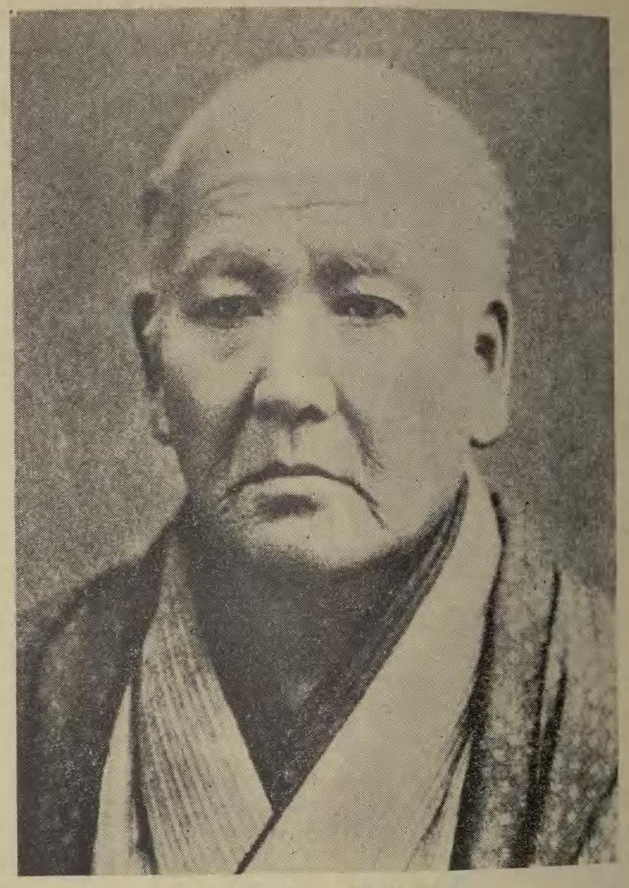
古川魁蕾（ふるかわくわいらい）　戲作者　【通稱】精一　【別號】古江山人・鬼斗生・竹のや雀等。　【歿年】明治四十一年八月二十日、東京麻布簞笥町自宅にて歿す。享年五十五。　【閲歷】幕府旗下の士古川吉左衞門の長男。明治八年魁新聞


古河默阿彌（七十

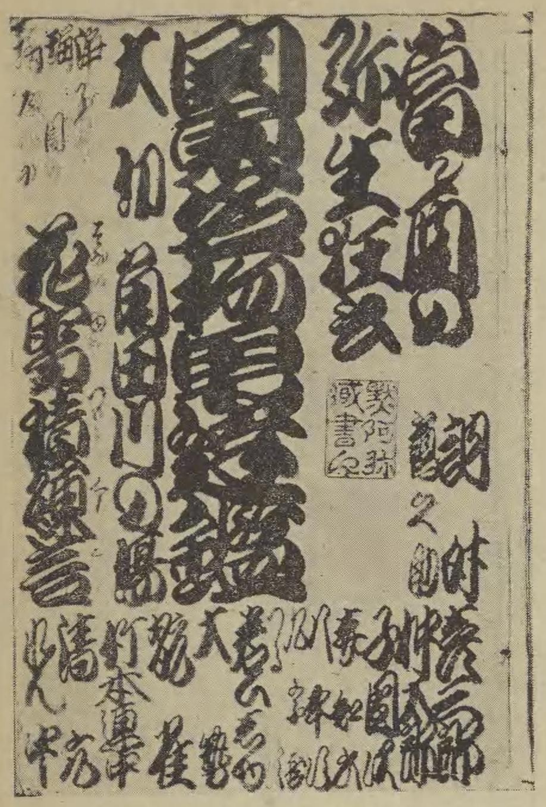

隱退の折の配りものに添へ

に入り、翌年東京繪入新聞に轉じ、更に大阪此花新聞・神戸又新日報等に新聞小說を綴つた。當時岡本起泉・饗庭篁村（各別項）の二氏と共に三才子と稱されたといふ。【著作】栗原百介傳（明治十六年）○花茨胡蝶廼彩色（同十八年）○遠山黛○みだれ萩○深見草等。
【參考】狂歌人名辭書○早稻田文學（第二四三）　（石川巖）

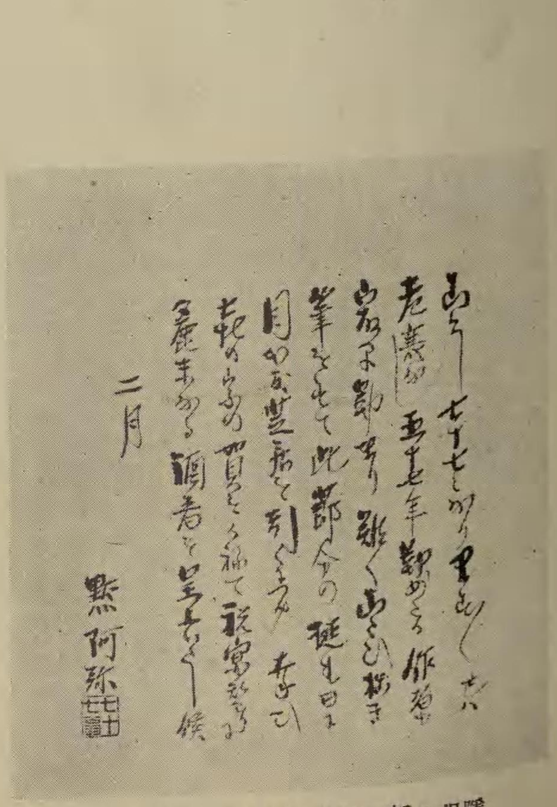
古河默阿彌（ふるかは もくあみ）　狂言作者【本名】吉村新七。通例河竹默阿彌と呼ばれてゐるが、生前にその稱はない。【前名】勝諺藏・柴晋輔・二代河竹新七【生歿】文化十三年二月三日江戸日本橋通り二丁目式部小路に生れ、明治二十六年一月二十二日本所區南二葉町の自宅に歿す。享年七十八。【法名】釋默阿居士（默阿彌陀佛）【墓所】東京市中野區中野町源通寺。
【家系】祖先は寛保前から江戸にゐた商人らしい。その後、日本橋小田原町に越前屋勘兵衞といふ屋號と名前を嗣いでゐた。小田原町であるから業は魚問屋の類であつたかと思ふ。默阿彌の生れた文化十三年には、通二丁目式部小路の角地面に湯屋の株の賣買を業としてゐたが、間もなく芝金杉に移つて質屋を營んだ。父勘兵衞は四代目にあたり、彼はその後妻に生れた長男であつた。異母兄は文化八年に早世してゐるから、長男として養育せられた。異母姉一人、弟妹各一人づつあつた。父は几帳面な實直一方の人であつたが、祖父は家産を蕩盡した位で遊樂氣分を備へてゐたといふ。
【閱歷】十四歲の時、柳橋で藝妓を携へて步いてゐた所を親類の者に發見されて勘當され、それから劇場生活に入るまでの五六年間が放浪的遊樂の時代となつた。天保三年（十七歲）貸本屋の手代となつて諸方へ出入し、芝居の樂屋にも入り、雜書の耽讀をもした。吉村芳三郎に因み「芳々」と名乘り、雜俳の點者の眞似をもし、口上茶番を盛んに新作し、茶番集「朝茶の袋」が寫本のまゝに殘されてゐる。彼自身語つた所によると、「花曆八笑人」（別項）に描かれた如き生活が日常生活であつたらしい。彼が踊の師匠澤村お紋の許に出入する中、頓才・趣向の才を師匠に認められて、劇場人になる事を勸められ、天保五年末（十九歲）孫太郎南北に入門した。翌六年三月市村座に出勤し、番附に勝諺藏の名が載せられた。勝は南北を名乘る前の姓であつた。その後も三回隱退したが、それは病氣或は家を嗣いだ弟の死に遇つたからでもあるが、芝居內部の生活に躊躇した形跡もないではない。四度目に二十六歲で始めて落ち着いてからも、約十五年間は不遇であつた。機轉も利き、記憶力も強く、作劇上にも技能を認められてゐたのだが、地位こそ二代河竹新七を嗣ぎ、立作者ともなつてゐたが、惠まれなかつたと言つてよい。弘化三年（三十一歲）茶人大和屋源兵衞の次女琴（二十歲）と結婚した。默阿彌が作者として終始したのは約五十年間にわたつてゐるが、便宜上、これを四期に分つて見る。〔準備時代〕（二十歲—四十二歲）この時代に狂言作者としてあらゆる仕事をした。稽古、番附看板の下繪、舊作の補訂、先輩の助筆、小說の脚色上演等にわたる。この期間に彼の師表、援護者となつたのは、作者として孫太郎南北を初め、中村重助・三代櫻田治助・三升屋二三治等の狂言作者、河原崎座の座主河原崎權之助、俳優では、市川海老藏・關三十郎等を擧げるべきで、同業の先輩又は競爭者としては、三代並木五瓶・三代瀨川如皐（各別項）等があつた。特に如皐は約十歲の年長者であつた上、小團次と提携して「佐倉宗五郎」「切られ與三」の如き名作を發表してゐたので、最も大いなる對立者であつた。〔確立時代〕（四十三歲—五十一歲）四代市川小團次との結託時代で、最も潑剌とした約十年間で、安政大震の翌年から慶應二年小團次の死に至る。所謂江戶情調を縱橫に描き、世話狂言、盜賊を主人公とした白浪狂言を續々と發表し、作者としての地位を確立し、寫實的な藝風により沈衰に瀕した歌舞伎劇に、一脈の生氣を齎らさんとした小團次のために脚本を提供して、共に一新生面を開いた。「雪駄直し」「文彌殺し」「鼠小僧」「小猿七之助」「黑手組助六」「十六夜淸心」「三人吉三」「縮屋新助」「因果小僧」「村井長庵」「腕の喜三郎」等が代表的作物である。小團次以外に接觸した主なる俳優を擧げて見ると、市川團藏・尾上梅幸・尾上菊次郎・坂東龜藏・坂東彥三郎等であつた。現在も默阿彌から出て、竹柴姓を名乘る狂言作者は都下の劇場に多いが、初めてこの姓を用ひさせたのは安政三年三月で、河竹から竹の一字を取り、柴は出身地芝により、そこに竹芝の浦といふ地名もあるところから、竹柴なる姓を案出したのだと傳へられる。〔全盛時代〕（五十二歲—六十六歲）明治初年から同十四年隱退發表まで、最も得意な時代である。興行者も、中心勢力の俳優も、すべて明治維新を限界として新時代に推移した。座主として手腕を揮つたのは先代守田勘彌一人で、俳優としては九代團十郎・三代澤村田之助・五代菊五郎・先代左團次等であつたが、いづれも默阿彌より年少であつた。默阿彌は引續き同じ地位を保つて新時代に臨み、また技倆も圓熟老練の境に達したので、劇壇に於ける彼の地位は自ら想察し得られよう。勘彌は明治五年自座の新富町進出を計畫し、その大事業の敢行に際して、座附作者として彼を優遇し、策謀の根源となした觀さへあつた。前期に於ては見られなかつた時代狂言・御家狂言等、規模の雄大な新作が續々と生れ、歌舞伎劇最後の華麗を示し、また新時代の傾向を現はす散切物・活歷物（別項）の生れたのもこの期間であつた。「地震加藤」「夜討曾我」「天一坊」「加賀騷動」「黑田騷動」「河內山と直侍」「重盛諫言」「吉備大臣」「霜夜の鐘」「女書生繁」「髮結新三」「土蜘蛛」等もこの間の代表的作物であつた。かくして明治十四年（六十六歲）十一月新富座に於て自家一作（門弟に助筆させず）の「島衞月白浪」（別項）を上演して記念興行として隱退を披露し、古河默阿彌と改名したのであつた。劇場の正面には座主勘彌の名によつて記された口上看板が揭げられ、知友の間には「引しほ」と題した披露口上の摺物が贈られ、「腸のなき愚かさに直な道知らで幾年橫に這ふ蟹」の狂歌が添へられた。口上看板の中に、「狂言作者河竹新七義追々老年に及世之流行に遲れ候迚四五年前より退身致度と申出候得共作者無人之折柄今四五年相勤候樣申延候所、早くも其期限に至り是非々々今年は退身致度と再三之願難默則願ひに任せ當狂言を一世一代と仕り退身爲致」といつた。默阿彌といふ名は遊行上人から與へられた阿彌號である。演劇改良の運動は、明治十年頃から漸次に劇場內部にも及ぼして來たので、それは彼の衷心からの願望でもあつた。〔默阿彌時代〕（六十七歲—七十八歲）隱退發表後、殆ど獨占してゐた各劇場の狂言作者としての支配權を二三の高弟に讓り、自分は後見役になつたのであるが、從來の關係上執筆を離れることはできなかつた。新作に關係した俳優は



古河默阿彌（七十七歳）



默阿彌自筆脚本表紙



隱退の折の配りものに添へた口上

默阿彌自畫繪看板下繪

早世してゐるから、長男として養育せられた。異母姉一人、弟妹各一人づつあつた。父は几帳面な實直一方の人であつたが、祖父は家産を蕩盡した位で遊樂氣分を備へてゐたといふ。

【閲歴】十四歳の時、柳橋で藝妓を携へて歩いてゐた所を親類の者に發見されて勘當され、それから劇場生活に入るまでの五六年間が放浪的遊樂の時代となつた。天保三年（十七歳）貸本屋の手代となつて諸方へ出入し、芝居の樂屋にも入り、雜書の耽讀をもした。吉村芳三事をした。稽古、番附看板の下繪、舊作の補訂、先輩の助筆、小説の脚色上演等にわたる。この期間に彼の師表、援護者となつたのは、作者として孫太郎南北を初め、中村重助・三代櫻田治助・三升屋二三治等の狂言作者、河原崎座の座主河原崎權之助、俳優では、市川海老藏・關三十郎等を擧げるべきで、同業の先輩又は競爭者としては、三代並木五瓶・三代瀨川如皐（名別項）等があつた。特に如皐は約十歳の年長者であつた上、小團次と提携して「佐倉宗

で、最も得意な時代である。興行者も、中心勢力の俳優も、すべて明治維新を限界として新時代に推移した。座主として手腕を揮つたのは先代守田勘彌一人で、俳優としては九代團十郎・三代澤村田之助・五代菊五郎・先代左團次等であつたが、いづれも默阿彌より年少であつた。默阿彌は引續き同じ地位を保つて新時代に臨み、また技倆も圓熟老練の境に達したので、劇壇に於ける彼の地位は自ら想察し得られよう。勘彌は明治五年自座の新富町遷

狂言を一世一代と仕り退身爲致」といつた。默阿彌といふ名は遊行上人から與へられた阿彌號である。演劇改良の運動は、明治十年頃から漸次に劇場内部にも及ぼして來たので、それは彼の衷心からの願望でもあつた。〔默阿彌時代〕（六十七歳―七十八歳）隱退發表後、殆ど獨占してゐた各劇場の狂言作者としての支配權を二三の高弟に讓り、自分は後見役になつたのであるが、從來の關係上執筆を離れることはできなかつた。新作に關係した俳優は

前期とさしたる變化はなかつた。「四千兩」「加賀鳶」「高時」「仲光」「關ケ原」「紅葉狩」等は、この期の代表作である。前期以來の演劇改良運動は一層熾烈となり、明治十九年八月演劇改良會の組織により、過激な改良説が發表され、特に狂言作者は最も大きな對象となり、自然代表者の觀ある默阿彌は、かなり苦境に立たなければならなかつた。その點から晩年は相當藝術上に苦惱を味はされた。家庭的には多幸であつたが、柴田是眞に就いて丹青の道に精進してゐた次女島を早く失ひ、長女糸、妻

舞伎十八番（別項）が十數種、主として新所作事で、五代尾上菊五郎によつて演出、選定された新古演劇十種（別項）が數種ある。準備時代の長かつた故か、四十歳頃から執筆の始まつた故か、初期に於て既に完成されてゐたと考へられ、題材の點に於てこそ多少の變化もあるが、作劇の手法・態度等に關しては殆ど大差ないといつてよい。現今最も多く輯錄されたものは、默阿彌全集二十七卷（春陽堂刊）である。全作の名題を掲記することは許されないが、當時の文人・通人連の間に流行してゐたので、頓才的・趣向的才能に優れてゐた彼は、櫻田治助（狂言堂左交）・瀬川如皐等と共に仲間に入り、絶えず優秀な成績を收めてゐたが、その交友としては、江戸末期の通人の津藤杳以山人、噺家の左樂・圓朝・燕枝、文人の假名垣魯文・山々亭有人・武田交來・梅素玄魚等があげられる。後、明治十年前後、演劇の改良運動勃興と共に、新に得た交友としては、依田學海・福地櫻痴・川尻寶岑・小中村清矩・岡野紫水・關根只誠・幸堂得知・饗庭篁村・坪内逍遙等

戀太）○葛紅葉宇都谷峠（座頭文彌殺し）（別項）○鼠小紋東君新形（鼠小僧）（別項）○網模様燈籠菊桐（小猿七之助、玉菊）（別項）○花街模様薊色縫（鬼あざみ、十六夜清心）（別項）○三人吉三廓初買（三人吉三）（別項）○八幡祭小望月賑（縮屋新助）（別項）○辨天娘女男白浪（辨天小僧）○勸善懲惡覗機關（村井長庵）（別項）○玆江戸小腕達引（腕の喜三郎）（別項）○曾我綉俠御所染（御所五郎藏）（別項）○三保浦松月横櫛（切られお富）（別項）○怪談月笠森（笠森お仙）○船打込橋間白

前期とさしたる變化はなかつた。「四千兩」「加賀鳶」「高時」「仲光」「關ケ原」「紅葉狩」等は、この期の代表作である。前期以來の演劇改良運動は一層熾烈となり、明治十九年八月演劇改良會の組織により、過激な改良説が發表され、特に狂言作者は最も大きな對象となり、自然代表者の觀ある默阿彌は、かなり苦境に立たなければならなかつた。その點から晩年は相當藝術上に苦惱を味はされた。家庭的には多幸であつたが、柴田是眞に就いて丹青の道に精進してゐた次女鳥を早く失ひ、長女糸、妻女琴等によつて晩年を平和に送り、明治二十年以後終焉の地と定めた本所二葉町に七十八歳の生涯を了へた。

【人物】死去直後「早稲田文學」誌上に連載された坪内逍遙閲、奥泰資編「默阿彌傳」の緒言によると、醜弊蝟集した梨園の中にあつて、能く謹嚴篤實、義理人情を重んじたといふ。「粹興奇人傳」等にも同樣評されてゐて、金錢に淡泊、身を持すること極めて謙遜、門弟をよく愛撫し、積善陰德を信條とし、非常に用心深かつた。身裝なども質實を旨とし、唐棧を好む風の好尚があつた。家庭に於ては猫や犬を愛し、鼠にまでも危害を加へぬやうにしてゐたといふ。身長は五尺七寸、四十歳前後からは肥り始め、六十五歳で十六貫五百匁の體重があつた。人物及び體驗が作物の上にどれほど反映してゐたかは疑問であるが、因果應報の理を堅く信じ、勸善懲惡を力説した事は隨所に看取される。當時の常套手段でもあつたが、伊原青々園の語をかりていへば、眞に人生の光明と正義の勝利とをその作中に謳つたものであらう。劇壇以外の交友を見ると、文久年代に三題噺、慶應に入つて書合せ(興書會)が、當時の文人・通人連の間に流行してゐたので、頗才的、趣向的才能に優れてゐた彼は、櫻田治助(狂言堂左交)・瀬川如皐等と共に仲間に入り、絶えず優秀な成績を收めてゐたが、その交友としては、江戸末期の通人の津藤香以山人、噺家の左樂・圓朝・燕枝、文人の假名垣魯文・山々亭有人・武田交來・梅素玄魚等があげられる。後、明治十年前後、演劇の改良運動勃興と共に、新に得た交友としては、依田學海・福地櫻痴・川尻寶岑・小中村清矩・岡野紫水・關根只誠・幸堂得知・饗庭篁村・坪内逍遙等の文學者が算へられる。

【著作】純然たる座附狂言作者即ち職業的の脚本作家であるから、すべて特定の俳優にあて、時の觀客に深切に、出來得る限り時代の尖端を行くため、流行の事象・言語等を世話・時代の狂言に區別なく驅使し、應用して書いた。であるから雜誌に連載し、未完に終つた二作以外には上演されなかつたものは一もない。生涯七十八年の中、眞に筆を揮ひ出したのは四十歳からであるから、作者生涯は約三十六七年間で、その間長短篇を併せ、作の數は三百六十種に達し、現在調査された所によると、本邦に於ける著作脚本數の最高位を占めてゐる。

時代狂言(ダンマリを含む)……四十一種
時代狂言 新時代物(活歷物を含む)……十八種
準時代物(御家狂言)……三十一種
世話狂言(生世話・白浪・俠客物等を含む)……計百三十種
狂言淨瑠璃 ある作中に含まれしもの……四十八種
狂言淨瑠璃 獨立せるもの(對面を含む)……七十九種
唄・淨瑠璃 所作事……十三種
計百四十種

右の中には主として活歷物的要素から成る九代市川團十郎によつて演出、選定された新歌舞伎十八番(別項)が十數種、主として新所作事で、五代尾上菊五郎によつて演出、選定された新古演劇十種(別項)が數種ある。準備時代の長かつた故か、四十歳頃から執筆の始まつた故か、初期に於て既に完成されてゐたと考へられ、題材の點に於てこそ多少の變化もあるが、作劇の手法・態度等に關しては殆ど大差ないといつてよい。現今最も多く輯錄されたものは、默阿彌全集二十七卷(春陽堂刊)である。全作の名題を掲記することは許されないから、左に各種目に就き注目すべき名題を摘記する。

【時代物】難有御江戸景淸(岩戸だんまり)○富士三升扇會我(生立會我、また會我の敷皮)○太鼓音智勇三略(酒井の太鼓)(別項)○川中島東都錦繪(川中島の合戰)○鎌倉山春朝比奈(松島の局)○黄門記童幼講釋(水戸黄門記)○大盃觴酒戰強者(馬場三郎兵衞)○關ケ原神葵葉(關ケ原軍記)○夜討曾我狩場曙(十番斬)○水滸傳雪挑(地震加藤)(別項)○出來秀月花雪寒(眞田幸村、九度山)○牡丹平家譚(重盛諫言)○星月夜見聞實記(笹柄の平太)○二代源氏譽身換(仲光)○吉備大臣支那譚○北條九代名家功(高時、義貞太刀流し)○孝源氏陸奥日記(伊勢三郎)【御家狂言】樟紀流花見幕張○裏表柳園畫(柳澤騷動を裏表に書く)○筑紫巷談浪白縫(黒田騷動)○早苗鳥伊達聞書(實錄仙臺萩)【世話狂言】升鯉瀧白旗(えんま小兵衞)○都鳥廓白浪(忍ぶの惣太)○萬紅葉字都谷峠(座頭女殺し)(別項)○鼠小紋東君新形(鼠小僧)(別項)○網模様燈籠菊桐(小猿七之助、玉菊)(別項)○花街模様薊色縫(鬼あざみ、十六夜淸心)(別項)○三人吉三廓初買(三人吉三)(別項)○八幡祭小望月賑(縮屋新助)(別項)○辨天娘女男白浪(弁天小僧)○勸善懲惡覗機關(村井長庵)(別項)○玆江戸小腕達引(腕の喜三郎)(別項)○曾我綉俠御所染(御所五郎藏)(別項)○三保浦松月横櫛(切られお富)(別項)○怪談月笠森(笠森お仙)○船打込橋間白浪(鳶掛松)(別項)○梅雨小袖昔八丈(髪結新三)(別項)○日月星享和政談(延命院)○天衣紛上野初花(河内山と直侍)(別項)○新皿屋敷月雨暈(新皿屋敷、魚屋宗五郎)(別項)○極附幡隨長兵衞(湯殿の長兵衞)○三題噺魚屋茶碗(鮫の次郎吉)○浮世淸玄關夜櫻○水天宮利生深川(筆屋幸兵衞)(別項)○四千兩小判梅葉(富藏と藤十郎)(別項)○盲長屋梅加賀鳶(加賀鳶梅吉、按摩道玄)(別項)【散切狂言】東京日日新聞(鳥越甚内)○繰返開花婦見月(三人片輪)○富士額男女繁山(女書生繁)○霜夜鐘十字辻筮○勸善懲惡孝子譽(孝子善吉)○鳥羽月白浪(明石の島藏、松島千太)(別項)○月梅薫朧夜(花井お梅)○綴合於傳假名書(高橋お傳)【狂言淨瑠璃】梅柳中宵月(十六夜淸心道行、淸元)○契戀春粟餅(常磐津)○神有月色世話事(緣結び、淸元・岸澤・竹本)○日月星晝夜織分(夜這星、淸元)○恨葛露濡衣(小夜衣・千太郎道行、常磐津)○貸浴衣汗雷(夕立、淸元)○忠臣藏容畫合(忠臣藏七段返し、竹本・淸元・常磐津)○名大津畫鬮交張(大津繪・淸元・岸澤)○色增桝夕映(淸元、島ちどりの中)○初霞空住吉(かつぽれ)○風船乘評判高閣(スペンサー、常磐津・淸元)○奴凧廓春風(常磐津)【所作事】連獅子(長唄)○釣狐(長唄)(別項)○戻橋(常

磐津)(別項)○土蜘蛛(長唄)(別項)○茨木(長唄)(別項)○船辨慶(長唄)○紅葉狩(長唄・竹本・常磐津)(別項)○一ツ家(竹本)〔其他〕脚本の外に茶番集「朝茶の袋」と、種員作の合卷「雨夜鐘四谷雜談」第五編上下二卷四册を著はしてゐる。【批評】戲曲作家としての特色を擧げると、第一に平民詩人であつた。江戸末期から明治初年にわたる市井細大の事象を、一度は必ず藝術的彫琢を經て表現したところに、戲曲作家としての價値があり、群小の職業的脚本作家中に光彩を放つてゐる所以である。第二に舞臺技巧が優れてゐること。第三に豐富にして流麗なる詞藻の所有者であつたこと。隨所に發見さるゝ名臺詞は、全く音樂的で流麗で效果的なものである。第四には趣向の才に長じてゐたこと。三題噺・書合せ等の催しに於て發揮された趣向は、時に小規模になり過ぎ、氣の利いた程度に留まることもあるが、彼の有機的な構成或はキビキビとして拔け目のない舞臺技巧などには、この才の閃きが少くない。第五に作の種類が廣汎にわたつてゐること。第六に集大成的であつた。一には時代の然らしめた所でもあり、一には彼自身の包容力の大なる氣稟にもよるので、江戸時代のあらゆる舞臺藝術、舞臺藝術家の長所・手法等がすべて攝取され、自在に驅使されてゐると言つてよい。【史的地位】近松門左衞門を江戸文藝の興隆期に於ける最初の最大の集大成者とするに對して、默阿彌をその頽廢期に於ける最後の最大の集大成者とされてゐるが、また彼とほぼ同時代の藝術家では、その地位・境遇・性格乃至藝術上に於て對比せらるべきは、小說家としての曲亭馬琴、劇畫家としての龜戸豐國がある。又新時代へ交渉をもつた一點は、他に例を見ない一特異點である。卽ち依田學海・福地櫻痴(各別項)等によつて大成された活歴物も、端緒は默阿彌に發せられ、守田新水・福地櫻痴の二脚本家の如きは、彼の指導を受けたもので、卽ち新時代に對する橋渡しをも兼ねてゐると言へる。

【傳系】四代鶴屋南北の養子五代鶴屋(孫太郎)南北に入門、二代河竹新七を嗣ぐ。門下には河竹能進・三代河竹新七・竹柴其水・竹柴幸治(久保田彥作)・竹柴瓢助(狂歌師四方梅彥)・勝諺藏・竹柴晋吉・竹柴秀葉・竹柴金作等があつた。【參考】河竹默阿彌 河竹繁俊 ○粹興奇人傳 ○隈なき影 ○魯文珍報(一・二)○歌舞伎新報(第一一七號以下及第一四三一號以下)○早稻田文學(前期第三五號以下)○歌舞伎(第七四號以下及び第一七五號)○近世日本演劇史 伊原青々園 ○默阿彌世話物の研究 吉見勝廣 ○默阿彌研究 岡本綺堂(日本文學講座) 〔河竹〕

古朽木(ふるくちき) 滑稽本 五册【作者】朋誠堂喜三二【名稱】花も實もない、つまらない書と謙遜の意を表はしたのである。【成立】安永九年【諸本】百萬塔・滑稽本集(日本名著全集)・滑稽文學全集所收。【解說】秩父屋與九郎、その子八十八、桃太郎三十九代の孫桃右衞門、その娘お犬、お犬が乳母の子黍藏などいふ人物を使つて、意味のないやうな筋を組み立ててある。喜三二は黃表紙作者として傑れた一人で、本書も黃表紙風の內容・說話を滑稽本の形式で書いたものである。作者自身も言つてゐるが如く、靜觀坊好阿の「當世下手談義」(別項)を摸した所がある。卽ち「下手談義」の惣七安賣の引札せしことの筋が、そのまゝに入つてゐるのである。なほ作者は風來山人の「根南志具佐」(別項)を慕うたといつてゐるが、傍題に附けただけであらう。〔小柴〕

古寺(ふるでら) 所作事 淨瑠璃物【本名題】葵の上の謠曲に結び合せて名夕貌雨の舊寺(なにゆふがほ)【別名題】「戀慕時雨袖舊寺」「田舍源氏露東雲」【通稱】田舍源氏【初演】嘉永四年九月九日初日、江戸市村座「源氏模樣娘雛形」第四幕目【曲節】富本節【作詞】三代櫻田治助【作曲】名見崎友治【振附】花柳壽助【太夫】三代富本豐前掾。【題材】柳亭種彥作「修紫田舍源氏」(別項)を脚色したもので、謠曲「葵の上」を當て込んだものである。なほ「田舍源氏」によつて、これを雛祭の五人囃子の趣向にした所作事、「內裡模樣源氏染」(常磐津)が、天保九年三月市村座で演ぜられた。【傳來】曲は廢滅、現時は淸元節に改調したものが傳はつてゐる。振は淨瑠璃物だけに上演毎に新しく附けらるゝを例とする。【內容】足利光氏(八代市川團十郞)は、尾形惟吉(大谷友松)を供に舞指南東雲(市川九藏)の家へ微行し、東雲の娘黃昏(坂東しうか)と言ひ交す。東雲は山名に賴まれ、光氏に危害を加へんとするのを知り、光氏・黃昏は雨中を逃げ、野中の古寺に一宿する。東雲はその跡を追ひ舞の裝束に鬼女の面を附け、變化の姿にて二人の面前に現はれたが、仁木喜代之助(嵐吉三郞)が駈けつけて東雲の正體を見顯はす。黃昏は母の惡事を悲しんで自殺するので、東雲も全く悔悟し、山名宗全の惡事を告げて自殺する。その間に光氏に捨てられた傾城阿古木(藤川花友)の生靈が現はれる件を挾んである。【價値】筋は他愛ないものであるが、元が草雙紙だけに、人物の取合せや衣裳の配色、舞臺面との調和などに、美しき巧みさを見せる舞踊劇である。【備考】元治元年十一月、江戸中村座に再演の折は、雨を雪に變へ、淨瑠璃も淸元に改め、「面白妙雪の舊寺」の名題で演じた。〔渥美・秋葉〕

古寺(初演繪本番附)

不留房繪詞(ふるほうゑことば) 「破來頓等繪詞」(やれことんとうゑことば)を見よ。

プルムウラ 戲曲【作者】森鷗外【發表】明治四十二年一月、雜誌「スバル」創刊號。【刊行】大正元年八月、「我一幕物」に收錄。鷗外全集第四卷所收。【梗概】〔上の卷〕西印度信度國アロル市の王城の情景である。アラビヤの大將軍ムハメット・ベン・カアシムに取り圍まれて、今や落城せんとしてゐるところである。カアシム將軍は王の娘プルムウラの前に現はれる。プルムウラは將軍の勇姿に感動する。併し將軍はプルムウラの美しさに無頓着だつた。そして討死した王の妹、プルムウラの叔母であるサチイに魅せられる。〔下の卷〕プルムウラと妹スルグはアラビヤ國に囚はれの身となつてゐる。プルムウラは自分の色香を以て巧みに國王スウレイマンに取り入り、カアシム將軍が

謀叛を計つてゐると讒言する。王は愚かにもカアシム將軍を殺してしまふ。プルムウラはかうして父王と祖國の仇を討つた。併しそれは偶然の結果であつて、眞實のところ、彼女は落城の時、カアシム將軍に認められなかつた女としての屈辱に復讐をしたのであつた。

【批評】古代印度の史實に材をとつた悲劇である。言葉は美しい七五調で書かれ、この作者の戯曲中最も傑出した作である。形式の均齊、言語の彫琢、而も簡潔な措辭の間にプルムウラ王女の抑壓された心理を表現した手際は、正にヘッペルの壘を摩すると言つてよからう。

〔長田〕

プロレタリア演劇 【名稱】歌舞伎・新派・新劇などに對する稱呼。【性質】プロレタリア藝術の一部門であつて、その他の部門の藝術と同樣に、プロレタリアのための演劇であり、從つてプロレタリア・イデオロギイに浸透された演劇の意である。それはプロレタリア・レアリズムの上に立脚する劇術を信奉する。

【沿革】〔發生時代〕日本に於ける先驅的劇團としては、大正九年の日本勞働劇團（川崎造船所の職工が中心となつたもの）と、十年の勞働劇團（平澤計七が組織したもの）とがあつたが、もとより、これ等は甚だ素朴なものでしかなかつた。十三年四月に、秋田雨雀・花柳はるみ等を中心とする先驅座が、第一回試演を行ひ、ストルンドベルヒの「火遊び」、秋田雨雀の「手投彈」を上演したが、當時、最も急進的で「民衆劇運動の前衞として、先づ小劇場主義を採る」と宣言した。十四年十二月プロレタリア文藝聯盟が結成されるや、佐々木孝丸等その演劇部の人々は、トランク劇場を作り、十五年二月共同印刷の爭議團員集合所に於て長谷川如是閑作「エチルガソリン」、武者小路實篤作「ある日の一休」を上演した。後の移動劇場の嚆矢である。やがて千田是也・佐野碩・小野宮吉・久板榮二郎等がこれに加入した。十五年十月最初の無產者の夕として、芝の協調會館に於て久板の「犧牲者」「カムチャッカ行」、シンクレアの「二階の男」、如是閑の「馬鹿殿評定」を上演した。この間「公演」を目的とする劇團の組織がこれ等の人によつて計畫され、前衞座の組織が成立した。

〔前衞座時代〕同人は前記の外、その過半は當時の文藝戰線同人で、村山知義・青野季吉・葉山嘉樹・林房雄・關鑑子・山田清三郎・柳瀨正夢等を包含してゐた。この組織後も多く移動劇場として爭議應援と地方巡業に赴いたが、その第一回公演は、築地小劇場に於ける十五年十二月のルナチャルスキイ作、佐野碩・村山知義共同演出の「解放されたドン・キホーテ」であつた。ドン・キホーテには小野宮吉が扮し、連日滿員の盛況であり、プロレタリア演劇確立の信用がついたのは、實にこの公演によつたのである。かくて次第に隆盛を極め、當時の先進的新劇團「心座」に於ても、演出者村山知義のダダイズムよりマルキシズムへの轉向があり、その第四回公演に至り、シンクレアの「二階の男」、舟橋聖一の「白い腕」、前田河廣一郎の「ストライキ中」、村山知義の「兄を罰せよ」の四種類のうち、「白い腕」を除いて三種類までは、プロレタリア演劇への傾向を示したものであつた。而してこの公演後、心座は一部二部に分裂し、一部は村山知義が擔當して左翼的演劇をとり、二部は舟橋聖一・今日出海等が擔當して藝術派演劇をとつた。又十一月末からマルチネの「夜」が、築地小劇場（別項）によつて上演された。但し創作戯曲は政治鬪爭主義を標語として、久板の作に盡きるといふ如き、凡そ砂を噛むやうな公式的な作が多かつた。前衞座第二回公演は昭和二年四月、前田河廣一郎の「手」を千田是也の演出により上演した。この頃、「文藝戰線」の分裂から「前衞座」も二分し、前衞劇場とプロレタリア劇場と對立したが、その上演目錄にはル・メルテンの「炭坑夫」「二階の男」等共通のもの多く、いづれも地方に多く巡業した。二年十一月、プロレタリア劇場は築地に、ハウゼル作「足のないアルチン」、鹿地亘作「一九二七年」を、前衞劇場は村山の「ロビンフッド」、翌三年一月朝日講堂に藤森成吉作「僞造株券」、ロマン・ロオラン作「時は來らん」をそれぞれ上演した。三年三月、新團體ナップの下に兩者が合同して、こゝに東京左翼劇場が生れた。

〔左翼劇場時代〕合同第一回の公演は、昭和三年四月、築地小劇場で行はれた。出しものは村山の自作自演出「進水式」「やつぱり奴隷だ」鹿地作、佐野碩演出の「嵐」であつた。第二回公演は同じ九月、三好十郎作の「首を切るのは誰だ」、久板の「父」を報知講堂で上演したが、その運動は、やゝ前年に比して不活潑であつた。同年十二月、日本プロレタリア劇場同盟（プロット）が結成され、四年一月、第四回公演（第三回は禁止された）に「ダントンの死」を出した。六月には、つゞいて村山の「暴力團記」改題「全線」（四幕九場）が築地小劇場を借りて演ぜられ、大成功を收め、演出演技上のエポックメーキングであつた。これによつて他の新劇運動者（新劇參照）も、プロレタリア演劇の風に煽られ、續々と轉換を行ひ、新劇界はこれに獨占せられるかの風潮を生じた。また勞働者劵の發行はこの時に創まる。一方この年の四月、盟主小山内薫（別項）の歿後、築地小劇場は新築地劇團と劇團築地小劇場に分裂し、新築地は土方與志・丸山定夫等によつて、左翼演劇への聲明を發し、片岡鐵兵作の「生ける人形」、林房雄作「都會双曲線」等を演出し、左翼劇場の援助をうけ、やがてプロットに加盟した。從來は中間的存在であつた心座も、首腦俳優河原崎長十郎が市川左團次に隨つて渡露して以來、次第に左翼的傾向を濃厚にしつゝあつたが、こゝに至つて、明瞭なるプロレタリア劇への轉換を宣言し、同時に藝術派側の舟橋を最後とし、池谷信三郎・今日出海・堤正弘・古澤安二郎等は漸次脫退を見るに至つた。純粹に左翼化した心座は、イリヤ・エレンブルグ原作の「歐羅巴の滅亡」を骨子としたメイエルホリド演出のイミテェション「トラストD・E」を村山知義の演出によつて、斯界の注目をひいた（木郷座に於て）。この打揚げ後、更に拍車をかけて「裝甲列車」の上演を計畫したが、開場前日、舞臺稽古に際して上演禁止をうけ、已むを得ず、「全線」につき替へ、辛うじて蓋をあけたが、この公演を最後として、遂に心座は解散した。このころ、歌舞伎俳優の間に、一種の左翼的趣味が起り、猿之助一派の大衆座は、更に解散後の心座と合一して春秋座を起し、猿之助兄弟の松竹脫退となつたが、これは間もなく行き詰り、猿之助・荒次郎・左升等の相次いでの復歸によつて解消した。併し長十郎及び翫右衞門は、別に前進座を起し、「歌舞伎王國」等を演じて歌舞伎世界を批評諷刺したが、その後次第に興行的となり、左翼的意義を自然消滅的に取り消してしまつた。

又この舊左翼劇場は、四年十月、大阪でゴリキイの「母」を上演したが、翌五年二月の德永直作、村山知義脚色演出の「太陽のない街」は、觀客の大部分が勞働者であり、又演劇に於けるプロレタリア・リアリズムを實踐により解決したといはれてゐる。而してその後公演をつづけ、今日に及んでゐる。

【參考】日本プロレタリア文藝運動史 山田清三郎 ○日本プロレタリア演劇論 村山知義 ○綜合プロレタリア藝術講座第二卷○日本プロレタリア演劇發達史佐々木孝丸 〔舟橋〕

プロレタリア文學【名稱】無産派文學、又は無產者階級文學などと稱せられたこともある。【解說】世界大戰中、空前の好況時代を現出した日本の經濟界は、戰後の需要杜絶による事業の整理のため、急激に沒落の道を急いだ。この轉換期は、資本家と勞働者との階級對立を最も尖銳化した。それは謂はば勞働の攻勢から、資本の攻勢への轉換期であつた。勞働者が好景氣時代に獲得した地歩は、資本家側の死者狂ひの攻擊によつて、一つ一つ奪還されようとした。日本に於けるプロレタリア文學は、かうした社會的背景のもとに生れたのであつた。こゝでよく注意しておかねばならぬことは、日本のプロレタリア文學は、直接日本の社會事業の變化から生れたのであつて、先進國のプロレタリア文學の直接の摸倣ではなかつたといふことである。その頃、ロシアでは、プロレタリア文學は、既に事實上存在し、その問題は革命の當事者たちの日程に上されてゐたのであるが、封鎖狀態にあつたロシアの事情は、まだ少數のロシア通の間にしか知られてゐなかつた。日本はかゝる海外のプロレタリア文學運動とは無關係に、日本自らの社會的情勢の中からプロレタリア文學を生んだのであつた。それは大正九・十年頃のことである。

【沿革】〔第一期〕ほぼ類似の社會的條件からほぼ類似の理論を生むことは、社會進化の必然の勢である。初期の日本プロレタリア文學の指導理論は、ロシアの革命直後のプロレット・カルトの理論と密接に相通ずるものをもつてゐた。それは一言で言へば、プロレタリアは、ブルジョアによつて完成された文化とは獨立した、それ自身の文化を持たねばならぬといふのであつた。從つて文學に於ても、ブルジョア文學に對して、それと獨立したプロレタリア文學を對抗せしめ、文化の全領域に階級戰の序列を與へねばならぬといふことになつて來たのである。だから初期のプロレタリア文學論は、ロシアに於けると同樣、日本に於ても著しく政治的であつた。そしてプロレタリア文學の運動者の主要な努力は、文學は人類全體に共通のものに基礎をおくもので、そこには階級性はないといふ一般人の考へに對して、文學に於ける階級性を證明し、說明することに費されてゐた。この初期のプロレタリア文學の理論に就いては、拙著「無產階級の文化」の中に見ることができる。當時、プロレタリア文學運動は、その機關紙として「種蒔く人」(別項)をもつた。この雜誌には、同人として小牧近江・金子洋文・今野賢三・村松正俊・佐佐木孝丸・松本弘二等があり、後に柳瀨正夢・山川亮・平林初之輔・津田光造・上野虎雄・松本淳三・佐野袈裟美・青野季吉・前田河廣一郎・武藤直治・中西伊之助等を加へた。そして同人若しくはその寄稿家の中から、中西伊之助の「緒土に芽ぐむもの」、前田河廣一郎の「三等船客」、金子洋文の「地獄」及び「紡績工」、細井和喜藏の工場小說、新井紀一の軍隊小說等があらはれて、プロレタリア文學は、もはや理論だけではなく、作品によつてブルジョア文學に對抗することが出來るやうになつた。

〔第二期〕その後、大正十二年の關東大震災によりて、日本のプロレタリアの運動は、擧國的復興の機運におし潰されて頓挫を來した。そしてあらゆる方面に於て、革命的色彩がうすれて合法的になつて來た。プロレタリア文藝運動もその例にもれなかつた。かゝる時期に「種蒔く人」の後身として、ほぼ同じやうな同人の顏觸れで再生したのが「文藝戰線」(別項)であつた。そして「文藝戰線」を中心として、すべてのプロレタリア藝術家を網羅するやうな組織の必要が感じられて、大正十三年、プロレタリア藝術家聯盟が組織された。この時分までは、プロレタリア藝術家聯盟員はもとより、「文藝戰線」の同人の中にさへも、ただ反資本主義といふ大ざつぱな旗幟の下に色々な分子が同居してゐたし、それで大して差支へはなかつた。ところが左翼の政治運動の方面の理論がマルクス主義的に統一されて來たので、文學運動の方も、それと調和して進むことが必要になり、青野季吉の「文藝戰線」誌上に於ける「目的意識論」の提唱となつた。この時期のプロレタリア文學の指導理論は、青野季吉の「轉換期の文學」の中に、多く收められてゐる。この「目的意識論」をきつかけとして、プロレタリア文學の內部に、最も活潑な所謂「理論鬪爭」が行はれ、その中から田口憲一・谷一・中野重治・林房雄・藏原惟人・鹿地亘・佐々木孝丸・山田淸三郎等の理論家が輩出した。と同時に創作の方面では、葉山嘉樹・山田淸三郎・里村欣三・岡下一郎・林房雄・黑島傳治等の作家が出現して、プロレタリア文學の第二期を飾つた。わけても、葉山嘉樹の「淫賣婦」「セメント樽の手紙」等は各方面で話題に上つた。

〔第三期〕上述のやうな理論鬪爭の結果、日本プロレタリア藝術家聯盟は、マルクス主義的に統一されたとはいへ、その內部には、なほ融和すべからざる二潮流が含まれてゐることが明かとなり、遂に昭和二年四月に至りてこの聯盟は二派に分裂し、中野重治・鹿地亘・谷一一派は、プロレタリア藝術家聯盟に殘留して「プロレタリア藝術」を發刊し、「文藝戰線」派は、この雜誌を機關紙として新に「勞農藝術家同盟」を結んだ。この分裂は、ほぼ政治理論の方面に於ける「福本イズム」と「折衷派」とに對應するものであり、「プロレタリア藝術」派は福本イズムを遵奉し、「文藝戰線」派は反福本イズムに與みしたが、分裂はまだ已まなかつた。「勞農藝術家同盟」の中には、いはば合法派と非合法派、現實派と急進派とが同居してゐることがわかつた。そして遂にこの兩派は分裂して、合法派が「文藝戰線」に殘留し、非合法派は新に前衞藝術家同盟を組織して、雜誌「前衞」を發刊し、ついで前衞藝術家同盟は、プロレタリア藝術家聯盟と合同して日本プロレタリア藝術家同盟(ナップ)を組織し、兩者の機關雜誌を合一して「戰旗」を發刊して今日に及んでゐる。この間に、既に文壇に地歩を獲得してゐた作家の中から、プロレタリア文學の陣營に投ずるものが多く、「文藝戰線」派には、細田民樹・細田源吉が馳せ參じ、「戰旗」派には、藤森成吉・江馬修・片岡鐵兵・今東光等が參加した。その中でも、藤森成吉の「何が彼女をさうさせたか」「磔茂左衞門」、片岡鐵兵

の「綾里村快擧錄」「生ける人形」等は注目された作品であつた。「戰旗」派には、すぐれた理論家が多く、それ等の人々によりて、プロレタリア文學の理論は、昭和三年頃から漸く一般論から特殊的な問題に關する理論に及んでゆき、特に大衆化の問題、宣傳煽動文學の問題、價値評價の問題、プロレタリア・リアリズムの問題等が多くの人々によりて論じられた。「戰旗」派の藏原惟人、いづれの團體にも屬さない勝本淸一郎・岡澤秀虎・大宅壯一・宮島新三郎等がこの期間に於て最も活躍した理

當」に見る伴左衞門役ではないが、「不破」の傳統上から見て「鞘當」を十八番の「不破」とするに妨げない。よつてこゝでは脚本本位に見て「鞘當」を主にして解說する。【初演】初代市川團十郎が初めて不破伴左衞門役に扮したのは、延寶八年三月、江戸市村座「名古屋山三郎 不破伴左衞門 遊女論」(役者二挺三味線)で、作者は未詳であるが、初代團十郎との說もある。又この時、既に作中に「鞘當」があり、今日に傳はる雲に稻妻の不破の衣裳は、同じくこの時團十郎の好みで、「稻妻のはじまりみたり不破の關」とい

勸左衞門等が好評であつた。次いで二代團十郞に傳はつて、「三升名護屋」「末廣名護屋」等を初めとして數多の不破を勸め、初代澤村宗十郎の山三役と相俟つて「鞘當」も大成されたが、この場に半太夫節を使用されるのが例となつた。寬延二年十一月には、大阪豐竹座に「十帖源氏物ぐさ太郎」(別項)が上場され、この影響も受けて夢の場にして演ずるなど、「不破」といへばこの頃から「鞘當」の件が主眼となり、又四代團十郎に至つて彼が實惡を本領としてゐたので、不破の役も純然たる敵役として演

唄が通例である。今左に主なる種目を擧げておく。〔半太夫節〕「霧籬鐺鞘當」「鞘當月淸攬」「花三升渦卷羽織」。〔長唄〕(唄淨瑠璃)「對の編笠」「目狹笠」「廓夜櫻」。〔常磐津節〕「廓春譽編笠」「昔綉廓鞘當」。〔淸元節〕「廓花對編笠」「其俤花鞘當」。〔所作事〕「三幅對戲場彩色」(長唄)「寬濶鞘當」等。

【內容】今日行はれる鞘當の筋は、花の吉原仲の町の場で、不破は雲に稻妻、山三は雨に濡燕の羽織衣裳の寬濶出立で、共に葛城太夫の許に通ひ來る。やがて入違つて鞘當とな

の「綾里村快擧錄」「生ける人形」等は注目された作品であつた。「戰旗」派には、すぐれた理論家が多く、それ等の人々によりて、プロレタリア文學の理論は、昭和三年頃から漸く一般論から特殊的な問題に關する理論に及んでゆき、特に大衆化の問題、宣傳煽動文學の問題、價値評價の問題、プロレタリア・リアリズムの問題等が多くの人々によりて論じられた。「戰旗」派の藏原惟人、いづれの團體にも屬さない勝本清一郎・岡澤秀虎・大宅壯一・宮島新三郎等がこの期間に於て最も活躍した理論家であつた。創作の方面にも、この時期になつて注目すべき作品が相ついで現はれた。中でも、小林多喜二の「一九二八、三・一五」「蟹工船」、前田河廣一郎の「支那」「セムガ」、村山知義の「暴力團記」、岩藤雪夫の「鐵」、德永直の「太陽のない街」等は最も好評を博したものであつた。外國の特にロシアのプロレタリア文學についての理論が盛んに飜譯紹介されたこと、多くの同人雜誌並に新進作家、批評家の傾向が、多かれ少かれ、プロレタリア的色彩を濃厚にして來たことも、昭和時代に入つてからの顯著な特色であつた。

【參考】文學評論 片上伸○無産階級の文化 平林初之輔○轉換期の文學 青野季吉○プロレタリア文學論 藏原惟人○前衞の文學 勝本清一郎○プロレタリア文藝發達史 山田清三郎○プロレタリア文學辭典 川口・山田 【平林】

不破（ふは） 脚本（歌舞伎十八番の一）【名義】不破は初代團十郎の當り藝であつた不破伴左衞門の役柄を指すものであるが、轉じて名古屋山三や葛城等を結び附けて、これを脚本本位に見た時、即ち今日の「鞘當」（さやあて）を意味する。勿論、本來の不破伴左衞門役は今日の「鞘當」に見る伴左衞門役ではないが、「不破」の傳統上から見て「鞘當」を十八番の「不破」とするに妨げない。よつてこゝでは脚本本位に見て「鞘當」を主にして解說する。【初演】初代市川團十郎が初めて不破伴左衞門役に扮したのは、延寶八年三月、江戸市村座「名古屋山三郎 不破伴左衞門 遊女論」（役者二挺三味線）で、作者は未詳であるが、初代團十郎との說もある。又この時、既に作中に「鞘當」があり、今日に傳はる雲に稻妻の不破の衣裳は、同じくこの時團十郎の好みで、「稻妻のはじまりみたり不破の關」といふ句から思ひついたものといふ。筋は明かでないが、この狂言は大當りで、その年の中に同じ配役で、續狂言の二代目・三代目を演じて大好評を博したといふ（役者二挺三味線・戲場年表・劇代集）。【沿革】寬文頃とおぼしき初期浮世繪に不破名古屋を描いたものがあり、貞享二年の刊本「名古屋山三郎綺盡」（菱川師宣畫）等があるが、延寶年間の土佐少掾の古淨瑠璃「名古屋山三郎」が戲曲化されたものとして古く、不破・名古屋・葛城の三角關係が仕組まれ、六段續きになつてゐる。「遊女論」はこれ等によつて想を構へたものと思はれる。その後幾度となく不破を勤めて遂に市川家の由緒深いものとなつたが、元祿十四年まで十二度勤めた。その主要な名題を擧げると、「女若二河白道」「不破卽身雷」「名古屋大全」「不破伴左衞門鳥原狐」「葛城弘徽殿」「不破名古屋初冠」「參會名護屋」（別項）「葛城小夜嵐」「葛城吳越戰」等が數へられ、山三役は村山四郎次が最も多く、市川新九郎・勝山彥四郎・中村七三郎等で、また葛城役は竹中庄太夫・中山喜世之助・勝山みなと・澤村小傳次・荻野澤之丞等である。當時他家で不破を勤めたのでは、坂東又太郎・中島勘左衞門等が好評であつた。次いで二代團十郎に傳はつて、「三升名護屋」「宋廣名護屋」等を初めとして數多の不破を勤め、初代澤村宗十郎の山三役と相俟つて「鞘當」も大成されたが、この場に半太夫節を使用されるのが例となつた。寬延二年十一月には、大阪豐竹座に「十帖物ぐさ太郎」（別項）が上場され、この影響も受けて夢の場にして演ずるなど、「不破」といへばこの頃から「鞘當」の件が主眼となり、又四代團十郎に至つて彼が實惡を本領としてゐたので、不破の役も純然たる敵役として演ぜられる場合の方が多くなり、五代團十郎はこの外、種々の不破の役を演じたが、「鞘當」に長唄（唄淨瑠璃）が用ひられるやうになつた。更に七代團十郎に至り、文化三年山東京傳の「昔稻妻表紙」の版行を見、これによつて大阪では「けいせい品評林」（別項）や「けいせい輝艸紙」等に劇化され、江戸では文政六年三月、市村座で權八小紫の比翼塚等を持ち込んだ大南北作の「浮世柄比翼稻妻」（別項）が上場されたが、この第一番目六立目の鞘當の場こそ、今日行はれる「鞘當」の基準である。勿論、これは南北の創意でなく、古くから傳はつた場面に修正を加へたもので、鞘當の廓の場が延寶に京の島原であつたのが、いつか吉原の仲の町に變つて、不破（七代市川團十郎・山三（三代尾上菊五郎）・留女おちか（五代岩井半四郎）等の役割。後世、この場を一幕物に獨立させて上演してゐるが、これが卽ち今日の歌舞伎十八番の「不破」なのである。

【種目】この場に古くは半太夫節、次いで長唄等を用ひてゐたが、化政度以降、長唄の外、常磐津節・清元節等が用ひられたこともあり、また所作事としても上演された。現今では長唄が通例である。今左に主なる種目を擧げておく。【半太夫節】「雪藤笹鞘當」「鞘當月清覽」「花三升渦卷羽織」。【長唄】「唄淨瑠璃」「對の編笠」「日狹笠」「廓夜櫻」。【常磐津節】「廓春譽編笠」「昔綉廓鞘當」。【清元節】「廓花對編笠」「其俤花鞘當」。【所作事】「三幅對戲場彩色」（長唄）「寬濶鞘當」等。

【內容】今日行はれる鞘當の筋は、花の吉原仲の町の場で、不破は雲に稻妻、山三は雨に濡燕の羽織衣裳の寬濶出立で、共に葛城太夫の許に通ひ來る。やがて入違つて玆に鞘當となり、双方言ひ募つて目せき笠をとると、案にたがはぬ對面となる。不破は名古屋に、その馴染である葛城を取持てといふ。もとより名古屋は承知せず、とゞ抜きつれてあはや喧嘩にならうとする所へ留女（又は留男）が出て留める。そして兩人の意地を立てるため、刀の鞘を互に取替へると、どちらも會ふので、思入、名古屋は不破が敵なりと悟る。

【附記】一幕物として獨立後の名題は、「其俤廓鞘當」「寬濶出立廓鞘當」「花競對編笠」「伊達競一對編笠」等。

【參考】壽十八番歌舞妓狂言考 石塚豐芥子（新燕石十種第三）○劇代集 二代櫻田左交○「不破」の新研究 伊原青々園（演藝畫報 九ノ九）○鞘當の話 三木竹二（舊歌舞伎一四）○鞘當の狂言（歌舞伎新報 一三五三）○歌舞伎十八番考 山田春塘（演藝畫報 二ノ七） 【秋葉】

文（ぶん） 國語學・言語學 【名稱】【英】Sentence 【獨】Satz 【解說】文の定義としては一定したものなく、古來論理的色彩の勝つたものと文法的調子の强いものと、これ等兩者の折衷とある。「文とは單語の結合したもので、纏つた思想を表はすもの」と云つたり、これに

とに生れたのであつた。こゝでよく注意しておかねばならぬことは、日本のプロレタリア文學は、直接日本の社會事業の變化から生れたのであつて、先進國のプロレタリア文學の直接の摸倣ではなかつたといふことである。その頃、ロシアでは、プロレタリア文學は、既に事實上存在し、その問題は革命の當事者たちの日程に上されてゐたのであるが、封鎖狀態にあつたロシアの事情は、まだ少數のロシア通の間にしか知られてゐなかつた。日本はかゝる海外のプロレタリア文學運動とは無關係に、プロレタリア文學の理論に就いては、揃著無產階級の文化」の中に見ることができる。當時、プロレタリア文學運動は、その機關紙として「種蒔く人」（別項）をもつた。この雜誌には、同人として小牧近江・金子洋文・今野賢三・村松正俊・佐佐木孝丸・松本弘二等があり、後に柳瀨正夢・山川亮・平林初之輔・津田光造・上野虎雄・松本淳三・佐野袈裟美・青野季吉・前田河廣一郎・武藤直治・中西伊之助等を加へた。そして同人若しくはその寄稿家の中から、中西伊之助の「赭土に芽ぐむもの」、前田河廣一郎の「前衞」を發刊し、ついで前衞藝術家同盟は、プロレタリア藝術家聯盟と合同して日本プロレタリア藝術家同盟（ナップ）を組織し、兩者の機關雜誌を合一して「戰旗」を發刊して今日に及んでゐる。この間に、既に文壇に地歩を獲得してゐた作家の中から、プロレタリア文學の陣營に投ずるものが多く、「文藝戰線」派には、細田民樹・細田源吉が馳せ參じ、「戰旗」派には、藤森成吉・江馬修・片岡鐵兵・今東光等が參加した。その中でも、藤森成吉の「何が彼女をさうさせたか」「磔茂左衞門」、片岡鐵兵の「文學運動の方も、それと調和して進むことが必要になり、青野季吉の「文藝戰線」誌上に於ける「目的意識論」の提唱となつた。この時期のプロレタリア文學の指導理論は、青野季吉の「轉換期の文學」の中に、多く收められてゐる。この「目的意識論」をきつかけとして、プロレタリア文學の內部に、最も活潑な所謂「理論鬪爭」が行はれ、その中から田口憲一・谷一・中野重治・林房雄・藏原惟人・鹿地亘・佐々木孝丸・山田清三郎等の理論家が輩出した。と同時に創作の方面では、葉山嘉樹・山田清三郎・里

文法的の見方を強くして、文とは單語の集合して、全一體として現はされたもの」と云つたりする。これを思想を言語に現はしたものと云ふのは、文をもつぱら論理的に見る人の說明である。往々一箇の單語でも文を成すものがあり、いくら單語が澤山並んでも文を成さない場合があるから、文を語の結合といふのは狹すぎるとも云へるし、廣すぎるとも云へる。どうしても、その說明を全體としての性質に求めなければならなくなる。しかし、これを思想の言語の上に現はれたものと定義するのは、思想と云ふ言葉が不明瞭であることが、大なる缺點であつて、思想と云ふ論理的の名稱は、文の概念をやゝもすれば、すべて論理的に考へられるもの、卽ち判斷をあらはす文に引きつけ、その結果、論理的判斷にあらざる發表は文でないとしたり、或は反對に判斷を現はすものでもないものを、强ひて論理的判斷と曲解したりして、論理學と文法との混亂を惹起すが如き結果に陷つた。かくの如くして過去二千年來、文の定義は學者の間に一致する所がなかつたものであるが、近く單語若しくは單語の結合をして文たらしむる心理的特徵を、話をなす者の意識に求めて、この問題に解決を與へようとしたものは、心理學の理論に基礎をおいて言語を見て行かうとするパウルや、ヴント等の人々である。「文とは、觀念又は觀念群が、話す人の精神內に結合したことを現はす符號であつて、同じ觀念又は觀念群の同じ結合を、聽く人の心中に起させるための手段である」これがパウルの定義である。ヴントはこれに反對した。單語の結合したものが文ではない。文が卽ち言語の根本である。「草が青い」といふ文は、「草」と「青い」といふ表象が別々に存在してゐて、文によつて一體として結び附けられるのでなく、「草」といふ表象は、「青い」といふ性質と共に認められるもので、兩者同在してゐるのである。文は表象の結合ではない。文として言ひ表はされる表象の全部が、一體として意識の中に存在してゐて、それが部分々々に分解せられ、統覺せられて行くのである。分解は單なる分解ではない。部分は、有機的に全體として意識の中に在る。全體を形づくる部分的の表象は、時の移るに從つて意識の焦點となり、その他の表象は、これに比べると、明瞭の度を缺いてゐるが、部分はその語られる瞬間に、一つ一つ消えて行つてしまふのではない。それ故に、文は一面に於て分解であると共に、一面に於て綜合である。一方に於て繼續的同存的過程であると共に、一方に於て同存的過程であると論じた。

【構成】論理的關係から見れば、文は主部と述部とに分れる。主部は主體の概念、述部は主體に屬する狀態特性等の概念である。主部は又主語と修飾語、述部は述語と修飾語とに分れる。修飾語は主語もしくは述語の意義を一層精密に規定するものである。これを心理的に云へば、注意、いひ換へれば統覺が、全體から部分に焦點を移すことを現はすものであつて、この場合、表象は常に意識の焦點となつたものと、その餘のものとの二つの區分を取つてゐる。焦點となつたものが主部で、殘されたものが述部である。さうしてこの兩者の關係が叙述(Predication)である。この第一の分解について、今度は主部又は述部、もしくは主部・述部共に、第二の分解を受けて焦點となつたものとその餘のものとの二部となる。その場合に初めに選ばれた方が、論理的に云へば主部で、これと關係を附けられたものが修飾語である。「青い草がたくさん生えてゐる」の「青い草」は主部、「たくさん生えてゐる」は述部。主部は「草」といふ主語と「青い」といふ修飾語から成り、述部は「生えてゐる」といふ述語と「たくさん」といふ修飾語とから成つてゐる。以上の文の構成は感情の働きによつて影響を受ける。卽ち文を形作る觀念は、話す人の興味に應じて文の構成上に特別な位置を得て來ることがある。提部と稱するものは、この關係から生じたものである。語る人の感情によつて高調され、聽く人に特別の印象を與へんがために、文の普通の構成を破つて、特に提示せられたものが提部である。ガベレンツやパウルの心理的主部(Psychologische Subjekt)、ヴントの優越表象(Dominierende Vorstellung)と云つたものが、文の形式上に現はれた一種の文法的範疇に外ならぬのである。「逃げる者は斬るぞ」「羊羹は藤村が評判です」「その時の嬉しさ何にか譬へん」「新令は四月一日より施行す」「帝國議會は每年之を召集す」等の「逃げる者は」「羊羹は」「その時の嬉しさは」「新令は」「帝國議會は」等は提部である。提部は提示語とその修飾語とに分れる。次に述部に於ける修飾語の中にその述語に對する關係に應じて客語・補語等を設ける人がある。客語は述語が他動詞である時、その動作の及ぶところ、卽ちその目的を現はす語、補語は述語の自動詞であつても他動詞であつても、主語・述語が具はつただけでは意義不十分な場合、これを補ふ語であると說かれる。併し客語や補語は、國語に於ては明瞭な文法的範疇を發達させてゐないので、修飾語と補語との間に截然たる境界がない。說くところ人によつて一定せず、同じ人の說明にも前後矛盾が多い。補語は述語の叙述を補ふといひ、これが無くては意味をなさぬと云ふが、修飾語も同樣なものがある。「東鄕大將は東洋のネルソンなり」「妄に刑を用ふべからず」では「東洋の」「妄に」がなければ文をなさぬ。補語は「動作の標準」として規定せんとする人もある。「鏡が柱にかゝる」の「柱」を補語とするが、「猿が木から落ちた」「私は八時から業務につく」の「木から」「八時から」は、動作の標準であるが、補語とは云はない。客語は述語が他動詞の時に現はれるもので、比較的明瞭のやうであるが、國語に於ける自他は歐洲語のやうに文法的範疇ではなく、その差別は意味の上にとどまり、これを形式に求めることが出來ない。助詞の「を」を受けるものは他動詞のやうであるが、「空を飛ぶ」「道をあるく」「東京を去る」などは動詞と云はない。英・獨語などの自他は受身の形と關係し、他動詞は受身となるが、自動詞はならない。直接、客語を伴ひ、受身の形にすれば、客語が轉換して主語となるものは他動詞に限る。然るに國語に於ては、自動詞も受身となる。「子供が母に抱きつく」は、「母が子供に抱きつかれる」となること、他動詞の場合と變らない。それ故に、述語の自動・他動、從つて受身にする時、主語と轉換し得るか否かの點からも、客語と補語との區別は出來ないのである。要するに、國語では修飾語の外に、客語や補語を說くことは、實際に於て困難である。客語と補語との區別の曖昧であるのを見て、客語・補語を一括して補語といひ、若しくは同じものを客語と名づけるものもある。それがまた實際に明瞭な範疇として認め難いから、これ等と修飾語との區別を設けないものもある。なほ外に國語に特有なる語法として、總主、もしくは文主と稱するものを說く人がある。「兄は力が强い」「象は體大なり」の、「兄」「象」の如きものを指す。「力が强い」「體大なり」など、主語と述語とを具へた文が、「兄」「象」等の述語を成してゐるからである。これを始めて注意したのは草野淸民氏である。

句を含むもの、「年の立つのは早いものだ」「その二十日あまりに、中納言の法師になり給ひしこそあはれなりしか」の如きは、名詞句を含むもの。「象は體大なり」「賣藥は效能がない」の如きは叙述句を含むもの。これ等も人によつて意見の相違があり、名詞句・叙述句を含むものは、單文と見る人もある。吉岡鄕甫氏の「文語口語對照語法」に見える說などはそれである。山田孝雄氏は、普通に複文といふものを、合文と有屬文とに分ち(複文のうち、ば、

一卷

【解說】原本の存否詳かでないが、流布の摸本がある。詞綵共三段、文永十一年、龜山院が賀茂祭に御幸の樣を圖綵したものである。奥書によると原本は龜山院の御歌合の時に、藤原經業が調進したもので、書は藤原爲信、詞は世尊寺定成の筆であるが、その後元德二年に至つて綵所預高階隆兼がこれを寫し、詞は內藏權頭季邦の書いた一卷が出來、その寫本が一般に流布されてゐるのである。原本の書者爲信は、似綵の名家信實の曾孫であつ

落主幷に藩士に係る斷片的逸話で、往々自家經驗の談もある。野村尙房(一枝軒)の小傳及び和歌數十首の抄出もある。【和田】

文會堂(ぶんくわいだう) 浮世草子作者【姓名】林義端。字は九成、通稱は九兵衞。【別號】往悔子か。「當世智惠鏡」に文會堂の印があつて往悔子と署してあるから、本書が彼の作であるならば、往悔子は彼の別號であらう。【歿年】正德元年五月八日、享年未詳。【閱歷】家は代々書肆で、京都東洞院夷川上ル町に在つ

ものもある。それがまた實際に明瞭な範疇として認め難いから、これ等と修飾語との區別を設けないものもある。なほ外に國語に特有なる語法として、總主、もしくは文主と稱するものを說く人がある。「兄は力が強い」「象は體大なり」の、「兄」「象」の如きものを指す。「力が強い」「體大なり」など、主語と述語とを具へた文が、「兄」「象」等の述語を成してゐるからである。これを始めて注意したのは草野清民氏である。

【種類】形式上から單文・重文・複文とする。單文といふのは、句(別項)を含まない文。言ひ換へれば主語と述語との關係單一であるもの。例、「風が寒い」「きのえだに小鳥が十ばとまつてゐました」「おのれは天上より來り給ひし人の御子どもなり」。主語もしくは述語、乃至主語・述語共に二つ以上あつても、兩者の關係が單一なるものは同じく單文である。例、「菊も桔梗もダリアもコスモスも皆さき揃つた」「鳥は大きなこゑでわる口をいひ、太いくちばしでつつつきます」二つ以上の單文が結合する場合、重文と複文とを生ずる。重文といふのは、二つ以上の單文が結合して互に對等の句を構成す場合。言ひ換へれば對立句より成る文。例、「花もあり、實もある」「洲崎にさわぐ千鳥のこゑは曉の恨をそへ、せがいにかゝる梶浪は夜半に心を碎くかな」。單文が從屬的の句をなし、他の文の一部になる時、言ひ換へれば形容句・副詞句・名詞句・敘述句を含む文を複文といふ。「文ことば、なめき人こそいとどにくけれ」「日影も見えぬ木の下道、あはれにこゝろぼそし」の如きは、形容句を含むもの、「深き夜の月、浮雲だにたなびかず澄めるに」「日あしければ、舟出さず」の如きは、副詞句を含むもの、「年の立つのは早いものだ」「その二十日あまりに、中納言の法師になり給ひしこそあはれなりしか」の如きは、名詞句を含むもの。「象は體大なり」「賣藥は效能がない」の如きは敘述句を含むもの。これ等も人によつて意見の相違があり、名詞句・敘述句を含むものは、單文と見る人もある。吉岡鄕甫氏の「文語口語對照語法」に見える說などはそれである。山田孝雄氏は、普通に複文といふものを、合文と有屬文とに分ち(複文のうち、ば、ども、とも等の接續助詞を伴ふ副詞句を含むものを合文とし、その他を有屬文とする)、名詞句卽ち氏のいはゆる準體句を含むものは、やはり有屬文とし、「象は體大なり」の如きは、敘述句、卽ち氏のいはゆる陳述句を含むものと見ないから單文としたが、「賣藥は效能がない」の如きものは、陳述句を含むものとして、これを有屬文の中に列せしめてゐる。敘述句の主語の現はす事物が、文の主語の現はす事物に對して、部分と全體との關係に在る場合には、山田氏はこれを敘述句とは見ないのである。單文・重文・複文の區別については疑ひを抱く人も多い。松下大三郎氏や高橋龍雄氏の如きは、文構成の原理を主語・述語の關係にのみ求めることを止めて、單文・重文・複文の區別を廢した。

【參考】W. Wundt, *Völkerpsychologie*, 2. Band, Die Sprache. ‖ H. Paul, *Prinzipien der Sprachgeschichte*. ‖ L. Bloomfield, *An Introduction to the Study of Language*.

○日本文法論 山田孝雄 ○草野氏日本文法 草野清民 ○標準日本文法 松下大三郎 【小林】

文永賀茂祭草紙 ぶんえいかもまつりさうし 繪卷物 一卷 【解說】原本の存否詳かでないが、流布の摸本がある。詞繪共三段、文永十一年、龜山院が賀茂祭に御幸の樣を圖繪したものである。奥書によると原本は龜山院の御歌合の時に、藤原經業が調進したもので、書は藤原爲信、詞は世尊寺定成の筆であるが、その後元德二年に至つて繪所預高階隆兼がこれを寫し、詞は內藏權頭季邦の書いた一卷が出來、その寫本が一般に流布されてゐるのである。原本の書者爲信は、似繪の名家信實の曾孫であつて、この卷の如き肖像的意味をも帶びた光景を圖繪したのでみても、またこの道に堪能であつたことが察知される。これを寫した高階隆兼は、「春日權現驗記」(別項)の書者として著名な作家である。かくこの卷は製作の由緒や傳寫の系路も明かなもので、今摸本を見得るに過ぎないながら、やまと繪固有の似繪の發展方向等をも徵すべき作品として貴重なものである。【田中(一)】

文會雜記 ぶんくわいざつき 隨筆 三卷 【著者】湯淺元禎 【諸本】久しく寫本で流傳したが明治二十四年刊「日本文庫」に收められた。【解說】著者の師事した服部南郭の言說の紹介を初め、徂徠門の名家太宰春臺・平野金華等の學術・詩文を評論し、又木下順庵・新井白石・荻生徂徠等の功績を擧げ、漢籍に關する諸見解を註するなど頗る努めたものである。但し概ね片々たる短章で、而も前後の聯絡がない。男明善の所校である。傳寫中魯魚の誤を重ねること多く、なほ完本と謂ふを得ない。【和田】

文會雜記附錄 ぶんくわいざつきふろく 隨筆 一卷 【著者】湯淺元禎 【諸本】明治二十四年「日本文庫」に所收。【解說】「文會雜記」の本編に漏れたる四十餘則を擧げたもの。多くは岡山藩主并に藩士に係る斷片的逸話で、往々自家經驗の談もある。野村尙房(一枝軒)の小傳及び和歌數十首の抄出もある。【和田】

文會堂 ぶんくわいだう 浮世草子作者 【姓名】林義端。字は九成、通稱は九兵衞。【別號】往悔子か。【著書】「當世智惠鏡」に文會堂の印があつて往悔子と署してあるから、本書が彼の作であるならば、往悔子は彼の別號であらう。【歿年】正德元年五月八日、享年未詳。【閱歷】家は代々書肆で、京都東洞院夷川上ル町に在つた。文會堂はその家の號である。彼は伊藤仁齋に就いて漢學を學び、「摶桑名賢詩文集」五卷の編がある。彼の浮世草子は「玉櫛笥」七册(元祿八年版)と「玉帚子」六册(別項)がある。「近代御伽百物語」「武家堪忍記」があるといふが、未見。「當世智惠鏡」も彼の作と斷言すべき據所はない。「玉櫛笥」の自序中に、「過にし元祿庚午の春釋了意師老後のすさみに犬はりこ數卷を著せり、その事皆新奇怪異の說にして、世の人あまねく翫ひ流へぬ。去ぬる癸酉の年予いやしくもその芳蹤を繼て、年比見及び聞傳へし近世奇怪の物語をあつめ、玉櫛笥と題し」といつてゐるのは、よくこの書の性質をいつてゐるばかりでなく、彼が淺井了意(別項)に私淑してゐたことをも示してゐる。なほ同序中に、「正理を說て愚蒙をみちびくは、反て奇怪神異の感通しやすきにしかず。世の兒女の輩この書に感ありて、神仙應報のむなしからざることを信じ、君父忠孝のつとむべきをわきまへ、その善ものはならひ、その惡きものは戒しめ、すべて心をあらため、身をつゝしむ媒とせば、この書また少しきおぎなひならめやといふ」といつてゐるのは、彼の創作の態度を語つてゐるものであつて、彼が教訓物

作者とされてゐるのは、この態度を持した爲めである。彼は怪奇な說話を綴つても、それは啓蒙教訓の方便としたもので、怪異の氣持を表はした怪異文學を成してはゐない。されば彼は浮世草子作者中に列せられても、寫實的な西鶴の影響を受くる所は甚だ少く、假名草子作者淺井了意の感化を受けた所が多いといふべきである。〔藤村〕

文學（ぶんがく） 文學論 【語義】 文學の語は、支那では古來六藝を文といひ、これを學ぶことを文學といひ、廣く學問・學藝の意味に用ひられ（論語先進篇・史記秦始皇本紀）、又その講授の官名にも通用され（事物紀原）、後には文章文籍を意味し（尙書・玉篇）、或は經學を意味するやうにもなつた。我が國に於ても、古い時代の用例はこれを襲つたもので、大寶令の職員令に文學の官名が見え、江戸時代には諸藩の儒者を指して文學とも言つた。併し今日普通に用ひられる文學の語は、英語の Literature の譯語であつて、明治以後に至つて用ひられ、二十年頃から通用されるやうになつたものである。なほ西洋に於ても、Literature は羅甸語の Litera 卽ち文字に當る字によつて現はされたもので、古くはやはり文字乃至學問の意味に用ひられ、又書籍をも意味した。これが廣義には言語表象、又は文字に表現された精神的な產物一般を言ひ、狹義には特に想像とか感情に訴へるところの藝術的な產物を指すことになつた。我が國に於てはこの狹義の文學の概念の用ひられたのは、極めて最近のことに屬する。古く「懷風藻」「萬葉集」の時代から、大陸の文學意識に刺戟されて、漸次意識化されて行つたもので、漢詩に對して倭詩の自覺が生れ、漢文に對して國つ文の自覺が起つたが、江戸時代に至るまで、文化樣式としての文學の統一理念に就いての認識は甚だ乏しく、從つてこれの統一理念に對する名辭、卽ち藝術の一分野を總稱する名辭は未だ見られず、全くそれは西洋思想の啓發によるものであつた。故に當初は、從來の廣義の文學の概念と區別するために、特に美文學・純文學などとも呼んだが、現在では單に文學、或は文藝と稱せられ、純文學又は純文藝の語は、傾向的な文學に對して藝術至上主義的な文學を指すことになつてゐる。尤も文藝の語は文學よりはやゝ意味が廣く漠然とした稱呼である。

【概念】 文學は、言葉と文字とを表現の媒材とする藝術である。又文學批評（別項）は、文學そのものの意識であり統御であるから、この方面も亦文學の領域である。なほ最近文學の領域に取入れられたものに、口承文學（La Littérature Orale）がある。これはポオル・セビオの提唱によるものであつて、特に土俗學・民俗學の方面から、文字を媒材とせずして、言葉の儘傳承された文學が存在すると主張される（民俗學參照）。「古語拾遺」に、「上古世未レ有二文字一、貴賤老少口々相傳、前言往行存不レ忘」とある如く、文字使用時代以前の文學、卽ち記述文學發生以前の文學といふことを考へる場合、又現今に於ても、記錄されない口碑・傳說・民譚（各別項）・民謠等の多々存するによつて見ても、文學の領域にこの類のものを屬せしめる必要がある。

【本質】 文學の構成要素は情緒・想像・思想・形式の四である。(1)情緒は文學の本體であつて、文學は直觀を現はしたものであり、而して直觀の內容は情緒である。永續性・相關性・共通性をもつ情緒である。(2)想像は情緒が理想化せられ、組織化せられる創造的力である。(3)思想は(2)の情緒の中に含めることも出來る。文學には純粹の思想或は論理的思索といふものは存在しない。嚴密に云へば、思想と思はれるものも實は統一せられたる、若しくは組織を與へられたる情緒に過ぎぬ。だが、個性（性格の特性）卽ち人格を通しての思想は、人生觀照の態度、材料据據の方法を支配する力であつて、情緒を個別化獨自化するものと考へられる。(4)形式は、以上の三要素の內面的統一によつて必然に表現せられるものであつて、この形式が文學を生命づける。上述の事柄により文學の本質は、想像的理性卽ち藝術的理性に依つて理想化せられたる情緒卽ち直觀（觀照）の表現にあると云へる。文學が有つところの、(イ)恒久的持續性、(ロ)共通的普遍性、(ハ)個性的創造性、(ニ)官能的具象性、(ホ)本質的人間性等の問題が說明し得る。(イ)と(ロ)は、文學的情緒そのものの有する特性に基くものであり、(ハ)と(ニ)は、文學の藝術性に基くもので、その職能が科學の目的と根本的に相違する所以である。特に官能的具象性の問題は、文學が精神的でないといふことではなく、官能的なものを象徵とする精神に生き、精神を强く深く鋭く感得せしめる爲めである。傳達の方法がかくの如くにして行はれるといふところに、文學の本質が見られるのでもある。(ホ)は、文學の對象（內容）の問題から一層明かにせられる。文學は對象を局限しない。すべての感知し得る世界の現象の一切がその對象となる（この點からも(イ)(ロ)の問題が說明せられる）。この一切が包攝せられた世界に於て、人間を生かしてゐる本原の力、卽ち人間を人間たらしむる根原の力、生命の力と熱とを體得して、人生に感激と驚異を與へる。こゝに眞の人間性の感得がある。

【特質】 言葉を媒材とする文學は、意味の仲介を俟つ。知性に依つて了解せられる意味といふものを仲介物とするところに文學の特性がある。情緒的なるものの表現に知性が協力し參與する。嚴密に云へば、このことは文學のみに特有な藝術成立上の一つの要素である。繪畫・彫刻・建築等は、その表現が物質的存在であるが、文學は音樂等と共に、時間的に流れゆく形象の表現であり、媒材は言葉といふ時間的のものである。前者は可視的の藝術であるが、後者は可聽的の藝術である。前者は空間藝術、後者は時間藝術と云はれる。前者を具象藝術といふに對して後者を印象藝術とも云ふ。文學が他の諸藝術に比べての優越性は、言語を媒材とする點に存する。言語の意味といふ知性、卽ち認識的要素が豐富にして明瞭であること、且つこれは自由に使用され得るといふ點にある。また原作そのものは藝術的一回性をもつけれど、複製（書寫・印刷）されても原作そのまゝの藝術的效果を有つものであつて、文學の普及性がこの點に存する。しかし又、意味內容を有する言語を媒材とするが故に、他の藝術に比べて直接に端的に訴へる力が薄弱である。意味內容を持つた概念を通してのみ感情移入、鑑賞が出來るのである。なほ言語・文字には、差別種類があつて、他の藝術がもつ表現の媒材の如き共通性普遍性がない。

【分類】 (一) 媒材の差別による分類。(1)言葉のまゝで傳達する文學、誦へる文學、聽く文學、口承文學。(2)文字によつて傳達する文學、讀む文學、記載文學。(二)文體の差別による分類。(1)律文。(2)散文。(1)は言語・文字の排列に一定の規律あるもの、(2)はないもの。我が國の規律は、國語の性質上主として音數により、音韻音性によらないのであるから、韻文と云はず、特に律文或は律語と呼ぶのが普通である。詩に散文を對立せしめる者があるが、詩は必ずしも律文ではない。律文には音樂的純粹感情的思考體驗が對應し、內容は情緒が主、思想が副であり、散文には思想的思考體驗が對應し、內容は客觀的・連續的の特性をもち、散文化せられて物語・小說となり、反省的・思索的な特性をもつ。(3)が律文であるとき劇詩と云ひ、作者の性格と作者以外の性格の融合に於て構成する樣式であり、主觀的にして且つ客觀的・人格的・嚴肅・超脫・感傷の特性をもち、散文化せられて脚本・戲曲となる。(4)自照文學。抒情文學的なるものと、敍事文學的なるものとが結合し、詩歌ほど主觀的でなく、また小說ほど客觀的でなく、個性的自我の覺醒に基き、靜觀的精神より生み出された文學を自照文學を云ふ。「人生の爲めの藝術」に立つ文學であつて、社會主義文學・宗教文學・愛國文學・人道主義文學等。(2)遠心的文學。社會意識を中心としての遠心的文學。「藝術の爲めの藝術」に立つ文學であつて、藝術至上主義の文學、唯美主義の文學、惡魔主義の文學、自然主義の文學等。(七)その他。一般には對象素材等によつて樣々な分類が行はれてゐる。例へば農民文學・海洋文學の如きがそれである。

【種類】 口より耳への口承文學は、うたはれ、或はかたられたものであり、場合によつてはてゐるのである。戲曲の中には上演を豫想しないものがあるが、これも朗讀によつて一層效果的に鑑賞される。文學として見れば低級であるといへようが、講談物はすべて元來は讀み物である。(四)以上の三種類は耳に訴へる文學であるが、見るための文學、印象的なものを具體的にあらはす種類がある。卽ち廣義の戲曲の類である。(五)以上の四つの種類以外のものは、すべて文字を見て、叙べられ、描かれ、說かれ、明かされてゐるものを味ふのである。

味に用ひられ、又書籍をも意味した。これが廣義には言語表象、又は文字に表現された精神的な産物一般を言ひ、狹義には特に想像とか感情に訴へるところの藝術的な産物を指すことになつた。我が國に於てはこの狹義の文學の概念の用ひられたのは、極めて最近のことに屬する。古く「懷風藻」「萬葉集」の時代から、大陸の文學意識に刺戟されて、漸次意識化されて行つたもので、漢詩に對して倭詩の自覺が生れ、漢文に對して國つ文の自覺が起つ

記述文學發生以前の文學といふことを考へる場合、又現今に於ても、記錄されない口碑・傳說・民譚（各別項）・民謠等の多々存するによつて見ても、文學の領域にこの類のものを屬せしめる必要がある。

【本質】 文學の構成要素は情緒・想像・思想・形式の四である。（1）情緒は文學の本體であつて、文學は直觀を現はしたものであり、而して直觀の內容は情緒である。永續性・相關性・共通性をもつ情緒である。（2）想像は情緒が

徵とする精神に生き、精神を強く深く銳く感得せしめる爲めである。傳達の方法がかくの如くにして行はれるといふところに、文學の本質が見られるのでもある。（ホ）は、文學の對象（內容）の問題から一層明かにせられる。文學は對象を局限しない。すべての感知し得る世界の現象の一切がその對象となる（この點からも（イ）（ロ）の問題が說明せられる）。この一切が包攝せられた世界に於て、人間を生かしてゐる本原の力、即ち人間を人間たらしむる根

しかし又、意味內容を有する言語を媒材とするが故に、他の藝術に比べて直接に端的に訴へる力が薄弱である。意味內容を持つた概念を通してのみ感情移入、鑑賞が出來るのである。なほ言語・文字には、差別種類があつて、他の藝術がもつ表現の媒材の如き共通性普遍性がない。

【分類】（一）媒材の差別による分類。（1）言葉のまゝで傳達する文學、聽く文學、口承文學。（2）文字によつて傳達する

文學、書く文學、讀む文學、記載文學。（二）文體の差別による分類。（1）律文。（2）散文。（1）は言語・文字の排列に一定の規律あるもの、（2）はないもの。我が國の規律は、國語の性質上主として音數により、音韻音性によらないのであるから、韻文と云はず、特に律文或は律語と呼ぶのが普通である。詩に散文を對立せしめる者があるが、詩は必ずしも律文ではない。律文には音樂的純粹感情的思考體驗が對應し、內容は情緒が主、思想が副であり、散文には思想的思考體驗が對應し、內容は思想が主、情緒が副である。古代文學ほど多くは律文的であり、近世文學に至るほど散文的であるのは、思想的なるものの支配を受けるが爲めでもある。律文は隱喩的、散文は形容詞的表出の特性を持つ。ブュッフォンが「文は人なり」(Le style c'est l'homme) と云つたほど、文體は文學に大切なものと認められる。文學の本質が傳達方法にあるが故に、傳達の效果は文體に係るところ甚大である。（三）形態の差別による分類。（1）抒情文學。現在の時をもつ言葉、流動的の言葉によつて表現的形式をとる。（2）叙事文學。過去の時をもつ言葉、記述的な文學としての言葉によつて叙述的形式をとる。歷史文學は叙事文學である。（3）劇文學。過去が現在の時をもつ言葉、動作する會話によつて劇的形式をとる。過去が現在としてのみ表出せられるといふ意味で、劇文學を表現文學 (Presentation) といふ。（1）が律文であるとき抒情詩と云ひ、作者自身の性格に於てする樣式であり、主觀的・告白的・刹那的・憧憬的・熱情的・韻律的の特性をもつ。（2）が律文であるとき叙事詩と云ひ、作者以外の性格に於てする樣式であり、客觀的・連續的の特性をもち、散文化せられて物語・小說となり、反省的・思索的な特性をもつ。（3）が律文であるとき劇詩と云ひ、作者の性格と作者以外の性格の融合に於て構成する樣式であり、主觀的にして且つ客觀的・人格的・嚴肅・超脫・感愴の特性をもち、散文化せられて脚本・戲曲となる。（4）自照文學。抒情文學的なるものと、叙事文學的なるものとが結合し、詩歌ほど主觀的でなく、また小說ほど客觀的でなく、個性的自我の覺醒に基き、靜觀的精神より生み出された文學を自照文學と云ふ。日記・隨筆・試論・批評・論等の文學で、反省する心の自己反省、即ち自照的心境を開拓し、觀照的觀念的特性を持つ。體驗と思索とによつて現實を諦視せる文學であり、素材は經驗的現實的なるものに限定される。（四）文學活動の差別による分類。（1）創作。創作家の立場による創作作品。（2）評論。評論家の立場による批評作品。文學評論家は文學の價値批判、文學の眞相を描き出す活動をなすものであつて、文學そのものの自意識的反省に基くものであるが故に、その評論には文學的精神風格氣品がある。創作家が創作によつて自己の體驗を語り、獨立した一つの世界を構成するのと全く同樣に、評論家も亦その評論によつて自己の體驗を語り、獨立した一つの世界を構成するのである。評論はそれ故にそれ自身で獨立せる一つの文學形式である。かゝる意味の評論を文學と認めるやうになつたのは近代のことである。（五）文學の傾向の差別による分類。浪漫主義文學・自然主義文學・現實主義文學等（文學傾向參照）。（六）社會意識の差別による分類。（1）求心的文學。社會意識を中心として求心的傾向の文學を云ふ。「人生の爲めの藝術」に立つ文學である。社會主義文學・宗教文學・愛國文學・人道主義文學等。（2）遠心的文學。「藝術の爲めの藝術」に立つ文學であつて、藝術至上主義の文學、唯美主義の文學、惡魔主義の文學、自然主義の文學等。（七）その他。一般には對象素材等によつて樣々な分類が行はれてゐる。例へば農民文學・海洋文學の如きがそれである。

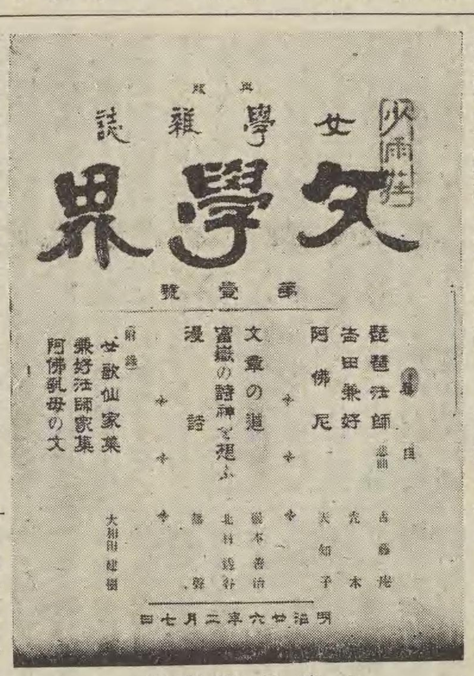
【種類】 口より耳への口承文學は、うたはれ、或はかたられたものであり、場合によつては身振り表情が伴ひ、又素朴な樂器の伴奏も加はつた。手より眼への記載文學になつても、口承文學に於けるこれ等の目的性能が滅亡したのではなく、依然として命脈を保ち、謠ひ物・語り物・讀み物等と稱へられて傳統的に存續してゐる。今鑑賞の手段方法から文學の種類を見る。（一）謠ひ物。神樂・催馬樂・風俗・今樣・宴曲・諸曲・民謠・童謠（各別項）等がこれである。尤も諸曲などには「かたり」の分子も包まれてゐる。（二）語り物。平板なる談話的調子ではなく、謠ひ物の分子も加はり、音曲的節奏を持つ。平曲・幸若舞曲・淨瑠璃（各別項）等。（三）讀み物。一體書く文學は默讀して鑑賞するものとは限らず、音讀朗讀して初めて效果的であるものが尠くないのであつて、文學の默讀といふことは、一般的に云ふと近代の習慣であらうと思はれる。從つて作者が音讀的效果を豫想してゐるものがあり得る。これ等の種類を讀み物と總稱してよい。所謂太平記讀み（別項）といふ語があるほど、「太平記」の如きは今日の講談の調子で讀まれたのである。江戶文學に於ける讀本（別項）の如きが律文の調子を多量に包むことは、この效果を意識してゐるのである。戲曲の中には上演を豫想しないものがあるが、これも朗讀によつて一層效果的に鑑賞される。文學として見れば低級であるといへようが、講談物はすべて元來は讀み物である。（四）以上の三種類は耳に訴へる文學であるが、見るための文學、印象的なものを具體的にあらはす種類がある。即ち廣義の戲曲の類である。（五）以上の四つの種類以外のものは、すべて文字を見て、叙べられ、描かれ、說かれ、明かされてゐるものを味ふのである。

【參考】 文學總論 竹友藻風 ○文學論 同上 ○文藝學概論 石山徹郎 ○文學汎論 佐藤清 ○文學概論 上田敏（上田敏全集八）○生活と文學 有島武郎 ○日本文學概論 新屋敷幸繁・峰岸義秋 ○日本小說評論史序說 原田芳起 ○文學の本質 松浦一 ○生命の文學 同上 ○生き行く力としての文學 同上 ○文藝管見 里見弴 ○文藝一般論 芥川龍之介 ○文學概論 本間久雄 ○文學形態論 廣田正喜 ○文學論 土田杏村 ○文學概論 大和資雄 ○文學序說 土居光知 〔佐藤〕

文學一斑（ぶんがくいっぱん） 文學論 【著者】 內田不知庵（魯庵） 【刊行】 明治二十五年三月。

【解說】 文學入門として、「探偵小說に垂涎し、新聞の續き物に待焦がるゝ婦人・小兒、若くは小說をもてはかなき根なし草と爲し輕率に是を冷視する淺見者に示さん」としたもの。全卷五章から成り、（一）總論に於ては主として文學とは何ぞの問題を論じてゐる。文學の不朽性から文學とは何ぞやの問題に入り、人間思想の分析より、文學的要素を詩と哲學とに歸納し、社會と文學との交涉を說き、文學とは人生に關する諸現象の研究なりと定義し、詩を論じて文學を說かんとする用意を述べて

文學界(ぶんがくかい) 雜誌 【刊行】明治二十六年一月三十一日創刊、同三十一年一月第五十八號を以て廢刊した。最初は巖本善治の經營してゐた女學雜誌社から出したもので、その第二號までは「女學雜誌」の文字を冠してゐたが、後、女學雜誌社と分れて文學界社の發行に移した。【解說】最初の同人は、平田禿木(風潭)・戸川秋骨・北村透谷・島崎藤村(古藤庵)(各別項)・星野天知・同夕影等であつたが、後に馬場孤蝶・戸川殘花(各別項)が加はり、上田敏(柳村)(別項)が加はつた。世に文學界派と稱せらるのは、主としてこれ等の人々を指していふのである。寄書家には松岡(柳田)國男・樋口一葉・國木田獨歩・大野洒竹(各別項)等があつた。「文學界」は、卽ちこれ等の美に憧れ、理想に生きようとする青年等の熱情の坩堝であつたのである。「文學界」の運動が主として詩論の方面にあつた事も偶然ではない。彼等は理想と美を求めてダンテを想ひ、ゲーテを論じ、芭蕉を說き、近松を評した。或はルネッサンスに、或は希臘に、或は元祿の昔に、その想ひを馳せたのも、皆彼等の熱情の表出に過ぎない。その所產は多く厭世哀觀の文字に滿ちてゐたが、その奥にひそんでゐた苦惱と熱情こそは、始めて日本の文學界に、淸新な浪漫主義を導入し、延いては間接ながら、自然主義の文學を育んだ大切な酵母であつたのである。言はば眞に新しき文藝運動の黎明がこの雜誌の創刊を機會として始まつたと見ることが出來る。この意味に於て「文學界」は、日本文學史上に永遠に記念さるべきものである。勿論文學界派の動向にも多少の變遷はあつた。最初は透谷の人生苦から發した人生の逃避境としての藝術至上主義に導かれてゐたが、二十九年頃から以後は、全く純粹な浪漫主義による藝術研究の道を步み、全く新しい唯美運動に變つたのであつた。なほ注目すべきは、二十七八年の戰役中、「文學界」は何等の動搖をも示さず、却つて戰爭文學の愚を痛罵してゐる事である。これでも「文學界」の人々が如何に藝術至上主義の熱情に燃えてゐたかが分ると思ふ。因に、島崎藤村の詩は、本誌中、最も注目すべきものであつた。【齋藤(昌)】



文學界界(創刊號)

文學鑑賞(ぶんがくかんしやう) 文學論 【解說】文學に對しての知識的理解の作用の方面が研究であり、文學の具體的存在的作品に當面して、その作品の眞相を把握する情感的作用の方面が鑑賞である。作品に對しての同情的認識、感覺的享受をいふ。正しき鑑賞は作品そのものを正しき狀態に置くべきであり、且つ鑑賞者が正しき狀態にあるべきである。時間的に、又地理的に隔つた文學作品である場合は、特に文獻學的歷史的研究の成果によつて、或は外國文學研究法の知識を基礎として鑑賞されねばならぬ。就中その作品の效果性に對して十分なる理解がなくてはならぬ。例へば平曲・諸曲・淨瑠璃の耳で聞くべき文學であること、草雙紙の類が繪畫との合體提携せる約束をもつこと等、音樂性繪畫性演劇性その他の暗示性をもつ文學はその性能に從つて始めて作品の側からの鑑賞が全くせられるのである。鑑賞者の側から云へば、作品に素直に面接して作品の細部にまで心を動かし、全體については心を抑へて先入と偏見を持つてはならぬ。無關心的狀態にあるべきである。作品が創作者の體驗の表現であり、生命の有機的構成である以上、鑑賞に於ては已れの體驗に徵し、感情を移入して有機的統體としての作品の全體的把握が行はれなければならぬ。この事柄は部分的解剖の結果の結合からは招來せられぬ。鑑賞力の向上は傑作を屢々鑑賞することと、自己の體驗を豐富潤澤にすることとにある。鑑賞上の理論的理解の方法は、文學批評・文學概論を研究すべきである。

【參考】文學研究 驛井雨江 ○新文學概論 三浦圭三 【佐藤】

文學研究法(ぶんがくけんきうはふ) 文學論 【解說】文學研究法とは、一切の文學上の事柄の範圍に於て、その範圍の中から究明せんとする方面の對象を先づ規定し、この規定せられた對象は、如何なる學的方法によつて理解し得るかを考察することを云ふ。その文學研究法が學的に妥當せりや否やを檢討究明する學を文學方法學と云ふ。文學批評(別項)は文學研究の一部分であるが、文學鑑賞は文學研究

ではない。しかし正しき鑑賞は、その作品が正當なる狀態に置かれてゐなければならないのであつて、この正しき狀態に置く手續は卽ち研究であり、また正しき鑑賞をするためには、鑑賞する主觀は豫め正しき狀態に置かれてゐなくてはならぬが、それを吟味する作用は研究である。故に文學研究は、文學鑑賞を可能ならしむるものであり、文學鑑賞の性質を觀察することは文學研究の一方面である。さて(一)文學系統を全體的に橫に研究するのは、美學的研究法であり、文學概論の立場に他律的に構成規定されてゆくものと見る、卽ち文學を社會事象の一つとして研究する立場とを考へ得る。(一)の文學の自律性は、(イ)形式としての作品の自律性と、(ロ)作者の精神發展としての自律性とに分ち得る。(イ)は作品の形態樣式の美學的研究となり、(ロ)は創作心理の心理學的研究となり、文學の精神を體系づけることを得、また作者の理念の哲學的研究となり、文學の本質を探究し得る。(二)は文學の社會性を說明せんとして、客觀的に作品を觀察することであつて、文獻學的研究法であり、文學概論の立場に個々に觀察する分析的歸納的研究方法であつて、主として作品の外面的素材、卽ち表現素材としての言語の方面の研究が任務である。元來この方法は、古典文學の研究に用ひられた方法であるが、他の時代の文學研究にも應用せられるに至つたものである。(I)原文批評。作品が一定した形式に於てでなく、作者以外のものによつて偶然に又は故意に變形改作されて種々の異本に由つて傳へられてゐる場合(例へば「伊勢物語」「枕草子」の如きを)、作者本來の意圖に最も適合した原文の形式をしめた契機並にその動機となつた淵源に關のた研究で、作家に衝動を與へる印象は、體驗が直接實生活からの提供の場合(「蜻蛉日記」「方丈記」の如き)と體驗が間接的意識的で外部からの提供の場合(「竹取物語」「八犬傳」の如き)とあり得るが、前者の場合は、作品の基礎となる作家の個人的體驗、卽ち個性などと、後者の場合の傳說・歷史の如きものなどを、共に題材の中心をその出發點にまで還元して研究する方面を云ふ。(5)素材史。題材・沿革の研究、粉本の研究である。(4)の後者の場合、題材

ではない。しかし正しき鑑賞は、その作品が正當なる狀態に置かれてゐなければならないのであつて、この正しき狀態に置く手續は即ち研究であり、また正しき鑑賞をするためには、鑑賞する主觀は豫め正しき狀態に置かれてゐなくてはならぬが、それを吟味する作用は研究である。故に文學研究は、文學鑑賞を可能ならしむるものであり、文學鑑賞の性質を觀察することは文學研究の一方面である。さて(一)文學系統を全體的に橫に研究するのは、美學的研究法であり、文學概論の立場によるのである。(二)文學現象を個別的に縱に研究するのは歷史的研究方法であり、文學史の立場によるのである。(三)前兩者の研究方法が學的基礎に立つや否やを檢討するのは、哲學的研究方法であり、文藝學の立場によるのである。かくして文學概論と文學史と文藝學の三者は、文學研究の基本的知識を提供するものである。文學の總體概念を(1)表現の素材としての言語と、(2)表現の形式としての精神(純粹なる想像性)とに大別し、更に(2)を(イ)客觀的に見る立場に基いての作品の精神形式(價値)と、(ロ)主觀的に見る立場に基いての作家の精神(創作の魂)とに分つと、(1)の客觀的に作品を對等的に研究する方面は文獻學的方法であり、(2)の(イ)の方面は、形式美學的方法、樣式史的方法であり、(2)の(ロ)の方面は、精神史學的方法であり、一つは創作家の心理の方面で構造心理學的方法であり、他は文學的な本質を想像界の創造者としての作家より研究する觀念主義的な哲學的研究である。また(一)文學を文學自體からの自律的形成展開として見る、即ち文學を社會から他律的に構成規定されてゆくものと見る、即ち文學を社會事象の一つとして研究する立場とを考へ得る。(一)の文學の自律性は、(イ)形式としての作品の自律性と、(ロ)作者の精神發展としての自律性とに分ち得る。(イ)は作品の形態樣式の美學的研究となり、(ロ)は創作心理の心理學的研究となり、文學の精神を體系づけることを得、また作者の理念の哲學的研究となり、文學の本質を探究し得る。(二)は文學の社會性を說明せんとして、客觀的に作品を觀察することであつて、文獻學的方法、歷史的方法、社會學的方法により、民族・風土(血と土)・階級・制度、その他の環境との關係交涉を研究する。文學の全面的全體的理解は、文學創造の過程とその諸形態に關する問題の研究、即ち西洋の「詩學」の取扱へる知識と具體的存在的な文學作品の研究、即ち文學批評と文學史との二方面の知識と、この三者の知識の綜合によりて原則的には完全なるものと承認し得られるのであるが、未だそれの綜合的なる學的方法は確立してゐないのである。文學が本來對象を局限しないものであるのに、科學は對象を局限し且つ限界を越えることを許されない。故に科學的研究方法によつての歸納と演繹とは、所詮文學の全體性を把握する力とはならない。ただ文學の事實的研究と理念的研究によりて獲得したる兩者の理解の聯關の間に、文學的なるものの構成的な位置をとるものを見出すことが出來る。畢竟文學は文學の立場に於て直觀(觀照)することによつて、その眞相全一は感得されるものである。

【主なる研究方法の種類】(一)文獻學的研究法。冷靜な客觀的批評的態度を以て、作品を個々に觀察する分析的歸納的研究方法であつて、主として作品の外面的素材、即ち表現素材としての言語の方面の研究が任務である。元來この方法は、古典文學の研究に用ひられた方法であるが、他の時代の文學研究にも應用せられるに至つたものである。(1)原文批評。作品が一定した形式に於てでなく、作者以外のものによつて偶然に又は故意に變形改作されて種々の異本に由つて傳へられてゐる場合(例へば「伊勢物語」「枕草子」の如きを)、作者本來の意圖に最も適合した原文の形式を決定すること、即ち定本を作るのが任務である。(2)原文發生史、成立過程の研究。作者が一氣呵成に制作した場合は問題でないが、長い歲月に亙つて作られた場合(例へば「萬葉集」の如き)、又は徐々に生長發達した場合(例へば「平家物語」の如き)、或は初稿本と再稿本等との關係や草稿本と刊本との關係の場合の研究をする。作品が一作者によつて作られたものにしても、初稿本と再稿本と、或は單行本と全集本とには差異がある。作品が若し一人以上の共同制作である場合(或る種の淨瑠璃・脚本の如き)、どの段章がどの作者の筆に成るかを見ねばならぬ。一作品と見られてゐるものが、實は原作者以外の者によつて續篇として補筆されてゐると考へられる場合(「榮華物語」の如き)、それの決定をすべきである。(3)解釋的研究。言語のもつ意味の定立といふことが文獻學の主眼である。時代の隔つた文學はその言語が不明であり(「記・紀」「萬葉」の如き)、又外國文學に於ては云ふ迄もない。そこで訓詁註釋の必要が起る。解釋は部分的に、又全體的に必要に應じて行はるべきである。(4)溯源的研究。作品を創作するに至らしめた契機並にその動機となつた淵源に關つた研究で、作家に衝動を與へる印象は、體驗が直接實生活からの提供の場合(「蜻蛉日記」「方丈記」の如き)と體驗が間接的意識的で外部からの提供の場合(「竹取物語」「八犬傳」の如き)とあり得るが、前者の場合は、作品の基礎となる作家の個人的體驗、即ち個性などと、後者の場合の傳說・歷史の如きものなどを、共に題材の中心をその出發點にまで還元して研究する方面を云ふ。(5)素材史。題材・沿革の研究、粉本の研究である。(4)の後者の場合、題材は神話・傳說・史實等既に存在したものであるとき、その研究をする。(6)作品の作者としての傳記の研究。遺傳せるもの、學習せるもの、體驗せるものが、作家を通して如何に作品に反映せるかの研究で、多くは實證哲學的方法又は自然科學的方法が應用せられる。文獻學の對象は歷史的に發達したもので、その理解は歷史的條件の研究に俟つのである。(二)歷史的研究法。これは個々の作品を單獨に觀察するのではなく、一作品を一作家・一樣式・一集團・一國民の發生史上の一事實として考察する方法である。文獻學は分析的靜的であるが、この方は綜合的進行過程としての動的研究法で、事象の前後左右の關係を重視する。文獻學的研究の場合に附帶的なるものが、歷史的研究の場合には主眼となる。(一)と(二)の兩者は結合されて文獻學的歷史的研究法と呼ばれる。(一)を直接に補助するものは(二)の研究の結果であり、(一)の結果を(二)は取り擧げはするが、その目的は發展史上の問題解釋として利用するだけである。歷史的方法は、歷史的經過の機械的靜的方面に止まるのではなく、有機的動的方面即ち因果律によるのである。寄書家には松岡(柳田)國男・樋口一葉・國木田獨歩・大野洒竹(各別項)等があつた。「文學界」は、即ちこれ等の美に憧れ、理想に生きようとする青年等の熱情の坩堝であつたのである。「文學界」の運動が主として詩作詩論の方面にあつた事も偶然ではない。彼等は理想と美を求めてダンテを想ひ、ゲーテを論じ、芭蕉を說き、近松を評した。或はルネッサンスに、或は希臘に、或は元祿の昔に、その想ひを馳せたのも、皆彼等の熱情の表出に

と思ふ。因に、島崎藤村の詩は、本誌中、最も注目すべきものであつた。【齋藤(昌)】

文學鑑賞（ぶんがくかんしやう） 文學論【解說】文學に對しての知識的理解の作用の方面が研究であり、文學の具體的存在的作品に當面して、その作品の眞相を把握する情感的作用の方面が鑑賞である。作品に對しての同情的認識、感覺的享受をいふ。正しき鑑賞は作品そのものを正しき狀態に置くべきであり、且つ鑑賞者が正しき狀態にあるべきである。時間

文學研究法（ぶんがくけんきうはふ） 文學論【佐藤】文學研究法とは、一切の文學上の事柄の範圍に於て、その範圍の中から究明せんとする方面の對象を先づ規定し、この規定せられた對象は、如何なる學的方法によつて理解し得るかを考察することを云ふ。その文學研究法が學的に妥當せりや否やを檢討究明する學を文學方法學と云ふ。文學批評(別項)は文學研究の一部分であるが、文學鑑賞は文學研究

總括的流動的觀察をするのであつて、この研究法の二方向は、一つは作品の個性を中心とするもので、思想史的見地により、他は作家の個性を中心とするもので、傳記的見地に立つ。實證學的文學史、民族論的文學史、本體論的文學史、告白的文學史、經濟學的社會的文學史、構造心理學的文學史、文化學としての文學史等が考へ得られる。(三)人類學的研究法。前二者の研究成果が決定的役目を演ずるのではあるが、この研究法は時間的でなしに主として空間的に地方的に觀察する。民族的關係と地方的關係、即ち「血と土」とを問題とするのであるが、これは個性と時代思潮に從屬せしめて考察しないと、文學の制約を重視するが、文學の創造性を無視する結果を生む恐れがある。(四)心理學的研究法。作品を作家の創作心理に對する內的關係から說明する方法である。又文學活動の一面なる鑑賞の心理をも解釋する。創造的衝動、文學的意識、創作及び鑑賞の機能過程、構成作用等の諸問題の探究はこの方法による。また作品の一般的並に特殊的な樣式上の特徵を解剖するものである。(五)哲學的研究法。個々の作家作品に宿る或る人世觀宇宙觀の表現を客觀的に證明せんとする方法で、作品とその精神的內容に注目するものである。文學の價値觀目的觀は、この方法より誘導される。(六)美學的研究法。作品の形式の問題及び內的構造の有機的關係の解釋法である。この研究は二傾向を持つ。一つは文學敎育的傾向で、純科學的に取扱はずに民衆と文學を接近させて一般趣味の向上に資せんとする目的から、鑑賞者の美的感情を發達させて文學に對する鑑賞力を養成せんとするものであり、他の一つは、樣式研究的傾向で、個々の作品が時代を一貫する統一的傾向を說明するにある。(七)社會的文學研究法。普遍的全時代的文學要素を第一義的のものとして取扱ひ、一時代の普遍的並に文學的構造に觀點が定立され、風土的關係、社會的狀態、外來文化と固有精神の交涉、精神的雰圍氣等が周到に綿密に調査される。これによつて、時代の學說、趣味興味と文學との關係が明かにされ、又個人樣式、種族樣式、地方樣式、時代的樣式等が理解し得られる。

【參考】文藝と敎育 坪內逍遙 ○文學研究 鹽井雨江 ○獨逸文學研究 山岸光宣 ○藝術創作の心理 園賴三 ○一般藝術學考 外山卯三郎 ○文學論 夏目漱石 ○國文學研究法 垣內松三 ○綜合新文學概論 三浦圭三 ○文學理論の諸問題 平林初之輔 〔佐藤〕

文學史 ぶんがくし　文學論　【解說】一般歷史的諸範疇は、原因と結果、發生と消滅、發展の活動と連續として妥當する。そしてその窮極の目的は、個別的なるもの、個性的なるものを一回性のものとして、總體發展の系列のうちに編入することにある。文學史も亦この範疇に入る。文學上の諸現象の時間的一回的なる認識、即ち意味附與的なる認識が文學史である。更に文學上の諸現象は、(一)作家、(二)作品、(三)文化諸關聯の三つに大別される。(一)文學の歷史は、人間と時代との連續としてあらはれる。この觀點から文學の歷史は、文學者の發展史と考へられ、列傳體の文學史が作られる。(二)作品は素材、實質、形式の三要素から構成せられてゐるが、この三つ及び作品の影響とに向つて研究するとき、(イ)素材史、(ロ)理念史、精神史、感情史、(ハ)形式史、(ニ)影響史が書かれる。(三)文化史としての文學史が可能である。文化史的文學史は、文學史を一般文化史の部分領域として論ずるのであるから、文化の表現としての文學が考察の對象であり、從つて(一)(二)の場合に示された固有の價値が沒却されやすい。(一)と(三)の文學史は、間接的なるものであつて、主要なる文學史的關心は(二)にある。(二)の(イ)(ロ)(ハ)のもののすべてを一の上位概念の下に屬せしめるとき、樣式史が書かれる(樣式とは意味の構造を云ふ)。この樣式史が文學史の重點となるものであつて、(二)の(ニ)なる影響史は文化史的なるものに推移し去るのである。文學史の對象は文學であるから、廣義には人類の文學の歷史といふことも考へられ、比較文學史といふものも試みられてゐるが、原則としては、或る民族、或る國民の文學が對象範圍である。この對象範圍を歷史的實用的に取扱つたものが文學史であるに相違ないが、客觀的事實を時空の形式に當て嵌めて、主觀的選擇なしにその儘を盡く記述することは不可能であつて、必ず或る假定或る理念に依りて、事實の整序・統一が行はれる。故に文學史は、文學史家の個性及びそれの持てる歷史觀に基いての因果律の展開であると認めてよい。取り扱ひの態度が、(1)ランゲの如き客觀的歷史派か、(2)ランプレヒトの如き心理主義か、(3)ヘーゲルの如き論理主義かによつて特色づけられ、更に史的觀點が、(1)レーマンの如き個人的解釋に基く偉人說、(2)リッターの如き人類的地理的解釋に基く境遇說、(3)コントやテーヌの如き人種的解釋に基く人種競爭說、(4)モルガンやティローの如き文明史的解釋に基く自然征服說、(5)ローレンツの如き政治的解釋に基く國家說、(6)フォンボルトの如き觀念論的解釋に基く歷史哲學、(7)マルクスの如き經濟的解釋に基く唯物史觀等の何れに向けられてゐるかによつて、視野の展望に差異が出來、從つて文學史がそれ〴〵に特性を發揮することになる。文學史の因子は、(一)精神的なるもの、(二)社會的なるもの、(三)國民的なるものの三つと考へられるが、在來の日本文學史に於ては、(二)の社會的なるものとしての階級・制度・經濟等と、國民的なるものとしての民族性・鄉土性等の方面は、よく考慮されてゐるが、文學史の基本概念であるべき創造的精神の方面に對する研究に不備を思はせ、寧ろ文學の制約者たる自然・地理・社會等を目指して、これによつて精神發展といふ根原的なるものを臆斷せんとする缺陷が見られる。(文學評論史參照)

【參考】日本文學史 三上參次・高津鍬三郎 ○國文學史講話 藤岡作太郎 ○新國文學史 五十嵐力 ○國文學史概論 芳賀矢一 ○日本文學新史 尾上八郎 ○國文學史概說 板倉篤太郎・島田退藏 ○概觀日本文學史潮 鈴木敏也 ○國文學通史 坂井衡平 ○日本文學史概說 藤村作 ○國文學史新講 次田潤 ○文學新生の研究 垣內松三(國文學誌二ノ一一) ○文學史と文藝學 角田俊譯(マールツホルツ著) 〔佐藤〕

文學思潮 ぶんがくしてう　文學論　【解說】文學を材料として、それから抽出抽象されたる文學思想を意味するのではなく、文學を生み出す根源的な創造的な精神は、恰も潮流が、よしそれに主流・源流・末流があるとしても、共に永劫に亙つて流動して止まざるものの如く、流動展開の相を示現せるものである。この精神を持續的流動展開の相に於て見たる場

合、それを文學思潮といふ。從來文學を固定的に結合體として觀察せんとする傾向が著しかつたのであるが、この立場に於ては、文學それ自體の進展性流動性の認識は得られないのであつて、文學思潮を探究することによつて、初めて文學の生命と本質とが把握し得るのである。この文學思潮の空間的橫斷面が各時代の文學諸相であり、時間的縱斷面が文學思潮の變遷である。

【參考】日本文學思潮 垣內松三編 〔佐藤〕

文學者となる法 ぶんがくしやとなるはふ　諷刺文

衣食住ともに萬事通・粹・乙といふ度を心得、聞きかじりにて奇癖・奇習ある如く見すべし云々。(四)交遊に於ける文學者の心得。文學者は必ず小黨派を作るべく、裏面に相鬩ぐも表面は親密にすべく、消炭の如く交際すべきこと、居留守を使ふべきこと、好んで小天地に立て籠るべきこと、眞心を吐き合はず、成るべくたわいなく交際すべきこと云々。(五)著述に於ける心得並に出版者待遇法。この章には、諸種の文學の著作心得及び新聞・雜誌への發表方法、對出版者への駈引等を說く。

は遺憾であつた。〔柳田(泉)〕

文學序說 ぶんがくじょせつ　一册　【著者】土居光知【刊行】大正十一年刊、昭和二年增訂、岩波書店。【解說】日本文學の基礎的な問題に關して考察するために、「外國文學と對照して考察することに依つて日本文學を如實に見、その獨特な展開の理法を見出さん」としたもので、美文學者としての著者が國文學を見たところに、從來に見なかつた觀察があり、國文學研究に獨特な境地を拓いた功績は大きい。「文學を人間性の表現として觀照し、文學的現

止まらず、國語・國文の問題、宗敎・倫理の問題、外國文學飜譯の問題、圖書館及び讀書・書籍などについての問題、史學上の問題にも亙つてゐる。それ等の中で、特に注意すべきは、森鷗外と「沒理想」に關して論爭したすべての論文が收められてゐる事、山田美妙と田澤稻舟女史との問題に關聯して倫理的批判を下した論文「小說家は、實驗を名として非義を行ふの權利ありや」が收められてゐる事、それから著者が文體の紛亂、用字の亂雜に陷れるを憂ひて、新國字論その他國文の將來に關する意

合、それを文學思潮といふ。從來文學を固定的に結合體として觀察せんとする傾向が著しかつたのであるが、この立場に於ては、文學それ自體の進展性流動性の認識は得られないのであつて、文學思潮を探究することによつて、初めて文學の生命と本質とが把握し得るのである。この文學思潮の空間的横斷面が各時代の文學諸相であり、時間的縱斷面が文學思潮の變遷である。

【參考】日本文學思潮　垣内松三編　【佐藤】

文學者となる法（ぶんがくしやとなるはふ）　諷刺文學【著者】三文字屋金平述、一文字屋風帶子筆記。奥附に著作者宮澤俊三とあるが、眞の著者が内田魯庵（不知庵）であることは、今日は公知の事實である。【刊行】明治二十七年四月。【解說】文學者希望の青年男女に法を說くことに託して、當時の文學者の輕薄・無學を嘲罵し、その通弊・奇癖を諷刺したもの。（一）文學界の動靜を知る法。文學者となる第一歩として、新聞・雜誌の文學記事を讀み、文壇大家の氏名を記憶し、文壇の分派を呑み込み、法螺を吹き、好きほどに文學を罵ること云々。（二）文學者となり得る資格。風采は丹次郎然たるべく、性質は怠慢・無精・無神經・無頓着、風流・通を氣取るべく、好んで泣言を吐くべく、多少の婦人關係あるべく、學識はなるべく少く、萬事無造作に萬事を呑み込むを專一とすべきこと云々。（三）文學者として學ぶべき一般の見識及び嗜好並に習癖。努めて人目を惹くこと。門戸を高くし、城府を設け、自家廣告に力むべきこと。見識は俗を排斥してえらがること、ぶるべきこと、嗜好並に習癖としては、流行を罵つて流行を追ひ、美術思想を養ひ、古物を玩ぶも眞に至るべからず、衣食住ともに萬事通・粹・乙といふ度を心得、聞きかじりにて奇癖・奇習ある如く見すべし云々。（四）交遊に於ける文學者の心得。文學者は必ず小黨派を作るべく、裏面に相聞ぐも表面は親密にすべく、消炭の如く交際すべきこと、居留守を使ふべきこと、好んで小天地に立て籠るべきこと、眞心を吐き合はず、成るべくたわいなく交際すべきこと云々。（五）著述に於ける心得並に出版者待遇法。この章には、諸種の文學の著作心得及び新聞・雜誌への發表方法、對出版者への駈引等を說く。

【批評】この書を、徒らに文人痛罵の遊戲文字としたり、諧謔・輕詆に腹をかゝへたりするだけで、著者の老婆心と涙とを感じない人は、眞にこの書の讀者とはいへない。文字の表面に見える所はともあれ、著者は時代の文學と文學者とに對する滿腔の不平不滿と、我が國の文學界の將來に對する無限の憂慮との遣り場がなくて、この書を著はしたものである。著者の觀察と皮肉とは第二章と第四章とに殊に遺憾なく發揮されてゐる。幾分矯激の文字はあらうが、當年文壇の照魔鏡として歷史的に殘るであらう。が、殊に縱横に引證された海外文壇の知識の廣さは、當時において鷗外・逍遙以外、まだ何人も持ち得なかつたもので、こゝにも著者の好學と時代に先だつ炯眼とを知るべき證明がある。

【備考】この書にいはゆる文學者とは、主として硯友社一派を指してゐるといはれ、事實著者の頭腦でも硯友社の人々を對象としてゐたらしい。蓋し硯友社一派は當時の代表的文人集團であつたから、目標にされたのも已むを得まい。ただ著者が起死回生の大猛藥のつもりで投じた毒語が、すべて惡意に解されたのは遺憾であつた。

文學序說（ぶんがくじよせつ）　一册【著者】土居光知【刊行】大正十一年刊、昭和二年增訂、岩波書店。【解說】日本文學の基礎的な問題に關して考察するために、「外國文學と對照して考察することに依つて日本文學を如實に見、その獨特な展開の理法を見出さん」としたもので、美文學者としての著者が國文學を見たところに、從來に見なかつた觀察があり、國文學研究に獨特な境地を拓いた功績は大きい。「文學を人間性の表現として觀照し、文學的現象を展開の相のもと」に眺める態度を以て一貫し、就中文學の原型或は一種類ではなく、未だ文學を有しなかつた原始民族により幾百千年の間に敍事・抒情・劇の如き順序で、擘と所作事とで傳へられた文學の全體であり、保存されてゐるものは主としてこの發達の最後の階段にあつたものではなかつたか」といふ疑問の下に、日本文學の發生に關する資料をまとめた研究は最も見るべき箇所である。原始時代の文學、日本文學の展開、文學の樣式の展開に就いて、詩形論、自然の愛の發達、國民的文學と世界的文學、近代英文學に於ける批評的精神（カアライル、アーノルド、ペイタア）、藝術的形象等が主要項目である。　【土井】

文學その折々（ぶんがくそのをりをり）　論文集【著者】坪内逍遙【刊行】明治二十九年九月、春陽堂。本書の一部は逍遙選集第十一卷及び別册第三卷に大部分收められてゐる。【内容】本書は「早稻田文學」、その他に發表した論文を集めたもの。「小羊漫言」（別項）の續篇とも見るべきであるが、菊版九百三十八頁の大册で、その視野は極めて廣く、獨り純文學の評論に止まらず、國語・國文の問題、宗教・倫理の問題、外國文學飜譯の問題、圖書館及び讀書・書籍などについての問題、史學上の問題にも亙つてゐる。それ等の中で、特に注意すべきは、森鷗外と「沒理想」に關して論爭したすべての論文が收められてゐる事、山田美妙と田澤稻舟女史との問題に關聯して倫理的批判を下した論文「小說家は、實驗を名として非義を行ふの權利ありや」が收められてゐる事、それから著者が文體の紛亂、用字の亂雜に陷れるを憂ひて、新國字論その他國文の將來に關する意見が收められてゐることなどである。【批評】文藝評論の新典型として出版された當時から廣く讀まれたが、一面、ドイツ文學派の鷗外の評論集「月草」と對照し、イギリス文學を主とする早稻田派文藝批評の典型として兩者の差違を見ることも出來る。色々な意味で當時の文學界の形勢が手に取るやうに分る。記實といふ事、具體的事實といふ事が常に評論の根柢にあるから、一部の主觀的評論の如く獨斷・偏頗に流れたところが少い。同時に、常識的・具體的であつて當時の言葉でいふ談理の深さと幅を持つてゐないのが、この論文集の物足りないところだとも見られる。　【千葉・高須】

文學體系（ぶんがくたいけい）　文學論【解說】一民族、一國民のもてる文學全體の中から、緊密なる近似性を有する作品を類別して、その民族、その國民のもてる文學の系列概念を構成し、その系列概念によりて、作品を系統的に組織的に排列したものをいふ。韻文と散文に類別する方法は、外的形式の分類に過ぎず、内容の類別を含むことが出來ない。文學作品は内容と形式の融合せる典型又は形態をなすものであるが故に、文學の典型又は形態によ

である。更に文學上の諸現象は、（一）作家、（二）作品、（三）文化諸關聯の三つに大別される。（一）文學の歷史は、人間と時代との連續としてあらはれる。この觀點から文學の歷史は、文學者の發展史と考へられ、列傳體の文學史が作られる。（二）作品は素材、實質、形式の三要素から構成せられてゐるが、この三つ及び作品の影響とに向つて研究するとき、（イ）素材史、（ロ）理念史、精神史、感情史、（ハ）形式史、（ニ）影響史が書かれる。（三）文開であると認めてよい。取り扱ひの態度が、（1）ランゲの如き客觀的歷史派か、（2）ランプレヒトの如き心理主義か、（3）ヘーゲルの如き論理主義かによつて特色づけられ、更に史的觀點が、（1）レーマンの如き個人的解釋に基く偉人說、（2）リッターの如き人類的地理的解釋に基く境遇說、（3）コントやテーヌの如き人種的解釋に基く人種競爭說、（4）モルガンやティローの如き文明史的解釋に基く自然征服說、（5）ローレンツの如き政治的解

二ノ一二）○文學史と文藝學　角田俊譯（マールツホルツ著）　【佐藤】

文學思潮（ぶんがくしてう）　文學論【解說】文學を材料として、それから抽出抽象されたる文學思想を意味するのではなく、文學を生み出す根源的な創造的な精神は、恰も潮流が、よしそれに主流・源流・末流があるとしても、共に永劫に亙つて流動して止まざるものの如く、流動展開の相を示現せるものである。この精神を持續的流動展開の相に於て見たる場

りて分類し、系列を整理することによつて文學體系は求め得られる。時代的に觀察するとき、或る期間の文學現象には持續的展開の樣相に於て、一貫する統一性が發見せられる。この樣相に基いても體系を組織し得る。かくして文化の自叙傳としての文學、人性の歴史としての文學が認識し得られる。學的根據を有するものとしての文學體系は、文學體系學によつて吟味承認せられて後、初めて成立することになる。

【參考】國文學體系 垣内松三

文學體系學 ぶんがくたいけいがく

【佐藤】

文學論 【解說】文學論の二部門として、文學體系學と文學史とが考へられる。文學體系學は、文學の美學を詩學及び詩學原理として創設し、かくして文學の批評を準備し、その認識成果を文學教育として社會化するところの課題を持つものであつて、文學を體系的哲學的に取り扱ひ、その取り扱ふところのものが、不變なるものであり、また合法則性と類型とに還元し得られる文學的作品の諸關係であること、全素材の體系的整序がその最後の意義と目的とであることによつて文學史と異なる（文學史參照）。文學體系學は、文學美學、應用文學美學としての文學批評、應用文學批評としての文學教育學である。文學史と文學體系學とは選擇原理を異にする。前者に於ては、影響關聯に於ける歴史的大きさの活動性であるが、後者に於ては絶對的價値である。前者は後者に於ける體系的探究に實例を供給し、後者からの結論は、前者に於ける研究に諸前提を供給する。文學の歴史と文學の體系とは、とかく混同され易いのであるが、二者の學の職能を明かにすることによつて判別が確保される。

【參考】文學史と文藝學 角田俊譯（マールツホルツ原著）○國文學體系 垣内松三編 ○一般藝術學考 外山卯三郎

【佐藤】

文學に現はれたる我が國民思想の研究 ぶんがくにあらはれたるわがこくみんしさうのけんきう

文學史 四册 【著者】津田左右吉 【刊行】第一卷 大正五年八月、第二卷同六年一月、第三卷同七年十月、第四卷同十年十二月、洛陽堂。【内容】第一卷「貴族文學の時代」序說、第一篇其の發達時代（推古朝―承和）、第二篇其の成熟時代（貞觀―萬壽）、第三篇其の沈滯時代（長元―永久）。第二卷「武士文學の時代」、第一篇其の前期（承久―正平）、第二篇其の中期（應安―文明）、第三篇其の後期（明應―寛永）。第三卷「平民文學の時代」上、第一篇其の隆盛時代（正保―正德）。第四卷「平民文學の時代」中、第二篇其の停滯時代（享保―天保）。（第五卷「平民文學の時代」下は、第三篇として維新前後の三四十年を扱ひ、同時に全體に就いての概括及び結論、並に現代思想の觀察を加へて出版する豫定であつたが果さなかつた）。各篇の記述は、大體先づ文化の大勢なる章を設けてその時期の社會情勢を示し、次に文學の概觀なる章の下に各文學形態に分つてその特色と展開の所以を論じ、最後に思想に及んで、その顯著なる諸點を章となしつつ、我が國民思想を闡明しようとしてゐる。而して隨時文學以外の諸藝術にも及び、特色的な人事雜件にまで論及してゐる。

【批評】著者が該博なる知識を以て、正確にその時代思潮を説き、幾多の新しい見解を啓示した事は、第一に推奬せらるべきである。この點で本書は現在まで殆ど獨歩の地位を占めてゐるものである。ただ論斷の辛辣さが往々獨斷を招いてゐる所が少くない。なほ細部の考證に至つては不十分な點が更に多いのであるが、それは自ら關しなかつたところで、著者は專ら本書の主意である文學に現はれたる特色を捕へ、日本の國民思想を究明せんとしてゐる。全册を通じて第一卷貴族文學の時代は最も興味ある卷であると共に問題の多い所である（「古事記及び日本書紀の新研究」參照）。さて本書に於て特に注意すべきは、著者の取つた觀察の態度である。即ち思想も文學も何處までも實生活より生れると云ふ立場から唯物的な見方が生じて來た。又常に國民全般を考へてゐる所から階級的な見方をも產むこととなつたのである。勿論さうした意見としては不徹底であるが、さうした點で本書は今後更に人々の注意を惹くことと思はれる。【鶴見】

文學の起原 ぶんがくのきげん

文學論 【解說】文學の起原發生の問題は、先づ（一）如何にして發生したかを歴史的に藝術發生學的の立場から考へる場合と、（二）如何にして發生するかを心理學的の立場から論ずるとの二方面がある。（一）は原始民族のうちに存してゐたもの、また現在の未開人の間に殘つてゐるものを當面の問題として取扱ひ、客觀的事實を根據として具體的に論證し、（二）は現在の意識に立つての制作動機を當面の問題として取扱ひ、主觀的事實を根據として抽象的に考察する。（一）の方面から更に（イ）諸藝術のうち文學は如何なる順序をもつて發生したか、（ロ）文學のうちでは、如何なる種類のものが先行したかが問題となる。（イ）の問題は未だ明かにされてゐないし、（ロ）の問題にも、（1）人間の意識發展の段階よりして叙事文學的なるものが先行するといふ説、（2）感情の詠嘆が文學の原動力であるから抒情文學的なるものが先行するといふ説、（3）民謠舞踊（Ballad Dance）が原始的自然發生的文學形態で、これから他の形態が發生分化したといふ説等がある。（ロ）の問題は、實は（一）の立場からでなく、多くの場合は（二）の立場から考へられてゐる。この方面の我が國現時の研究は、宗教的呪術的儀禮に文學の發生を見出さんとする傾向と、文學を集團生活・社會生活の產物と考へ、文學の起原をも階級性から解釋しようとする傾向とが顯著であるが、この二傾向も文學の起原の全き説明とはなり得ない。ただ（一）の立場からヒルンの「藝術の起原」（The Origins of Art）や、グローセの「藝術の始源」（Anfänge der Kunst）などによつて、文學もその起原に於ては、原始民族の生活の實用的實際的目的から成立することだけは明かにされた。原始時代は未だ文化のさまざまの分野が境界を明かにせず、文學の自立は認められず、他の文化現象と不可分に結合しながら、實際的の目的のために驅使されてゐた。それ故に、原始的文學には文學的理念は勿論存在せず、文學的意識といふものも極めて微弱であつた。また多くの場合、文學形態の各要素が混在してゐたと想像せられるが、祭祀に關係しての呪詞・祝詞・合唱歌・性的舞踊及び死者を祀る行事から發達した歌謠、また勞働の歌謠、民族の遭遇した重大事件を記憶し、或は記念せんがために行ふ所作事劇などがあつた。「詩經集傳」の序に「風者多出二於里巷歌謠之作一、所謂男女相與詠歌各言二其情一也」とあり、又我が國の歌垣等を考へても、記紀・風土記・祝詞等から察しても、文學發生の動機、その目的は決して單一ではなかつた。言語の發生なくして文學の起原は考へられないが、文字の發生を條件とせずして文學の起原は考へ得る。文字で讀む文學以前に口で誦する文學があり、これを傳誦文學・口承文學といふ。我が國にありては、語造・語部によつて神話・傳説等は傳唱されてゐた。傳唱・口誦の文學は、比較的不變性を持つて傳承されて行つたのではあるが、漂へる聲の文學、即ち漂泊文學であり、流動文學であるため、文化の向上と生活の複雜化によつて、意識的に或は無意識的に可變性を帶び易い。そこで文字の使用につれて、出來るだけ原形のまゝで固定せしめた

【參考】文學概論本間久雄 ○文藝學概説石山徹郎 ○文學形態論 厨田正喜譯述 ○文學序説土居光知 ○文學論同上 ○日本文學の發生 折口信夫 ○口承文藝大意 柳田國男 ○上代文學に於ける社會性 津田左右吉 ○國文學の哲學的研究（第二卷文學の發生）土田杏村 ○文學概論（上田敏全集）

【佐藤】

文學の傾向 ぶんがくのけいかう

文學論 【解說】（一）内在的傾向。作品の實質を形成せる基調即ち創作の心的動機の傾向を云ひ、時代精神の傾向によつて決定される。（I）センティメンタル（Sentimental）とナイーヴ（Naiv）の區別、（II）ロマン的（Romantisch）とプラスチック（Plastisch）の區別、（III）ユーモア（Humor）とサタイア（Satire）の區別、（IV）ヒロイック（Heroisch）とエレジー（Elegie）の區別、（V）ロマンス（Romance）とリアリスティック（Realistisch）の區別、（VI）ドラマチック（Dramatisch）とエピック（Episch）の區別、（VII）リリック（Lyrisch）とディダクチック（Didaktisch）の區別、（VIII）ソリッド（Solid）とアラベスク（Arabesk）の區別、（IX）ロココ（Rokoko）とバロック（Barock）の區別、（X）ゴチック（Gothisch）とクラシック（Klassisch）の區別、（XI）ロマンチック（Romantisch）とクラシック（Klassisch）の區別、（XII）ロマンチック（Romantisch）とアンチック（Antik）の區別、（XIII）ロマンチック（Romantisch）とモダーン（Modern）の區別、（XIV）ロマンチック（Romantisch）とアイロニック（Ironisch）の區別、（XV）ロマンチック（Romantisch）とミスチック（Mystisch）の區別、（XVI）ロマンチック（Romantisch）とシンボリック（Symbolisch）の區別、（XVII）ロマンチック（Romantisch）とアレゴリック（Allegorisch）の區別、（XVIII）ロマンチック（Romantisch）とフォルマリスティック（Formalistisch）の區別、（XIX）ロマンチック（Romantisch）とインプレッショニスティック（Impressionistisch）の區別、（XX）ロマンチック（Romantisch）とエクスプレッショニスティック（Expressionistisch）の區別、（XXI）ロマンチック（Romantisch）とキュビスティック（Kubistisch）の區別、（XXII）ロマンチック（Romantisch）とフューチュリスティック（Futuristisch）の區別、（XXIII）ロマンチック（Romantisch）とダダイスティック（Dadaistisch）の區別、（XXIV）ロマンチック（Romantisch）とシュールレアリスティック（Surrealistisch）の區別、（XXV）ロマンチック（Romantisch）とアブストラクト（Abstrakt）の區別、（XXVI）ロマンチック（Romantisch）とコンクレート（Konkret）の區別、（XXVII）ロマンチック（Romantisch）とアブソリュート（Absolut）の區別、（XXVIII）ロマンチック（Romantisch）とリラティブ（Relativ）の區別、（XXIX）ロマンチック（Romantisch）とユニバーサル（Universal）の區別、（XXX）ロマンチック（Romantisch）とインディビジュアル（Individual）の區別、（XXXI）ロマンチック（Romantisch）とソーシャル（Sozial）の區別、（XXXII）ロマンチック（Romantisch）とヒューマン（Human）の區別、（XXXIII）ロマンチック（Romantisch）とネイチュラル（Natural）の區別、（XXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XL）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XLI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XLII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XLIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XLIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XLV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XLVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XLVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XLVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XLIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（L）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（LXXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（LXXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XC）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XCI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XCII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XCIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XCIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XCV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XCVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XCVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（XCVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（XCIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（C）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXL）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXLI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXLII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXLIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXLIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXLV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXLVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXLVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXLVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXLIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CL）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CLXXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CLXXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXC）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXCI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXCII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXCIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXCIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXCV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXCVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXCVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CXCVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CXCIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CC）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXL）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXLI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXLII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXLIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXLIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXLV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXLVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXLVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXLVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXLIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCL）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCLXXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCLXXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXC）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXCI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXCII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXCIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXCIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXCV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXCVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXCVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCXCVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCXCIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCC）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXXIV）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXXV）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXXVI）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXXVII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXXVIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXXIX）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXXX）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXXXI）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック（Artistisch）の區別、（CCCXXXII）ロマンチック（Romantisch）とアーティフィシャル（Artificial）の區別、（CCCXXXIII）ロマンチック（Romantisch）とアーティスティック

としての文學批評。應用文學批評としての文學教育學である。文學史と文學體系學とは選擇原理を異にする。前者に於ては、影響關聯に於ける歴史的大きさの活動性であるが、後者に於ては絶對的價値である。前者は後者に於ける體系的探究に實例を供給し、後者からの結論は、前者に於ける研究に諸前提を供給する。文學の歴史と文學の體系とは、とかく混同され易いのであるが、二者の學の職能を明かにすることによつて判別が確保される。

字の發生を幾件とせずして文學の起原は考へ得る。文字で讀む文學以前に口で誦する文學があり、これを傳誦文學・口承文學といふ。我が國にありては、語部（かたりべ）によつて神話・傳說等は傳唱されてゐた。傳唱・口誦の文學は、比較的不變性を持つて傳承されて行つたのではあるが、漂へる聲の文學、卽ち漂泊文學であり、流動文學であるため、文化の向上と生活の複雜化によつて、意識的に或は無意識的に可變性を帶び易い。そこで文字の使用につれて、出來るだけ原形のまゝで固定せしめたいとの要求が生じ、こゝに文字によりての定着文學の姿をとるに至つた。かくして記載文學としての不變性が保持せられる。定着文學の時代となつて記述文學が流行するに及び、原始文學が、政治・宗教その他の文化のために利用されてゐたのに反して、文學的創作意識が自覺的となり、こゝに眞の文學時代が發生する。我が國の文學的意志要求は、和歌より始まる（詩歌・小說・戲曲の起原の項參照）。（二）は文學を産出する衝動・本能の說明で、種々の學說がある。主なるものは、（1）遊戲說、（2）摸倣說、（3）異性吸引說、（4）自己表現說。これ等の學說は、原始文學の起原を解するには不備の點がある。文學の種類及びそれの制作動機は多樣複雜であるから、一つの學說により全般の文學起原に亙る法則を見出さんとすることは無理である。しかし（4）の說は、近代の個性中心の文學發生の契機を解するには適切である。この（二）の立場の研究で、藝術の發生の働きとしての（イ）リズム（Rhythm）、（ロ）擬態（Mimetic Expression）、（ハ）自然の摸倣（Imitation of Nature）の心理的研究は注目すべきである。

【參考】文學概論本間久雄○文藝學概說石山徹郎○文學形態論厨田正喜譯述○文學序說土居光知○文學論同上○日本文學の發生折口信夫○口承文藝大意柳田國男○上代文學に於ける社會性津田左右吉○國文學の哲學的研究（第二卷文學の發生）土田杏村○文學概論（上田敏全集）【佐藤】

文學の傾向（ぶんがくのけいかう）

文學論【解說】（一）內在的傾向。作品の實質を形成せる基調卽ち創作の心的動機の傾向を云ひ、時代精神の傾向によつて決定される。（1）センティメンタリズム（感傷主義）。過去を主とする生活環境より生ずる文學傾向であつて、內容は宿命的・追憶的・回顧的・詠嘆的・高踏的・悲觀的等の特色をもつ。（2）ロマンティシズム（浪漫主義）。未來を主とする傾向であつて、內容は憧憬的・展望的・空想的・主觀的・傳奇的・情熱的、破壞的・飛躍的等の特色をもち、個性を解放擴充せんとする人生主義的である。（3）リアリズム（現實主義）。現在を主とする傾向であつて、內容は理智的・意志的・形式的・固定的・諦視的・批判的の特色をもち、健全性と冷靜を感ずるが平凡化が見られる。（二）表現的傾向。內在的傾向は必然に表現的傾向をとる。（1）浪漫主義的。現實以上の或る何等かの新しき世界、あるべき世界への創造に向つて空想的に熱情的に躍心することに力點を置く表現。（2）自然主義的。個性よりは環境に重點を求め、現實的精神、あるがまゝの世界の表現に力點を置く。（3）象徵主義。自然と人生を一如の形に於て觀照し、自然と人生と文學とを渾一化することに力點を置く表現。これは（2）を止揚せる表現である。（4）理想主義。眞善美の理念に力點を置く表現。（5）古典主義。以上の四つの表現傾向の基準となる表現である。內容と形式の統一、均衡・調和の美を重んずる。（三）具體的傾向。文學は表現であるがその表現が如何なる具體的「形」の傾向をとるかによつて、詩・小說・戲曲その他の諸形式の文學作品が現はれる。

【參考】生活と文學有島武郎○日本文學概論新屋敷幸繁・峯岸義秋【佐藤】

文學の形式（ぶんがくのけいしき）

文學論【解說】文學上に於て形式（Form）の語は、形態とも譯され、時にはヂャンル（Genres）若しくはスタイル（Style）の譯語である樣式と相似た意味に用ひられる。普通常識的に內容に對立しての意味に解せられ、文學形式は文學內容を傳達表現するの手段方法と見られ、內容に「形」を與へる構成上の原則と考へられてゐる。この語は廣汎な意義を包み、種々の場合に種々の意味を以て使用される。二大別すれば（一）は文學作品の外面的、若しくは感覺的方面全般を意味する場合、（二）は文學作品を支配する抽象的なる美的原理、或は純粹槪念を意味する場合である。（二）は統一・調和・リズム等の如きものを指す。前者の（一）を更にわかつと、（1）內面的言語を表出する客觀的なる符號としての言語・文字について云ふ場合で、言語學又は文法的方面のものを指す。（2）文章の種々・組織・排列・結構等について云ふ場合で、文體論又は修辭學的方面のものを指す。（3）文學の形態について云ふ場合で、樣式論又は形態論的方面のものを指す。（4）文學の流派或は主義上の表現樣式について云ふ場合で、思潮論的方面のものを指す。（5）以上の一切を槪念的に總括して云ふ場合で、文學槪論の總括的形式論の方面を指す。元來形式なるものを文學に於ける外廓的形體、又は文章上・論證上等の一般法則と見、また內容美に對立させて形式美を考へるといふことは、形式を外部的外面的意味に強ひて解釋せんとする囚はれた考へ方であつて、作家が一つの「形」として內面的に直觀せるもの、卽ち內面的形式（Inner Form）だけが、文學の眞の形式と稱へ得るものである。この內面的形式こそは、統一であり、觀念であり、實は文學內容そのものである。故に嚴密に云へば、形式に對立し得るものは題材であつて、內容と形式とは不可分である。また形象（Image）は、情緒の觀念的統一、部分的表現であつて、思想的統一、經驗全體の表現である形式とは區別すべきである。形象と形象とを結びつけるところの藝術的理性に依つて形式が成立する。故に文學の形式は藝術的理性によつて與へられたものである。文學に於ては內面的形式と外面的表現とが不分不離であるところに、他の論理的關係を現はす諸形式と根本的なる差別がある。それ故に或る文學が形式を持たぬと云はれる場合は、その文學に何等の外面的形式が與へられてゐないといふ意味ではなく、內面的に形象と形象との關係が統一せられてゐないことを現はす。形象の統一は內面的形式の成立であり、內面的形式があれば、そこに必ず外面的形式が存在する。文學が形式の技巧（Technique）を大切にするのは、外面的に言語・文字の排列を工夫するにあるのではなく、內面的形式の破壞を恐れるが故である。

【參考】文學論夏目漱石○文學論竹友藻風○文學序說土居光知○美學原論大西克禮○藝術の本質金子馬治【佐藤】

文學の制約（ぶんがくのせいやく）

文學論【解說】

文學の他律性に觀點を置く時、文學を制限約束するものが考へられる。これを文學の制約といふ。各民族、各國民のもつ文學の基本的制約者は、民族性乃至國民性と風土と言語である。血と土と語の三者の相違が、それ〴〵の文學を特性づける。その他約束者として勢力を持つものは、時代と環境である。文化現象の一つとして見たる文學は、その時代の生活及び思想に準據するものであると云へる。時代精神、階級性、男女・父子・主從の社會軸、政治・經濟・思想・宗教等一切の文化現象と地方的關係とをすべて制約者と見得る。但し注意すべきは、この觀點にのみ立つ場合は、文學の自律性の問題を無視してゐるといふことである。

〔佐藤〕

【參考】國文學概論 藤田太郎○文學と社會 橫山有策・石井眞峯共譯(ソーンダイク原著)○文學と經濟學 大熊信行 ○文學新生の研究 垣内松三

文學の内容 ぶんがくのないよう 文學論 【解說】

内容と形式とは必ずしも相排除するものではなく、内容的であつて同時に形式的である對象が存在することについては、哲學上現象學派が既に指示してゐるところであるが、文學はその類の一つであつて、内容と形式とは不可分のものである(文學の形式參照)。しかし形式を容器の如く考へ、それに取り入れられる素材、或は盛られたる思想(主題)、又はそれに見出だされる「筋」事件の運び(脚色構想)を、文學の内容と云ふ場合もある。この場合の内容といふ意味は、作品の分析的考へ方から來てゐる。また作品といふ存在的事實からではなく、文學を生み出す生活乃至文學を統率する理念の探究的考へ方から、文學そのものの内容といふ意味も出て來る。この場合は、文學の精神を指すのであつて、文學に含まれた精神をいふのではない。文學に含まれたる、或は現はされる内容といふものは文學の素材である。(一)素材的内容。宇宙間一切のものが文學の對象であるから、思念し得られる自然と人生の一切の事象は悉く文學の素材たり得る。この素材を大別すると、(1)自然的、(2)人事的、(3)超自然的、(4)思想的の四要素がある。(1)自然的要素。感覺によつて現出する客觀的世界を自然と見れば、自然的とは感覺的といふ意味になる。感覺的要素は(イ)視覺的、(ロ)聽覺的、(ハ)味覺的、(ニ)嗅覺的、(ホ)觸覺的の五要素に分類される。(イ)と(ロ)は、感覺的要素の主位を占めてゐるが、この二つを高等感覺とし、その他のものを下等感覺とする見方から、(ハ)(ニ)(ホ)を低く評價することは錯誤である。文學は感覺に於ても鋭敏であるが、自然を愛することの深い日本文學には、これ等の要素を豐富に見出だし得る。(2)人事的要素。人事は心的作用による世界であるから、心的要素とも云へる。この要素は作品のもつ素材としての場合と、創作の心理に於ける場合とに分けて考へることも出來る。(イ)情的、(ロ)意志的、(ハ)知的と分つと、(イ)が文學の中心をなすものであることは、文學の本質からも、抒情文學的なるものが文學の基調であることからも察し得られる。この情的要素は、多くの場合、複合的な情緒として見出だされる。(ロ)は多く劇文學に、(ハ)は多く叙事文學に表はれる。(3)超自然的要素。不可思議、神祕なる事件、或は客觀的存在としては認容し難き性質のもの、即ち天女・妖精・幽靈・幻術・魔法・轉生等であるが、文學の特性である感能化・化身化・具體化等の目的から、(3)の要素は多種多量に見出される。(4)思想的要素。こゝに云ふのは、精神作用の一切を意味するのではなく、宇宙觀・人生觀・社會觀・處世觀・戀愛觀等を指すのであつて、概念的或は觀念的思想のことであるが、この要素が主として作品の主題となるものである。神道・儒教・道教・佛法・西洋思想などを背景として、日本文學に於けるこの要素は、千態萬樣の觀を呈してゐる。文學の價値を、藝術的と内容的との二元的に批評する場合の内容的價値の問題は、多くは(4)に係るところのものである。(二)文學精神。文學それ自體の持つ内容としての精神、即ち文學を生み出す基本的精神を意味する。この精神は大別して、(1)現實主義的精神、(2)浪漫主義的精神、(3)象徵主義的精神の三となる。(1)の精神は現實に即して生きんとする客觀的態度の精神であり、全生活的感激をそのまゝに表現せんとする自然的精神であり、「まこと」を强調する人生主義である。(2)の精神は、現實以上の世界を待望する主觀的態度の精神であり、現實以上の憧憬の世界を創造せんとする理想的精神であり、「ものゝあはれ」を擴充する人性主義である。(3)の精神は、前二者の精神の諧調融合に見出されるところのものであつて、「幽玄」はこの精神を母胎とする。自然と人生とを一如の形に於て觀照し、文學と人生と自然とを渾一化しようとする文學主義である。俗人生を離れて自然に心交融化せんとする「風雅」である。(一)の精神基調は、素朴にして自然なる純精感情であつて、眞情の流露を愛好し、また現實的に與へられたものを、すなほに享受せんとする態度である。而して生活が讃美すべきもの、祝福せられたものとして體驗される場合、即ち實人生の善と眞とを肯定する「まこと」なる感情、誠實なる信の美としての純情が體驗される場合に、この精神は明朗・樂天、笑ひのなかにたのしみをふくむ「をかしみ」、快適なるものとして生動する。さて「まこと」の語は、宣命に「明支淨支直支誠之心以而」と見え、「古今」の序に貫之は評して、「遍昭は歌のさまは得たれど誠すくなし」と出てゐる。「蜻蛉日記」に、「世の中に多かる古物語のはしなどをみれば、世に多かる空言だにあり」と云ひ、「無名草子」に「いとまことしからず」と評せるなどは、「まこと」を希求する心を裏書するものである。德川時代に至つて、土芳は「むかしより詩歌に名ある人多し、みな誠より出て誠をたどるなり」と叙べ、鬼貫は「俳諧はただまことにもとづく」と說破してゐる。心敬の「實ある歌」、蘆庵の「たゞごと」など、すべてこの精神傾向を主張するものと見てよい。義理(時代各階級の社會に存する道德の一般的標準、或は常識に從ふこと)と人情(人間的欲求)との葛藤を取扱ひ、而して義理の精神を高潮する意志的精神も、勸善懲惡乃至狂言綺語の方便的精神も、色道の理想なる「粹」即ち色道の精粹のわけしりを、或は洗練された當道の修養者の混濁を脫し、「氣のとほり」たる、即ち心術の冴えた境地の「意氣」を、或は江戸生活の洗練された摸型理想に通曉せる「通」を、或は色道の華なる「心中」を嘆美する江戸文學の精神も亦、學術的方法の文學化によつて、人生を觀察し描寫し解剖し抉剔して、現實暴露の悲哀と近代苦悶の公理化を表白する現代文學の精神も、現實主義的精神の流轉として感得されるものである。(二)の精神基調は、「新撰和歌集」の序に貫之が云へる「義爾文巧、花實相兼」と「源氏物語」に見られる「ものゝあはれ」とを理想とする。即ちあるがまゝのものの上に、更にあるべき世界を發見創造せんとするものである。「こゝろ」と「すがた」、即ち内容と形式との調和均衡の中に見出されたる情緒の世界を重んずる。あるがまゝの世界でなく、あるべき美の世界を創造せんとする。こゝに技巧美が目に立つ。現實を享受せず、現實にあるものを賦與せんとする態度である。天の岩戸の神樂に、「あはれ、あなおもしろ、あなたのし」と見える「あはれ」は、思議の感動と陶醉であつて、無限なる夢幻の世界の暗示と云へる。「細み」「からび」「しをり」「さび」「ひえ」「位」「たけ」「あまりの心」「有心」「感情」「風情」「餘情」「景氣」などの語は、幽遠靜閑の心境、幻視的靈感、内的心靈的なるものの象徵の方面を示唆するものである。俊成・世阿彌の幽玄は、芭蕉に至りて「風雅」となる。「風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす」(笈の小文)と見えてゐるが、風雅は自然的象徵の世界であつて、自然に融化し得る人の心にのみ纏綿する氣分内容である。

あらさがし、(2)稱讃する、(3)判斷する、(4)比較又は分類する、(5)鑑賞するで、五つの意味に用ひられてゐるといふ。文學批評とは文學を對象とせる批評である。(一)裁斷的批評。作家及び作品よりも批評家が高い地位に立つて、或る標準に基き裁判官が判決を下すが如き態度のもので、(1)と(3)の意味に於ける批評である。(二)歸納的批評。(イ)作品の價値を定めんとするのではなく、對象の作品と終始して仔細に作品の性質を調査せんとする態度と、(ロ)作品を環境と聯關せしが呼ばれ得るのであつて、例へば「鑑賞批評」とか「應用批評」とか、「倫理批評」とか「道德批評」とか樣々の語が續出し得る可能性がある。現代の批評方式に二つの見方がある。一つは文明批評的で、他の一つは文學史的である。前者は現代と將來の文學傾向の約束たるべきものと信ずる視點より、現代の文學を批評するのであり、後者は文學を生める社會に即して、その生める事態を自然なものとし、端的にその文學の素質に即して批評するものである。前者は時間に價値を附し、後者は存在に價値を置

へる「義團文巧、花實相兼」と「源氏物語」に見られる「ものゝあはれ」とを理想とする。即ちあるがまゝのものゝ上に、更にあるべき世界を發見創造せんとするものである。「こゝろ」と「すがた」、即ち内容と形式との調和均衡の中に見出されたる情緒の世界を重んずる。あるがまゝの世界でなく、あるべき美の世界を創造せんとする。こゝに技巧美が目に立つ。現實を享受せず、現實にあるものを賦與せんとする態度である。天の岩戸の神樂に、「あはれ、あなおもしろ、あなたのし」と見える「あはれ」の内容が、肉感的官能美なる「ゑん」「なまめかし」、或は貴族的美なる「あてはか」「みやびやか」或は女性的美たる「たをやか」「あえか」、愛情美たる「らうたし」「うつくし」「うるはし」「なつかし」等を包攝して、「ものゝあはれ」は古典的美の世界の創造として展開する。官能的人性的切實さをもちつつ、典雅・華麗・優美・哀婉・爛熟・頽廢の世界を進展せしめる。「なくさみ」はこの世界の目的觀である。この世界への感心感動である。文學活動の本流はこの精神にある。(三)の精神基調は、(一)と(二)の精神の融合を出發點として、非人情的超現實的絶對的なる無限界の思慕・暗示・情調である。幽玄の語は、「古今集」眞名序に「或事關二神異一、或興レ入二幽玄一」と見えるが、心敬僧都庭訓には「常に飛花落葉を見ても、草木の露を眺めても、此の世の夢まぼろしの心を思ひとり、ふるまひをやさしく幽玄に心をとめよ」とあつて、こゝには「ものゝあはれ」の中世的止揚があり、離俗美・悟性的直觀がある。萬有を通じて普遍的に存在する「こゝろ」に由來する「こゝろ」が「物のあはれ」と考へられるなら、幽玄は何處より落ち來るとも知れぬ不可思議の感動と陶醉であつて、無限なる夢幻の世界の暗示と云へる。「細み」「からび」「しをり」「さび」「ひえ」「位」「たけ」「あまりの心」「有心」「感情（かんじやう）」「風情（ふぜい）」「餘情（よせい）」「景氣」などの語は、幽遠靜閑の心境、幻視的靈感、内的心靈的なるものの象徴の方面を示唆するものである。俊成・世阿彌の幽玄は、芭蕉に至りて「風雅」となる。「風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす」（笈の小文）と見えてゐるが、風雅は自然的象徴の世界であつて、自然に融化し得る人の心にのみ纏綿する氣分内容である。「虚實」の論も、この象徴性を理解することによつて意識される精神である。

【參考】文學論夏目漱石 ○文學管見里見弴 ○文藝學概説石山徹郎 ○日本文學本質垣内松三編 ○國文學の批評的研究峯岸義秋 ○日本古代中世の文學思潮 久松潜一 ○近世國文學思潮藤村作 ○日本文藝思潮 岡崎義恵 【佐藤】

文學の本質（ぶんがくのほんしつ）

【著者】松浦一【刊年】大正四年、大日本圖書株式會社【解説】文學の本質を西洋文明に求めて解釋するのが從來一般に行はれた文學論であつたが、我が古來の文藝作品を併せ檢討して固有のものを發見したのは本書の特色である。世阿彌の藝術論を引用した點などはその一例であり、正に我が國民性よりしたる文學論とも稱すべきで、開版以來十數版を重ねたのもこの獨特の立場の故であらう。序説、文學の旋律的世界と繪畫的世界、靈數三、文學の涅槃の四大項目より成る。 【土井】

文學批評（ぶんがくひひやう）

【解説】ゲーレーとスコットとの共著「文學批評の方法及び材料」(Methods and Materials of Literary Criticism)に、批評の語義を解説して、(1)あらさがし、(2)稱讃する、(3)判斷する、(4)比較又は分類する、(5)鑑賞するで、五つの意味に用ひられてゐるといふ。文學批評とは文學を對象とせる批評である。(一)裁斷的批評。作家及び作品よりも批評家が高い地位に立つて、或る標準に基き裁判官が判決を下すが如き態度のもので、(1)と(3)の意味に於ける批評である。(二)歸納的批評。(イ)作品の價値を定めんとするのではなく、對象の作品と終始して仔細に作品の性質を調査せんとする態度と、(ロ)作品を環境と聯關せしめて、作品の地位を定立せんとするのと二樣がある。(三)客觀的批評。形式的批評又は標準的批評とも云ふ。文學理論に基き、或る標準を求めて、それに依つて批評する態度である。批評を以て判斷の一樣式と見做すものを因襲的批評と云ふ。(四)主觀的批評。内容的批評、また印象的批評とも云ひ、因襲的批評に對して近代的批評と云はれるものもこの部に屬する。十九世紀の浪漫主義文學勃興以來、この批評方法が自覺された。この批評は何等の外的標準を立てず、批評家その者の印象又は人格に重點を置く。(五)科學的批評。實驗科學的法則の應用であつて實證主義的立場により、新歸納的批評と見らるべき態度である。(六)哲學的批評。新しき意味の裁斷批評であつて、これは(五)の態度に反撥して理想主義的見解に基き、内容的に權威ある或る標準に依つて演繹的に批評する態度である。(七)鑑賞批評。與へられた作品に對して鑑賞を主とせる批評である。(八)快樂批評。批評の根柢を快樂の賦與性に求むるものである。その他何等かの標準、又は法則に基いて批評する場合、その標準又は法則を冠したる批評の名辭が呼ばれ得るのであつて、例へば翻譯批評とか應報批評とか、倫理批評とか道德批評とか樣々の語が續出し得る可能性がある。現代の批評方式に二つの見方がある。一つは文明批評的で、他の一つは文學史的である。前者は現代と將來の文學傾向の約束たるべきものと信ずる視點より、現代の文學を批評するのであり、後者は文學を生める社會に即して、その生める事態を自然なものとし、端的にその文學の素質に即して批評するものである。前者は時間に價値を附し、後者は存在に價値を置くものである。文學批評は、文學作品の發生後に現はれた現象であるが、文學意識・文學理念が自覺認識されるにつれて、文學批評が文學作品の指導的地位に立つに至つた。また文學批評は文學創作に對立して、文學の一大分野であることが自覺されるに至り、文學批評も藝術的意義と領域とを獲得することになつた。批評とは、廣義には詩學・修辭論等に關する一般的原理的の意見と個々の作家や作品に對する研究と鑑賞の二方面を包括してゐて、前者は上代に盛んであり、後者は近代に至つて發達を見た。嚴密に云へば前者は文學論と呼ばれるものであり、後者が純粹の批評・評論である。この部類のものが、文學作品の一種であると見做されるものである。そして前者は後者の原理たるべきものである。

【參考】文學概論本間久雄 ○文藝批評史太田善男 ○國文學の批評的研究峯岸義秋 ○日本文學評論史久松潜一 ○日本小説評論史序説 恒田芳起 ○現代文學の諸傾向片山正雄 【佐藤】

文學評論（ぶんがくひやうろん）

【著者】夏目漱石【刊行】明治三十八年九月から同四十年三月まで約一年半東京帝國大學文科大學

可分のものである（文學の形式參照）。しかし形式を容器の如く考へ、それに取り入れられる素材、或は盛られたる思想（主題）、又はそれに見出だされる「筋」事件の運び（脚色構想）を、文學の内容と云ふ場合もある。この場合の内容といふ意味は、作品の分析的考へ方から來てゐる。また作品といふ存在的事實からではなく、文學を生み出す生活乃至文學を統率する理念の探究的考へ方から、文學そのものの内容といふ意味も出て來る。この場合は、文

（ハ）知的と分つと、（イ）が文學の中心をなすものであることは、文學の本質からも、抒情文學的なるものが文學の基調であることからも察し得られる。この情的要素は、多くの場合、複合的な情緒として見出だされる。（ロ）は多く劇文學に、（ハ）は多く叙事文學に表はれる。（3）超自然的要素。不可思議、神祕なる事件、或は客觀的存在としては認容し難き性質のもの、即ち天女・妖精・幽靈・幻術・魔法・轉生等であるが、文學の特性である感能化・化身化・具

は、前二者の精神の諧調融合に見出されるところのものであつて、「幽玄」はこの精神を母胎とする。自然と人生とを一如の形に於て觀照し、文學と人生と自然とを渾一化しようとする文學主義である。俗人生を離れて自然に心交融化せんとする「風雅」である。(一)の精神基調は、素朴にして自然なる純精感情であつて、眞情の流露を愛好し、また現實的に與へられたものを、すなほに享受せんとする態度である。而して生活が讃美すべきもの、觀

洗練された當道の修養者の混濁を脱し、「氣のとほり」たる、即ち心術の冴えた境地の「意氣」を、或は江戸生活の洗練された摸型理想に通曉せる「通」を、或は色道の華なる「心中」を嘆美する江戸文學の精神も亦、學術的方法の文學化によつて、人生を觀察し描寫し解剖し抉剔して、現實暴露の悲哀と近代苦悶の公理化を表白する現代文學の精神も、現實主義的精神の流轉として感得されるものである。(二)の精神基調は、「新撰和歌集」の序に貫之が云

英文學科に於ての講義で、同四十二年三月、春陽堂より發行した。漱石全集第八巻・同普及版第十二巻所收。【内容】初め講義の時は、「十八世紀英文學」と題されてゐた。この行き方で十八世紀の末浪漫的反動の起る所まで論ずるつもりであつたが、四十年三月限り辭職して講義も中斷されてしまつたのである。第一篇、序言。第二篇、十八世紀の狀況一斑。第三篇、Addison 及び Steele と常識文學。第四篇、Swift と厭世文學。第五篇、Pope と所謂人巧派の詩。第六篇、Daniel Defoe と小説の組立。以上。殊に諷刺家としてのスウィフトの稱揚、詩人としてのポウプの非難、小説家としてのデフォウの攻撃には、日本人としての立場からの自由な批評的態度が見えて、單に一スウィフト、一デフォウを論評してゐるだけでなく、日本人から見た外國文學に關する一般的意見も散見して有益なる文字である。日本人が日本人の立場から、外國文學を批判したものとしては、恐らく最初の發表の一つであらう。

文學評論史（ぶんがくひやうろんし）　文學論　【解説】

文學に對する見解、又は實際の文學作品に對する批評の歴史的考察である。文學研究史の一方面であつて、これによつて各時代の文學觀を知り得る。國語史に對して國語學史が存在する如く、文學史に對して文學評論史が存在する。誤解してならぬことは、こゝで評論といふのは、思惟形式の文學、即ち創作としての評論文學の意味ではないといふことである。（文學・評論參照）

【參考】日本文學評論史　久松潜一　【佐藤】

文學論（ぶんがくろん）　文學論書　【解説】文學論といふ名辭のもつ概念は、從來一般には嚴格な

る學的規定を持たず、文學の概説・概論・通論・汎論等の語と同意に用ひられ、時には文學原論・理論、又は文藝學・文藝科學等と同義に解されたりしてゐる。又何等かの意味に於て文學を究明するもの、文學全般に關する研究的理論であるといふ漠然たる概念を現はしてゐる。しかし意義の紛糾を阻止するためには、文學論又は文學概論等と文學原論又は文藝學等とは區別さるべきもので、前者は直接に文學自體の性質を説明・理解する學問であつて、主として存在的な文學の領域を對象とするもの、即ち作品を中心とする研究である。後者は前者即ち文學論の方法論を吟味檢討して、間接ながら文學の本質を究明すべき原則的法則を發見せんとする學問であつて、主として形成的な文學の領域を對象とするもの、即ち文學的精神を組織的な體系として論究するのである。文學研究の諸方法を比較考察して、各文學的なるものゝ特質の全き理解と、そしてその理解への法則の探求を目的とする。前者の文學論は、文藝學の諸方法を取り擧げるのではあるが、目的は諸方法の研究にあるのではなく、どこ迄も文學自體の究明にある。前者は文學の具象的形態界そのまゝの研究であり、後者は文學を論理的概念界に置き換へての研究である。後者が果して學として獨立すべき權利を要求し得るや否やは、今も問題として論議されてゐるところである。一體科學はそれ〴〵個別的對象を持ち限界を越えることは許されない。然るに文學に於ける對象意識は純粋なるものほど、「我」と對立的關係にある一切の世界である。故に文學の妥當なる理解は、特定の對象意識によつて局限せられない對象の認識にある。而も「學」の對象は

文學を局限する。こゝに文藝學若しくは文藝科學獨立に關しての難問題が横はつてゐるのである。文學論は文學史研究とも相違する點がある。一方は文學の横斷的研究であり、他方は縦貫的研究である。而して文學批評は、文學論の範圍内として多くの場合取扱はれてゐる。現在文學論の二大方面は理想主義の立場に立つ個性主義の文學論と、唯物史觀の立場に立つ社會學的な文學論である。前者は文學の自律性を認め、後者は他律性のものと斷ずる。前者は文學を或る目的の手段とすることを拒み、後者は或る目的の手段とする。

【參考】文學一斑　内田貢　○文學概論　武島又次郎　○文學論　夏目漱石　○文藝概論　島村抱月　○文學原論　高橋禎二譯述　○文學概論　横山有策　○文學序説　土居光知　○文學論同上　○文學概論　大和資雄　○文學概論　本間久雄　○文藝學概説　石山徹郎　○文學概論（上田敏全集）　○文學管見　里見弴　○文學概論　佐藤清　○文學汎論　土田杏村　○文學論　竹友藻風　○文學總論同上　○日本文學概説　久松潜一　○日本文學概論　新屋敷幸繁・峯岸義秋　○國文學概論　篠田太郎　○文藝學概論　蘆田弘夫譯　○文藝學の法則　武田忠哉譯　○文學史と文藝學　角田俊譯　○ソヴエート・ロシア文學理論　岡澤秀虎　○文學理論の諸問題　平林初之輔　○日本文學の方法論　岩永胖　○國文學の方法體系（國文學皆目集覽）　垣内松三　○國文學の批評的研究　峯岸義秋　○一般藝術學考　外山卯三郎　【佐藤】

文學論（ぶんがくろん）　文學論書　【著者】夏目漱石【成立・刊行】明治三十六年九月より、同三十八年六月までの二學年間、著者が東京帝國大學文科大學英文學科に於て毎週三時間づつ講義したノートを、當時學生として聽講した中川芳太郎氏に整理させて、明治四十年五月、大倉書店から出版したもので、漱石全集第八巻・同普及版第十一巻に所收。【解説】元來この「文學論」は General Conception of Literature（文學概論）と題して、著者が明治三十六年四月から六月まで、その外形論を簡略に講じ、同年九月からは内容論に入つて講じたその内容論のみである（外形論の梗概は皆川正禧氏編「英文學形式論」がある。岩波書店發行）。目次を示せば、第一篇文學的内容の分類、第二篇文學的内容の數量的變化、第三篇文學的内容の特質、第四篇文學的内容の相互關係、第五篇集合的F。取扱方は心理學的方法、若しくは社會學的方法ともいふべき科學的態度で、著者自ら十年計畫にて企てられたる大事業と云つてゐるほど、大規模の研究となるべき筈であつたが、二ケ年半講義をつづけた後、一先づ打ち切つて他の題目（文學評論參照）に移つた爲めと、やがて著者は、文學的述作に忙殺されて「文學論の如き學理的閑文字を弄するの餘裕」がなくなつた爲めとで、それきりになつたものである。隨つて文學概論全計畫の上から云へば未完成のものに相違ないが、内容論だけとして見れば、まとまつたものであり、獨創に富んだものであり、いかにも細心精緻の論法を以て、先づ我々の意識の中から文學的材料となり得べきものの性質を限定して、これを四種に分類し、その相互の關係を考察して、表現の方法としては、互に代用も出來れば相合することも出來る所以を述べ、浪漫主義と寫實主義とを對立せしめ、文學的幻惑法についてのすべての場合を説明したりしてゐる。全體的に一つの體系的立論であると同時に、部分的に多くの知識と暗示を與へる意見に充ちてゐる。【野上】

文華秀麗集（ぶんくわしうれいしふ）　漢詩集　三巻

【撰者】藤原冬嗣が勅を奉じて菅原清公・勇山文繼・滋野貞主・桑原腹赤等が編輯したものである。作品の選定には嵯峨帝の聖慮を煩はした。【名義】文華は詩歌の秀逸なものを言ひ、秀麗は文字の如く秀で且つ麗しきことを意味する。【成立】序文によると、「凌雲新集」（弘仁五年）が出てから未だ四祀をこえず云云」とあるから、弘仁九年の成立である。なほ序中に藤原冬嗣の官位を正三位大納言と記してゐるが、彼は弘仁六年六月十六日に大納言となちその三十四首に次ぎ、巨識人の二十首、仲雄王の十四首等である。しかし當時の著名な詩人は殆ど網羅せられてゐる。又それ等を詩の形態上から見れば、五言の五十二首、七言の七十九首、雜言の十二首の關係は「凌雲集」に於けるものとほぼ同じである。即ち唐詩の感化により七絶の流行が盛んである點や、長篇のものの比較的多い點は一特色である。姓名を支那風に三字を用ひたことは、唐風の影響と認むべく、この集に始まる。即ち良岑安世を良安世、巨勢識人を巨識人の如き例であ

社會生活の最高標準とする思想であつて、桑木嚴翼博士によつて初めてこの語が用ひられた。この主義は、廣義の自然主義に對する思潮であつて、換言すれば、現實主義或は實證主義に對する一種の理想主義である。抑々文化とは、種々の意味に使用されてゐる語であつて、これを單に衣食住といふ物質的・經濟的感化により七絶の流行が盛んである點や、長篇のものの比較的多い點は一特色である。姓名を支那風に三字を用ひたことは、唐風の影響と認むべく、この集に始まる。即ち良岑安世を良安世、巨勢識人を巨識人の如き例であ

る理想主義とを、嚴格に綜合統一せんとする思想であると解することが出來る。この主張は、桑木博士の外に、金子馬治・左右田喜一郎・土田杏村等に依つても提唱されたのであつて理論的には、現實・理想の兩主義の嚴格な綜合統一を圖るのであるが、實際的には、大正十四五年前後、理想主義が現實主義、殊に實證主義・社會主義のために壓倒されるほど、一般の思潮が現實主義に偏してゐるのを、均衡の狀態に復せしめんとする運動となつて現はれたのである。但しその目的は、飽くまでも理

文華秀麗集（ぶんくわしうれいしふ）　漢詩集　三卷

【撰者】藤原冬嗣が勅を奉じて菅原清公・勇山文繼・滋野貞主・桑原腹赤等が編輯したものである。作品の選定には嵯峨帝の聖慮を煩はした。【名義】文華は詩歌の秀逸なものを言ひ、秀麗は文字の如く秀で且つ麗しきことを意味する。【成立】序文によると、「凌雲新集」（弘仁五年）が出てから未だ四祀をこえず云云」とあるから、弘仁九年の成立である。なほ序中に藤原冬嗣の官位を正三位大納言と記してゐるが、彼は弘仁九年六月十六日に大納言となり、同日正三位に叙せられてゐるから、この集の成立はそれ以後といふことになる。【諸本】類從本以外に異本と認むべきものは見當らない。寫本としては神宮文庫・內閣文庫・靜嘉堂文庫等の所藏本がある。群書類從一二四・日本文學大系・古典全集等所收。【內容】「凌雲集」（別項）に漏れたもの、及びその後の詩を集めたものである。序文には作者二十六人、詩百四十八首、分つて三卷となすとある。二十六人は嵯峨・淳和兩帝を數へない數であるから實は二十八人であるが、詩は百四十三首で、今は五首を失つてゐる。それを次の十一門に部類し、官位による排列を廢した。

遊覽一四　宴集　四　餞別一〇　贈答一三
詠史　四　述懷　五　艷情一一　樂府　九
梵門一〇　哀傷一五　雜詠四八

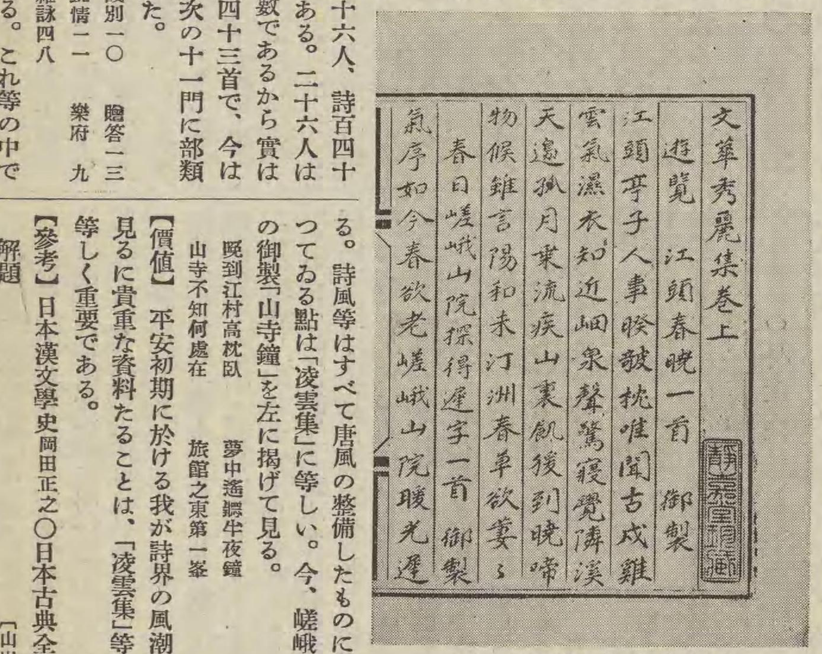
梵門は歌集に見る釋教に當る。これ等の中で作の最も多い詩人は嵯峨帝を第一とする。即ちその三十四首に次ぎ、巨識人の二十首、仲雄王の十四首等である。しかし當時の著名な詩人は殆ど網羅せられてゐる。又それ等を詩の形態上から見れば、五言の五十二首、七言の七十九首、雜言の十二首の關係は「凌雲集」に於けるものとほぼ同じである。即ち唐詩の感化により七絕の流行が盛んである點や、長篇のものの比較的多い點は一特色である。姓名を支那風に三字を用ひたことは、唐風の影響と認むべく、この集に始まる。即ち良岑安世を良安世、巨勢識人を巨識人の如き例である。詩風等はすべて唐風の整備したものに倣つてゐる點は「凌雲集」に等しい。今、嵯峨帝の御製「山寺鐘」を左に揭げて見る。

暝到江村高枕臥　夢中遙聽牛夜鐘
山寺不知何處在　旅館之東第一峯

【價値】平安初期に於ける我が詩界の風潮を見るに貴重な資料たることは、「凌雲集」等と等しく重要である。

【參考】日本漢文學史　岡田正之〇日本古典全集解題

【山岸】



文華秀麗集（靜嘉堂文庫藏）

文化主義（ぶんくわしゅぎ）　【解說】文化を以て社會生活の最高標準とする思想であつて、桑木巖翼博士によつて初めてこの語が用ひられた。この主義は、廣義の自然主義に對する思潮であつて、換言すれば、現實主義或は實證主義に對する一種の理想主義である。抑々文化とは、種々の意味に使用されてゐる語であつて、これを單に衣食住といふ物質的・經濟的意味に解すれば、文化主義とは、その發達進歩を意味し、知的生活を文化と言ふならば、文化主義は知識の發達を促進せんとする運動と言はるべく、又文化とは、人生の極致の謂ひであるならば、藝術活動・宗教・政治・道德の向上を意味するものとなるのであるが、これ等は、何れも部分的の解釋に止まるもので、實際の文化主義は、人間の物心兩面に亙り、その綜合的發達を齎らさうとする思想運動である。この語は、日本に於て生れた言葉であつて、これに當る外國語の適當なものはないが、獨逸語のクルツール（Kultur）、或は英語のシビリゼーション（Civilization）等に似た語である。而して一般に、シビリゼーションは、外面的生活即ち殖產・工業・法律等の進歩を意味し、クルツールは內面的生活、即ち藝術・宗教・學術等の進歩を意味するが如く解されてゐるが、文化主義は、その兩方面を綜合的に促進せしめんとするが故に、クルツールはシビリゼーションの上位にあるものと言ふことが出來る。故に更に換言すれば、在來主張されて來た現實主義と理想主義とを綜合統一して、兩者の長を採り、短を除いて、社會生活の最高標準に到達せしめんとする運動であるとも言ひ得るのである。故に文化主義は、明確を尊ぶ理知的現實主義と、內面から、主觀から、外面や客觀に向つて働く力を尊重する理想主義とを、嚴格に綜合統一せんとする思想であると斷ずることが出來る。この主張は、桑木博士の外に、金子馬治・左右田喜一郎・土田杏村等に依つても提唱されたのであつて理論的には、現實・理想の兩主義の嚴格な綜合統一を圖るのであるが、實際的には、大正十四五年前後、理想主義が現實主義、殊に實證主義・社會主義のために壓倒されるほど、一般の思潮が現實主義に偏してゐるのを、均衡の狀態に復せしめんとする運動となつて現はれたのである。但しその目的は、飽くまでも理想・現實の兩主義を綜合的に取り入れて、最高標準に達せんとするのであるから、これを哲學的に言へば、文化主義とは眞・善・美・聖の絕對的價値を標準とする說であると言はねばならない。

【宮島】

文机談（ぶんきだん）　音樂書　五卷九册【著者】文机房隆圓【成立】弘安年間【諸本】柳原伯爵家藏本は五卷九册本である。元祿十四年三月十二日の奥書があつて、慈鎭和尚の筆蹟の由を述べて居り、次に天保六年夏の、隆光の中納言公久所持本を以て書寫した由の奥書と、天保十年八月に源宰相有長本（實雅・宗助・季良朝臣本）と校合したといふ奥書がある。伏見宮御藏本は二卷殘存するのみで、柳原本と異同出入が甚だ多い。一が初稿本、一が精選本であるからであらう。柳原本は大正六年珍書同好會で三册本に雕刻された。【解說】琵琶のことを主として、その起原・傳來、名器の來歷等より、箏・笛等の樂器や今樣催馬樂朗詠等の歌謠に關すること、種々の音樂上の逸話を記したものである。殊に隆圓の師なる孝道とその傳流に關しては詳悉を極めてゐる。全體の構想は、「大鏡」を摸倣したらしく、隆圓が一夜

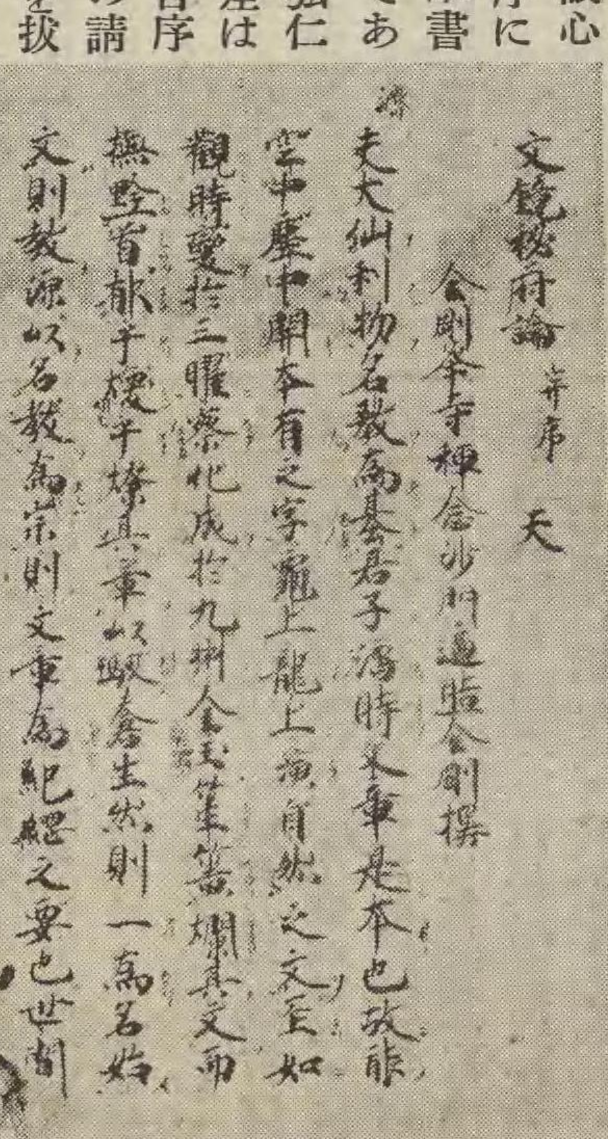
仁王堂に詣で、中川のほとりなる尼の請によつて、琵琶の相承の事を語り明かしたといふ尼との對話になつてゐる。本書はもと六卷あつたらしく、著者の跋文に、六卷の由記してゐるが、今世に傳はるものは五卷で、卷二以下は初末の二册に分け、卷一のみは一册であるが、卷首が缺けてゐる故、これももと二册であつたのであらう。また卷二以下も脫簡・缺失のところが多く、完備した本ではない。その脫漏の箇所は、手鑑古筆類の中から補はれるものがある。各卷の初めに目錄を加へて內容を示した。卷一不明、卷二四十七條、卷三八十一條、卷四五十八條、卷五七十四條より成る。隆圓の奧書によるに、本書は文永年中(四年以後)に原稿成り、その後本文を增補したと見えて、弘安六年の事なども見えるから、弘安の末に成つたものであらう。【價値】樂書として、世に知られざる傳說を含んでゐる點で、價値あることは云ふまでもないが、歌謠の研究には、卷三に朗詠の成立を說き、知足院が九十句を撰んだことや、源家・藤家の系圖を記してゐるのも、「郢曲相承次第」(別項)や「神樂血脈」「催馬樂師傳相承」等に載せた兩家の系圖とも違つたところがあつて、參考に價する。「梁塵祕抄」(別項)や、「沙羅林」(法文歌參照)「小柳」(別項)「鬪の神」「瀧の水」(この二項「足柄」參照)等の名も見えてゐる。

【備考】「看聞御記」應永二十八年六月十四日の條に、文机談が引用せられてゐて、その文章は柳原本になく、伏見宮御本にあるものである。著者隆圓の傳記は不詳であるが、本書の最初に自傳めいた事を述べてゐる。〔藤田〕

文教温故 ぶんけうをんこ 隨筆 二卷二册【著者】山崎美成【刊行】文政十一年【解說】德川幕府以前に於ける學問教育の起原及び沿革を「六國史」「古事記」「學令」「政事要略」「公式令」「江家次第」「拾芥抄」「異制庭訓往來」「空華日工集」、その他の諸書幷に記錄類に據つて考說したもので、我が古代教育史の參考になる。その目次を舉げると、(上卷)第一文學の篇に、學規・大小經・四道儒・律令格式・武備・爛脫・折桂・燈油料・程朱學・新舊二義の目を收め、第二學校の篇に、釋奠・文宣王の目を收め、第三經籍の篇に、始傳二經典一五經・十三經・老莊爲レ經・四書・孝經・讀書始用二孝經或千字文一・孟子非レ經・佚書存二吾邦一・書册の目を收め、第四訓點の篇に、點圖・遠古止點・法家點圖・御書始調二進點圖角筆一・訓點・朱墨兩點・返點・須弖假名・濁點・朱引の目を收め、第五讀法の篇に、經傳古訓・名目・漢音吳音・對馬音の目を收め、(下卷)第六文字の篇に、上古無二文字一・新字・和字・省字・偏旁之稱・假名・片假名・伊呂波・伊呂波終書二京字一・以二難波津淺香山一歌二爲二書學始一・假名書之用意・鷹手歌繪の目を收め、第七文章の篇に、平出闕字・闕畫・年號・和文・假名遣・書翰の目を收め、第八詩賦の篇に、詩賦起原・詩話・詩會・聯句・掩韻の目を收め、第九和歌の篇に、和歌・抄物・制詞・連歌・和漢聯句の目を收め、第十印版の篇に、古刻多二佛經一・儒書・始刻二醫書一・活字版等の目が收められてある。〔和田〕

文教温故批考 ぶんけうをんこひかう 隨筆 二卷【著者】狩谷望之・屋代弘賢【諸本】國書刊行會の「百家隨筆」第三所收。【解說】山崎美成の著「文教温故」(別項)中の誤妄を難じたものであるが、卷一は狩谷棭齋の撰、卷二は屋代輪池の作で、ともに五六則から成る小册である。「文教温故」を手にする人は必ず參照すべきものである。〔和田〕

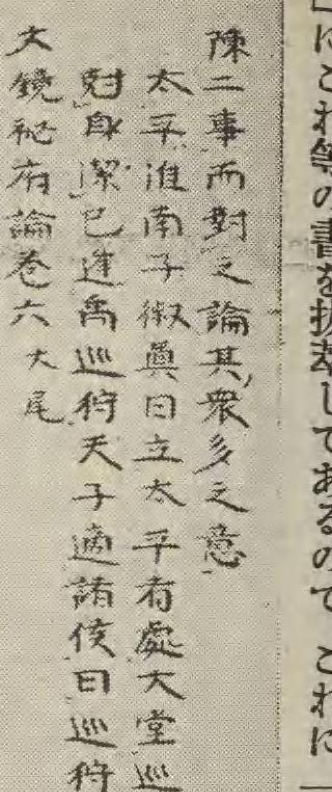
文鏡祕府論 ぶんきやうひふろん 詩文評論 六卷【撰者】釋空海【名義】文の手鏡、祕書の府の義、卽ちこの書は衆典を閱し、その要領を輯めて手鏡となしたもので、なほこれ祕書を藏する所の府の如きものであるとの義である。【成立・由來】成立年代は詳かでないが、凡そ弘仁十・十一年頃であらう。この書の初めに、金剛峰寺禪念沙門遍照金剛撰とあるが、金剛峰寺は弘仁十年の建立に係るので、本書の製作も亦弘仁十年已後のものであらう。然るに又この書の要を抄撥したものに「文筆眼心抄」(別項)と云ふのがある。「眼心抄」の成立年代は、その自序に弘仁十一年中夏とある。本書は勿論、これより前の作であらねばならぬ。故に大體弘仁十年か、十一年と見て大差はあるまい。製作の由來は自序に據ると朝野、好事の士の請に應じ、諸家詩文の格式を拔萃して、この書を作つたものである。【諸本】寫本として現存するものには、宮內省圖書寮所藏本(平安朝中期頃の寫本)・栂尾高山寺所藏本(一本は、長寬三年三月十六日の日附あり、且つヲコト點を附す。一本は無年號無點本)・高野山三寶院所藏本(平安末期頃の寫本)・その他高野山正智院・寶壽院・寶龜院所藏の端本など數種がある。圖書寮に藏せらるゝものの複寫本は、近頃東方文化研究所から發行せられてゐる。その他刊本には坊間の三册本、弘法大師全集本などがある。刊本は誤脫頗る多き故、古寫本により校勘して讀むべきである。【內容】六朝及び唐時代の諸家の詩文の評論・格式を論じたものである。卽ち沈約の「四聲譜」、劉善經の「四聲指歸」、王昌齡の「詩格」、釋皎然の「詩式」「詩評」「詩議」、崔融の「唐朝新定詩格」、元兢の「詩髓腦」「古今詩人秀句」、陸機の「文賦」、劉勰の「文心雕龍」、殷璠の「河岳英靈集」等につき、異同を勘し、重複を去り、その樞要を取りて、これを聲譜・調聲・八種韻・四聲論・十七勢・十四例・六義・十體・八階・六志・二十九種對文・三十種病累・十種疾・論文意・論對屬等の類に分ち評論したものである、今これを卷數編次と對照すれば次の如くである。〔天〕卷第一、調四聲譜・調聲・用聲法式・八種



文鏡祕府論（高野三寶院藏）

韻・四聲論。〔地〕卷第二、十七勢・十四例・十體・六義・八階・六志・九意。〔東〕卷第三、論對・二十九種對・筆札七種言・句例。〔南〕卷第四、論文意・定位・文賦。〔西〕卷第五、論病・文二十八種病・文筆十病得失。〔北〕卷第六、論對屬・句端・帝德錄。このうち聲譜・調聲・用聲法式・八種韻・四聲論・論病・文二十八種病・文筆十病得失等は、四聲及びその文學上の運用を論じたるもの、論對・二十九種對・論對屬等は對屬を論じたるもの、その他は詩の格式、文筆體裁等を論じたるものである。【價値】本書に引用された書物は、皆正史や「日本國見在

書目錄」「文獻通考」などにその書目が見え、何れも支那文學史上大なる價値を有し、當時の詩文を研究するには絕好の參考書となるべきものである。然るにこれ等の原書は、今日殆ど湮滅して見ることが出來ない。幸に「祕府論」にこれ等の書を拔萃してあるので、これに



輯せる「文鏡祕府論冠註」十五卷とがあるが、行願の冠註は今存佚詳かならず、維寶の箋は先年高野山持明院よりその足本が出た。箋は博引旁證で、「祕府論」の研究には最も資益するところが多い。

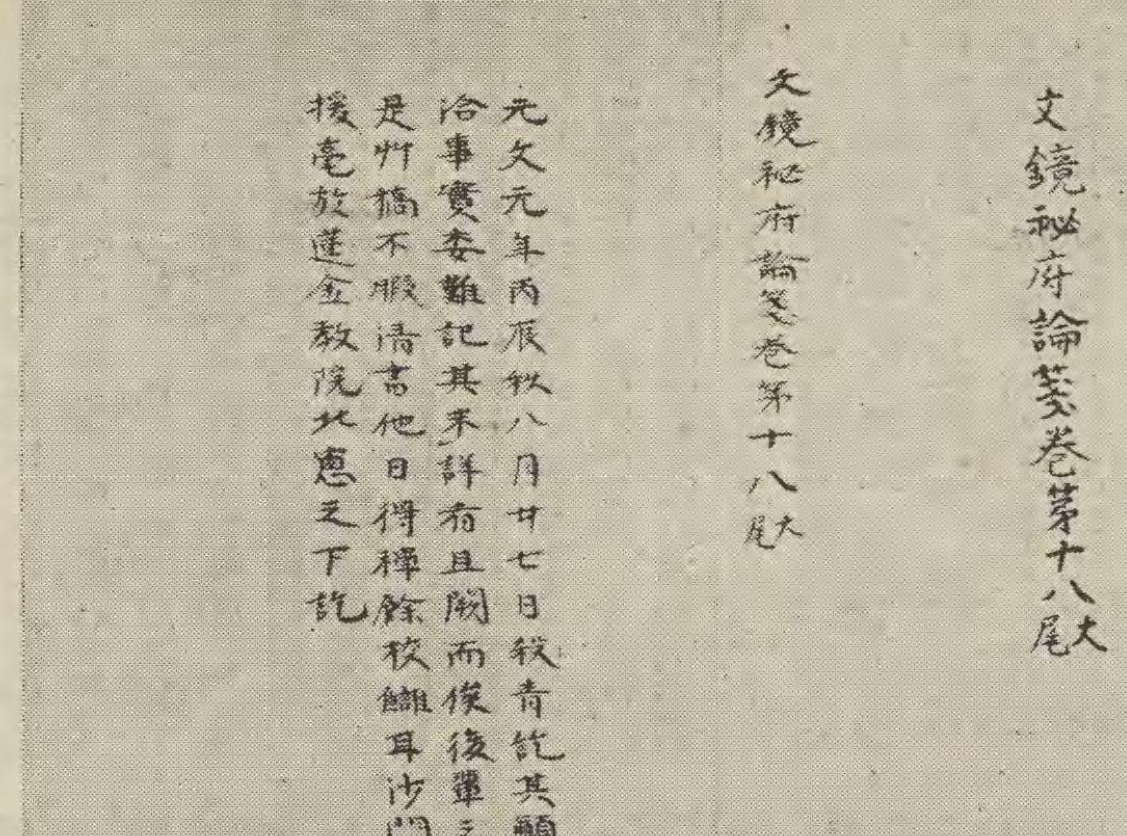
【參考】弘法大師の文藝 內藤湖南(弘法大師と日本文化) ○文鏡祕府論の引用書に就いて 加地哲定(密教研究二四) ○文鏡祕府論概說 加地哲定(密教研究二六・二八) 〔加地〕

べきことを論じ、狹量な儒家氣質を排斥し、「日本の風俗にそむき、もろこしの古禮を用捨なく今の世に行はんとする」のひがごととなることを力說してゐる。漢詩や和歌は、性情をやしなふものとして尊重したが、修養といふ點から主としてみてゐて、才のある人はつくるがよいが、凡才はつくるよりも却つてよき詩歌を吟詠する方がよいといふやうに論じ、現代、日本といふやうなことを重大に考へた彼は、漢詩よりも却つて和歌の方に好意をよせてゐることなども注意すべきであるが、全

で、さうした意見のみられることも特筆すべき點である。彼には、この外に古來の歌書を抄出大成した「和歌紀聞抄」の如き著もある。これ亦、漢學者の歌論書として、注意すべき記述に富んでゐる。(益軒參照) 〔藤川〕

文藝界 ぶんげいかい 雜誌【創刊】明治三十五年三月、金港堂。【解說】金港堂の全盛期に、博文館に對抗して發行した五大雜誌のうちの一であつて、金港堂のものとしては、「都の花」(別項)に次ぐべき比較的生命の長い雜誌であつたが、それでも六ケ年內外で發刊になつた。

書目錄」「文獻通考」などにその書目が見え、何れも支那文學史上大なる價値を有し、當時の詩文を研究するには絶好の參考書となるべきものである。然るにこれ等の原書は、今日殆ど湮滅して見ることが出來ない。幸に「祕府論」にこれ等の書を拔萃してあるので、これに依つてその原書の面目を窺ひ知ることが出來る。從つて當時の詩文を研究するには、本書は最もよき參考書で、支那文學史上大なる價値を有するのである。


陳二事而對之論其衆多之意
太平淮南子淑眞曰立太平有處大堂巡狩易林日
對與深已遠高巡狩天子適諸侯曰巡狩也
文鏡祕府論卷六大尾
文鏡祕府論箋卷第十八大尾
文鏡祕府論箋卷第十八大尾
元文元年丙辰秋八月廿七日校青訖其顛末傳
洽事實委難記其未詳有且闕而俟後筆之秀穀
是州橋不暇淸書他日得禪餘校讎耳沙門維寶
撥亀放蓮金教院北惠之下記

文鏡祕府論箋卷第十八（高野山持明院藏）

【註釋書】古來、高野山蓮金院維寶の編輯せる「文鏡祕府論箋」十八卷と小野寶持院行願の編輯せる「文鏡祕府論冠註」十五卷とがあるが、行願の冠註は今存佚詳かならず、維寶の箋は先年高野山持明院よりその足本が出た。箋は博引旁證で、「祕府論」の研究には最も資益するところが多い。

【參考】弘法大師の文藝　內藤湖南（弘法大師と日本文化）○文鏡祕府論の引用書に就いて　加地哲定（密敎研究二四）○文鏡祕府論概說　加地哲定（密敎研究二六・二八）　〔加地〕

文訓　ぶんくん　敎訓書　一卷　【著者】貝原益軒　【刊行】享保元年。【諸本】益軒全集卷三・益軒十訓（有朋堂文庫）所收。【內容】士は農工商の上に立つもので、萬事に通曉せねばならぬ。讀書學問をして本を勸め、藝術を學んで末に達せねばならぬ。學問は四書六經を專らとし、史學と諸子に及ぶべく、藝術は六藝・文武の法を學ぶべきであるとなし、學問の意義・價値・順序・範圍・方法・態度等に關して敎諭したものである。特に注意すべきは、多く書を讀み、詩文を作るだけでは眞の學問ではない。時代に適合して民用を重んずべきであるとし、訓詁の末に流れ、或は徒らに理義を談ずるの徒を排したことである。また「後世の儒者、いまだ見識なくして、みだりに佛をそしり人と爭ふは、ひがごとなり」といひ、論爭をつゝしむべきことを諭し、狹量な儒家氣質を排斥し、「日本の風俗にそむき、もろこしの古禮を用捨なく今の世に行はんとする」のひがごとなることを力說してゐる。漢詩や和歌は、性情をやしなふものとして尊重したが、修養といふ點から主としてみてゐて、才のある人はつくるがよいが、凡才はつくるよりも却つてよき詩歌を吟詠する方がよいといふやうに論じ、現代、日本といふやうなことを重大に考へた彼は、漢詩よりも却つて和歌の方に好意をよせてゐることなども注意すべきであるが、全體としては歌學の傳統を徇び、進歩的な意見は見られない。【價値】近世儒者として一方の雄であつた著者は、社會敎育家としても重んずべく、この書及びその他の家訓・君子訓・養生訓等、所謂「益軒十訓」（別項）の如きは、平易な假名交り文で、處世の大道を訓へたものとして廣くよまれたのである。本書は、人として學問の必要なることを諭し、勉強の方法を懇切に反覆して敎へてゐる。序を書いてゐる竹田定直も、重複した箇所の多いことを言つてゐるが、この重複の多いことは、著者の「人を導くにあつきの深志」のあらはれではあらうが、やゝ冗漫で、くどいといふ感じがないではない。が、部分的にみると、その筆致は平易率直でよく意が徹つてゐる。蓋し漢學者の書いた和文としての代表的な隨筆であらう。著者は國學及び和歌に對しては、專門家ではないが、漢學者としては最もよき理解をもつた人で、さうした意見のみられることも特筆すべき點である。彼には、この外に古來の歌書を抄出大成した「和歌紀聞抄」の如き著もある。これ亦、漢學者の歌論書として、注意すべき記述に富んでゐる。（益軒參照）　〔藤川〕

文藝界　ぶんげいかい　雜誌　【創刊】明治三十五年三月、金港堂。【解說】金港堂の全盛期に、博文館に對抗して發行した五大雜誌のうちの一であつて、金港堂のものとしては、「都の花」（別項）に次ぐべき比較的生命の長い雜誌であつたが、それでも六ケ年內外で廢刊になつた。當時山口高等學校敎授の職にあつた佐々醒雪（別項）を招聘して編輯主任とした。創刊號には逍遙・鷗外・紅葉・篁村・露伴・柳浪・鏡花、その他當時の文壇に雄視した人々の作品を集めて異彩を放つた。殊に兩々對峙して下らざるの觀あつた露伴・紅葉を一堂に會せしめ、その寫眞を卷頭に掲げたのは雜誌界の驚異であつた。その頃、文藝雜誌として雄視してゐた「新小說」「文藝倶樂部」（各別項）に倣つた編輯ぶりであつたが、特記すべき程の長所もないため、次第に讀者を減じ、內容も寂びれて行つた際、

文藝界（創刊號）

澎湃として全文壇を襲へる自然派文學の激流に會ひ、支ふることが出來ないで廢刊して了つた。（齋藤（昌））

文藝科學（ぶんげいくわがく）「文學論」を見よ。

文藝家協會（ぶんげいかけふくわい）【所在地】東京京橋木挽町五ノ四【成立】大正十五年一月、既に在つた小説家協會と劇作家協會を合併して設立された。【内容】會員の親睦と共濟を計り、その福利增進を目的とする。更に細目に亙れば、著作權の確立擁護・原稿執筆・出版・上演・放送・講演・撮影・吹込等の契約に關する條件の改善、不當なる檢閲に對する抗議、著作權法、その他著作家に關係ある法規の改善運動、著作家の職業及び生活に關係する權益の獲得增進、必要に應じては救濟資金の募集その他の方法による會員の互助等に分たれ、昭和六年六月、協會規定を改正して職業文學家以外の人々をも會員とすることになつた。昭和九年三月現在の會員は二百四十五名である。【事業】昭和六年に、大正十五年以來努力しつつあつた著作權法改正問題に成功した外著作權・興行權の盜竊、原稿料問題、檢閲問題等に活動して成績を擧げた。每年一回「文藝家協會年鑑」を發行してゐる。（千葉）

文藝學（ぶんげいがく）「文學論」を見よ。

文藝協會（ぶんげいけふくわい）演劇團體【由來】島村抱月（別項）が海外留學より歸れるを機とし、坪内逍遙（別項）は早稻田大學文科の刷新を策すると共に、一方一般文藝界の革新を志し、明治三十九年一月、同志と謀つて文藝協會を創始した。會頭に大隈伯、賛助員に當代の名流を擁し、「わが文學美術演藝の改善進歩及び其の普及を計り、以て社會の風尚を高むると共に、國勢の勃興に應ずべき文運を振作する」を趣旨とし、機關雜誌として「早稻田文學」を再刊した。即ち文藝協會は元來は演劇を主體とする結社ではなく、演劇刷新・舊演藝研究等は、その目的の一部たるに過ぎないものであつた。併し同年二月紅葉館に於ける發會式の餘興に、その演藝部の土肥春曙・東儀鐵笛（各別項）等が逍遙の「妹山脊山」「沓手鳥孤城落月」を演じたのを手始めに、中心たる逍遙が年來演劇改善の理想を抱懷し、更にその指導の下に研鑽を重ねた後進が實際方面への進出を望んでゐた折柄とて、この會の主力も自然演劇の上に注がるゝに至つた。かくて十一月歌舞伎座に於ける文藝協會第一回大會には、「桐一葉」「ヹニスの商人」、歌劇「常闇」が試演され、翌年十一月の同第二回大會には、「大極殿」「ハムレット」「浦島」の試演となり、その舞臺上の新運動は、劇界に大なる衝動を與へて新機運の招來に資するところ多かつた。而して劇壇の情勢も漸く急に、帝國劇場の女優養成、藤澤淺二郎の東京俳優學校設立等もあり、文藝協會も當來の活動に備ふべく、明治四十二年坪内邸内に附屬演劇研究所を開き、男女二十名の學生を募集して新しき演技者の育成に努めた。そして既に身を挺して專念演劇の革新に當るべく決意した逍遙は、それ等學生を率ゐて宿志の實現に全力を盡すこととなり、明治四十四年二月文藝協會の組織を革めて純然たる演劇團體となし、自ら會長として新劇運動の第一線に立つことになつたのである。【沿革】新しき文藝協會は、專ら「劇界の刷新を計り、時代に適應すべき藝術を振興すると共に社會の風尚を高むる」を以て目的となし、まづ根本的に俳優の養成から始めてこれに十分の薫陶を施した上、學校内の私演より順次社會的な公演へ進む方針の下に、眞に理想的な出發をなしたのである。明治四十四年五月開場間もなき帝國劇場に於ける第一回公演には、坪内博士飜譯竝に指揮の沙翁劇「ハムレット」を上場した。これは附屬演劇研究所生徒の卒業成績とも見做すべきもので、土肥・東儀の講師を中心に、森英治郎・加藤精一・佐々木積・横川唯治及び松井須磨子・山川浦路・林千歳等が初出演し、出し物について兎角の論議はあつても、その研究的な演出と彼等の新樣式の科白とは識者に賞讃され、一週間の興行が滿員續きの盛況を呈した。併し同年九月研究所内の試演場の舞臺開きに、イプセン作島村抱月譯竝に監督の「人形の家」を私演し、更に十一月帝劇に於ける第二回公演にも、「ヹニスの商人」法廷の場と、逍遙作新舞踊三種と共にこれを上場したところ、ノラに扮した松井須磨子の演技が多大の好評を博し、世に新しきスタアの出現を唄はれると同時に、この作品は當時の社會の思想的にも一衝動を與へたのである。翌四十五年五月有樂座に第三回公演としてズウダアマン作島村抱月譯「故郷」を上演したが、この通俗的な作品で須磨子はノラに倍する成功を見せ、興行的にも非常な好成績を收め得た。その大人氣の後を承けて大阪への出張公演を果たし、同六月試演場でバアナアド・ショウ作楠山正雄譯「運命の人」、逍遙作「骨董熱」及び新舞踊劇の私演を行つた。それより十一月には第四回公演としてショウ作松居松葉譯「二十世紀」、更に翌大正二年二月第五回公演マイステル・フェルステル作松居松葉譯「思ひ出」をいづれも有樂座で上場したが、それ等世俗の好尚に投ずる傾きの出し物は、新劇支持者の期待に背くものとして不評を以て酬いられた。而もこれより先、沙翁劇を新しき國劇樹立への道程となし、兼ねて社會風教のために資せんとする逍遙の演出方針は、折柄の自然主義文學運動に際會して飽く迄も近代劇中心に進まんとする急進分子の主張と最初から扞格を生じ、演目の低調化に對して内部的にも反對が叫ばれてゐた。かゝる意見の疎隔に依り、首腦たる島村抱月の如きも漸次當面の運動から手を引きつつあつたが、この「思ひ出」の上演に及び、四月遂に幹事を辭任し、加ふるに彼と戀愛問題を惹起した松井須磨子を協會は除名した。この内訌と混亂の裡に、逍遙譯沙翁劇「ジュリアス・シーザア」を以て帝劇に第六回公演を行つたが、これを最後として逍遙は決然文藝協會の解散を斷行し、邸内の試演場をさへ毀却して爾來直接新劇運動に關與する意を絶つに至つた。かくてその大成を世に待望されたに拘はらず、新組織以後僅か二年餘、公私演約十回にして文藝協會はその事業を終へたのである。【業績】併しその業績が自由劇場（別項）と並んで我が新劇運動に對して不可缺の礎を遺した偉勳は、永久に銘記せらるべきである。自由劇場が小劇場主義の研究劇に終始し、先驅的作品の上場に依つて劇壇の覺醒に努めた急進的態度に對し、文藝協會は大劇場主義を持して社會への進出を志し、廣く且つ根本的な劇界刷新を計るの途に出でたのである。「後者を素人に」して、前者が一時的の試演を行ふとは異り、後者は研究所に於て新技藝の職業俳優を養成すると共に、長期公演を敢てして自ら興行上の革正にも當つたのである。ただその演目に就いて云へば、大に進取的だつたと云ふを得ず、當時にあつても非難の聲を聞き、「若い人達の發表機關にと云ふ、老婆心も手傳つた」ことは事實であつたらしいが、執筆者が多く純文壇畑の人々であり、また論文その他に、その頃、芽を出しかけた無産文藝に對して挑戰を試みた語調もあるため、無産文藝派に對立するための目的下にあるものと、多少世間に疑はしめた傾きがあつた。第三號には、江口・津田等のプロ作家を加へてから、次第にそれ等の世評は解消され、内容を單に純文藝のみの範圍に止めず、隨筆・實話などから、進んで經濟・政治・人物論・軍事・外交・社會・流行

これがために内部の破綻を來したほどで、自由劇場の如く新しき戯曲作家を刺戟し鼓舞するまでに至らなかつた。併し優秀なる俳優群を劇壇に送つて、直接その進展に貢獻した功績は、實に測るべからざるものがある。全く次期に於ける新劇運動は、殆んど協會出身者の手で行はれたと云ふも過言でない有樣だつた。即ち文藝協會は解散されると同時に三分され、一は島村抱月を主宰に松井須磨子を中心とする藝術座（別項）となつてまづ旗揚げし、一は森・加藤・横川・佐々木等、研究所卒業の少

た。創刊號巻頭の「文藝倶樂部略則」なる戯文にも斷つてある如く、この雜誌は、その以前に博文館が發行してゐた「明治文庫」「春夏秋冬」「世界文庫」「逸話文庫」「文藝共進會」等の諸誌を打つて一丸としたものである。それだけに編輯方針は甚だ大衆的であつて、每號木版極彩色の口繪とか、各地の名勝寫眞、美妓の寫眞などを掲げ、讀者吸收に苦心した。又一方には會員制度を設けて讀者文藝を募り、又會員には徽章を渡すとか、地方には支部を設けるなどして、從來の投書家とは違つた意味の人々によつても知られる如く、石橋思案が

に一葉は本誌に「にごりえ」を掲げて以來認められたのであつて、その後も「經づくる」「やみ夜」「十三夜」「大つごもり」「われから」等を本誌に發表するに至つて、その作家としての地位が確立するに至つたのである。この點だけでもこの雜誌は明治文學史の中に特記されなければならない。なほ後年の自然派の巨頭を以て目された田山花袋の初期の作品、德田秋聲の處女作「藪柑子」などが、本誌に發表されてゐることも注意すべきである。以上に擧げた人々によつても知られる如く、石橋思案が

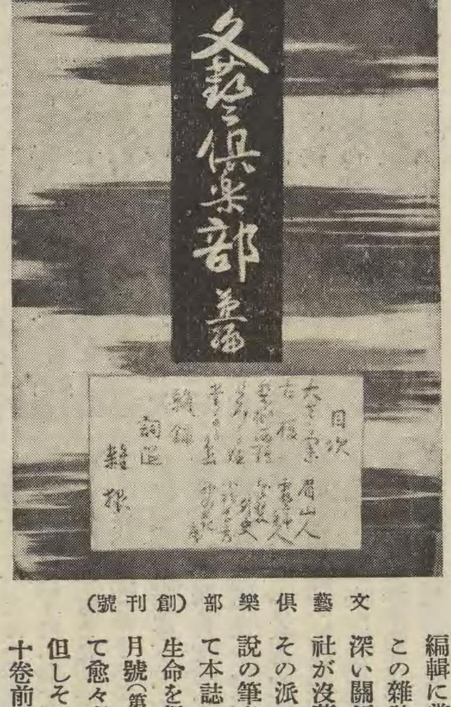
「文學論」を見よ。

文藝協會（ぶんげいきょうくわい）　演劇團體　【由來】島村抱月（別項）が海外留學より歸れるを機とし、坪内逍遙（別項）は早稻田大學文科の刷新を策すると共に、一方一般文藝界の革新を志し、明治三十九年一月、同志と謀つて文藝協會を創始した。會頭に大隈伯、賛助員に當代の名流を擁し、「わが文學美術演藝の改善進歩及び其の普及を計り、以て社會の風尚を高むると共に、國勢の勃興に應ずべき文運を振作する」當るべく決意した逍遙は、それ等學生を率ゐて宿志の實現に全力を盡すこととなり、明治四十四年二月文藝協會の組織を革めて純然たる演劇團體となし、自ら會長として新劇運動の第一線に立つことになつたのである。

【沿革】新しき文藝協會は、專ら「劇界の刷新を計り、時代に適應すべき藝術を振興すると共に社會の風尚を高むる」を以て目的となし、まづ根本的に俳優の養成から始めてこれに十分の薫陶を施した上、學校内の私演より順次成績を收め得た。その大人氣の後を承けて大阪への出張公演を果たし、同六月試演場でバアナアド・ショウ作楠山正雄譯「運命の人」、逍遙作「骨董熱」及び新舞踊劇の私演を行つた。それより十一月には第四回公演としてショウ作松居松葉譯「二十世紀」、更に翌大正二年二月第五回公演マイステル・フェルステル作松居松葉譯「思ひ出」をいづれも有樂座で上場したが、それ等世俗の好尚に投ずる傾きの出し物は、新劇支持者の期待に背くものとして不作品の上場に依つて劇壇の覺醒に努めた急進的態度に對し、文藝協會は大劇場主義を持して社會への進出を志し、廣く且つ根本的な劇界刷新を計るの途に出でたのである。「役者を素人に」して、前者が一時的の試演を行ふとは異り、後者は研究所に於て新技藝の職業俳優を養成すると共に、長期公演を敢てして自ら興行上の革正にも當つたのである。ただその演目に就いて云へば、大に進取的だつたと云ふを得ず、當時にあつても非難の聲を聞き、これがために内部の破綻を來したほどで、自由劇場の如く新しき戯曲作家を刺戟し鼓舞するまでに至らなかつた。併し優秀なる俳優群を劇壇に送つて、直接その進展に貢獻した功績は、實に測るべからざるものがある。全く次期に於ける新劇運動は、殆んど協會出身者の手で行はれたと云ふも過言でない有樣だつた。即ち文藝協會は解散されると同時に三分され、一は島村抱月を主宰に松井須磨子を中心とする藝術座（別項）となつてまづ旗揚げし、一は森・加藤・横川・佐々木等、研究所卒業の少壯者の組織せる舞臺協會となり、一は土肥・東儀を首腦として最も忠實に坪内博士の志を體した一團に依る演劇無名會となつて、各々特色ある活動を始めた。外に嘗て研究生だつた上山草人は、山川浦路と共に既に近代劇協會を興してゐたし、更に藝術座から脫退した澤田正二郎が後に新國劇（別項）を創めたなど、明かにその事實を語るものであらう。かくの如くして協會の事業は半途にして中絶されたけれども、それ等の劇團を通じて新劇の社會的進出も果され、大衆的演劇さへ次第に實現されて行つたわけである。

【參考】演劇刷新の必要及び其方法（坪内逍遙（逍遙選集）○明治大正新劇運動史（中村吉藏（日本文學講座）○新劇通（水木京太○明治大正新劇運動史（新演藝一〇ノ一）○演劇研究（昭和三ノ二）　【水木】

文藝倶樂部（ぶんげいくらぶ）　雜誌　【創刊】明治二十八年一月、博文館。【解說】博文館の五大雜誌の一。春陽堂の「新小說」（別項）と相對して當時に於ける有力な文藝雜誌であつた。創刊當時の編輯主幹は石橋思案で、巖谷漣山人・大橋乙羽・三宅青軒等がこれを輔佐してゐた。創刊號卷頭の「文藝倶樂部略則」なる戯文にも斷つてある如く、この雜誌は、その以前に博文館が發行してゐた「明治文庫」「春夏秋冬」「世界文庫」「逸話文庫」「文藝共進會」等の諸誌を打つて一丸としたものである。それだけに編輯方針は甚だ大衆的であつて、毎號木版極彩色の口繪とか、各地の名勝寫眞、美妓の寫眞などを掲げ、讀者吸收に苦心した。又一方には會員制度を設けて讀者文藝を募り、又會員には徽章を渡すとか、地方には支部を設けるなどして、從來の投書家とは違つた意味の投書家を吸收するに努めた。かゝる方針をもつて出發したこの雜誌が、次第に通俗な大衆雜誌に變つて行つたことは當然の成行といはなければならないが、それでも創刊當初の數年間は、文藝的價値のかなり高いものであり、文壇への寄與も尠くはなかつた。例へば泉鏡花の「夜行巡査」「外科室」「化銀杏」「一之卷」以下の諸作、樋口一葉の「にごりえ」「たけくらべ」、江見水蔭の「女房殺し」「泥水清水」、廣津柳浪の「今戸心中」、小栗風葉の「寢白粉」等の諸名作は、皆本誌を飾つたものであつた。殊に一葉は本誌に「にごりえ」を掲げて以來認められたのであつて、その後も「經づくゑ」「やみ夜」「十三夜」「大つごもり」「われから」等を本誌に發表するに至つて、その作家としての地位が確立するに至つたのである。この點だけでもこの雜誌は明治文學史の中に特記されなければならない。なほ後年の自然派の巨頭を以て目された田山花袋の初期の作品、德田秋聲の處女作「藪柑子」などが、本誌に發表されてゐることも注意すべきである。以上に擧げた人々によつても知られる如く、石橋思案が編輯に當つてゐた關係上、この雜誌は硯友社の人々に深い關係があり、後に硯友社が沒落してからも、なほその派の人々が通俗的な小說の筆を執つてゐた。而して本誌はその後三十餘年の生命を保つて、昭和八年一月號（第三十九卷第一號）を以て愈々廢刊するに至つた。但しその文藝的價値は第二十卷前後までと見なければならない。



（創刊號）

【齋藤（昌）】

文藝春秋（ぶんげいしゅんじう）　文藝雜誌　【創刊】大正十二年一月。菊池寛主宰、文藝春秋社。【解說】創刊の辭に、「私は頼まれて物を云ふことに飽いた。自分で考へてゐることを讀者や編輯者に氣兼なしに、自由な心持で云つて見たい。友人にも、私と同感の人々が多いだらう。（中略）一には自分のため、一には他のため、この小雜誌を出すことにした」とある。創刊號の執筆者は、芥川・菊池・中戸川・川端・今・横光・直木・三上・小島等の十九名で、主として「若い人達の發表機關にと云ふ、老婆心も手傳つた」ことは事實であつたらしいが、執筆者が多く純文壇畑の人々であり、また論文その他に、その頃、芽を出しかけた無産文藝に對して挑戰を試みた語調もあるため、無産文藝派に對立するための目的下にあるものと、多少世間に疑はしめた傾きがあつた。第三號には、江口・津田等のプロ作家を加へてから、次第にそれ等の世評は解消され、内容を單に純文藝のみの範圍に止めず、隨筆・實話などから、進んで經濟・政治・人物論・軍事・外交・社會・流行等、趣味と知識を兼ねた一般記事を集めるやうになつて、その興味の多い内容と編輯法の獨創が雜誌界に一種の生面を拓き、今日に及んでゐる。編輯者は齋藤龍太郎・佐佐木茂索・菅忠雄等その他。菊池寛の卷末言、直木三十五の文壇諷刺、芥川・横光の作物及び座談會・投稿記事等、その折々の文壇の中心問題となつた題材が多かつた。因みにこの雜誌が創刊當時、定價十錢といふ破格の廉價であり、その結果他の諸雜誌の定價引下げを將來した功績は特筆してよい。　【千葉】

文藝戰線（ぶんげいせんせん）　雜誌　【創刊】大正十三年六月、文藝戰線社。【解說】一面「種蒔く人」（別項）の更生であると共に、他面日本プロレタリア藝術運動が、目的意識的鬪爭組織への質的轉換をなす重大な契機をなした母胎である。この飛躍・發展が具體化したのは、同人青野季吉の「目的意識論」（大正十五年九月）である。この論文はプロレタリア藝術家が自然成長的な觀方や氣分の中に閉ぢこもつてゐる傾向を否定し、創作活動に於ける目的意識性の必要を强調したものである。本誌は當時、日本プロレタリア藝術運動の唯一の機關であ

つたが、大正十四年十二月、グループ以外反ブルジョア作家・批評家・左翼的無名青年作家を網羅し、「日本プロレタリア文藝聯盟」を結成した。昭和二年六月、指導理論の相違から靑野季吉・前田河廣一郎・金子洋文・小牧近江等が聯盟を脫退し、「勞農藝術家聯盟」を組織して依然「文藝戰線」を發行した。更に數ケ月にして又も指導理論上の大衝突から、藤森成吉・村山知義・藏原惟人・佐々木孝丸等が脫退、「前衞藝術家聯盟」を組織したが、殘留組はなほ同誌を發行、昭和七年六月まで繼續し（昭和六年一月以降「文戰」と改題）、「左翼藝術家聯盟」（機關紙「レフト」）に發展解消した。【批評】「目的意識論」によつて從來の非政治意識を打破し、後年のプロレタリア文藝運動の礎石となつたと共に、狹義の政治鬪爭の埒內に解消せしめんとする極左政治主義を淸算し、山川均・荒畑寒村等の「共同戰線黨論」を支持し、福本主義と鬪ひ、勞働者・農民等の生活意識に根ざし、而も全無產階級運動の進展と步調を合一したプロレタリア・リアリズムの大道に立脚し、多くの作家・批評家を產んだ。（プロレタリア文學・種蒔く人參照）　〔小牧〕

文藝叢書（ぶんげいそうしよ）　十二册【編纂・校訂】幸田露伴・饗庭篁村・塚原澁柿【刊行】大正元年より同三年に至る。博文館【解說】博文館の國漢文各種の叢書の一として刊行されたものであるが、この叢書名は一般的ではない。隔月一卷づつ發行されたものである。內容は次の如くである。

〔第一卷〕忠臣藏文庫。〔第二卷〕椿說弓張月・俊寬僧都島物語・賴豪阿闍梨怪鼠傳。〔第三卷〕西鶴文集。〔第四卷〕道中膝栗毛全集。〔第五卷〕俠客全集。〔第六卷―八卷〕南總里見八犬傳。〔第九卷〕演劇脚本集。〔第十卷〕忠義復讐傳。〔第十一卷〕紀行文編。〔第十二卷〕世話淨瑠璃名作集。

校訂に於て多少の難色のあるのは甚だ憾みとすべきであらうが、近世文學勃興の一助をなした功績は否むべきではあるまい。〔土井〕

文藝批評（ぶんげいひひやう）「文學論」を見よ。

文藝百科全書（ぶんげいひやくくわぜんしよ）　辭書一册【編輯者】早稻田文學社（代表島村抱月）。楠山正雄責任編輯【刊行】明治四十二年、隆文館。【解說】文藝辭書を標榜する辭書は、我が國に於ては本書を以て嚆矢とする。明治三十九年の企畫に係り、雜誌「早稻田文學」を母胎とし、約三年の日子を費し、「文藝全般の知識を網羅」するために二千頁の大册の中に二千六百三十七項目を解說した。自然主義文學の隆盛時に當り、文藝熱の熾烈な時代であつた。文學の理論を初め、東西兩洋に於ける各國の文學史、文學作品の解題、演劇・音樂・繪畫・彫刻等の各方面に及ぶ尨大なる內容は、あまりに野心的にすぎて往々力の足らぬ憾みもあるが、當時の專門家の最高知識を發揮したものだけに、單に文學史的に觀察するのみでも尊敬に値する。

〔內容〕「古今東西に亙る一大文藝論及び文藝史の體系を完成」せんとするもので、第一部、文藝概論・文學、第二部、演劇・音樂・美術（繪畫・彫刻・建築・裝飾美術）・美學、第三部、解題、第四部、文藝家人名辭彙（一五六頁）の四大部門に分れ、各部は初めに理論・解說、次に歷史を述べ、歷史は時代を主としてこれに作家との關係を記してゐる。文學の部を見ると、日本・支那・印度・ヘブライ・アラビア・ギリシア・ローマ・イタリア・フランス・ベルギイ・イスパニア・ポルトガル・イギリス・アメリカ・ドイツ・オランダ・スカンディナギア・ロシア・ポーランド・ハンガリーの各國文學史及び日本の現代文學、更に聲音・言語・修辭及び神話學に分れる。第三部の解題は簡單ではあるが、東西兩洋の小說・演劇・音樂・繪畫・彫刻・建築の主なるものを擧げて說明してあるのは、文藝入門書として又一種の備忘錄たるの役目を果すものである。〔土井〕

文藝類纂（ぶんげいるゐさん）　八册【編者】榊原芳野【刊行】明治十一年、文部省。【解說】ここに云ふ文藝とは今日の意味と異り、いはゆる學問といふ單純な內容であつて、廣義に解すれば一種の文學史とも見られる。何れにせよ、當時の西洋文明の影響を受けて我が文化を再認識し、これを體系づけようとした運動の一つの現はれであつて、文部大書記官西村茂樹の發案するところである。內容は字志（第一・二卷）、文志（第三・四卷）、學志（第五・六卷）、文具志（第七・八卷）に分れ、字志に於て平假名・片假名・五十音圖・日文等の發生を論證し、併せて簡易な國語學史の一斑を示し、文志は文章史であつて、古文・祝詞祭文・宣命等を引例說明し、漢文に就いて述べてゐる。學志に於ては儒學・國學・書學・畫學・醫學・藥物學・暦學・漏刻學・天文學等の諸項目を、和漢の古典により極めて簡易な記述をしてゐる。文具志は紙・筆・硯・墨・刻本・製本に就いて、各々簡略な沿革及び製造法等に及び、北爪有鄉・狩野良信の摸寫による挿繪を入れてゐる。〔土井〕

文獻學（ぶんけんがく）〔獨・佛〕Philologie【名義】文獻學はフイロロギー、特に十九世紀ドイツに發達したるフイロロギーの譯語であるが、その語原はギリシヤの Philologia であつて、これは更に Philologos から出てゐる。Philos は愛すること、logos は言語又は學識の意であるから、原義は言語又は學識を愛することであつた。又譯語の文獻なる語は既に「論語」爲政篇に見え、古代の文物制度の書、又はこれに精通した人を意味してゐる。近く淸時代には「文獻通考」「文獻備考」等の如き用例があつて、古典によつて古代の文物制度を考究することが行はれた。かくして我が國に於ては、明治三十年前後にフイロロギーの譯語として文獻學なる名辭が用ひられ、上田・芳賀兩博士によつてその性質がわが國學に比せられて以來、國學（別項）を文獻學として理解し、これを改造して新たなる學的發展を劃さうとして、日本文獻學なる名辭が行はれるに至つた。【性質】文獻學の對象は久しくギリシヤ、ローマの文化であつた。更に言へば世界改造の要求に基く文化の原型としてのギリシヤ文化であつた。然るに十九世紀以後その研究は印度・支那・エジプト等ヨーロッパ以外の古代文化に及び、漸次各國民各民族の有する文獻によつて、その國民その民族の文化を闡明しようとする國民性學・文化學となり、著しく科學的性質を加へて來た。而してその方法は一般的に言へば、ベエクが「認識せられたるものの認識」(Das Erkennen des Erkantes.)といひ、パウルが「人間の精神によつて作られたものの認識」と言つてゐるやうに、言語・文獻に表現された過去生活の認識である。而も個人或は後代の、主觀的乃至方便的解釋を捨てて、出來得る限り古代意識そのものを客觀的に認識しようとする。かくて文獻學はその對象に於けると等しく、方法に於ても中世的學風を脫した新しい學的發展の端緒を得た。次に文獻學と他學との關係を考へるに、文獻學は認識された事の認識であるから、あらゆる學術の歷史は文獻學的であり、廣義の歷史もその根本資料を取扱ふ限りに於て文獻學である。

ただ歷史は歷史的事象その物を對象とし、文
獻學は歷史的認識を對象とする點に於て區別
される。又エルツェの言つた如く、「言語は一
國民の認識、國民の內面的生活に對する鍵」
であるから、文獻學はまづ記載され、若しくは
語られた言語の研究をその任務とする。この
點に於て文獻學は言語學と共通性を有する。
併し言語學は、言語を言語それ自身のために
研究し、文獻學は言語研究に卽して思想・文化
を闡明しようとするものである點に於て言語
學と區別される。最後に、文學（別項）は一國民

專門的分化が行はれてゐる。これを承けたエ
ルツェは註釋・批評の外に、地理學・歷史學・社
會的考古資料・文學史・言語史・辭書編纂法・文
體論・韻律學を立て、その中、註釋を言語方面・
內容方面にわかち、更に前者を語彙的・文法的
（音韻法・單語法・文章法）・文體的・韻律的に分ち、
また批評を本文批評・美學的批評に分類した。
パウルは、方法論に於て註釋・批評・言語史・文
學史を、又本論に於て神話・傳說・詩學・經濟・
法律・軍事・風俗・藝術・民族學の諸項を論究し
てゐる。かくて文獻學は、常に註釋・批評をそ

て「少年文庫」（明治二十二年八月創刊）が出で、
これが更に「文庫」と改題したもので、明治四
十三年八月まで續いた。【編輯者】初めは主
として山縣五十雄（[illegible]）。瀧澤秋曉・五十嵐白
蓮等がこれを助けてゐた。【解說】最初は投
書專門の雜誌であつたが、次第にいゝ寄稿が
集つて、明治文學發展の上に著しい足跡を殘
した。投書家の中に永田秀次郞（靑嵐）・吉野作
造・牧野英一・大山郁夫・松原至文・大倉桃郞等
の名が見出される。又投書家より後に本誌の
記者となつた人々に小島烏水・千葉龜雄・河井

者になつた佐藤淸（[illegible]）、「こゝはお國を三百
里」の作に口語詩の先鞭を着けた眞下飛泉、そ
の外、大西自月・浦瀨白雨など殆ど枚擧に遑が
ない。三十五六年頃から四十年前後に亙つて
「文庫」に詩を發表してゐた人の中では、北原
白秋（別項）が既に鋒鋩を現はしてゐた。森川
葵村（別項）もこの期の人で、「文庫」「詩人」兩者
に跨つて活躍した。その他には澤村胡夷（詩集
「マンダラ」「湖畔の悲歌」）・川路柳虹（別項）・服部
嘉香・人見東明（別項）・有本芳水（芳水詩集）等が
ある。葵村・柳虹は勿論、嘉香・芳水及び加藤

幸田露伴・饗庭篁村・塚原渋柿【刊行】大正元年より同三年に至る。博文館【解説】博文館の國漢文各種の叢書の一として刊行されたものであるが、この叢書名は一般的ではない。隔月一巻づつ發行されたものである。内容は次の如くである。

【第一巻】忠臣藏文庫。【第二巻】椿說弓張月・俊寛僧都島物語・頼豪阿闍梨怪鼠傳。【第三巻】西鶴文集。【第四巻】道中膝栗毛全集。【第五巻】俠客全集。【第六巻―八巻】南總里見八犬傳。【第九巻】

體系を完成」せんとするもので、第一部、文藝概論・文學、第二部、演劇・音樂・美術(繪畫・彫刻・建築・裝飾美術)・美學、第三部、解題、第四部、文藝家人名辭彙(一五六頁)の四大部門に分れ、各部は初めに理論・解說、次に歷史を述べ、歷史は時代を主としてこれに作家との關係を記してゐる。文學の部を見るに、日本・支那・印度・ヘブライ・アラビア・ギリシア・ローマ・イタリア・フランス・ベルギイ・イスパニア・ポルトガル・イギリス・アメリカ・ドイツ・オランダ・スカンディナヴィア・ロシア・ポーランド・ハンガリーの各國文學史及び日本の現代文學、更

革及び製造法等に及び、北爪有郷・狩野良信の摸寫による插繪を入れてゐる。【土井】

文獻學（ぶんけんがく）【獨・佛】Philologie【名義】文獻學はフイロロギー、特に十九世紀ドイツに發達したるフイロロギーの譯語であるが、その語原はギリシャの Philologia であつて、これは更に Philologos から出てゐる。Philos は愛すること、logos は言語又は學識の意であるから、原義は言語又は學識を愛することであつた。又譯語の文獻なる語は既に

ただ歷史は歷史的事象その物を對象とし、文獻學は歷史的認識を對象とする點に於て區別される。又エルツエの言つた如く、「言語は一國民の認識、國民の內面的生活に對する鍵」であるから、文獻學はまづ記載され、若しくは語られた言語の研究をその任務とする。この點に於て文獻學は言語學と共通性を有する。併し言語學は、言語を言語それ自身のために研究し、文獻學は言語研究に卽して思想・文化を闡明しようとするものである點に於て言語學と區別される。最後に、文學(別項)は一國民の思想・感情が、最も直接的具體的に表現されたものであるから、文學をその本質的展開の相に於て闡明しようとする文學史(別項)は、文獻學の主要任務を擔ふものではある。併しながら、文獻學は文學の外に美術・宗教等、あらゆる文化要素の交錯合流によつて成立してゐる古代文化もしくは一時代の國民生活を、その內面的展開の相に於て闡明しようとするものであるから、文學史が文獻學の凡てではあり得ない。かくて文獻學は一國民・一民族の文化を對象とし、その精神的所產を如實に再認しようとすることに於て、一切の文化研究に關聯しつつその統一的認識をなし、又飽くまで言語・文獻を資料とする他の諸學の方法的基礎をなすものである。なほベエクによつて立てられたその體系は、まづ形式方面と實質方面とに分れ、次に形式方面は註釋(Hermeneutik)・批評(Kritik)に分れ、それ〴〵は更に文法的・歷史的・個人的・種類的に分れる。又實質方面は一般古代學・特殊古代學に分れ、それ〴〵は更に公的生活・私的生活・宗教的儀禮と藝術・總合知識に分れ、特殊古代學の四項には更に專門的分化が行はれてゐる。これを承けたエルツエは註釋・批評の外に、地理學・歷史學・社會的考古資料・文學史・言語史・辭書編纂法・文體論・韻律學を立て、その中、註釋を言語方面・內容方面にわかち、更に前者を語彙的・文法的(音韻法・單語法・文章法)・文體的・韻律的に分ち、また批評を本文批評・美學的批評に分類した。パウルは、方法論に於て註釋・批評・言語史・文學史を、又本論に於て神話・傳說・詩學・經濟・法律・軍事・風俗・藝術・民族學の諸項を論究してゐる。かくて文獻學は、常に註釋・批評をその方法的體系の中心となすものであるが、今や一面には、書史的研究・本文批評の如き準備的研究を精しくすると共に、一面には解釋學の勃興によつて益々その本質的研究を深めようとしてゐる。

【參考】F. A. Wolf, *Darstellung der Alterthums Wissenschaft.* ‖ A. Böckh, *Encyclopädie und Methodologie der Philologischen Wissenschaften.* (1877) ‖ G. Körting, *Encyclopädie und Methodologie der Romantischen Philologie.* (1884) ‖ H. Paul, *Grundriss der Germanischen Philologie.* (1889) ‖ K. Elze, *Grundriss der englischen Philologie.* (1889) ‖ *Encyclopädie und Methodologie der Philologischen Wissenschaften.* (1877) ‖ G. Basecke, *Deutsche Philologie.* (1919) ○國學とは何ぞや 芳賀矢一(國學院雜誌一〇ノ一・二) ○日本文獻學 同上 ○本居宣長 村岡典嗣(歐洲文獻學の由來とベエクの文獻學) 【西尾】

文庫（ぶんこ）雜誌【創刊】明治二十八年八月。【由來】初め山縣悌三郎主宰の少年園(後に內外出版協會と改名)發行の「少年文庫」から岐れて「少年文庫」(明治二十二年八月創刊)が出で、これが更に「文庫」と改題したもので、明治四十三年八月まで續いた。【編輯者】初めは主として山縣五十雄(蠶湖)。瀧澤秋暁・五十嵐白蓮等がこれを助けてゐた。【解說】最初は投書專門の雜誌であつたが、次第にいゝ寄稿が集つて、明治文學發展の上に著しい足跡を殘した。投書家の中に永田秀次郎(青嵐)・吉野作造・牧野英一・大山郁夫・松原至文・大倉桃郎等の名が見出される。又投書家より後に本誌の記者となつた人々に小島烏水・千葉龜雄・河井酔茗(各別項)等がある。本誌は小說評論その他各方面に活躍したが、就中、詩は酔茗が指導の任(明治二十八年から四十年まで)に當るに及んで、多數の青年詩人を輩出し、「文庫派」といへば有力な一詩派を意味するやうになつた。

文庫（創刊號）

【文庫派】「文庫」に終始した人と「文庫」を發足點とした人との二つに別れる。前者では、横瀬夜雨・伊良子清白(各別項)の如きその代表で、その他瀧澤秋暁(詩文集「有明月」)・木船和郷・塚原山百合(後の島木赤彦)・葉末露子・清水橘村(詩集「筑波紫」「野人」「長詩冥途の飛脚」等)・一色醒川(詩集「頽檗」)、山崎紫紅(別項)・溝口白羊(詩集「さゝぶえ」史詩「近藤重藏」)、小牧暮潮・平井晩村(詩集「野葡萄」)等の諸家は、大抵三十年前後から三十五六年頃までの間に活躍した人達であつた。又「文庫」を發足點とした人々の中には、短歌へ向つた窪田空穂(別項)、小說に移つた水野葉舟(別項)、獨逸語學者になつた秋元蘆風、英文學者になつた佐藤清(醫學)、「こゝはお國を三百里」の作に口語詩の先鞭を着けた眞下飛泉、その外、大西自月・浦瀬白雨など殆ど枚擧に遑がない。三十五六年頃から四十年前後に亙つて「文庫」に詩を發表してゐた人の中では、北原白秋(別項)が既に絳銖を現はしてゐた。森川葵村(別項)もこの期の人で、「文庫」「詩人」兩者に跨つて活躍した。その他には澤村胡夷(詩集「マンダラ」「湖畔の悲歌」)・川路柳虹(別項)・服部嘉香・人見東明(別項)・有本芳水(芳水詩集等)がある。葵村・柳虹は勿論、嘉香・芳水及び加藤朝鳥・三谷蘆華・吉田常夏等は、皆「文庫」期より移つて「詩人」期に活動した人々である。「詩人」は四十年六月、河井酔茗が「文庫」を辭すると同時に、詩草社を起して創刊された詩雜誌である。從つてその同人も、悉く「文庫」派の系統に屬し、初期口語詩運動には少からぬ功績があつた。「詩人」は約一ヶ年續いたが、その廢刊と共に詩草社も解散した。

【詞華集】「文庫」派の詞華集は三册ある。すべて酔茗の編、最初の「詞藻」(明治二十九年)は未だ一派を形成しない前の詩集であり、作品も幼稚であつた。次の「詩美爾韻」(三十三年七月)

表現された過去生活の認識である。而も個人或は後代の、主觀的乃至方便的解釋を捨てて、出來得る限り古代意識そのものを客觀的に認識しようとする。かくて文獻學はその對象に於けると等しく、方法に於ても中世的學風を脫した新しい學的發展の端緒を得た。次に文獻學と他學との關係を考へるに、文獻學は認識された事の認識であるから、あらゆる學術の歷史は文獻學的であり、廣義の歷史もその根本資料を取扱ふ限りに於て文獻學である。

は、清白の長篇「巖間の白百合」を巻頭に、醉茗の「雲無心」（「かへらぬ波」外數篇）を巻尾に、夜雨・露子・秋曉・紫紅等、すべて十五人の作品を收載してある。「青海波」（三十八年六月）は、「文庫」派全盛期の諸家を網羅し、年代に依つて三篇に分けてある。最新期の部には北原白秋を初め澤村胡夷・長田秀雄等の二十四人、中期には白羊・暮潮・空穗等の十八人、前期には夜雨・清白・山百合・醉茗等の十六人を收めてある。「文庫」派の全般を知るには好箇の詞華集である。〔河井〕

文語（ぶんご）　國語學【解說】專ら談話に用ひる言語である口語（別項）に對して、讀み書きに用ひ、文字を伴ふ言語をいふ。この意味の文語は、音聲と意義と文字との三要素の結合したものであつて、目に訴へる、文字といふ形をもつてゐる事がその特徵である。但しその文字は、必ずしも常に目前に現實に存するものでなくとも、文字に書く事又は書かれてゐることを想定しただけでもよい。文語に於ける音聲は、通常その「よみ」と考へられてゐるものであるが、これも音讀する場合には現實に耳に聞えるけれども、默讀する場合には現實の音聲とはならない。けれども、必要に應じて音讀出來ればよいのである。

以上の如く考へれば、現代の口語文も、文字を伴ふ言語である故、勿論文語の中に入るのであるが、普通世間で文語といふ場合には、文字で書く時に用ひるべきものとして傳はつて來た特殊の言語（談話に用ひるものとは差異がある）を指していふことが多い。かやうな場合には、談話に用ひる言語に基づく文語である口語文はその中に含まれないこととなる。かやうな意味の文語は、前述の文語に對しては狹義の文語といふべきであつて、これを文章語と名づけて區別するがよからうと思ふ。しかし、この狹義の文語に對して前述の廣義の文語を區別するために、廣義の文語を文章・文字言葉・記載語など名づけるものがある。以下說くところは廣義の文語についてである。【共通語としての文語】文字は、國語の範圍内に一樣に行はれるのが常であるから、文字で書いた言語即ち文語は、土地その他による國語内の言語の相違に拘はらず、全國一樣に行はれて、共通語の性質を有する。それがまた口語にも影響を及ぼして、國語内の言語の統一に資することが多い。

【文語と口語との關係】一般に、文語はもと口語から發達したものである。即ち初めは、口語をそのまゝ文字に寫したものが文語であつたのであるが、文語は文字に永續性があり、又各地に廣く讀まれるために、自ら保守的であつて、その變化することが遲く、口語の變化に伴はずして、代を重ねる中に口語との間に差異が生ずる。その差異は國により又文語の種類によつて一樣でないが、口語に最も近い文語でも、なほ純粹の口語に比して幾分の差異ある事を免れない。

【日本の文語の種類】現代の文語は、これを書き表はす方法からみれば、(一)漢字と假名とを混用するもの、(二)漢字ばかりを用ひるもの（漢文など）の二種となる。外に假名ばかりを用ひ、又はローマ字を用ひることもあるが、社會一般に行はれる普通の書方ではない。次に文字を離れて言語そのものの實質からみれば、(一)口語體の文語、所謂口語文（別項）と、(二)文章語體の文語、所謂文語文との二種に大別することが出來る。(一)は現代の口語に基づくものであり、(二)は文字で書く時に用ひる言語として前代から傳はつて來た一種の言語、即ち文章語によるものである。兩者の差は語彙にも存するが、根本的の差異はその文法に存する。即ち口語文の文法は、現代の口語、殊に標準語の文法と大體一致し、文語文の文法は、多くは古代語の文法と一致する。口語體の文即ち口語文は明治以後に起つたもので、言語上から見ればその種類は少く、對話體の文と非對話體の文の別があるに過ぎないが（口語文參照）、文章語體の文は、その由來古くして色々の種類があり、現代に行はれるものでも、普通文・書簡文（又候文とも）・和文・漢文（以上各別項）などの外、祝詞文なども特殊の場合に用ひられる。これ等は各々その用語文法の上に特徵があるのみならず、文字による書方の上にも多少の相違がある。

【日本の文語の變遷】我が國ではじめて用ひられた文字は漢字であつて、我が國最初の文語は漢文である。漢文は勿論外國文であつてこれを字音で讀めば支那語となるのであり、又初めのうちはこれを音讀したであらうが、その意味を知るためにこれを日本語に譯したであらう。その譯語は特別の言語ではなく、當時談話に用ひた口語であつたであらうが、併し漢文と日本語との文法や發表法の違ひから、漢文を譯する場合には、多少日本語に無かつた言ひ方や新しい語や、時としては漢語までも交つて、純粹の口語と違つた點もいくらかあつたであらう。これが年を經て漢文を譯する場合の習慣となつて、漢文に一定の訓讀法が生ずる基礎となり、更に進んで日本語を漢文式に寫すことが生じたものと考へられる。又一方漢字が多く用ひられるに從つて、漢字で日本語の音を寫す萬葉假名式の用法も生じ、これ等の種々の方法によつて國語を自由に漢字で寫すことが出來るやうになつて、純粹の日本の文語が出來たのである。かやうにして日本の文語は、支那から傳はつた漢文（及びこれに伴ふ訓讀の語）と、純粹の國語を漢字で寫した國文ともいふべきものと、この二つの源から發して、時代と共に新しい種類が出來たものであつて、その各種の文語は時代を經ても全く絕滅する事なく、多くは同時に並び行はれた。

〔奈良朝以前〕太古の事は知り難いが、日本人の書いたものが今日までも殘つてゐる最古の時代である推古朝から奈良朝までの有樣を見ると、一般に正式の文としては漢文が行はれ、詩賦を作り、四六駢儷體の文を綴つたが、官府に於ける往復の文書や書簡のやうな實用的の文には、六朝以來の俗語をまじへた漢文が用ひられ、又漢文に熟達しないものの書いた文には、用字法や文法の著しく日本化したものもあつた。この時代には漢文を全部字音で讀むことが行はれたと思はれるが、また訓讀法も大體一定してゐたと考へられる。その訓讀法は口語には用ひないやうな單語や言ひ方が混じたにしても、大體に於て、殊に文法に於ては口語と大した差異はなかつたであらう。また一方純粹の國語による歌や手紙（消息）の如きものを漢字に寫すことも行はれたのであつて、それは(一)主として漢文の形式によりこれを訓讀すれば國語になるやうにしたもの（古事記の如き）と、(二)主な語を漢字の意味によつて寫し、漢字で正式に寫し得ない語尾・助動詞・助詞・接尾語などを萬葉假名で寫して日本語の順序のまゝに列ね、主な語を訓讀し、

これに萬葉假名の語を附けて讀むやうにしたもの（萬葉集）の或る部分や、文書の一部や宣命などに見える。宣命にはこの補助の萬葉假名を小書してある。これを宣命書といふ）と、(三)全部萬葉假名で書いたもの（紀・記の歌の部分や「萬葉」の一部や文書の或るものなど）とがある。その言語は、紀・記の如き古傳說や歌の中には、多少古語も混じてゐたらうが、概して當時の口語と著しい差異はなかつたであらう。

〔平安朝〕（但し院政時代を除く）平安朝に入つて草子等種々の假名文（平假名で書いた文）の文學が起つて隆盛を極むるにいたつた。これ等の文は、當時の口語（殊に宮廷に行はれた上流社會の言語）によつたもので、一種の口語文といふべきものであつた。但し歌の用語は、多少これとは異り、口語に用ひても歌には用ひないやうな語や語法が生じ、語に雅俗の別が出來た。また平安朝初期に、漢文に訓點（別項）を附し、又は書入をするために用ひた萬葉假名から片假名（別項）が發生して、漢文と共に用ひられたが、これは本文の漢字と傍の片假名とを免れなかつたが、やはり平安朝のものを模範とした。漢字に片假名を交へた假名交り文は、院政時代に於ては「今昔物語」や「打聞集」のやうな說話集や和歌の隨腦、その他の文に用ひられ、その後も、かやうな方面に行はれたが、實用的な文であるだけに、口語を交へる事が多かつたであらうけれども、純粹な口語の文ではなく、前代の言語による所が少くなかつたらしい。さうしてその頃の新興文學たる「保元」「平治」「平家」の諸物語や「太平記」等は漢文や假名文その他各種の文語をも交へ、口くなつたが、書簡文（候文）は益々俗化し、庶民常用の文として、書簡以外の記錄などにも用ひられた。けれども、なほその用語や書き方に於て從來の特徵を存した。女子の書簡文は古代の消息文の流を汲んで、多く平假名を用ひ、又一方男子の書簡文の影響を受けて一種の體を成したが、その用語は口語には遠いものであつた。假名交り文の系統を承けたものとしては、假名草子・讀本・浮世草子・淨瑠璃その他の新興の文學の語があり、また隨筆や實用的の文も多くはこの種に屬する。これ等

に應じて音讀出來ればよいのである。

以上の如く考へれば、現代の口語文も、文字を伴ふ言語である故、勿論文語の中に入るのであるが、普通世間で文語といふ場合には、文字で書く時に用ひるべきものとして傳はつて來た特殊の言語（談話に用ひるものとは差異がある）を指していふことが多い。かやうな場合には、談話に用ひる言語に基づく文語である口語文はその中に含まれないこととなる。かやうな意味の文語は、前述の文語に對

【日本の文語の種類】現代の文語は、これを書き表はす方法からみれば、(一)漢字と假名とを混用するもの、(二)漢字ばかりを用ひるもの（漢文など）の二種となる。外に假名ばかりを用ひ、又はローマ字を用ひることもあるが、社會一般に行はれる普通の書方ではない。次に文字を離れて言語そのものの實質からみれば、(一)口語體の文語、所謂口語文(別項)と、(二)文章語體の文語、所謂文語文との二種に大別することが出來る。(一)は現代の口語に

これに萬葉假名の語を附けて讀むやうにしたもの（「萬葉集」の或る部分や、文書の一部や宣命などに見える。宣命にはこの補助の萬葉假名を小書してある。これを宣命書といふ）と、(三)全部萬葉假名で書いたもの（紀・記の歌の部分や「萬葉」の一部や文書の或るものなど）とがある。その言語は、紀・記の如き古傳説や歌の中には、多少古語も混じてゐたらうが、概して當時の口語と著しい差異はなかつたであらう。

【平安朝】（但し院政時代を除く）平安朝に入つては、漢文はなほ正式の文として用ひられ、詩文を作る事も絶えなかつたが、その初期を過ぎると漢文が次第に衰へて全部音讀する事もなくなり、遂に訓讀のみとなつたが、その訓讀の語は前代からの古風な語や言ひ方を交へ、文法に於ては概して當時の口語と大差なく、前代にはなかつた音便をも用ひるやうになつた。かやうに漢文を音讀することなく、これを直ちに訓讀するやうになつて、こゝに漢文が、言語の上から觀て、明かに日本語の文語の一種となつたのである（漢文參照）。一方、男子の日記・記錄・書簡など實用的の文には、日本化した變體漢文（別項）が一般に用ひられ、遂には間々假名を交へるものさへも出來たが、その讀み方は、用語や表現には口語に用ひない特殊なものも、かなり混じてゐたであらうが、その文法は、當時の口語と大差なかつたであらう。純粹の國語の文には、宣命や祝詞は前代以來の宣命書を用ひて漢字ばかりで書き、用語も主として古代語によつたものと思はれるが、歌や消息は平安朝初期に於て發達した平假名（別項）で書かれるやうになつて、主として婦女に用ひられ、これから物語・日記・

草子等種々の假名文（平假名で書いた文）の文學が起つて隆盛を極むるにいたつた。これ等の文は、當時の口語（殊に宮廷に行はれた上流社會の言語）によつたもので、一種の口語文といふべきものであつた。但し歌の用語は、多少これとは異り、口語に用ひても歌には用ひないやうな語や語法が生じ、語に雅俗の別が出來た。また平安朝初期に、漢文に訓點（別項）を附し、又は書入をするために用ひた萬葉假名から片假名（別項）が發生して、漢文と共に用ひられたが、これは本文の漢字と傍の片假名とによつて訓讀語を表するものである故に、これから遂に漢字の下に片假名を小書して日本語を表はす法式が生じ、僧侶など男子の間に用ひられた。

【院政・鎌倉・室町時代】この時代に於ては、口語は次第に變化して、遂に平安朝のものに比して著しい差異を生ずるに至つたが、文語はそれ〴〵變化はあつたとはいふものの、概ね前代の言語の特徴を失はず、ために口語と文語との差異が次第に著しくなり、言・文二途に分れたのである。卽ち漢文は益々衰へて先哲の訓點を墨守したので、訓點法も愈々固定し、鎌倉末から室町時代に至れば宋學の輸入があり、また禪僧が學を講じた爲め、多少の變動は見られたけれども、なほ言語としてその傳統を守り、實用的の文としての變體漢文も、ます〳〵日本化し、書簡文は院政時代以後、當時の口語に用ひられた「候」といふ語を用ひること漸く多くなり多く俗語を取り入れ、又假名をも交へたが、その書方に於ても、用語に於ても、多く從來の風を存した。和歌や假名文も時代の下ると共に、幾分口語や漢文の影響を受けることは

當時談話に用ひた口語であつたであらうが、併し漢文と日本語との文法や發表法の違ひから、漢文を譯する場合には、多少日本語に無かつた言ひ方や新しい語や、時としては漢語までも交つて、純粹の口語と違つた點もいくらかあつたであらう。これが年を經て漢文を譯する場合の習慣となつて、漢文に一定の訓讀法が生ずる基礎となり、更に進んで日本語を漢文式に寫すことが生じたものと考へられる。又一方漢字が多く用ひられるに從つて、

混じたにしても、大體に於て、殊に文法に於ては口語と大した差異はなかつたであらう。また一方純粹の國語による歌や手紙（消息）の如きものを漢字に寫すことも行はれたのであつて、それは(一)主として漢文の形式によりこれを訓讀すれば國語になるやうにしたもの（古事記の如き）と、(二)主な語を漢字の意味によつて寫し、漢字で正式に寫し得ない語尾・助動詞・助詞・接尾語などを萬葉假名で寫して日本語の順序のまゝに列ね、主な語を訓讀し、

くなつたが、書簡文（候文）は益々俗化し、庶民常用の文として、書簡以外の記錄などにも用ひられた。けれども、なほその用語や書き方に於て從來の特徴を存した。女子の書簡文は古代の消息文の流を汲んで、多く平假名を用ひ、又一方男子の書簡文の影響を受けて一種の體を成したが、その用語は口語には遠いものであつた。假名交り文の系統を承けたものとしては、假名草子・讀本・浮世草子・滑稽その他の新興の文學の語があり、また隨筆や實用的の文も多くはこの種に屬する。これ等も多少とも口語の影響を受けたが、やはり主として古來の文語を用ひた。又祝詞や宣命の文はなほ昔ながらの言語と書法で行はれた。要するに文語は主として平安朝又はそれ以前の言語の特徴を失はず、當時の口語は、對話の部分か又は講演筆記などの外には用ひられなかつた。

【明治以後】漢文はなほ讀まれ、作られたけれども、次第に實用からは遠ざかり、祝詞は昔のまゝの言語と書方でなほ用ひられ、又時として作られるが、宣命は全く廢れた。和歌はその言語に於ても、主として從來の和歌の語を用ひてゐるが、しかし後には、その用語が自由になり、大正時代には口語の和歌さへあらはれるに至つた。假名文は明治以後も絶えず、二十年代の國文學復興後、又盛んになつたが、普通文の興起と共に次第に勢ひを失ひ、假名交り文としては、明治の前半には漢文直譯體のものが勢ひがあつたが、後には假名文（和文）や歐文直譯體の文の影響を受けて、遂に普通文の出現を見るに至つた（普通文參照）。かやうにして明治の文語は、常用のものとしては文章語體の文語なる普通文に統一せられ

ようとする傾向を示したが、言文一致の論から起つた口語文が、明治四十年代には創作界に於ける常用の文となつたばかりでなく、次第に他の各種の文にも用ひられ、大正の末には普通文に代るべき勢ひを得、口語と文語とが二途に分れてから、はじめて口語に基づく文語が正式な文語として世に認めらるゝに至つた。(國語・口語・口語文・漢文・訓點・訓讀・普通文・書簡文・和文・和漢混淆文・變體漢文參照)

【參考】文藝類纂榊原芳野○古事類苑文學部 神宮司廳 ○日本文章史 大町芳衞 ○國語史概説 吉澤義則○語脈より見たる日本文學吉澤義則(國語説鈴)○假名發達史序説 春日政治(岩波講座日本文學) ○現代國語精説 日下部重太郎 ○文章研究號(國語と國文學特別號)　〔橋本〕

文耕堂 ぶんかうだう 淨瑠璃作者 【別號】早くは松田和吉を稱してゐた。恐らく通稱であらう。【生歿】未詳 【閲歷】家系その他の個人的生活に關して殆ど傳へるものがない。正德三年正月、竹本座作者として「河内國姥火」を突如發表して以來、寛保元年まで約三十年間の作者生涯が考へられる。この間の作品の性質等によつて、多少生活狀態などが想像されるに過ぎない。實際に作者として奮闘したのは、享保十五年以後に屬する。よつてそれ迄の約二十年間は、いはば修業時代である。但しこの間に發表されたと思はれるものは、現在では三部しか見當らぬ。また處女作の「河内國姥火」と第二作と見られる享保七年「佛御前扇車」との間には、ほぼ十年の期間があり、第三作とされる「大塔宮曦鎧」(別項)と享保十五年「三浦大助紅梅靮」との間にも七年間の歳月が隔つてゐる。この問題については多少の論もあるが、兎も角も淨瑠璃習作時代であつたと見てよいと思ふ。竹田出雲の門との説もあるが如何か。近松によつて指導されたと見るべきで、寧ろ出雲より先輩と思はれる。彼が竹本座に屬した事も、或は近松が竹本座將來のための拔擢によるかとさへ思はれ、「佛御前扇車」にも、「大塔宮曦鎧」にも、添削者として近松の名を連ねてゐることは、單に興行政策上の必要からのみではあるまい。この時代は松田和吉を稱してゐた。享保十五年以後は、文耕堂の名で、大抵年毎に數曲を發表し、近松歿後の竹本座のために大に活躍して出雲等と共に四大作家といはれた。作の傾向からいへば時代物作者といふべきであるが、脚色上に一種の奇拔な味を持つところから、頓作の名人と謳はれた。

【作品・作風】一代の作の數は現在二十四五篇を算へられるが、多くは合作で、相手として早くは長谷川千四、後に三好松洛・竹田出雲等がゐる。單獨の作と認められるものは、文耕堂時代の享保末に「車還合戰櫻」(別項)等三作と、和吉時代の處女作一曲あるに過ぎぬ。彼の選んだ素材を考へると、「平家物語」「源平盛衰記」、或は「太平記」等が多く、そこに從來まだ開拓されずにゐた戲曲性を發見して、これを世に紹介した功は見逃せぬところである。古淨瑠璃や近松物の改作に際しても、それ等が巧妙に利用されてゐることが分る。作品の種類を合作者によつて別けて見る。(一)長谷川千四との合作。二三年間であつたが傑作を續いて出した。「三浦大助紅梅靮」(享保十五年二月。頼朝擧兵に際して、三浦大助の援助を綴る。石切梶原の原作)を初め、「須磨都源平躑躅」「鬼一法眼三略卷」「壇浦兜軍記」(各別項)等の名篇がある。長谷川千四(別項)も傳記の詳細を缺く作者であるが、以上の作品には時代物に共通する強味の上に、艷な和事味を添へるのである。これ等は千四の特徴が作用したと思はれるが、脆弱に流れ切らぬ結果を擧げたのは文耕堂に據る所と察せられる。(二)三好松洛との合作。元文年代三年間程であるが、「赤松圓心綠陣幕」(元文元年二月。赤松圓心の六波羅攻)の外に、「敵討襤褸錦」「御所櫻堀川夜討」「行平磯馴松」「ひらがな盛衰記」「新うすゆき物語」(各別項)等がある。終りの二作には他の作者もゐるが、全體として、やはり松洛風の地味な落ちついた美しさが漂つて成功した作品である。(三)竹田出雲との合作。享保八年、近松添削の下に「大塔宮曦鎧」(別項)を出した後は、享保末から元文末に亙り、出雲としては一轉機に際した頃で、古淨瑠璃や近松物等の改作が多い。その中で、「甲賀三郎窟物語」「小栗判官車街道」「ひらがな盛衰記」「新うすゆき物語」(各別項)等は名篇といはるべきである。以上にあげた作品の多くは彼が立作者となつてゐる。千四との合作には千四が立作者の地位にゐるが、これも文耕堂が、事實上の立作者ではなからうかとの説がある。要するに彼が時代物作者として、史實傳記を利用して武家精神を描いた場合に、その人間的な情の世界を織り込んだことによつて、劇的効果を失はなかつたと共に、時代混亂の非難もあらうが、所謂淨瑠璃式の興味のある所を世に知らしめた大きな功があつたと思ふ。　〔守隨〕

【參考】江戸時代戲曲小説通志雙木園主人 ○淨瑠璃名作集上解説(日本名著全集)黑木勘藏

文語解 ぶんごかい 漢文法書 五册 【著者】釋大典 【刊行】明和九年 【解説】虚字助語を解釋したもので、本書は宇野明霞の「語辭解」に基づいて増補したものである。　〔佐久〕

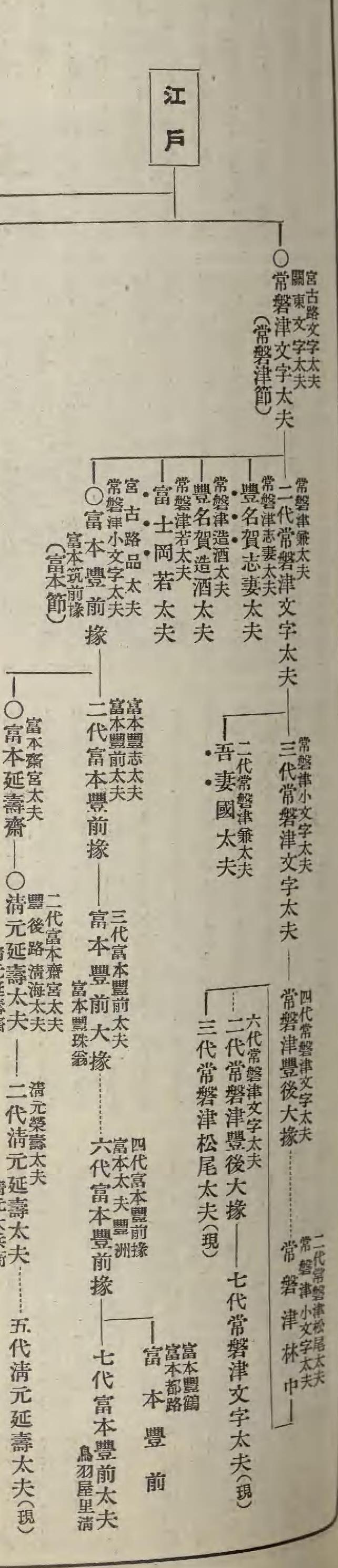
豐後國風土記 ぶんごのくにのふどき 地誌 一卷 【著者】未詳 【名稱】「とよのみちのしりのふどき」とも訓む。【成立・由來】和銅六年の詔によつて撰進せられた風土記(別項)の一と認められる。年代に就いては、播磨・常陸等の風土記に比して、後れて成つたものであらうと考へられるが、未だこれを明かにするを得ない。田能村竹田は、「箋釋豐後風土記」の跋文に於て、「僞書であらうが、鎌倉に下るものではあるまい」と言つてゐる。併し今日では一般に僞書とは考へられてゐない。【傳來】全本は傳はらずに抄出本のみ傳はつてゐる。「箋釋豐後風土記」の跋文に、唐橋世濟が嘉禎中の鈔本を得たと見え、一本奥書には、「永仁五年二月十四日書寫畢、文祿四乙未年臘月三日書寫校合等了、梵舜」と見える。【諸本】刊本として寛政十二年に荒木田久老の校訂した本、唐橋世濟が箋釋を加へて文化元年に田能村竹田の印行した本があり、又、群書類從に收め、有朋堂文庫・日本古典全集・校註日本文學大系・校註日本文學類從(釋文)等に收めて刊行せられてゐる。【内容】卷首に國名の由來を記し、次に日田・球珠・直入・大野・海部・大分・速見・國埼の諸郡の下に、郡名の由來及び各地の傳説等を記してゐる。文體は漢文、歌謡は載せてゐない。上代の説話文學として相當の價値がある。

【參考】箋釋豐後風土記 唐橋世濟 ○標註古風土記栗田寛○豐後風土記と豐後國田張工藤覺次・植本言雄(豐國史料第一集)　〔武田〕

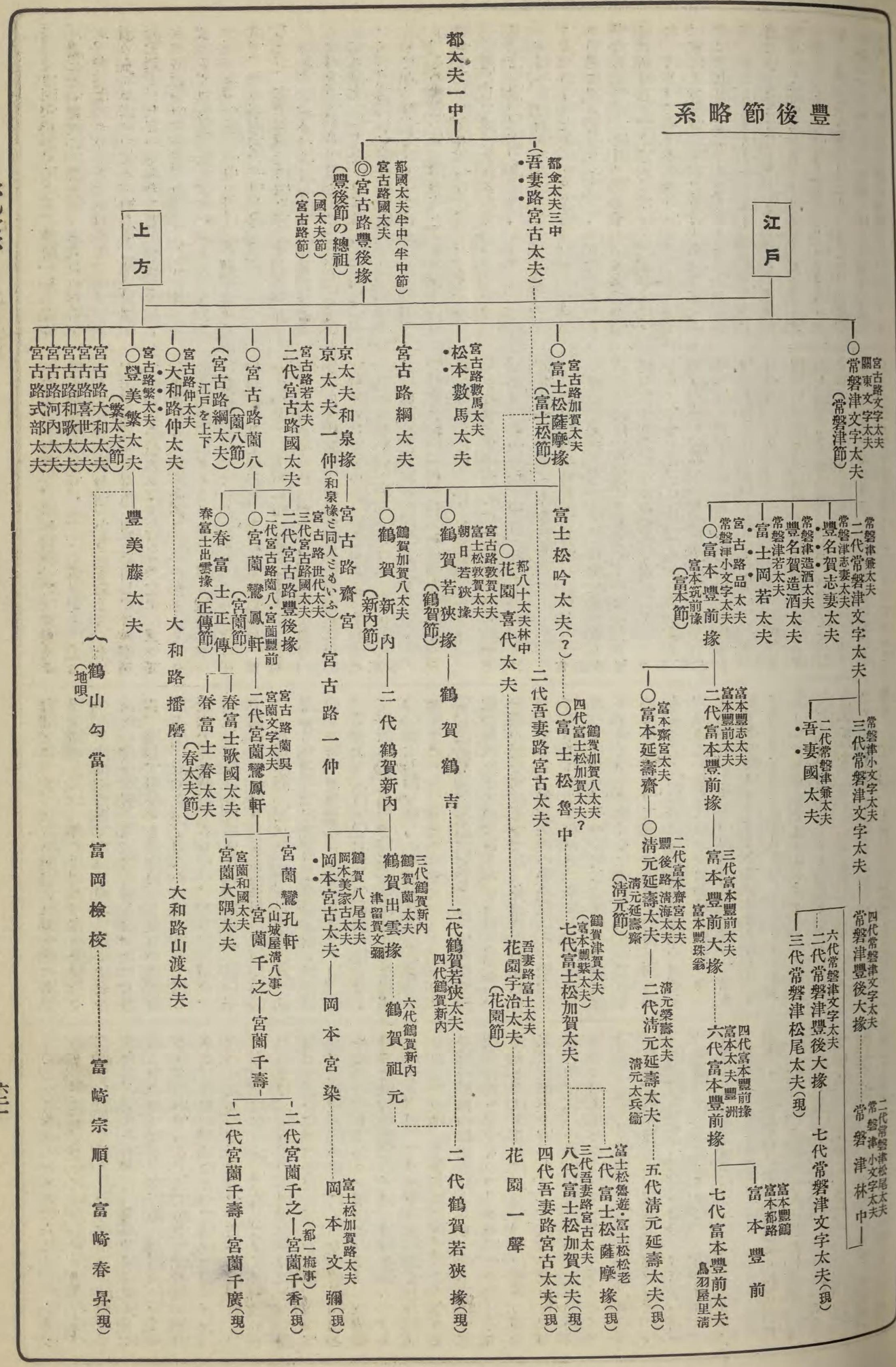
文庫派 ぶんこは 「文庫」を見よ。

豐後節 ぶんごぶし 淨瑠璃の一流派 【名稱】流祖宮古路豐後掾(別項)の名に據る。【異稱】

豐後節略系



豊後節略系



は、享保十五年以後に屬する。よつてそれ迄の約二十年間は、いはば修業時代である。但しこの間に發表されたと思はれるものは、現在では三部しか見當らぬ。また處女作の「河内國姥火」と第二作と見られる享保七年「佛御前扇車」との間には、ほぼ十年の期間があり、第三作とされる「大塔宮曦鎧」（別項）と享保十五年「三浦大助紅梅靭」との間にも七年間の歳月が隔つてゐる。この問題については多少の論もあるが、兎も角も淨瑠璃習作時代であつた

を世に紹介した功は見逃せぬところである。古淨瑠璃や近松物の改作に際しても、それ等が巧妙に利用されてゐることが分る。作品の種類を合作者によつて別けて見る。（一）長谷川千四との合作。二三年間であつたが傑作を續いて出した。「三浦大助紅梅靭」（享保十五年二月。頼朝擧兵に際して、三浦大助の援助を綴る。石切梶原の原作）を初め、「須磨都源平躑躅」「鬼一法眼三略卷」「壇浦兜軍記」（各別項）等の名篇がある。長谷川千四（別項）も傳記の詳細を缺く

描いた場合に、その人間的な情の世界を織り込んだことによつて、劇的効果を失はなかつたと共に、時代混亂の非難もあらうが、所謂淨瑠璃式の興味のある所を世に知らしめた大きな功があつたと思ふ。【守隨】

埼の諸郡の下に、郡名の由來及び各地の傳説等を記してゐる。文體は漢文、歌謡は載せてゐない。上代の説話文學として相當の價値がある。

【參考】笈埃豊後風土記　唐橋世濟　○標註古風土記　栗田寛　○豊後風土記と豊後國田張工藤覺次・旭本言雄（豊國史料第一集）【武田】

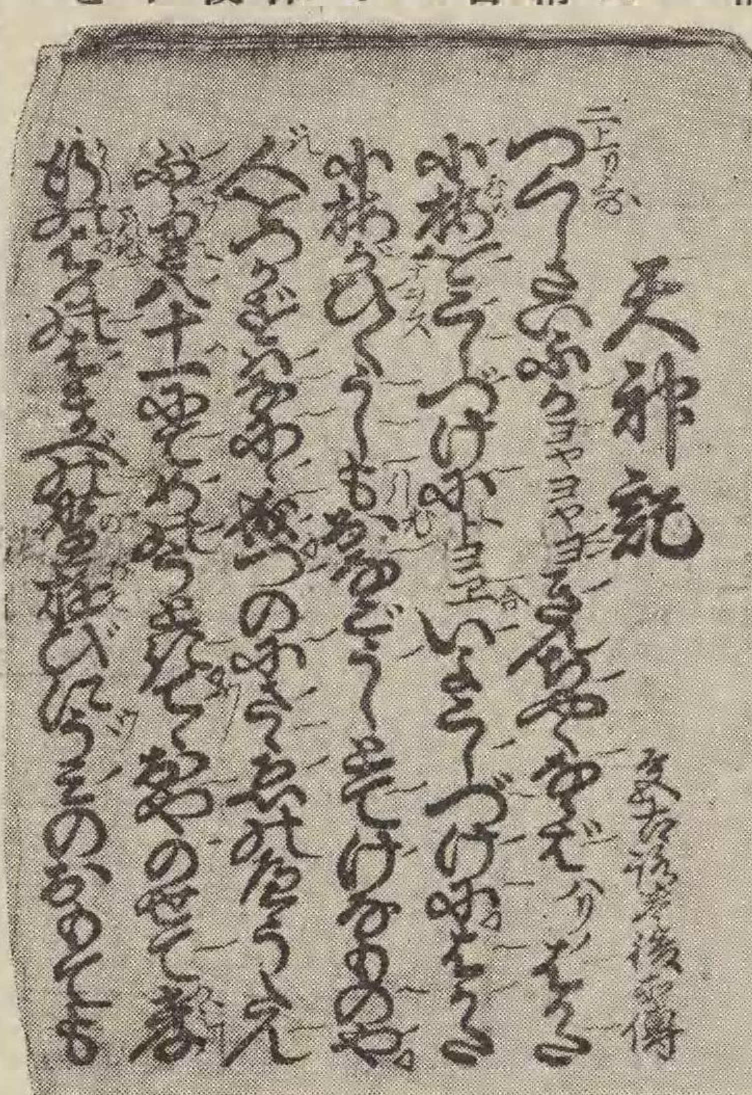
文庫派（ぶんこは）　「文庫」を見よ。

豊後節（ぶんごぶし）　淨瑠璃の一流派【名稱】流祖宮古路豊後掾（別項）の名に據る。【異稱】

【參考】江戸時代戯曲小説通志雙木園主人　○淨瑠璃名作集上解説（日本名著全集）黒木勘藏

文語解（ぶんごかい）　漢文法書　五册【著者】釋大典【刊行】明和九年【解説】虚字助語を解釋したもので、本書は字野明霞の「語辭解」

京阪では國太夫節、又は宮古路節とも呼ばれた。【名義】狹義には豐後掾の流義のみを指すが、廣義にはその門下及び門葉によつて語り創められた江戸の常磐津節・富本節・新内節・清元節等、上方の薗八節・正傳節・繁太夫節・大和路節等の諸淨瑠璃の總稱である。【沿革】豐後掾は一中節(別項)の祖都一中の門に出で、初め都國太夫半中と稱したが、享保初期既に姓を宮古路と改め、獨立して半中節、又は國太夫節と呼び囃されて上方に行はれた。次いで享保十五年頃受領して宮古路豐後掾と改め、同十九年江戸に下り、その得意の世話淨瑠璃を語つて世の好尚に迎へられ、豐後節として盛行されるあまり、遂に他派の嫉妬も手傳ひ、元文四年風紀紊亂を言ひ立てに當局から禁止された。當時の俗謠に「河東上下、外記袴、半太羽織に義太股引、豐後可哀や丸裸」と謳はれたが、これなどによつても豐後節がいかに歡迎されたかが判る。豐後掾は禁止前の元文二年既に歸京して更に京阪にその妙技を擅にし、元文五年に歿したが、門下から薗八節・繁太夫節(各別項)・大和路節・正傳節等を生じて繼承された。一方抑壓をうけた江戸では、高弟の宮古路文字太夫・同加賀太夫等が斯流再興に努め、且つ時代の風潮は何物もこれを抑へる事が出來ないと見え、やがて文字太夫は常磐津と改め、又加賀太夫は富士松薩摩掾(別項)と改めて各師流を傳へた。かくて常磐津節(別項)から富本節(別項)を生じ、富士松から新内節(別項)を出し、これ等三流は安永・天明時代に盛行を見、文化に至つて富本から清元節(別項)が生れ、爾來常磐津・富本・清元の三派を豐後三流と稱し、現今に及んでゐる。又京阪では薗八・正傳(春富士)等の凋落に伴ひ、文化以後江戸の常磐津・富本等が芝居唄に輸入されるに及び、これ等の風の淨瑠璃唄を「ぶんご」の稱呼を以て行はれた。故に豐後節の名稱は、初めは流祖宮古路豐後掾その人の曲風の名稱であつたのが、後にはその系統の諸淨瑠璃の概括的名稱となつたのである。而して現存する豐後節の主なものは常磐津・富本・清元・新内・薗八の五流である。但し繁太夫節は傳存するものの、これは地唄の一部として傳はるに過ぎない。【流派】(甲)半中節・國太夫節(宮古路豐後掾參照)。(乙)〔江戸〕(一)常磐津節。(二)富本節(各別項)(三)富士松節(富士松薩摩掾・富士松魯中・新内節參照)・鶴賀節(鶴賀若狹掾・新内節參照)・新内節(別項)。(四)清元節(別項)。(丙)〔上方〕(一)薗八節(別項)・宮薗節(薗八節參照)。(二)正傳節(薗八節參照)。(三)繁太夫節(別項)。(四)大和路節(宮古路豐後掾參照)。



宮古路豐後掾正本

宮古路綱太夫正本

【曲風】豐後節の本源的なものは、宮古路豐後掾の曲風を指すのであるが(宮古路豐後掾參照)、廣義の豐後節に至つては、各流別個の特色を有つてゐる。無論狹義の豐後節はその儘今日に傳存されてはゐないが、聲曲として滅亡したのではなく、その節廻しは後の各支派に傳存されて今日に於てもなほ屢々唄はれてゐるのである。随つて常磐津・富本・新内・薗八等も、各々その創始期に於ては、豐後掾の曲節と相距ること遠くはなかつたわけである。それは現存するこれ等の初期の正本に就いて見るも、その樂曲の組織に於ても明瞭である。又京阪の宮古路・大和路・薗八・正傳等の關係に就いて見るに、即ち寶曆十三年刊の「宮薗集都大全」の序文の中に、「宮古路大和路の月より春富士の雪宮薗の花まで殘りなく正しあつめ云々」と記されてゐるのによつて、その詞章を同じうしたばかりでなく、春富士の太夫が宮薗又は大和路のワキを語り、大和路が宮薗を語り、更に春富士の三絃方が宮薗や宮古路の三絃をも勤めてゐる芝居番附等も見出され、大和路と薗八と正傳との極めて密接な關係にある事のみでなく、宮古路との關係に於てもこれ亦明かである。故に異つた所があるとすれば、各自の持味によつて變つた語り方をしたのに止まつて、内容や樂曲の組成の改まつたものではなかつた。然るに常磐津・富本等の如きは、劇場音樂、殊に所作事の地として發達した爲めに漸次變質してしまつた。随つて最も豐後掾當時の曲風に近いものは、劇場との關係の最も淺かつた新内なので、その點に於て比較的豐後節の正統の流義を傳へてゐるといへる。而してこれ等各流の發音上の區別を生じたのは、安永・天明以後である。されば各流の樂曲の組成如何よりも、寧ろ表現や趣味に特色を有つもので、曲の味や時代好尚に伴ふと伴はざるとによつて、その流義の盛衰又は廢滅が左右されることにもなつたのである。殊に江戸の豐後節諸流に於てこの變遷は顯著に示されたのであつた。

【參考】聲曲類纂齋藤月岑○江戸時代之音樂田邊尙雄○近世演劇考説黒木勘藏○歌舞伎圖説守隨憲治・秋葉芳美共撰○日本歌謠史高野辰之○豐後節雜記三田村鳶魚(歌舞伎研究二四・三〇)○豐後節系淨瑠璃の諸流派(現代音樂大觀) 〔秋葉〕

文士劇(ぶんしげき) 演劇【名義】文筆の士の素人芝居の義。【解説】東京各新聞社の劇評記者中五六の人の發起で、道樂半分ではあるが、或る種の新劇運動の先驅をもする抱負を以て同志を集め、各自舞臺に立つた。明治三十八年五月十一日、東京歌舞伎座で、その第一回を興行、名稱を若葉會と假りに定め、誰いふとなくこれを文士劇と呼び、文士劇の稱、こゝに始まる。當時の發起人は、杉贋阿彌・岡本綺堂・岡鬼太郎・小出綠水等で、贊成加入者には、右田寅彥・岡村柹紅・松本當四郎・伊坂梅雪・鹿島櫻巷・栗島狹衣の諸人がある。狂言は綺堂新作の「天目山」、森鷗外博士作「日蓮辻説法」の外に、研究劇として「假名手本忠臣藏」三段目の刄傷、淨瑠璃清元の「保名」を出し、山臺の清元にまで、當四郎・櫻巷の兩人出演、この興行大入大評判となる。越えて翌三十九年、

文之玄昌(ぶんしげんしやう) 「玄昌」を見よ。

紛失狀(ふんしつじやう) 古文書【解説】所帶關係文書等の紛失した場合に、その筋の證明を請ふ文書。本人ばかりのこともあるが、また證人の連署を得て屆け出る場合が多い。平安時代から室町時代までであり、京畿のものは左右京職や檢非違使の證判を受け、後には諸大名などの證判を得てゐるが、また證判の無いものもある。〔伊木〕

謹申請 紛失狀御證判事
合東寺領巷所下司給田貳段者

左衞門大志中原(花押)
件文書紛失事、傍輩證判灼然之間、並愚署而已、
右衞門權少尉中原(花押)
彼文書紛失事、傍官證判分明之間、加愚署而已、
東市正兼左衞門權少尉中原朝臣(花押)
左衞門權少尉中原(花押)
件證文紛失事、傍官證判分明之間、仍並愚署而已、
大判事兼明法博士造酒正
左衞門大尉山城守中原朝臣(花押)
修理左宮城判官主計權助
兼左衞門少尉 中原朝臣(花押)
左衞門大志中原(花押)

つて然る後博く他の集類に亙るを以て順序とし、家毎に藏せざるものなきに至り、賴山陽は續編の卑陋を排して、その遺を補はんがために「謝選拾遺」六卷を撰した。その後に於てもこれを評註する者が甚だ多く、諸藩校がこれを教科書に用ひ、今日に及んでもなほ行はれてゐる。【内容】本書は韓・柳・歐・蘇を中心として、唐宋の作家の文を採錄し、ただ陶淵明の歸去來辭と諸葛孔明の出師表のみを前代に取つた。凡て六十九篇、卷一・二を放膽文と云ひ、凡そ

などによつても豐後節がいかに歡迎されたかが判る。豐後掾は禁止前の元文二年既に歸京して更に京阪にその妙技を擅にし、元文五年に歿したが、門下から蘭八節・繁太夫節（各別項）・大和路節・正傳節等を生じて繼承された。一方抑壓をうけた江戸では、高弟の宮古路文字太夫・同加賀太夫等が斯流再興に努め、且つ時代の風潮は何物もこれを抑へる事が出來ないと見え、や

も、各々その創始期に於ては、豐後掾の曲節と相距ること遠くはなかつたわけである。それは現存するこれ等の初期の正本に就いて見るも、その樂曲の組織に於ても明瞭である。又京阪の宮古路・大和路・蘭八・正傳等の關係に就いて見るに、卽ち寶曆十三年刊の「宮蘭集都大全」の序文の中に、「宮古路大和路の月より春富士の雪宮蘭の花まで殘りなく正しあつめ云々」と記されてゐるのによつて、その詞章を同じうしたばかりでなく、春富士の太夫が宮本・清元の三派を豐後三流と稱し、現今に及んでゐる。又京阪では蘭八・正傳（春富士）等の凋落に伴ひ、文化以後江戸の常磐津・富本等が芝居唄に輸入されるに及び、これ等の風の淨瑠璃劇考說（黑木勘藏○歌舞伎圖說（守隨憲治・秋葉芳美共撰○日本歌謠史（高野辰之○豐後節雜記（三田村鳶魚（歌舞伎研究二四・三〇）○豐後節系淨瑠璃の諸流派（現代音樂大觀）　〔秋葉〕

文士劇（ぶんしげき）　演劇　【名義】文筆の士の素人芝居の義。【解說】東京各新聞社の劇評記者中五六の人の發起で、遊樂半分ではあるが、或る種の新劇運動の先驅をもする抱負を以て同志を集め、各自舞臺に立つた。明治三十八年五月十一日、東京歌舞伎座で、その第一回を興行、名稱を若葉會と假りに定め、誰いふとなくこれを文士劇と呼び、文士劇の稱こゝに始まる。當時の發起人は、杉贋阿彌・岡本綺堂・岡鬼太郎・小出綠水等で、賛成加入者には、右田寅彥・岡村柿紅・松本當四郎・伊坂梅雪・鹿島櫻巷・栗島狹衣の諸人がある。狂言は綺堂新作の「天目山」、森鷗外博士作「日蓮辻說法」の外に、研究劇として「假名手本忠臣藏」三段目の刃傷、淨瑠璃淸元の「保名」を出し、山臺の淸元にまで、當四郎・櫻巷の兩人出演、この興行大入大評判となる。越えて翌三十九年、東京每日新聞社自ら文士劇團を創立し、社長島田三郎の會長、贋阿彌・綺堂・狹衣・鬼太郎の四人は、專屬の記者俳優となり、その年十二月一日より數日間明治座に開演、登升（今の壽美藏）、故人新十郎、女優九女八等の職業俳優の助演があつて、出し物は、綺堂新作「新羅三郎」、鷗外博士作「日蓮辻說法」、仲野徹軒譯「放心家」と古劇「一谷」の熊谷陣屋で、日蓮の背景は、洋畫の大家和田英作が揮毫、扮裝の考證は久保田米齋であつた。この背景は、劇界空前の見事なる洋畫とて、歌舞伎俳優の見物する者尠からず、忽ち斯界の大評判となつた。一座の文士は、東京俳優組合頭取の奧印を請はず、各自居住の區役所に就いて、日本最初の「文士俳優」の鑑札（最下級八等）を受け、一種の商賣人並みになつて、その後は京濱各所の大劇場に、數日づつの興行をなし、後また早稻田文藝協會員の一部と合同したが、明治四十二年頃より、物資の關係にて漸く振はず、やがてこの文士劇は自然消滅に歸したが、この間、岡本綺堂（別項）の新脚本は、每日社劇團のため續々執筆せられ、彼が他日名を成すの素質をこゝに顯はしたのである。　〔岡〕

ぶんしげ　ぶんしよ

文之玄昌（ぶんしげんしやう）　「玄昌」を見よ。

紛失狀（ふんしつじやう）　古文書　【解說】所帶關係文書等の紛失した場合に、その筋の證明を請ふ文書。本人ばかりのこともあるが、證人の連署を得て屆け出る場合が多い。平安時代から室町時代までであり、京畿のものは左右京職や檢非違使の證判を受け、後には諸大名などの證判を得てゐるが、また證判のないものもある。

謹申請　紛失狀御證判事

合東寺領巷所下司給田貳段者

右巷所下司職者、沙彌妙阿彌重代相傳職也、而件彼文書等預置針小路猪熊之定圓住宅之處、去嘉曆二年八月十日夜强盜等亂入彼住宅之時、彼本券七通幷代々御勸進御下文數通紛失之條、在地顯然也、其內友延讓狀一通、金剛三昧御下文一通在之、在地近隣又以無其證、仍且乞請在地人連署、且申給諸官御證判、欲備向後龜鏡證文、仍紛失狀如件、

元德元年十一月十六日　沙彌妙阿（花押）

僧定圓（花押）

沙彌了阿（花押）

在地人

賀茂國弘（花押）

沙彌善阿（花押）

藤井宗弘（花押）

沙彌覺圓（花押）

沙彌淨圓（花押）

藤井國重（花押）

藤井友重（花押）

東寺領巷所下司給田貳段文書紛失事在地人等連署狀灼然之間、加愚署之者也、

防鴨河判官右衞門大尉中原朝臣（花押）

少判事兼左衞門權少尉　中　原（花押）

件文書紛失事、傍輩證判分明之間、並愚署而已、

西市正兼左衞門大尉贈前守中原朝臣（花押）

左　衞　門　權　少　尉　中　原　朝　臣（花押）

件文書紛失事、傍輩證判灼然之間、並愚署而已、

左　衞　門　大　志　中　原（花押）

右　衞　門　權　少　尉　中　原（花押）

彼文書紛失事、傍官證判分明之間、加愚署而已、

東市正兼左衞門權少尉中原朝臣（花押）

左　衞　門　權　少　尉　中　原（花押）

件證文紛失事、傍官證判分明之間、仍並愚署而已、

大判事兼明法博士造酒正
左衞門大尉山城守中原朝臣（花押）

修理左宮城判官主計權助（花押）
兼左衞門少尉　中原朝臣

左　衞　門　大　志　中　原（花押）

文章軌範（ぶんしやうきはん）　文總集　七卷　【撰者】宋の謝枋得　【名義】本書は枋得が擧業者のために軌範とすべき文章を集めて選錄したものであるから、かく名づけたのである。【傳來】宋以前の詩文の選本は、「文選」を初めとして「古文苑」「文苑英華」「宋文鑑」「文章正宗」等の如く、歷代その書に乏しくないが、繁簡詳略の宜しきに適ひ、取捨の嚴正にしてその當を得てゐるのみならず、文章に圈點批註を施したのは、呂祖謙の「古文關鍵」、樓昉の「崇文古訣」と枋得のこの書を以て嚆矢とする。故を以て元代から明代に及んで大に世に行はれ、李廷機はこれに評點を加へ、王陽明はために序文を作つた。こゝに於て狹猾な書賈輩が、名を鄒東郭（明の正德の進士、名は守益、字は謙之）に假つて續編七卷を撰し、秦以後明初に迄る諸家の文を輯錄した。本書の我が國に傳來したのは何時の頃のことか明かでないが、恐らくは足利氏の末葉であらうと思はれる。德川氏の初世以後漸く弘く行はれ、伊東藍田がこれに註して以來、註解を加へる者も多く出で、文化以後に至つて殊に盛んに行はれ、苟も文章を學ばんとする者は、必ず先づ本書から入つて然る後博く他の集類に及るを以て順序とし、家每に藏せざるものなきに至り、賴山陽は續編の卑陋を排して、その遺を補はんがために「謝選拾遺」六卷を撰した。その後に於てもこれを評註する者が甚だ多く、諸藩校がこれを敎科書に用ひ、今日に及んでもなほ行はれてゐる。

【內容】本書は韓・柳・歐・蘇を中心として、唐宋の作家の文を採錄し、ただ陶淵明の歸去來辭と諸葛孔明の出師表のみを前代に取つた。凡て六十九篇、卷一・二を放膽文と云ひ、凡そ文を學ぶには、その初め膽の大なるを要するの意を表し、卷三以下を小心文と云ひ、その終は宜しく心の小なるを要するの意を示したものといふ。これはその大要であるが、更にこれを細別すれば、卷一は粗大の文を、卷二は辯難攻擊の文を、卷三は議論變化の文を、卷四は精明正大の文を、卷五は謹嚴簡潔の文を、卷六は不朽の文を、卷七は自得の文を收めてゐる。而して開卷劈頭に韓愈の與于襄陽書を揭げ、卷七の末に韓愈の送李愿歸盤谷序と、陶潛の歸去來辭とを載せ、編次の上にかくの如き排列と首尾とを以てしたのは、人生の相を觀察するに、常に亦かくの如き次第を經るものであり、又その初めは仕進の途を開くを以て急務としても、既に功成り名遂げた後は、宜しく高踏勇退して身を全うすべきであるといふ枋得の人生觀に出發した用意であると云はれてゐる。而して本書が全篇に亙つて批註若しくは圈點を施してゐるにも拘はらず、諸葛亮の出師表と陶潛の歸去來辭とだけこれを省いてゐるのは、單に二子を尊敬するがためであるばかりでなく、また彼が自己の身境を二子のそれに比して意を致したものであると

云ふ。而して本書の舊本は、侯王將相有種乎の七字を以て七卷に分標し、學者が苟も奮勵努力すれば侯王の顯位も取るに難からざるの意を寓してゐる。近刻の書に九重春色醉仙桃の七字を以てしたのは枋得の原題ではない。

【著者小傳】枋得字は君直、號は疊山、信州戈陽の人、資性聰慧、書を讀むに毎に五行俱に下り、一度眼を過ぎた所のものは終身能くこれを忘れなかつたといふ。人と爲り豪爽剛毅、直言を好み、人と古今の治亂を論ずれば、必ず髯を掀げて跳躍自ら奮ひ、忠義を以て自ら任じて居つた。寶祐(理宋)中、進士に擧げられ、丞相の無狀を極論し、司戸參軍に除せられたが棄てて去り、明年復た試みられて教授建寧府に除せられた。その後、元の呂師夔が江東を徇へた時、彼は知信州を以て迎へ戰ひ、敗れて建寧府に奔り、逆旅に假寓して、日々東嚮して慟哭した。而も時人はこれを識らず、以て病を被ると爲したといふ。宋の滅亡するに及んで、姓名を變へて建陽の市中に賣卜の生活をなし、至元二十三年集賢殿學士程文海が、宋の臣二十二人を薦めた時、彼を以て首としたが、辭して起たず、又明年行省丞相忙兀台が旨を奉じて召したが、又詔に應ぜず、二十五年福建行省參政管如德が、旨を奉じて江南に行き、人材を索めた際に、尙書留夢炎は彼を推薦したが、所謂却聘書を遺つて謝して應ぜず、遂に執へられた。後、疾を獲て憫忠寺に遷されたが、壁間に曹娥の碑を見て感に堪へず、小女子すらなほ然り、吾豈汝に若かざらんやと云つた。爾後穀食を避けて日に菜果を食ひ、同二十六年四月歿した。彼は朱學派に於ける文天祥に對して、陸子の流を汲む末流の生んだ宋末の忠臣で、一は悠然不迫を以て、共に臣節を全うしたものである。(宋史本傳參照)

【註釋書】文章軌範評林七卷伊藤龍年○補注文章軌範七卷海保元備○鼇頭增注文章軌範七卷森立之

【字野・本多】

文章倶樂部 ぶんしやうくらぶ

雜誌【解說】大正五年五月、日本にただ一つの文章雜誌として新潮社より刊行され、文章研究者の手引たると共に新文藝入門者の伴侶たることを期した。最初は文章に關する指導的記事が多かつたが、漸次に文藝各方面に亙つて來た。別に「青年文壇」といふ欄を設け、賞を懸けて投稿を募り、散文・評論・短歌・俳句・小曲等を載す。加藤武雄編輯、後佐左木俊郎が入つてこれを助けた。文壇の名流多くこれに執筆し、菊池寛・久米正雄・吉田絃二郎・室生犀星・廣津和郎・宇野浩二・佐藤春夫・千葉龜雄・木村毅・加藤武雄・生田春月・金子薫園等がその主なるものであつた。昭和四年四月、新潮社より「文學時代」の創刊と共に、廢刊す。【齋藤(昌)】

文章語 ぶんしやうご

國語學【別稱】文語【解說】我が國に於て、文語が口語と分れて發達し、口語との間に著しい差異が生じた時代に於て、その文語、卽ち文字に書く時に用ひる特殊の言語を指していふ。これを單に文語といふことが多いが、他方に口語に基づく文語(口語文)が發生した後には、これと區別するために、文章語といふのが便利である。(文語參照)【稻木】

文章世界 ぶんしやうせかい

雜誌【創刊】明治三十九年三月、博文館。月一回、外に臨時號を年に四回づつ發行。【解說】田山花袋は主筆となり、前田晁がその編輯に當り、初めは文章研究をその中心目的とした文學の啓蒙雜誌で、各方面の知名の士の文章に關する講話などを滿載してゐたが、同四十年頃、自然派の大運動起るや、その主將の觀あつた花袋がこの雜誌の主筆なので、おのづから運動の中心となつて一大飛躍をなし、尖銳の評論と創作とを以て天下の耳目を聳動した。一面青年の誘掖に努めたので、中村武羅夫・加藤武雄・中村白葉・木村毅等の名が、この雜誌の投稿欄を賑はした。而して本誌の活動したのは、四十三四年頃迄で、自然派の氣勢が衰ふると共に振はなくなり、田山花袋が四十五年を以て編輯を辭したので、加能作次郎がこれに代り、岡田三郎も暫く携はつたが、ただ過去の惰勢を以て繼續したに過ぎなかつた。大正九年、「新文學」と改題して頽勢を挽回せんとしたが、內容極めて空疎で殆ど見るべきものなく、間もなく廢刊してしまつた。【齋藤(昌)】

文章世界(創刊號)

文正草子 ぶんしやうざうし

御伽草子(二十三篇の一)二卷【別名】「ふんしやう」「文章の草紙」「文正物語」「文太物語」等(後人が「鹽賣文章」「鹽燒文章」「鹽賣文太物語」「鹽燒文太物語」などの表題を附したのもある)。【成立】室町中世か。【諸本】古板本は御伽草子本、寬永整板本、承應二年板、明曆四年板、寬文四年板(長尾平兵衞板)、正德三年板(西村屋新板「文太物語」)、同年鱗形屋板(「鹽賣文太物語」)、二條通大恩寺町風月庄左衞門板、山本九左衞門板(「ぶんしやう物語」)、水田甚左衞門開板本等。御伽草子前編(今泉嵓山校)・御伽草紙(有朋堂文庫)・日本文學大系第十九卷・御伽草子(名著文庫)等所收。繪卷として、繪土佐光起、詞書武者小路實蔭の「文正草子」三卷(子爵藤堂高義氏藏)がある。馬琴の「燕石襍志」卷四にも、この草子の繪卷のあつた由が出てゐる。【內容】童話、出世談。「物臭太郎」(別項)と似た點がないでもないが、これは父の實直・勤勉と娘の高い理想、それに「一寸法師」(別項)と違ひ、生れながらの賤しい平民の立身談であるのが注目に値し、同時に民衆嶄起の時代相を語つてゐる。常陸國鹿島大宮司さだみつの雜色に文太と云ふ者があつた。正直でよく主に仕へてゐたが、大宮司はこれを試みようと、或る時佯り叱つて放逐した。文太は詮方なくつのをかが磯と云ふ處へ出て鹽屋に働く事となつた。年月たつて主人から鹽竈を二つ分けて貰ひ、鹽を燒いて賣つてゐるうち、無病若返りの藥鹽だとの評判を取り、忽ち大長者となつて名も文正つねをかと改めた。大宮司は改めて呼び寄せて果報を喜んだ上、繼嗣のない不幸に同情して神佛に申し請へと勸めた。文正は妻と共に鹿島大明神に祈つて蓮華二ふさを賜はると夢み、程なく姫二人が生れた。男子でないので文正は失望したが、却つて幸福が有るものだと皆が言ふので、姉を蓮華、妹を蓮御前と名づけ美しく育て上げると、國中の大名が爭つて得ようとし、かの大宮司も嫁に懇望したけれども、二人の姫は、女御后ならではと婚を厭うて承引せぬ。新任の國司衞府藏人みちしげも、婿にならうとしてこれも拒絕され、落膽して歸洛し、田舍に珍しい話と語つたのを、松殿關白の子二位中將が耳にして見ぬ戀に憧れ、病の床に臥すに至つたが、兵衞佐・式部大夫とうまの助の三人に慰められ、何昇り、大宮司は常陸を賜はり、妹娘は帝の女御に、文正は七十歳で俄に宰相中將となり、その後、女御の御腹に皇子誕生、文正は大納言に進み、百歳に餘る壽を保つた。なほ諸本文詞・內容に大同小異がある。【影響】古淨瑠璃

【附記】女のめでたい出世物語であるところから、昔は正月吉書の次に、女は册子の讀初めとしてこの草紙を讀む習慣が、少くとも寬永頃までは行はれた由、「用捨箱」(卷上)に見えてゐる。【島津】

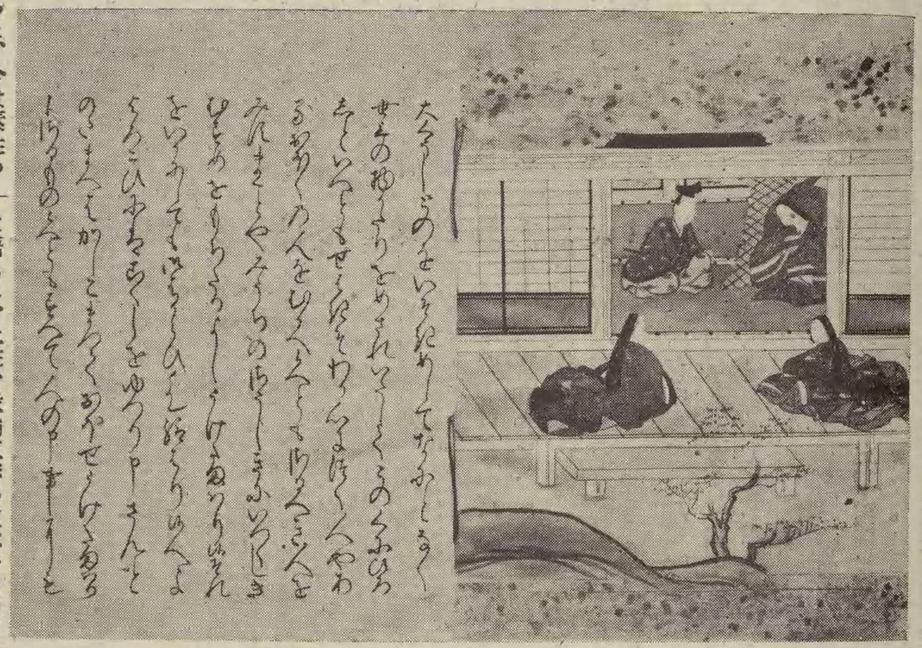
【參考】用捨箱(柳亭種彥)○近古小說解題

文章達德錄 ぶんしやうたつとくろく

漢文作法書百卷【著者】藤原惺窩【名稱】「論語」の「辭達而已矣。有レ德者必有レ言」の語に取る。【解說】作文上の格式體例を論述した書。明の吳訥の「文章辨體」を取り、これを本集に引き合

ゐる。「書乘要略」に「元黃・一峰・明文・陶山の類、皆經學文章一世に冠たり、性行高潔にして名利に恬、其山水梅竹を作るも自ら娛むにすぎず。故に人これを稱して文人畫といふ」とある。我が國では江戸時代に漢文學の勃興を見、詩人・文人が輩出するに至り、まづ支那の畫論が學者に讀まれ、餘技としての文人畫が作られたのである。それ故、胸に書卷のあるものが、繪筆を揮つたのであるから、當初の文人畫は正に理想的の境地に成つたのである。

育て上げると、國中の大名が爭つて得ようとし、かの大宮司も嫁に懇望したけれども、二人の姫は、女御后ならではと婚を厭うて承引せぬ。新任の國司衙府藏人みちしげも、婿にならうとしてこれも拒絶され、落膽して歸洛し、田舍に珍しい話と語つたのを、松殿關白の子二位中將が耳にして見ぬ戀に憧れ、病の床に臥すに至つたが、兵衞佐式部大夫とうまの助の三人に慰められ、何れも商人に姿を變へて常陸に下り、大明神に祈願した後、文正の館に着いた。都から來た物賣の詞を飾つた商賣振りに、文正は興じて家に泊めると、中將はうつくしい品々を箱に入れ、戀歌を添へて姫におくつたので、姫達の心は初めて動きかけた。西の御堂で四人が調べた管絃が餘りに面白いので、文正は娘達のために再び合奏を請ふと、簾を吹き上げた風に姉娘と中將の眼が合つた。その夜から二人は淺からぬ仲となつた。商人風情に契つたと母が歎く折柄、珍しい物賣の管絃を聞かうと大宮司が來て見ると、今は素性の現はれる時が來たとて、俄に裝束を更めてゐた中將主從の有樣に、急いで諸大名を驅り催し、めでたく歸洛の御供を勤めた。姉娘は無論都へ伴はれて北の方となり、中將は大將に昇り、大宮司は常陸を賜はり、妹娘は帝の女御に、文正は七十歳で俄に宰相中將となり、その後、女御の御腹に皇子誕生、文正は大納言に進み、百歳に餘る壽を保つた。なほ諸本文詞・內容に大同小異がある。【影響】古淨瑠璃



奈良繪本ぶんしやう正物語（小田久太郎氏藏）

に語られ、土佐少掾橘正勝の正本（「曠屋文正物語」）が傳はつてゐる。小唄にも作られ（松の落葉）、赤本には寬延二年刊麟形屋板「鹽賣文太物語」、黃表紙には、寬政九年刊櫻川慈悲成作「鹽賣文太都物語」等の作がある。

【附記】女のめでたい出世物語であるところから、昔は正月吉書の次に、女は册子の讀初めとしてこの草紙を讀む習慣が、少くとも寶永頃までは行はれた由、「用捨箱」（巻上）に見えてゐる。【參考】用捨箱 柳亭種彥 ○近古小說解題

文章達德錄 ぶんしやうたつとくろく 漢文作法書 百卷【著者】藤原惺窩【名稱】「論語」の「辭達而已矣。有レ德者必有レ言」の語に取る。【解說】作文上の格式體例を論述した書。明の吳訥の「文章辨體」を取り、これを本集に引き合せて校訂し、更に箋釋を加へ、その未だ載せざるもの數百篇を增して一部の書とした。慶長四年己亥、朝鮮刑部員外郎姜沆の序、寬永十六年己卯、堀正意の序がある。【佐久】

文章達德錄綱領 ぶんしやうたつとくろくかうりやう 漢文作法書 六卷【著者】藤原惺窩【解說】時人の作文の法を知らざるを患ひ、古人の詩話文論を集めて指南としたもの。卷一入式內錄、卷二入式外錄、卷三入式雜錄、卷四辨體內錄、卷五辨體外錄、卷六辨體雜錄から成つてゐる。文を學ぶ者は四書五經から入るがよいとて、大に孟子の文を稱揚し、諸子は純ならざる所があるが、併せ讀むべきものとなし、「學レ文須レ熟二看韓柳歐蘇一見二文字體式一。然後遍考二古文下レ句用レ意處一。蘇文當レ用二其意一。若用二其文一恐易レ厭レ人」などの言がある。【佐久】

文章法 ぶんしやうはふ 「連語論」を見よ。

文正物語 「文正草子」を見よ。

文人畫 ぶんじんぐわ 繪畫【解說】專門の畫家でなく學者・詩人・文人などの見識ある素人の手に成る繪を文人畫といひ、筆意を主とし風韻を尙んだ餘技的な繪畫である。繼浦漁者は「胸に書卷あつて繪事に通ずるもの」といつてゐる。「畫乘要略」に「元黃・一峰・明文・衡山の類、皆經學文章一世に冠たり。性行高潔にして名利に恬、其山水梅竹を作るも自ら娛むにすぎず。故に人これを稱して文人畫といふ」とある。我が國では江戶時代に漢文學の勃興を見、詩人・文人が輩出するに至り、まづ支那の畫論が學者に讀まれ、餘技としての文人畫が作られたのである。それ故、胸に書卷のあるものが、繪筆を揮つたのであるから、當初の文人畫は正に理想的の境地に成つたのである。從つて高雅にして脫俗した作を遺したのである。支那では明末から淸初にかけて南宗畫が榮え、北宗畫が衰へた。王時敏・王鑑・王石谷の三王が南宗畫を鼓吹し、文人畫を以て立つた。卽ち書畫一致の妙諦を透徹して、謝安の氣韻生動を以て畫の生命とし、王維の「畫道は水墨を以て最上とす」を理想とした。沈南蘋についで渡來した伊孚九は、單なる商賈であつて專門畫師ではなかつたが、畫に巧みで、山水畫に淸穆高雅の境地を見せ、我が文人畫界に大きな影響を與へた。池大雅・與謝蕪村（別項）・田能村竹田（別項）等の如きは傑出した畫人で、その他、祇園南海（別項）・彭百川・桑山玉洲・野呂介石・岡田米山人・浦上玉堂・靑木木米・賴山陽（別項）等は、皆文人畫家として世に重きをなした。明治初年、文人畫は漢詩と共に流行して畫壇を壓倒した。安田老山が淸國から歸つて奇矯な畫を描き、時好に投じてより、下谷は文人畳客の巢窟となり、下谷文人の語が用ひらるゝに至つた。鈴木鷹湖・福島柳圃・奧原晴湖・服部波山・藤堂淩雲等の輩出を見たが、形似を卑めて氣韻のみに走り、皮相となり、或は感覺的內容を捨棄して遂には奇筆・走筆を以て快とするに至つた。その後、時

特殊の言語を指していふ。これを單に文語といふことが多いが、他方に口語に基づく文語（口語文）が發生した後には、これと區別するために、文章語といふのが便利である。（文語參照）

文章世界 ぶんしやうせかい 雜誌【創刊】明治三十九年三月、博文館。月一回、外に臨時號を年に四回づつ發行。【解說】田山花袋は主筆となり、前田晁がその編輯に當り、初めは文章研究をその中心目的とした文學の啓蒙雜誌

「鹽燒文章」「鹽賣文太物語」「鹽燒文太物語」などの表題を附したのもある）。【成立】室町中世か。【諸本】古板本は御伽草子本、寬永整板本、承應二年板、明曆四年板、寬文四年板（長尾平兵衞板）、正德三年板（西村屋新板「文太物語」）、同年麟形屋板（「鹽賣文太物語」）、二條通大恩寺町風月庄左衞門板、山本九左衞門板（「ぶんしやう物語」）、水田甚左衞門開板本等。御伽草子前編（今泉島山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷・御伽草子（名著文庫）等所收。繪卷

勢の變遷によつて、所謂文人畫は世人に疎んぜらるゝに至つたのである。元來文人畫は、各人の個性を發揮して他に囚はれないところにその特色があるから、一貫した畫派を見ることは困難であり、むしろ一人一派と稱してよい。

【藤懸】

文藏（ぶんぞう）　能狂言　【格式】小習（和泉流）

【解說】主が夜前何處からか歸つて來た冠者を呼び出し、暇も請はずに何處へ行つたと詰ると、京參りに行つたといひ、伯父御樣のところへ立ち寄つて、何か名は忘れたが美味しい物を御馳走になつたといふ。主はそれは一體麪類か菓子かと色々の名を擧げて見るが、そのやうな物ではなかつたと言ひ、その內に冠者は、何でもいつもお讀みになる石橋山の草子の中に出てゐる名の物であつたやうだと言ふ。主は草子を讀みながら色々尋ねるが違ふと言ふ。最後に、「眞田殿のめのとに名を文藏と答ふ」といふ所へ來ると、冠者はその文藏を食べましたと言ふ。主は扨ては汝の食つたのは溫糟（うんぞう）粥の事だらうと了解する、といふ筋。文藏と溫糟の語呂を種にした狂言である。草子を語る所が文藏の語と云つて、「二千石（じせんごく）」の語（かたり）と共に語（かたり）の代表になつてゐる。語る草子は或は「盛衰記」ともなつてゐるが、また「石橋山合戰物語」ともなつてゐるから、當代の繪草子研究上に一つの對象とならう。溫糟粥は、もと中華の臘八粥に發したものらしく、「尺素往來」には、「亥兒春餅者、十月之神樂、寒更紅糟者、臘八之佛供」とあり、「日次記事」には、「中華十二月初八日、都下諸大寺作二浴佛會一、幷贈二七寶五味粥一謂二之臘八粥一、本朝溫糟粥本二於此一乎」と見えてゐるが、「新撰類從往來」や「新札往來」にも紅糟（うんぞう）とあり、又「遊學往來」には、「點心者、夏者水纖冬者溫糟」とあるから十二月八日だけの物ではなかつたらしい。製法に關しては、「二水記」に「本朝臘八粥、名二溫臟粥一、今見レ所レ造、昆布・串柿・大豆粉・菜葉、相合製レ之」と記されてゐる。

【瀧田】

文體（ぶんたい）　修辭學　【解說】文章はその用語の如何に由り、修飾の如何に由り、內容の如何に由り、作者個性の如何に由つて、種々の文體を生ずる。大別して修飾の少いものと多いものとの二つとすることができる。素樸體・輕妙體は前者に屬し、技巧體・莊重體・華麗體は後者に屬する。そのうち輕妙體は多く筆致の如何に由るもので、必ずしも修飾の多少に拘はらぬこともある。(一)素樸體。又單純體ともいふべく、用語を成るべく節約し、修飾を少くし、表現に無理がなく、すべて素直に落ち着いた文章をいふ。概して智的文章、實用的文章にその例が見られる。(二)莊重體。その用語・修飾が重々しく、その內容も嚴肅・敬虔を旨とするものをいふ。たとへば「祝詞」「宣命」「神皇正統記」等の文がこれに屬する。(三)技巧體。用語に苦心して一言一句も疎かにせず、言ひ廻しを巧みにしたもの。西鶴・近松・紅葉・一葉などの文がこれに屬する。(四)輕妙體。表現をすら〳〵とし、行文流暢で、間々機智の閃きを示すもの。一九・三馬・篁村等の文はその例であらう。(五)華麗體。素樸體と相對するもので、文辭・詞飾を豐富にし、百花絢爛の概あるものである。「源氏物語」や謠曲の文、京傳・馬琴・紅葉などの文はこれに算ふべきもの。

【武島】

文太物語（ぶんたものがたり）　「文正草子」を見よ。

文晁派（ぶんてうは）　繪畫　【解說】谷文晁を祖とする日本畫の一流派。谷文晁（天保十一年歿、七十八歲）は畫を以て田安家に仕へ、また松平樂翁に從つて「集古十種」の編纂にも當り、諸國山川の寫生旅行をも遂げた。その畫事上の著書としては「本朝畫纂」「日本名山圖會」等が殊に名高い。初め畫を加藤文麗に學び、後、渡邊玄對・鈴木芙蓉等の諸家に就いて技を練り、更に廣く古今の畫蹟を學んで遂に南北兩宗の筆法を渾融した獨自の畫格を大成した。かくて江戶に於て畫名大に揚り、その門に集るもの頗る多く、恰も文化・文政の畫壇に於ける大御所たるの觀を呈した。その子に、谷文一・谷文二があり、その門人としては渡邊華山・高久靄厓・春木南湖・鈴木鷺湖・大西椿年・金子金陵等があり、その間畫技に夫々多少の差こそあれ、文晁の南北兩宗合併の樣式を分け持つて、おのづから一派として氣脈相通ずるところが見られる。しかし當時は南宗畫極盛の時で、文晁と雖もその南北の合一樣式に聊か無理なところがあつたことであり、門人に至つてはこの一派らしい氣格を保有しつつも、既に早く華山や靄厓等に於て純粹な南畫の境地を復活せしむる傾向が著しかつた。

【田中(一)】

天保九如圖（谷文晁筆）

文典（ぶんてん）　【名義】文法書・語法書（但し「詞の玉橋」（別項）が最も古いものである。これより先、富士谷成章の名・裝・挿頭・脚結の分類は品詞類別の嚆矢をなし、次いで鈴木朖の體の詞、且爾遠波、形狀の詞、作用の詞の區別の如き、或は東條義門の體言・用言の區別の如き、それ〴〵學者にその說があるが、未だ品詞（別項）全體について纏まつた文典を組織するには至らなかつた。蓋し「詞の玉橋」は純粹に國學者の間に發達した考說によつて文法を叙述した文典の先驅を成すものと謂つてよからう。廣陰は言語を言・詞・辭の三種に大別し、次に言を五種、詞を六種、辭を五種に分けて

文法、又は語法の意味に用ひたこともある）。

【沿革】國語の文法的研究は、はやく歌學の側から發達し、且爾乎波及び活用の論は、文法の二大研究事項として、國語學界の廣汎なる視野を成すものであつたが、國語の品詞全體を研究の對象とし、文法的範疇を明かにするが如きことは、邦人の得意とする所ではなかつた。後の西洋文典の影響の下に生れて、西洋流の品詞分類によつて叙述せられた文典を措いては、品詞の類別を行ひ、文典の體裁を整へたものと言へば、文政九年に出た富樫廣陰の「詞の玉橋」（別項）が最も古いものである。これより先、富士谷成章の名・裝・挿頭・脚結の分類は品詞類別の嚆矢をなし、次いで鈴木朖の體の詞、且爾遠波、形狀の詞、作用の詞の區別の如き、或は東條義門の體言・用言の區別の如き、それ〴〵學者にその說があるが、未だ品詞（別項）全體について纏まつた文典を組織するには至らなかつた。蓋し「詞の玉橋」は純粹に國學者の間に發達した考說によつて文法を叙述した文典の先驅を成すものと謂つてよからう。廣陰は言語を言・詞・辭の三種に大別し、次に言を五種、詞を六種、辭を五種に分けて說明した。安政四年に出た堀秀成の「雛菉」はこの「詞の玉橋」の說を祖述したものである。また弘化二年刊行の鈴木重胤の「詞の捷徑」も「玉橋」の組織を踏襲したもので、廣陰の學を繼いだ人からは、「玉橋」の說の剽竊とさへ評されたが、その組織は學者の間に大に歡迎せられ、明治時代に入つて、國學者の手に成つた文典は、この書の體裁を襲うてゐるものが多かつた。西洋流の文典は和蘭文典の影響によつて生れた。江戶時代、蘭學の流行と共に、はやく享和頃、長崎の通辭中野柳圃が和蘭語

あり、國語の語性に忠實なるものは、組織に不合理なものが多い。この點に於て明治三十年に出た大槻文彥の「廣日本文典」（別項）は、巧みに兩者を折衷し、我が文典組織の上に一時期を劃したものであつて、今日まで比較的多くの信奉者を得た所以である。併し今日は既に國語學も進步し、文法の研究も大に面目を革めてゐる。文法研究の新しい針路を定める上に於ては、山田孝雄氏の「日本文法論」（別項）（明治四十一年刊）、松下大三郎氏の「標準日本文法」（大正十三年刊）の如きは、蓋し頂戴すべき論

句の末の字、第二句の末の字は、聲を同じうしてはならぬといふことである。(三)鶴膝とは、第一句の末の字、第三句の末の字は、聲を同じうしてはならぬといふことである。(四)蜂腰とは、第一句の中に於て第二字と第五字とは、聲を同じうしてはならぬといふことである。(五)大韻とは、一韻以上は、韻字に同じきものがあつてはならぬといふことである。例へば新の字を以て韻とすれば、復た鄰・親・伸などの如く、上平十一眞に屬する文字を用ひてはならぬといふことである。(六)小韻

心と謂ふべきものであるから、これを以て「文筆眼心」と名づけたとある。この書は「文鏡祕府論」の要を抄拔したもので、從つて眼心はこれ抄の義である。故に自序中には「抄」の字なく、明了房信範の「悉曇鈔」に引くところまた「抄」の字はない。抄の字は恐らく後人が附け加へたものであらう。【成立】弘仁十一年仲夏【諸本】京都山田鈍氏、弘法大師眞蹟本と稱する「文筆眼心抄」の古寫本を藏し、これに依つて「文筆眼心抄釋文」一卷を刊行したが、

或は「盛衰記」ともなつてゐるが、また「石橋山合戰物語」ともなつてゐるから、當代の綺草子研究上に一つの對象とならう。溫糟粥は、もと中華の臘八粥に發したものらしく、「尺素往來」には、「亥兒春餠者、十月之神樂、寒更紅糟者、臘八之佛供」とあり、「日次記事」には、「中華十二月初八日、都下諸大寺作二浴佛會一、幷贈二七寶五味粥一謂二之臘八粥一、本朝溫糟粥本二於此一乎」と見えてゐるが、「新撰類從往來」や「新札往來」にも紅糟とあり、又「遊學往來」

輕妙體。表現をすら／＼とし、行文流暢で、間々機智の閃きを示すもの。一九・三馬・篁村等の文はその例であらう。(五)華麗體。素樸體と相對するもので、文辭・詞飾を豐富にし、百花絢爛の概あるものである。「源氏物語」や謠曲の文、京傳・馬琴・紅葉などの文はこれに算ふべきもの。〔武島〕

文太物語 ぶんたものがたり 「文正草子」を見よ。

文晁派 ぶんてうは 繪畫【解說】谷文晁を祖とする日本畫の一流派。谷文晁(天保十一年歿、等があり、その間畫技に夫々多少の差こそあれ、文晁の南北兩宗合併の樣式を分け持つて、おのづから一派として氣脈相通ずるところが見られる。しかし當時は南宗畫極盛の時で、文晁と雖もその南北の合一樣式に聊か無理なところがあつたことであり、門人に至つてはこの一派らしい氣格を保有しつつも、既に早く華山や靄厓等に於て純粹な南畫の境地を復活せしむる傾向が著しかつた。〔田中(一)〕

文典 ぶんてん 【名義】文法書・語法書(但し

類は品詞類別の嚆矢をなし、次いで鈴木朖の體の詞、弖爾遠波、形狀の詞、作用の詞の區別の如き、或は東條義門の體言・用言の區別の如き、それ／＼學者にその說があるが、未だ品詞(別項)全體について纏まつた文典を組織するには至らなかつた。蓋し「詞の玉橋」は純粹に國學者の間に發達した考說によつて文法を敍述した文典の先驅を成すものと謂つてよからう。廣蔭は言語を言・詞・辭の三種に大別し、次に言を五種、詞を六種、辭を五種に分けて

說明した。安政四年に出た堀秀成の「蘿蔓」はこの「詞の玉橋」の說を祖述したものである。また弘化二年刊行の鈴木重胤の「詞の捷徑」も「玉橋」の組織を踏襲したもので、廣蔭の學を繼いだ人からは、「玉橋」の說の剽竊とさへ評されたが、その組織は學者の間に大に歡迎せられ、明治時代に入つて、國學者の手に成つた文典は、この書の體裁を襲うてゐるものが多かつた。西洋流の文典は和蘭文典の影響によつて生れた。江戶時代、蘭學の流行と共に、はやく享和頃、長崎の通辭中野柳圃が和蘭語に於ける九品・六格・六時を說き、次いで蘭文典の輸入が相次いだが、天保三年篤胤門下の鶴峯戊申は「語學新書」(別項)を著はし、蘭文典の組織に則つて、九品・九格をあげて國語の文法を說いた。これが西洋流の文典の最も古いものである。併しこれは、體系が煩瑣であつた爲め、當時未だ多くの追隨者を出さなかつたが、次いで英學の勃興となり、各種の英吉利文典が輸入せられ、更に飜刻せらるゝに及んで、邦人も西洋文典の體系に親しむに至つた。明治になつて出た文典は「語學新書」と同じく西洋文典の系統を引くものか、若しくは「詞の玉橋」の說を繼ぐ國學系統のものである。堀秀成の「語學階梯」(明治十年刊)は言・詞・辭の分類上に文法を說き、物集高見の「初等日本文典」は、文字論と言語論の二部を具へて何れも「詞の玉橋」の流を汲むものである。明治七年に出た田中義廉の「小學日本文典」(別項)は文字學・言辭學・文章學の三篇を具へ、明治九年刊行の中根淑の「日本文典」は、文字論・言語論・文章論・音調論に分ち、西洋文典の組織に則つて文法を說いたものである。西洋文典を摸倣したものは、國語の本質を逸する憾があり、國語の語性に忠實なるものは、組織に不合理なものが多い。この點に於て明治三十年に出た大槻文彥の「廣日本文典」(別項)は、巧みに兩者を折衷し、我が文典組織の上に一時期を劃したものであつて、今日まで比較的多くの信奉者を得た所以である。併し今日は既に國語學も進步し、文法の研究も大に面目を革めてゐる。文法研究の新しい針路を定める上に於ては、山田孝雄氏の「日本文法論」(別項)(明治四十一年刊)、松下大三郎氏の「標準日本文法」(大正十三年刊)の如きは、蓋し傾聽すべき論議を含むものと言つてよからう。

【參考】國語學史 保科孝一 〇日本文法史 福井久藏　〔小林〕

文舞 ぶんのまひ 「舞樂」を見よ。

分配 ぶんぱい 「嵐」を見よ。

文筆 ぶんぴつ 漢文【名義】文筆とは、「文心彫龍」に說明して「今の常言に文あり、筆あり。以爲へらく、韻なきものは筆なり、韻あるものは文なり」といつてゐる。【性質】文とは詩賦・銘頌・箴讃・弔誄などを指していひ、筆とは詔策・移檄・章・奏書・啓などを指していふ。文は二句を以て成り、筆は四句を以て成つてゐる。文は韻に繫いで兩句相會して諧合を取つてゐるが、筆は韻を取らずして四句にて成る。故に筆の四句は、文に於ては二句にてこれをならはすのである。「文筆」には十病得失といふことが論ぜられてゐる。十病得失とは、平頭・上尾・鶴膝・蜂腰・大韻・少韻・正紐・傍紐・隔句上尾及び蹈發聲を指していふ。(一)平頭とは、第一句の上の字、第二句の上の字、第一句の第二字、第二句の第二字は、聲を同じうしてはならぬといふことで、聲とは平・上・去・入の四聲(別項)をいふ。(二)上尾とは、第一句の末の字、第二句の末の字は、聲を同じうしてはならぬといふことである。(三)鶴膝とは、第一句の末の字、第三句の末の字は、聲を同じうしてはならぬといふことである。(四)蜂腰とは、第一句の中に於て第二字と第五字とは、聲を同じうしてはならぬといふことである。(五)大韻とは、一韻以上は、韻字に同じきものがあつてはならぬといふことである。例へば新の字を以て韻とすれば、復た鄰・親・伸などの如く、上平十一眞に屬する文字を用ひてはならぬといふことである。(六)少韻は一に小韻とも書いて、二句のうち、本韻を除いて、若し既に梅といふ字があれば、復た開・來・隈の如き上平十灰に屬する文字を用ひてはならぬといふことである。(七)正紐とは凡そ四聲を正紐となす。例へば、壬・荏・袵・入の如きものをいふ。二句の中に、既に壬の字があれば、復た荏・袵・入などの文字を用ひてはならぬといふことである。(八)傍紐とは、雙聲をいふ。二句の中、既に風の字を用ひてあれば、復たこれを用ひてはならぬといふことである。(九)隔句上尾とは、第二句の末の字、第四句の末の字は聲を同じうしてはならぬといふことである。(十)蹈發聲とは、第四句の末の字、第八句の末の字は、聲を同じうしてはならぬといふことである。以上十條の規則を嚴守したるものを得といひ、干犯せるものを失といふのである。(韻參照)

【參考】文鏡祕府論 僧空海　〔西澤〕

文筆眼心抄 ぶんぴつがんしんせう 詩文評論 一卷【著者】釋空海【名義】この書の自序に、「文鏡祕府論」(別項)は要にして玄であるが、披誦するにやゝ記し難き所がある。故にその要を抄りて一軸の手鏡となす。これ文の眼、筆の心と謂ふべきものであるから、これを以て「文筆眼心」と名づけたとある。この書は「文鏡祕府論」の要を抄掇したもので、從つて眼心はこれ抄の義である。故に自序中には「抄」の字なく、明了房信範の「悉曇鈔」に引くところまた「抄」の字はない。抄の字は恐らく後人が附け加へたものであらう。【成立】弘仁十一年仲夏【諸本】京都山田鈍氏、弘法大師眞蹟本と稱する「文筆眼心抄」の古寫本を藏し、これに依つて「文筆眼心抄釋文」一卷を刊行したが、誤脫頗る多き故、長谷寶秀氏が「冠註文筆眼心抄」を作つてこれを訂正した。「弘法大師全集」所收本はこの書によつてゐる。【內容】編次は必ずしも「文鏡祕府論」と一致してゐない。卽ち「文筆眼心抄」では、四十四凡例・四聲譜・十二種調聲・八種韻・六義・十七勢・十四例・二十七種體・八階・六志・二十九種對・文二十八種病・筆十病・筆二種勢・文筆六體・文筆六失・定位四術・定位四失・句端の順序となつてゐる。このうち、四十四凡例と云ふは、「文鏡祕府論」卷第四の論文意より抄錄したもの、二十七種體の終り十七體も亦、論文意の文中より取りてこれに加へたるもの、その他は、ほぼ「文鏡祕府論」に同じく、ただその說明が簡に從ふのみである。而してその內容・價値に至つては、勿論「文鏡祕府論」と同じきものである。(文鏡祕府論參照)　〔加地〕

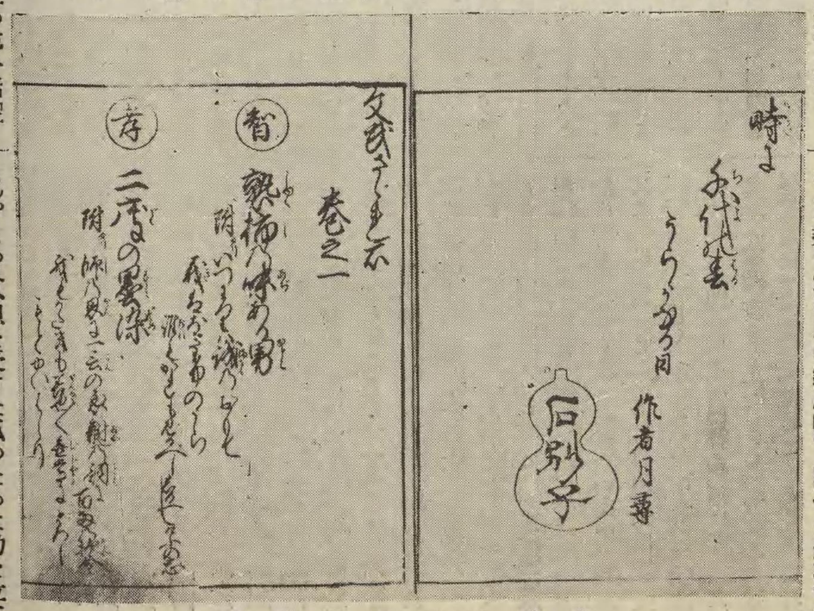
文福茶釜 ぶんぶくちやがま 童話【解說】近世の童話は何れも變化してゐるが、その變化の樣式には自ら種別がある。たとへば「桃太郎」(別項)の如く、主として在來の一話を兒童のために省略して用ひようとしたものの外に、また「花咲爺」(別項)の如く、二つ以上の面白い部分を、わざと組合せたらしいものもある。さ

うしてこの「文福茶釜」などは、更にもう一歩を踏み出して、新に數衍を試みた點が、やゝ今日の製作童話に近くなつてゐるのである。寺の什寶の中に、奇拔な由來談をもつた茶釜がある例は、必ずしも上州館林在の茂林寺だけでなく、時としてはただの村々の舊家にも、傳説ある茶釜を珍重してゐるものが知られてゐるが、それとこの童話とは實は關係が薄かつたらしく、單に茂林寺の場合でのみ、後者に影響せられて誰かがそんな名稱を附したもののやうに見える。現在採集せられてゐる民間説話の中で、最も「文福茶釜」の童話と緣の深いものは、一種の動物報恩譚であつた。狐又は狸が、或る貧しい男の好意に酬い、又はその善心を賞せんがために、身を茶釜に變じて寺へ賣られて行く。或は馬になり美女に變じて、長者の家に買はれたといふ話にもなつてゐるが、この方はまだ可笑味が少い。これに反して茶釜の場合に於ては、川へ洗ひに行くと小僧痛いぞ、小僧そつと磨けと謂つたので、小僧が吃驚して釜を落したとか、又は走つて歸つて和尚に話したとかいふ點で、兒童を笑はせてゐる。和尚がそれにも構はず、その茶釜を爐に掛けさせると、小僧熱いぞ〳〵と茶釜が物を言つた。さうして終りには尾を出し脚を露はして、茶釜が飛び出したといふに至つて、幼ない聽衆も腹をかゝへて高笑ひせずにはゐられなかつたのである。この類の笑話の通例として、後にはその賣手が滑稽なる小さき惡者ともなり、若しくは話し手の名とも混同してゐるが、前の二つの笑ひで童話としての目的は既に遂げたので、他の部分の話し方は次第に自由になつたのである。文福といふのは實に好文字であつて同時に茶釜の湯の沸く音の擬聲語でもあつた。それで後々の「文福茶釜に毛が生えた」といふ中心の文句の發明せられたことは、ちやうど中世の歌物語の歌が、時代と共に新しくなつたのも同じであつたかと思ふ。子供の繪本にも、この童話は折々採錄されてゐるが、實はその形態は今なほ固定してゐない。これを口で話すものに至つては、殆ど家毎にそれ〴〵の變化があることは、注意して比較して見れば直ぐに判るであらう。つまりはこれが都市に入つて、或る一つの形になつた時代が、他の何れの童話よりも新しいからで、我々はこれによつて説話進化の過程を學び知ることが出來るのである。前代の隨筆學者たちに援用せられた狐狸の僧、ことに會津の某寺の長命僧が實は狸であつて、寺の大會に小さな茶釜から數百人の茶を汲んだ。その茶釜が今でも傳はつてゐるといふ類の緣起は、全く別の傳説であつてこの童話とは交渉がない。現に一方は狸の形を現はして、遁げ去つたやうに話するに對して、これはその實物が今なほ冷然として寺に遺つてゐるのである。但しこの童話でない方の口碑の發生した原因が、今はまだ明かになつてゐない。これを討究したら或は最古に於ける二者の聯絡、卽ち寺や舊家がこんな物を寶物とした動機と、狐狸報恩の説話に茶釜を持つて來た理由とが、もとは相近い心理現象であつたといふ説が成立つかも知れぬといふのみである。

〔柳田(國)〕

文武訓（ぶんぶくん）「益軒十訓」を見よ。

文武さゞれ石（ぶんぶさゞれいし）浮世草子　六冊　【作者】序文末に、「石別子」の署名があるが、月尋堂と同人と思はれる。【別稱】「文武君が代礫石」。後に「武道眞砂日記」と改題。【刊行】正德二年【諸本】珍本全集後編(昭和版帝國文庫)所收(五卷まで)。「武道眞砂日記」は珍本全集下卷(舊版帝國文庫)所收。【解説】各卷三つづつ總計十八の説話を收めてゐる。書名でも、又は目錄中各説話の上に「智」「孝」「惡」「義」「非」「理」「勇」等の文字を冠してゐる點からも察し得るやうに、武士生活を描き、義理を主眼とした教訓的のものであるが、種々複雜な經路を採り、また敵討をなさんとして自省や考慮によつて思ひ止まつたり、或は相討ちに終つたりするやうな特異なものが、大部分を占めてゐるのはやゝ注目に値する。卷之二の第一話「女の半弓つるある妹脊」は、野村才右衞門の妹おゆき弟才次郎の二人が、兄の敵今村丹右衞門と思ひ誤つて鹽山善太夫なる者を討つ。善太夫の娘小しほは、居合せた蘆澤九郎右衞門といふ侍と夫婦の契約をして姉弟に迫ると、蘆澤は「善太夫は己が叔父の敵」なる旨を語つて四人揃うて今村を探し出し、三人に今村を立合はせ、今村が三人に一太刀づつ斬られた處で引分けて諭し、皆揃つて本國に歸參の上、親しく交はるに至るといふ物語であり、卷之五の第一話「子は親に似る釣髭」は、平野文左衞門の倅文十郎は、父が最上城主に仕へたので、母を伴ひ京からその地に下る途中、母が土山で落馬絕命したのを旅の侍から藥を貰ひ救はれる。侍の話を聞くに我が父を親の仇と覗ふ富永藤七といふ者と分つて驚いたが、父に代つて討たれようと思ひ、變裝して名乘り迫る。藤七はそれと知り、互に義理を立てて斬り合うたが相討ちとなつて死ぬ。文十郎の母はこれを見て自害し、父もこの由を傳へ聞いて切腹したといふ話である。(この話は園水の「一夜船」(別項)中の「乘りかけ馬の鈴鹿峠」と同一の題材である)。この外、恩を受けた狐のために功を立てる話や、亡靈の賴みでその恨を晴らすのに助力した話のやうな非現實的な物語も含まれてゐる。西鶴の武家物の流を汲んだものに違ひないが、相當趣向にも努力したらしく思はれ、文詞もかなり巧みである。



【附記】前述の如く、本書は後に「武道眞砂日記」と改題刊行(明和九年の本がある)されたが、何故か第六卷を省き五卷五册となつてゐる。この「眞砂日記」の序に、原本の「石別子」の印を削り、「月尋堂」と入木してあるので、石別子は月尋堂の別號と認められる。

〔增田〕

【參考】新撰列傳體小說史(上卷)水谷不倒　〇珍本全集後篇解題(昭和版帝國文庫)藤村作

文武二道萬石通（ぶんぶにだうまんごくとほし）黃表紙　三册　十五丁二十圖　【作者】朋誠堂喜三二よつて、ぬらくら武士を文武の何れかに入れ込む祕策を家臣に授ける。(8)箱根湯元、或る大名ども、生花・蹴鞠を樂しんでゐる。これはぬらくらを箱根七湯で晒さうとする重忠の計略であつた。(9)同じく湯元、茶湯・聞香。(10)塔の澤、碁・將棋・河東節。(11)同じく塔の澤めぐり、俳諧。(12)堂ケ島、亂舞・釣・投網。(13)宮の下、楊弓・義太夫。(14)木賀、豐後節・小鳥飼。(15)底倉、身振聲色・相撲拳。〔下册〕(16)重忠、家臣と共に前の遊びによつて、ぬらくら武士を文武の何れかに入れ込む祕策を家臣に授ける。(8)箱根湯元、或る大名ども、生花・蹴鞠を樂しんでゐる。これはぬらくらを箱根七湯で晒さうとする重忠の計略であつた。(9)同じく湯元、茶湯・聞香。(10)塔の澤、碁・將棋・河東節。(11)同じく塔の澤めぐり、俳諧。(12)堂ケ島、亂舞・釣・投網。(13)宮の下、楊弓・義太夫。(14)木賀、豐後節・小鳥飼。(15)底倉、身振聲色・相撲拳。〔下册〕(16)重忠、家臣と共に前の遊びによつて大名たちを試み、散々の目に遭はせる。(18)大磯の遊廓、諸大名大酒宴。(19)諸大名遊興費に窮し、皆池を回つて無間鐘の見え、池底から多數の千兩箱が出る。これも重忠の計らひ。(20)重忠の前で、さきに追劍に扮した家臣等に裸にされた大名、女裝した重保に戲れかゝつた大名達が面皮を剝がれて恐縮する。(21)賴朝、諸大名に文武二道を學ぶべきことを說諭する。

【構想】天明七年六月、松平定信が老中首座といたほどだと「江戸作者部類」に見えてゐる。それもうがちの激しさが人々の興を唆つたのであらう。或は作者は譴責されて戲作に筆を絕つたともいふのは、このうがちが累を成したのであらう。されば初版の第十九の圖に、「穴をくわしくさがしましたれどけんぶつにはいちゝわかりかねます」とあつたのを、再版の折改刻して、その文字を省いたのは、その筋の檢閱に備へたのであらう。黃表紙名作二十三部の一、寬政元年、春町作「鸚鵡返文武二

【附記】前述の如く、本書は後に「武道眞砂日記」と改題刊行（明和九年の本がある）されたが、何故か第六巻を省き五巻五冊となつてゐる。この「眞砂日記」の序に、原本の「石別子」の印を削り、「月尋堂」と入木してあるので、石別子は月尋堂の別號と認められる。【増田】

【參考】新撰列傳體小說史（上卷）水谷不倒（珍本全集後篇解題（昭和版帝國文庫）藤村作

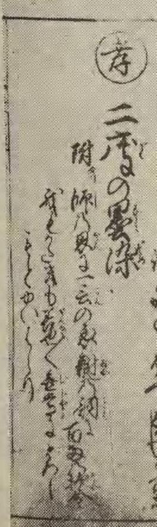
文武二道萬石通　ぶんぶにだうまんごくとほし　黄表紙　三册　十五丁二十圖　【作者】朋誠堂喜三二【畫工】行磨【名稱】萬石通とは米と糠とを擇り分ける農具であるが、その理方によつて諸大名を文武の二道に分けたとの義。【刊行】天明八年、蔦屋板。再版、年代不明。初版の半丁を改刻してゐる。【諸本】黄表紙十種（有朋堂文庫）・黄表紙二十五種（日本名著全集）・赤本黒本青本（名著文庫）・黄表紙集（近代文學大系）・黄表紙百種（續帝國文庫）所收。なほ大阪の書肆鹿田の複製本がある。【題材】頼朝が富士の人穴をさぐらしたといふ傳説及び松平定信の革政の史實。【梗概】（上册）（1）自序、署名龜山人。（2）頼朝密に諸大名を文武二道に部分けすることを命ずる。（3）重忠指圖して諸大名を富士の人穴に入れる。（4）富士の人穴の中、諸大名を文雅洞・妖怪窟・長生不老門の三つの入口に分れて入る。（5）同裏口、長生不老門の拔穴に入つた者、覆（くつがへ）しておいたとろろ汁にすべる。皆ぬらくら武士である。（6）重忠、文より武の方が多いことを頼朝に報告、頼朝の喜び。（中册）（7）重忠、主命によつて、ぬらくら武士を文武の何れかに入れ込む秘策を家臣に授ける。（8）箱根湯元、或る大名ども、生花・蹴鞠を樂しんでゐる。これはぬらくらを箱根七湯で晒さうとする重忠の計略であつた。（9）同じく湯元、茶湯・聞香。（10）塔の澤、碁・將棋・河東節。（11）同じく塔の澤めぐり、俳諧。（12）堂ケ島、亂舞・釣・投網。（13）宮の下、楊弓・義太夫。（14）木賀、豐後節・小鳥飼。（15）底倉、身振聲色・相撲拳。（下册）（16）重忠、家臣と共に前の遊びによつて、大名を文武の二道に分ける。茶・香・生花・大名たちを試み、散々の日に遭はせる。（18）大磯の遊廓、諸大名大酒宴。（19）諸大名遊興費に窮し、皆池を回つて無間鐘の見え、池底から多數の千兩箱が出る。これも重忠の計らひ。（20）重忠の前で、さきに追剝に扮した家臣等に裸にされた大名、女裝した重保に戯れかゝつた大名達が面皮を剝がれて恐縮する。（21）頼朝、諸大名に文武二道を學ぶべきことを說諭する。

文武二道萬石通

【構想】天明七年六月、松平定信が老中首座となつて、田沼父子の弊政を根こそぎ改革するとて、大に文武儉約を奬勵した。その文武奬勵を滑稽化したのがこの作である。作意は奬勵する側の諷刺でなく、寧ろ諷刺されて狼狽する武士のぬらくら側の諷刺にあつたらう。滑稽化の手段は二つに分れてゐる。文と武の武士を富士の人穴と萬石通の附會の趣向で選擇することと、文にも武にも屬してゐない武士のぬらくらをなくすために箱根七湯の湯ざらしにすることである。作者は大體の筋立をこゝにおくと共に、相應に細かいうがちを加へてゐる。挿繪の人物には、一々姓名の略字と覺しき文字を紋所のやうにして書いてゐるが、その中には當時それと合點される實在の人物、革政に就いて起用され、また排斥された人物の名も、頼朝・重忠などの外に多く交へてゐる。例へば本は若年寄本多忠籌、石は石河政房などの例であらう。【史的地位】定信の革政は一世を搖がしただけに、それを覗つた黄表紙の數はかなりの數に及んでゐる。その中で、この作は最初のものであり、又うがちの微細に入つてゐることに於て、重要な地位を占める。出版當時、古今未曾有、前代未聞の大流行で、早春から袋入にして市中を賣り歩いたほどだと「江戸作者部類」に見えてゐる。それもうがちの激しさが人々の興を唆つたのであらう。或は作者は譴責されて戯作に筆を絶つたともいふのは、このうがちが累を成したのであらう。されば初版の第十九の圖に、「穴をくわしくさがしましたれどけんぶつにはいち〳〵わかりかねます」とあつたのを、再版の折改刻して、その文字を省いたのは、その筋の檢閲に備へたのであらう。黄表紙名作二十三部の一、寛政元年、春町作「鸚鵡返文武二道」（別項）は最も近い類作である。【山口】

文々舍蟹子丸　ぶん〳〵しやかにこまる　狂歌師【本名】久保有弘。字は匡寛、通稱は泰十郎。【別號】晩年、葛飾翁と改む。【生歿】生年未詳。天保八年（一八三七）三月九日歿。享年七十餘【墓所】本所大久寺【閲歴】江戸本所割下水に住した幕府の徒士。初め狂歌を朱樂菅江（別項）に學んだが、後、葛飾連を組織してその長となつた。横堀、又葛飾蟹子丸の狂名は蜀山人が付けたのだと云ふ。生計が裕かであつた爲め、費用を惜しまず斯道の擴張に努めたので、狂歌界では勢力もあり、本所・深川等に多數の門人を持つてゐた。歿後男有常（初號文花機清丸）が父の後を繼いで、二世文々舍蟹子丸と名乘り、葛飾連の判者となつた。【著書】狂歌畫夜行事集二册（文政四年刊）○狂歌作者一覽二册（同八年刊）○狂歌略畫職人盡二册（同九年刊）○狂歌千人一首二册（同十年刊）○狂歌江戸名物百首二册（同年間刊）○狂歌極彩色百人一首二册（同年間刊）○狂歌百花鳥二册（同年間刊）○追福狂歌集一册（二世文々舍蟹子丸撰）（天保九年刊）【野崎】

分別書方　ぶんべつかきかた　國語問題【名稱】分別書法とも、分ち書きともいふ。【解説】處々



し出し、三人に今村を立合はせ、今村が三人に一太刀づつ斬られた處で引分けて諡し、皆揃つて本國に歸參の上、親しく交はるに至るといふ物語であり、卷之五の第一話「子は親に似る鈎髭」は、平野文左衞門の倅文十郎は、父が最上城主に仕へたので、母を伴ひ京からその地に下る途中、母が土山で落馬絶命したのを旅の侍から藥を貰ひ救はれる。侍の話を聞くに我が父を親の仇と覗ふ富永藤七といける二者の聯絡、即ち寺や舊家がこんな物を寶物とした動機と、狐狸報恩の説話に茶釜を持つて來た理由とが、もとは相近い心理現象であつたといふ説が成立つかも知れぬといふのみである。【柳田（國）】

文武訓　ぶんぶ　「益軒十訓」を見よ。

文武さゞれ石　ぶんぶささゐれいし　浮世草子　六册【作者】序文末に、「石別子」の署名があるが、月尋堂と同人と思はれる。【別稱】「文武君が代礫石」。後に「武道眞砂日記」と改題。

と茶釜が物を言つた。さうして終りには尾を出し脚を露はして、茶釜が飛び出したといふに至つて、幼ない聽衆も腹をかゝへて高笑ひせずにはゐられなかつたのである。この類の笑話の通例として、後にはその賣手が滑稽なる小さき惡者ともなり、若しくは話し手の名とも混同してゐるが、前の二つの笑ひで童話としての目的は既に遂げたので、他の部分の話し方は次第に自由になつたのである。文禄といふのは實に好文字であつて同時に茶釜の

文字の間隔を廣くし、語と語とを區別して記す事及びかく記す方法をいふ。假名文にも、ローマ字文にも、漢字・假名併用文にも適用される。

【沿革】古く奈良朝の頃からの所謂宣命書に、「朝日能豐逆登爾稱辭竟奉久登宣」の如く、大小の文字を區別して書いたのも、考へやうによつては一種の分別書方であるが、現今の如き分別書方の起つたのは、文祿元年天草版の「平家物語」などの如きローマ字文が現はれてからのことである。さうして分別書方が深く研究されて發達したのは、明治十六年に「かなの　くわい」が起つて、日本語を假名のみで書くことを試み、同十八年に羅馬字會が起り、同十九年の頃、小學校の讀本に分ち書きが適用されて以來のことである。同三十七年國定教科書の制度が行はれ、文部省の圖書課に於て「分別書キ方案」の取調があり、教科書調査委員會の審議を經て、同三十九年二月發表された。併し現今では、ローマ字文と特殊の假名文の外、分別書方は普通には用ひられない。分別書方で問題となるのは、主として助詞・助動詞の類を、上の語に續けるか、又は分つかの問題であるが、これまでに研究された分別書方の大勢は、助詞は體言とは離して書き、用言に專屬する助詞は用言に續けて書き、又助動詞は多くは動詞又は他の助動詞に續けて書くのが通例となつてゐる。左に文部省の「分別書キ方案」の要項を摘錄する。

一、名詞ト代名詞ハ他ノ語ヨリ離シテ書ク

一、數詞ハ他ノ語ヨリ離シテ書ク但シ名詞ト合シテ複合語ヲ作ルモノハ此限ニアラズ

一、動詞ハ助動詞及ビ助詞ノ條ニ規定セルモノヲ除キ他ノ詞ヨリ離シテ書ク

一、助動詞ハ上ノ動詞又ハ助動詞ト續ケテ書ク但シ敬語動詞ヨリ轉ジタル助動詞、指定ノ助動詞、及ビ推量ノ助動詞「だらう」「でせう」ハ此限ニアラズ

一、形容詞ハ他ノ語ヨリ離シテ書ク

一、副詞モ接續詞モ感動詞モ他ノ語ヨリ離シテ書ク

一、助詞ハ他ノ語ヨリ離シテ書ク但シ命令ヲ表ス助詞ハ此限ニアラズ

「て」「ても」及ビ「たり」ガ促音又ハ撥音ノ下ニ來ルトキハ之ヲ續ケテ書ク

助詞ノ下ニ「は」又ハ「も」ノ來ルトキハ之ヲ續ケテ書クコトヲ得

【參考】ぶんの　かきかた(かなの　くわい ゆきの　ぶ)〇はなしことばの　きそく石川倉次〇ローマ字手引藤岡勝二〇標準ローマ字文法日下部重太郎　〔日下部〕

文法 ぶんぽふ

言語學【名稱】「語法」とも。(但し文語の文法を文法、口語の文法を語法といつて區別するものもある)。〔英〕Grammar〔獨〕die Grammatik〔佛〕la grammaire. Grammar 等は、もとギリシア語 γράμματα〔grámmata〕(字母の義)より出づ。その變化形 γραμματικός〔grammatikós〕は文字を敎へる人、讀み書きを敎へる人の義であつた。ストイク派の學者及びアレクサンドリアの學者間に於て ἡ τέχνη γραμματική〔hē (=the) technē (=art) grammatikē〕が今日謂ふ文法・語法等の義に用ひられた。

【本質】從來文法の名の下に取扱つて來たのは、言語の抽象的方面(言語材料、即ち言語表象となつたもの)が主であつた。言語材料(語句)が或る特殊な人、特殊な場合に、實地に用ひられた言語活動の方面との區別は明かでなかつた。この言語材料と活動との區別を明かにすること、而してその相互の關係を明かにすることは、將來極めて必要である。而して言語材料の研究としては別に語彙がある。即ち辭書(別項)に擧げるものである。スウィートは辭書と文法との區別に就いて次の如く言つてゐる。「箇々の事實を扱ふのが辭書で、規則に纏め得るものを扱ふのが文法である。例へば c a t の三字(三音)が連結して猫の意を表はすのは他に類例がない。かゝる事實を記すのが辭書である。然るに cats, boys, tables 等 s を附けて複數を表はすことは、多數の語に通じて言ひ得ることで、これは文法の範圍に屬する」。【種類】文法は先づ一つの國語又は方言に就いて、その言語的慣用の「規則に纏め得るもの」を記述する。而して言語的慣用は時代と共に變化するから、先づ一つの時代に就いて記述する。これ通例いふ記述的文法(descriptive grammar)である。若し同一國語又は方言の多くの時代に就いて、それぞれ記述文法が出來、更にその相互を比較して文法的事實の時代的變化を調査し、これを組織的に述べる時は、所謂歷史的文法(historical grammar)を得る。また多くの國語及び方言を集め、殊にその系統的親近なるものに就き相互比較して、各國語各方言の文法的事實の特徵を明かにし、又遡つて文獻に殘つてゐない同系共同の祖語を推定し、各國語各方言中に殘つてゐる共通性を明かにすることは、比較文法又は比較的文法(comparative grammar)の仕事である。又系統や構造を異にする諸國語を比較し、文法的形態と人の思考の働きとの關係を調査して各國語に於ける思考の特徵を明かにし、又人類全體として思考法の共通性を明かにし得れば、それは一般的文法(general grammar)となる。以上はすべて科學的研究を目的とするものである。これに對し、古典解釋の助けとするため、又は外國語學習の助けとするため、又は自國語の敎授に利するための實用的文法(practical grammar)(又は敎育的文法 didactic grammar)がある。これは多く規範を立ててこれに則るべきことを要求するから、又規範的文法(normative grammar)の名を與へることが出來る。

【研究の部門】文法は或る國語又は方言の言語材料の中、規則に纏め得るものを取扱ふのであるから、先づ單語の語形(所謂語尾變化はその一例)とその表はす意義、次に單語が多く連結する時の形式及びその連結によつて表はされる意義を研究する方面がある。前者は單語論であり、後者は連語論である。勿論單語は連語中に在つて始めて本性が明かに分るものであるから、この兩方面を全く無關係に分離する事は出來ない。又單語や連語の分類法、即ち品詞(別項)の區別及び各品詞中の細分、連語形式の分類(所謂文の形式・構造の分類)等も一つの研究部門となる。(文法範疇參照)

【研究史】ヨーロッパに於ける文法研究の萌芽はギリシヤに發する。ギリシヤ人はギリシヤ語について大體の品詞の區別及び語形變化の一部に注意したが、なほ文法と論理との區別を明かに意識しなかつた。文法としての體裁をなしたのはアレクサンドリア(紀元前三世紀以後)及びローマの學者達の研究による。例へば品詞の名稱の如き nomen (名)、verbum (動)、participium (分詞)、articulus (冠詞)、pronomen (代名)、praepositio (前置)、adverbium (副)、conjunctio (接續)、(後に nomen

を二分して substantivum と adjectivum となし、又 interjectio を加ふ等はこの頃定まり、延いて今日に及んでゐる。中世に於ては宗教にも學術にもラテン語が主として用ひられ、その必要上ラテン文法が研究された。古代以來文法の研究は古典の意義解釋又は日用の必要上、實用上の目的を以てなしたに過ぎない。文法の定義を「よく話し正しく書く術」といつたのは、この邊の事情を示すものである。英・獨・佛等近世各國語の文法は、その初めラテン文法に範を採つて作つたものである（別項「言語」中の研究略史の條參照）。十九世紀の初めより比較文法・歴史文法が起り、單なる實用的文法を離れ、言語それ自身の現象を研究の目的とするやうになつたが、文法の原理を科學的に究める仕事は、最近の心理學的言語研究により漸くその緒に就いたばかりで、大部分の仕事は將來に殘されてゐる。インドに於ては、西紀前四世紀頃の人といはれるパーニニ（Pāṇini）が、サンスクリット語の文法を非常に精密に研究した事は、世界に類の少い事實であつて、これが近世ヨーロッパの言語研究に影響を與へたといはれる。我が國で日本語の文法的事實の研究がやゝ形をなしたのは、江戸時代の半頃、本居宣長及びその子春庭の「てにをは」及び語形變化（活用）の研究、富士谷成章の品詞の研究等からであるが、江戸末期及び明治初年に、ヨーロッパの文法が紹介されて一層精しくなり、近來は西洋文法の直譯的組織を排し、日本語の本性に立脚した組織を試みる學者が現はれて來た。併しこれも言語學の理論に基いた確かな原理に據る點に至つては、殆ど何も出來てゐない。（文典參照）

【參考】日本文法論 山田孝雄 ○言語學概論 神保格 ＝ H. Paul: *Prinzipien der Sprachgeschichte*. 5. Aufl. 1920. ＝ O. Jespersen: *Philosophy of Grammar*. London 1924.

【神保】

文法改善問題（ぶんぽうかいぜんもんだい）

國語問題

【解說】從來文語體の普通文の文法として、教育上及び學問上に認められてゐるものは、江戸時代の國學者の研究に基いて中古語の法則に準據するものである。けれども中古語の法則のみによつて現代の普通文を律するのは、言語變遷の理法を無視する嫌があるばかりでなく、これまで破格又は誤謬とされたものでも、中古語の中にその用例を認め得るものが少くない。それで、教育者や學者・文士等の間に、文法改善問題が「かなのくわい」の時即ち明治十年代頃から起り、耳遠い雅言を用ひないでもよい事にしたいとの說が出て、且つ實際に於ても新聞や雜誌その他の普通文に、耳遠い雅言が淘汰されて來た。そこで文部省はこれまで破格又は誤謬とされてゐた文法の中で慣用の最も廣いものを擧げ、これを許容して從來正則とされてゐる文法と並び行はせたいと考へ、明治三十八年にその許容の件を國語調査委員會及び高等教育會議に諮問したところ、何れも審議の結果、その許容を可とすることに決定し、同年十二月二日の官報に於て、文部大臣から「文法上許容スヘキ事項」十六箇條を告示した。その後、文部省に於ては教科書の檢定又は編纂の場合にこれを適用してゐる。なほ文法許容事項の理由を明かにするため、國語調査委員會の「現行普通文法改定案調査報告ノ一」が翌三十九年三月公表になつた。現今の中等教育の國文法教科書には、正則と共に許容の文法を載せてゐる。左に「文法上許容スヘキ事項」十六箇條の要點を抄出する。

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用トスルモ妨ナシ

二、「シク、シ、シキ」活用ノ終止言（言は形の意以下も同じ）ニ「惡シシ」「勇マシシ」ナドト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三、「火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ」ナドノ例ノ如ク過去ノ助動詞「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

四、「異ナリ」ヲ「異ナレリ」「異ナリテ」「異ナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五、「手習セサス」ナドノ例ニイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

六、「許セラル」ナドトイフベキ場合ニ「許サル」ナドトイフ習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ時ノ助動詞ノ「シ」「シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

九、「花ヲ見ルノ記」「就學セシムルノ義務」ナドノ例ノ如ク助詞ノ「ノ」ハ動詞又ハ助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ續クルモ妨ナシ

十、「有ルヤ」「面白キヤ」ナドノ例ノ如ク疑ノ助詞ノ「ヤ」ハ動詞、形容詞又ハ助動詞ノ連體言ニ續クルモ妨ナシ

十一、「年ヲ經ルトモ」「如何ニ批評セラルルトモ」「強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ」ナドノ例ノ如ク助詞ノ「トモ」ガ動詞、受身ノ助動詞又ハ使役ノ助動詞ノ連體言ニ續ク習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

十二、「月出ヅルト見エテ」「嘲弄セラルルト思ヒテ」「業務ヲ取扱ハシムルトイフ」「皆其德ヲ稱ヘケルトゾ」ナドノ例ノ如ク助詞ノ「ト」ガ動詞、受身ノ助動詞、使役ノ助動詞、又ハ時ノ助動詞ノ連體言ニ續ク習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

十三、「月ト花」「宗教ト道德ノ關係」「京都ト神戸ト長崎ヘ行ク」ナドノ例ノ如ク語句ヲ列擧スルニ用ヰル助詞ノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザル限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

最終ノ「ト」ヲ省ケバ誤解ヲ生ズベキ例ハ「史記ト漢書（ト）ノ列傳ヲ讀ムベシ」「史記ト漢書ノ列傳（ト）ヲ讀ムベシ」ノ如シ

十四、「誰ニヤ問ハン」「如何ニスベキヤ」ナドノ例ノ如ク上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノ助詞ノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ（正則ニテハ「カ」ヲ置ク）

十五、「何等ノ事由アルモ（アリトモ）議場ニ入ルコトヲ許サズ」「期限ハ迫リタルモ（タレドモ）準備ハ未ダ成ラズ」ナドノ例ノ如ク助詞ノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リ「トモ」又ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

誤解ヲ生ズベキ例ハ「給金ハ低キモ（クトモ、ケレドモ）應募者ハ多カルベシ」ノ如シ

十六、「顏回ナルモノアリ」「イハユル哺乳獸ナルモノ」ナドノ例ノ如ク「トイフ」ノ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

【日下部】

文法整理問題（ぶんぽうせいりもんだい）

「國語問題」「文法改善問題」を見よ。

文寶亭文寶（ぶんぽうていぶんぽう）

狂歌師 【本名】今井久右衞門 【別號】散木・食山人、後二世蜀山人 【生歿】明和五年生れ、文政十二年（一八二九）三月二十二日歿す。享年六十二。 【法名】大雄蜀山居士 【墓所】東京市ケ谷佐内坂長泰寺 【閱歷】江戸飯田町中坂に住ひ、龜屋といふ家號で茶舖を營んでゐた。蜀山人大田南畝の門に入つて二三の戲作を出し、又狂歌も詠んでゐたが共に餘り行はれず、ただ一心に蜀山の筆蹟を學んでその骨髓を得、殆ど眞僞を

見分け難い程であつたので、書畫會の席上などでは蜀山の傍らに坐し、公然代筆を揮つてゐた。世に蜀山の僞筆の多いのは、實にこれがためである。晩年零落して下谷三筋町に移り、名を久助と改めて放浪生活を續け、師の歿後二世蜀山の名跡を乞ひ受けて、家計の挽回を謀つてゐたがその功成らず、襲名後僅か三四年にして病歿した。遺著に「文寶亭文集」がある。〔野崎〕

文法範疇 ぶんぱふはんちう　言語學〔英〕grammatical categories〔獨〕grammatische Kategorien〔佛〕catégories grammaticales.【解説】概念範疇のうちの或るものが一定の語形に表はされたものをいふ。例へば「數」とは一つの概念範疇（Conceptual or notional or logical category）である。數を分類して奇數・偶數とし、整數・分數・小數とする如き、又は百以下の數と以上の數とする如き、それぞれまた概念範疇である。そのうち英語に於ては「一」よりも多い數」といふ類が s -es 等の一定語形に表はされる慣習があるから、英語では「數」（「單數」「複數」）が文法範疇となる。日本語にはかゝる一定の語形がない。日本人も思想上數及びその分類を思考し得る以上、日本人の思想に概念範疇は成立するが、日本語に「數」なる文法範疇は存在しない。文法（別項）は文法範疇を取扱ふ。概念範疇は直接に文法の領域に入らない。

【參考】H. Paul: *Prinzipien der Sprachgeschichte.* 5. Aufl 1920.（特に Kapitel XV. *Psychologische und grammatische Kategorie*）〔神保〕

文明源流叢書 ぶんめいげんりうそうしよ　三册【編者】國書刊行會【刊行】大正二年より同三年まで。【解説】「本邦文明闡宏の源流ともいふべき洋學に關する書籍中、珍稀にして且つ趣味多きものを擇び、大約これを分類」して收載したもので、編纂者には朝倉無聲が當つた。【內容】第一卷は蘭學に關する書を集めた。蘭學事始・南蠻寺物語・天馬異聞・伊曾保物語・漂荒紀事・蘭學階梯・蘭學逕・輿地誌略・紅毛談・紅毛雜話・蘭説辨惑、外に大槻文彥の「日本文明之先驅者」を卷頭に載せてゐる。第二卷は科學的の譯書を收む。乾坤辨説・曆象新象・氣海觀瀾・植學啓原・解體新書・和蘭醫事問答。第三卷は維新前の邦人の紀行・漂流記・外人の本邦風俗視察記等を載せてゐる。航米日錄・漂流記（彥藏）・異人恐怖傳・日本風俗備考・倭蘭年表・西洋學家譯述目錄・鐵硏齋輶軒書目。洵に編者の目した通り、本叢書に依つて吾々は我が國文化の重要なる部分を形成する西洋文明の影響の根元の一斑を窺知する事が出來る。近年我が文化に浸潤した西洋文明の姿を檢討する機運が盛んであるが、最も組織的に體系的に文獻を輯めた點で、本書の價値は認められるべきであらう。〔土井〕

文明東漸史 ぶんめいとうぜんし　歷史書【著者】藤田茂吉（鳴鶴）【刊行】明治十七年九月、後、大正十五年聚芳閣から複刻本が出た。【內容】內篇・外篇の二部分より成り、內篇には、天文以後、天保年間の末に至るまで、我が國に西洋文明が輸入された經過を記し、外篇には、內篇の主な材料となつた渡邊華山・高野長英の「夢物語」「鳥の鳴音」都合五部を收め、華山及び長英傳を附してゐる。著者は凡例に於て、本書の主眼は、「天文以降三百年間、外國交際より生じた事變を記述し、西洋文明の東漸し來つた起因成果を明かにし、西洋文明進歩の有樣を一般に明示しよう」とするにあると言つてゐる。【批評】本書は當時政治小説として見られたが、事實は史論であつて一種の日本文明史たるところに特色がある。文章は漢文直譯體であるが、明晰且つ簡潔を極め、論旨がよく整理されてゐる。明治初期の史書として有名であるばかりでない。日本文明由來の硏究に、大きな效果を與へたのも當然である。【備考】後、明治四十年六月「太陽」增刊「明治名著集」に收められ、鼇頭には、犬養木堂・森田思軒・高雲外・栗本鋤庵等が漢文の寸評を加へた。〔高須〕

文明論之概略 ぶんめいろんのがいりやく　評論書【著者】福澤諭吉【刊行】明治八年四月に和裝六册本、明治十年九月に活版洋裝一册本が出で、その後屢々版を重ねた。【成立】著者の從前の著譯は專ら西洋新事物の輸入と共に我が國舊弊習の排斥を目的としたものであつたが、この度は儒敎流の故老にも訴へ、從來敵とした人をも味方とする腹案で著はしたものである。されば特に文字を筆太にし、古本の「太平記」同樣の體裁に印刷せしめたので世上の好評を博した（福澤全集緖言）。【內容】第一卷は三章より成る。（第一章）「議論ノ本位ヲ定ル事」。狹い了簡で物事を判斷せず、どんな立場から觀ても通用するやうな廣い了簡に議論の本位を立てなければならぬ。兩極端の議論ありても詮じ詰むれば一に歸する。唯その一に歸する所以を窮めずして、强ひて劃一にしようと云ふのは固より間違ひだ。（第二章）「西洋ノ文明ヲ目的トスル事」。今日日本の進むべき途は西洋文明の外にない。西洋文明には外形に現はれ耳目以て見聞すべきものと內に存する精神との二つがある。前者を得るは易く後者を得るは難い。抑も文明の要は人の天然に稟け得た身心の働きを用ひ盡して遺す所なきに在り。而して人生の天然に從ひ智德を滋生せしめ、自ら人をして高尙の域に進ましむるものが西洋文明の精髓である。故に古習の惑溺を一掃して西洋文明の精神を取入るる事を以て急務とする。（第三章）「文明ノ本旨ヲ論ズ」。智德の進歩は人々相交はる間に起る。その交際愈々廣くして自らその間に種々の制度を生ずる。併しこれ等の約束制度は要するに人間交際中の一個條たるに過ぎない。この一個條に制せられて文明全體の本旨を誤つてはならないとて、上下同權の理と君臣の義との關係を論じてゐる。第二卷では、「一國人民ノ智德ヲ論ズ」と云ふを四五兩章に分けて論じてある。（第四章）文明は即ち智德の進歩だが、その國全體を制する氣風の上に就いて見ることを要する。一國の文明を進めんとならば一人一人の智德に着眼しては駄目だ、一般人民のそれを高めなければならぬ。（第五章）一國人民の智德の論の原則に對して二つの條件を述べてゐる。一は衆論は必ずしも人の數に由らず、智力の分量に由つて强弱がある。十愚者の意に適せんとして一智者の識を招いてはいけない。二は人の議論は集つて趣を變ずるものだ。西洋に在つては集つて賢となり、東洋は集つて愚となる。而してそのかく岐るゝ所以は一に習慣に依る。この習慣の打破は衆智を集むるに組織を要すと叫んでゐる。第三卷は（第六章）「智德ノ辨」。德に公私大小の別あり、智亦然り。當今第一の急要は聰明の大智である。德も智これを導かねば私の域を脱することが出來ぬ。智を開かざれば善も惡を爲す。宗敎の爭ひ即ち然り。今日は

私德の一品を以て萬般の公務に用ひしむべき時代ではない。況んや天下の百姓をして各々その志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要すと云ふに於てをや。人の性はもと善、善の發動を妨げざるを德敎の大趣意とす。智は事物の理を窮めて活動の自由を作る下地である。私德小德の拘束を加へなくとも本人の工夫に委して善を妨ぐるものを除き自己本然の善に還らしむることは出來ると、最もよく著者の實際的經世論を披瀝してゐる。第四卷

「日本文明ノ由來」。日本に於ては諸説並立するを得ず、固より融合して一に歸するを得ず。一に歸するは即ち一が他を壓して各自の本色を失はしめた場合に限る。在るものは調和でなくして偏重だ。別言すれば權力の偏重である。而してこは獨り政府對人民の關係が然るばかりでなく、男女・主從・貴賤等、凡ゆる部面に於て然り、殊に官吏仲間に於て甚しい。段階の別あるはその事自身咎むべきにあらざるも、その間權義の差を立つるは不都合である。

の原因を古風習慣の宜しからざるに歸し、上下の分限などを廢し、働きの一方に重心を偏せしめ、浮薄の風が廣まつた。これではならぬと復古を稱へ、皇學を主張するものあり、或は建國の精神とは交渉なき耶蘇敎の採用を説くものあり、或は堯舜の道を復興すべしと論ずるものもあるが、孰れも病の因を察せずして療法を云々する類に過ぎぬ。一體我が國の獨立が心配になるのは、ただ外國との交際から來る。而して外國人が交際を求むるのは

努力奮進するの一事に歸する。即ち文明を開拓するは國家の獨立を完うする所以である。文明の目的はもつと高尙な處に在るが、差當りの急務は國家の獨立にあるから、この急務を目的としても文明に進むの必要がある。【批評】本書も著者の他の著述と同じく、廣く讀まれ又大なる感化を與へた。その感化の意味は「學問ノスヽメ」（別項）と同性質のものであるが、流石に反響は彼ほどではなかつた。けれども彼の斷片的論文集なるに似ず、これ

人の思想に概念範疇は成立するが、日本語に「數」なる文法範疇は存在しない。文法(別項)は文法範疇を取扱ふ。概念範疇は直接に文法の領域に入らない。

【參考】H. Paul: *Prinzipien der Sprachgeschichte.* 5. Aufl. 1920. (特に Kapitel XV. *Psychologische und grammatische Kategorie*)

文明源流叢書 ぶんめいげんりゅうそうしょ 三册 【編者】國書刊行會 【刊行】大正二年より同三年大正十五年聚芳閣から複刻本が出た。【内容】内篇・外篇の二部分より成り、内篇には、天文以後、天保年間の末に至るまで、我が國に西洋文明が輸入された經過を記し、外篇には、内篇の主な材料となつた渡邊崋山・高野長英の「夢物語」「鳥の鳴音」都合五部を收め、崋山及び長英傳を附してゐる。著者は凡例に於て、本書の主眼は、「天文以降三百年間、外國交際より生じた事變を記述し、西洋文明の東漸し來つた起因成果を明かにし、西洋文明進歩の有樣

ぶんめい

私德の一品を以て萬般の公務に用ひしむべき時代ではない。況んや天下の百姓をして各々その志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要すと云ふに於てをや。人の性はもと善、善の發動を妨げざるを德教の大趣意とす。智は事物の理を窮めて活動の自由を作る下地である。私德小德の拘束を加へなくとも本人の工夫に委して善を妨ぐるものを除き自己本然の善に還らしむることは出來ると、最もよく著者の實際的經世論を披瀝してゐる。第四卷は二章より成る。(第七章)「智德ノ行ハル可キ時代ト場所トヲ論ズ」。古は人民無智にして族長の恩威に賴る。私德最も效能を顯はし、その限りに於て安穩なるを得たが、人智進むに從つては自ら懷疑の念を生じ、古の秩序も德義もそのまゝ用ひらるゝ餘地は次第に少くなる。併し智がこれに代つて働き、ために德も公けに擴げられ、新しき幸福の世が出來上る。場所に就いても同樣で、今日は萬事が複雜で一から十まで規則に賴つて文明の進展を謀つてゐる。昔は政府法を設けて人民を保護したが、今日は人民法を立てて政府の專制を防ぎ以て自ら保護するに至る。ただ天下後世のため益々この規則を繁多にして次第にこれを無用ならしめんことを祈る。(第八章)「西洋文明ノ由來」。西洋文明の特色は人類の社會生活に於て諸說並立して一に歸せず、一が全勝の勢を得ずして自ら他の爲す所を容さざるを得ず、かくて諸說各々文明の一局を擔任し、而してその間自ら一方に融合統一あり、他方自由を存する所にありと前提し、ギゾーその他の書に據り、羅馬の滅亡より佛蘭西大革命までの沿革の大要を述べ、主として自由主義發達の跡をたづねてゐる。第五卷は(第九章)「日本文明ノ由來」。日本に於ては諸說並立するを得ず、固より融合して一に歸するを得ず。一に歸するは卽ち一が他を壓して各自の本色を失はしめた場合に限る。在るものは調和でなくして偏重だ。別言すれば權力の偏重である。而してこは獨り政府對人民の關係が然るばかりでなく、男女・主從・貴賤等、凡ゆる部面に於て然り、殊に官吏仲間に於て甚しい。段階の別あるはその事自身咎むべきにあらざるも、その間權義の差を立つるは不都合である。玆に彼我文明との著しき分界がある。その原因は、我が國の歷史に求むべく、所謂治亂興亡は統治者間の事、人民は全くこれを與り知らず、日本に政府あり國民なしと云ひ、又政府の歷史ありて國そのものの歷史なしと云ふ所以である。西洋は政治の權を握るも文明の權を握るにあらず。日本はこれに異り、治者にあらずんば事を爲すことが出來ぬ。故に偶々民間に才德異常の士ありても、官に仕へて始めて事を成し得べきのみ。これ我が國の學問宗教みな悉く政府の御用たるを免れざる所以である。一體政府に權力を集中するはそれ自身惡い事ではない。ただ權力の發源一處に偏局せず、人心の如何に依つて各種の意見を調合して唯その出づる處を一にしたるもの西洋の如くでなくてはならない。最後に治者被治者の階級は、經濟の點になると積む階級と散ずる階級と分れるとなし、消費と生產とが主從の關係で律せられ、經濟の融通の梗塞さゝゝ弊害を詳論してゐる。第六卷は(第十章)「自國ノ獨立ヲ論ズ」。以上の如く論ずると、悉く我は西洋に劣り、心中自國の獨立を危むものなきを保せぬ。自國の獨立のためにこそ西洋文明を說くのである。近來我の彼に及ばざるの原因を古風習慣の宜しからざるに歸し、上下の分限などを廢し、働きの一方に重心を偏せしめ、浮薄の風が廣まつた。これではならぬと復古を稱へ、皇學を主張するものあり、或は建國の精神とは交涉なき耶蘇敎の採用を說くものあり、或は堯舜の道を復興すべしと論ずるものもあるが、孰れも病の因を察せずして療法を云々する類に過ぎぬ。一體我が國の獨立が心配になるのは、ただ外國との交際から來る。而して外國人が交際を求むるのは貿易のために外ならぬ。この事に關して我々の考ふべき問題は二つある。一は外國は物を製する國柄で、我はこれを產する國だと云ふ事である。前者は人力を用ひること多く、後者は天力に依賴すること多し。經濟の道に於て一國の貧富は天然に生ずる物產の多寡に關係すること思ひの外に少くして、その實は專ら人力を用ふるの多少と巧拙とに由るものである。無形無限の人力と有形有限の產物との交易と云ふに就いては、餘程愼重の考慮を要する。且つ製物の國が段々發達すると人口の過剩に苦しむに至るものだ。さうすると彼は必ずや次の三種の對策を樹てるに相違ない。一製物を海外に輸出して衣食の品を輸入すること、二海外植民、三海外投資。この第三策は最近諸外國の好んで採用する所なるが、既に若干の外債を負へる我が日本としては、今より能くその利害得失を察せなくてはならない。第二に考ふべきは彼我人民同權の大義が尊重せられてゐぬことである。この大原則を守るには、橫暴に抗する攘夷論を以て解決せらるべき問題でない。根本の禍根は理に據つて毅然たるを得ざる我が國人の卑屈に在る。結局外國交際に於ては、目的を定めて文明に努力奮進するの一事に歸する。卽ち文明を開拓するは國家の獨立を完うする所以である。文明の目的はもつと高尙な處に在るが、差當りの急務は國家の獨立にあるから、この急務を目的としても文明に進むの必要がある。

【批評】本書も著者の他の著述と同じく、廣く讀まれ又大なる感化を與へた。その感化の意味は「學問ノスヽメ」(別項)と同性質のものであるが、流石に反響は彼ほどではなかつた。けれども彼の斷片的論文集なるに似ず、これは纏まつた一部の著作であるだけ、著者の思想を知るための好資料である。彼の著作中最も整つたものであるけれども、これを一貫した系統の下に理解することは困難であらう。併し常に時勢に卽して立論し、理窟のために理窟を云ふのではない。數多き時弊を匡救せんとして一々これを錦玉に擧げ、新時代にぼんやり目醒めかゝつた青年に、十二分の納得を得させんために巧みに理窟を揑ねたのである。彼の著作を味讀するには、先づこの點を十分に頭に入れて置かなければならぬ。加之彼は時弊匡救の目的に理窟を揑ねてゐるに拘らず、飽くまで學者らしい矜持を守り、當時としては相當深い理解を西洋の學術に寄せつつ議論を組み立ててゐる。而して天才的の閃めきが隨所に散見する。これは彼が在來の學風に反抗し、在來の考方から完全に解放されてゐる結果とも考へられる。理論方面に多少の缺點があるとしても、民衆の蒙昧度すべからざるを百も承知でありながら、飽くまで民衆の裡に居り、民衆を敎へ、民衆と共に立ち、一切の禍福を民衆と頒たんとした徹底的態度には、大に學ぶべき所がある。かう云ふ觀點からすると、本書は整然たる原理に貫かれた定ル事」。狹い了簡で物事を判斷せず、どんな立場から觀ても通用するやうな廣い了簡に議論の本位を立てなければならぬ。兩極端の議論ありても詮じ詰むれば一に歸する。唯その一に歸する所以を窮めずして、强ひて劃一にしようと云ふのは固より間違ひだ。(第二章)「西洋ノ文明ヲ目的トスル事」。今日日本の進むべき途は西洋文明の外にない。西洋文明には外形に現はれ耳目以て見聞すべきものと內に存する精神との二つがある。前者を得るは招いてはいけない。二は人の議論は集つて趣を變ずるものだ。西洋に在つては集つて賢となり、東洋は集つて愚となる。而してそのかく岐るゝ所以は一に習慣に依る。この習慣の打破は衆智を集むるに組織を要すと叫んでゐる。第三卷は(第六章)「智德ノ辨」。德に公私大小の別あり、智亦然り。當今第一の急要は聰明の大智である。德も智これを導かれば私の域を脫することが出來ぬ。智を開かざれば善も惡を爲す。宗敎の爭ひ卽ち然り。今日は

匹儔なき一個の國民讀本と謂つても然るべきである。

【參考】福澤諭吉　田中王堂　〔吉野〕

文屋（ぶんや）「六歌仙」を見よ。

文彌殺し（ぶんやごろし）「蔦紅葉宇都谷峠」を見よ。

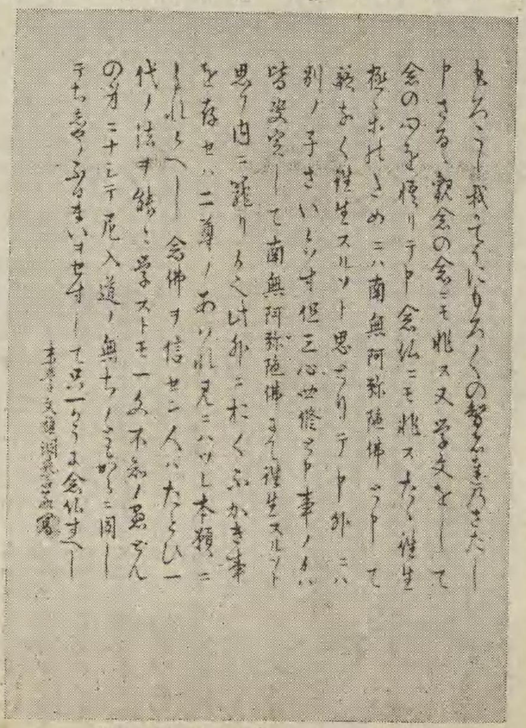
文彌節（ぶんやぶし）　淨瑠璃　【名義】流祖、岡本文彌の名による。但し「俗耳鼓吹」には、名見崎惣次の物語として、文賀といふ座頭の三味線に、彌太夫と名乘る者の淨瑠璃を合はせて語り始めた節であるところから、夫々の名をとつたものであると記してあるが如何か。【由來】「竹豐故事」「聲曲類纂」等によつて、岡本文彌は山本土佐掾（別項）の門と傳へられ、元祿七年正月十一日、六十一歲で歿したといはれる外に、生涯の記錄については詳細を缺いてゐる。主として大阪の伊藤出羽掾芝居で弘められ、山本飛驒掾の手妻人形の所作事淨瑠璃などを語つて評判を高めた。「難波雀」には文彌の名も見えてゐるので、當時既に流行してゐたものかと思はれるが、元祿年代以後は、早くも衰滅に歸した。但し佐渡には現在も傳存してゐて、近松作の淨瑠璃を主として數十段語られてゐるといふ。大阪に極く早く文屋（彌こも）と稱へた名譽の太夫があつて、山本角太夫は、年來これを學び、その奧義を極めたので、一流を成したとの說もある（好色由來揃）。この說は、或は信ぜられるかに思はれる節もある。但し曲節の內容には直接の交涉は少いであらう。元祿の文彌には二代を繼いだ者もあつたが、傳は詳かでない。門弟としては、阿波太夫が最も有名であつた。「愁ぶし」といはれて享保頃まで流行してゐた。現代の岡本文彌氏は全然これと無關係である。

【曲風・曲名】世に泣き節といはれて、哀調をそゝる風であつたらしいが、その中にも、「若後家立てて上下にもみの絹着ぬ氣色あり」（淨瑠璃古今序）とも見えてゐる。文彌の語つた淨瑠璃は、土佐掾や播磨掾等先輩太夫の語り物が多くて新作は少いが、「外題年鑑」には二十種程の曲名が載つてゐる。「雁金文七秋の霜」（別項）は最も有名な曲である。　〔守隨〕

【參考】諸國遊里好色由來揃○竹豐故事一樂子

文雄（ぶんゆう）　音韻學者　【諱】文雄　【字】僧豁　【號】無相・烘運社・尙絅堂主人　【生歿】元祿十三年丹波國桑田郡上窪村に生れ、寶曆十三年（一七六三）九月二十二日京都に歿す。享年六十四。【閱歷】父は中西宗覺、母は石田氏。早く佛門に志し、十四歲の時、國宮掖村玉泉寺の鏡譽に從つて剃髮し、次いで丹波園部の敎傳寺に入つて交譽に從ひ、次に京都錦小路の了蓮寺誓譽の弟子になつた。次いで江戶に出で、傳通院にゐて佛典を研究し、傍ら太宰春臺に就いて唐音を學んだ。數年にして京都に歸り、城下津谷迎接寺に住み、更に京都の了蓮寺に入つて師誓譽の後を承け、同寺の十七世の住職になつた。晚年洛外桂の千光寺に入つた。寶曆十三年の夏阿波・讃岐へ飛錫したが、歸京後微恙を覺え、遂に歿した。【著書】磨光韻鏡（別項）二册○磨光韻鏡後篇五册（「磨光韻鏡」參照）○磨光韻鏡餘論三册（同上）○三音正譌二卷二册（寶曆二年刊。吳音・漢音・華音の三音の正音・俗音・譌音を記したもの）○九弄辨一卷一册（寬延三年刊。「韻鏡」の九弄を人の問に答へる形にして解說したもの）○字彙莊嶽音四卷四册（寶曆四年刊。字彙の音で古韻書及び我が古音と相違するものに就いて研究したもの）○經史莊嶽音一卷一册（寶曆四年刊。初めに大學・中庸・論語・孟子・書經・詩經・禮記・小學等の中で、唐以前に音を註した書で、我が傳來の音と異なるものに就いて、その正否を記し、次に一般漢音で誤り易いものに就いて記し、終りに附錄として點發字について記してゐる）。この他、音韻に關するものには「古今韻括開合圖」一卷、「重雜甄陶篇」一卷、「廣韻字府」「韻鏡律正」等がある。なほ假名遣に關しては「和字大觀抄」（別項）がある。又富永仲基の「出定笑語」（別項）を批評した「非出定」一卷（寫）の著がある。

文雄（京都了蓮寺藏）

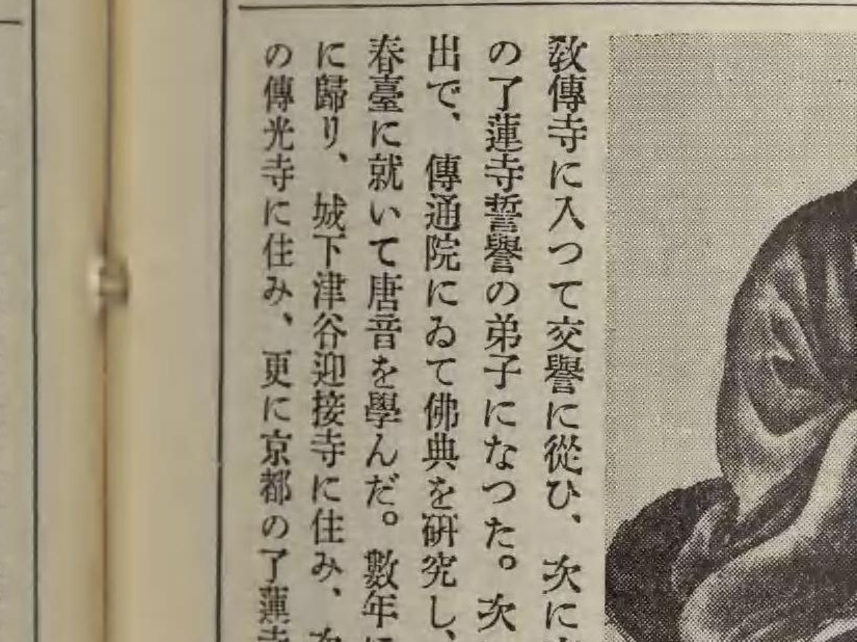


文雄一枚起請文（了蓮寺藏）

【業績】文雄は「韻鏡」（別項）の研究に於ては古今を通じて第一人者である。「韻鏡」は早く後奈良天皇の享祿年間に開板せられ、爾來その研究に志す學者多く、殊に江戶時代に入つてからは研究が盛んであつたが、而もこれ等の學者は、日本化した漢字音を以て「韻鏡」を說かうとした爲めに、殆ど見るに足る研究が出來なかつた。文雄は太宰春臺に就いて唐音を學び、これを以て「韻鏡」の字母を說いた（「磨光韻鏡」には杭州音を參考して居り、「三音正譌」には官話音をも參考にしてゐる）。「韻鏡」の字母は玆に初めて明瞭になつた。卽ち脣音の輕重、舌音の輕重、齒音の輕重、曉母匣母の區別等が明かになつた。第二に從來の學者は「韻鏡」を反切にのみ用ひるものとしてゐた。文雄はその誤である事を指摘し、「韻鏡者音韻之譜也」と喝破した。こゝに初めて「韻鏡」はその本來の面目を明かにする事が出來た。これ等の功績と共に、開口音・合口音の別を初めて說いたのは文雄であるのも、忘るべからざる事である。かくの如く、我が國に於ける「韻鏡」の眞の研究は、文雄に依つて初めて開拓せられたのであつて、その功績は實に偉大なものである。文雄はこの音韻上の知識を假名遣に利用して

山本角太夫は、年來これを學び、その奧義を極めたので、一流を成したとの説もある(好色由來揃)。この説は、或は信ぜられるかに思はれる節もある。但し曲節の內容には直接の交涉は少いであらう。元祿の文彌には二代を繼いだ者もゐたが、傳は詳かでない。門弟としては、阿波太夫が最も有名であつた。「愁ぶし」といはれて享保頃まで流行してゐた。現代の岡本文彌氏は全然これと無關係である。

【曲風・曲名】世に泣き節といはれて、哀調を



(藏 寺

致傳寺に入つて交譽に從ひ、次に京都錦小路の了蓮寺誓譽の弟子になつた。次いで江戶に出で、傳通院にゐて佛典を研究し、傍ら太宰春臺に就いて唐音を學んだ。數年にして京都に歸り、城下津谷迎接寺に住み、次いで浪華の傳光寺に住み、更に京都の了蓮寺に入つて

てゐる)。この他、音韻に關するものには「古今韻括開合圖」一巻、「專雜甄陶篇」一巻、「廣韻字府」「韻鏡律正」等がある。なほ假名遣に關しては「和字大觀抄」(別項)がある。又富永仲基の「出定笑語」(別項)を批評した「非出定」一巻(寫)の著がある。

【業績】文雄は「韻鏡」(別項)の研究に於ては古今を通じて第一人者である。「韻鏡」は早く後奈良天皇の享祿年間に開板せられ、爾來その研究に志す學者多く、殊に江戶時代に入つて

切にのみ用ひるものとしてゐた。文雄はその誤である事を指摘し、「韻鏡者音韻之譜也」と喝破した。こゝに初めて「韻鏡」はその本來の面目を明かにする事が出來た。これ等の功績と共に、開口音・合口音の別を初めて説いたのは文雄であるのも、忘るべからざる事である。かくの如く、我が國に於ける「韻鏡」の眞の研究は、文雄に依つて初めて開拓せられたのであつて、その功績は實に偉大なものである。文雄はこの音韻上の知識を假名遣に利用して「和字大觀抄」(別項)を著はした。但しこの書は全體としては不備誤謬少くないが、拗音の假名(源氏・根元等)、假名反切、反音(延約)等に就いての説は、「韻鏡」の知識に負ふものであつて注意すべき説である。

【參考】無相上人傳略 來迎寺淵譽文龍(磨光韻鏡後篇本圖或は同字庫所載)○了蓮寺沙門文雄釋道契(續日本高僧傳卷四)○音韻學者僧文雄 新村出(宗敎界二ノ一二)○文雄の傳統及び其著書 同上(同三ノ四)○韻鏡研究史上に於ける文雄の位置 滿田新造(國學院雜誌二八ノ一二)○文雄の韻鏡南方音説を評す 同上(同二九ノ四)○無相文雄師追慕展觀會目錄(京都百萬遍地內了蓮寺) 〔龜田〕

文樂座 ぶんらくざ 操座 【名義】創立者、淡路國岩屋在假屋出身の素人義太夫植村文樂軒(柾木氏。植村は淡路人形座の上村源之丞の「上村」を文字を換へて利かした素人義太夫としての藝名)の名による。【成立】文樂座の名乘を上げたのは明治五年一月であるが、その草創は文樂軒の上阪に遡る。上阪の年代は記錄がない。素人の好きから、寛政の末に道頓堀の東、高津稻荷南詰西、濱側に「高津新地の席」として人形淨瑠璃を興行した。當時の道頓堀は竹豐兩座が退轉後で、歌舞伎全盛、操は僅かに北堀江市の側の芝居で豐竹派がまづ第一の繁昌を見せてゐた。文樂軒は間もなく市の側の芝居に興行することとなつたが、この高津と市の側時代の文樂の年代は不詳。【沿革】文化八年正月、船場博勞町の難波神社、「博勞町の稻荷」と俗稱した宮芝居を手に入れて、文樂の操の定小屋にした。稻荷の境內にあつた二軒の小屋のうち「東の芝居」で、東門の北側に南向に建てられて「いなりの芝居」と呼ばれてゐた。この時すでに御靈の境內にも操芝居はあつたが、これは文樂とは無關係である。こゝに文樂が定打の操を興行してゐるうちに天保八年五月、文樂として危機に瀕したのが説經讃語座(説經淨瑠璃參照)の一件であつたが、當時竹本長門太夫(三代)が善處したから、事件落着後は、却つて文樂芝居の聲價を揚げた。續いて水野越前守の改革が影響して、翌十三年五月十六日に、大阪市中の宮地芝居が悉く取拂はれた。文樂も稻荷境內を出て、元の市の側へまづ移つたが、持小屋でないから、定打が協はない。道頓堀の若太夫の芝居などへも掛けた。かくて弘化二年西横堀淸水町の濱地に假小屋を掛け、「濱地地固め」の名目の下に興行の許可を得て同二月一日第一興行をした。これが「植村の濱芝居」と呼ばれた時代である。かくて天保の改革も漸く弛んだので、博勞町稻荷の元の東小屋跡へ新築して、安政三年九月九日再び稻荷の芝居へ歸つた。慶應年間に大阪市內遊廓を移轉の目的で、現在の松島遊廓を指定し、土地の繁榮を計るために遊廓の外廓に芝居・操の移轉を慫慂し、文樂芝居は西區松島櫻通り西突當りに新築して、明治五年一月柿葺落し興行を開け、こゝで初めて「文樂座」と名乘つた。この松島時代が十二年續いたが、地の利を得なかつたので、明治十七年九月船場御靈神社內の寄席土田の席と鹽鯛席との二つを買ひ潰し、御靈文樂座を新築して全盛を見せたが、植村の四代目、明治四十二年四月文樂座の經營は、松竹合名會社(後明治四十四年一月松竹合名社と改名)の手に買收され、大正六年十二月新築されたのが、大正十五年霜月興行打揚翌朝失火全燒した。續いて昭和二年の一月からは道頓堀辨天座で假興行をし、昭和四年四月松竹合名社が松竹土地建物興行株式會社と組織變更したので、文樂座の興行權も新會社に移り、その手にて南區鰻谷西の町、佐野屋橋南詰西入なる元近松座跡に新築し、昭和四年十二月二十六日開場式擧行。翌昭和五年一月一日初日で四ツ橋文樂座の第一回興行に入つた。

【植村四代の人々】初代の植村文樂軒は、高津新地の席から文樂座の基礎を築いた人であるが、二代の大藏は同鄕の因みで植村家へ養子に入つた。この大藏が傑物で、當時沈滯してゐた操の興隆に心身を擲つたのである。初め「樂翁」と呼び、素人淨瑠璃も語つたが、後「文樂翁」と人から稱され、自分も「文樂翁」と後には呼んでゐた。淨瑠璃を語る上に文筆の才のあつた男で、淨瑠璃の補綴、新作なども上演さした。文樂座をして盛名を贏ち獲させたのは、全くこの二代大藏の力であつた。大藏の實子大助が三代目を繼いだが、操よりも骨董などに趣味があつて、暢春堂といふ支那骨董の店舖を張つてゐたが、その方の損失が大きかつた矢先、明治二十一年三代目の大助は病死し、後同二十三年二代大藏の文樂翁も逝つた。四代目を大助の實子泰藏が相續したが、その器でなかつた。文樂座は三代の未亡人春女が切り廻はしてゐたが、持ち堪へられなかつた。遂に同四十二年一月、植村家と松竹との間に立つたのが、三代竹本南部太夫で、御靈地內の文樂座は現狀のまゝ二棟の土藏にある人形、その衣裳、淨瑠璃丸本その他一切の受授が行はれ、取引の了つたのが同三月である。

【藝歷】稻荷の宮地時代は、左程振はなかつたが、文化八年正月第一回興行に至つて、主なる太夫としては、咲太夫・巴太夫・宮戸太夫、人形では門藏・與十郎・新吾・國八等が出た。然るに中興の名人三代長門太夫(竹本實太夫時代)が文政六年に文樂軒芝居に入り、若手としてすばらしい賣出しであつた。蟬丸宮配下の説經讃語座の一件で、文樂芝居が危機に瀕した時に、紋下太夫は竹本重太夫であつたが、長門太夫がよくこの座難に善處したので、文樂座は危機を脱した。それは天保八年五月からの紛糾で、同十一月には騷ぎは濟んでゐた。が、翌九年には、この三代長門太夫は、文樂軒芝居を脱退して道頓堀の竹田芝居で、一旗揚げた。當時文樂には三代重太夫、後の五代政太夫になつた美音の太夫があつた爲め、長門太夫は自ら不平不滿なる地位に置かれてゐたので、この脱退を決行した。その脱退組は豐竹靱太夫・竹本大隅太夫・竹本咲太夫・竹本義太夫・竹本長門太夫、人形では桐竹門造・吉田金四・豐松東十郎などであつたが、この道頓堀興行は天保十年正月で、「妹脊山」を呼び物に華々しく打つて出たものの長くは續かず、且つ文樂軒芝居では、竹本重太夫の政太夫が天保十一年二月に退座し、六月二十三日に歿したので、退座組は漸次復歸した。そして文樂の機運は、この中興の名人長門太夫の手に歸した。かくてその後長門の相三味線であつた三代鶴澤淸七が病氣で、その代役をしたのが、太棹界不世出の名人二代豐澤團平(別項)で、時に二十八歲、安政元年八月のことで、當時の長門の盛名とその技倆を以てして、彼を拔擢したのであるから、操界は俄然として興隆の地盤を作つた。當時の團平は、壯年で名人豐竹三光齋の相三味線で、稻荷北門の芝居(文樂軒の芝居は稻荷東の芝居)で「太十」を彈いてゐた。その上に長門の見出しによつて、懸持で天滿天

神境内の新席で、長尾太夫の忠臣藏の六ツ目、長門のために同九ツ目と、一日に三段の三味線を彈いて、その絢倫の健腕に世人を驚かした。かくてこの期に、名匠相次いで輩出した。長門太夫の周圍には、七代咲太夫・五代湊太夫・四代長門太夫・初代長尾太夫・初代古靱太夫・六代綱太夫・四代住太夫、その他六代染太夫・五代春太夫・豐竹三光齋・竹本山四郎・八代染太夫・攝津大掾、三味線では二代豐澤團平・五代豐澤廣助・初代豐澤新左衞門などが相次いで輩出して文樂芝居を飾つた。古來、淨瑠璃と人形とは、その盛衰が相伴ふべきであつて、實際は淨瑠璃が盛んになれば人形は沈滯し、人形が擡頭すれば淨瑠璃太夫が勢を潛めたのであるが、恰も長門太夫といふ巨匠が出て、淨瑠璃道の興隆、初世義太夫當時を偲ばしむるに至つて、人形の影が薄かつたのを早くも非なりと悟つたのは、二代の文樂翁であつた。そこで明治五年一月、松島の文樂座に於て、嘗てない人形の紋下の位（櫓下ともいひ、番附面では最初の一行の座本の紋處を印したる下に「太夫……」と書かるゝ位置で、操界最高の位置である。櫓下とは座の表、櫓の下に座頭太夫、代表太夫の太夫名を書した招牌を出した古例による。紋下・櫓下は同一人）を制定して、吉田玉造（初代）をこれに据ゑ、十分な腕を揮はせた。玉造に續いて、老女形の名人桐竹紋十郎、振袖遣の桐竹鶴松、世話娘の吉田鹿造、若者遣の大名人吉田玉助、おやぢの吉田玉治、婆々遣ひの豐松東十郎が輩出し、最後に現在の吉田榮三・吉田文五郎の二名人を殘すに至つた。紋下太夫の系統としては、長門太夫以後、明治五年一月から竹本春太夫（五代）・攝津大掾（別項）・三代竹本越路太夫と春太夫系統が、久しく紋下太夫の位置を占めてゐたのが、現在は四代竹本津太夫が紋下となつて、春太夫系が中斷された形となつた事は注目に値する。元來春太夫系といへども竹本大和掾から出發し、長門太夫も同じく大和掾から出てゐる。且つ現在の津太夫系も、古く溫ぬれば竹本山四郎を經て、綱太夫系に出てゐるのであるから、文樂座の藝系統は、義太夫始祖の流れといふよりも、豐竹派即ち越前少掾系統に屬すべきものである。義太夫節の創始者は初代竹本義太夫ではあるが、既に二代義太夫の政太夫が、越前少掾の門流を汲むものであり、後世に殘れる人形淨瑠璃の唯一の文樂座派は、かくの如く豐竹三輪太夫即ち竹本大和掾の末流であるから、越前少掾派の「若太夫節」と唱へるが妥當ではあるまいか。これを實際の今日の淨瑠璃の節に見るも、西風（竹本派）・東風（豐竹派）の流格が互に崩れ錯雜してゐるが、節なり三味線の手が東風に基礎が置かれてある實際の事實に徵しても、豐竹越前少掾を本流とするを正當とする。そして古來の節を、三代長門太夫が整理復活したやうに、明治になつてからは攝津大掾が從來の淨瑠璃を餘程變革してゐる。それは攝津大掾の音聲から來る自然の結果であつた。攝津大掾の淨瑠璃と、その師匠である五代春太夫までの淨瑠璃とでは、柄も品も趣を一變してゐる。そして攝津の淨瑠璃が當流と見做していゝのであつたから、俄然淨瑠璃は攝津を本流とするに至つた。この風潮を早くも見た名人團平は、攝津の高い美しい聲を一層はち切らさうと、三味線の調子で彌が上に誘發した。團平の意志は聲を潰した後の一層鍛錬を經た美しい聲を望んだのであつたが、攝津は團平の三味線に堪へ切れなくて、明治十七年七月、團平と離れて五代野澤吉兵衞が彈くこととなつた。攝津を去つた團平は稻荷の北門の芝居卽ち彥六座（別項）に入つて別系を作り、互に鎬を削つたが、兩系とも今日の文樂座に合流した。今一つ文樂座の一時の傾向として見遁すことの出來ぬのは、明治初年に人形芝居國をも襲うた寫實傾向である「活歷」の名によつて、院本に史實を偏重しようとした。例へば明治五年十一月の松島興行の「三日太平記」を「出世太平記」として武智を明智、眞柴を羽柴に改めてゐる。越えて明治六年六月には、「鎌倉三代記」の「鎌倉」を削つて（名將は德川老君智仁の陣取と角書をして「大元帥は眞田左衞門尉奇術の軍配」「簸大將は後藤又兵衞英勇の鋒先」と傍書をして、鎌倉の世界を史實を正して大阪陣に引直してゐるが、文句は丸本通りで人名と場所とを引直してゐるので、辻褄が合はなくなる。更にこれを京の芝居へ持つて行き、「實傳大阪夏陣記」と藝題を据ゑてゐる。活歷流行は一時麻疹のやうな風潮であつたが、明治十八年頃には、活歷風は跡を絶つに至つた。かうした時代の人形は想像するに難くはない。詮索沙汰が多く、吉田文三郎以來の名人と推していゝ初代の玉造すら、その藝に活歷臭、ケレンの多かつた事は見遁すことが出來ず、浪速梨園の長者と呼ばれた尾上多見藏の藝風と玉造のそれとが相一致する多くの類似點を見出すのである。〔石割〕

文琳（ぶんりん）「康秀」（やすひで）を見よ。

分類俳句全集（ぶんるいはいくぜんしふ）　俳句集　十二卷【本名】「俳句分類」。刊行の時に題號のやうに改めたのである。【編者】正岡子規【校訂者】高濱虛子・河東碧梧桐・寒川鼠骨等。【刊行】昭和三年三月より昭和四年九月に亘る。アルス。【由來・內容】子規が俳句の研究に沒頭した當初、明治二十四年頃から着手されたもので、子規自身「余が力盡き身斃るゝ時を以て完結の期とすべし」といつてゐたものであるが、晩年は病苦のため業を廢するの已むなきに至つた。遺された稿本は、全部日本紙に毛筆で記され、積めば等身以上の高さに達する大部なもので、子規歿後、長く子規庵に藏されたまゝになつてゐたのを、昭和三年に至つて刊行したものである。內容は俳句の外、連歌の發句をも採り、室町期の連歌の發句から明治以前に至る俳句までを分類集成したもので、これを甲號・乙號・丙號の三部に分ち、甲號は季題分類によるもので、これが主要部をなすのであるから、第十一卷の三分の一のところまでを占めて居り、乙號・丙號は附屬部とも云ふべきもので、乙號は建築・飲食から釋教に至るまでの十種に分ち、その內をなほ細別してあるやうに、題材分類であり、丙號は形式的並に實質的と標記してあつて、廻文・折句の類、同音・變音、所謂字足らず字餘りの類、詩歌・連俳・古事・古語等に因める類、助詞の用法の各種、類句その他のものの分類である。甲號は季題內を更に題材により、細別して類聚されてゐるので、校訂者は凡例に「有史以來子規居士の創意」であると云つてゐる。子規が以上の如き類別法による本集を思ひ立つたのは、俳句を新しく研究し革新するには、歷史的に研究すべき必要を感じたからであり、從つて又子規の俳句革新に大に役立つたものと思はれるが、一般俳句研究者に取つても、俳句の歷史的研究及び作者所載書等の不明な句の檢出並に所要の例句を求めるに頗る役立つものである。〔柴田・志田〕

へ

平安京（へいあんきやう）　故實　【解說】平安時代に於ける規模沿革は、「延喜式」卷四十二左京職の條、慶保胤の「池亭記」（本朝文粹卷十二）、「拾芥抄」諸名所部、京程部及び圖、三善爲康抄「掌中歷」（續群書類從九三一）の京中歷の條、「大安京に都のあつた時代の文學であり、同時に武家政治の開かれる以前の文學をいふ。王朝文學とも、中古文學ともいふ。【區畫】平安時代文學は大體三期に分けられる。前期は平安時代の初期（寬和二年）から延喜・天曆に至る時期（寬和二年）であり、中期は道長を中心とする時代（一條天皇の永延元年―後朱雀天皇の寬德二年）であり、後期は院政時代（後冷泉天皇の永承元年―後鳥羽天皇の文治五年）である。但し四期に分つ說もある（國文學全史平安朝篇）。

漢詩・漢文（各別項）等に分けられる。この中、和歌は「古今集」を第一焦點とし、中期に衰へて後期に再び勃興して來た。歌諧は必ずしも發展でなく各種の歌諧が起伏した。漢詩は前期には盛んであつたが、それ以後假名文學に勢力を奪はれた。かくてこの時代の文學の中で、新しい形態として特に注意せられるのは物語と日記隨筆とであり、殊に物語（別項）は平安時代文學の中心として、「伊勢物語」「竹取物語」から「源氏物語」を經て、後期物語に至る。

歌は神樂・催馬樂（各別項）の諸物に現はれてゐる。さうして和歌に於ける次第に反省的になつた傾向は、歌から物語に展開する必然性を示した。それは先づ「伊勢物語」（別項）の如き歌物語（物語參照）となり、更に說話文學（別項）の系統を引く「竹取物語」（別項）が出現し、その二つが合流して「宇津保物語」「落窪物語」（各別項）となり、更に中期に於て寫實性が多く加はつて「源氏物語」（別項）を生む機運は次第に作られてゐる。「宇津保物語」が傳奇的の性質は

平安京（へいあんきやう）

故實 【解說】平安時代に於ける規模沿革は、「延喜式」卷四十二左京職の條、慶保胤の「池亭記」（本朝文粹卷十二）、「拾芥抄」諸名所部、京程部及び圖、三善爲康抄「掌中歷」（續群書類從九三一）の京中歷の條、「大內裏圖考證」卷一都城左右京の條等に依つてその一般を知ることが出來る。應仁亂後、京師荒廢の模樣を圖示したものには、森謹齋著「中昔京師地圖」（故實叢書）、「中古京師內外地圖」（同上）等がある。江戶時代に入つては、「京都叢書」（別項）所收諸書を初めとして、地誌には、秋里籬島著「京の水」、著者未詳「京羽津根」、宇野鑑著「平安志」等。名所風俗を記したものには、秋里籬島著「都林泉名勝圖會」、著者未詳「花洛細見圖」「花洛寺社全圖」「帝都雅景一覽」「花洛名所記」「年中故實昔京名所鑑」、二鐘亭半山著「見た京物語」（溫知叢書第九篇）等があり、地圖には、貞享三年作寬保元年增訂刊行の「京大繪圖」、元祿九年刊行「京大繪圖」等がある。明治以降、京都市役所編纂のものに、「平安通志」「京華要誌」「京都名勝記」「京都名勝誌」等があるが、中にも「平安通志」は、明治二十六年平安遷都千百年記念祭の事業の一として編纂されたもので、平安京及び大內裏の規模及び沿革等を初めとして、神社佛閣・名所古蹟・風俗人情等に亙つて詳記し、この地の地理及び歷史を網羅し、頗る參考に價するものである。 【石村】

平安時代文學（へいあんじだいぶんがく）

【名稱】平安京に都のあつた時代の文學であり、同時に武家政治の開かれる以前の文學をいふ。王朝文學とも、中古文學ともいふ。【區畫】平安時代文學は大體三期に分けられる。前期は平安時代の初期（寬和二年）から延喜・天曆に至る時期（寬和二年）であり、中期は道長を中心とする時代（一條天皇の永延元年―後朱雀天皇の寬德二年）であり、後期は院政時代（後冷泉天皇の永承元年―後鳥羽天皇の文治五年）である。但し四期に分つ說もある（國文學全史平安朝篇）。

【特質】平安時代文學（別項）と共に、その主情的な傾向は同樣であるが、併し大和時代文學が、素朴な力強い情緒を主とするに對して、優美な情趣を主とするところに特質を有する。卽ち「もののあはれ」（別項）をその文學の主潮とする。形式と內容との完全に調和した所にこの時代の理想があつた。さうしてこの「もののあはれ」はものの中に見出した感動であるが、最初は「もの」も「あはれ」も自由であつたのが次第に「もの」も「あはれ」も限定されるに至つて形式的に流れたのである。さうしてかくの如き「もののあはれ」が平安時代文學の中心となつた動機としては、文學意識が現はれ、反省的になつて來た點と共に、（一）都が優美な自然を有する平安京に遷つたこと、（二）假名が用ひられ、假名文が文學中心の文體となつたこと、（三）女性が文學の作者として活躍したことの三點が擧げられる。併しかくの如き傾向が純粹文學的であると同時に、餘りに優美性を重んじて壯美等を輕んずる結果、一面的になつた缺點は免れない。それが次第に後期になるに從つて分裂して來た所以である。次に平安時代文學を形態の上から見ると、和歌・歌謠・物語・日記・隨筆・漢詩・漢文（各別項）等に分けられる。この中、和歌は「古今集」を第一焦點とし、中期に衰へて後期に再び勃興して來た。歌謠は必ずしも發展でなく各種の歌謠が起伏した。漢詩は前期には盛んであつたが、それ以後假名文學に勢力を奪はれた。かくてこの時代の文學の中で、新しい形態として特に注意せられるのは物語と日記隨筆とであり、殊に物語（別項）は平安時代文學の中心として、「伊勢物語」「竹取物語」から「源氏物語」を經て、後期物語に至るまで、王朝文學の粹をなしてゐる。もののあはれの文學觀も、この物語を中心として展開してゐるのである。卽ち平安時代文學は物語を中心とし、詩歌と日記隨筆とを兩翼としてゐると言ふべきである。

【沿革】〔前期〕前期の文學は大和時代文學から新しい展開を示した時である。この期の初めには、大和時代の後期の「懷風藻」（別項）等を繼承して漢詩漢文が多く行はれ、「經國集」「文華秀麗集」（各別項）等が撰せられた。併し漢文學から再び日本文學への展開は始められた。「新撰萬葉集」（別項）が和歌と漢詩とをならべて撰集してゐるのは、その過渡期に立つものである。かくて漢詩から日本的な詩歌への展開の先驅として花々しく現はれたのが、「古今和歌集」（別項）である。「古今集」は日本的自覺の現はれたものといふべく、古今集序はその意味から作られたのであらう。「萬葉集」以來徐々に展開してゐた歌が、こゝに新しい形態として現はれ、直觀的な歌から反省的な歌となる經過は、讀人不知の歌、六歌仙の歌、貫之時代の歌の三期によつて見られる。この古今的傾向は「後撰集」から「拾遺集」（各別項）に至るまで中心の歌風となつた。素より素朴な歌は神樂・催馬樂（各別項）の諸物に現はれてゐる。さうして和歌に於ける次第に反省的になつた傾向は、歌から物語に展開する必然性を示した。それは先づ「伊勢物語」（別項）の如き歌物語（物語參照）となり、更に說話文學（別項）の系統を引く「竹取物語」（別項）が出現し、その二つが合流して「宇津保物語」「落窪物語」（各別項）となり、更に中期に於て寫實性が多く加はつて「源氏物語」（別項）を生む機運は次第に作られてゐる。「宇津保物語」が傳奇的の性質はありながら、歌物語的性質の多いことは、量に於て「宇津保」が「源氏」よりも小さいに拘はらず、歌の數が「源氏」より多い點からも知られる。この物語の出現と共に、より反省的な從つて散文的な日記文學（別項）が現はれた。貫之の「土佐日記」（別項）とはこれである。殊に「蜻蛉日記」は、その自然的な點に稀に見る深さを有してゐる。「土佐日記」は旅の日記であるためもあるが輕い。從つて淺いのに對して、日常生活の日記であり、且つ女性としての纖細なる心情や、妻としての不如意な生活を送つた爲めに、深い心情の世界にまで至つてゐる。さうしてその生活を寫實的に表現してゐるのである。かくて初期に於ては、傳奇物語と歌物語と寫實的日記とが互に存在することによつて、未だ統一を得なかつた時代である。

〔中期〕この期は、平安時代文學の完成期である。詩歌の方では、和歌は「拾遺集」に於て「古今集」の傾向を踏襲するに過ぎず、諸ひ物も神樂・催馬樂以來、新しい發展はなかつた。併し物語に於ては、傳奇的傾向と抒情的傾向と寫實的傾向とを一にした寫實的理想主義ともいふべき「源氏物語」が完成された。それは「もの

ののあはれ」の完成を示すものであつた。もと より「源氏物語」は、源氏の青春時代と榮華時代と晩年時代と、更に匂宮と薰との時代に分けられるし、その間に浪漫的時代と現實時代と感傷時代との區別も立てられる。また「藤裏葉」に至る華やかな時代と、「若菜」以後に於ける暗い時代とに分けられるが、その基調をなすものは「もののあはれ」の精神である。さうしてこの態度を中心として、隨筆としての「枕草子」(別項)や、日記としての「和泉式部日記」「紫式部日記」(各別項)が現はれた。これ等は文學形態としての相違の外、それぞれ個性的な特殊性を有する。「源氏物語」が情趣によつて統一されてゐるに對して、「枕草子」は感情的であり、分裂的である。「紫式部日記」には、作者の深められた心象の統一があるが、「和泉式部日記」には刹那の統一はあるけれども、持續の相に於ける心象の深さがない。歌でつらねられた生活記錄である所以である。この中期には漢詩は衰へたが、漢文は「本朝文粹」(別項)その他が現はれた。

〔後期〕 この時代は、「もののあはれ」の文學の分裂するに至つた時代である。調和的な美が破壞されて、新しい文學理念が生れ出ようとした時代である。それが文學から宗敎的傾向への展開ともなるのである。次に各形態に就いて見ると、和歌は中期までは「古今集」の傾向を重んじ、藤原公任(別項)が歌壇の中心となつてゐたのであるが、漸くこの態度に反對する流れが現はれた。既に公任時代にも曾禰好忠(別項)の如き、詞の自由と客觀的描寫とを稱へて新風を主張したけれども、まだ行はれるに至らなかつたが、「後拾遺集」(別項)時代に於ては次第に新傾向が盛んになり、源經信(別項)は歌人として尊重されてゐた。併しなほ「後拾遺集」に於ては、保守派の藤原通俊(別項)が撰者となつたことは保守的傾向が一般には重んぜられたことを示すものである。併し經信の「難後拾遺」(別項)の如き、この保守派に對する反對論であつたのである。さうして經信の子の俊頼(別項)になると、新傾向を一層展開せしめ、「金葉集」(別項)を撰定するに及んで新傾向も一般的に重んぜられた。この時代には藤原基俊(別項)が學力に於ては俊頼よりもすぐれて居つたのであるが、却つて俊頼の方が重んぜられたのは、基俊が資性傲岸であつたばかりでなく、世の傾向の動きとも見られるのである。この俊頼の「金葉集」の性質を襲つて藤原顯輔(別項)の「詞花集」(別項)が撰せられるに至つて、新傾向は歌壇の中心となるかに見えた。併し新傾向は詞の自由と客觀描寫とを重んじたが、沈潛した趣に缺けて居つた。刹那の感覺はあるが、靜かな深みに缺けてゐた。それは基俊等の保守派に却つて見られるものであつた。この二を合せて淸新な趣を有しながら、同時に深みを有したのが藤原俊成(別項)であり、その撰した「千載集」は新舊二派を折衷したものと言ふべきである。それは幽玄といふべき基調の上に立つ。併しこの俊成の傾向は、彼の思索と沈思とから生れたものであつたが、同じく幽玄の境地を自ら自然を放浪することによつて得たのが西行(別項)であり、彼の家集「山家集」(別項)であつたのである。この時期の歌謠としては朗詠・今樣(別項)がある。朗詠は藤原公任の「和漢朗詠集」、藤原基俊の「新撰朗詠集」(各別項)があるが、漢詩文の佳句を二句づつとつたもので、飜案的な文學といふべく、今樣は新しい謠ひ物としてこの時代に行はれた。さうして「梁塵祕抄」(別項)の斷卷によつて平安時代の歌謠として の神歌・法文歌(各別項)も傳へられてゐる。かういふ歌謠は和歌と異なつて文學意識の明かでないだけに、素朴であり、反省的傾向が尠いのである。この傾向は物語に於ても見られる。「源氏物語」の後半に見られる哀愁の心情は後期の物語に於て更に明瞭になる。「狹衣物語」(別項)の主人公狹衣大將は、源氏宮に對する戀愛を生涯持ち續けた。飛鳥井姫君や女二宮の戀愛もあるが、結局は源氏宮に對する信念的な戀愛に終始してゐる。併し意志は强いが、感情を反省する所から行爲には出でないのであつて、そこに弱さがある。「濱松中納言物語」(別項)の濱松中納言も、感情を反省する所から行爲に直進することが出來ず、弱い憂鬱な性格となつてゐる。かくの如き傾向と共に一方に「とりかへばや物語」(別項)に見えるやうな病的官能的な傾向もこの時代には現はれ、また文學的自覺が高まるにつれて理智的な短篇小說としての「堤中納言物語」(別項)も現はれた。そこには機智や有情滑稽や、情趣等の樣々な內容がもられ、變化の多い而もひきしまつた構想と、特異な性格と相俟つて、十篇の短篇小說がそれ〴〵の效果を擧げてゐるのである。かくの如き小說物語の外に、一方には小說物語のモデル的題材としての歷史物語(別項)が現はれるに至つた。「榮華物語」や「大鏡」(各別項)が、道長を中心にしてその榮華生活を描いたのは、「源氏物語」の光源氏の榮華生活の現實的實證といふことが出來るであらう。「榮華物語」と「大鏡」とを比較すると、「榮華物語」は道長の榮華生活を客觀的に細大もらさず書かうとして居り、「大鏡」は道長の榮華生活を描いても、その重要な點をぬき出し、一部分を描いて全體を髣髴させようとしてゐる。且つ大宅世繼・夏山繁樹・若侍といふ人物によつてそれ〴〵立場を異にして語らせることにより、劇的效果を與へようとしてゐる。この歷史物語は更に民衆生活を中心とする「今昔物語」(別項)等の說話文學(別項)に展開する。「今昔物語」はその宗敎傳說を多く含む意味では、「日本靈異記」(別項)等からの發展と見られるが、更に各方面の傳說を含む意味に於て、民衆生活への接近を示すのである。なほ後期には、日記としては「更級日記」(別項)がある。中期に於ける個性をあくまで發揮した日記と異なつて、憧憬にみちた純一な孝標の女(別項)が、東の國に於て物語を讀まうとした少女時代から都に上り、物語を耽讀した時代、更に宮仕をしても思ふにまかせず、人の妻となり、それも幸福でなく、夫に死別して今更に若い時から文學に心を向けて、信仰に疎かであつた半生を悔むに至るのである。そこにこの後期の時代精神の方向がよく示されてゐる。

【參考】 國文學全史(平安朝篇)藤岡作太郎 ○文學に現はれたる我國民思想の研究(貴族文學の時代)津田左右吉 ○宮廷女流日記文學 池田龜鑑 ○平安時代(日本文學講座) ○日本文學史平安時代(岩波講座日本文學) ○日本文學書目(同上) 〔久松〕

平安城都遷(へいあんじやうみやこうつし) 淨瑠璃 五段 時代物【作者】未詳。宇治加賀掾正本。【別名】平安城【成立】未詳。但し、既に延寶九年六月板行の「大竹集」に「みさほの前道行」と「王城地祭」とが出てゐる。【諸本】八行四十二丁本、山本九兵衞板。繪入細字十七行十六丁本、八文字屋八左衞門板。德川文藝類聚第八・近松門左衞門全集第十卷・近松全集第一卷所收。【題材】桓武天皇の平安奠都までの經緯を脚色したもの。【梗概】〔第一〕桓武帝の延曆二年神無月、奈良の皇居南殿の梅・櫻・桃・海棠の木々一時に花を開いたので、帝は僧傳敎を召してこれを占はせたところ、逆臣起つて君を犯すべき前兆、都を遷して天下泰平を圖らるべしと奏聞する。帝は直に舍弟早良(さはら)親王に命じて山城國

……とする。と忽ち大地が二つに裂け、堅牢地神が現はれ出で、親王を摑んで奈落の底に落す。〔第五〕早良親王が滅亡したので、帝は直に宇太村に行幸あつて新都を營み給へば、九畿百家、貢物を獻ずること山の如く、かくて吉日を選び、傳敎が祈りの師となつて諸神諸佛を勸請し、地祭を行ふ。次が「神おろし」。【解說】全くの古淨瑠璃式な平面的敍述である。「柳亭淨瑠璃本目錄」に、「近松作といひつたふ」とあるが、恐らくは近松の作ではあるま……

……葉集、類聚古集の書體の分類、分岐以前の草假名)。第四章結論(古典時代の作物、古典主義的傾向、新古典主義的傾向、浪漫主義的傾向、各傾向の交雜、武强主義的傾向、各傾向と國文學との關係、結語)。最後に第二章に記した草假名研究資料の證本古筆四十五種をコロタイプ版にして添附してある。【價値】本書は先づ確實なる資料を蒐集してこれを硏究し(これ本書の最も重要なる一半である)、次にこれを比較對照して書風の系統變遷を考究し、次に草假名と文學の關係を……

……の標準的なもの、物語草子には多少話語の面影があるやうである。記錄文書は漢文又は變體の漢文(記錄文)であるから、若干の宣命書にしたもの以外は資料とは爲し難い。この三種の中、物語類は內容が比較的多方面であるから、資料としては最も重要なものであると云ひ、次に當代の文法と萬葉集時代の文法との相違の主要なものに就いて記してゐる。卽ち(一)萬葉集時代に存して當代には滅亡したもの。(イ)形容詞の連體形を「こそ」の終止とす……

六丁本、八文字屋八左衞門板。德川文藝類聚第八・近松門左衞門全集第十卷・近松全集第一卷所收。【題材】桓武天皇の平安奠都までの經緯を脚色したもの。

【梗概】〔第一〕桓武帝の延曆二年神無月、奈良の皇居南殿の梅・櫻・桃・海棠の木々一時に花を開いたので、帝は僧傳敎を召してこれを占はせたところ、逆臣起つて君を犯すべき前兆、都を遷して天下泰平を圖らるべしと奏聞する。帝は直に舍弟早良親王に命じて山城國長岡に都を營ましめられたが、親王は異圖を抱き新京に據つて王位を僭し、諫止せる近江の前司盛行を慘殺する。〔第二〕帝が母后と共に新京長岡に遷幸の途中、亘椋堤にさしかかつた時、近江の前司の倅伊吹の監物忠國馳せ來りて親王の謀叛を告げる。一同驚く間も無く、親王の軍勢押寄せ來つて鳳輦を取圍み、こゝに雙方入り亂れての大合戰となるが、忠國は遂に一方に血路を開き、帝・母后の御供をし、伊吹を指して落ち行く。〔第三〕帝の一行は途中愛宕郡宇太村のとある木蔭に野宿をするが、その夜圖らずも邂逅した傳敎の話により、この地が佛神擁護の聖地なる事を知り、天下泰平の曉には此處を皇居と定め平安城と名づけんと約して別れる。伊吹に着いた帝は母后と共に暫く此處で世を忍ぶこととなつたが、或る年の正月忠國の妹みさほの前が御前に於て七種を囃し、粥を調じて奉つたのが緣となつてこれと契を交す。〔第四〕母后は早良親王を諭して和議を講ぜしめんと、みさほの前を伴ひ、長岡指して出で立つ（道行）。かくて二人は逢坂の關をも無事に立ち越え、やがて長岡に到りて親王に對面し、種々と意見を加へるが、暴虐な親王は却つて母后を弑さうとする。と忽ち大地が二つに裂け、堅牢地神が現はれ出で、親王を摑んで奈落の底に落す。〔第五〕早良親王が滅亡したので、帝は直に宇太村に行幸あつて新都を營み給へば、九畿百家、貢物を獻ずること山の如く、かくて吉日を選び、傳敎が祈りの師となつて諸神諸佛を勸請し、地祭を行ふ。次が「神おろし」。

【解說】全くの古淨瑠璃式な平面的敍述である。「柳亭淨瑠璃本目錄」に、「近松作といひつたふ」とあるが、恐らくは近松の作ではあるまい。寶永元年七月江戸山村座上演の歌舞伎狂言「平安城都定」、正德二年正月十六日より豐竹座興行の紀海音作淨瑠璃「平安城細石」は共に本作に據つたものである。

【參考】近松全集第一卷解題（藤井乙男）〇平安城都定（稀書複製會本）（高野（正））

平安朝時代の草假名の研究

書道書　一册　【著者】尾上八郎　【刊行】大正十五年九月。【內容】平安朝時代の草假名卽ち平假名の系統及び變遷を歷史的、並に藝術的に研究したものである。第一章序論（草假名・古筆・平安朝時代の草假名・鑑定・研究の資料・研究の順序）。第二章資料の研究（一、傳紀貫之の筆蹟、二、傳小野道風の筆蹟、三、傳藤原佐理の筆蹟、四、藤原道長・傳頼通・傳行成・行經・伊房及び定信・伊行の筆蹟、五、傳源順・道濟・小大君・紫式部・大貳三位の筆蹟、六、傳藤原公任及び定頼の筆蹟、七、傳藤原忠家及び俊忠の筆蹟、八、傳源俊頼の筆蹟、九、藤原基俊・傳顯輔・清輔及び傳源頼政の筆蹟、十、藤原俊成の筆蹟、十一、傳藤原忠通・兼實・良經の筆蹟、十二、傳西行の筆蹟、十三、傳藤原伊經・源實朝・宗尊親王の筆蹟）。第三章平安朝時代の草假名の系統的考察（第一類乃至第八類、獨草體の一系、本願寺本三十六人集、元暦校本萬葉集、類聚古集の書體の分類、分岐以前の草假名）。第四章結論（古典時代の作物、古典主義的傾向、新古典主義的傾向、浪漫主義的傾向、各傾向の交雜、武强主義的傾向、各傾向と國文學との關係、結語）。最後に第二章に記した草假名研究資料の證本古筆四十五種をコロタイプ版にして添附してある。【價値】本書は先づ確實なる資料を蒐集してこれを研究し（これ本書の最も重要なる一半である）、次にこれを比較對照して書風の系統變遷を考究し、次に草假名と文學の關係を論じてゐる。その結果は、草假名の藝術史的研究に極めて大なる貢獻をなしてゐるのは云ふまでもないが、更に國語學・國文學・國史學等の資料研究のために少からぬ寄與をなすものである。

【附記】同じ著者の「歌と草假名」一册（大正十四年四月刊）は、右と同種のものであるが、一層簡明である。この書には「貫之の歌」「平安朝時代の女流作家」等をも載せて歌風の變遷と書風の變遷とを對照させて論じてゐる。【龜出】

平安朝文法史

語學書　一册　【著者】山田孝雄　【刊行】大正二年六月　【內容】本書は「奈良朝文法史」（別項）と併せて一書をなすもので、「奈良朝文法史」の序說は本書にも關するものである。又本書の所說で、「奈良朝文法史」の說を受けて別に說明を加へない所も少くない。總說には、平安朝の文法は、所謂中古文法であつて、今日の文章語の規範となつてゐるものであるが、仔細に觀ると相異る所が少くない。平安朝には音便が生じ、文語と話語との間に差違があり、從つて和歌と物語とは文法上等しくない。さて當代の文法研究の資料としては（一）和歌、（二）物語草子、（三）記錄文書がある。和歌は文語の標準的なもの、物語草子には多少話語の面影があるやうである。記錄文書は漢文又は變體の漢文（記錄文）であるから、若干の宣命書にしたもの以外は資料とは爲し難い。この三種の中、物語類は內容が比較的多方面であるから、資料としては最も重要なものであると云ひ、次に當代の文法と萬葉集時代の文法との相違の主要なものに就いて記してゐる。卽ち（一）萬葉集時代に存して當代には滅亡したもの。（イ）形容詞の連體形を「こそ」の終止とする事。（ロ）形容詞と形式用言「あり」が熟した「かり」の將然形「からば」が「かば」となり、「かれば」が「かば」となる如き形。（ハ）敬意の複語尾「さ、し、す、せ、」。（ニ）繼續の複語尾「は、ひ、ふ、へ、」。（ホ）助格詞「い」「ろ」「ら」。（ト）終助詞「る」。（チ）用言の已然形を以て前提條件をあらはす法等。（二）變更したもの。（イ）形容詞と形式用言「あり」が熟したものの已然形が轉音して「けれ」となるものは形容詞の已然形に化す。（ロ）狀態性間接作用複語尾（所謂受身の助動詞）は全く良行となる。（ハ）係助詞「なも」は「なむ」となる。（ニ）終助詞「な」は「も」の終止の勢力を奪ふ等。（三）新に起つたもの。（イ）形式動詞の「ず」。（ロ）打消の複語尾の「で」。（ハ）副助詞の「など」。（ニ）接續助詞の「が」。（ホ）終助詞の「かし」等。（四）新に勢力を得たもの。（イ）設想の複語尾「めり」。（ロ）終助詞の「は」等。また動詞の下一段形も成立してゐる。なほ當代に於て最も注意すべきは音便である。音便は漢字音讀の影響を受けたものと思ふと記してゐる。次に各論では、「語論」（代名詞、用言、助詞、語構成略說）と「句論」（句の形式及び成分、句の組織、句の接合と排列）

した時代である。それが文學から宗敎的傾向への展開ともなるのである。次に各形態に就いて見ると、和歌は中期までは「古今集」の傾向を重んじ、藤原公任（別項）が歌壇の中心となつてゐたのであるが、漸くこの態度に反對する流れが現はれた。既に公任時代にも曾禰好忠（別項）の如き、詞の自由と客觀的描寫とを稱へて新風を主張したけれども、まだ行はれるに至らなかつたが、「後拾遺集」（別項）時代に於ては次第に新傾向が盛んになり、源經信（別項）・藤原基俊の「新撰朗詠集」（各別項）があるが、漢詩文の佳句を二句づつとつたもので、飜案的な文學といふべく、今樣は新しい諺ひ物としての時代）津田左右吉〇宮廷女流日記文學　池田龜鑑〇平安時代（日本文學講座）〇日本文學史　平安時代（岩波講座日本文學）〇日本文學書目（同上）

平安城都遷

【別名】平安城　【成立】未詳。宇治加賀掾正本。九年六月板行の「大竹集」に「みさほの前遣行」と「王城地祭」とが出てゐる。【諸本】八行四十二丁本、山本九兵衞板。繪入細字十七行十段　時代物　【作者】未詳。淨瑠璃　五

に分つて、多數の例證を擧げて詳細に述べてゐる。なほ附錄として「平安朝語と現代語(文語及び口語)との文法比較一覽」及び「奈良朝文法史補遺」を添へてゐる。【價値】平安朝の文法は、江戸時代以來多くの人に依つて硏究せられ、一般に文法と云へば、直ちに平安朝文法を意味するほど、その研究は盛んである。併し歴史的立場に立つて、專ら平安朝の文法を奈良朝のそれと比較しつつ研究したものは本書の外にない。而して確實な資料に依つて飽くまで歸納的に研究してゐる事は本書の一大特色であつて、本書に依つて從來の所謂中古文典を訂正すべき點が少くない。本書は「奈良朝文法史」と共に、國語史の研究に確實な資料を提供するものである。〔龜田〕

平安二十歌仙（へいあんにじつかせん）

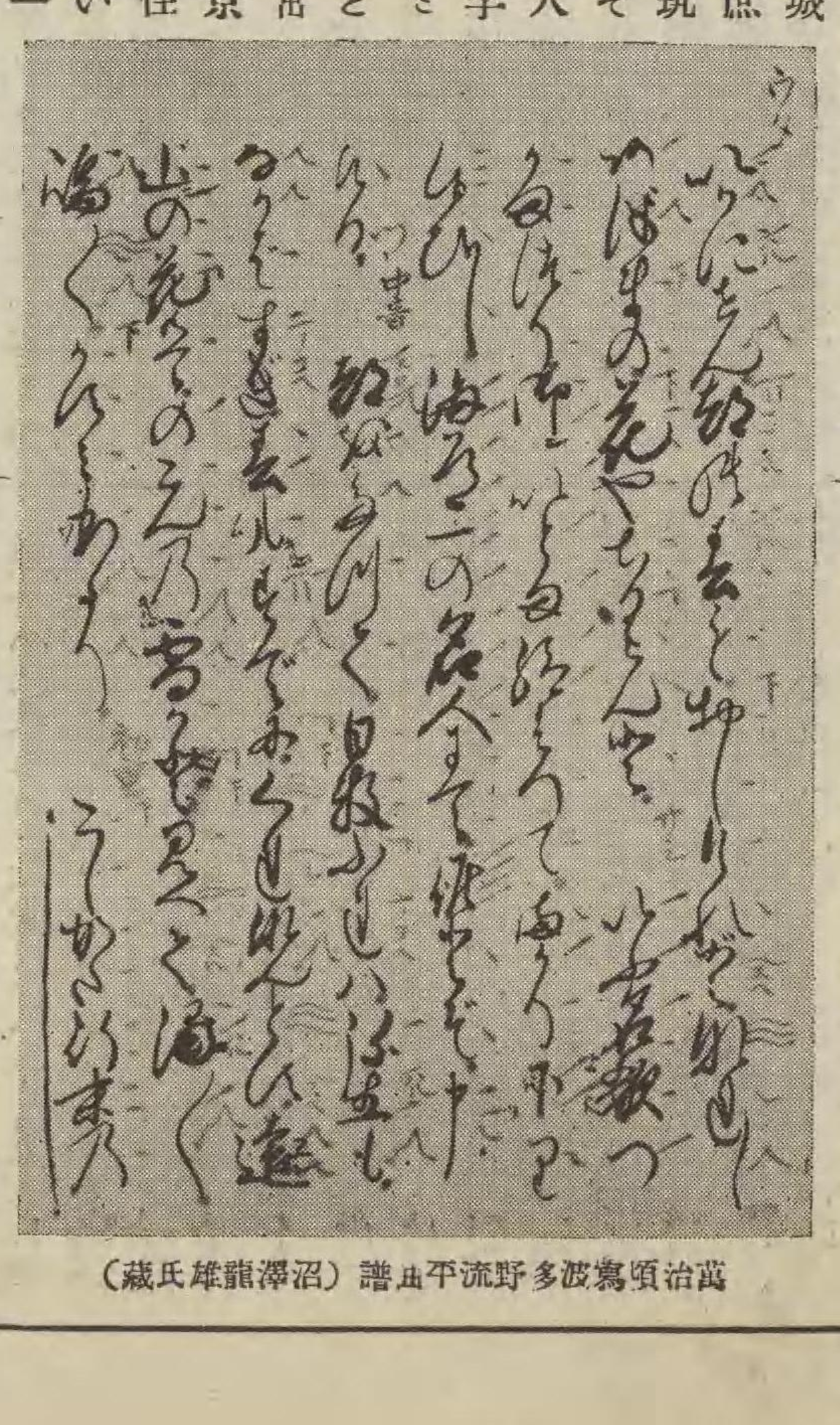
俳諧集　一冊【編者】炭太祇【刊行】明和六己丑年五月、京平野屋善兵衞刊。【諸本】中興俳諧名家集(俳書大系)所收。【由來・內容】蕪村の序によれば、一日太祇と嘯山とが長松下隨古を訪ひ、その藏する芭蕉・去來一紙兩筆のふみを見て、古人の道に深切な事に感じ、やがて三吟の發端となつて二十回の俳席を重ねるに至つたのだといふ。その第一回は明和三年十一月十八日嘯山の葎亭で開かれ、第二十回は同四年九月二十五日長松下の會で終つてゐる。その歌仙二十卷をその儘に捨てて置くのも惜しいといふので、明和六年に至り、蕪村を初め諸家の四季發句を卷末に添へて上梓したのである。【價値】太祇・嘯山・隨古の三人は何れも蕪村と親交があり、當時の平安俳壇に高踏的な蕉風復古の志を抱いてゐた者である。隨つてこの三吟の試みは、彼等の懷抱を積極的に世に示さうとしたものといふべく、當時の停滯した俳壇に對する一つの刺戟劑であり、又淸涼劑であつた。太祇はその特色とする所、蕪村と趣を異にし、嘯山・隨古も亦必ずしも蕪村と步みを一にするものではなかつたが、その當時の平安俳壇の空氣に慊らずとした點は皆同一で、その精神の一つの表はれとして、本書の價値は認めらるべきであらう。〔穎原〕

平義器談（へいぎきだん）

故實　二卷【著者】伊勢貞丈【名稱】平義は「平家物語」「義經記」といふのを略してその頭字を取り、器談は武器談といふのを略したものである。【成立】「平家物語」「義經記」の二書中から武器の名を摘出したものを多賀常政から得て、明和八年正月下旬、春の日のつれづれに、その一つ一つに解說を試みたのがこの書である趣が自序に見える。後、貞丈の嫡孫貞春が校訂して世に出したものである。【刊行】享和二年三月【諸本】四大奇書集古隨筆・國文註釋全書第一卷所收。【內容】上卷を「平家物語」、下卷を「義經記」に充て、いづれも鎧・腹卷・甲・太刀・弓・矢・直垂・烏帽子・鞍・箙等の諸部に分ち、各部それぞれ項目を揭げて考證的解說を施したものである。【價値】この著者の論著は數多きも、よく纏まつた點に於て本書の如きはその類少く、且つこの種著作中、最も出色あるものの一つである。〔石村〕

平曲（へいきよく）

歌謠【名義】「平家物語」を琵琶に合せて語る音曲の意。【沿革】〔開祖〕「徒然草」によつて生佛といふ東國生れの盲人であるとするのが通說である。後鳥羽院の頃慈鎭和尙の庇護を受けた事の外傳記は一切不明である。或は綾小路資時法名正佛であらうとの臆說もあるが未詳(平家物語考)。〔草創時代〕記錄がないので判然としない。最初は扇拍子で、琵琶に合せたのは後であるとの說もあり、或は最初から琵琶に合せたと說く者もある。平安朝の琵琶法師が文字鎖(くさり)や合戰物語を語つた記錄(舊記要文集・久能寺緣起)があるから、「平家物語」の詞章が琵琶法師の新曲として採用されたと考へるのは、決して不當ではなく寧ろ自然である。平安朝では地位は卑賤であり、藝の內容は貧弱であつた琵琶法師が「平家」の詞章を採用するに及んで急に立派な音樂となつたと考へられる。〔八坂・一方二流の分立〕生佛の弟子に城正があり、その弟子に城一があつた。城一は九州菊池某の庶流で筑紫にゐた故筑紫方と呼ばれた。その弟子に名人が二人出た。一人は城の字を承けて城玄(元とも)と名乘り、城方といひ(名門久我家の出と傳へてゐる)、或は京都八坂の塔の邊に住んだ故八坂流ともいつた。他の一人は一の字を承けて如一と名乘り、一方といひ、或は坂東に住んだ故坂東方ともいつた。〔八坂・一方の相違、八坂流の滅亡〕八坂流は室町時代永享頃には既に亡びたらしく、たとひ亡びない迄も大に衰へ、室町末期には全く亡びたので、その語り方が一方と如何に異なるか今日では知られないが、ただその詞章についての相違を見ると、八坂本の方が修飾の度が多く、一方本即ち流布本の方が素朴味が多いし、八坂本には「灌頂卷」を立ててないが、一方本には「灌頂卷」を立ててある。恐らく二流分立以後、八坂流に於ては組織を變更して「灌頂卷」を分立させたのであらう。〔天才覺一〕一方流中興の祖である覺一は、足利尊氏の一族で播磨明石を領した故、明石檢校といつた。如一の弟子であるが、初名を城了といつた所から考へると、八坂流から一方流にかはつたものと思はれる。平曲の天才であつたのみならず和歌にも堪能で、「夜の雨の窓をうつにもくだくれば心はもろきものにぞありける」の詠によつて、後小松天皇より「夜の雨の城了」の號と紫衣を賜はつた(野史)。平安時代の琵琶法師は卑賤のもので高貴の前に召されるやうの事は無論なかつたし、平曲草創時代もなほその餘流として低い地位であつたのが、天才覺一の出現によつて社會的地位が著しく高められ、至尊仙洞親王等の御聽に達した事が何十回となくあつた(花園院宸記・看聞御記)。彼の傳記は詳しくはわからないが、後醍醐天皇の朝(或は後村上朝)に檢校に補せられ、應安四年に死んだ。



萬治頃寫波多野流平曲譜（沼澤龍雄氏藏）

かく上流に歡迎せられると共に無論民間でも盛んに行はれ、特に神社佛閣の境內で語るのを人々は芝の上に坐して聞いた。京都の矢田地藏堂・六條御堂・五條高倉藥師堂・北野神社等が盛んであつた(中原師守日記)。〔波多野・前田二流の分立〕室町末期から江戸初期にかけて波多野孝一(慶安四年歿)と前田九一(貞享二年歿)といふすぐれた二人の檢校が出て、こゝに波多野・前田の二流が生じた。波多野流は京都を中心として榮え、河瀨檢校の歿後一時衰

たが目的は終に達せられなかつた。明治二十九年十二月十七日高輪御殿に於て、常宮・周宮兩內親王殿下が幕末斯道の名手多くは凋落して殘星寥々たる中から、深川照阿を召されて語らしめ給へる時、伊豆島宗昌が琵琶を彈じた一日の淸興は六百年間演奏の最後の花であつた。京都に於ても木下帝大總長が主唱者となり、最後の檢校藤村性禪を保護して復興を謀り、檢校も獻身的に專心普及に努めたが、實現を見ずして明治四十四年に歿した。京都の

歎してゐる。かくの如く賞讃せられるのはどういふ點にあるかといふに、二つの方面の特色を數ふべきである。第一、詞章のすぐれてゐる事。平曲以前の音樂は、神樂・催馬樂・朗詠・今樣・風俗等が主なものであるが、これ等は皆數行乃至十數行の短章で、而も文學として高い價値を有するものは稀である。然るに「平家物語」は大篇長章で且つ文學的價値は多くの國文學中でも特に傑出したものの一つである。第二、曲調の價値。神樂・催馬樂・朗詠・

行音樂に對し、新興音樂としてひろく歡迎せられたのである。【曲調】平曲中には、その先行音樂たる神樂・催馬樂・朗詠・今樣等の曲節も採用されてゐるが、最も多く採り入れられたのは聲明(別項)特に天台聲明(別項)である。天台聲明は二つの要素から成る。一は引聲(聲を長く引く。大原聲明六卷帖・法華懺法など)、二は短聲(引かずに短く切る。舍利講式・羅漢講式・涅槃講式・六道講式など)である。講式の偈(げ)は引聲であるが、その本文